寄 贈 図 書
1987 8 10 日 受領
筑波大学図書館学系

茨城県教育財団文化財調査報告第38集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1（総和地区）

南坪A・B・C遺跡　向坪A・B遺跡
高野遺跡　北新田A・B・C遺跡
西坪A・B遺跡　溜原B遺跡

昭和61年8月

財団法人　茨城県教育財団

210.251
So 93
NK
寄贈
歴史・人類学系
平成　年　月　日

茨城県教育財団文化財調査報告第38集

一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1（総和地区）

南坪（みなみつぼ）A・B・C遺跡　向坪（むかいつぼ）A・B遺跡
高野（こうや）遺跡　北新田（きたしんでん）A・B・C遺跡
西坪（にしつぼ）A・B遺跡　溜原（ためはら）B遺跡

昭和61年8月

財団法人　茨城県教育財団

96605135

序

建設省は，国道４号線の交通量の増加による交通渋滞の緩和をはかるため，埼玉県越谷市から茨城県の五霞村，境町，総和町，三和町，結城市を通過して，栃木県宇都宮市にいたる「新４号国道」の建設を進めております。昭和60年４月には，越谷市から総和町柳橋間と小山市から宇都宮市間が開通しました。

財団法人茨城県教育財団は，昭和57年度以降建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び，新４号国道建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘を実施してまいりました。

本書は，昭和57年度から昭和60年度にかけて発掘調査を実施した総和町に所在する12の遺跡について，調査成果を収録したものであります。本書が記録保存の役割としてだけでなく，教育及び研究の資料として，広く活用されますことを希望いたします。

最後に，発掘調査及び整理に当たり，建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，茨城県教育委員会，総和町教育委員会をはじめ，関係諸機関，関係各位の御指導・御協力に対しまして，心より謝意を表します。

昭和61年８月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　川　又　友三郎

例　　言

1　本書は，建設省の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和57年度から昭和60年度にかけて発掘調査を実施した，茨城県猿島郡総和町に所在する南坪A遺跡ほか11遺跡の調査報告書である。

2　南坪A遺跡ほか11遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		大金新一	～昭和58年11月
		竹内藤男	昭和58年12月～昭和61年3月
		川又友三郎	昭和61年4月～
副理事長		古橋靖	～昭和58年7月
		川又友三郎	昭和58年7月～昭和61年3月
		礒田勇	昭和61年4月～
常務理事		綿引一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
		萩原藤之助	昭和60年4月～昭和61年3月
		滑川貞雄	昭和61年4月～
事務局長		小林義久	～昭和58年3月
		小林洋	昭和58年4月～昭和60年3月
		堀井昭生	昭和60年4月～
調査課長		寺内寛	～昭和59年3月
		青木義夫	昭和59年4月～
企画管理班	班長	坏秀雄	～昭和57年5月
	〃	今村信夫	昭和57年6月～昭和59年3月
	〃	市毛洋一	昭和59年4月～昭和60年3月
	〃	北畠健	昭和60年4月～
	主任調査員	加藤雅美	昭和57年4月～昭和61年3月
	〃	山本静男	昭和61年4月～
	主事	鈴木三郎	～昭和60年3月
	〃	海老沢一夫	昭和57年4月～昭和60年3月
	〃	綿引良人	～昭和58年3月
	〃	大曽根徹	昭和58年4月～昭和61年3月
	〃	田所多佳男	昭和60年4月～
	〃	山崎初雄	昭和60年4月～

	〃	大部　章	昭和61年4月～
調査班	班長	青木義夫	昭和57年度
	〃	安蔵幸重	昭和58年度
	〃	堀川計三	昭和59・60年度
	主任調査員	久野俊度	昭和57年度調査
	〃	柴　正	昭和58年度調査
	〃	中沢時宗	昭和57・58・59年度調査，昭和59・60年度整理・執筆
	〃	小河邦男	昭和57年度調査
	〃	和田雄次	昭和60年度調査，昭和61年度整理・執筆
	〃	高村　勇	昭和57年度調査
	調査員	桜井一美	昭和59・60年度調査
整理班長		渡辺千秋	昭和59年度
		石井　毅	昭和60年度
		加藤雅美	昭和61年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，次のように執筆分担した。

第1・2・3・4章・終章
南坪A遺跡・南坪B遺跡・南坪C遺跡・高野遺跡・西坪A遺跡
西坪B遺跡・向坪A遺跡・向坪B遺跡・北新田A遺跡 …中沢時宗

北新田B遺跡・北新田C遺跡 …… 桜井一美

溜原B遺跡 …… 和田雄次

4　発掘調査及び出土遺物の整理等に際して，国学院大学日本文化研究所の椙山林繼氏，東京都八王子市教育委員会の服部敬史氏から御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第4章遺構・遺物の記載方法を参照されたい。

6　発掘調査から報告書刊行にいたるまで御協力をいただいた，建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所，茨城県教育委員会，総和町教育委員会をはじめ，関係諸機関，関係各位に対し心から感謝の意を表したい。

目　　次

序
例　言
第１章　調査経緯……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査経過……2
第２章　位置と環境……6
　第１節　地理的環境……6
　第２節　歴史的環境……7
第３章　調査方法……11
　第１節　地区設定……11
　第２節　遺構確認……12
　第３節　遺構調査……12
第４章　遺構・遺物の記載方法……13
　第１節　遺構の記載方法……13
　第２節　遺物の記載方法……16
第５章　遺跡の調査結果……17
　南坪Ａ遺跡……17
　　1　遺跡の概観……17
　　2　調査経過……17
　　3　遺物……19
　　4　まとめ……22
　南坪Ｂ遺跡……25
　　1　遺跡の概観……25
　　2　調査経過……25
　　3　遺物……25
　　4　まとめ……28
　南坪Ｃ遺跡……29
　　1　遺跡の概観……29
　　2　調査経過……29

3　遺物…… 29
4　まとめ…… 33
高野遺跡…… 35
1　遺跡の概観…… 35
2　調査経過…… 35
3　遺構と遺物…… 38
4　まとめ…… 40
西坪A遺跡…… 43
1　遺跡の概観…… 43
2　調査経過…… 43
3　遺構と遺物…… 45
4　まとめ…… 67
西坪B遺跡…… 69
1　遺跡の概観…… 69
2　調査経過…… 69
3　遺物…… 69
4　まとめ…… 72
向坪A遺跡…… 73
1　遺跡の概観…… 73
2　調査経過…… 73
3　遺構と遺物…… 75
4　まとめ…… 80
向坪B遺跡…… 81
1　遺跡の概観…… 81
2　調査経過…… 81
3　遺構と遺物…… 84
4　まとめ…… 109
北新田A遺跡…… 117
1　遺跡の概観…… 117
2　調査経過…… 117
3　遺構と遺物…… 122
4　まとめ…… 312

北新田Ｂ遺跡…… 345
1　遺跡の概観…… 345
2　調査経過…… 345
3　遺物…… 345
4　まとめ…… 347
北新田Ｃ遺跡…… 349
1　遺跡の概観…… 349
2　調査経過…… 349
3　遺構と遺物…… 351
4　まとめ…… 354
溜原Ｂ遺跡…… 357
1　遺跡の概観…… 357
2　調査経過…… 357
3　遺構と遺物…… 357
4　まとめ…… 363
終章　むすび…… 367

挿　図　目　次

第１図　茨城県内新４号国道関係遺跡分布図……３
第２図　新４号国道周辺の遺跡分布図……８
第３図　グリッド概念図……11
第４図　遺構実測図の作成方法……14
南坪Ａ遺跡
第５図　南坪Ａ遺跡地形図……18
第６図　南坪Ａ遺跡全体図……19
第７図　グリッド出土土器拓影図……21
第８図　グリッド出土遺物実測図……22
南坪Ｂ遺跡
第９図　南坪Ｂ遺跡地形図……26
第10図　南坪Ｂ遺跡全体図……27
第11図　グリッド出土土器拓影図・石器実測図……27
南坪Ｃ遺跡
第12図　南坪Ｃ遺跡地形図……30
第13図　南坪Ｃ遺跡全体図……31
第14図　グリッド出土土器拓影図・実測図……32
高野遺跡
第15図　高野遺跡地形図……36
第16図　高野遺跡全体図……37
第17図　第１号溝実測図……39
第18図　グリッド出土土器拓影図……40
第19図　グリッド出土遺物実測図……41
西坪Ａ遺跡
第20図　西坪Ａ遺跡地形図……44
第21図　西坪Ａ遺跡全体図……45
第22図　遺構配置図……46
第23図　土坑実測図(1)……51
第24図　土坑実測図(2)……52
第25図　土坑実測図(3)……53
第26図　土坑実測図(4)……54
第27図　土坑実測図(5)……55
第28図　土坑実測図(6)……56
第29図　土坑実測図(7)……57
第30図　土坑実測図(8)……58
第31図　土坑実測図(9)……59
第32図　土坑実測図(10)……60
第33図　土坑実測図(11)……61
第34図　第１・２号溝実測図……63
第35図　第３号溝実測図……64
第36図　第４号溝実測図……65
第37図　第５・６号溝実測図……66
第38図　グリッド出土土器拓影図……67
西坪Ｂ遺跡
第39図　西坪Ｂ遺跡地形図……70
第40図　西坪Ｂ遺跡全体図……71
第41図　グリッド出土土器拓影図……72
向坪Ａ遺跡
第42図　向坪Ａ遺跡地形図……74
第43図　向坪Ａ遺跡全体図……75
第44図　第１号溝実測図……76
第45図　第２・３号溝実測図……77
第46図　第１・２号井戸実測図……79
第47図　グリッド出土土器拓影図……79
向坪Ｂ遺跡
第48図　向坪Ｂ遺跡地形図……82
第49図　向坪Ｂ遺跡全体図……83

第50図　第１号住居跡実測図……85
第51図　第１号住居跡遺物出土状態図……86
第52図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)……87
第53図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)……88
第54図　第１号住居跡出土遺物実測図(3)……90
第55図　第１号住居跡出土遺物実測図(4)……93
第56図　第１号住居跡出土遺物実測図(5)……94
第57図　第１号住居跡出土遺物実測図(6)……95
第58図　第２号住居跡実測図……97
第59図　第２号住居跡遺物出土状態図……98
第60図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)……99
第61図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)… 100
第62図　土坑実測図(1)…… 101
第63図　土坑実測図(2)…… 102
第64図　土坑出土遺物実測図…… 103
第65図　第１号溝実測図…… 105
第66図　第２号溝実測図…… 106
第67図　グリッド出土遺物実測図…… 107
第68図　古銭拓影図…… 108
第69図　臼玉出土状況模式図…… 112
北新田Ａ遺跡
第70図　北新田Ａ遺跡地形図…… 118
第71図　北新田Ａ遺跡全体図…… 119
第72図　第１号住居跡実測図…… 124
第73図　第１号住居跡出土遺物実測図…… 125
第74図　第２号住居跡・カマド実測図…… 126
第75図　第２号住居跡遺物出土状態図…… 127
第76図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)… 129
第77図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)… 130
第78図　第３号住居跡実測図…… 131
第79図　第３号住居跡カマド実測図…… 132
第80図　第３号住居跡出土遺物実測図…… 132
第81図　第４号住居跡実測図…… 133
第82図　第４号住居跡出土遺物実測図… 134
第83図　第５・11・12号住居跡実測図… 135
第84図　第５号住居跡カマド実測図…… 136
第85図　第５号住居跡出土遺物実測図(1)・137
第86図　第５号住居跡出土遺物実測図(2)・138
第87図　第６号住居跡実測図…… 140
第88図　第６号住居跡遺物出土状態図… 141
第89図　第６号住居跡カマド実測図…… 142
第90図　第６号住居跡出土遺物実測図(1)・144
第91図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)・145
第92図　第６号住居跡出土遺物実測図(3)・146
第93図　第７号住居跡実測図…… 147
第94図　第７号住居跡出土遺物実測図… 148
第95図　第８号住居跡・カマド実測図… 149
第96図　第８号住居跡出土遺物実測図… 150
第97図　第９号住居跡実測図…… 151
第98図　第９号住居跡出土遺物実測図… 152
第99図　第10号住居跡実測図…… 153
第100図　第10号住居跡出土遺物実測図… 154
第101図　第11号住居跡出土遺物実測図… 154
第102図　第13号住居跡実測図…… 156
第103図　第13号住居跡出土遺物実測図… 157
第104図　第14号住居跡実測図…… 159
第105図　第14号住居跡カマド実測図…… 160
第106図　第14号住居跡出土遺物実測図… 160
第107図　第15・16・17号住居跡実測図… 161
第108図　第15・17号住居跡カマド実測図・162
第109図　第15・16号住居跡出土遺物実測図…… 163
第110図　第17号住居跡出土遺物実測図(1)・165
第111図　第17号住居跡出土遺物実測図(2)・166

第112図　第18号住居跡実測図…… 168
第113図　第18号住居跡出土遺物実測図…… 169
第114図　第19号住居跡実測図…… 170
第115図　第20号住居跡実測図…… 171
第116図　第20号住居跡カマド実測図…… 172
第117図　第20号住居跡出土遺物実測図…… 173
第118図　第21号住居跡・カマド実測図…… 175
第119図　第21号住居跡出土遺物実測図(1)… 177
第120図　第21号住居跡出土遺物実測図(2)… 178
第121図　第22号住居跡実測図…… 179
第122図　第23号住居跡実測図…… 180
第123図　第23号住居跡出土遺物実測図…… 181
第124図　第24号住居跡実測図…… 182
第125図　第24号住居跡出土遺物実測図…… 184
第126図　第25号住居跡・カマド実測図……185
第127図　第25号住居跡出土遺物実測図(1)… 187
第128図　第25号住居跡出土遺物実測図(2)… 188
第129図　第26・27号住居跡実測図…… 189
第130図　第26・27号住居跡カマド実測図… 190
第131図　第26・27号住居跡出土遺物実測図…… 191
第132図　第28号住居跡実測図…… 193
第133図　第28号住居跡カマド実測図…… 194
第134図　第28号住居跡出土遺物実測図…… 195
第135図　第29号住居跡・カマド実測図…… 196
第136図　第29号住居跡出土遺物実測図…… 198
第137図　第30・31号住居跡・カマド実測図…… 199
第138図　第30号住居跡出土遺物実測図(1)… 201
第139図　第30号住居跡出土遺物実測図(2)… 202
第140図　第31号住居跡出土遺物実測図…… 203
第141図　第32号住居跡実測図…… 204
第142図　第32・33号住居跡出土遺物実測図…… 205
第143図　第33号住居跡実測図…… 206
第144図　第34号住居跡実測図…… 207
第145図　第34号住居跡出土遺物実測図(1)・209
第146図　第34号住居跡出土遺物実測図(2)・210
第147図　第34号住居跡出土遺物実測図(3)・211
第148図　第35・36号住居跡・カマド実測図…… 213
第149図　第35・36号住居跡出土遺物実測図…… 214
第150図　第37・62号住居跡実測図…… 217
第151図　第37号住居跡カマド実測図…… 218
第152図　第37号住居跡出土遺物実測図(1)・219
第153図　第37号住居跡出土遺物実測図(2)・220
第154図　第38号住居跡実測図 …… 222
第155図　第38号住居跡出土遺物実測図(1)・224
第156図　第38号住居跡出土遺物実測図(2)・225
第157図　第39号住居跡実測図…… 227
第158図　第39号住居跡出土遺物実測図(1)・228
第159図　第39号住居跡出土遺物実測図(2)・229
第160図　第40号住居跡実測図…… 231
第161図　第40号住居跡出土遺物実測図… 232
第162図　第41号住居跡実測図…… 233
第163図　第41号住居跡カマド実測図…… 234
第164図　第41号住居跡出土遺物実測図… 235
第165図　第42号住居跡・カマド実測図… 236
第166図　第42号住居跡出土遺物実測図(1)・238
第167図　第42号住居跡出土遺物実測図(2)・239
第168図　第43号住居跡・カマド実測図… 240
第169図　第44号住居跡実測図…… 241
第170図　第44号住居跡出土遺物実測図… 242

第171図　第45号住居跡・カマド実測図…… 242
第172図　第46号住居跡・カマド実測図…… 244
第173図　第46号住居跡遺物出土状態図…… 245
第174図　第46号住居跡出土遺物実測図(1)… 247
第175図　第46号住居跡出土遺物実測図(2)… 248
第176図　第46号住居跡出土遺物実測図(3)… 249
第177図　第47号住居跡実測図…… 250
第178図　第47号住居跡出土遺物実測図…… 251
第179図　第48号住居跡実測図…… 252
第180図　第48号住居跡出土遺物実測図…… 253
第181図　第49号住居跡実測図…… 254
第182図　第49号住居跡遺物出土状態図…… 255
第183図　第49号住居跡カマド実測図…… 256
第184図　第49号住居跡出土遺物実測図(1)… 259
第185図　第49号住居跡出土遺物実測図(2)… 260
第186図　第50号住居跡実測図…… 261
第187図　第50号住居跡出土遺物実測図…… 263
第188図　第51号住居跡実測図…… 264
第189図　第51号住居跡出土遺物実測図…… 265
第190図　第52・55号住居跡・カマド実測図…… 266
第191図　第52号住居跡出土遺物実測図…… 267
第192図　第53号住居跡・カマド実測図…… 268
第193図　第53号住居跡出土遺物実測図…… 269
第194図　第54号住居跡・カマド実測図…… 271
第195図　第56号住居跡実測図…… 272
第196図　第57号住居跡実測図…… 274
第197図　第57号住居跡出土遺物実測図…… 275
第198図　第58号住居跡実測図…… 275
第199図　第59号住居跡・カマド実測図…… 276
第200図　第59号住居跡出土遺物実測図…… 278
第201図　第59・60号住居跡出土遺物実測図…… 279
第202図　第60号住居跡実測図…… 281
第203図　第61号住居跡・カマド実測図… 282
第204図　第61号住居跡出土遺物実測図(1)・284
第205図　第61号住居跡出土遺物実測図(2)・285
第206図　第62号住居跡出土遺物実測図… 286
第207図　第1・2・4～7号土坑実測図・287
第208図　第3号土坑実測図・遺物出土状態図…… 290
第209図　第3号土坑出土遺物実測図(1)… 291
第210図　第3号土坑出土遺物実測図(2)… 292
第211図　第3号土坑出土遺物実測図(3)… 293
第212図　第3号土坑出土遺物実測図(4)… 294
第213図　第1号溝実測図…… 296
第214図　第2号溝実測図…… 297
第215図　第3号溝実測図…… 298
第216図　第4号溝実測図…… 299
第217図　第5号溝実測図…… 301
第218図　第6号溝実測図…… 302
第219図　第7号溝実測図…… 303
第220図　第8号溝実測図…… 304
第221図　第9号溝実測図…… 305
第222図　第10号溝実測図…… 306
第223図　第1・2号井戸実測図…… 308
第224図　第1号井戸出土遺物実測図…… 309
第225図　第1号掘立柱建物跡実測図…… 310
第226図　土器編年図(1)…… 313
第227図　土器編年図(2)…… 315
第228図　土器編年図(3)…… 317
第229図　土器編年図(4)…… 319
第230図　土器編年図(5)…… 321

第231図　土器編年図(6)…… 323
第232図　土器編年図(7)…… 325
第233図　土器編年図(8)…… 327
第234図　時期別住居跡配置図(1)…… 330
第235図　時期別住居跡規模・主軸方向(1)… 331
第236図　時期別住居跡配置図(2)…… 333
第237図　時期別住居跡規模・主軸方向(2)… 334
第238図　時期別住居跡配置図(3)…… 336
第239図　時期別住居跡規模・主軸方向(3)… 337
第240図　時期別住居跡配置図(4)…… 339
第241図　時期別住居跡規模・主軸方向(4)… 340
北新田B遺跡
第242図　北新田B遺跡地形図…… 346
第243図　北新田B遺跡全体図…… 347
第244図　グリッド出土土器拓影図…… 348
北新田C遺跡
第245図　北新田C遺跡地形図…… 350
第246図　北新田C遺跡全体図…… 351
第247図　第1号方形周溝状遺構実測図… 352
第248図　第1号方形周溝状遺構出土遺物実測図…… 353
第249図　グリッド出土土器拓影図…… 353
溜原B遺跡
第250図　溜原B遺跡地形図…… 358
第251図　溜原B遺跡グリッド図…… 359
第252図　溜原B遺跡全体図…… 361
第253図　第1号溝実測図…… 362
第254図　グリッド出土土器拓影図(1)…… 364
第255図　グリッド出土土器拓影図(2)，土製品・石器実測図…… 365

表　目　次

表1　遺跡一覧表 …… 9
西坪A遺跡
表2　土坑一覧表 …… 45
向坪B遺跡
表3　勾玉計測表 …… 92
表4　臼玉計測表 …… 92
表5　土玉計測表 …… 96
表6　土坑一覧表 …… 100
表7　住居跡一覧表 …… 109
北新田A遺跡
表8　住居跡一覧表 …… 341

写真図版目次

南坪A遺跡

ＰＬ１　調査前全景，調査後全景

ＰＬ２　グリッド出土土器(1)，
グリッド出土土器(2)

ＰＬ３　グリッド出土石器

南坪B遺跡

ＰＬ４　調査前全景，調査後全景

ＰＬ５　グリッド出土土器，砥石

南坪C遺跡

ＰＬ６　調査前全景，調査後全景

ＰＬ７　グリッド出土土器，内耳土器

高野遺跡

ＰＬ８　調査前全景，
グリッド発掘による確認調査

ＰＬ９　第１号溝（昭和57年度調査），
第１号溝（昭和59年度調査）

ＰＬ10　グリッド出土土器，内耳土器

西坪A遺跡

ＰＬ11　調査前全景，
グリッド発掘による確認調査

ＰＬ12　第２号土坑，第３号土坑，第６号土坑，第13号土坑，第19～22号土坑，第16・17・41号土坑

ＰＬ13　第１号溝，第１号溝，第２号溝，第３号溝，第４号溝，第５・６号溝

ＰＬ14　第24～39号土坑，調査後全景

ＰＬ15　グリッド出土土器，
グリッド出土陶器

西坪B遺跡

ＰＬ16　調査前全景，調査後全景

ＰＬ17　グリッド出土遺物

向坪A遺跡

ＰＬ18　調査前全景，調査後全景

ＰＬ19　第１号溝，第２号溝，第３号溝，第２号溝・第１号井戸，第１号井戸，第２号井戸

ＰＬ20　グリッド出土遺物

向坪B遺跡

ＰＬ21　調査前全景，
グリッド発掘による確認調査

ＰＬ22　第１号住居跡遺物出土状況，
第１号住居跡

ＰＬ23　第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡遺物出土状況

ＰＬ24　第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡遺物出土状況，第１号住居跡子持勾玉出土状況

ＰＬ25　第１号住居跡勾玉・臼玉出土状況，第１号住居跡勾玉・臼玉出土状況，第１号住居跡臼玉出土状況

ＰＬ26　第２号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡

ＰＬ27　第２号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡遺物出土状況，第２号住居跡遺物出土状況

ＰＬ28　第１・２号土坑，第３・５・６

号土坑，第11・19号土坑
ＰＬ29　第14・15・17・18・21・22号土坑，第１号溝，第２号溝
ＰＬ30　住居跡出土土器(1)
ＰＬ31　住居跡出土土器(2)
ＰＬ32　住居跡出土土器(3)
ＰＬ33　住居跡出土土器(4)
ＰＬ34　子持勾玉
ＰＬ35　石製品・土製品
ＰＬ36　臼玉
ＰＬ37　ひしの実，第１・２号住居跡・土坑・グリッド出土遺物
ＰＬ38　グリッド出土土器
北新田Ａ遺跡
ＰＬ39　調査前全景，グリッド発掘による確認調査
ＰＬ40　遺構確認状況，第１号住居跡
ＰＬ41　第２号住居跡，第３号住居跡
ＰＬ42　第４号住居跡，第５・11・12号住居跡
ＰＬ43　第６号住居跡遺物出土状況，第６号住居跡
ＰＬ44　第７号住居跡，第８号住居跡
ＰＬ45　第９号住居跡，第10号住居跡
ＰＬ46　第13号住居跡，第14号住居跡
ＰＬ47　第15・16・17号住居跡，第18号住居跡
ＰＬ48　第19号住居跡，第20号住居跡
ＰＬ49　第21号住居跡，第22号住居跡
ＰＬ50　第23号住居跡，第24号住居跡
ＰＬ51　第25号住居跡，第26・27号住居跡
ＰＬ52　第28号住居跡，第29号住居跡
ＰＬ53　第30・31号住居跡，第32号住居跡
ＰＬ54　第33号住居跡，第34号住居跡
ＰＬ55　第35・36号住居跡，第37・62号住居跡
ＰＬ56　第38号住居跡，第39号住居跡
ＰＬ57　第40号住居跡，第41号住居跡
ＰＬ58　第42号住居跡，第43号住居跡
ＰＬ59　第44号住居跡，第45号住居跡
ＰＬ60　第46号住居跡，第47号住居跡
ＰＬ61　第48号住居跡，第49号住居跡
ＰＬ62　第50号住居跡，第49・51号住居跡
ＰＬ63　第52・55号住居跡第53号住居跡
ＰＬ64　第54号住居跡，第56号住居跡
ＰＬ65　第57号住居跡，第58号住居跡
ＰＬ66　第59号住居跡，第60号住居跡
ＰＬ67　第61号住居跡，第１号掘立柱建物跡
ＰＬ68　第１号土坑，第２号土坑，第４号土坑
ＰＬ69　第３号土坑遺物出土状況，第３号土坑
ＰＬ70　第５号土坑，第６号土坑，第７号土坑
ＰＬ71　第１号溝，第２号溝，第３号溝，第４号溝
ＰＬ72　第５号溝，第６号溝，第７号溝，第８号溝
ＰＬ73　第９号溝，第10号溝，第１号井戸，

第２号井戸
ＰＬ74　住居跡出土土器(1)
ＰＬ75　住居跡出土土器(2)
ＰＬ76　住居跡出土土器(3)
ＰＬ77　住居跡出土土器(4)
ＰＬ78　住居跡出土土器(5)
ＰＬ79　住居跡出土土器(6)
ＰＬ80　住居跡出土土器(7)
ＰＬ81　住居跡出土土器(8)
ＰＬ82　住居跡出土土器(9)
ＰＬ83　住居跡出土土器(10)
ＰＬ84　住居跡出土土器(11)
ＰＬ85　住居跡出土土器(12)
ＰＬ86　住居跡出土土器(13)
ＰＬ87　住居跡出土土器(14)
ＰＬ88　住居跡出土土器(15)
ＰＬ89　住居跡出土土器(16)
ＰＬ90　住居跡出土土器(17)
ＰＬ91　住居跡出土土器(18)
ＰＬ92　住居跡出土土器(19)
ＰＬ93　住居跡出土土器(20)
ＰＬ94　住居跡出土土器(21)
ＰＬ95　住居跡出土土器(22)
ＰＬ96　住居跡出土土器(23)
ＰＬ97　住居跡出土土器(24)
ＰＬ98　住居跡出土土器(25)
ＰＬ99　住居跡出土土器(26)
ＰＬ100　住居跡出土土器(27)
土坑出土土器(1)
ＰＬ101　土坑出土土器(2)
ＰＬ102　土坑出土土器(3)
ＰＬ103　土坑出土土器(4)
ＰＬ104　土坑出土土器(5)，井戸出土土器，
墨書土器
ＰＬ105　石製品，土製品，瓦
ＰＬ106　鉄製品(1)
ＰＬ107　鉄製品(2)
ＰＬ108　鉄製品(3)
北新田Ｂ遺跡
ＰＬ109　調査前全景，調査後全景
ＰＬ110　作業風景，グリッド出土土器
北新田Ｃ遺跡
ＰＬ111　調査前全景
第１号方形周溝状遺構
ＰＬ112　第１号方形周溝状遺構遺物出土状況，
第１号方形周溝状遺構出土土器
ＰＬ113　グリッド出土土器
溜原Ｂ遺跡
ＰＬ114　調査前全景，¼グリッド発掘
ＰＬ115　第１号溝，グリッド出土遺物

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

一般国道4号は一名奥州街道とも呼ばれ，本土を縦貫する幹線道路である。全延長は791.5km のわが国最長の路線であり，東京都中央区日本橋を起点とし，埼玉・茨城・栃木・福島・宮城・岩手を縦断し青森市に至っている。

近年の産業・経済の発展，人口の集中等から，本国道の交通量の増加は著しいものがある。建設省宇都宮国道工事事務所管内には，古河・小山・宇都宮等の各市街地が広がり，現国道の拡幅は極めて困難である。

建設省は，将来にわたる交通量の緩和をはかるべく，その解決策として新4号国道を計画し，昭和40年に調査を始め，昭和44年に「新4号バイパス」の計画を提示した。新4号バイパスは埼玉県越谷市と栃木県宇都宮市を結ぶ約82kmで，そのうち茨城県部分は21.35kmあり，南から五霞村境町・総和町・三和町・結城市を通過する予定である。

これに伴い，同年，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に，当該路線上の埋蔵文化財の有無，その位置，その取り扱いについての照会がなされた。茨城県教育委員会では直ちに分布調査を実施し，総和町に12遺跡（内1遺跡は境町にもかかる），三和町に12遺跡，結城市に3遺跡，計27遺跡を確認した。（第1図）

昭和45年から国道工事が開始され，昭和56年までに五霞～境間，小山～宇都宮間が暫定2車線で開通している。

昭和56年6月15日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育委員会に，新4号国道改築事業の施工に係る総和地区と結城地区の埋蔵文化財の確認調査及び遺跡の取り扱いについて照会がなされた。茨城県教育委員会では再度分布調査を行い，同年10月22日，総和地区の南坪A遺跡ほか7遺跡（S1～S8）と結城地区の本田遺跡（S27）を埋蔵文化財包蔵地として，発掘調査による記録保存の措置を講ずるよう回答するとともに，調査機関として茨城県教育財団を紹介した。同年10月29日，宇都宮国道工事事務所から茨城県教育財団に発掘調査の依頼があり，その後，茨城県教育財団では宇都宮国道工事事務所と協議を重ね，昭和57年4月20日委託契約を結んだ。こうして当教育財団による，新4号国道関係遺跡の発掘調査は昭和57年4月から実施されることになった。

なお，新4号国道路線上の27遺跡の略号は，路線上を南から北へS1（南坪A遺跡），S2（南坪B遺跡），S3（南坪C遺跡）……S27（本田遺跡）とした。

第２節　調査経過

各遺跡の調査経過については第５章で記すことにして，この章では昭和57年から昭和60年にわたる，総和地区の調査全体の経過の概略を記述する。

総和地区の調査は，当初昭和57年10月から開始する予定であった。国道工事との関係で，昭和57年度は南坪Ａ遺跡ほか７遺跡（Ｓ１～Ｓ８）のうち，道路の中央線を境として，Ｓ１～Ｓ６は下り車線部分，Ｓ７とＳ８は上り車線部分を発掘調査し，昭和58年４月から９月までに，それぞれの反対側の車線部分を調査する計画であった。しかし，結城地区の本田遺跡の調査が，昭和57年４月から１年間の予定であったが，遺構，遺物が少なく，７月末日で終了したため，８月から総和地区の調査を開始した。

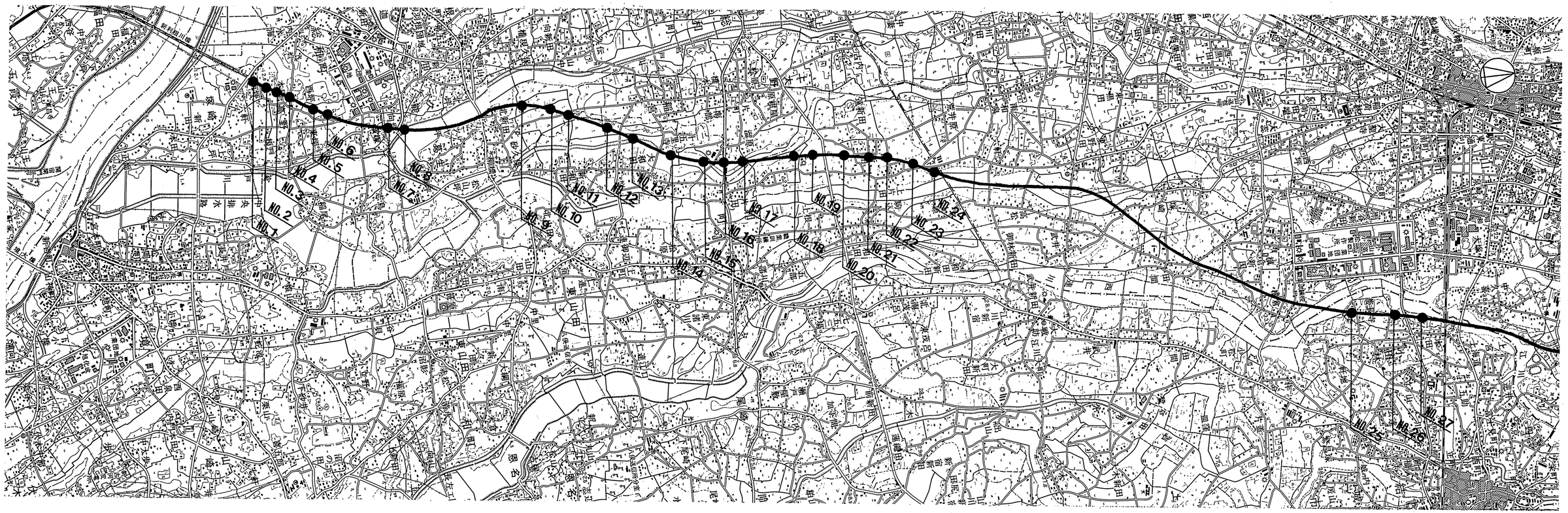
調査は片側車線部分であるため，各遺跡の面積は少なく，８遺跡が工事路線にそって点在しているので，調査を能率的に進める必要があった。そのため，遺跡間の距離が近い場合には，調査の段階によって，２～３遺跡を並行して発掘調査を進めた。しかし，各遺跡とも予想より遺構，遺物が少なく，計画より早く調査が終了する予定がたったので，契約変更をし，引き続き昭和58年度調査計画であった反対側の車線を調査し,３月に高野（こうや）遺跡の上り車線部分を除いて終了した。高野遺跡の上り車線部分は，用地問題が未解決だったため，調査は後日にまわすこととした。

昭和58年４月からは北新田Ａ遺跡ほか２遺跡（Ｓ９～Ｓ11）の調査を開始した。こののち，北新田Ｂ遺跡と北新田Ｃ遺跡は，遺構・遺物がほとんどなく，北新田Ｂ遺跡は５月末に北新田Ｃ遺跡は７月末に終了した。北新田Ａ遺跡では多数の竪穴住居跡が検出され，昭和59年３月まで調査を実施した。しかし，北新田Ａ遺跡のうち約500㎡は，用地問題が未解決のため調査は用地問題解決後に実施することにした。

昭和59年４月からは三和地区の二十五里寺（つうへいじ）Ａ遺跡・二十五里寺Ｂ遺跡・二十五里寺Ｃ遺跡・溜原（ためはら）Ａ遺跡の調査を開始したが，前述の高野遺跡の上り車線部分の用地問題が解決したため，三和地区の調査と並行して，５月から高野遺跡の調査を実施し，約１か月で終了した。

昭和60年４月から，総和地区の溜原Ｂ遺跡，三和地区の下片田遺跡と昭和58年度調査を実施した北新田Ａ遺跡のうち用地問題が未解決であった500㎡の調査を実施した。

総和地区の南坪Ａ遺跡ほか11遺跡について，昭和57年８月から調査を開始し，昭和60年７月に溜原Ｂ遺跡の調査が終了して，総和地区の「新４号バイパス」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査はすべて終了した。



No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名	No.	略号	遺跡名
1	S1	南坪A遺跡	6	S6	西坪B遺跡	11	S11	北新田C遺跡	16	S16	溜原A遺跡	21	S21	中新田C遺跡	26	S26	小田林遺跡
2	S2	南坪B遺跡	7	S7	向坪A遺跡	12	S12	二十五里寺A遺跡	17	S17	溜原B遺跡	22	S22	上片田A遺跡	27	S27	本田遺跡
3	S3	南坪C遺跡	8	S8	向坪B遺跡	13	S13	二十五里寺B遺跡	18	S18	下片田遺跡	23	S23	上片田B遺跡			
4	S4	高野遺跡	9	S9	北新田A遺跡	14	S14	二十五里寺C遺跡	19	S19	中新田A遺跡	24	S24	上片田C遺跡			
5	S5	西坪A遺跡	10	S10	北新田B遺跡	15	S15	二十五里寺D遺跡	20	S20	中新田B遺跡	25	S25	善長寺遺跡			

0 1 2 Km

第1図　茨城県内新4号国道関係遺跡分布図

なお，各遺跡の調査面積，調査期間，調査担当者は次の通りである。

遺跡略号	遺跡名	面積	調査期間	担当者
S 1	南坪A遺跡	5000㎡	57. 8. 11～58. 1. 11	小河邦男・高村勇
S 2	南坪B遺跡	3480㎡	57. 8. 11～58. 1. 7	小河邦男・高村勇
S 3	南坪C遺跡	3600㎡	57. 10. 12～57. 11. 16	小河邦男・高村勇
S 4	高野遺跡	6600㎡	下り車線部分 57.10.14～58. 3. 11 上り車線部分 59. 5. 17～59. 6. 15	小河邦男・高村勇 中沢時宗・桜井一美
S 5	西坪A遺跡	7000㎡	57. 9. 13～58. 3. 18	久野俊度・中沢時宗
S 6	西坪B遺跡	5930㎡	57. 9. 21～57. 11. 2	久野俊度・中沢時宗
S 7	向坪A遺跡	5500㎡	57. 8. 2～57. 12. 22	久野俊度・中沢時宗
S 8	向坪B遺跡	2500㎡	57. 8. 2～57. 12. 15	久野俊度・中沢時宗
S 9	北新田A遺跡	16600㎡	16100㎡ 58. 6. 9～59. 3. 31 500㎡ 60. 4. 1～60. 6. 30	柴正・中沢時宗 和田雄次・桜井一美
S 10	北新田B遺跡	3200㎡	58. 5. 10～58. 5. 30	柴正・中沢時宗
S 11	北新田C遺跡	2800㎡	58. 5. 31～58. 7. 26	柴正・中沢時宗
S 17	溜原（ため はら）B遺跡	2400㎡	60. 6. 18～60. 7. 13	和田雄次・桜井一美

第2章　位　置　と　環　境

第1節　地理的環境

総和町は茨城県の南西部に位置し，東は三和町，西は古河市に接し，南は境町，及び利根川を隔てて五霞村に，北は栃木県野木町に隣接している。人口は41,341人，面積は53.34㎢で，現在町域は，東西約8.2㎞，南北約11㎞である。かつては純農村地帯であったが，近年工業団地が造成され，大企業が進出して工業化が急速に進みつつある。また，東京から約60㎞ということもあって，人口も急増し，首都圏のベッドタウンとしての一面も見られる。農業は首都圏向けの野菜栽培が盛んである。鉄道はないが，町の西部を国道4号線が南北に,町の北部を国道125号線が東西に走り，交通の便がよい。地形はなだらかな猿島台地が町域の大部分を占め，南部は利根川に沿って沖積地となっている。

猿島台地は利根川と飯沼川の間にあり，北西から南東方向へ延びている。台地は関東構造盆地の中心部に近い古河市で標高15〜16ｍで，南北に向かってしだいに高くなるが，平均20ｍ前後である。台地は2〜3ｍのローム層に覆われ，主に畑や平地林として利用されており，特に茶の栽培は有名である。

利根川は関東平野を貫流し，太平洋へ注いでいるが，古くは東京湾へ流れ込んでいて，たびたび氾濫をくり返していた。そのため人工的に何度か流路が変えられ，沿岸に低湿な沖積地と多くの湖沼が形成された。利根川左岸の低湿な沖積地に存在した大山沼・釈迦沼・水海沼・長井戸沼一ノ谷沼・鵠戸沼などは，利根川の氾濫や流路の変更によってできたものである。これらの沼は猿島台地の奥まで細長く入り込み，複雑な地形を形づくっているが，いずれも近世以降に干拓され，多くは水田に生まれ変わり，現在は大穀倉地帯となっている。

新4号国道は，五霞村から新利根川橋を渡り，猿島台地を横断するように，総和町の南東部，三和町の北西部，小山市の南東部を通過する計画となっている。この国道上の調査遺跡を，南から北へたどってみると，南坪A・南坪B・南坪C・高野・西坪A・西坪Bの6遺跡が点在し，いずれも近接している。この付近は台地と沖積地の違いが明確ではないが，標高は13〜15ｍ，水田との比高は1〜2ｍであり，北へ向かうにつれてわずかに高くなる。これらの遺跡の東方約1.5㎞には長井戸沼が南北に延びており，利根川から約3.5㎞の境町稲尾付近で東西両枝に分岐し,それぞれ台地奥まで狭長な沖積地を形成している。長井戸沼西枝の西側の台地は標高約16.5ｍで，水田との比高は約6ｍである。この西枝に面する台地縁辺部には向坪A・向坪B遺跡が所在する。長井戸沼西枝の東側の台地に所在する北新田A・北新田B・北新田C遺跡は，標高19〜20ｍである。同台地上をさらに北上すると三和町に至る。三和町の遺跡としてこの台地の東縁辺部に，二

十五里寺A・二十五里寺B・二十五里寺C・二十五里寺D・溜原A遺跡が連なっている。国道125号を横切って再び総和町に入った所には，長井戸沼東枝から分れた谷津に面して溜原B遺跡が所在する。以上，間に三和町の遺跡を挟むが，総和町の新4号国道関係遺跡は合計12遺跡で，総面積64610㎡である。

第2節　歴史的環境

新4号国道が計画されている利根川の沖積地から猿島台地にかけては，かつては低湿地や湖沼が多く，生産活動が妨げられてきた。しかし，護岸工事，干拓など人々の努力により，現在は水田地帯が広がり，台地は野菜の生産地，工業団地と変貌している。このように人々が営々と築いてきた生活の跡は，原始・古代から認めることができる。

先土器時代の遺跡はまだ調査されていないが，古河市の虚空蔵東遺跡で尖頭器，徳星寺前遺跡でナイフ形石器が採取されている。(1)

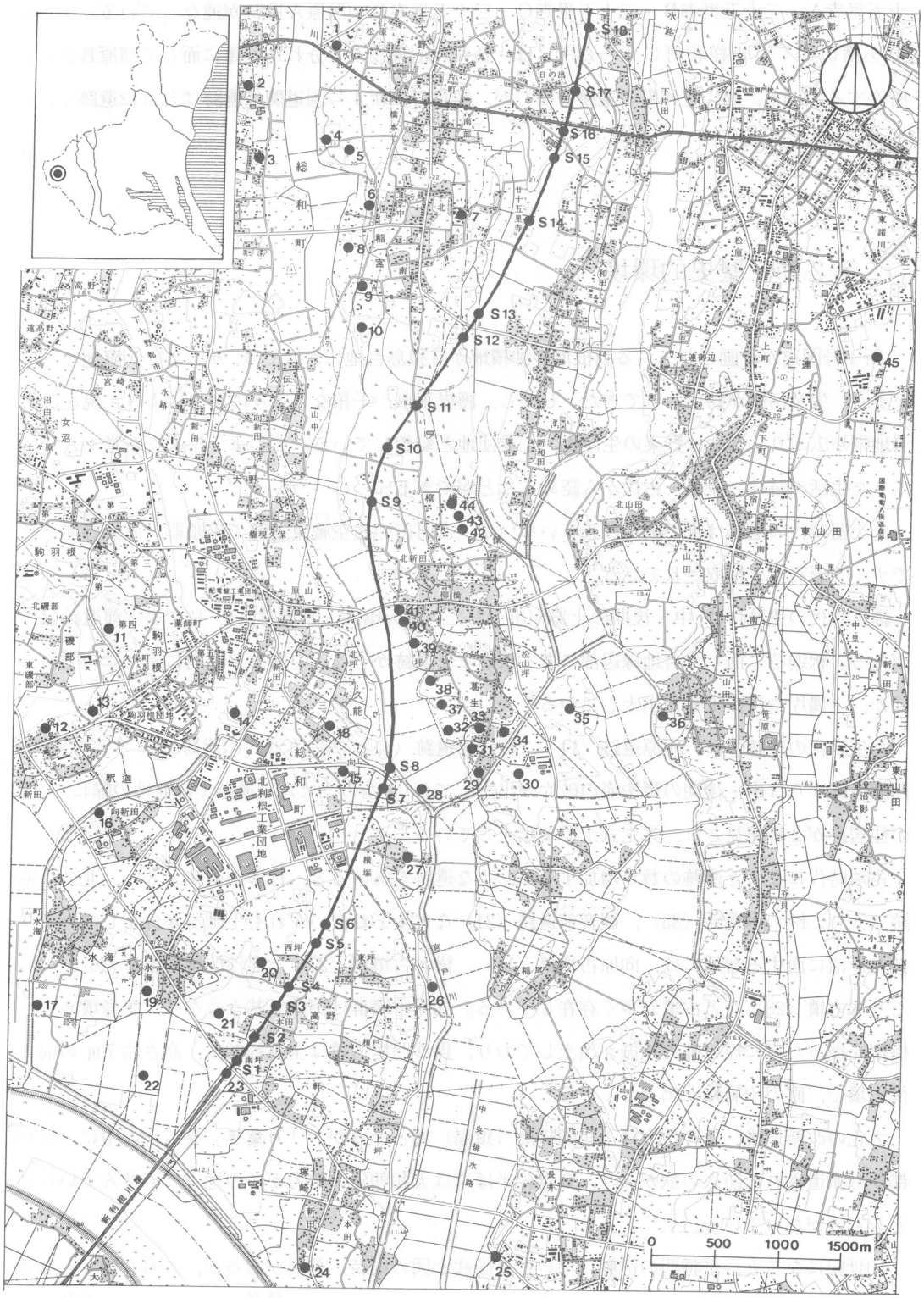
縄文時代の遺跡には，中・後期の土器が出土している大橋A・B遺跡〈11・13〉，表ノ前遺跡〈19〉がある。釈迦沼に面した台地縁辺部にある釈迦才仏遺跡からは，中期から晩期にかけての土器のほか，土偶片や注口土器が出土している。(2)

弥生時代の遺跡には，西原遺跡〈14〉，萩山A遺跡〈41〉，西のうせん山遺跡〈45〉などがある。西原遺跡からは中・後期の甕や壺の破片が出土しており，西のうせん山遺跡では整地の際に，大形の住居跡が2軒発見され，弥生式土器が出土している。(3)

古墳時代になると遺跡の数が増加するが，主な遺跡をあげると，行屋西遺跡〈8〉，北久保遺跡〈6〉，杉の木遺跡〈35〉，観音前遺跡〈21〉などがあり，いずれも土師器が分布している。長井戸沼に面する台地には，向原古墳群〈15〉，横塚古墳群〈27〉，毘沙門塚古墳群〈26〉，べったり塚古墳〈28〉など古墳が多く存在している。向原古墳群は円墳3基からなり，2号墳からは樹根を掘った際に短い直刀1振が出土しており，(4) 毘沙門塚古墳は全長約60m，高さ約7mの前方後円墳で，直刀や埴輪が出土している。(5)

大化の改新以後，この地方は下総国猨島（猿島）郡となるが，「万葉集」巻二十の中に，猨島郡から派遣された防人の歌があり，8世紀半ばには大和朝廷の勢力がこの地方にも及んでいたことをものがたっている。

10世紀になると，平将門の活動に伴い，東国武士団の成長，発展があるが，これを促した基礎には鉄と馬の生産が考えられる。その例として，長井戸沼沿岸には金糞B遺跡〈3〉，弁才天B遺跡〈42〉，萩山C遺跡〈40〉などの古代製鉄遺跡が多く分布しており，フイゴ片や大量の鉄滓



第２図　新４号国道周辺の遺跡分布図

表1　遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代					番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他				先土器	縄文	弥生	古墳	その他
S 1	南坪A遺跡	包蔵地		○				15	向原古墳群	古墳群				○	
S 2	南坪B遺跡	包蔵地		○				16	向新田遺跡	包蔵地				○	
S 3	南坪C遺跡	包蔵地		○				17	三島前遺跡	包蔵地				○	
S 4	高野遺跡	包蔵地		○			○	18	林割遺跡	包蔵地				○	
S 5	西坪A遺跡	包蔵地					○	19	表ノ前遺跡	包蔵地		○			
S 6	西坪B遺跡	包蔵地					○	20	新田山遺跡	包蔵地				○	
S 7	向坪A遺跡	包蔵地					○	21	観音前遺跡	包蔵地				○	
S 8	向坪B遺跡	包蔵地				○	○	22	水海城跡	城館跡					○
S 9	北新田A遺跡	包蔵地				○	○	23	南坪遺跡	包蔵地		○		○	
S 10	北新田B遺跡	包蔵地		○				24	塚崎貝塚	貝塚		○			
S 11	北新田C遺跡	包蔵地		○		○		25	南長井戸古墳群	古墳群				○	
S 12	二十五里寺A遺跡	包蔵地		○				26	毘沙門塚古墳群	古墳群				○	
S 13	二十五里寺B遺跡	包蔵地		○				27	横塚古墳群	古墳群				○	
S 14	二十五里寺C遺跡	包蔵地		○				28	べったり塚古墳	古墳				○	
S 15	二十五里寺D遺跡	包蔵地						29	二階木B遺跡	包蔵地				○	
S 16	溜原A遺跡	包蔵地		○			○	30	二階木A遺跡	包蔵地				○	
S 17	溜原B遺跡	包蔵地					○	31	磯ノ木B遺跡	包蔵地				○	
S 18	下片田遺跡	包蔵地		○				32	磯ノ木A遺跡	包蔵地				○	
1	地蔵堂遺跡	包蔵地		○				33	磯ノ木C遺跡	製鉄跡					○
2	旧円満寺遺跡（小堤城跡）	寺院跡					○	34	二階木C遺跡	包蔵地				○	
3	金糞B遺跡	製鉄跡					○	35	杉の木遺跡	包蔵地				○	
4	本田山古墳群	古墳群				○		36	古新田遺跡	包蔵地				○	
5	本田山B遺跡	製鉄跡					○	37	宮戸井遺跡	包蔵地				○	
6	北久保遺跡	包蔵地				○		38	鍋穐遺跡	包蔵地				○	
7	東小路遺跡	製鉄跡					○	39	萩山B遺跡	包蔵地				○	○
8	行屋西遺跡	包蔵地				○		40	萩山C遺跡	製鉄跡					○
9	高草遺跡	包蔵地				○		41	萩山A遺跡	包蔵地			○	○	
10	高草前古墳群	古墳群				○		42	弁才天B遺跡	製鉄跡					○
11	大橋A遺跡	包蔵地		○				43	弁才天A遺跡	包蔵地				○	
12	釈迦才仏遺跡	包蔵地		○				44	柳橋城跡	城館跡					○
13	大橋B遺跡	包蔵地		○				45	西のうせん山遺跡	包蔵地			○		
14	西原遺跡	包蔵地			○										

が出土している。また，駒羽根（こまはね），駒込（こまごめ）など馬に関する地名も残っている。

中世には，下河辺や古河公方足利氏の支配下に置かれ，柳橋（やぎはし）城跡〈44〉，小堤（こづつみ）城跡〈2〉，水海（みずうみ）城跡〈22〉などの城館跡が知られている。

このように，各時代にわたり周知の遺跡が数多く分布しているが，調査例はきわめて少なく，今後の調査によって，貴重な資料がもたらされるものと思われる。

注

(1)　古河市史編さん委員会原始古代部会『古河市遺跡分布調査報告書』古河市　昭和59年

(2)　総和町教育委員会『総和町埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書』昭和52年

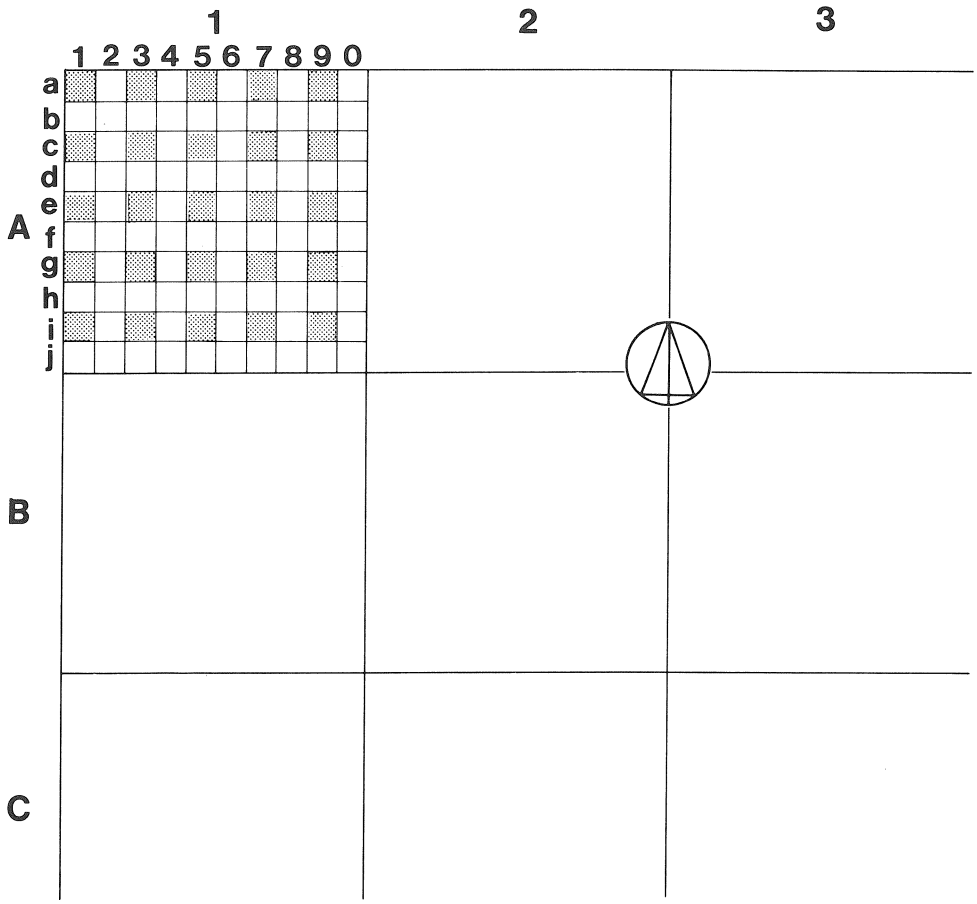
(3)(4)(5)　今井隆助『猿島の郷土史』渓水社　昭和40年

第３章　調査方法

第１節　地区設定

各遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系原点を起点として，100ｍごとのＸ軸，Ｙ軸の交点を遺跡内に求め，それを基準点とした。その交点が遺跡内にない場合は，遺跡に最も近い交点を起点とし，そこから40ｍの倍数で遺跡内まで平行移動し，基準点とした。基準点から座標北で40ｍ方眼の大調査区を設定した。さらに大調査区を４ｍ方眼の小調査区に分割した。つまり，40ｍ方眼の大調査区内に４ｍ方眼の小調査区を100個設定したわけである。

大調査区の名称は，北から南へ大文字で，「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」……とし，西から東へ大文字で，「１」・「２」・「３」とし，Ａ１区，Ｂ２区等と表記した。小調査区の名称は，北から南へ小文字で，「ａ」・「ｂ」・「ｃ」……「ｉ」・「ｊ」とし，西から東へ小文字で，「１」「２」・「３」……「９」・「０」とし，大調査区と合わせて「A1a$_1$」・「B2b$_2$」区のように表記



第３図　グリッド概念図

した。この小調査区をグリッドと呼称した。

第2節　遺構確認

遺構の確認作業は，第3図のように，全調査区の4分の1の割合で，グリッドの表土を除去するという方法で行うことを基本としたが，新4号国道関係の調査では，単一年度内における調査遺跡数が多いことや，調査計画策定上遺構の有無を早く確認する必要から，次の方法で行った遺跡もある。つまり，先に各遺跡とも8分の1の割合で表土除去を行い，遺構確認をしたのち，またもとに戻りながら，さらに8分の1の割合で表土を除去し，最終的には全調査区の4分の1にあたるグリッドの表土を除去して確認するという，1遺跡にとっては不連続的な二段階の確認方法をとった。次いで遺構の確認状況や遺物の出土状況に応じて，周囲のグリッドを拡張した。

遺構の分布が濃密な場合は，土層を観察し，遺構・遺物を破壊しないと考えられる層まで，重機によって全域を表土除去し，その後に遺構確認を行った。表土からの出土遺物は，出土したグリッド名，層位，年月日を記録して取り上げた。

第3節　遺構調査

各遺構の調査については次のような方法を用いた。

住居跡の調査は，長軸方向とそれに直交する方向に，土層観察用のベルトを設け，1～4区に分割して掘り込む四分割法で実施し，地区の名称は北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は，長径で二分する二分割法で実施し，井戸の調査は土坑の調査に準じた。溝の調査は，適宜な位置に土層観察用のベルトを設定し，掘り込んだ。

土層については，土質，色相，各種粒子の含有状態，粘性，硬さ，締まり，吸水性，混入物等と堆積状況を観察して分類の基準とした。

遺物の取り上げについては，各遺構の地区名，遺物番号，出土位置，レベル，年月日等を記録して取り上げた。

平面実測については，遺跡内の大調査区杭を基準に，水糸で1m方眼を地割し，錘を使って測量した。土層断面，遺構断面の実測は，標高を用いて水糸を水平にセットし，水糸を基準として実測した。

記録の過程は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順を基本とした。図面，写真等に記録できない事項については，調査日誌や遺構カードに記録した。

第４章　遺構・遺物の記載方法

第１節　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，下記の要領で統一した。

1　使用記号

竪穴住居跡－ＳＩ　　土坑－ＳＫ　　溝－ＳＤ　　井戸－ＳＥ　　ピット－Ｐ

掘立柱建物跡－ＳＢ

2　遺構に伴う施設等の表示方法

焼土……　　カマド……

3　土層の分類

土層観察は，『新版標準土色帖』（小山忠正・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用し，整理の段階で土層を次のように分類記号化し，図中にその記号をもって載せた。

番号	土色名	色相	明度／彩度	含有物
1	黒褐色	Hue10YR・7.5YR	2/2 3/2 3/1 2/3	a● ローム粒子多量 a ローム粒子 a′ ローム粒子少量 a″ ローム粒子極少量
2	暗褐色	Hue10YR	3/3 3/4	
3	暗褐色	Hue7.5YR	3/3 3/4	b● ロームブロック多量 b ロームブロック b′ ロームブロック少量
4	褐色	Hue10YR	4/4 4/6	
5	褐色	Hue7.5YR	4/4 4/3 4/6	
6	にぶい黄褐色	Hue10YR	4/3 5/4	c● ローム小ブロック多量 c ローム小ブロック c′ ローム小ブロック少量
7	黒色	Hue10YR・7.5YR	2/1 1.7/1	
8	灰褐色	Hue7.5YR・2.5YR	5/2 4/2 2/6	d● ローム大ブロック多量 d ローム大ブロック d′ ローム大ブロック少量
9	にぶい赤褐色	Hue2.5YR・5YR	4/3 5/3 4/4 5/4	
10	暗赤褐色	Hue2.5YR・5YR・10YR	3/3 3/6 3/2 3/4	e● ハードロームブロック多量 e ハードロームブロック e′ ハードロームブロック少量
11	暗赤褐色	Hue2.5YR・5YR	5/8 5/6	
12	にぶい褐色	Hue7.5YR	5/3 5/4	
13	赤褐色	Hue2.5YR・10R	4/8 4/6 5/4 4/4	f ローム（ローム層・ハードローム層）
14	灰赤色	Hue2.5YR	6/2 5/2	g● 炭化物多量（炭化粒子多量） g 炭化物（炭化粒子） g′ 炭化物少量（炭化粒子少量）
15	極暗赤褐色	Hue2.5YR	2/4 2/3 2/2	

16	赤　黒　色	Hue2.5YR・10R	2/1
17	橙　　色	Hue 5 YR	6/8　6/6
18	赤　　色	Hue10R	4/6　5/8　4/8
19	極暗褐色	Hue7.5YR	2/3
20	暗　赤　色	Hue10R	3/4　3/6
21	灰黄褐色	Hue10YR	4/2
22	黄　褐　色	Hue10YR	5/6
23	明　褐　色	Hue7.5YR	5/6
24	にぶい橙色	Hue7.5YR	6/4
25	褐　灰　色	Hue7.5YR	4/1
26	暗オリーブ色	Hue 5 R	4/3
27	暗赤灰色	Hue10R	3/1
28	灰　赤　色	Hue10R	6/2

h• 黒色土多量（黒色土粒子多量）
h 黒色土（黒色土粒・黒褐色土）
h′ 黒色土少量（黒色土粒子少量）

i• 黒色土ブロック多量
i 黒色土ブロック
i′ 黒色土ブロック少量

j• 焼土多量（焼土粒子多量）
j 焼土（焼土粒子）
j′ 焼土少量（焼土粒子少量）
j″ 焼土極少量

l• 焼土ブロック多量（焼土塊）
l 焼土ブロック（焼土小ブロック）
l′ 焼土ブロック少量（焼土小ブロック少量）
l″ 焼土ブロック極少量

m• 粘土多量（粘土粒子多量・粘土ブロック多量）
m 粘土（砂質粘土・粘土粒子・粘土ブロック）
m′ 粘土少量（粘土粒子少量・粘土ブロック少量）
m″ 粘土極少量

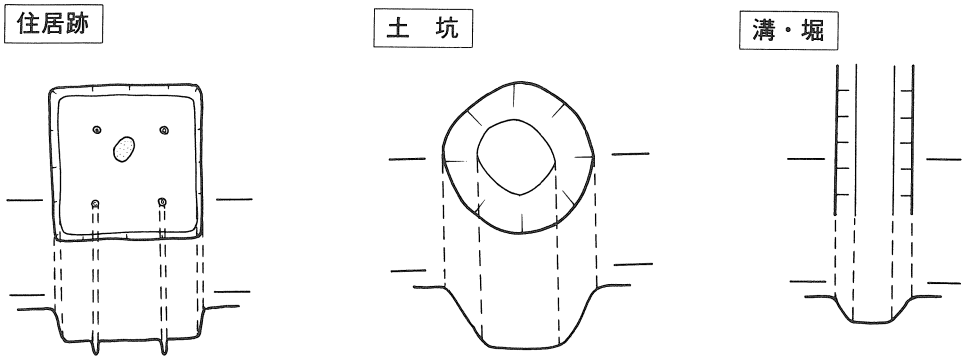
n• 砂粒多量
n 砂粒（細砂粒）
n′ 砂粒少量

o• ローム微粒子多量
o ローム微粒子
o′ ローム微粒子少量

K 攪乱
D 灰
P 小礫
Q 木炭

4　遺構実測図と作成方法

(1)　住居跡　　(2)　土坑　　(3)　溝



第４図　遺構実測図の作成方法

●住居跡は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに４分の１に縮小して掲載した。

●土坑，井戸は縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに３分の１に縮小して掲載した。

●カマドは，縮尺10分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに４分の１に縮小して掲載した。

●溝は，縮尺20分の１の原図をトレースして版組みし，それをさらに大きさに応じて，２分の１，３分の１，４分の１に縮小して掲載した。

5　一覧表の見方について

(1)　住居跡一覧表

住居番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							

●位置は，遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

●主軸方向は，座標北と長軸のなす角度で示した。

●平面形は，掘り込み上面の形状を記した。

●規模の長軸×短軸は上面の計測値，壁高は残存壁高の計測値を記した。

●床面は「平坦」，「凹凸」，「緩い起伏」に分類して表記した。

●柱穴数は，その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記した。

●炉とカマドは，その種別を記し，検出されない住居跡については空欄とした。

●覆土は，堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」，人為堆積の場合は「人為」，攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。

●出土遺物は，主な遺物名を記した。

●時期は，出土遺物から時期判定の可能な範囲で，土器型式によって記した。

●備考は，重複関係等について記した。

(2)　土坑一覧表について

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					

●土坑一覧表については，住居跡一覧表の項目にほぼ準じた。

●壁面は，底面からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

●底面は，住居跡の「床面」の項に準じた。

第２節　遺物の記載方法

遺跡によって遺物の出土量は異なるが，可能なかぎり復元，実測，拓本等をして，できるだけ多く掲載した。

１　実測図の作成方法と掲載方法

(1)　作成方法

●土器は，四分割法を用い，中心線を挟んで左側に外面，右側に内面及び断面を実測した。

●石器，石製品は展開図法を基本とした。

●上記以外の遺物については，効果的と思われる方法で実測した。

(2)　掲載方法

●実測図の掲載にあたっては，縮尺４分の１を基本としたが，遺物の大きさによっては１分の１，２分の１，３分の１の縮尺で掲載した。

●土器拓影図は，右側に断面を載せ，縮尺３分の１で掲載した。なお，繊維を混入するものについては，断面に点を付加した。

２　出土遺物解説表について

遺構ごとの遺物を，次のような表にまとめた。

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考

●番号は，実測図中の番号と同じものである。

●法量は，口径－Ａ，器高－Ｂ，底径－Ｃ，高台径－Ｄ，高台高－Ｅとし，単位はcmである。なお，(　)は推定値である。

●胎土・焼成・色調の欄は，上から胎土，焼成，色調の順で記した。焼成については，良好，普通，不良に３分類し，焼き締って硬いものは良好，焼成があまく手でこすると器面が剝落するものを不良とし，その中間のものを普通とした。色調については，前節の土層の分類と同じ色帖を使用した。

●備考は，完存率や付着物，その他必要と思われる事項を記した。

●なお，この表で解説できない遺物については，文章で解説した。

第５章　遺跡の調査結果

南　坪　Ａ　遺　跡

１　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字南坪1837の１ほかに所在し，面積は5000㎡で，現況はほぼ平坦な畑である。新４号バイパスの新利根川橋の北東約１kmで，総和町の南東端に位置する。近辺は沖積低地と台地との区別がはっきりせず，標高約13ｍの微高地に立地しており，水田面との比高は約1.5ｍである。当遺跡の南側は境町と接しており，主要地方道古河－岩井線が走っている。当遺跡の北側には幅約４ｍの町道が東西に走り，この道路を挟んで南坪Ｂ遺跡が隣接し，北西約0.5kmの水海沼の支谷に面する台地には観音山遺跡が所在する。また，古河－岩井線を挟んで南側には南坪遺跡が位置し，南坪遺跡は南坪Ａ遺跡と同一遺跡としてとらえられており，工事の関係で，昭和51年度に境町教育委員会によって調査が実施されている[(1)]。当遺跡では，遺構は確認されなかったが，少量の縄文式土器片と石器が出土した。

２　調査経過

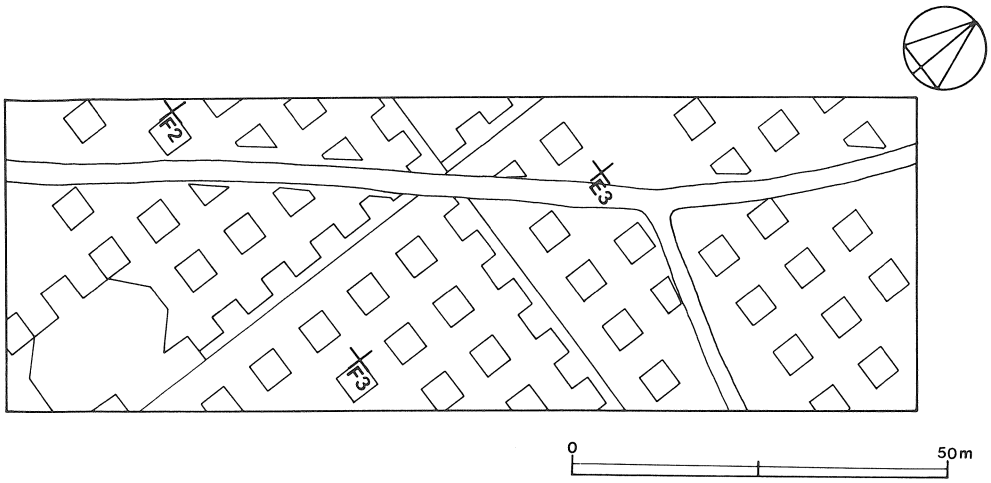
〈昭和57年度〉

８月後半　　下り車線部分の調査を開始し，上物除去を行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋14740ｍ，Ｙ軸－5700ｍの交点を基準として調査区を設定して北側に隣接する南坪Ｂ遺跡と並行して作業を進めた。８分の１のグリッド発掘をＦ2区から実施したが，遺構は確認されず，縄文式土器片がごく少量出土した。遺構確認を急ぐ必要から調査を一時中断し，向坪Ａ・Ｂ遺跡の調査に移った。

12月後半　　残り８分の１のグリッド発掘をＦ2区から実施したが，遺構は確認されず，縄文式土器片がごく少量出土した。土層観察のため幅１ｍのトレンチをグリッドにそって，東西・南北方向に各１本設定し発掘した。トレンチの土層セクション写真を撮影し，実測した。調査後の遺跡全景写真を撮影し，下り車線部分の調査を終了した。

１月前半　　上り車線部分の調査を開始し，調査前の遺跡全景写真を撮影してから，４分の１のグリッドを発掘した。さらに遺跡の中で比較的土器が多く出土しているＦ２区を一部拡張したが，遺構は確認されず，縄文式土器片がごく少量出土しただけであった。調査後の遺跡全景写真を撮影し，上り車線部分の調査を終了し，南坪Ａ遺跡の調査を完了した。

第５図　南坪Ａ遺跡地形図



第6図　南坪A遺跡全体図

3　遺物

当遺跡では,面積の4分の1のグリッド発掘を行い,さらに比較的遺物が多く出土したF2g_5を中心に周囲のグリッドを拡張して遺構の確認に努めたが,縄文式土器片約50点と石器3点が出土しただけである。

(1)　土器

縄文式土器（第7図1～35）

いずれも破片であり，器形をうかがえるものはない。土器形式や施文法から，次のように3群に分けられる。

第1群土器（1～24・35）

繊維を含み,前期の黒浜式に比定できる土器を本群とした。色調は褐色,にぶい褐色，灰褐色のものが多く，胎土には繊維のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

第1類（1～18）

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。1・2は口縁部に無文部を残し，その下からLRの縄文が施されており，1は緩い波状口縁である。3も口縁部であるが，無文部を残さずに雑なLRの縄文が施されている。4～14は胴部片でいずれもLRの縄文が施されているが，撚りの緩いものが多い。15・16は無節である。17・18は単節と思われるが，撚りは不明である。

第2類（19～23）

無文地に沈線の文様が配されているものを本類とした。19と21は3本，20は2本の平行沈線によって文様を構成している。22・23は太い棒状工具によって雑な沈線を走らせている。

第3類（24・35）

第1・2類以外のものを一括した。24は円形刺突文が横位に3列施されている。35は底部片で平底である。無文であるが繊維痕が多く観察される。

第2群土器（25・26）

後期前半の堀之内Ⅱ式に比定できるものである。25・26は沈線による直線や曲線の区画内に，ＬＲの縄文が充塡（じゅうてん）されている。色調は25が黒褐色，26が灰褐色を呈している。いずれも胎土には砂粒を含み，焼成は良好である。

第3群土器（27～34）

安行Ⅰ式に比定できる土器群である。色調は褐色，にぶい褐色を呈するものが多く，胎土には砂粒・スコリアを含んでいる。焼成はいずれも普通である。

第1類（27）

帯状縄文系の土器を本類とした。27は台付鉢の台部片である。隆起帯状縄文が平行に2帯巡っており，下の帯に接して径7㎜の円形の穿孔がみられる。

第2類（28～34）

いわゆる紐線文系の土器を本類とした。28は口縁直下に列点刺突文を巡らし，その下に細い斜行の条線文が施されている。29は胴部片で縦位の条線文を地文とし，列点状刺突文を配した紐線が横位に付されている。30～34はいずれも胴部片で，条線文が施されているものである。

(2) 石器（第8図）

1　石鏃（1）

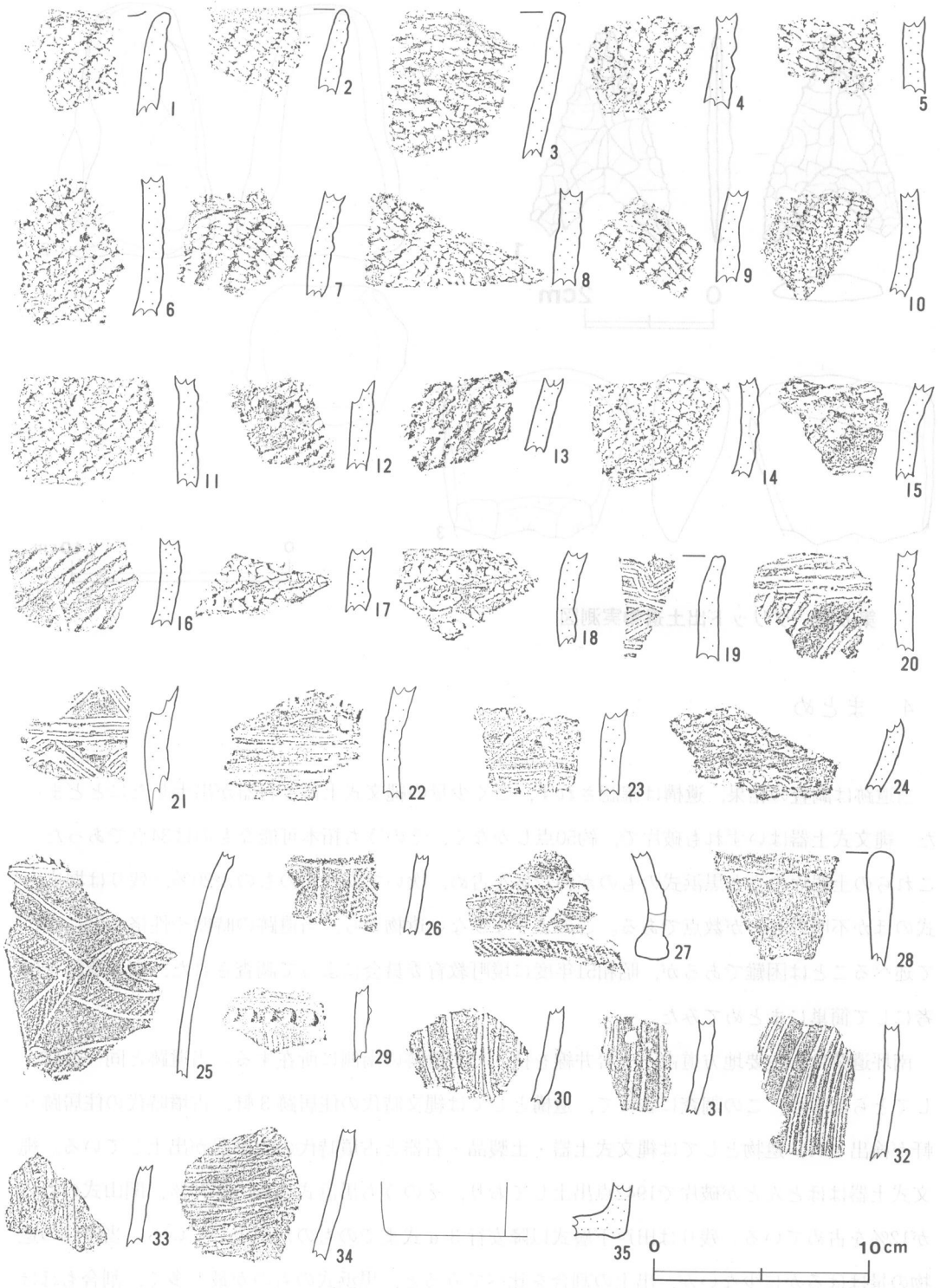
凹基（おおき）無茎鏃で入念に剝離されている。片方の脚部先端が欠損している。長さ3.1㎝・幅2.1㎝・厚さ0.4㎝・重さ1.8ｇで，石質はチャートである。

2　礫器（3）

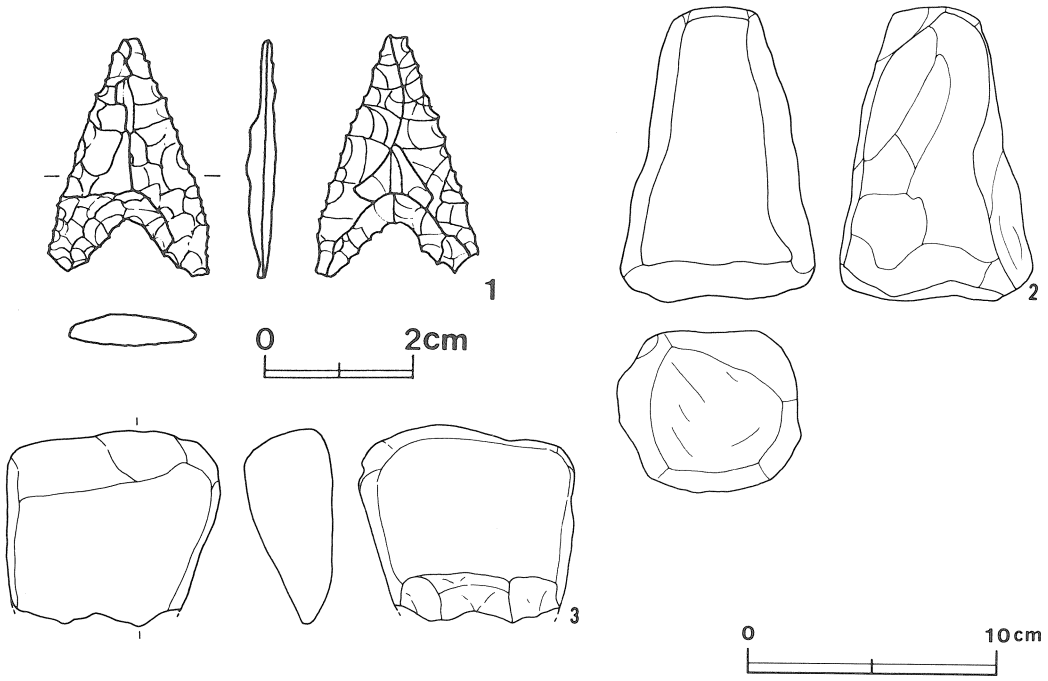
扁平な礫の縁辺に加撃して刃部（片刃）を作り出している。長さ7.9㎝・幅8.6㎝・厚さ3.5㎝・重さ346ｇで，石質は流紋岩である。

3　スタンプ形石器（2）

河原石の下半部を打ち欠き，側縁を敲打によって幾分えぐるように加工している。手で握ると握りやすい。底面の平坦部が使用面であるが，使用痕はほとんど観察されない。長さ11.7㎝・幅7.8㎝・重さ750ｇで，石質は石英斑岩である。



第７図　グリッド出土土器拓影図



第8図　グリッド出土遺物実測図

4　まとめ

当遺跡は調査の結果，遺構は確認されず，ごく少量の縄文式土器と石器が出土したにとどまった。縄文式土器はいずれも破片で，約50点しかなく，そのうち拓本可能なものは34点であった。これらの土器片のうち黒浜式のものが約72％を占め，次いで安行式のものが20％，残りは堀之内式のほか不明のものが数点である。このような少ない遺物から，当遺跡の時期や性格などについて述べることは困難であるが，昭和51年度に境町教育委員会によって調査された，南坪遺跡を参考にして簡単にまとめてみた。

南坪遺跡は，主要地方道古河－岩井線を挟んで当遺跡の南側に所在する。当遺跡と同一遺跡としてとらえられ，この調査によって，遺構としては縄文時代の住居跡３軒，古墳時代の住居跡６軒が検出され，遺物としては縄文式土器・土製品・石器と古墳時代の土師器が出土している。縄文式土器はほとんどが破片で1942点出土しており，そのうち黒浜式のものが75％，関山式のものが12％を占めている。残りは田戸下層式以降安行３ａ式までのものが出土している。当遺跡の遺物の量ははるかに少ないが，出土の割合を比べてみると，黒浜式のものが最も多く，割合もほぼ同じである。

これらのことから当遺跡を考えてみると

① 当遺跡では遺構が確認されなかったこと。

② 当遺跡から出土した遺物は南坪遺跡よりも少ないこと。

③ 両遺跡とも遺物の中で黒浜式の土器が最も多いこと。

④ 当遺跡は南坪遺跡の北約150mに位置していること。

以上のことを考え合わせると，黒浜式期においては，当遺跡は，南坪遺跡の集落跡の一部であり，当時の人々の生活圏であったのではないかと考えられる。

注

(1)新4号遺跡発掘調査会『南坪遺跡』昭和53年

南 坪 B 遺 跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字南坪1795の１ほかに所在し，面積は3480㎡，現況は標高約13.5ｍの平坦な畑で，一部宅地と水田がふくまれている。南坪Ａ遺跡の北側に幅４ｍほどの町道が東西に走り，その町道を挟んで南坪Ｂ遺跡が位置している。地形的には南坪Ａ遺跡とほとんど変わらず，水田面との比高も約1.5ｍである。当遺跡の周辺は農家が点在しており，北方約300ｍには南坪Ｃ遺跡が所在する。当遺跡ではごく少量の縄文式土器片が出土しただけで，遺構は確認されなかった。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

８月後半　下り車線部分の調査を開始し，上物除去を行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋14900ｍ，Ｙ軸－5540ｍの交点を基準として調査区を設定し，南側に隣接する南坪Ａ遺跡と並行して作業を進めた。

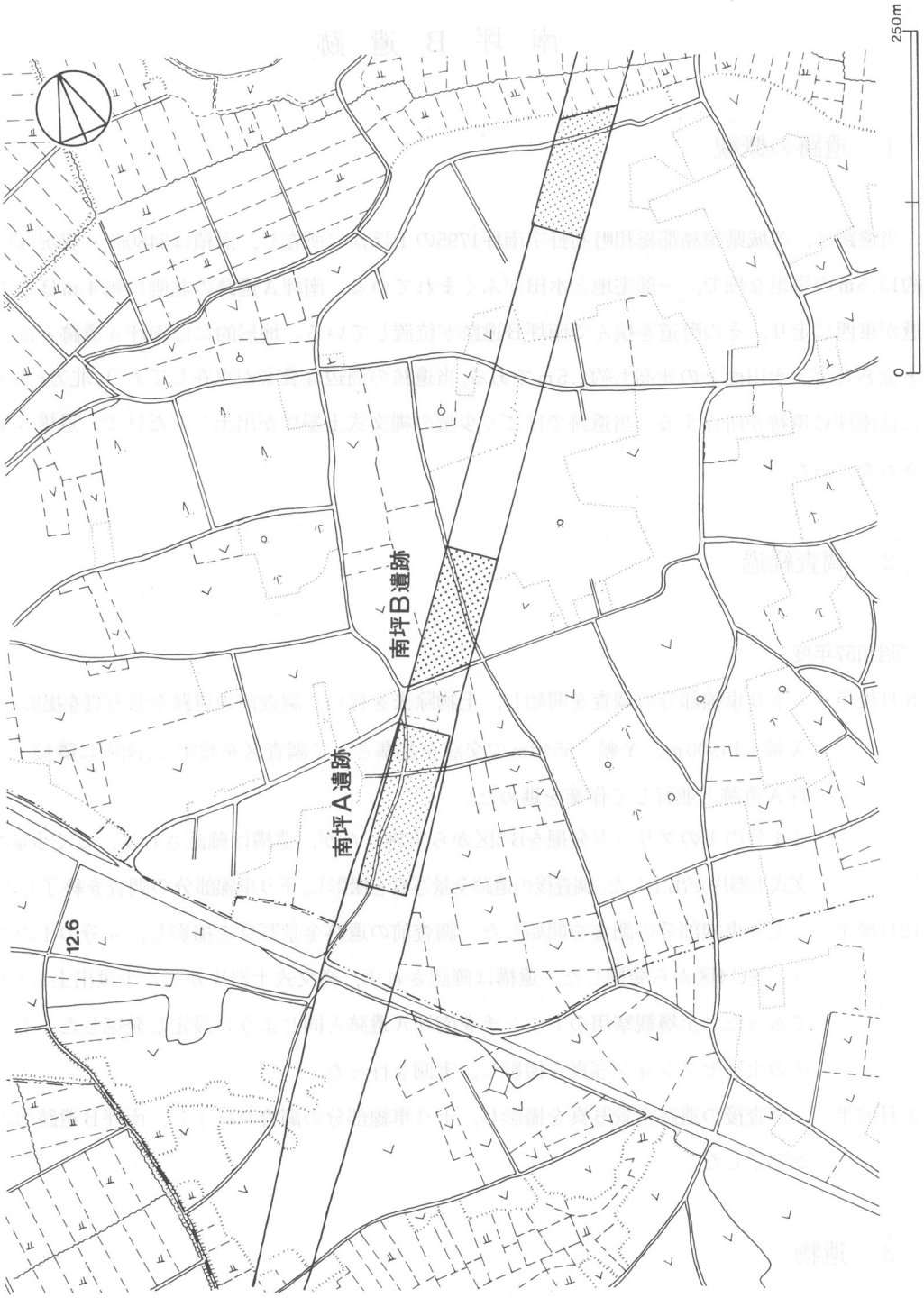
４分の１のグリッド発掘をＢ5区から実施したが，遺構は確認されず，ごく少量の縄文式土器片が出土した。調査後の遺跡全景写真を撮影し，下り車線部分の調査を終了した。

12月後半　上り車線部分の調査を開始した。調査前の遺跡全景写真を撮影し，４分の１のグリッドをＣ4区から発掘した。遺構は確認されず，縄文式土器片がごく少量出土しただけであった。土層観察用のトレンチを南坪Ａ遺跡と同じように設定し発掘した。トレンチの土層セクション写真を撮影し，実測を行った。

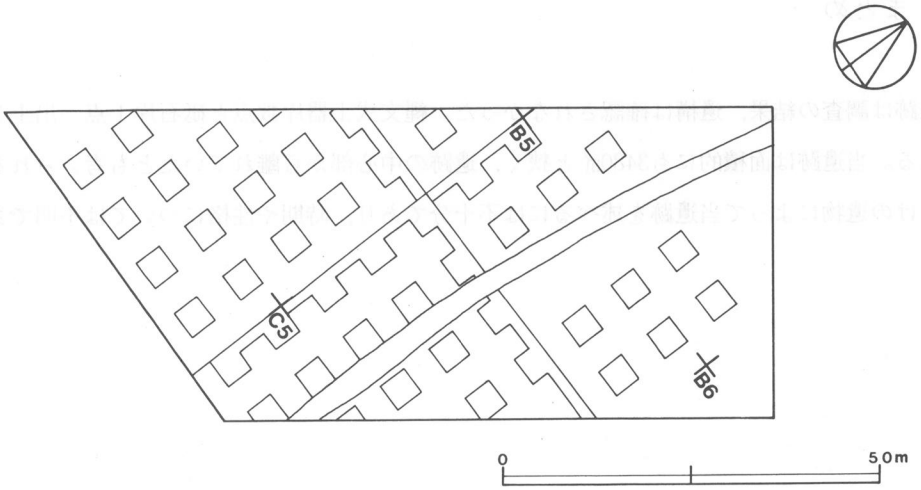
１月前半　調査後の遺跡全景写真を撮影し，上り車線部分の調査を終了し，南坪Ｂ遺跡の調査が完了した。

3　遺物

当遺跡からは，面積の４分の１のグリッド発掘の結果，遺構は確認できなかった。また，遺物も縄文式土器片が４点と砥石片が１点出土しただけである。



第9図　南坪B遺跡地形図



第10図　南坪Ｂ遺跡全体図

(1)　土器（第11図）

縄文式土器（１～４）

１は胴部片で，器面が荒れており判断しにくいが，無節の縄文が施されている。色調は灰褐色を呈し，胎土には繊維や砂粒を含んでいる。焼成は良くない。２は口縁部片で，波状口縁を呈し，波頂部に貫通孔を有している。３は胴部でＲＬの地文に縦位の太い沈線が施されている。２～４とも色調はにぶい褐色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。焼成は普通である。１は黒浜式，２～４は堀之内式のものと思われる。

(2)　石製品（第11図－５）

５は砥石である。形状は扁平な直方体である。両端を除いて４面が使用され，そのうち上下２面が最も使用されている。下半部を欠損しており，現存長は4.9cm・幅3.6cm・厚さ1.9cmであり，石質は凝灰岩である。時期は不明である。

第11図　グリッド出土土器拓影図・石器実測図

4　まとめ

当遺跡は調査の結果，遺構は確認されなかった。縄文式土器片数点と砥石片１点が出土しただけである。当遺跡は面積的にも3480㎡と狭く，遺跡の中心部から離れていたとも考えられるが，これだけの遺物によって当遺跡を述べるには不十分であり，時期や性格については不明である。

南 坪 C 遺 跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字本田1769ほかに所在し，面積は3600㎡，現況は標高13.5ｍの山林である。遺跡の北側には西から東へ向かって幅約50ｍの細長い谷津が入り込んでいる。谷津は水田として利用されており，遺跡は水田面との比高が約1.5ｍの微高地に立地している。当遺跡は，南側で標高13.7ｍ，北側では13.2ｍで，南側が高く，遺跡の北側の谷津田に向って，ややなだらかに傾斜している。谷津田を隔てて当遺跡の北方100ｍには高野遺跡が所在し，南方約300ｍには南坪Ｂ遺跡が所在している。当遺跡では全面を表土除去し，遺構確認したが，遺構は確認されず，わずかに縄文式土器片が出土しただけである。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

10月前半　上・下両車線部分の調査を開始し，上物除去及び草刈りを行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋15160ｍ，Ｙ軸－5360ｍの交点を基準として調査区を設定した。遺跡は山林のため根株がきわめて多く，人力による表土除去が困難なため，重機を導入する方向で検討を進めた。重機導入にあたり，遺物の混入状態や土層を観察するため，遺跡中央部に１ｍ幅のトレンチを道路の中央線に沿って設定し試掘を行った。

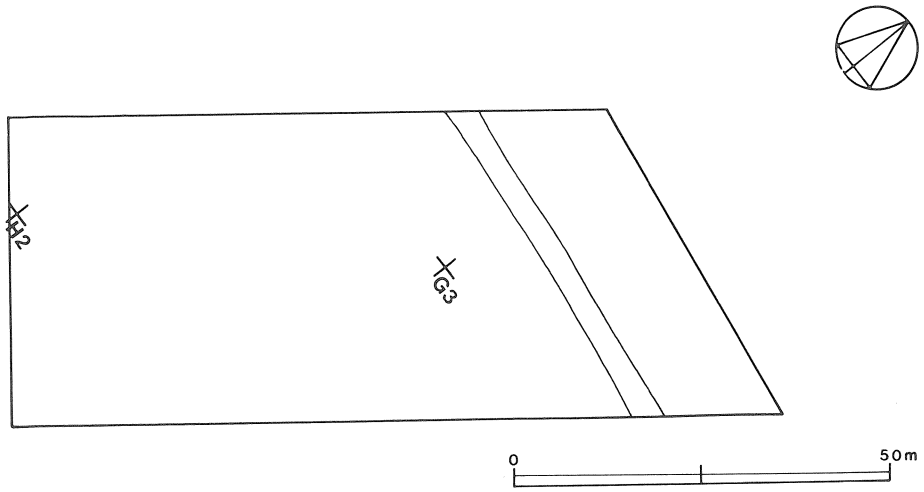
10月後半　重機により大きな根株を除いて全面を表土除去した。遺構の確認作業を行い，少量の縄文式土器片が出土しただけで，遺構は確認されなかった。

11月前半　道路の両側面の土層セクション写真を撮影し，実測を行った。実測終了後，調査後の遺跡全景写真を撮影し，調査を完了した。

3　遺物

当遺跡は，重機を導入して全面を表土除去し，遺構の確認を行った。しかし遺構は確認できず，縄文式土器片20点と内耳土器片１点が出土しただけである。

第12図　南坪C遺跡地形図



第13図　南坪Ｃ遺跡全体図

(1)　土器（第14図）

縄文式土器（１～20）

いずれも破片で，器形をうかがえるものはない。拓本が可能なものはすべて掲載し，３群に分類した。

第１群土器（１）

早期末のものと思われる土器である。１は胴部片で，絡条体条痕文を地文とし，絡条体圧痕文が横位に２本施されており，内面には貝殻条痕文が見られる。色調は褐色を呈しており，胎土は砂粒・小礫・繊維を含んでいる。焼成は普通であるが，摩滅している。

第２群土器（２～16・20）

繊維を含む前期の黒浜式に比定される土器である。色調は褐色やにぶい褐色のものが多く，胎土は繊維のほか砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

第１類（２～11）

縄文を唯一の文様とするものを本類とした。２は口縁部にわずかに無文部が残り，その下からＲＬの縄文が施されている。３～11はいずれも胴部片であり，３はＲＬ，４・５・６はＬＲの縄文が施されている。７・８・９は撚りがゆるく無節のように見えるが，ＲＬの縄文が施されている。10・11は，太い条と細い条を撚り合わせた異条縄文である。

第２類（12～15）

無文地に半截竹管によって文様を構成しているものを本類とした。12は口縁部片で，斜行の平行沈線が雑に施されている。13～15は胴部片で，13は肋骨文のように思われ，途中で刺突文が加えられている。14は鋸歯状文，15は刺突文が施されている。

第3類（16・20）

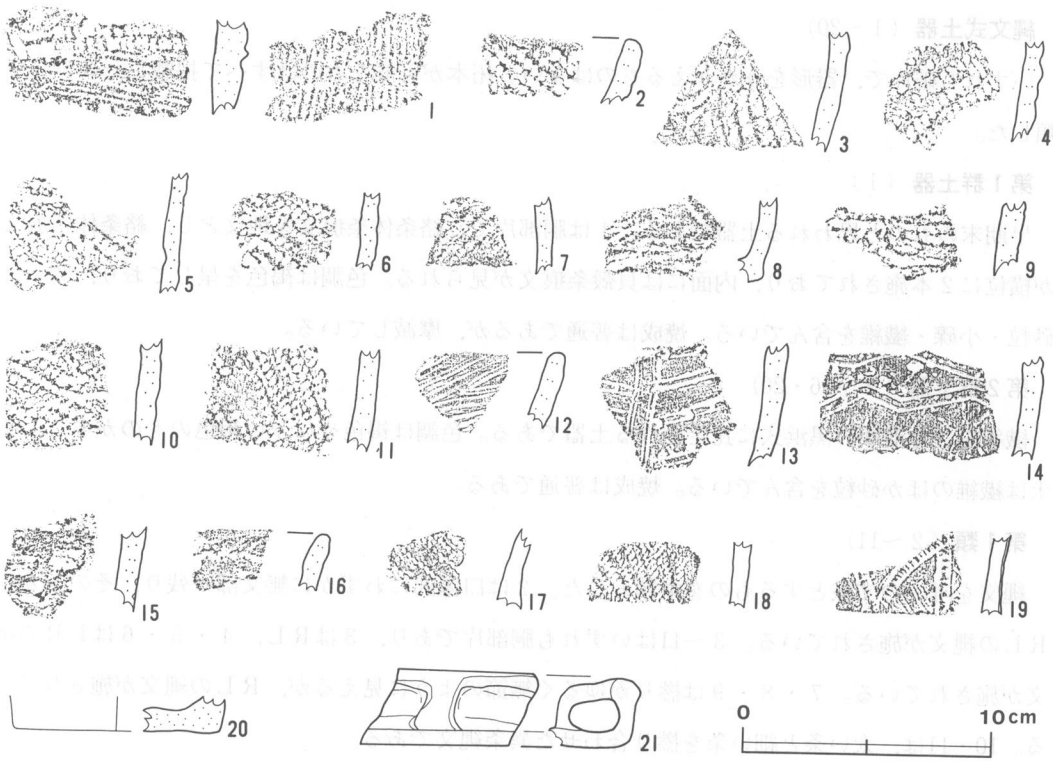
第1・2類以外のものを一括した。16は口縁部片で無文である。20は底部片で平底である。いずれも器面に繊維痕が顕著に残っている。

第3群土器（17～19）

前期後半の諸磯式と思われるものである。いずれも胴部片で，17・18はＲＬの縄文が施され，19は半截竹管による連続爪形文が施されている。色調は17・18が褐色，19が橙色を呈している。いずれも胎土は砂粒を含み，焼成は普通である。

内耳土器（21）

21は平底で，体部はほぼ垂直に立ち上がっている。口縁部は丸味をもって膨らんでいる。内耳は粘土を板状にのばしたもので，口縁上端から付されている。器内外面ともナデ整形が施されている。器高は2.8cmと低い。色調は外面が褐灰色，内面がにぶい褐色を呈している。胎土は砂粒を含み，焼成は良好である。



第14図　グリッド出土土器拓影図・実測図

4　まとめ

当遺跡は全面を表土除去し，遺構確認に努めたが，遺構は確認できず少量の縄文式土器片と内耳土器片が出土しただけである。縄文式土器片は20点あり，そのうち早期末と思われるものが1点，諸磯式と思われるものが3点，残りはすべて黒浜式のものである。また，水田を挟んで当遺跡の北方100mに高野遺跡が所在するが，この遺跡の南部から黒浜式の土器片がわずかではあるが出土しており，黒浜式以外の縄文式土器は出土していない。いずれも量的には少なく，推定の域を脱し得ないが，この付近に黒浜期の遺跡が存在したことが考えられ，当遺跡と高野遺跡の南側部分は，往時の人々の生活圏の一部であると思われる。

高　野　遺　跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字西坪554の１ほかに所在し，面積は6600㎡で，現況は畑である。高野集落を二分するように，西から東へ向かって幅50ｍ前後の細長い谷津が延びており，遺跡はその谷津の北側の微高地に立地している。標高は12.5～13.5ｍで，南から北に向かってわずかに高く，水田面との比高も0.5～1.5ｍである。遺跡の中央部を町道が東西に横切り，遺跡は北側と南側に二分されている。当遺跡の南方約100ｍには，谷津を挟んで南坪Ｃ遺跡が所在し，北方約300ｍには西坪Ａ遺跡が所在する。当遺跡は下り車線部分を昭和57年度に調査したが，上り車線部分は用地問題の解決が遅れたため，昭和59年度に調査を実施した。当遺跡では，溝１条が検出され，遺物はグリッドから少量の縄文式土器片と内耳土器片が出土した。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

10月後半　下り車線部分の調査を開始し，上物除去をおこない，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋15360ｍ，Ｙ軸－5200ｍの交点を基準として調査区を設定した。遺跡中央を横切る道路の南側は，幅１ｍのトレンチを道路中央線に沿って３本設定して試掘した。試掘の結果遺構確認面までが70～100㎝と深く，水はけが悪いため重機で表土除去をすることにした。道路の南側を重機によって表土除去を進め，遺構確認作業を実施した。Ｃ4区からＣ5区にかけて溝１条を確認した。確認作業中，ごく少量の縄文式土器片が出土した。道路南側の遺構確認が終了した段階で調査を一時中断し，南坪Ｃ遺跡の遺構確認作業に移った。

２月前半　第１号溝の調査を実施した。溝は遺跡の中央部を横切る道路の南側に，ほぼ東西に延びており，出土遺物はなかった。道路の北側の上物除去を行い，Ｂ6・Ｃ5区の４分の１のグリッド発掘を実施したが，遺構は確認されず，グリッドから内耳土器片が数点出土した。溝の調査が終了したため調査の主力を西坪Ａ遺跡の調査に移した。

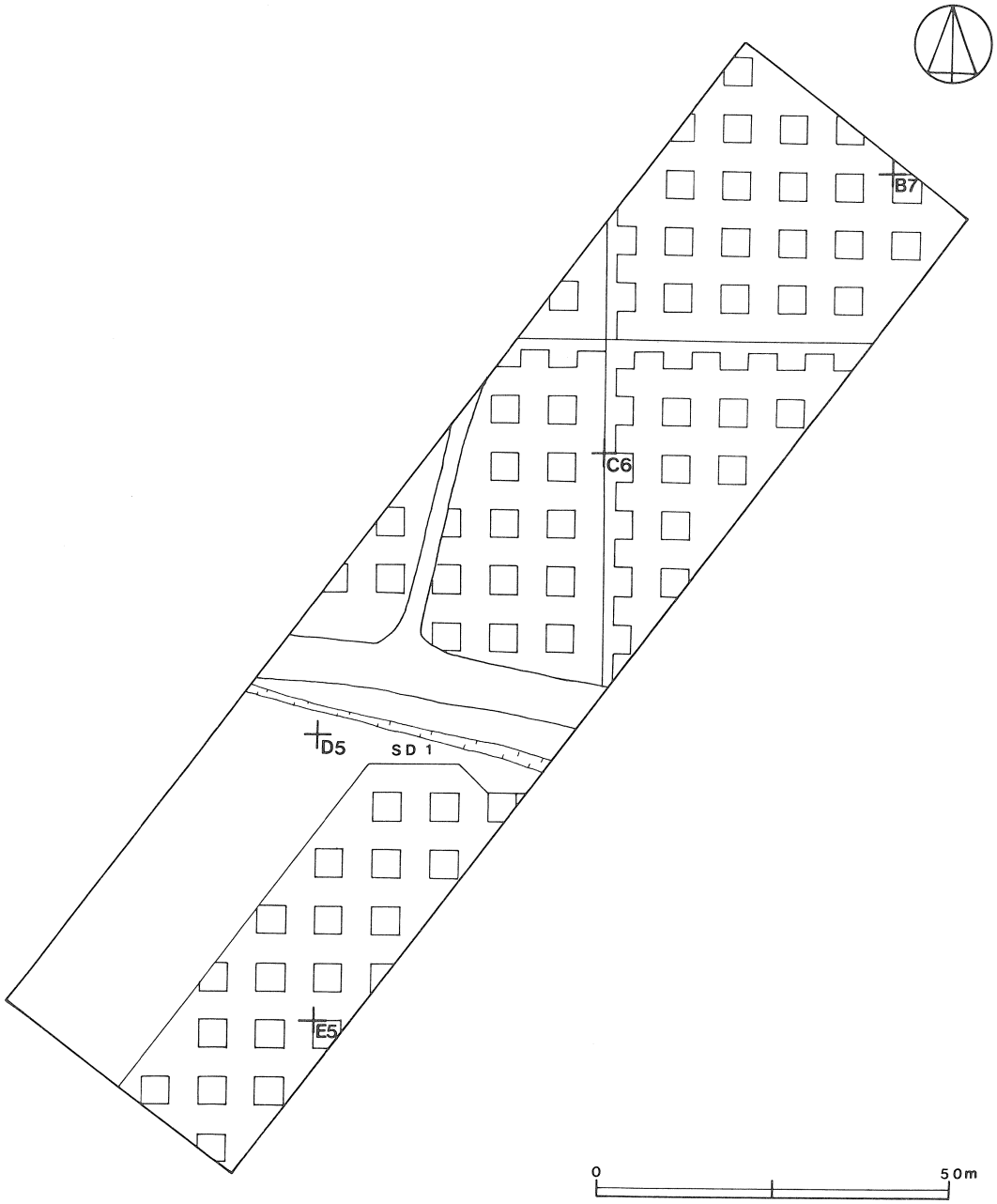
２月後半　土層観察用トレンチを幅１ｍで東西・南北方向に各１本設置し発掘した。

３月前半　トレンチの土層セクション写真を撮影し，実測した。遺跡全体を清掃し，調査後の遺跡全景写真を撮影して，下り車線部分の調査を完了した。

第15図　高野遺跡地形図

〈昭和59年度〉

5月後半　上り車線部分の調査を開始し，上物を除去し草刈りを行った。調査前の遺跡全景写真を撮影して，調査区を設定した。C6区から南へ向かって4分の1のグリッド発掘を行い，C5区からD5区にかけて第1号溝の延長部を確認した。グリッドからはごく少量



第16図　高野遺跡全体図

の縄文式土器片が出土した。下り車線部分の土層観察用のトレンチを延長し発掘を行った。

6月前半　第1号溝の周辺のグリッドを拡張し，トレンチの土層セクション写真を撮影して，実測した。第1号溝の延長部の調査を行った結果，下り車線部分と同様に直線的に調査区域外へ延びており，出土遺物はなかった。調査後の遺跡全景写真を撮影し，補足調査を行い，上り車線部分の調査を完了した。

3　遺構と遺物

当遺跡からは，溝1条が検出された。溝からの出土遺物はなく，各グリッドからの遺物も縄文土器片14点と内耳土器片3点が出土しただけである。

(1)　溝

第1号溝（第17図）

本跡は，C4・C5・D5区にかけて検出され，遺跡の中央部を東西に走る町道にほぼ沿っている。

主軸方向はN－77°－Wを指し，西北西－東南東の方向で直線的に延びている。検出された溝の長さは約44mであるが，両端とも調査区域外まで延びている。断面は椀形を呈しており，上幅は1.6～1.8mで西寄りの方がわずかに細くなっている。遺構確認面から底面までの深さは50～60cmである。底面のレベルは，東側から西へ向かって中間部までは15cmほど低くなり，さらに中間部から西端に向かうと約60cm低くなっている。底面や両壁面はハードロームで，凸凹が多い。覆土は自然堆積の状態を示しており，黒褐色土が主である。上層にはローム粒子，下層にはロームブロックが含まれている。出土遺物はなく，時期や性格については不明である。

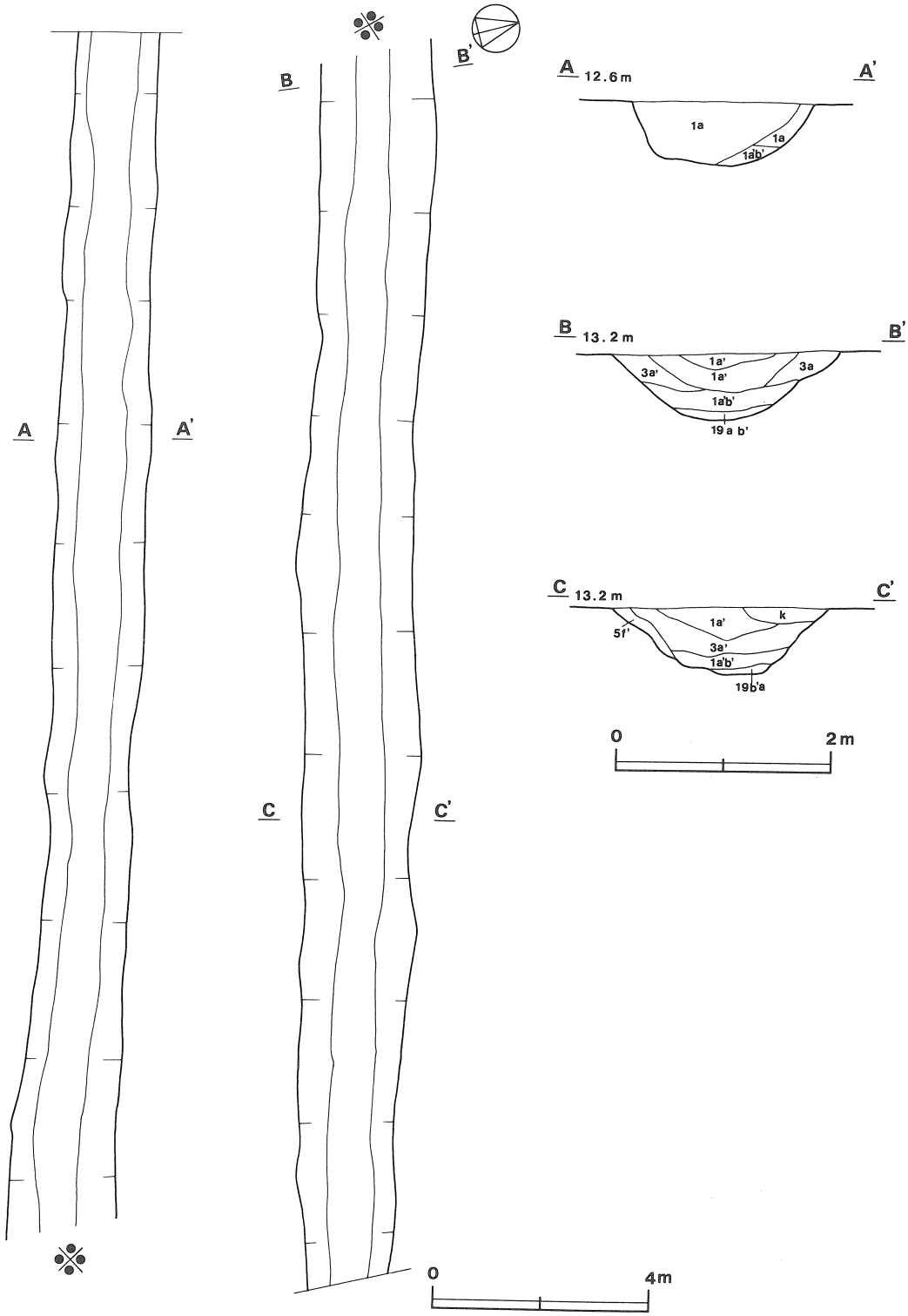
(2)　遺物

遺跡の南部のグリッドからは縄文式土器，北部のグリッドからは内耳土器が出土している。

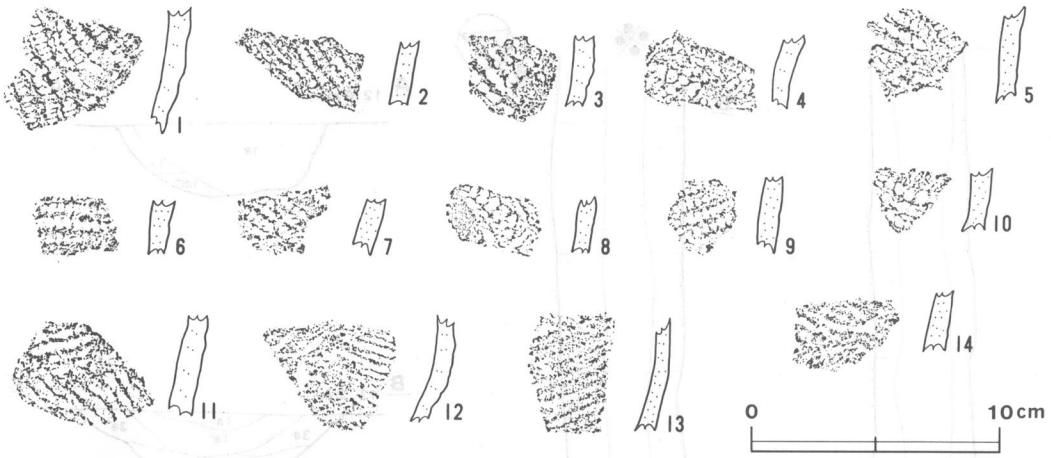
縄文式土器（第18図－1～14）

いずれも胴部片で，繊維を含む前期黒浜式に比定されるものである。色調はにぶい褐色や暗褐色を呈しており，胎土には繊維のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

1～14までいずれも縄文が施されているが，雑な施文が多く見られる。1～6はRL，7～10はLRの縄文が施されている。11～14は無節である。いずれも器面が荒れており，撚りの方向は判別できない。



第17図　第１号溝実測図



第18図　グリッド出土土器拓影図

内耳土器（第19図－１～３）

１は体部がいったん垂直に立ち上がってから，外傾して口縁部へと続き，口唇部は平坦である。内耳は口縁上端から配されており，断面は円形である。器内外面ともナデ整形されている。色調はにぶい赤褐色を呈しており，胎土は砂粒，金雲母を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10％で，推定で口径は34cmである。

２は平底であり，体部は外傾して立ち上がっている。器内外面ともナデ整形されているが，底部と体部の境は削り整形である。外面には煤が付着している。色調は褐灰色を呈しており，胎土は砂粒を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10％で，推定で底径は20.1cmである。

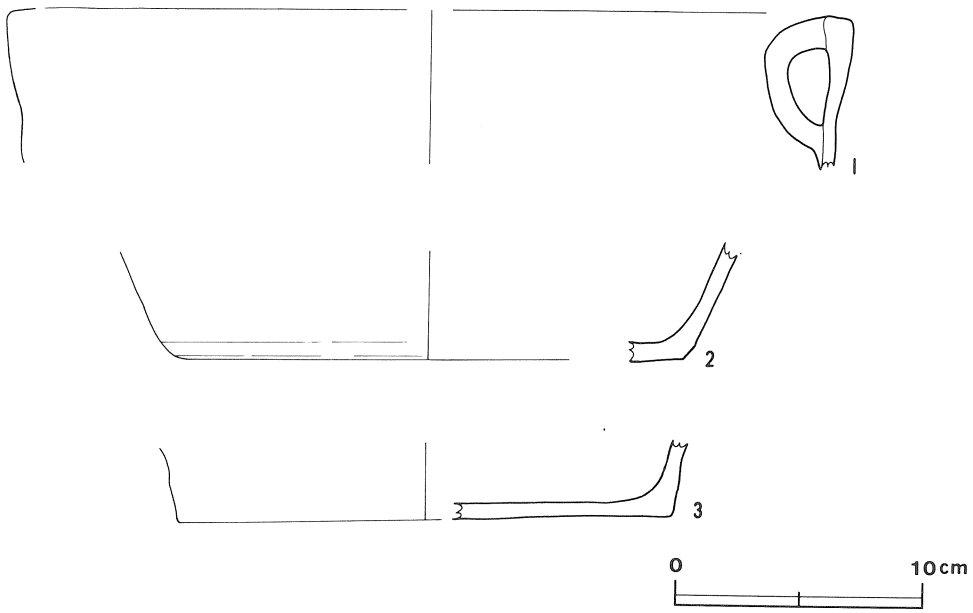
３は平底であり，体部は外傾して立ち上がる。器内外面ともナデ整形されており，外面には煤が付着している。色調はにぶい褐色を呈しており，胎土は砂粒，金雲母を含んでいる。焼成は普通である。完存率は約10％で，推定で底径は19.8cmである。

4　まとめ

当遺跡は調査の結果，遺構としては溝１条が検出され，遺物はごくわずかの縄文式土器片と内耳土器片が出土しただけである。

縄文式土器片は南坪Ｃ遺跡と同じく，すべて黒浜式のものであり，遺跡の南部D４・Ｄ５区から出土している。土器片数は少ないが，当遺跡の南部は，当遺跡の南方約100ｍに所在する南坪Ｃ遺跡などと同様，往時の人々の生活圏の一部であったと思われる。

内耳土器片は遺跡の北部B6区から出土している。内耳土器は中世から近世まで使用されており，さらに戦前まで使用されていたという話も聞いている。出土した内耳土器片はわずかに３片であ



第19図　グリッド出土遺物実測図

り，当該期の遺構も確認されてなく，内耳土器の時期については不明である。

第１号溝は当遺跡唯一の遺構であるが，溝からの遺物もなく，時期や性格などについては不明である。

西 坪 A 遺 跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字谷中651ほかに所在し，面積は7000㎡で，現況は平坦な畑である。高野集落の北側に位置し，標高約14.3mの微高地に立地している。当遺跡から西方約500mには，水海沼から延びる谷津田が南から北に向かって入り込んでおり，その谷津田との比高は約2mである。また南方約300mには高野遺跡が所在し，北側には西坪B遺跡が接している。当遺跡では，近世以降のものと思われる土坑116基と溝6条が検出され，遺物はグリッドから，ごく少量の縄文式土器片や陶磁器が出土した。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

9月後半　上・下両車線部分の調査を開始し，上物除去を行い，調査前全景写真を撮影した。X軸＋15600m，Y軸－5000mの交点を基準として調査区を設定し，隣接する西坪B遺跡と並行して調査を進めた。

10月前半　H2区から北に向かって4分の1のグリッド発掘を実施し，H2区とH3区を中心に土坑と溝が集中して確認された。グリッドからはわずかに縄文式土器片と陶磁器片が出土した。グリッド発掘が終了した段階で，西坪B遺跡のグリッド発掘に移った。

11月前半　遺構が確認されたG2・G3・H2・H3区を重機により拡張し，F2・F3区は手掘りで拡張した。拡張が終了した段階で，向坪A遺跡の下り車線部分のグリッド発掘に移った。

1月後半　遺構確認作業を実施し，土坑116基，溝6条を検出した。東西・南北方向に各1本の土層観察用トレンチを発掘し，土層セクションの写真撮影と実測を行った。

2月前半　H2・H3区の遺構調査を行った。遺構数が多いため，各遺構とも順次掘り込み，写真撮影，実測等を進めたが，遺構の凍結や霜解けで調査に手間取った。第1号溝に囲まれた部分には，全土坑の約3分の2の土坑が集中して検出された。遺構からの出土遺物はほとんどなかった。

2月後半　他の遺跡の調査は完了しており，全作業員を当遺跡の調査に投入し，G2・G3区の遺構調査を進めた。

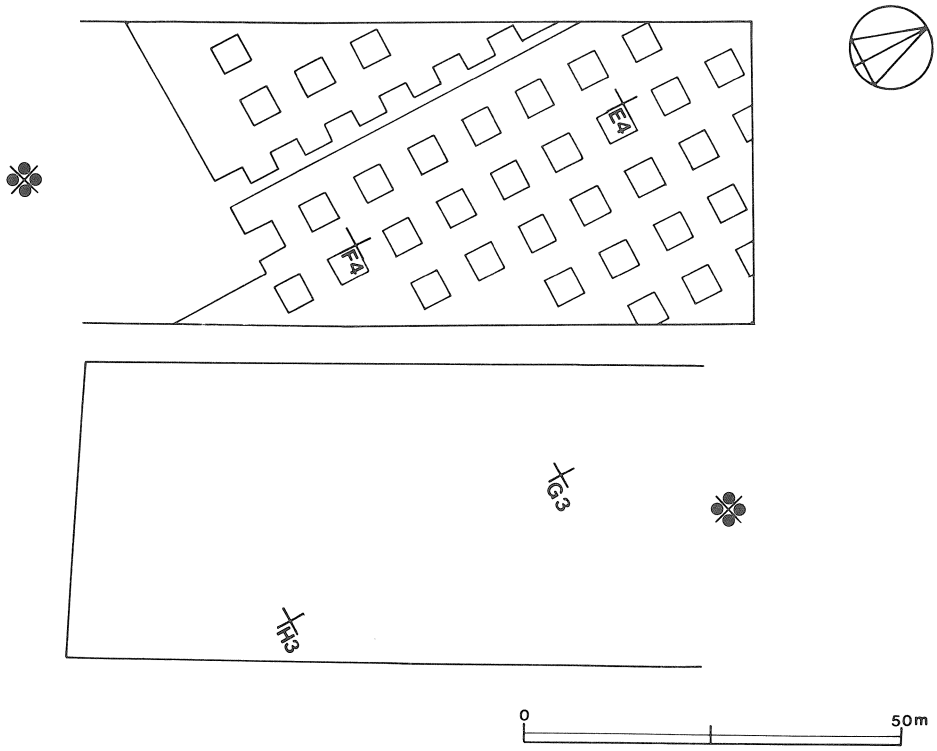
3月前半　F2区の遺構調査後，遺跡の全体清掃を行い，調査後の遺跡全景写真を撮影して，西

第20図　西坪A遺跡地形図

坪A遺跡の調査を完了した。

3　遺構と遺物

当遺跡から遺構は，土坑116基・溝6条が遺跡の南部に集中して検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片８点と陶磁器数点が出土したが，いずれも破片であり，遺構からはほとんど出土していない。



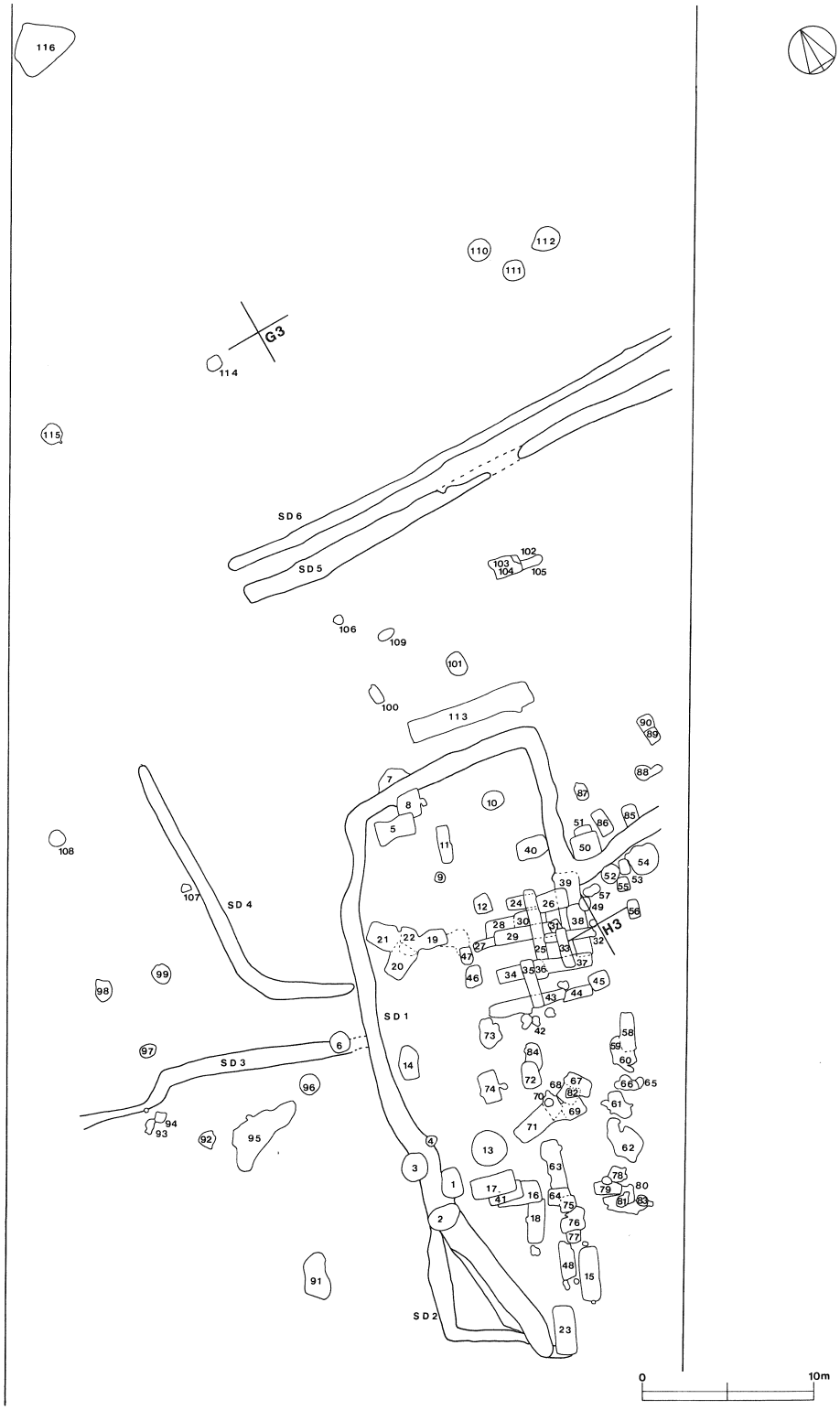
第21図　西坪Ａ遺跡全体図

(1)　土坑

遺跡の南部G2･G3･H2区に集中して116基検出された。以下一覧表にまとめた。

表２　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
1	H2c7	N－12°－E	隅丸長方形	1.81×1.23	15～20	外傾	平坦	SD1と重複
2	H2c6	N－77°－E	不楕整円形	1.82×1.30	——	〃	——	SD1と重複　井戸か



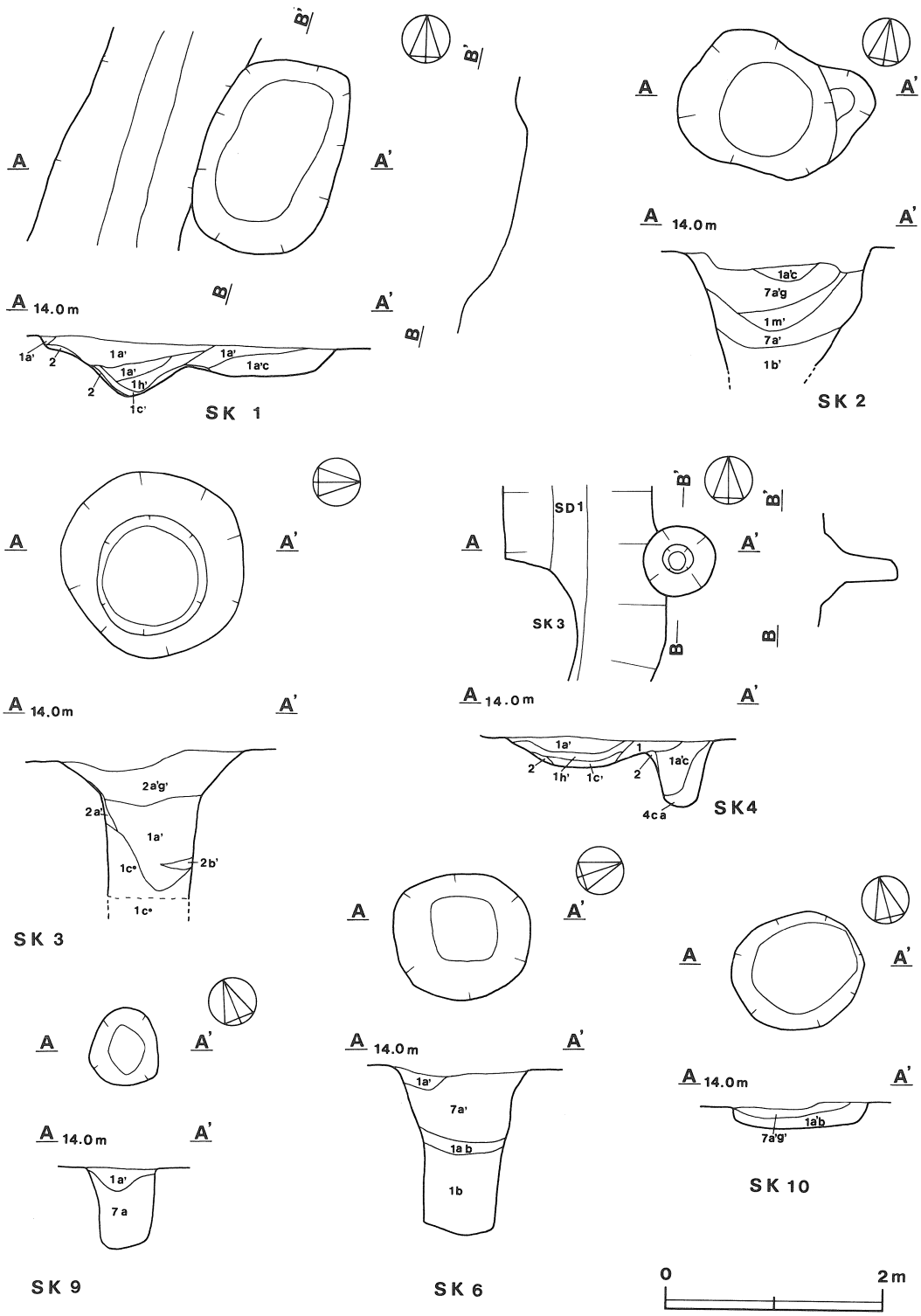
第22図　遺構配置図

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
3	H2b6	――――	円形	1.70×1.68	――	外傾	――	SD1と重複　井戸か
4	H2b7	――――	円形	0.65×0.65	70	〃	平坦	SD1と重複
5	G2h9	N- 80°-W	長方形	2.34×1.10	73	内傾	〃	SK8と重複
6	G2j6	――――	円形	1.25×1.17	150	外傾	〃	SD3と重複　井戸か
7	G2g9	N- 89°-E	不定形	――×――	34	〃	〃	SD1と重複
8	G2h9	N- 18°-E	長方形	――×1.25	35	〃	〃	SK5と重複
9	G2i9	――――	円形	0.72×0.63	67	〃	〃	
10	G2h0	――――	円形	1.19×1.10	20	〃	〃	
11	G2h9	N- 21°-E	長方形	2.19×0.75	10～21	〃	〃	
12	G2i9	N- 4°-E	隅丸長方形	1.18×0.96	10～18	〃	緩い起伏	
13	H2c8	――――	円形	2.00×1.99	――	〃	平坦	井戸か
14	H2a7	N- 30°-E	長方形	1.95×1.10	15～20	〃	緩い起伏	
15	H2e8	N- 28°-E	長方形	3.17×1.11	23	垂直	平坦	
16	H2c7	N- 69°-W	長方形	――×1.32	22	〃	〃	SK18・41と重複
17	H2c7	N- 75°-W	長方形	2.60×1.20	59	〃	〃	SK41と重複
18	H2d8	N- 29°-E	長方形	2.60×0.85	15	〃	〃	SK16と重複
19	G2i8	N-64.5°-W	長方形	2.65×0.94	87	内傾	〃	SK22と重複
20	G2j8	N-51.5°-E	長方形	――×1.25	75	〃	〃	SK21・22と重複
21	G2i8	N- 40°-W	長方形	――×1.34	65	〃	〃	SK20・22と重複
22	G2i8	N-51.5°-E	長方形	――×0.75	75	〃	〃	SK19・20・21と重複
23	H2e7	N-23.5°-E	長方形	3.00×1.30	34	外傾	〃	SD1と重複
24	G2j0	N- 72°-W	長方形	――×0.80	15	垂直	緩い起伏	SK25と重複
25	G2j0	N-18.5°-E	長方形	4.13×0.66	20	〃	平坦	SK24・29・30・32と重複
26	G2j0	N- 76°-W	長方形	1.82×1.03	25	外傾	〃	SK30・39と重複
27	G2j9	N- 80°-W	長方形	――×0.54	20	〃	〃	SK28・29と重複
28	G2j9	N- 74°-W	長方形	――×1.45	15	〃	〃	SK27・29・30と重複
29	G2j0	N-70.5°-W	長方形	――×0.78	27	〃	〃	SK25・31・32と重複
30	G2j0	N- 76°-W	長方形	1.77×――	23	〃	〃	SK25・26と重複
31	G2j0	N- 5°-W	長方形	――×0.58	32	〃	〃	SK29・32・33と重複
32	G2j0	N-68.5°-W	長方形	2.97×0.56	25	〃	〃	SK38と重複
33	H2a0	N- 13°-E	長方形	2.37×0.58	38	垂直	緩い起伏	SK31・32・37と重複

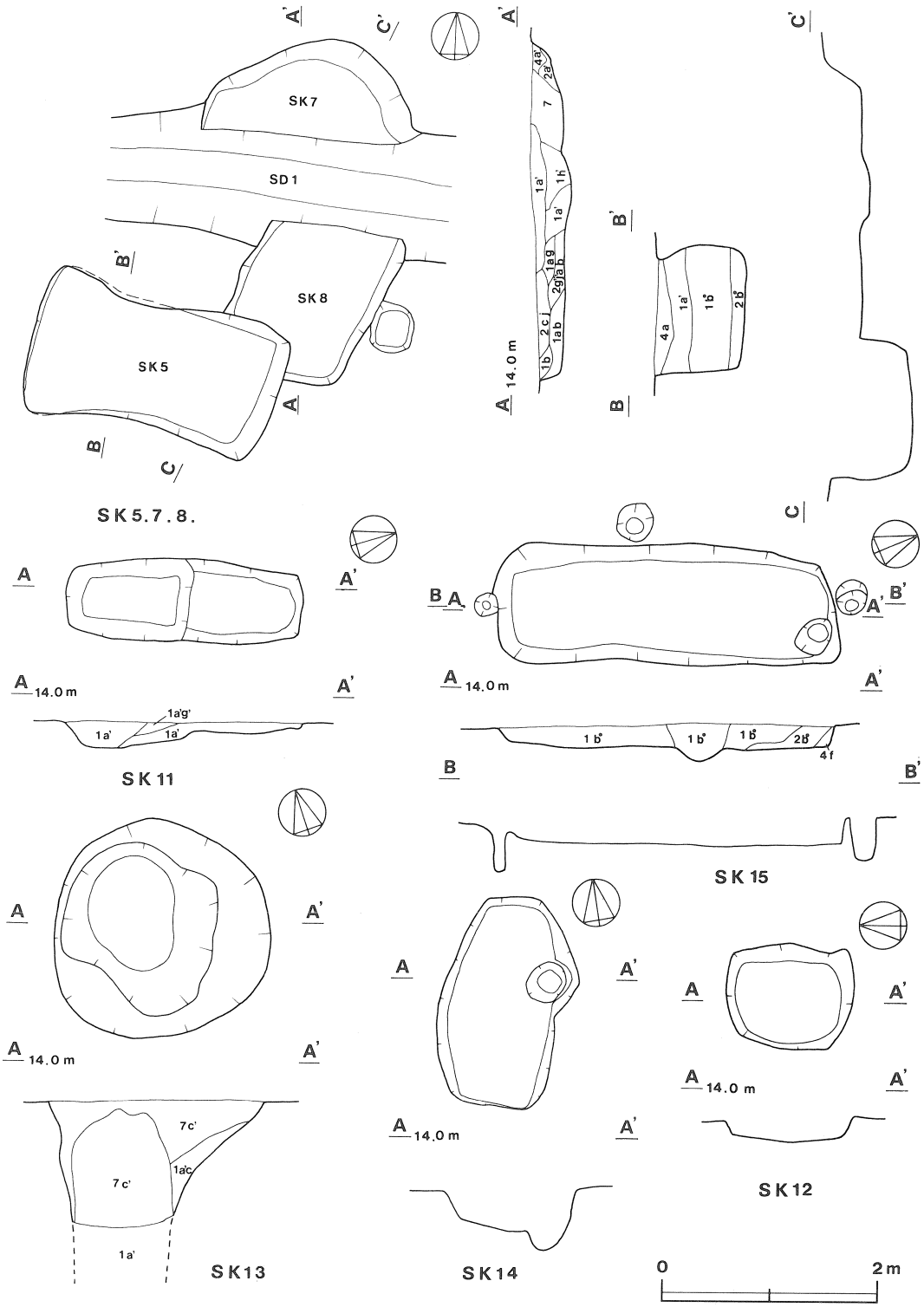
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
34	H2a9	N- 72°-W	長方形	——×0.90	17～25	外傾	平坦	SK35と重複
35	H2a9	N- 12°-E	長方形	2.94×0.60	45	垂直	〃	SK34・43と重複
36	H2a9	N- 11°-E	長方形	1.17×——	18	外傾	緩い起伏	SK37と重複
37	H2a0	N- 72°-W	長方形	——×0.89	17～25	〃	平坦	SK33・36と重複
38	G2j0	N- 17°-E	長方形	3.12×1.07	20	〃	〃	SK32・49・39と重複
39	G2j0	N- 19°-E	長方形	——×1.27	15	〃	〃	SK38・26と重複
40	G2i0	N- 81°-W	長方形	1.89×1.24	15	〃	緩い起伏	
41	H2e7	N- 79°-W	長方形	2.00×1.05	35	垂直	平坦	SK16・17と重複
42	H2a9	N-57.5°-W	不定形	1.03×0.56	63	〃	緩い起伏	
43	H2a9	N-72.5°-W	長方形	4.60×0.94	18	〃	平坦	SK35と重複
44	H2a0	N- 74°-W	長方形	1.70×0.67	27	〃	〃	
45	H2a0	N-86.5°-W	長方形	1.10×0.91	40	〃	〃	
46	G2j9	N- 34°-E	長方形	1.26×0.88	25～30	外傾	緩い起伏	
47	G2j9	N-16.5°-E	長方形	1.00×0.73	35	垂直	平坦	
48	H2e8	N-11.5°-E	不定形	2.22×0.88	10	外傾	〃	
49	G2j0	————	円形	0.86×0.71	28	垂直	〃	SK38と重複
50	G3i1	N-75.5°-W	長方形	1.73×1.35	21	外傾	〃	SK51と重複
51	G3i1	N- 80°-W	長方形	——×1.00	12	〃	〃	SK50と重複
52	G3j1	————	円形	1.15×1.08	19	〃	〃	
53	G3j1	N-14.5°-E	長方形	0.93×0.63	43	垂直	〃	
54	G3j2	————	不整円形	1.88×1.72	19	外傾	緩い起伏	
55	G3j1	N-14.5°-E	長方形	0.82×0.70	20	垂直	平坦	
56	H3a1	N- 18°-E	長方形	1.11×0.58	42	〃	〃	
57	G3j1	N-87.5°-W	楕円形	0.93×0.56	10	外傾	緩い起伏	
58	H2b0	N-20.5°-E	長方形	——×0.72	30	〃	平坦	SK59と重複
59	H2b0	N-8.5°-E	不定形	1.23×——	35	〃	緩い起伏	SK58と重複
60	H2b0	N-71.5°-E	不定形	0.91×0.86	28～39	〃	凹凸	
61	H2c9	N- 18°-W	不定形	1.74×0.87	25	〃	緩い起伏	
62	H2c9	N-7.5°-W	不定形	3.88×1.67	32	〃	凹凸	
63	H2c8	N- 17°-E	長方形	——×1.05	30	〃	緩い起伏	SK64と重複
64	H2d8	N- 72°-W	長方形	1.27×1.11	31	〃	平坦	SK63・75と重複

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
65	H2c0	N- 67°-E	不定形	0.85×0.55	38	垂直	凹凸	SK66と重複
66	H2c0	N- 57°-W	不定形	0.75×0.43	15～50	〃	〃	SK65と重複
67	H2b9	N- 31°-W	長方形	1.62×——	31	〃	緩い起伏	SK68・82と重複
68	H2b9	N- 25°-W	長方形	——×——	26	外傾	〃	SK68・69・82と重複
69	H2c9	N- 90°	長方形	(1.26) × (1.03)	32	垂直	平坦	SK68・70と重複
70	H2b9	N- 5°-E	長方形	——×0.76	22	外傾	凹凸	SK69・71と重複
71	H2c8	N-78.5°-E	長方形	3.18×1.16	18～32	〃	平坦	SK70と重複
72	H2b9	N- 24°-E	楕円形	1.52×0.98	16	〃	緩い起伏	SK84と重複
73	H2a8	N- 2°-E	不定形	1.62×1.22	4	〃	凹凸	
74	H2b8	N-11.5°-E	長方形	1.87×1.07	44	〃	緩い起伏	
75	H2d8	N-18.5°-E	不定形	——×0.89	34	〃	平坦	SK64と重複
76	H2d8	N-72.5°-W	長方形	1.37×0.68	15	〃	〃	SK77と重複
77	H2d8	N-72.5°-W	長方形	——×0.80	10	〃	緩い起伏	SK76と重複
78	H2d9	N- 48°-W	長方形	0.95×0.89	27	垂直	〃	SK79と重複
79	H2d9	N- 56°-W	長方形	1.61×0.74	29	外傾	平坦	SK78・80と重複
80	H2d9	N- 69°-W	長方形	1.01×0.76	28	〃	緩い起伏	SK79・81と重複
81	H2d9	————	不整円形	0.69×0.68	45	〃	〃	
82	H2b9	N- 64°-W	楕円形	0.89×0.59	36	垂直	平坦	SK67・68と重複
83	H2d9	————	不整円形	0.86×0.66	47	外傾	凹凸	
84	H2b9	N- 35°-E	楕円形	1.58×0.97	7	〃	緩い起伏	SK72と重複
85	G3i2	N- 95°-E	長方形	——×0.90	11	〃	平坦	SD1と重複
86	G3i1	N- 1°-W	長方形	1.55×0.80	9	〃	〃	
87	G3i1	N-2.5°-E	長方形	1.12×0.72	41	垂直	〃	
88	G3i2	N- 74°-W	不定形	1.58×0.86	16	外傾	〃	
89	G3i3	N- 1°-E	長方形	0.91×0.79	22	〃	緩い起伏	SK90と重複
90	G3h3	N- 2°-W	不定形	——×0.97	19	〃	〃	SK89と重複
91	H2c4	N-37.5°-E	不定形	2.62×1.44	63	〃	凹凸	
92	G2j3	N- 0°	不定形	1.05×0.91	14	〃	平坦	
93	G2j3	N- 49°-E	不定形	0.86×0.54	8	〃	緩い起伏	SK94と重複　焼土あり
94	G2j4	N- 52°-E	不定形	0.64×0.61	9～15	〃	〃	SK93と重複　焼土あり
95	H2a5	N- 72°-E	不定形	4.81×1.79	105	〃	〃	

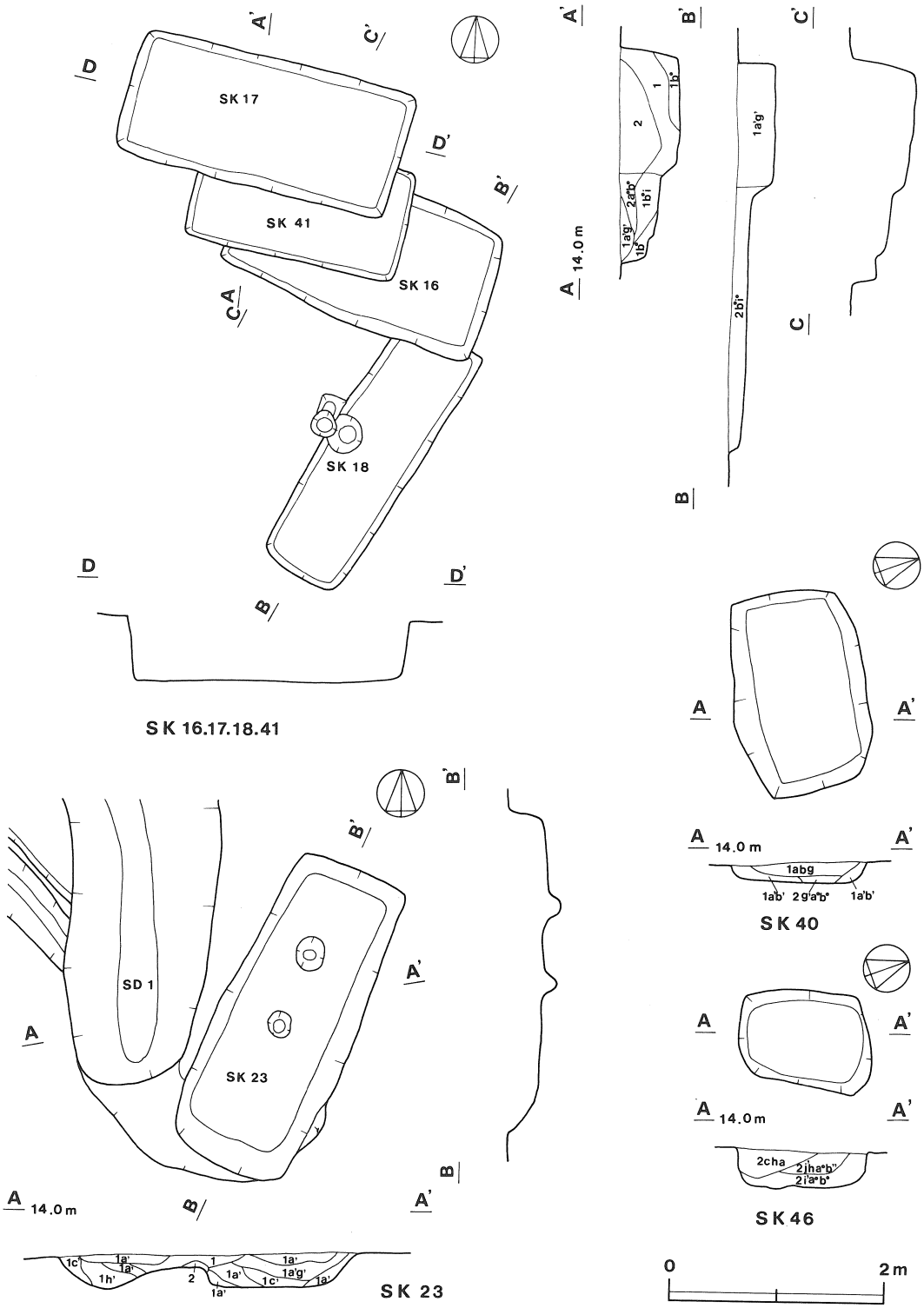
土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
96	G2j6	――――	円形	1.16×1.11	12	外傾	平坦	
97	G2i4	――――	円形	0.92×0.85	23	〃	〃	
98	G2h4	N- 0°	不定形	1.26×1.02	21	垂直	平坦	
99	G2h5	――――	不整円形	1.16×1.07	14	外傾	〃	
100	G2f9	N- 1°-W	楕円形	1.10×0.63	16	垂直	緩い起伏	
101	G3f1	N- 0°	楕円形	1.37×1.04	47	外傾	〃	
102	G3e2	N-69.5°-W	長方形	――×――	10	〃	平坦	
103	G3e2	N- 78°-W	楕円形	1.30×――	25	〃	〃	SK104と重複
104	G3e2	N- 80°-W	長方形	1.57×――	30	〃	〃	SK103と重複
105	G3e2	N- 82°-W	不定形	――×0.60	10	〃	〃	
106	G2e9	――――	円形	0.64×0.62	40	垂直	〃	
107	G2g6	――――	不整円形	0.56×0.51	11	外傾	緩い起伏	
108	G2e4	――――	円形	0.97×0.95	12	〃	〃	
109	G2e0	N- 78°-W	楕円形	0.92×0.63	13	〃	〃	
110	G3a4	――――	円形	1.33×1.25	23	〃	平坦	
111	G3b4	――――	円形	1.28×1.25	25	〃	〃	
112	G3a5	――――	円形	1.67×1.33	39	〃	〃	
113	G2g0	N-80.5°-W	長方形	7.39×1.38	20～34	垂直	〃	
114	G2a0	――――	円形	1.00×0.90	114～116	〃	〃	
115	F2j7	――――	円形	1.20×1.18	11	外傾	〃	
116	F2e0	N- 81°-W	不定形	3.61×2.61	142	〃	緩い起伏	


A
A'
B
B'
A 14.0m
1a'
2
1a'
1a'
1a'
1h'
1c'
1a'c
SK 1
1a'c
7a'g
1m'
7a'
1b'
SK 2
SD1
SK3
2a'g'
2a'
1a'
1c*
2b'
SK 3
1a'
1
2
1h'
1c'
1a'c
4ca
SK4
1a'
7a
SK 9
1a'
7a'
1ab
1b
SK 6
1a'b
7a'g'
SK 10
0
2m

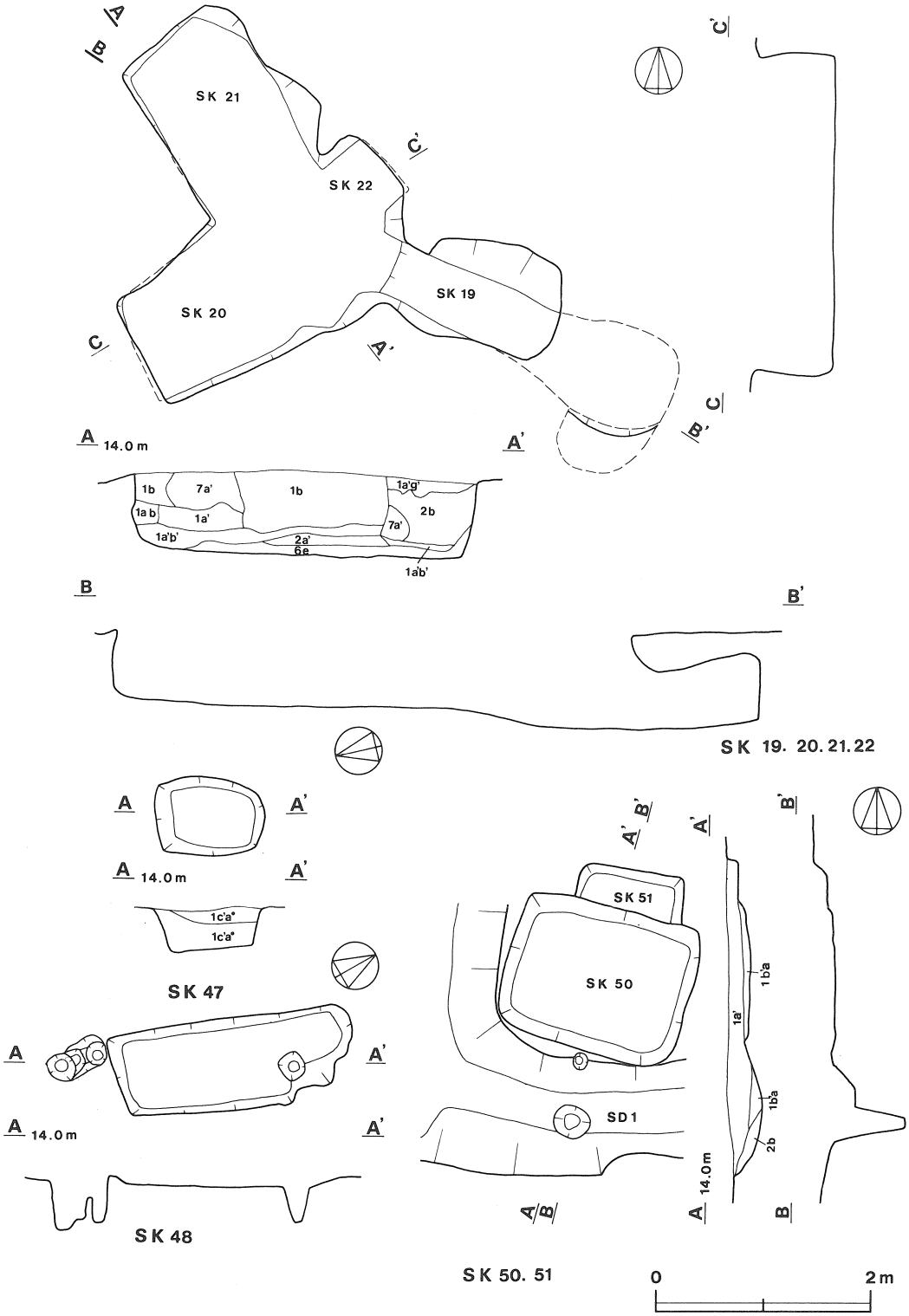
第23図　土坑実測図（1）


SK7
SD1
SK8
SK5
SK5.7.8.
A
A'
B
B'
C
C'
14.0 m
SK11
SK15
SK13
SK14
SK12
0
2m

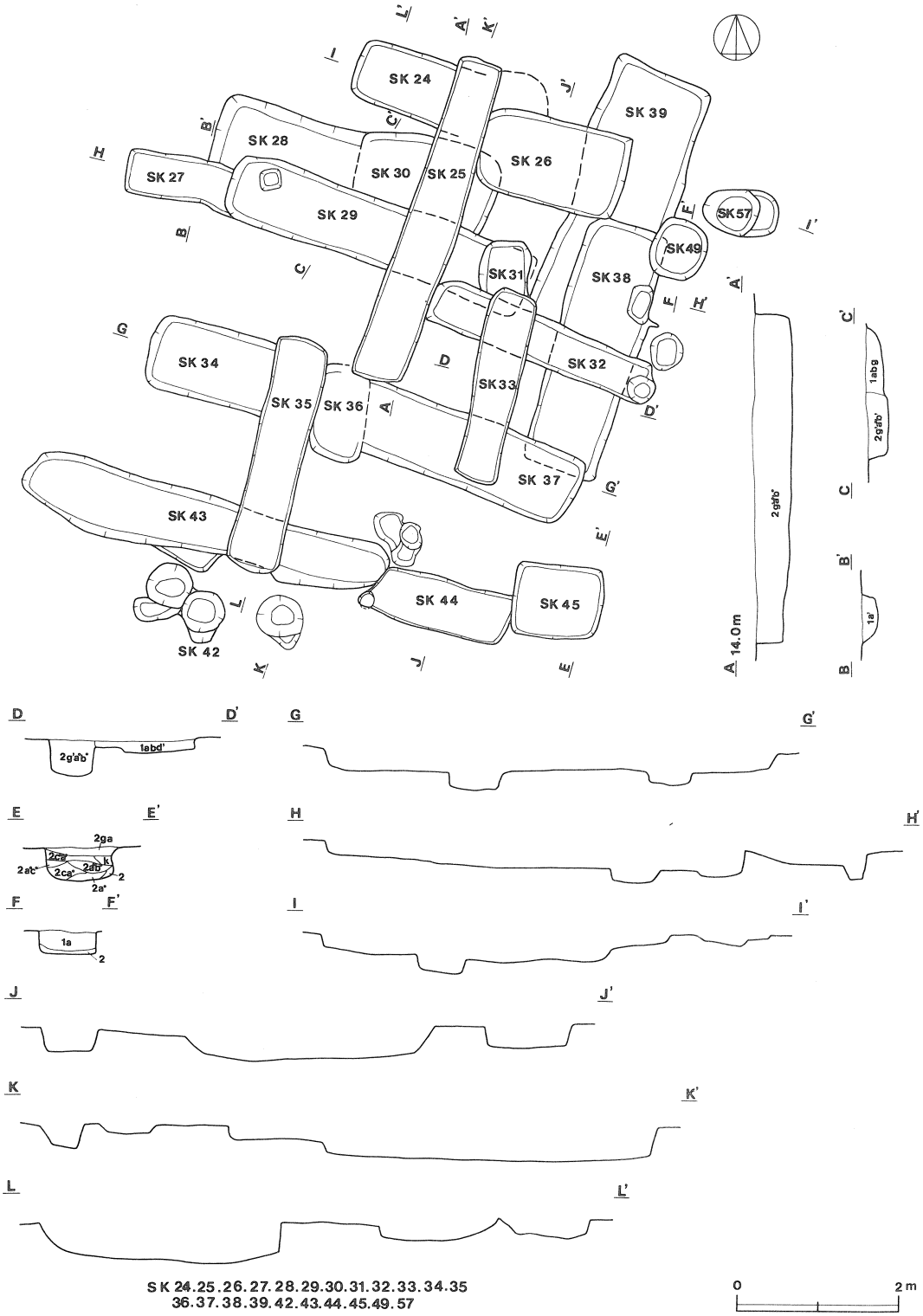
第24図　土坑実測図（2）


SK 17
SK 41
SK 16
SK 18
SK 16.17.18.41
SD 1
SK 23
SK 23
SK 40
SK 46
14.0 m
0
2m

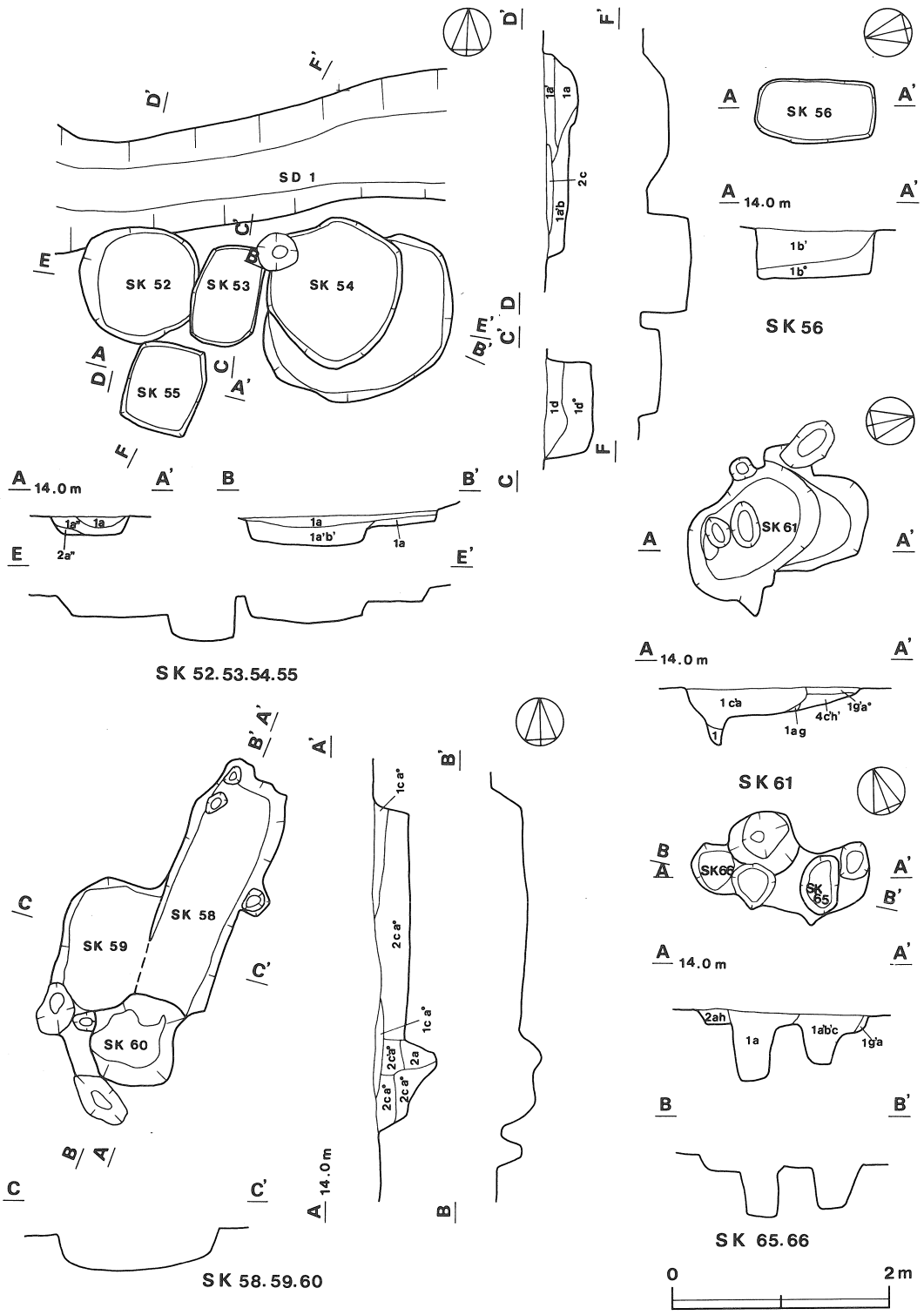
第25図　土坑実測図 (3)


SK 21
SK 22
SK 20
SK 19
A 14.0 m
A'
B
B'
1b
7a'
1b
1a'g'
1a b
1a'
2b
7a'
1a'b'
2a'
6e
1ab'
SK 19. 20. 21. 22
A
A'
A 14.0 m
1c'a*
1c'a*
SK 47
SK 51
SK 50
SD1
1b'a
1a'
1ba
2b
SK 48
SK 50. 51
0
2m

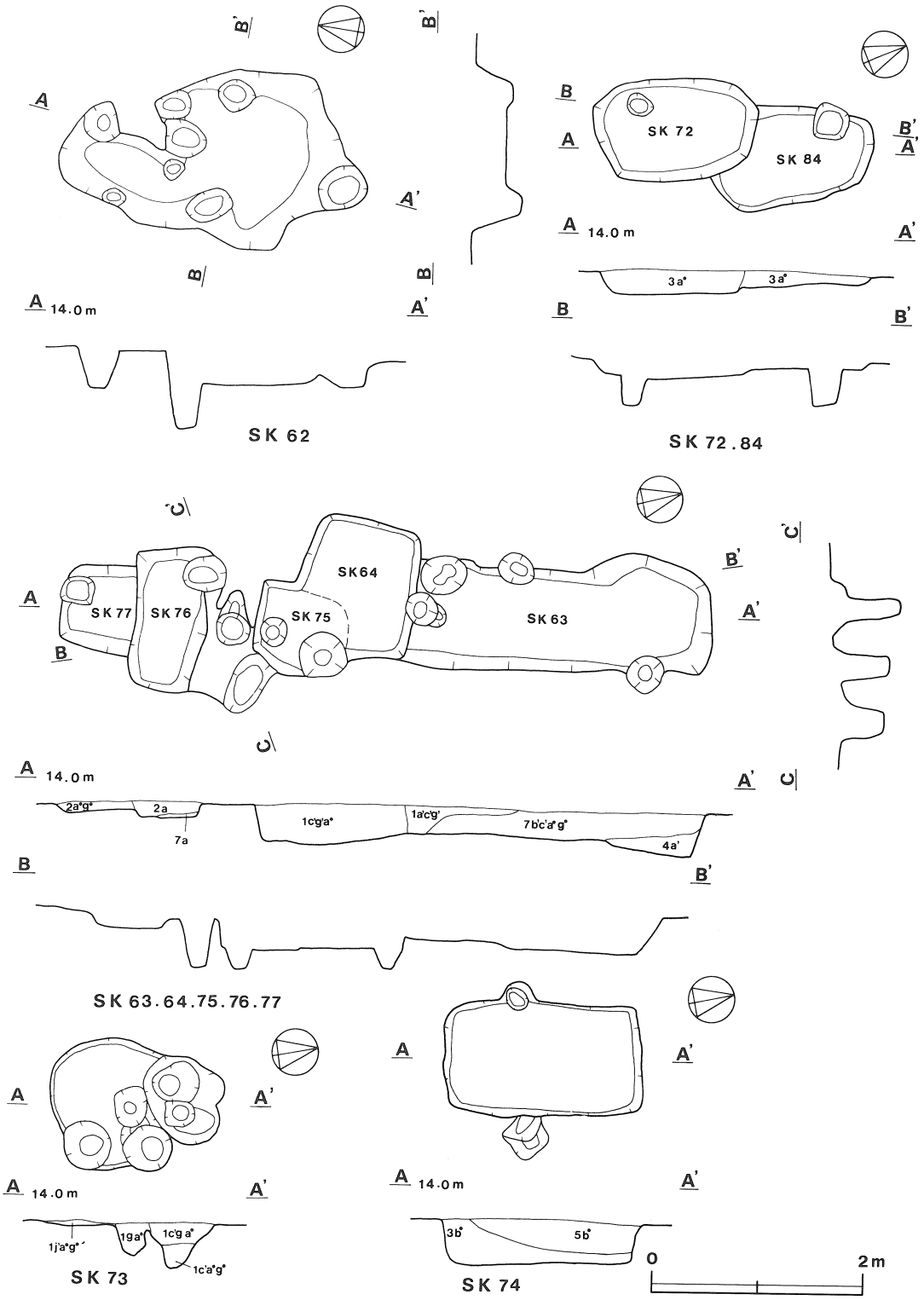
第26図　土坑実測図 (4)


SK 24
SK 25
SK 26
SK 27
SK 28
SK 29
SK 30
SK 31
SK 32
SK 33
SK 34
SK 35
SK 36
SK 37
SK 38
SK 39
SK 42
SK 43
SK 44
SK 45
SK 49
SK 57
A 14.0m
2ga'b'
1abg
2g'a'b'
1a'
1abd'
2ga
2a'b'
2a'c'
2ca'
2ab'
2a'
1a
SK 24.25.26.27.28.29.30.31.32.33.34.35
36.37.38.39.42.43.44.45.49.57
0
2m

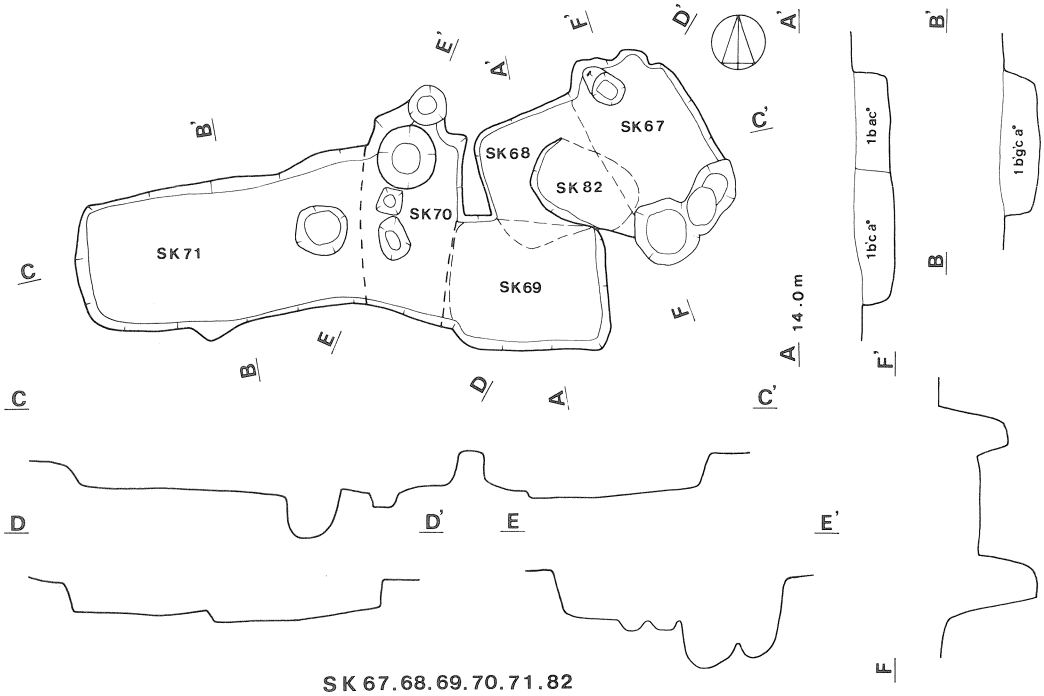
第27図　土坑実測図 (5)

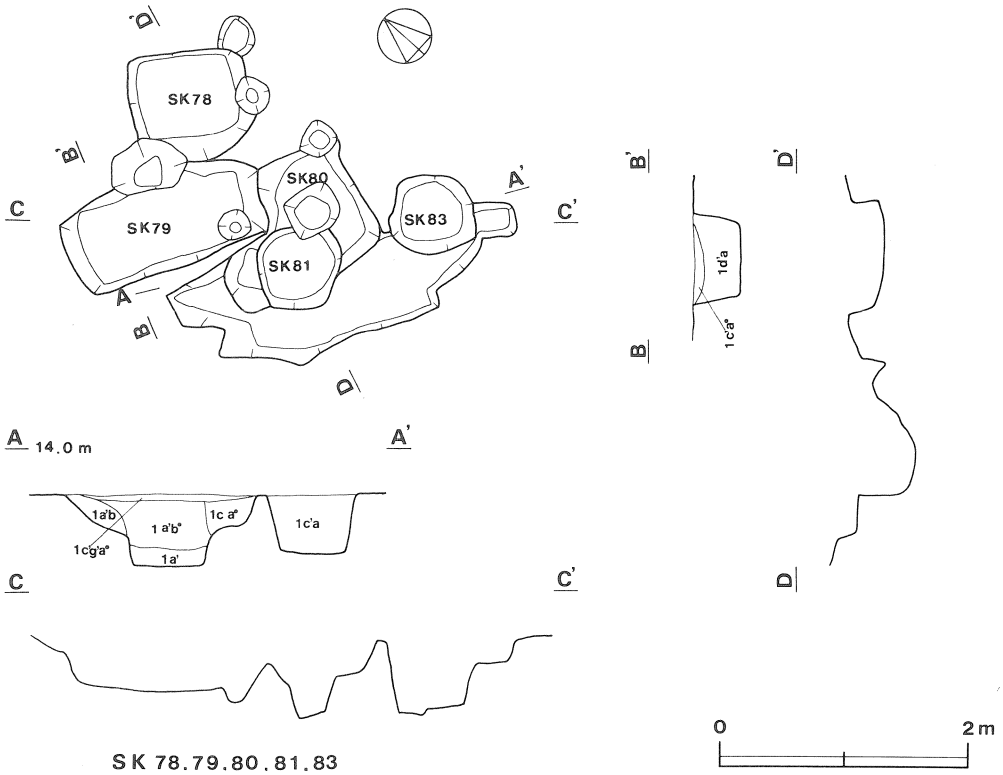

SD 1
SK 52
SK 53
SK 54
SK 55
SK 56
SK 61
SK 58
SK 59
SK 60
SK 65
SK 66
14.0 m
SK 52.53.54.55
SK 56
SK 61
SK 58.59.60
SK 65.66
0
2m

第28図　土坑実測図 (6)

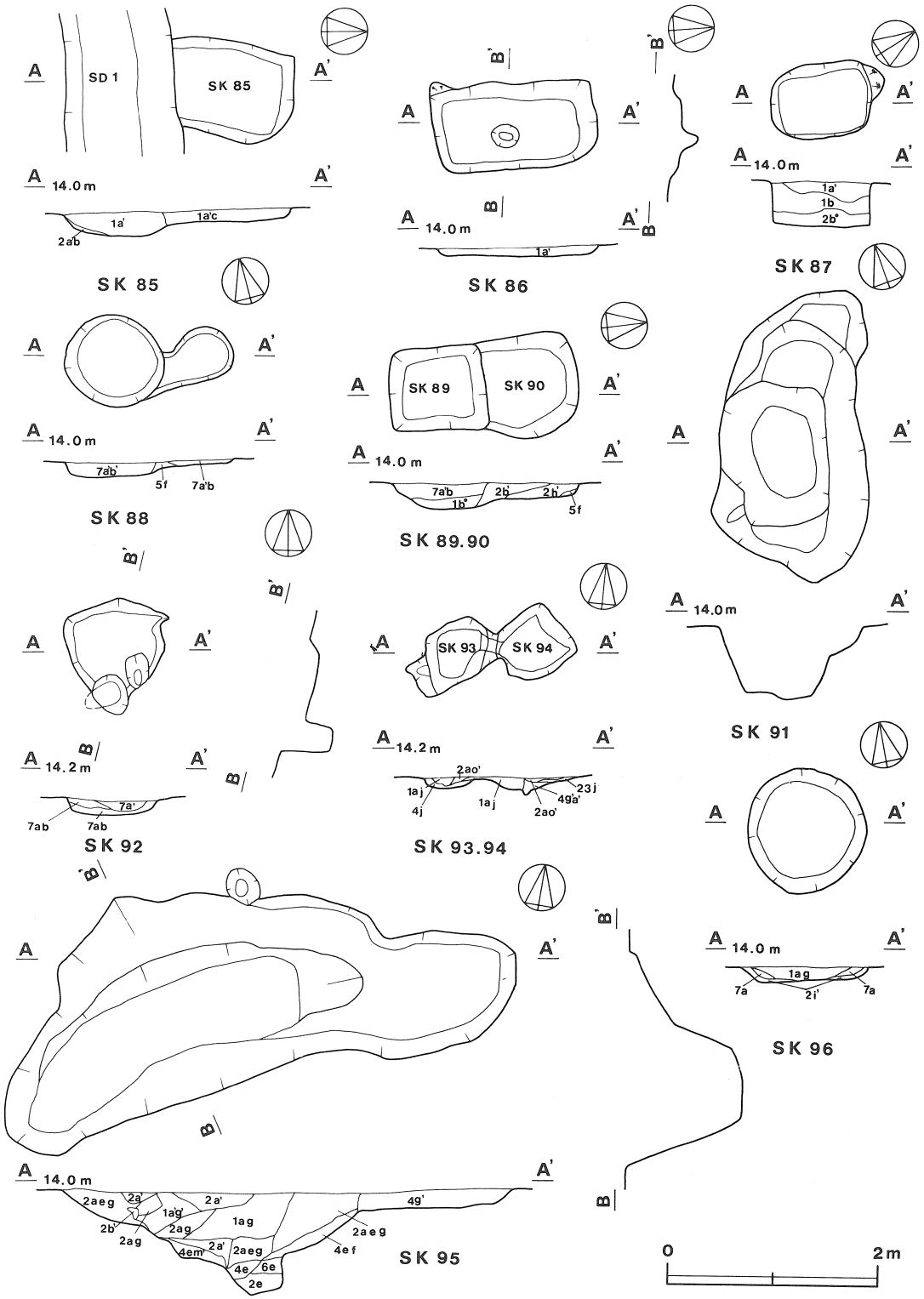

SK 62
SK 72
SK 84
SK 72.84
SK64
SK 77
SK 76
SK 75
SK 63
SK 63.64.75.76.77
SK 73
SK 74
A 14.0 m
0
2m

第29図　土坑実測図（7）

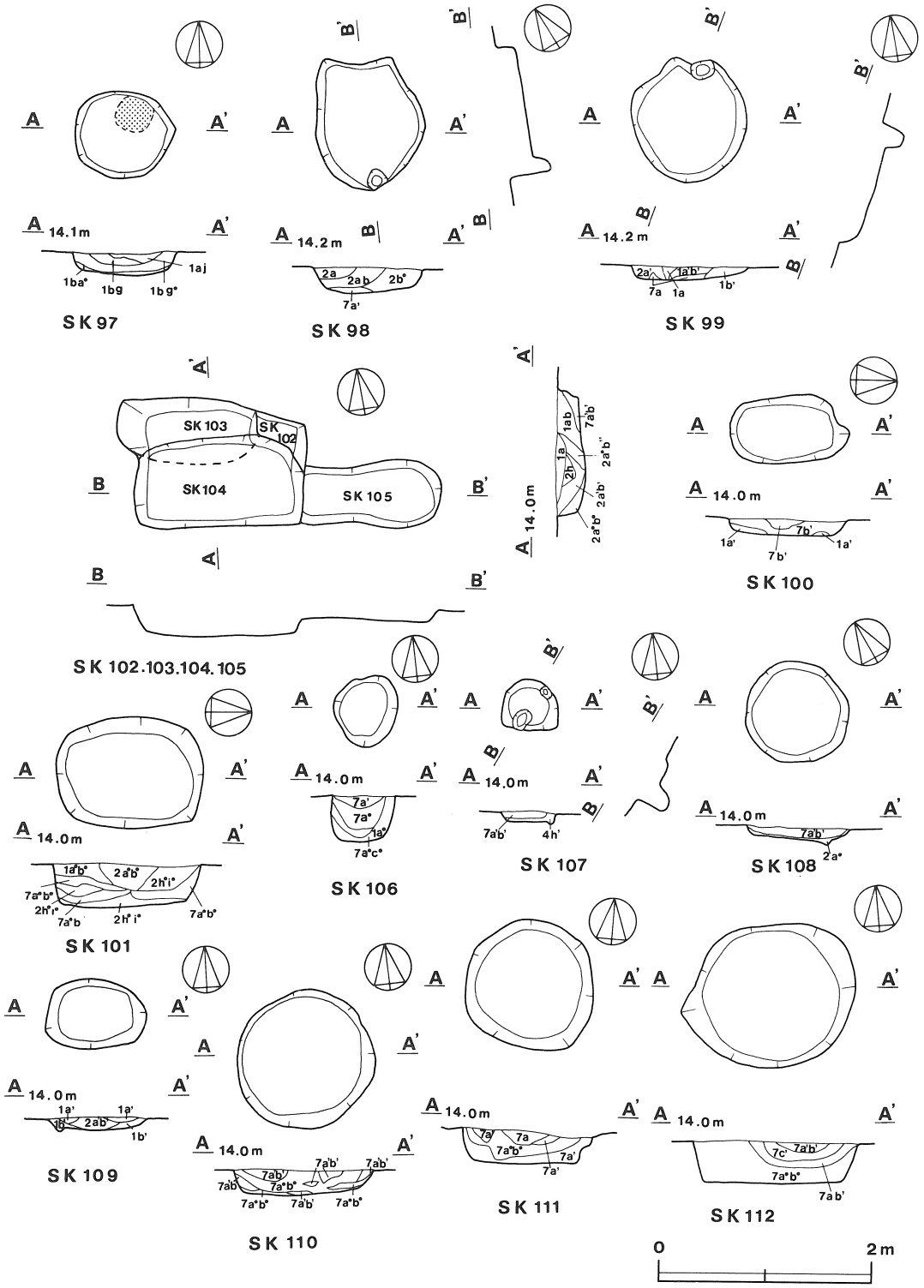

SK67
SK68
SK82
SK70
SK71
SK69
A 14.0m
1bac"
1bc'a"
1b'gc'a"
SK 67.68.69.70.71.82


SK78
SK80
SK79
SK83
SK81
A 14.0m
1d'a
1c'a"
1a'b
1a'b"
1c a"
1c'a
1c'g'a"
1a'
0
2m
SK 78.79.80.81.83

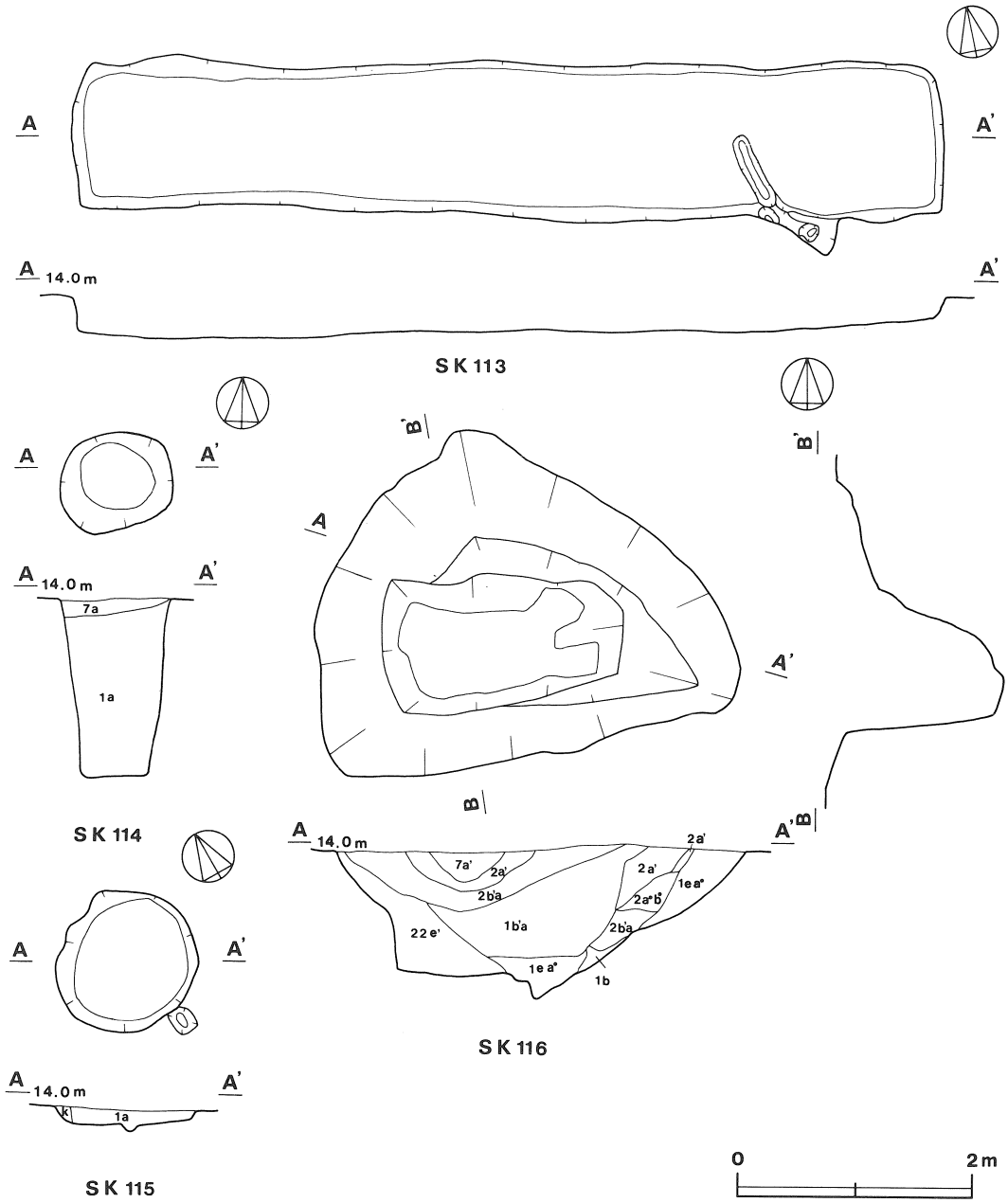
第30図　土坑実測図 (8)


SD 1
SK 85
A
A'
14.0 m
1a'
1a'c
2a'b
SK 85
SK 86
1a'
SK 87
1a'
1b
2b'
SK 88
7a'b'
5f
7a'b
SK 89
SK 90
SK 89.90
7a'b
2b'
2h'
1b'
5f
SK 91
SK 92
14.2 m
7a'
7ab
SK 93
SK 94
SK 93.94
2ao'
1aj
4j
23j
49a'
SK 96
1ag
7a
2i'
SK 95
2aeg
2a'
1a'g
2b'
2ag
1ag
4em'
4e
6e
2e
4ef
4g'
0
2m

第31図　土坑実測図（9）



第32図　土坑実測図 (10)



第33図　土坑実測図 (11)

(2) 溝

第1号溝（第34図）

本跡は遺跡の南部G2・G3・H2区から検出された。

土坑群を囲むように屈曲し，検出された長さは約60m である。遺跡の南端の$H2f_7$からほぼ北へ約15m 向かい，緩やかにカーブして北北東へ約18m，$G2g_8$から東へと向きを変え約11m，さらに$H3h_1$で南南西へ向きを変え約９m，$G2j_0$で再び東へ向きを変え約７m，そして東へ向きながら調査区域外へと延びている。断面は「U」形を呈しており，上幅は70～130cm，下幅は30～40cmである。遺構確認面から底面までの深さは30～50cmで，底面のレベル差はほとんどない。覆土は黒褐色土が主で，自然堆積の状況を呈している。

遺物の出土はなかった。

第2号溝（第34図）

本跡はH2区に第１号溝と重複して検出され，全長は約12m である。

$H2e_7$からN―60°―Wを指し，西北西へ約５m，$H2e_6$からN―23°―Eを指して北北東へ約７m 延びて第１号溝と重複するが，第１号溝の東側へは延びていない。断面は「U」形を呈しており，上幅は50～80cm，下幅は約30cmである。遺構確認面から底面までの深さは35～40cmで，底面のレベル差はほとんどない。壁面や底面は凹凸が多く見られる。覆土は自然堆積の状況を呈しているが，軟らかく締まりがない。

遺物の出土はなかった。

第3号溝（第35図）

本跡はG2区に検出され，第１号溝の西側５m に位置している。

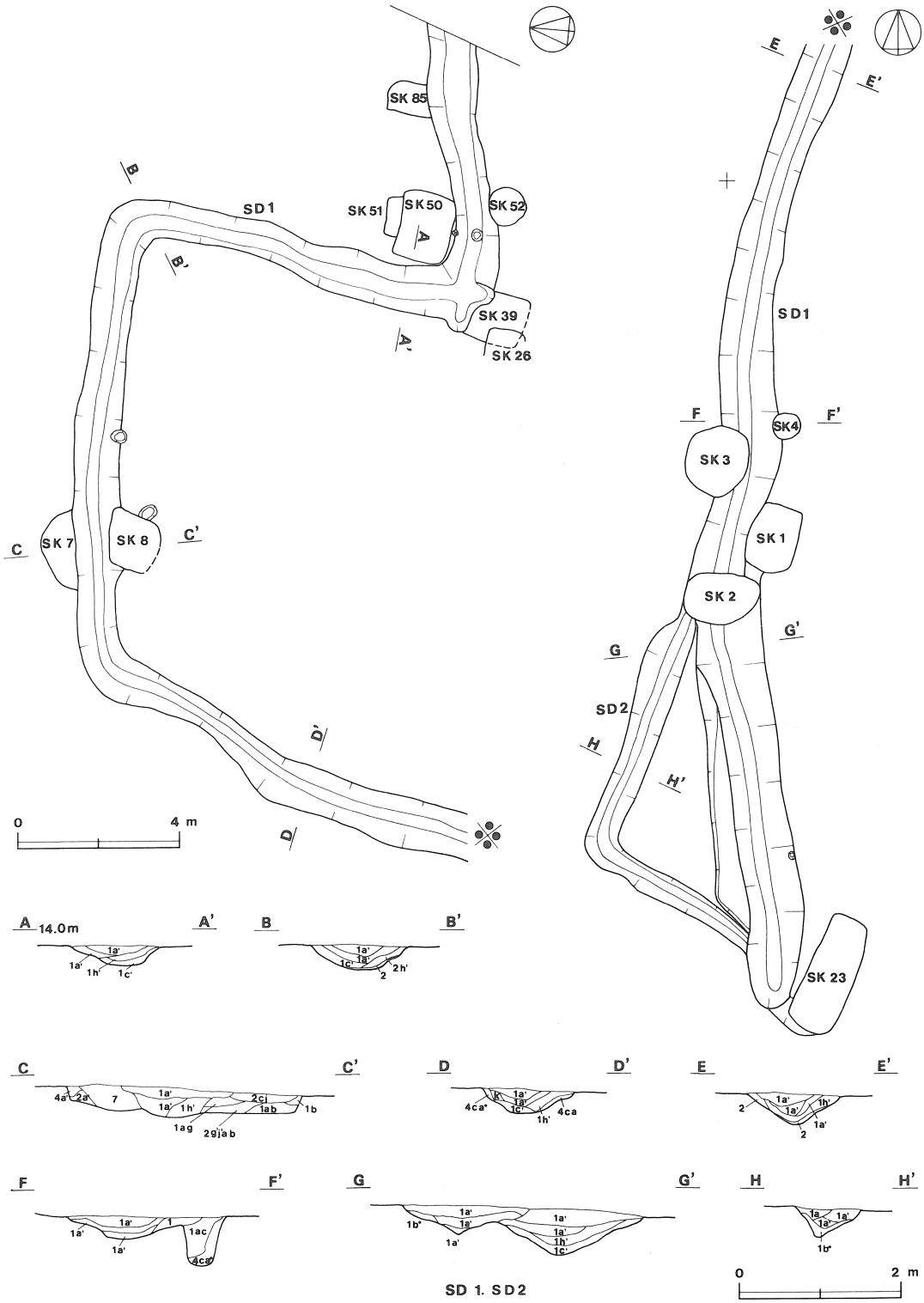
検出された長さは約15m で，クランク状に屈曲している。溝の東端は$G2i_7$に検出され，そこからN―68°―Wを指し，西北西へ約10m 延びている。$G2i_4$で南西に向きを変え約１m，$G2j_4$で再び西北西へ約４m 延びて調査区域外へと向かっている。断面形は「◡」形をしており，上幅は50～100cm,下幅は約20cmである。遺構確認面から底面までの深さは約20cmと浅く，底面のレベル差はほとんどない。覆土は黒褐色土が主で，自然堆積である。

遺物の出土はなかった。

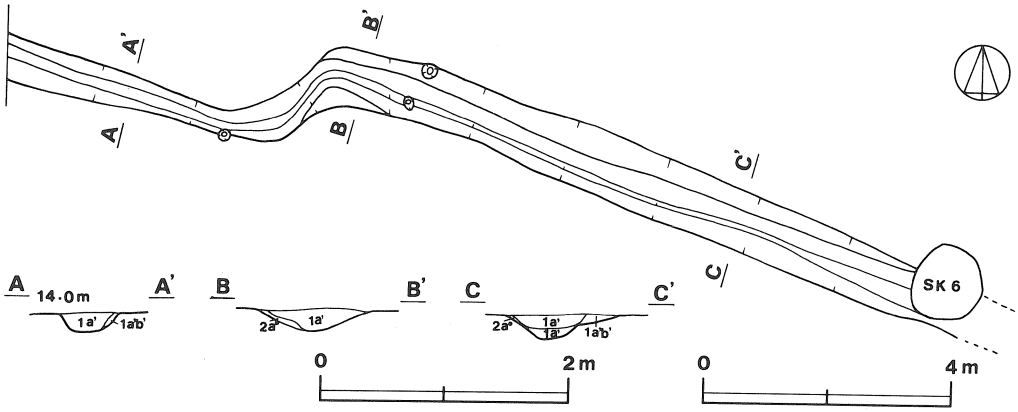
第4号溝（第36図）

本跡はG2区に検出され，第３号溝の北側４m に位置している。

全長は約20m で，「し」字状にカーブしている。溝の南東端は$G2j_7$に検出され，そこから北西



第34図　第１・２号溝実測図



第35図　第３号溝実測図

へ約５ｍ向かい，G2i6で緩やかにカーブして北へ約５ｍ延び，G2e6で途切れる。断面は「⌴」形を呈しており，底面は平坦である。上幅は60～100cm，下幅は30～40cmであり，遺構確認面から底面までの深さは15～40cmである。覆土はローム粒子を多量に含む黒褐色土が主で，やや締まりがあり，自然堆積である。

遺物の出土はなかった。

第５号溝（第37図）

本跡はG2・G3区に検出され，第６号溝の南側１ｍに並行している。

溝の西端はG2d9で検出され，そこからほぼ東へ直線的に延びており，調査区域外まで続いている。検出された長さは約28ｍで，中間は浅く，長さ２ｍほどプランが不明瞭である。上幅は90～140cm，下幅は50～80cmであり，遺構確認面から底面までの深さは平均20cmである。断面は中間から西側は「〰」形，東側は「◡」形を呈しており，中間からやや西寄りに，径70cm，深さ50cmのピットが１か所掘り込まれている。覆土は自然堆積である。

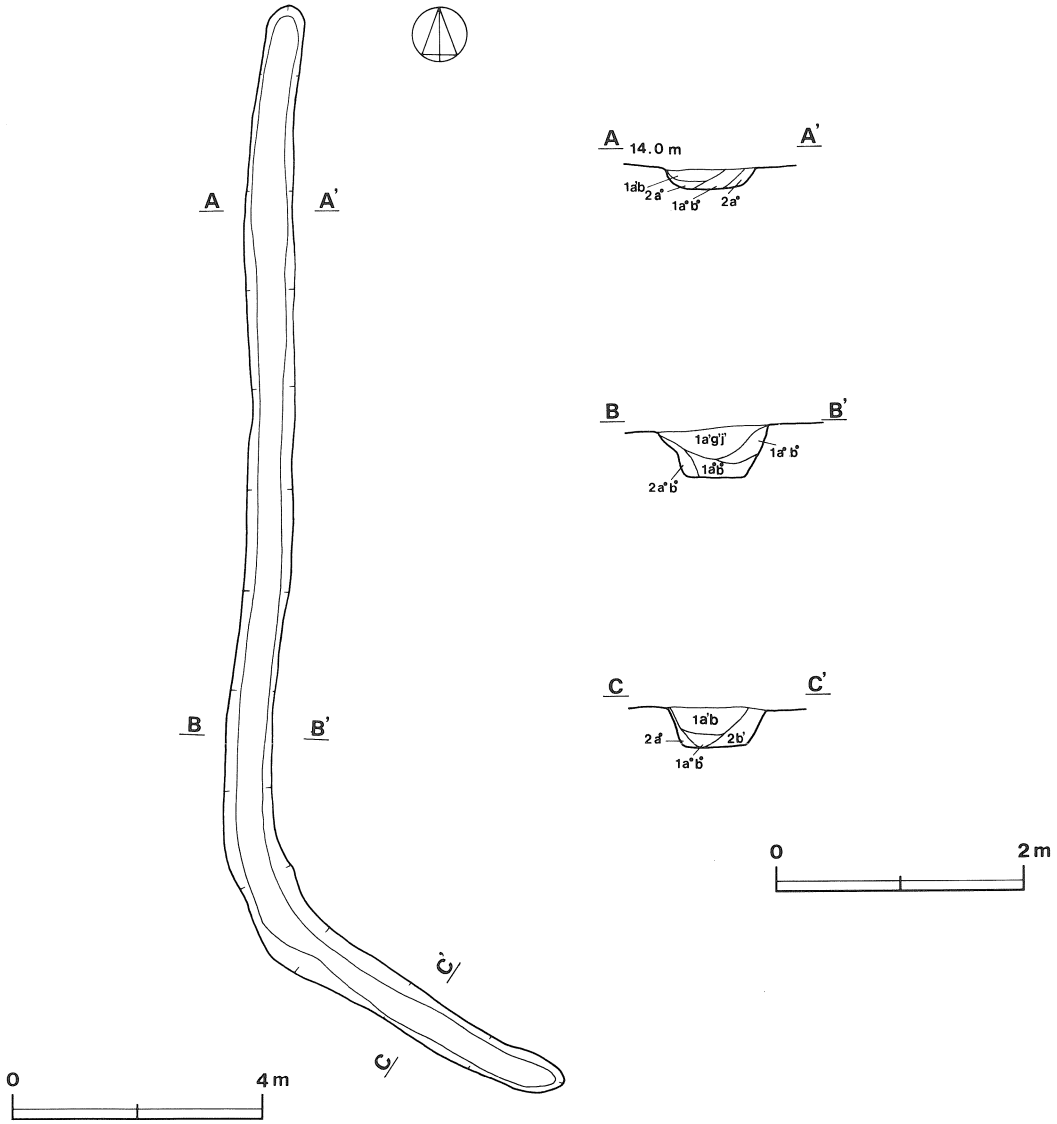
遺物の出土はなかった。

第６号溝（第37図）

本跡はG2・G3区に検出され，第５号溝の北側１ｍに並行している。

G2c9から第５号溝と同じように，東を向いて直線的に調査区域外まで延びている。検出された長さは約29ｍあり，断面は「⌴」形を呈している。上幅は60～100cm，下幅は約20cmであり，遺構確認面から底面までの深さは約30cmである。底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積である。

遺物の出土はなかった。



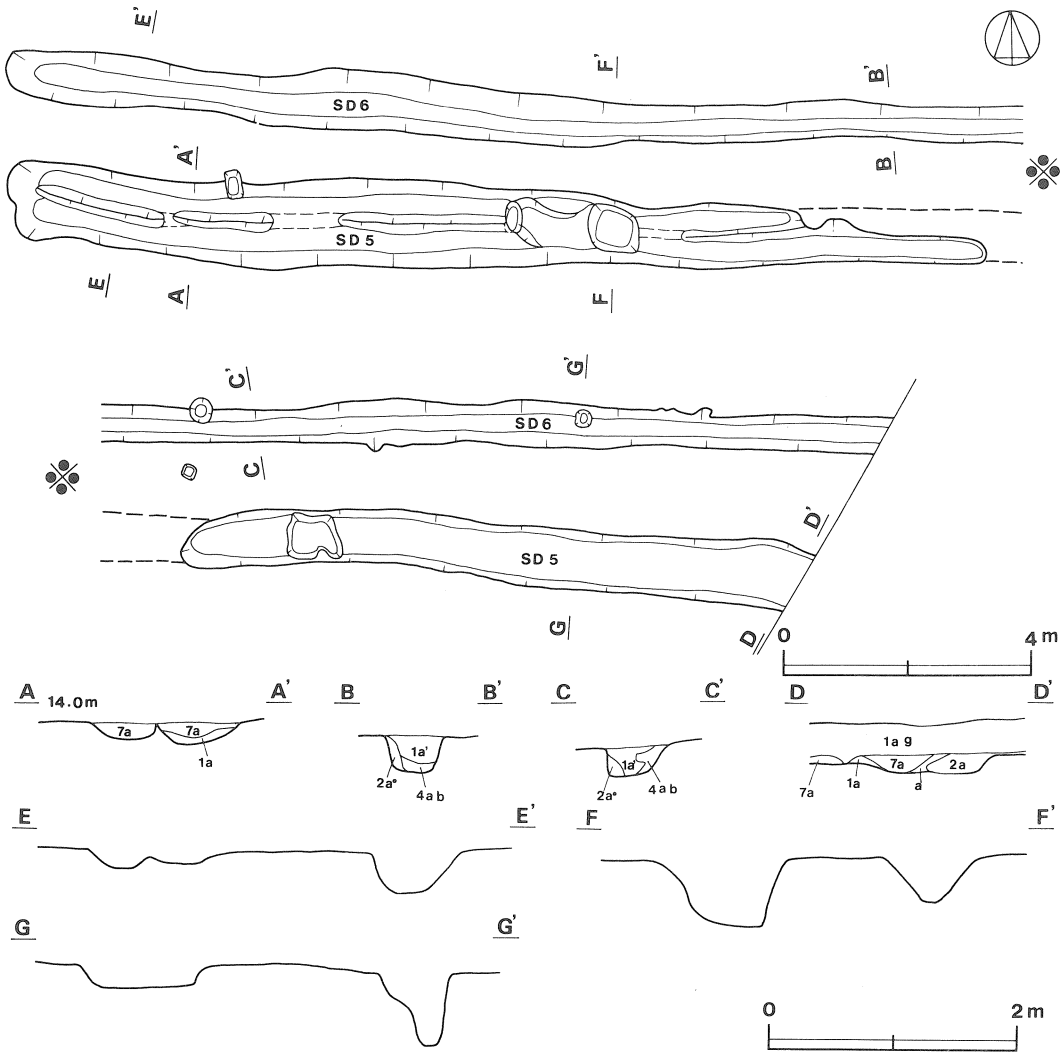
第36図　第４号溝実測図

(3)　遺物

遺構から出土したものはほとんどなく，グリッドからも縄文式土器片８点と陶磁器片数点が出土しただけである。

縄文式土器（第38図－１～８）

１は胴部片で，黒浜式のものと思われる。繊維痕が多く文様ははっきりしない。色調は黒褐色を呈しており，胎土は繊維のほかに砂粒を含んでいる。焼成は普通である。２～８はいずれも胴部片で，斜行する条線文が施されている。安行Ⅰ式に比定されるもので，同一体の破片かと思わ

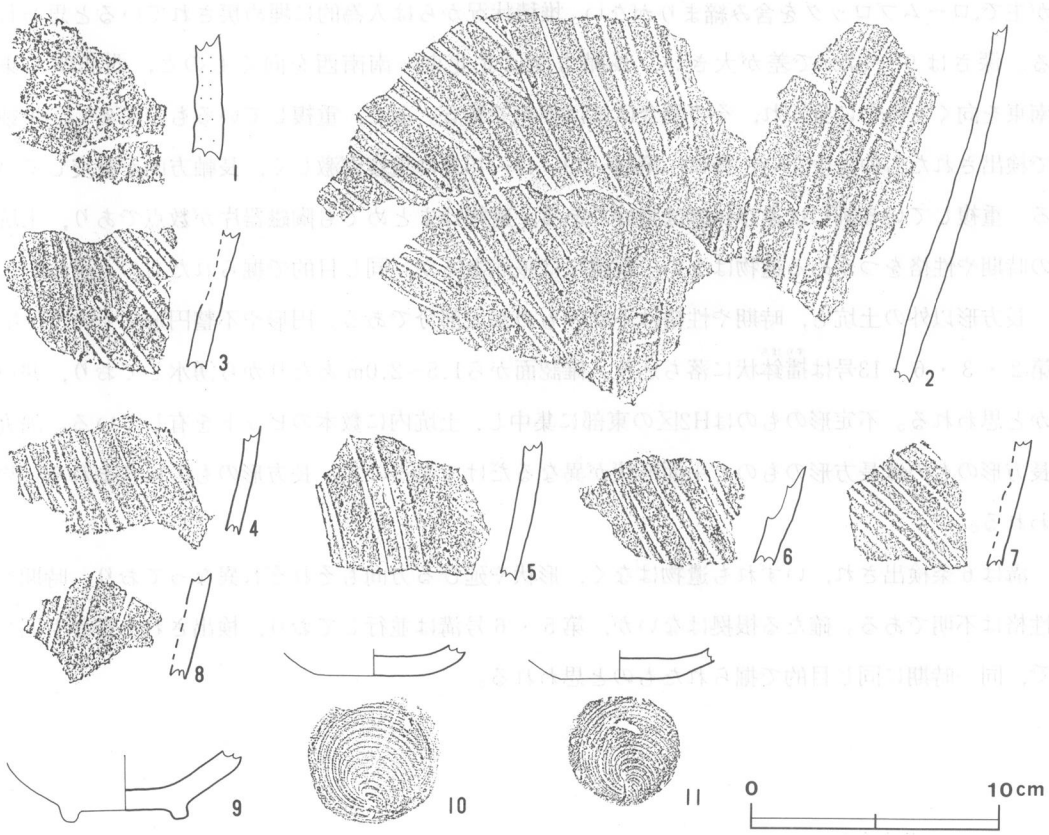


第37図　第５・６号溝実測図

れる。色調は褐色を呈しており，胎土は砂粒を含んでいる。焼成は良くなく，内面は剝落している。

陶磁器（第38図－９～11）

いずれも破片で，器形の判断できるものはない。時期については近世～明治のものと思われる。９～11は底部片である。９は貼高台の埦かと思われる。胎土は灰褐色で，暗緑灰色の釉が施されている。10・11は回転糸切りである。10は淡黄緑色の釉が施され，胎土は灰白色で緻密である。瀬戸産かと思われる。11は暗褐色の釉が一部に付着している。胎土は灰白色で砂粒を含んでいる。そのほかには染付，常滑，三島手（みしまて）などの破片が出土している。



第38図　グリッド出土土器拓影図

4　まとめ

当遺跡では，南部のG2・G3・H2区を中心に土坑116基・溝6条が集中して検出され，ほかの調査区からは検出されなかった。遺物はグリッドからわずかに縄文式土器片と陶磁器片が出土しただけで，遺構からはほとんど出土していない。

土坑は116基検出されているが，時期や性格については不明のものが大部分である。平面形状からみると，長方形・円形・楕円形・不整円形・隅丸長方形・不定形と様々である。これらのうち長方形のものが62基と半数強を占め，次いで不定形21基・円形16基となり，ほかは数基ずつである。

長方形のものは，最大の第113号（7.39×1.38m）を除いても，長軸が0.82～4.60m・短軸が0.54～1.45mと規模に差がみられる。長軸や短軸の差を除いては，いずれも基本的に底面，壁の立ち上がり，覆土の堆積状況，遺構確認面から底面までの深さ，長軸方向については同じ傾向がみられる。底面は平坦で，壁は底面からほぼ垂直に立ち上がるか，外傾している。覆土は黒褐色土

が主で,ロームブロックを含み締まりがない。堆積状況からは人為的に埋め戻されていると思われる。深さは9～87cmで差が大きい。長軸方向は北北東－南南西を向くものと，西北西－東南東を向くものとに分かれ，その割合はほぼ半々である。また，重複しているものが多く，単独で検出されたものは少ない。特に，第24～39・43～45号は重複が激しく，長軸方向が直交している。重複している割には遺存状態は良好である。遺物はまとめても陶磁器片が数点であり，土坑の時期や性格をつかめる遺物はない。規模には差があるが，同じ目的で掘られたものと思われる。

長方形以外の土坑も，時期や性格は不明のものが大部分である。円形や不整円形のもののうち，第2・3・6・13号は擂鉢(すりばち)状に落ち込み，確認面から1.5～2.0mあたりから湧水しており，井戸かと思われる。不定形のものはH2区の東部に集中し，土坑内に数本のピットを有している。隅丸長方形のものは長方形のものと平面形状が異なるだけであるので，長方形のものに含まれると思われる。

溝は6条検出され，いずれも遺物はなく，形状や延びる方向もそれぞれ異なっており，時期や性格は不明である。確たる根拠はないが，第5・6号溝は並行しており，検出された長さも同じで，同一時期に同じ目的で掘られたものと思われる。

西 坪 B 遺 跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町高野字谷中705ほかに所在し，面積は5930㎡，現況は畑である。当遺跡は西坪A遺跡の北側に接しており，北利根工業団地の南方約500m に位置する。立地的には西坪A遺跡と全く同様であるが，標高は14.4～14.7m でわずかに高い。当遺跡の西方約0.5kmには南から北に向かって水海沼からの谷津が延びており，その谷津に面して新田山（しんでんやま）遺跡が所在し，北東約1.4kmの長井戸沼西枝の西側台地上には向坪A遺跡が所在する。当遺跡からは，グリッドからごく少量の縄文式土器片と擂鉢（すりばち）片が出土した。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

9月後半　上・下両車線部分とも調査を開始した。上物除去を行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。X軸＋15820m，Y軸－4920m の交点を基準として調査区を設定し，隣接する西坪A遺跡と並行して，調査を進めた。

10月後半　D4区から北に向かって4分の1のグリッドを発掘したが，遺構は確認されず，グリッドからはごくわずかの縄文式土器片，陶磁器片が出土した。土層観察用トレンチを幅1m で東西・南北方向に各1本設定し，発掘した。トレンチの土層セクションの写真撮影と，実測を行った。遺跡全体を清掃し，調査後の遺跡全景写真を撮影して，調査を完了した。

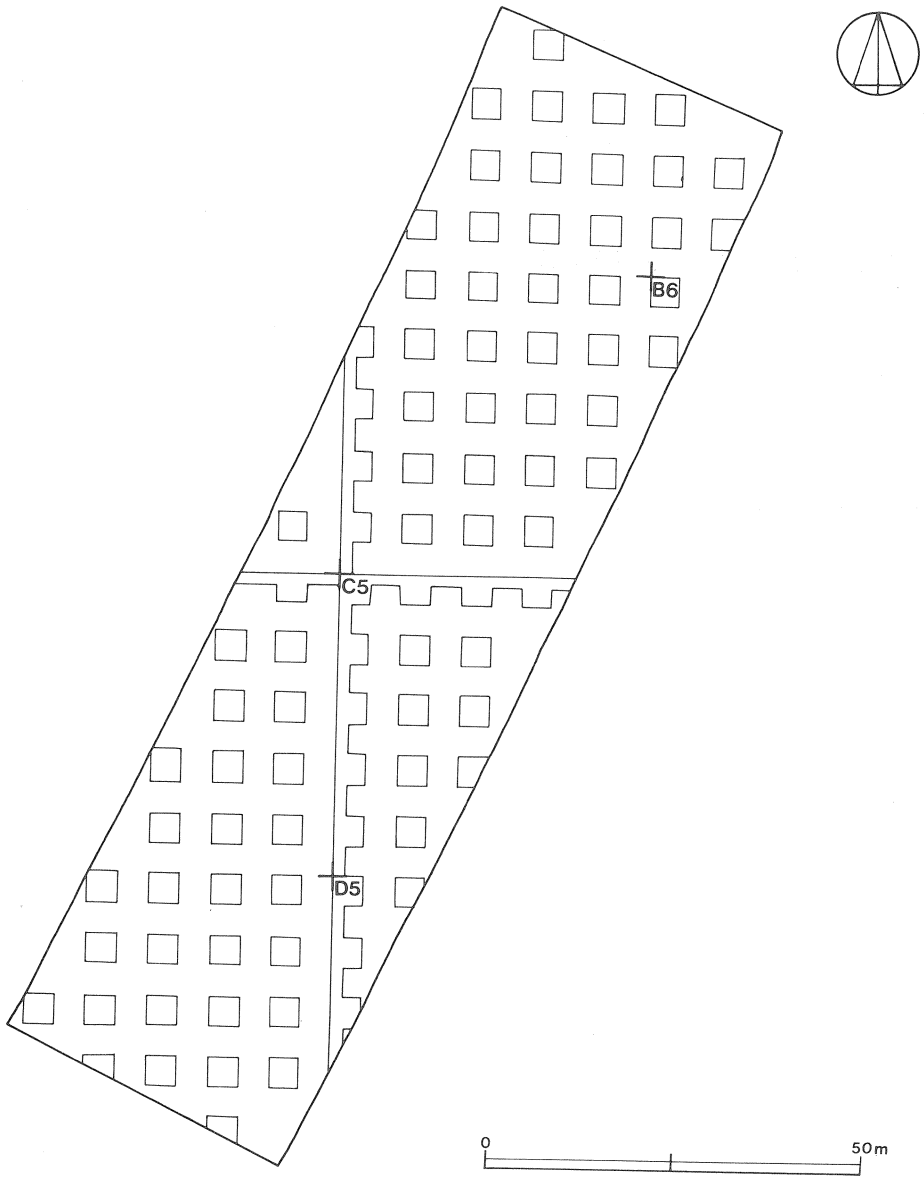
3　遺　物

当遺跡からは，遺構は検出されず，グリッドから縄文式土器片が1点，擂鉢片3点，陶磁器片数点が出土しただけである。

縄文式土器（第41図－1）

1は胴部片でLRの縄文が施されている。色調はにぶい褐色を呈しており，胎土には砂粒・スコリアを含んでいる。焼成は普通である。

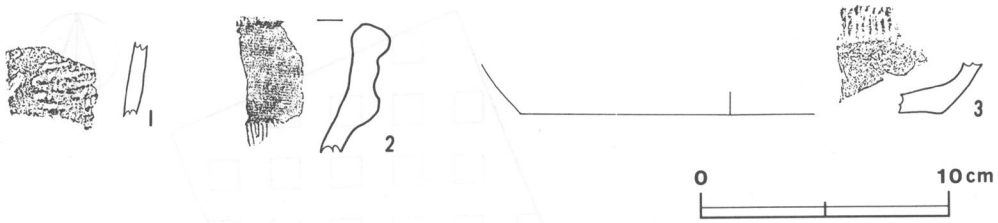
第39図　西坪B遺跡地形図



第40図　西坪B遺跡全体図

擂鉢（第41図－２・３）

２は口縁部片で，胎土は褐灰色で砂粒を含んでいる。暗赤褐色の釉が施され光沢がある。櫛目が口縁部のやや下から施されている。３は底部片で，推定底径は17cmである。胎土は褐灰色を呈し，砂粒・雲母を含んでいる。にぶい赤褐色の釉が施され，光沢はない。このほかに瀬戸片数点，板碑の断片かと思われる雲母片岩が出土している。陶磁器は近世のものと思われる。(PL17)



第41図　グリッド出土土器拓影図

4　まとめ

当遺跡からは，遺構は検出されず，遺物も各時代にまたがるが，その数は微々たるものであり，当遺跡の時期や性格については不明である。

向坪A遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町久能字向裏(むかいうら)121の１ほかに所在し，5500㎡で，現況は標高約16.8mの平坦な畑である。総和町役場の南東約３kmで，久能集落の東端に位置し，長井戸沼西枝の西側の台地上に立地している。当遺跡の東方約200mには，台地の裾に沿って宮戸川が南流し，その東側には水田が開けており，水田面との比高は約６mである。遺跡の北側には東西に県道が走り，この道路を挟んですぐ北側には向坪B遺跡が隣接している。西方約200mには向原古墳群，南東約400mにはべったり塚古墳が所在する。当遺跡では近世以降のものと思われる溝３条と井戸２基が検出され，遺物はグリッドから縄文式土器片，土師質土器片と陶磁器片が数点出土しただけである。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

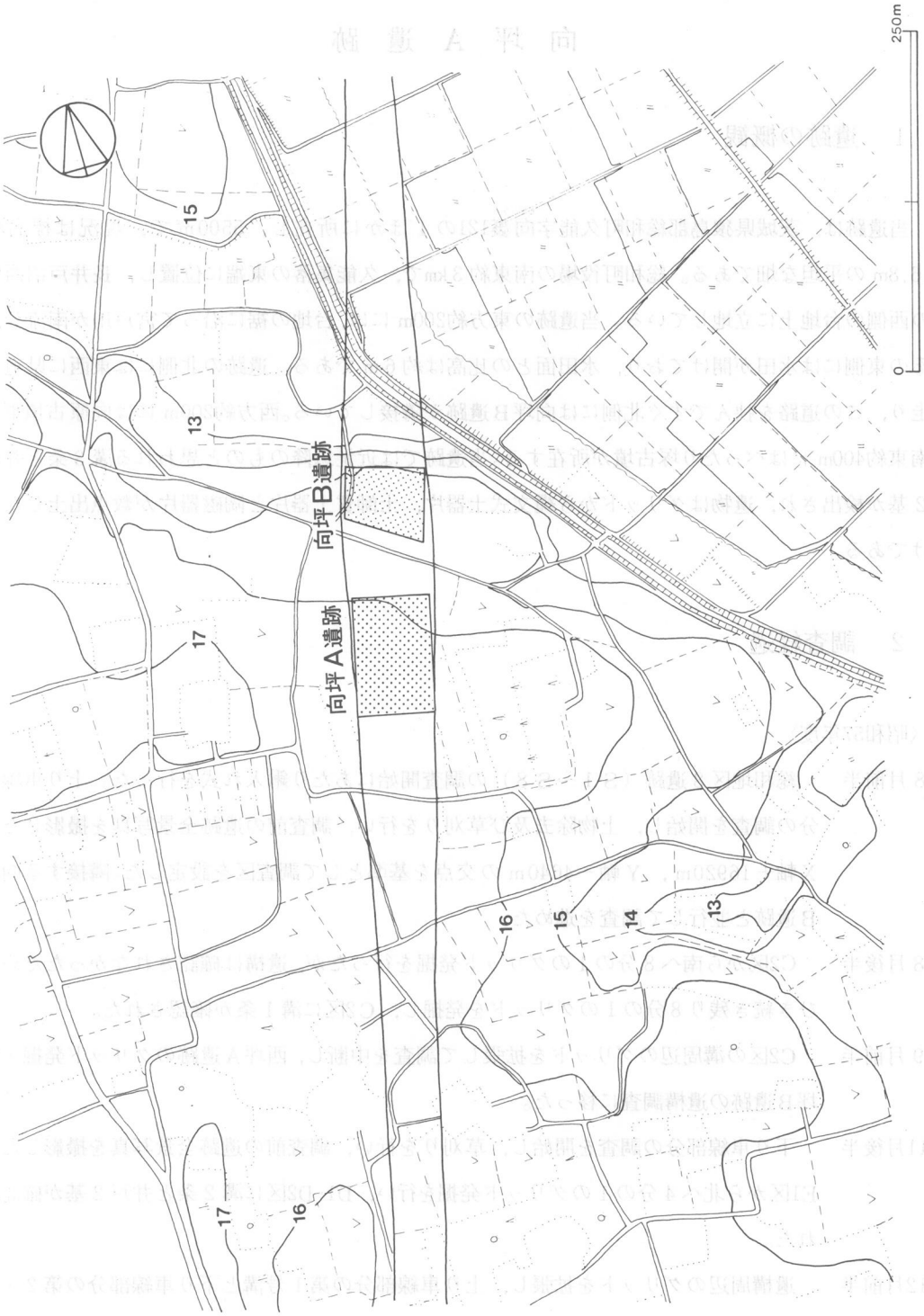
８月前半　総和地区８遺跡（Ｓ１～Ｓ８）の調査開始にあたり鍬入れ式を行った。上り車線部分の調査を開始し，上物除去及び草刈りを行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋16920m，Ｙ軸－4640mの交点を基準として調査区を設定した。隣接する向坪B遺跡と並行して調査を進めた。

８月後半　C2区から南へ８分の１のグリッド発掘を行ったが，遺構は確認されなかったため，ひき続き残り８分の１のグリッドを発掘し，C2区に溝１条が確認された。

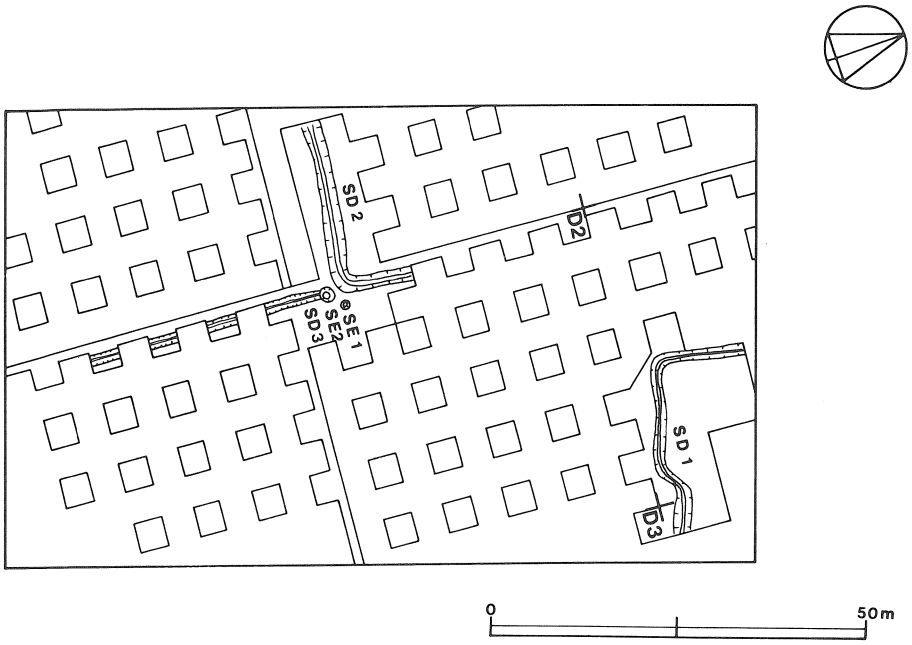
９月前半　C2区の溝周辺のグリッドを拡張して調査を中断し，西坪A遺跡のグリッド発掘と向坪B遺跡の遺構調査に移った。

11月後半　下り車線部分の調査を開始し，草刈りを行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。E1区から北へ４分の１のグリッド発掘を行い，D1･D2区に溝２条と井戸２基が確認された。

12月前半　遺構周辺のグリッドを拡張し，上り車線部分の第１号溝と下り車線部分の第２・３号溝，第１・２号井戸の調査を実施した。各遺構とも掘り込みに時間を要したが，出土遺物はなかった。遺構調査終了後，遺跡全体の清掃を行い，調査後の遺跡全景写真を撮影して向坪A遺跡の調査を完了した。



第42図　向坪Ａ遺跡地形図



第43図　向坪Ａ遺跡全体図

3　遺構と遺物

当遺跡からは溝３条・井戸２基が検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片２点，カワラケ片１点，陶磁器片数点が出土しているが，遺構からは出土していない。

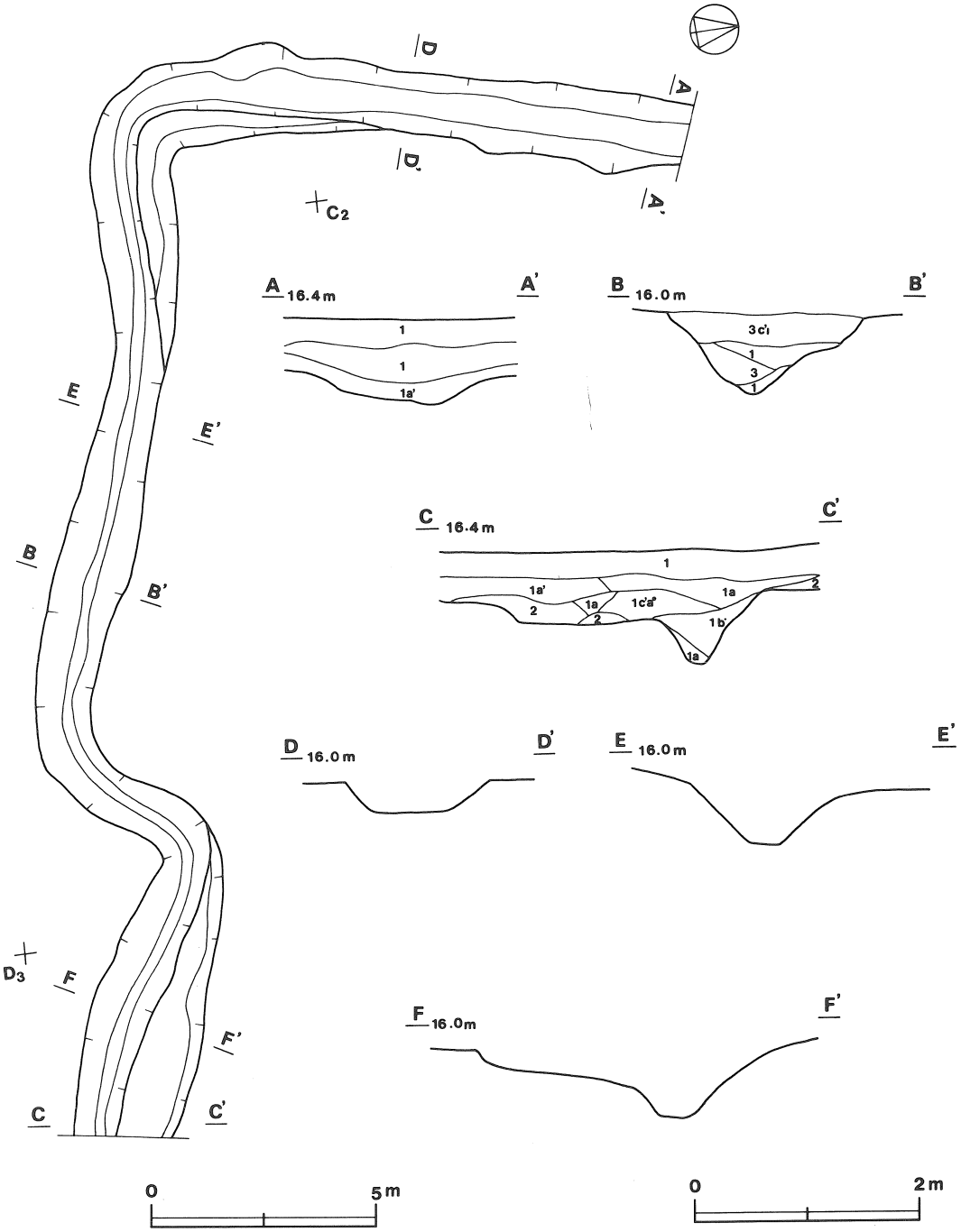
(1)　溝

第１号溝（第44図）

本跡は遺跡の北端C2･C3区に検出された。

検出された長さは約36m で，両端とも調査区域外まで延びている。C3j₁からＮ－66°－Ｗを指して西北西へ約７ｍ，C2j₀から南西へ向きを変え約３ｍ，C2joで再び西北西へ向き約15m，C2i₆からＮ－18°－Ｅを指し，北北東へ約11m 延びて調査区域外へと向かっている。断面は「凵」形を呈しており，上幅は110～160cm，下幅は30～50cmである。遺構確認面から底面までの深さは50～70cmあり，底面のレベル差は東端より北端の方が30cm低くなっている。底面，壁面とも凹凸は見られない。覆土は黒褐色土や暗褐色土が主で，自然堆積の様相を呈しているが，部分的に攪乱が見られる。

遺物は出土していない。

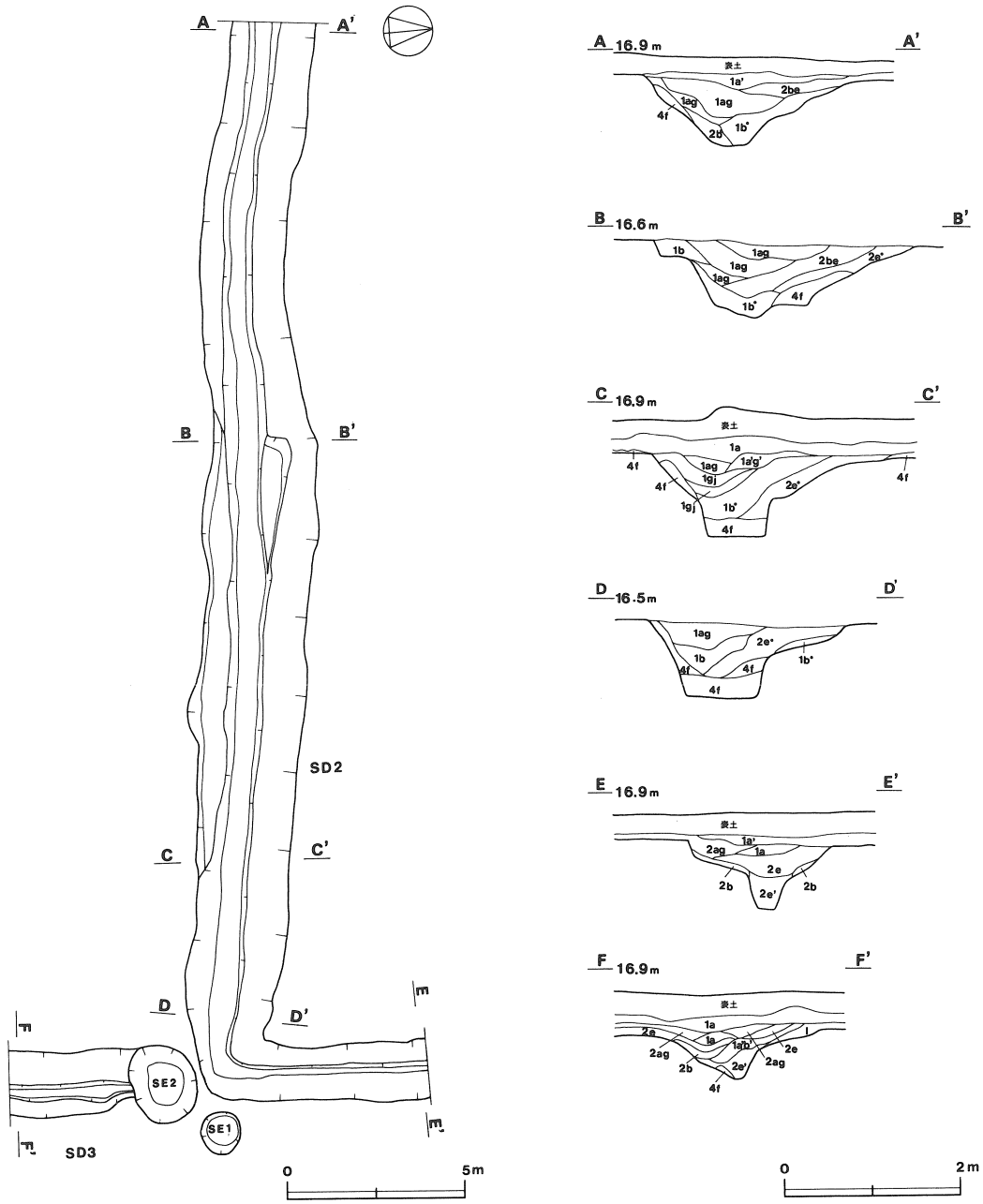


第44図　第１号溝実測図

第２号溝（第45図）

本跡は遺跡の中央部西寄りのD1・D2区に検出された。全長は約60m である。

遺跡の西端D1i4からＮ―93°―Ｅを指し，ほぼ東へ直線的に約30m，そこから北方向へ直線的に



第45図　第２・３号溝実測図

約30m 延び消滅している。断面は「⊔」形を呈しており，上幅は150～250cm，下幅は60～80cmである。遺構確認面から底面までの深さは80～90cmであり，底面のレベル差はほとんどない。底面や壁面は凹凸が多くみられ，崩れやすい。覆土はハードロームブロックを多量に含む黒褐色土が主で，人為的に埋められたものと思われる。

遺物は出土していない。

第3号溝（第45図）

本跡はD2･E2区に検出された。

第2号溝が東から北へ折れるD2j1に本跡の北端があり，第2号井戸と重複している。そこから直線的に南へ約30m E2g1まで延びて，消滅している。主軸は第2号溝と同一軸で結ばれる。断面も第2号溝とほぼ同じで，上幅は180～200cm，下幅は約30cmである。遺構確認面から底面までの深さや覆土の堆積状況も第2号溝と同じである。北から南へ向かって底面のレベルはわずかに低くなり，その差は約20cmである。

遺物は出土していない。

(2) 井戸

第1号井戸（第46図）

本跡はD2i1に検出され，第2号溝が東から北へ折れる角のすぐ東側40cmに位置している。

平面形は，径約1.3mの円形を呈しており，深さ約2m以下は，湧水していて掘り込むことはできなかった。壁はほぼ垂直に落ち込んでいるが，上端から約0.7mまではやや外傾し，その下はわずかにオーバーハングしている。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土が主で，人為的に埋め戻されている。

遺物は出土していない。

第2号井戸（第46図）

本跡はD2i1に検出され，第1号井戸の南西0.5mに位置している。

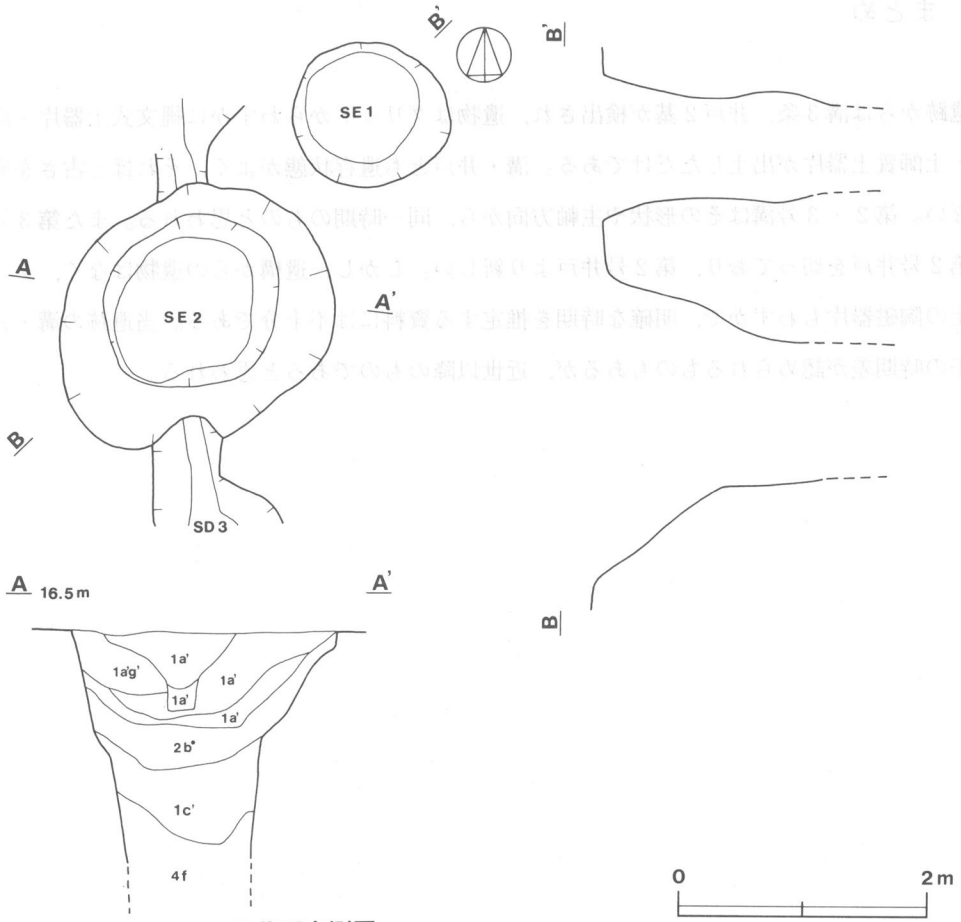
平面形は，長径2.4m・短径1.9mの楕円形を呈しており，深さ約2mで湧水している。壁の上端から約1mまでは擂鉢状に落ち込み，その下約1.3mほど垂直に落ち込んでいる。覆土は人為的に埋め戻されており，締まりがなく，第3号溝北端部が切り込んでいる。

遺物は出土していない。

(3) 遺物

縄文式土器（第47図－1・2）

1は浅鉢の胴部片かと思われる。キザミのある細い隆線が横位に配され，沈線の区画内にRLの縄文が充填されている。加曽利B式のものと思われる。色調は黒褐色で，胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。2は平底の底部片で，推定で底径は7.0cmである。網代痕が残ってい



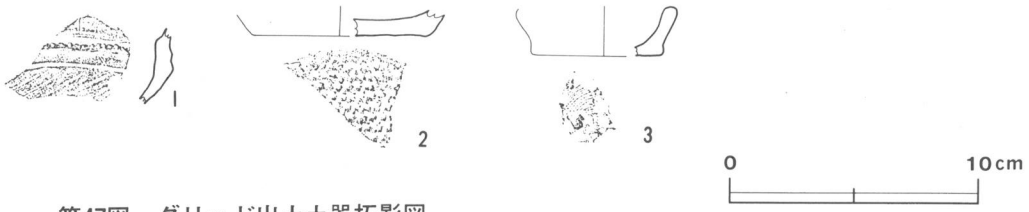
第46図　第１・２号井戸実測図

る。色調はにぶい褐色で，胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

土師質土器（第47図－３）

３はカワラケ片である。推定で口径は7.5cm，器高は2.0cm，推定で底径は5.5cmである。色調はにぶい橙色で，胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

このほか染付・青磁・瀬戸などの陶磁器片が数片出土しているが，いずれも近世のものと思われる。（PL20）



第47図　グリッド出土土器拓影図

4　まとめ

当遺跡からは溝３条，井戸２基が検出され，遺物はグリッドからわずかに縄文式土器片・陶磁器片・土師質土器片が出土しただけである。溝・井戸とも遺存状態がよく，それほど古さを感じさせない。第２・３号溝はその形状や主軸方向から，同一時期のものと思われる。また第３号溝は，第２号井戸を切っており，第２号井戸より新しい。しかし，遺構からの遺物はなく，グリッド出土の陶磁器片もわずかで，明確な時期を推定する資料には不十分である。当遺跡の溝・井戸は若干の時期差が認められるものもあるが，近世以降のものであると思われる。

向 坪 B 遺 跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町久能字アミダ前136の１ほかに所在し，面積は2500㎡で，現況は畑である。北利根工業団地の北東約700ｍで，久能集落の東端に位置し，長井戸沼に面する標高15～16ｍの台地縁辺部に立地している。遺跡の北方約150ｍには長井戸沼西枝から，幅50ｍほどの谷津が北西に向かって入り込んでおり，遺跡はこの谷津に向かってわずかに傾斜している。谷津を隔てた北方約400ｍには香取西遺跡，北西約400ｍには林割遺跡が所在し，いずれも土師器や須恵器が散布している。また西方約200ｍには，円墳３基からなる向原古墳群が所在し，遺跡南側を東西に走る県道を挟んで向坪Ａ遺跡が隣接している。当遺跡では古墳時代の住居跡２軒のほか土坑23基，溝２条が検出されたが，第１号住居跡からは石製模造品が多量にまとまって出土している。

2　調査経過

〈昭和57年度〉

８月前半　上り車線部分の調査を開始し，上物除去及び草刈りを行い，調査前の遺跡全景写真を撮影した。Ｘ軸＋17040ｍ，Ｙ軸－4600ｍの交点を基準として調査区を設定して，南側に隣接する向坪Ａ遺跡と並行して調査を進めた。A3区から南へ８分の１のグリッドを発掘したが，遺構は確認されなかった。続いて残り８分の１のグリッド発掘を行い，A3区からB3区にかけて住居跡１軒と溝１条が確認された。

８月後半　遺構が確認されたA3区の東側とB3区のB3b5を中心として周囲のグリッドを拡張した。

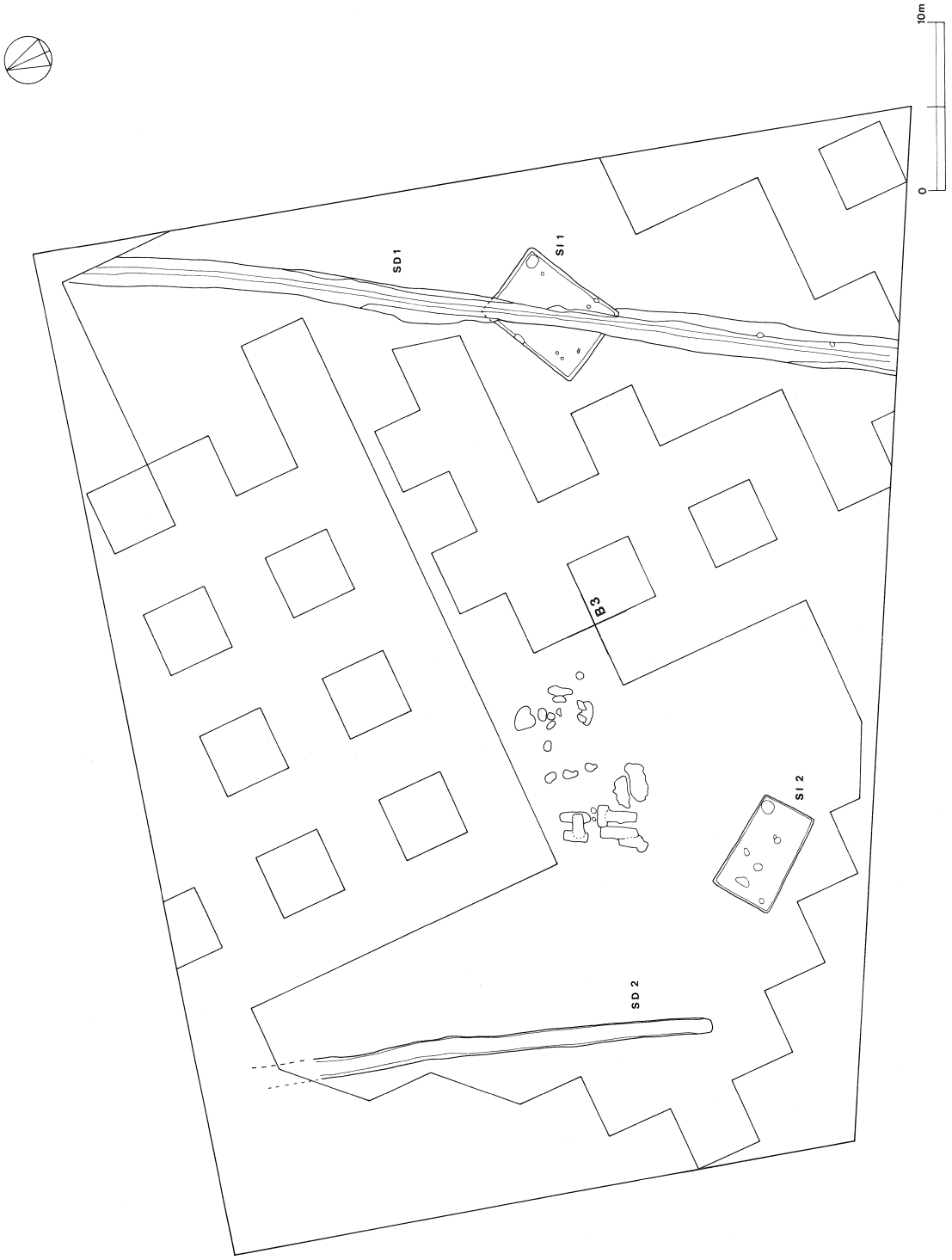
９月前半　第１号住居跡と第１号溝の掘り込みを開始した。第１号住居跡からは土師器，須恵器のほかに，子持勾玉，勾玉，臼玉などの石製模造品がまとまって出土した。

９月後半　臼玉の数が三千数百に及び，実測や取り上げに多くの日数が費やされた。

10月前半　第１号住居跡と第１号溝の写真撮影，実測を行い，遺構調査を終了した。遺跡全体の清掃を行った後，全景写真の撮影を行い，上り車線部分の調査を完了し，西坪Ｂ遺跡の調査に移った。

11月後半　下り車線部分の調査を開始した。草刈り及び調査前の遺跡全景写真の撮影を行い，調査区を設定した。A2区から南へ４分の１のグリッド発掘を行い，B2区に住居跡１軒，

第48図　向坪B遺跡地形図



第49図　向坪Ｂ遺跡全体図

A2区に土坑23基，溝１条が確認された。ひき続き遺構調査を行うため，遺構が確認されたA2区の南側とB2区の北側のグリッドを拡張した。

12月前半　第２号住居跡，第２号溝，第１～23号土坑の調査を開始した。第２号住居跡からは土師器，勾玉などが出土し，土坑からは土師質土器片が出土した。各遺構の調査終了後，遺跡全体清掃，調査後の遺跡全景写真の撮影を行い，下り車線部分の調査が終了し，向坪Ｂ遺跡の調査が完了した。

3　遺構と遺物

当遺跡からは竪穴住居跡２軒・土坑23基・溝２条が検出された。遺物は住居跡から，土師器片・須恵器片・石製品などが出土し，土坑からは土師質土器が出土している。特に，第１号住居跡からは，祭祀（さいし）関係の遺物が出土している。

(1)　竪穴住居跡

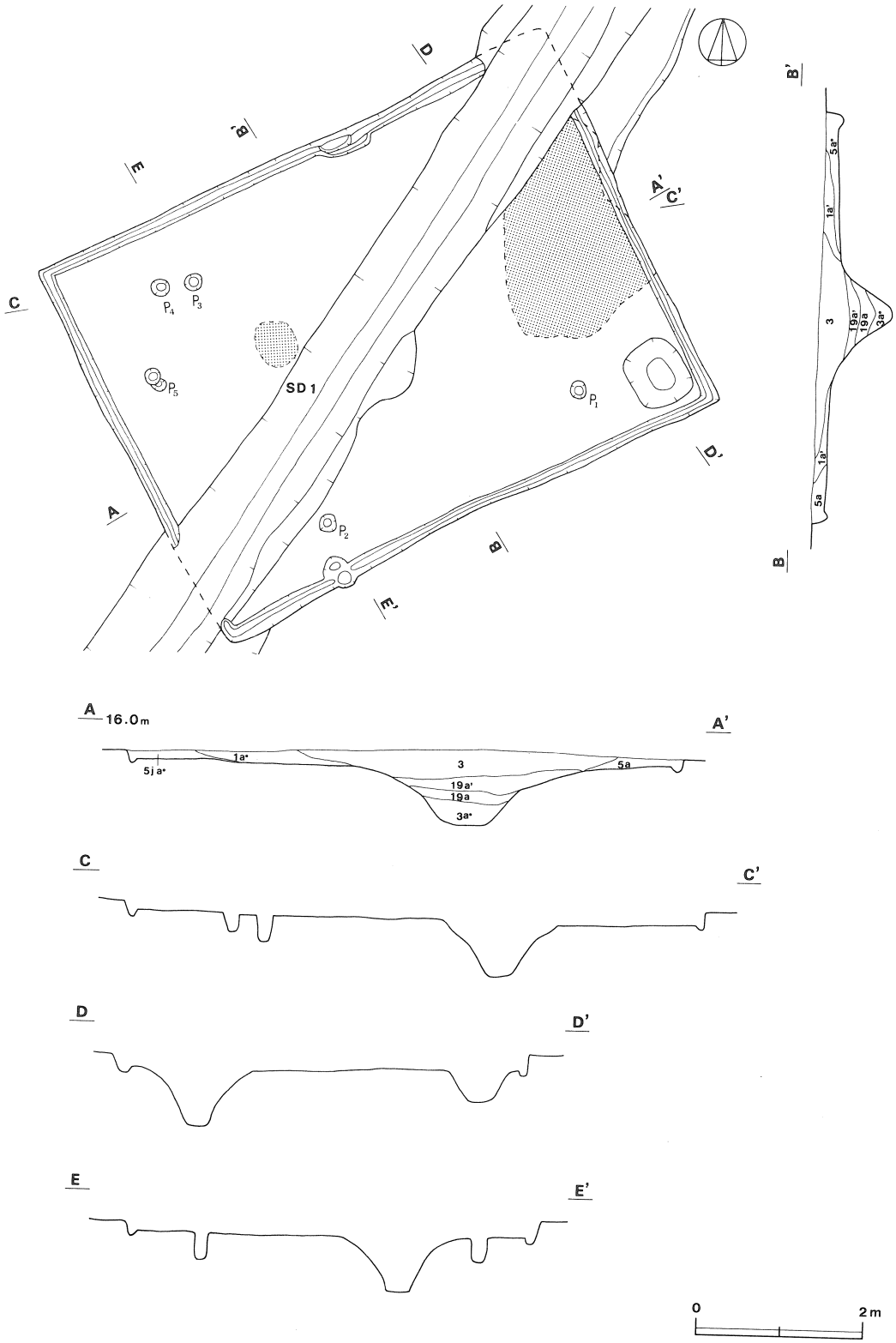
第１号住居跡（第50図）

本跡はB3b5を中心に検出され，第２号住居跡の約30ｍ東に位置している。

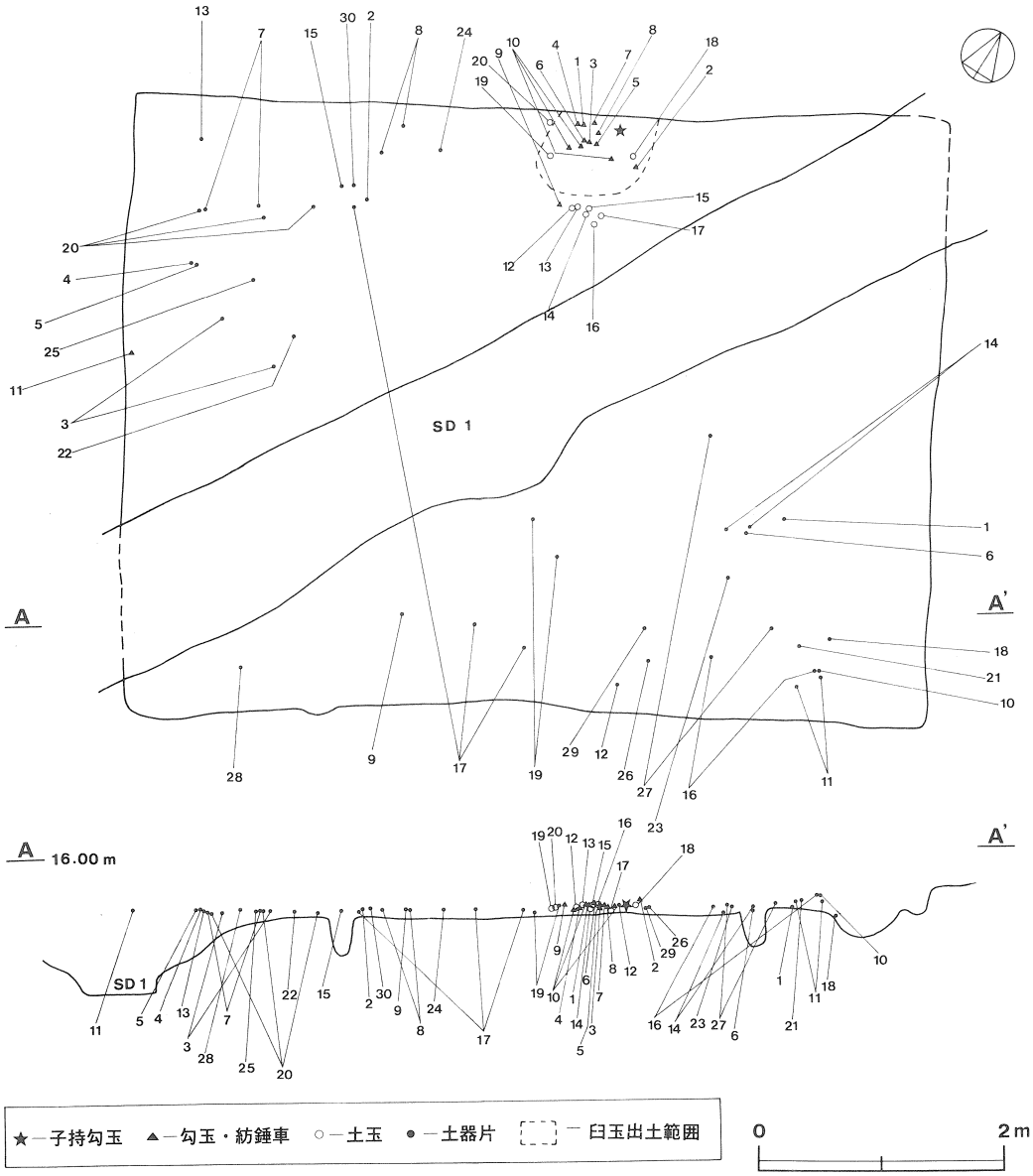
平面形は長軸6.6ｍ・短軸4.8ｍの長方形を呈しており，主軸方向はＮ－63°－Ｅを指している。本跡の北コーナーから南コーナーにかけては，対角線状に第１号溝によって，幅１ｍで床面が切り込まれている。

壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約20cmである。床面は北東壁中央付近に，多少凹凸がみられ，やや軟弱であるが，おおむね平坦である。壁下を幅約10cm，深さ５～６cmの壁溝が全周している。ピットは５か所検出されたが，P_1，P_2，P_3が主柱穴と思われる。いずれも直径約20cm，深さ約30cmである。主柱穴は等間隔に４本配置されたものと推定され，そのうち北側の１本は第１号溝によって失われたものと思われる。東コーナーには貯蔵穴が検出された。平面形は隅丸長方形状を呈しており，長軸80cm・短軸68cm・深さ42cmで，擂鉢状に掘り込まれている。北東壁中央部付近と住居跡中央部のやや西の床面には焼土の広がりがあったが，炉跡は確認できなかった。第１号溝によって切り込まれた部分に，炉跡があったかどうかは不明である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土が主で，自然堆積の状況を示している。

遺物は，土師器・須恵器・石製模造品・土製品などが出土しており，完形または復元可能なものが多い。第１号溝によって切り込まれた部分を除いて，ほぼ床全面にわたって出土している。特に，北西壁中央部からやや北の壁際に子持勾玉が１個出土し，その周囲から勾玉（まがたま）が10個，臼玉（うすだま）が3570個も出土している。また，その周囲から炭化したヒシの実が数十個出土している。



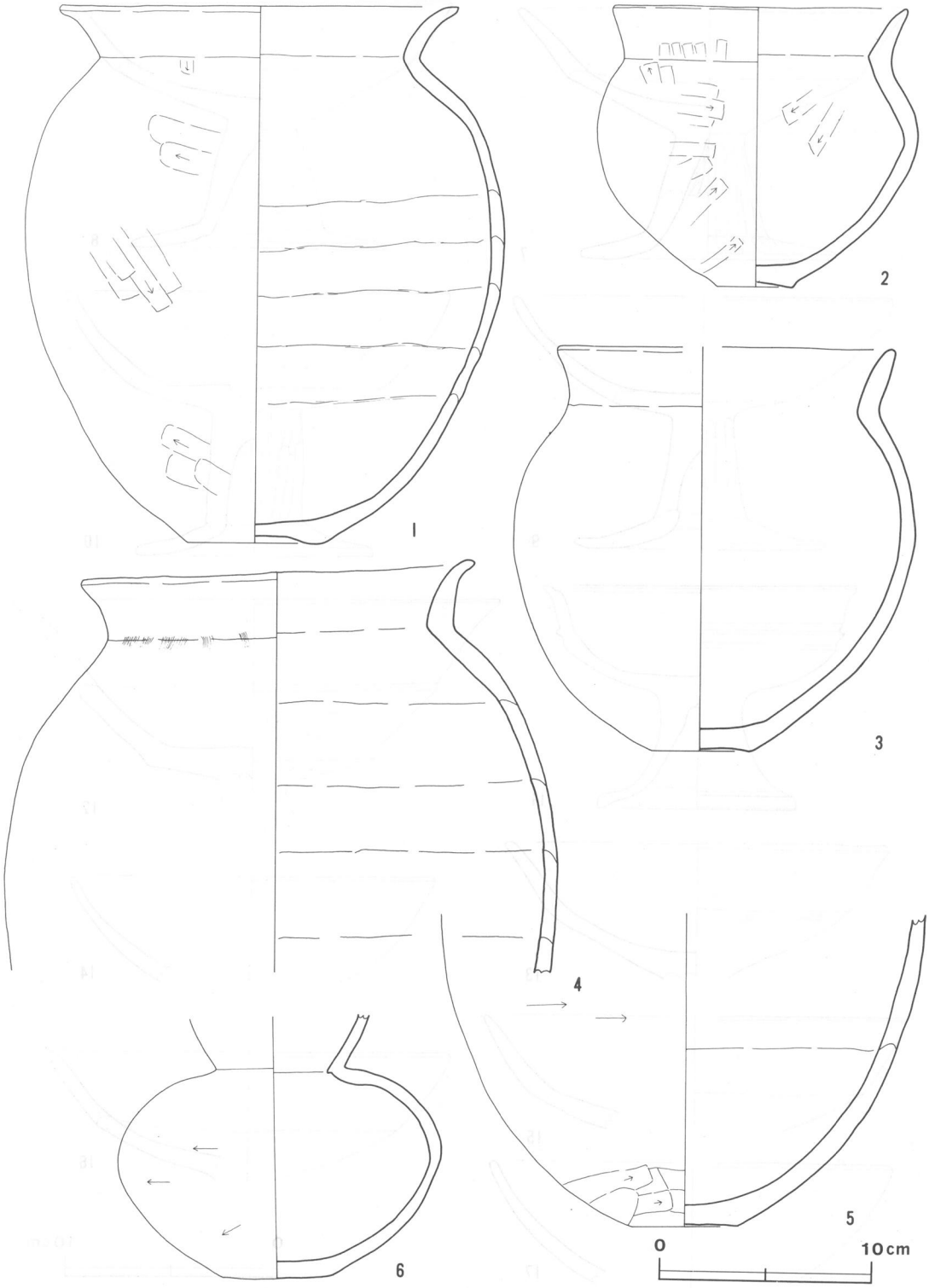
第50図　第１号住居跡実測図



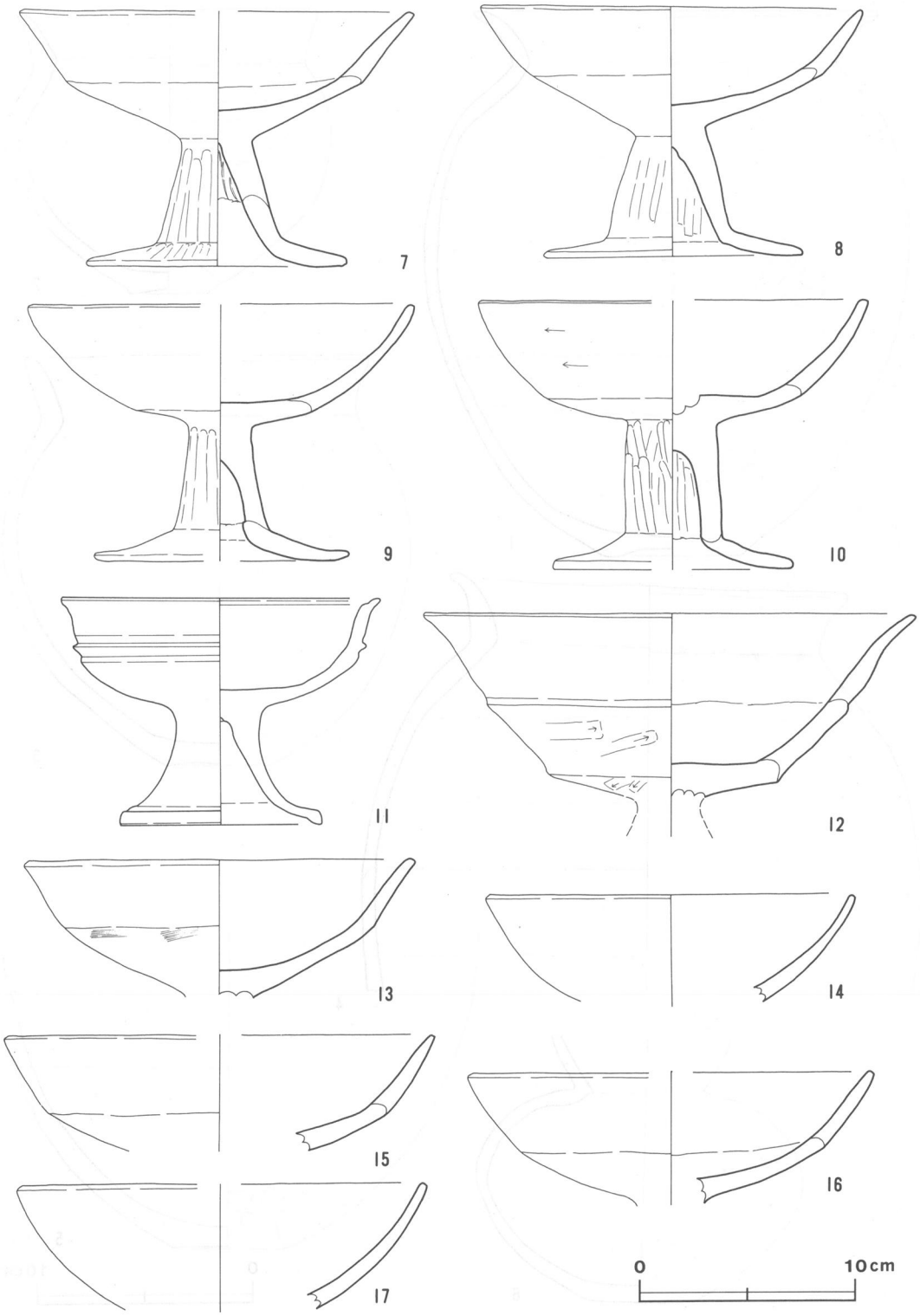
第51図　第1号住居跡遺物出土状態図

出土土器観察表（第52～54図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A　18.8 B　25.4 C　6.4	口縁部は「く」の字状に開き，上半は外反している。胴部はやや縦長の球形を呈している。底部はあげ底である。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ヘラ削り 底部－ヘラ削り	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	65%
2	甕形　土器 土師器	A　13.8 B　13.3 C　3.5	口縁部は「く」の字状に開き，胴部上位は張り，以下すぼまっている。底部は小さく，あげ底である。内面の口縁部と胴部の境に稜をもっている。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内面－ヘラナデ 胴部外面－ヘラ削り	砂粒 不良 赤橙色	90% 胴部に煤付着 二次焼成
3	甕形　土器 土師器	A　(15.6) B　19.1 C　4.6	口縁部は「く」の字状に開き，胴部はほぼ球形を呈するが，上位がやや張っている。底部はややあげ底気味である。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 不良 赤色	40% 二次焼成 全体に摩滅

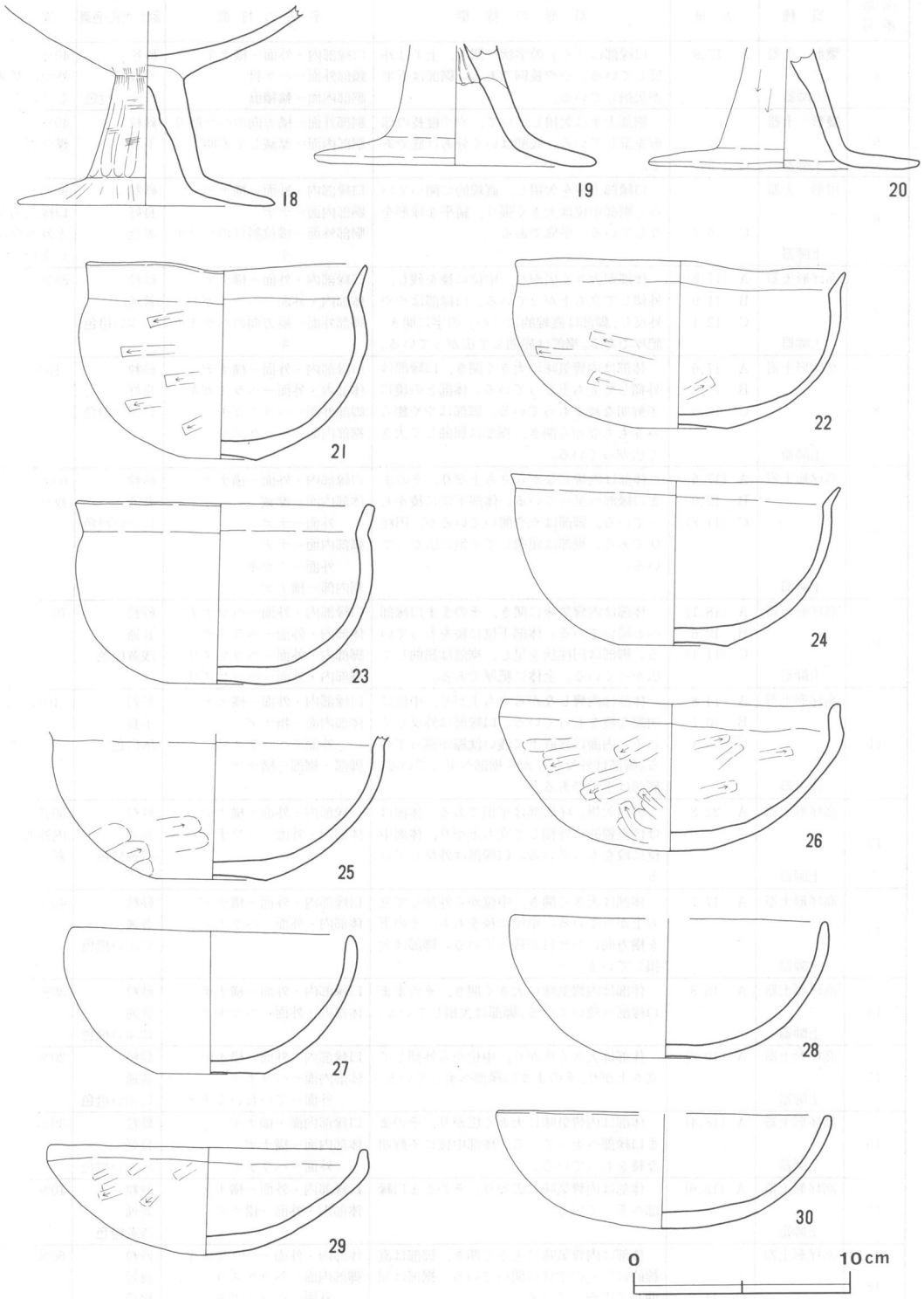


第52図　第１号住居跡出土遺物実測図(1)



第53図　第１号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
4	甕形 土器 土師器	A 17.9	口縁部は「く」の字状に開き，上半は外反している。やや長胴である。胴部は下半が欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 頸部外面－ハケ目 胴部内面－輪積痕	砂粒 不良 にぶい橙色	40% 外面は摩滅している。
5	甕形 土器 土師器	C 5.0	胴部上半は欠損していて，やや縦長の球形を呈している。底部はいく分あげ底である。	胴部外面－横方向のヘラ削り 胴部内面－摩滅して不明	砂粒 不良	40% 煤付着
6	坩形 土器 土師器	C 5.4	口縁部上半を欠損し，直線的に開いている。胴部中位は大きく張り，扁平な球形をなしている。平底である。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内面－ナデ 胴部外面－横位斜位のヘラナデ	砂粒 良好 赤色	90% 口縁部内面と外面全体に赤彩
7	高坏形土器 土師器	A (17.8) B 11.9 C 12.1	体部が大きく広がり，中位に稜を残し，外傾して立ち上がっている。口縁部はやや外反し，脚部は直線的に「ハ」の字に開き，肥厚である。裾部は屈曲して広がっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラミガキ 脚部外面－縦方向のヘラミガキ	砂粒 普通 にぶい橙色	85%
8	高坏形土器 土師器	A 17.6 B 11.8 C 12.0	体部は内彎気味に大きく開き，口縁部は外傾して立ち上がっている。体部との境に不鮮明な稜をもっている。脚部はやや膨らみをもちながら開き，裾部は屈曲して大きく広がっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラミガキ 脚部外面－ヘラミガキ 裾部内面－ヘラケズリ	砂粒 良好 にぶい橙色	100%
9	高坏形土器 土師器	A (17.6) B 12.0 C (11.8)	体部は内彎しながら立ち上がり，そのまま口縁部へ至っている。体部下位に稜をもっている。脚部はやや開いているが，円柱状である。裾部は屈曲して平坦に広がっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－摩滅 外面－ナデ 脚部内面－ナデ 外面－ミガキ 裾内部－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	60% 煤付着
10	高坏形土器 土師器	A (18.1) B 12.6 C (11.1)	体部は内彎気味に開き，そのまま口縁部へと続いている。体部下位に稜をもっている。脚部は円柱状を呈し，裾部は屈曲して広がっている。全体に肥厚である。	口縁部内・外面－ヘラナデ 体部内・外面－ヘラナデ 脚部内・外面－ヘラケズリ 裾部内・外面－ヘラケズリ	砂粒 普通 浅黄橙色	70%
11	高坏形土器 須恵器	A 14.8 B 10.7 C 9.4	体部は内彎しながら立ち上がり，中位に明瞭な稜をもっている。口縁部は外反している。内面口唇直下に浅い沈線が巡っている。脚部は外反しながら裾部へ至っている。底部は平坦である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－指ナデ 外面－ヘラケズリ 脚部・裾部－横ナデ	砂粒 不良 灰白色	100%
12	高坏形土器 土師器	A 22.8	脚部欠損。坏底部は平坦である。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり，体部中位に段をもっている。口縁部は外反している。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	50% 内外面－赤彩
13	高坏形土器 土師器	A 17.7	体部は大きく開き，中位から外傾して立ち上がっている。中位に稜をもち，その下を横方向にハケ目が残っている。脚部は欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%
14	高坏形土器 土師器	A 16.8	体部は内彎気味に大きく開き，そのまま口縁部へ続いている。脚部は欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
15	高坏形土器 土師器	A (19.8)	体部は大きく広がり，中位から外傾して立ち上がり，そのまま口縁部へ至っている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－ヘラナデ 外面－ていねいなナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	20%
16	高坏形土器 土師器	A (18.4)	体部は内彎気味に大きく広がり，そのまま口縁部へ至っている。体部中位に不鮮明な稜をもっている。	口縁部内面－横ナデ 体部内面－横ナデ 外面－ヘラナデ	砂粒 良好 にぶい橙色	30%
17	高坏形土器 土師器	A (18.6)	体部は内彎気味に広がり，そのまま口縁部へ至っている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	10%
18	高坏形土器 土師器	C 11.8	体部は内彎気味に大きく開き，脚部は直線的に「ハ」の字状に開いている。裾部は屈曲して広がっている。	体部内・外面－ヘラミガキ 脚部内面－ヘラケズリ 外面－ヘラミガキ 裾部外面－ヘラミガキ	砂粒 良好 橙色	60%
19	高坏形土器 土師器	C 13.0	坏部は欠損している。脚部は「ハ」の字状に開き，裾部は屈曲して広がっている。	脚部内面－絞り痕残る 外面－ていねいなナデ 裾部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%



第54図　第１号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
20	高坏形土器 土師器	C 12.5	坏部は欠損している。脚部は直線的に「ハ」の字状に開き，裾部は屈曲してから平坦に広がっている。	脚部内面－ナデ 外面－ていねいなナデ 裾部内・外面－横ナデ	砂粒・スコリア 普通 にぶい橙色	40%
21	埦形 土器 土師器	A 12.8 B 9.0 C 3.4	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾し，歪んでいる。底部はあげ底風である。内面体部と口縁部の境に明瞭な稜をもっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－ヘラナデ 外面－ヘラケズリ	砂粒・雲母 良好 赤色	90% 内外面とも赤彩
22	埦形 土器 土師器	A 15.2 B 8.0 C 4.4	体部は内彎して大きく開きながら立ち上がり，口縁部は短く外傾している。内面には体部と口縁部の境に明瞭な稜をもち，あげ底気味である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラケズリ 上部－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
23	埦形 土器 土師器	A 13.4 B 8.4 C 4.3	体部は内彎して立ち上がり，口縁部は短く外傾している。あげ底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	80%
24	埦形 土器 土師器	A 15.2 B 7.8	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾している。内面口縁部と体部の境に稜をもっている。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内面－ヘラナデ 摩滅している 外面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	100%
25	埦形 土器 土師器	C 5.0	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾している。あげ底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－横方向のヘラケズリ	砂粒 普通 にぶい橙色	70%
26	埦形 土器 土師器	A 15.4 B 7.0	底部から体部へと内彎気味に大きく開き，口縁部は内傾している。丸底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラケズリ 底部内・外面－ヘラケズリ	砂粒 普通 橙色	100%
27	埦形 土器 土師器	A 12.8 B 6.8 C 5.0	体部は内彎しながら立ち上がり，そのまま口縁部へ続いている。あげ底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	90%
28	埦形 土器 土師器	A (14.4) B 6.5 C 4.6	体部は内彎しながら立ち上がり，そのまま口縁部へ続いている。いく分あげ底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－ヘラナデ 体部外下半－ヘラケズリ	砂粒 普通 明赤褐色	70%
29	坏形 土器 土師器	A 14.6 B 5.0	底部から体部へと内彎気味に大きく開き，口縁部は内傾している。口縁部と体部の境に稜をもっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内面－ヘラナデ 外面－ヘラケズリ	砂粒 良好 橙色	100% 体部上位，口縁内外に赤彩色
30	坏形 土器 土師器	A (15.3) B 5.4	体部は内彎しながら立ち上がり，そのまま口縁部へと続いている。丸底である。 （底部と体部の境は不明瞭である。）	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ 全体に摩滅している	砂粒 普通 にぶい橙色	40%

子持勾玉（第55図）

北西壁中央部のやや北寄りの壁際から，腹部を壁の方向に向けて出土した。長さ9.2cm・幅6.3cm・身の幅3.9cmを測り，石質は滑石である。断面は，ほぼ円形を呈しており，頭尾両端は平坦に截断されている。頭部には両側から穿孔されており，左側は孔径5.25mm，右側は4.65mmで，中間はやや細くなる。背部に4個，腹部に1個，両側に3個ずつの発達した鰭（しっ）状の突起を持っている。ナイフ状の用具で削って，精巧に作られており，全体的に均整がとれている。

勾玉（第56図－1～10）

全部で10個出土したが，いずれも扁平で板状を呈しており，やや粗製である。両面は平滑に研磨されているが，形状は大小差が見られる。石質は滑石である。

表3　勾玉計測表

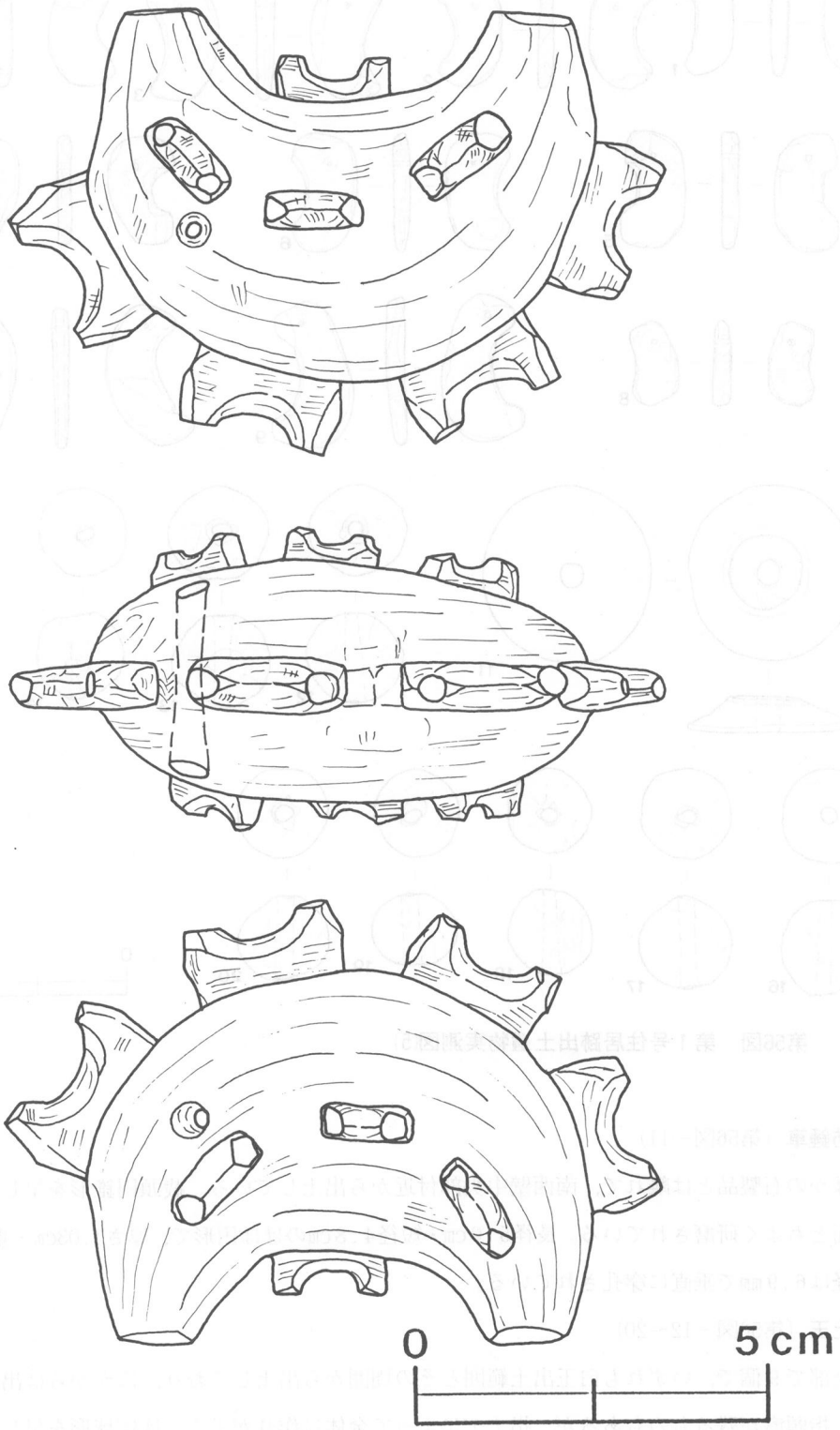
図版番号	長さ(cm)	幅(cm)	腹部幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	孔径(mm)
1	2.8	1.3	1.1	0.55	3.0	1.50
2	3.2	1.8	1.3	0.45	4.0	1.60
3	3.5	2.0	1.6	0.50	6.5	1.45
4	3.0	1.8	1.3	0.55	4.5	1.65
5	3.4	1.8	1.4	0.50	5.0	1.80
6	3.4	1.8	1.4	0.50	5.0	1.80
7	3.1	1.9	1.3	0.40	4.0	1.95
8	2.4	1.4	1.2	0.55	3.0	1.70
9	4.2	2.3	1.5	0.60	7.0	2.00
10	4.0	2.0	1.4	0.40	6.5	1.80

臼玉（第57図－1～100）

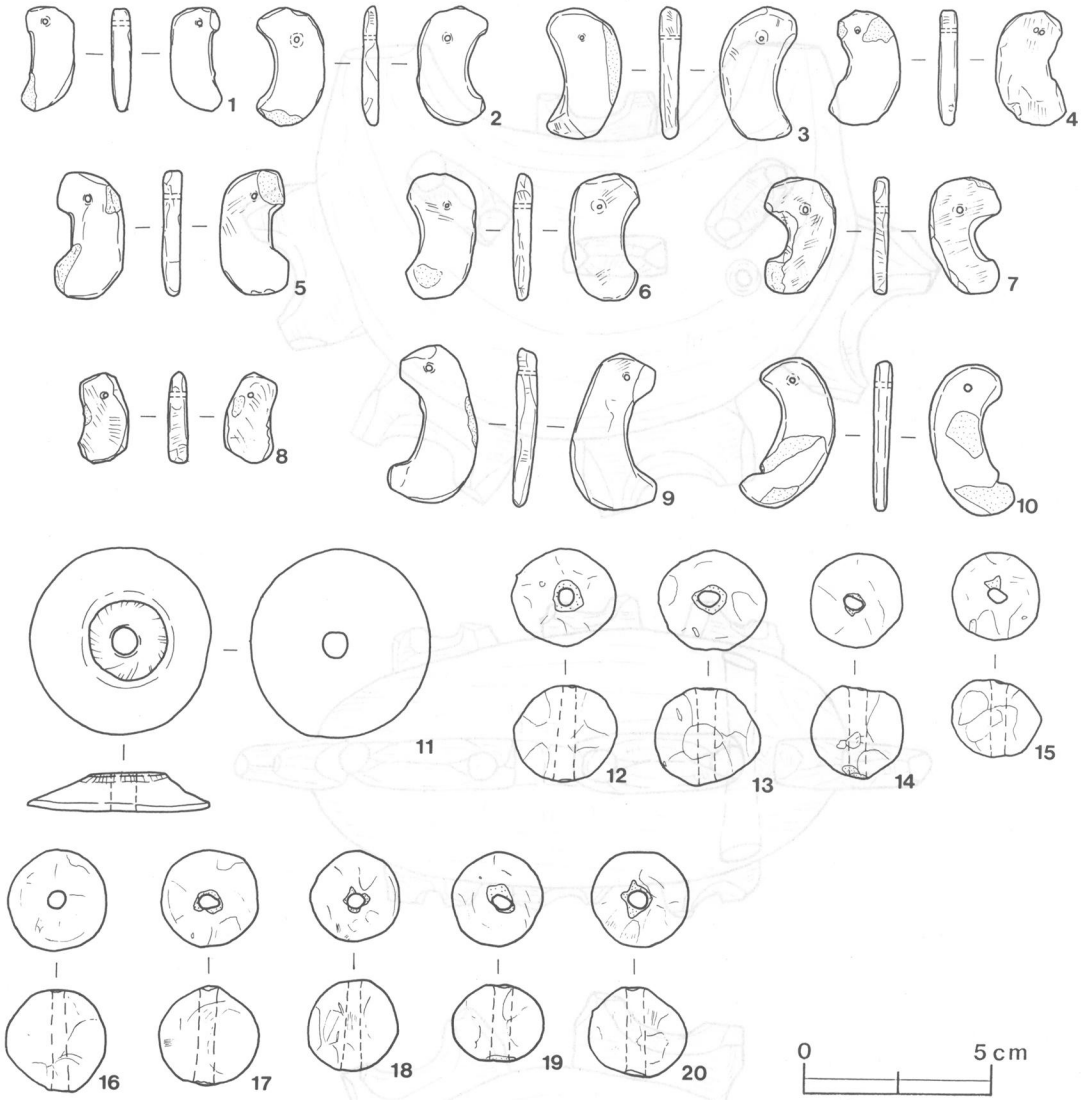
子持勾玉や勾玉と共に出土し，3570個を数え，すべて成品である。いずれも側面を縦方向に研磨し，ほぼ円形に仕上げている。上下面は平坦に研磨されているものと，凹凸が残っているものが見られる。石質は滑石で，粗製のものと精製のものが半々である。長さは1.7～4.5㎜・径は4.05～5.8㎜・孔径は1.4～2.4㎜であり，大きさにもばらつきが見られる。以下，100個を無作為に抽出して計測した結果は，次表のとおりである。

表4　臼玉計測表（単位㎜）

図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径	図版番号	径	長さ	孔径
1	5.5	3.4	1.9	26	5.0	2.6	2.1	51	5.3	3.4	1.8	76	5.0	3.2	1.7
2	5.2	2.9	1.8	27	5.0	2.3	2.4	52	4.8	4.1	1.7	77	4.8	4.2	1.8
3	5.8	3.2	1.8	28	5.3	2.9	1.8	53	5.1	3.1	1.8	78	5.8	2.1	1.8
4	4.6	2.0	1.7	29	4.7	3.7	2.1	54	5.3	3.1	1.8	79	5.0	2.8	1.7
5	5.1	3.0	1.9	30	5.0	3.2	2.1	55	5.3	2.3	2.3	80	4.6	1.8	1.7
6	4.6	1.7	1.7	31	5.5	3.6	1.9	56	5.2	2.6	2.1	81	5.4	3.2	1.4
7	5.7	2.2	2.2	32	4.3	3.0	1.5	57	4.4	2.4	1.7	82	5.1	3.8	1.9
8	4.7	1.9	1.8	33	5.4	2.8	2.0	58	5.2	2.1	1.5	83	5.4	3.2	1.4
9	5.3	3.4	1.7	34	4.5	2.1	1.8	59	4.8	2.5	2.2	84	4.1	2.2	1.7
10	4.5	2.9	1.9	35	5.3	2.8	1.9	60	4.4	3.1	1.7	85	5.2	3.8	1.8
11	4.1	1.7	1.6	36	4.7	2.5	2.4	61	4.2	2.3	1.4	86	5.2	3.4	1.9
12	5.5	2.9	1.8	37	4.5	2.3	2.3	62	4.9	3.8	2.1	87	4.4	3.5	1.7
13	4.6	2.0	2.0	38	4.55	2.1	1.8	63	5.5	4.3	2.05	88	5.0	2.8	1.7
14	5.1	3.3	1.7	39	5.5	2.7	1.7	64	5.0	4.0	1.6	89	4.5	3.8	1.9
15	5.5	3.4	2.1	40	4.4	2.4	1.7	65	4.6	1.9	1.7	90	5.6	2.8	2.1
16	4.7	2.95	1.7	41	5.4	3.1	2.0	66	5.5	2.6	1.8	91	5.1	3.1	2.1
17	4.05	1.7	1.5	42	5.6	3.2	2.0	67	4.7	2.4	1.8	92	4.2	2.3	1.7
18	5.4	3.4	1.8	43	5.2	3.3	1.8	68	4.4	2.8	1.6	93	4.4	3.3	1.6
19	4.8	3.1	1.6	44	5.1	3.1	1.7	69	5.1	4.2	1.9	94	5.1	3.1	2.1
20	4.3	3.0	1.9	45	5.3	4.1	1.9	70	4.7	3.1	1.8	95	5.4	3.5	1.8
21	5.3	3.6	1.7	46	5.3	2.6	2.0	71	4.1	4.5	1.6	96	5.2	3.45	1.3
22	5.2	3.0	1.85	47	5.3	2.8	1.7	72	5.3	3.1	1.7	97	4.55	3.1	1.9
23	5.25	2.9	1.7	48	5.2	3.0	2.0	73	5.1	1.7	2.0	98	5.1	3.2	1.7
24	5.6	3.6	1.9	49	5.25	3.5	1.7	74	5.1	3.4	1.9	99	5.2	2.1	1.8
25	5.4	2.8	1.8	50	5.0	2.6	1.8	75	5.3	3.4	2.2	100	4.8	3.8	2.3



第55図　第１号住居跡出土遺物実測図(4)



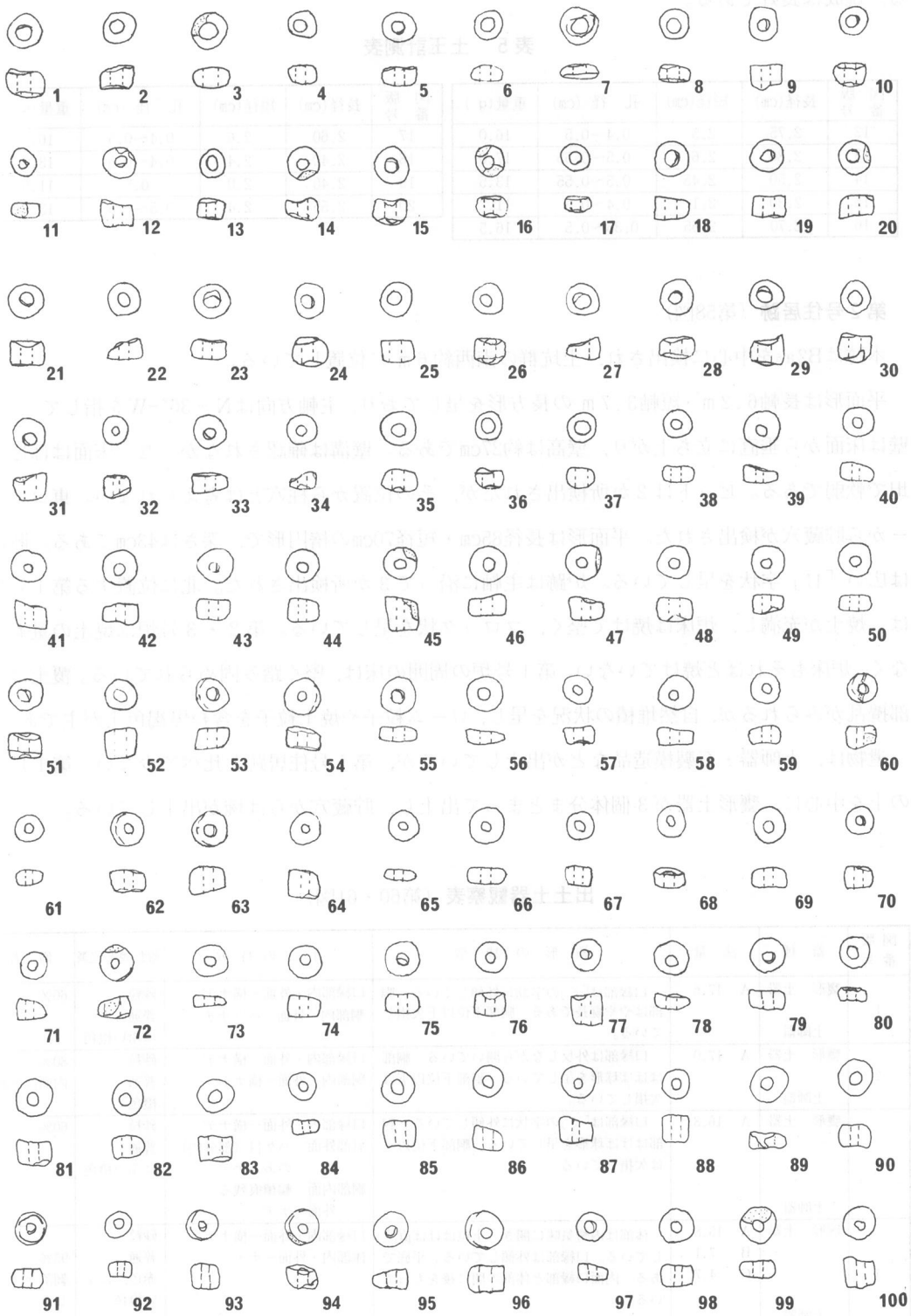
第56図　第1号住居跡出土遺物実測図(5)

紡錘車（第56図－11）

ほかの石製品とは離れて，南西壁中央部付近から出土している。截頭円錐形を呈し，上下面・側面ともよく研磨されている。長径5.0cm・短径4.8cmのほぼ円形で，厚さ1.03cm・重量30.4g・孔径は6.9mmで垂直に穿孔されている。

土玉（第56図－12～20）

全部で9個で，いずれも臼玉出土範囲とその周囲から出土しており，ほかからは出土していない。指頭痕が残るものもあるが，指ナデによって全体に作りがよく，ほぼ球形を呈している。大きさもそれほど差はない。いずれも色調は暗褐色か褐色を呈しており，胎土には砂粒を含んでい



スケール（S＝1/1）

第57図　第１号住居跡出土遺物実測図(6)

る。焼成は良好である。

表5　土玉計測表

図版番号	長径(cm)	短径(cm)	孔　径 (cm)	重量(g)
12	2.75	2.5	0.4～0.5	16.0
13	2.80	2.6	0.5～0.55	17.0
14	2.50	2.45	0.5～0.55	13.5
15	2.30	2.1	0.4～0.5	11.7
16	2.70	2.65	0.35～0.5	16.5
17	2.60	2.6	0.4～0.5	16.5
18	2.40	2.4	0.4～0.6	13.0
19	2.40	2.0	0.5	11.5
20	2.55	2.4	0.5～0.6	13.5

第2号住居跡（第58図）

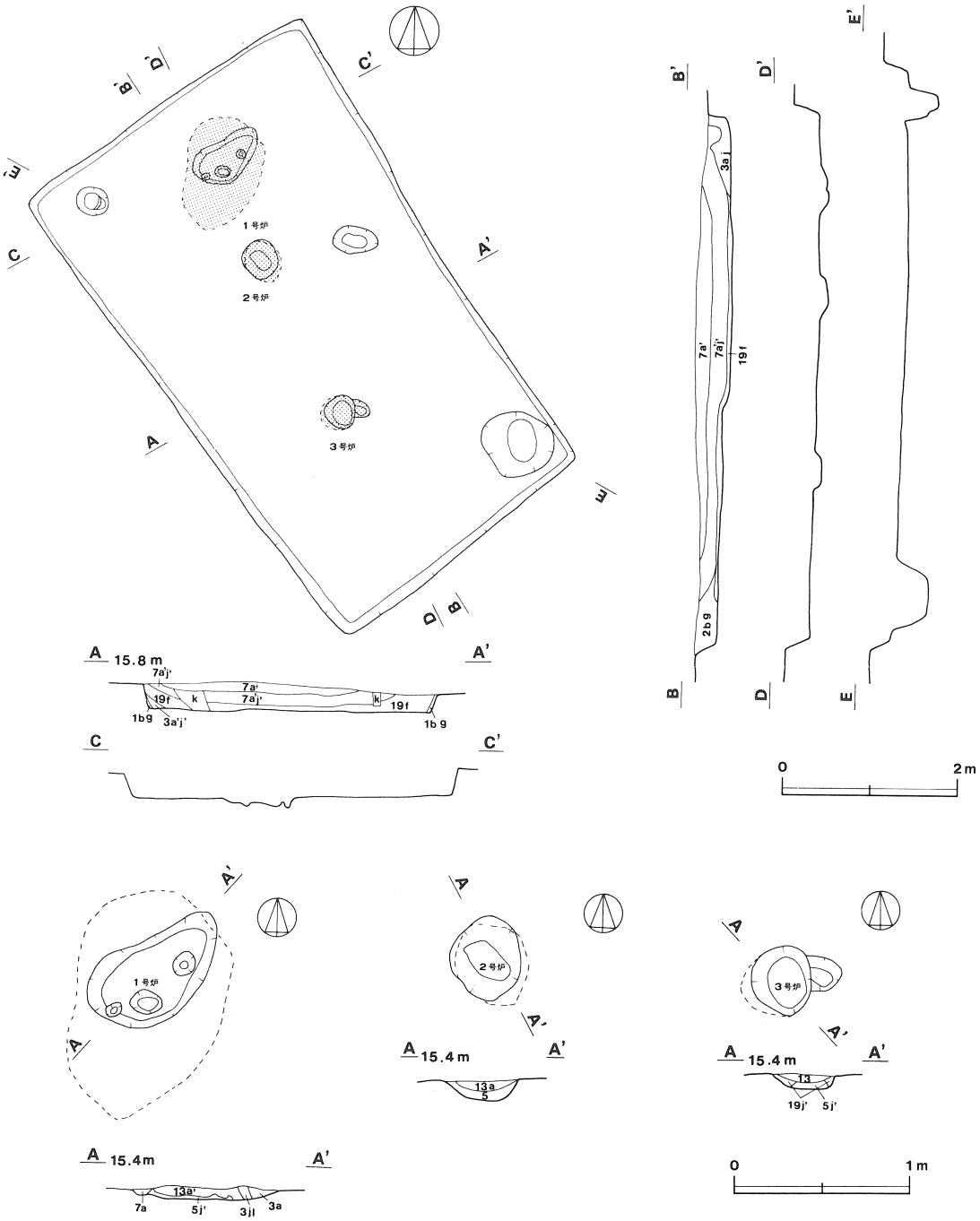
本跡はB2a6を中心に検出され，土坑群の南西約6ｍに位置している。

平面形は長軸6.2ｍ・短軸3.7ｍの長方形を呈しており，主軸方向はN－36°-Wを指している。壁は床面から垂直に立ち上がり，壁高は約27cmである。壁溝は確認されなかった。床面はほぼ平坦で軟弱である。ピットは2か所検出されたが，その位置から柱穴とは考えられない。東コーナーから貯蔵穴が検出された。平面形は長径85cm・短径70cmの楕円形で，深さは43cmである。断面は広い「U」字状を呈している。炉跡は主軸に沿って3か所検出された。北に位置する第1号炉は，焼土が充満し，炉床は焼けて堅く，ブロック状を呈している。第2・3号炉は焼土の量も少なく，炉床もそれほど焼けていない。第1号炉の周囲の床は，堅く踏み固められている。覆土は一部攪乱がみられるが，自然堆積の状況を呈し，ローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土が主である。

遺物は，土師器・石製模造品などが出土しているが，第1号住居跡と比べて少ない。第1号炉の上を中心に，甕形土器が3個体分まとまって出土し，貯蔵穴からは埦が出土している。

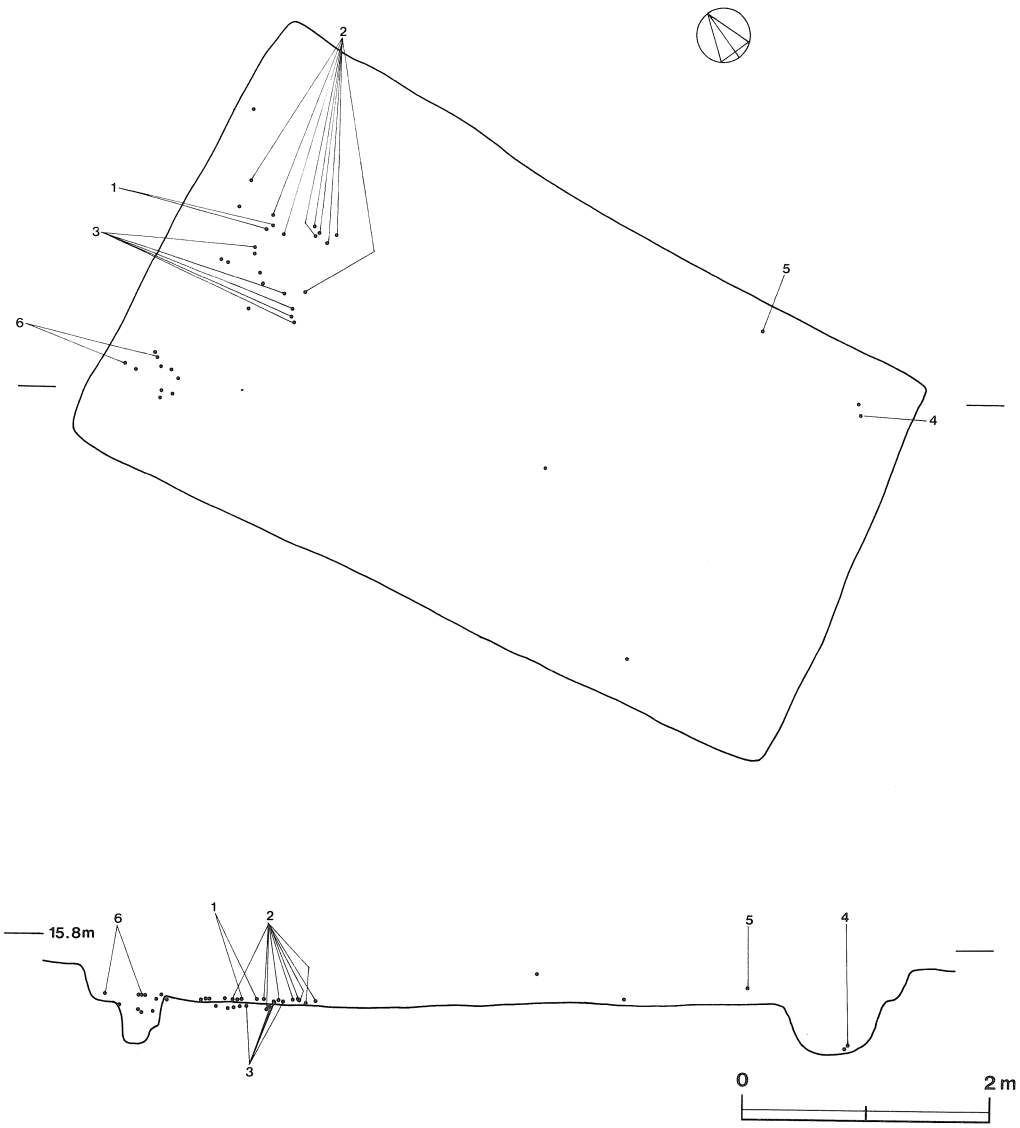
出土土器観察表（第60・61図）

図版番号	器　種	法　量	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・焼成・色調	備　考
1	甕形　土器 土師器	A　17.6	口縁部は「く」の字状に外傾している。胴部はやや縦長である。胴部下位以下欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	60%
2	甕形　土器 土師器	A　17.0	口縁部は外反しながら開いている。胴部はほぼ球形を呈している。胴部下位以下は欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	80% 内面は摩滅
3	甕形　土器 土師器	A　16.8	口縁部は「く」の字状に外傾している。胴部はほぼ球形を呈している。胴部下位以下は欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 肩部外面－ハケ目（部分的）のあとナデ 胴部内面－輪積痕残る 外面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	60%
4	埦形　土器 土師器	A　15.8 B　7.1 C　4.7	体部は内彎気味に開き，上位はほぼ直立している。口縁部は外傾している。平底である。内面口縁部と体部の間に稜をもっている。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色，にぶい橙色	95% 剝落がはげしい
5	坏形　土器 土師器	A　13.9 B　4.7	体部は内彎しながら開いて立ち上がり，口縁部へ至っている。口縁部は内ソギ状で丸底である。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 良好 にぶい橙色	80%



第58図　第２号住居跡実測図

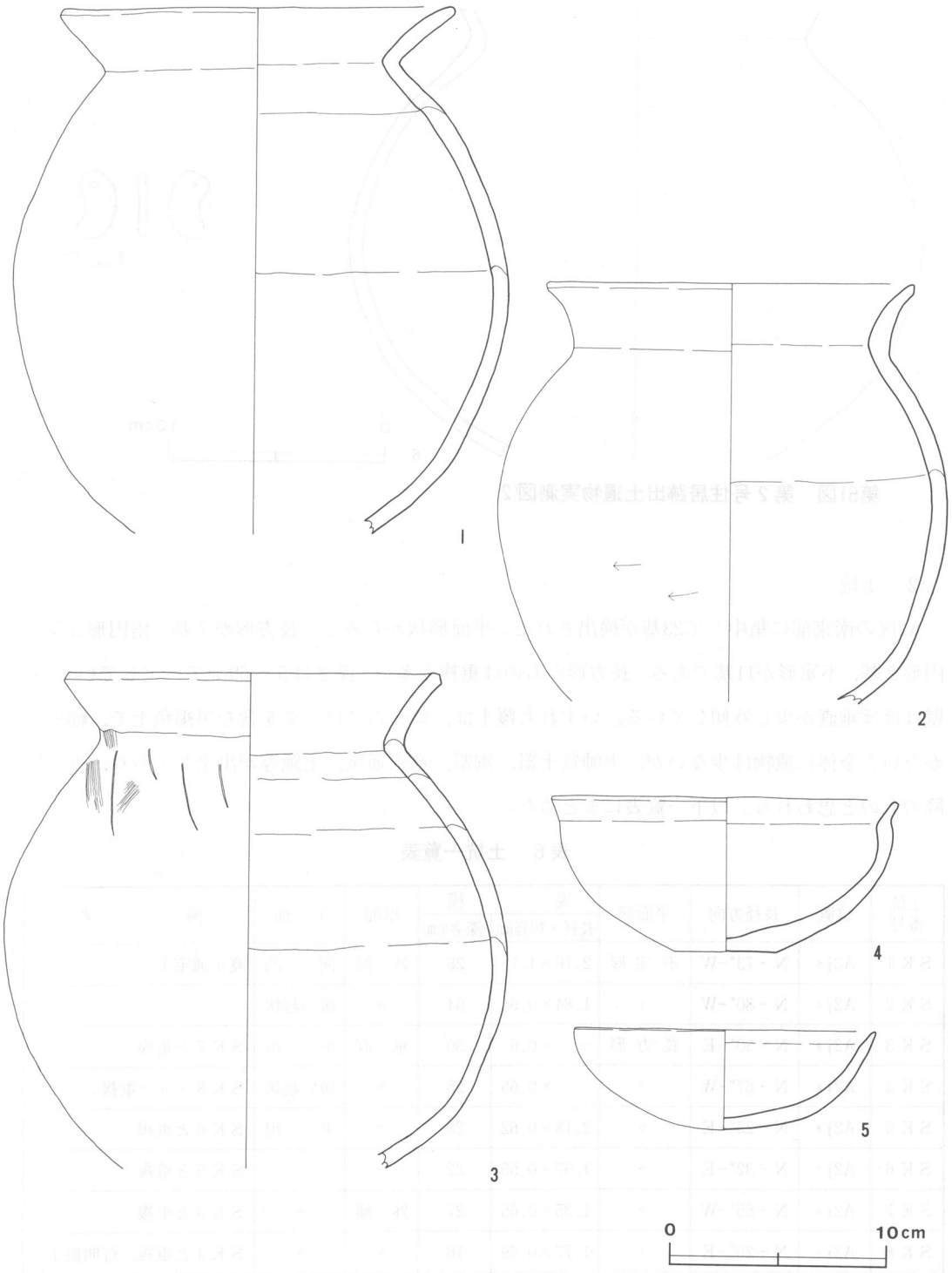
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	甕形土器 土師器		口縁部は「く」の字状に外傾し，胴部中位は大きく張り，やや扁平な球形を呈している。胴部下位以下と，口縁部上半は欠損している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部－斜めのヘラミガキ	砂粒 普通・不良 赤色	20% 剝落が著しい



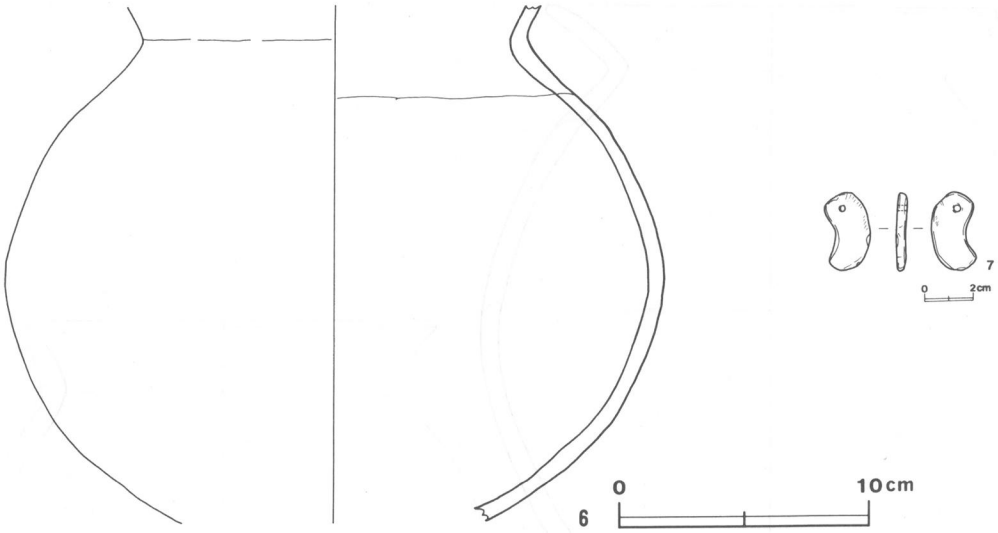
第59図　第２号住居跡遺物出土状態図

勾玉（第61図－７）

本跡からは１点だけ出土している。第１号住居跡出土のものと同じく，扁平で板状を呈している。長さ3.1cm・幅1.9cm・腹部幅1.4cm・厚さ0.4cm・孔径2.0mm・重量3.3g で，石質は滑石である。



第60図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)



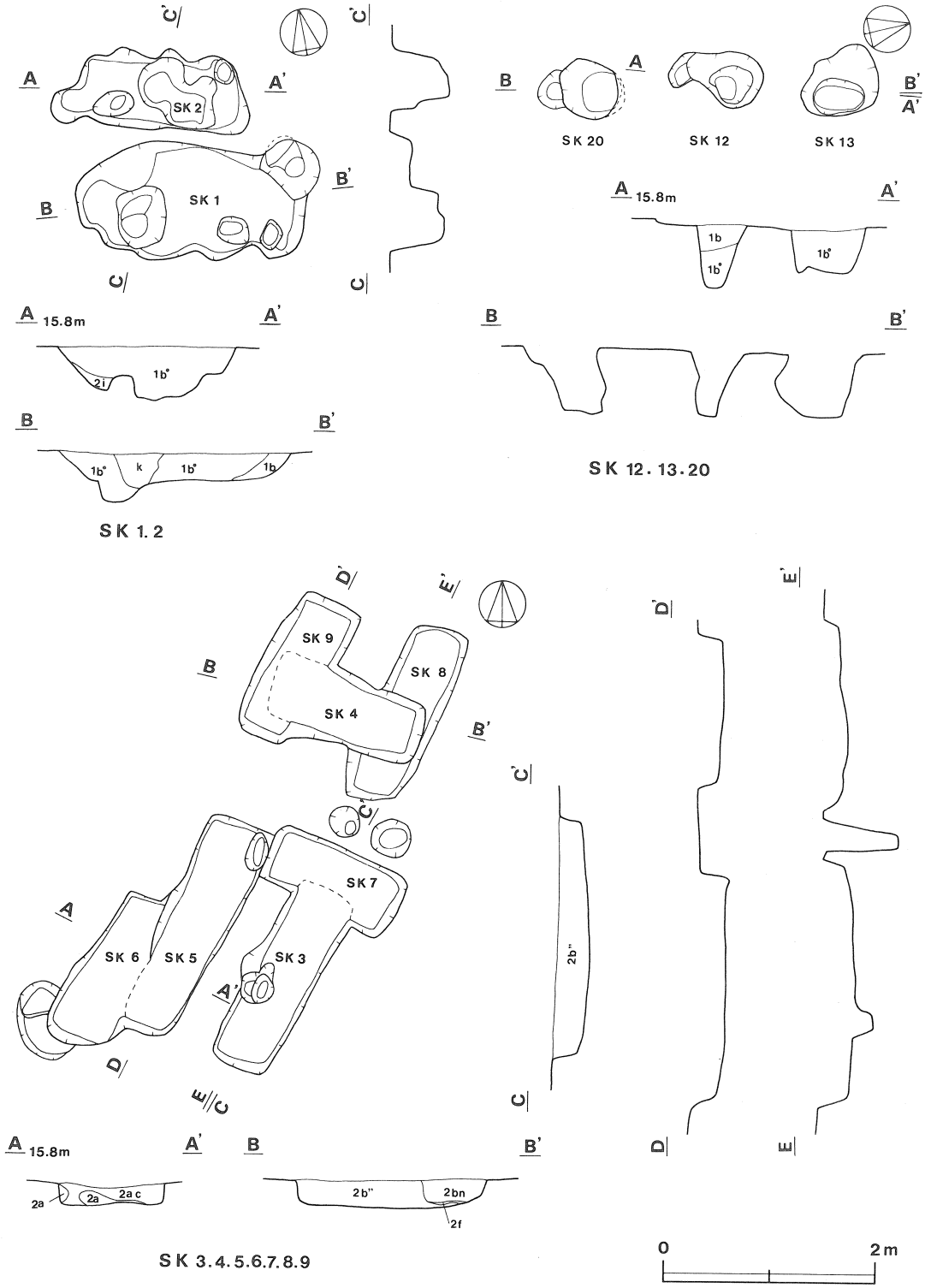
第61図　第２号住居跡出土遺物実測図(2)

(2)　土坑

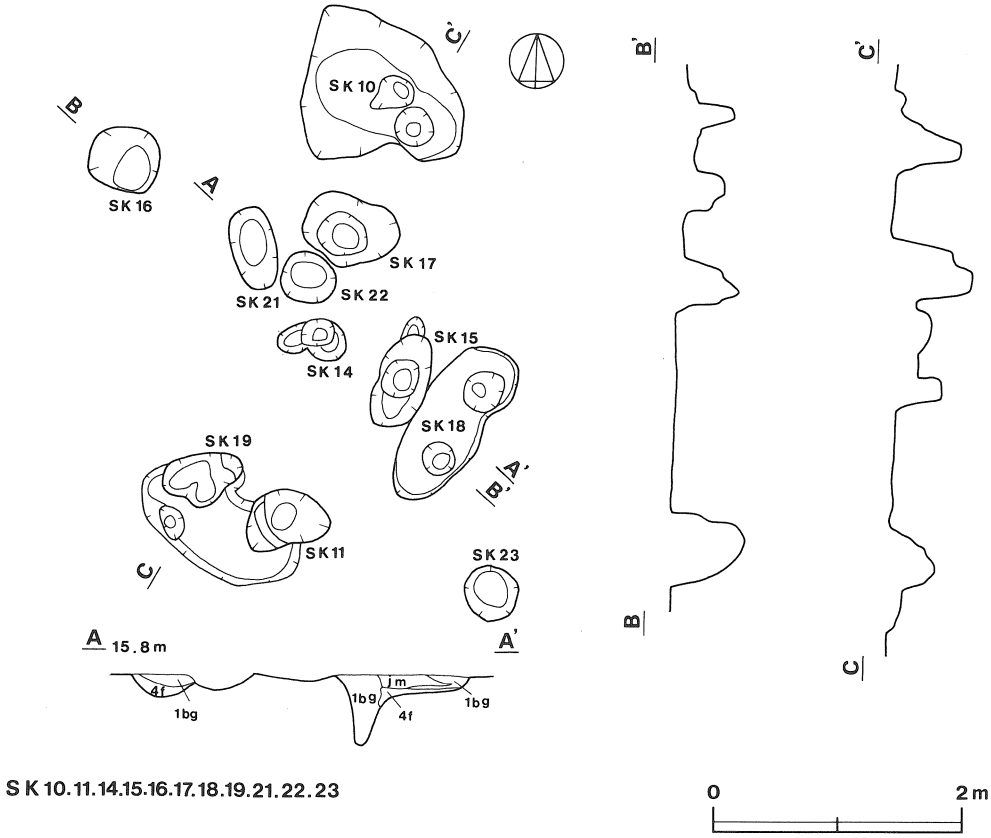
A2区の南東部に集中して23基が検出された。平面形状からみると長方形が７基，楕円形３基，円形２基，不定形が11基である。長方形のものは重複が多い。深さは５～69cmで一定していない。壁はほぼ垂直か少し外傾している。いずれも覆土は，ロームブロックを含む黒褐色土で，締まりがない。全体に遺物は少ないが，土師質土器，陶器，寛永通宝，土錘等が出土しており，近世以降のものと思われる。以下一覧表にまとめた。

表６　土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)			
ＳＫ１	A2j 8	N－73°－W	不定形	2.16×1.1	28	外傾	凹凸	寛永通宝１
ＳＫ２	A2j 8	N－80°－W	〃	1.84×0.64	54	〃	緩い起状	
ＳＫ３	A2j 8	N－30°－E	長方形	――×0.6	30	垂直	平坦	ＳＫ７と重複
ＳＫ４	A2i 8	N－67°－W	〃	――×0.65	25	〃	緩い起状	ＳＫ８・９と重複
ＳＫ５	A2j 8	N－25°－E	〃	2.18×0.62	28	〃	平坦	ＳＫ６と重複
ＳＫ６	A2j 7	N－32°－E	〃	1.57×0.55	22	〃	〃	ＳＫ５と重複
ＳＫ７	A2i 8	N－65°－W	〃	1.35×0.65	27	外傾	〃	ＳＫ３と重複
ＳＫ８	A2i 8	N－25°－E	〃	1.77×0.59	18	〃	〃	ＳＫ４と重複，灯明皿１
ＳＫ９	A2i 8	N-25.5°E	〃	1.45×0.65	25	〃	〃	ＳＫ４と重複
ＳＫ10	A2i 0	N－42°－W	不定形	1.55×1.25	10	〃	凹凸	
ＳＫ11	A2j 9	N－78°－E	〃	0.67×0.45	69	〃	〃	


SK 2
SK 1
SK 20
SK 12
SK 13
15.8m
1b
1b"
2i
k
SK 1. 2
SK 12. 13. 20
SK 9
SK 8
SK 4
SK 7
SK 6
SK 5
SK 3
2b"
2a
2a c
2bn
2f
SK 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9
0
2m

第62図　土坑実測図(1)

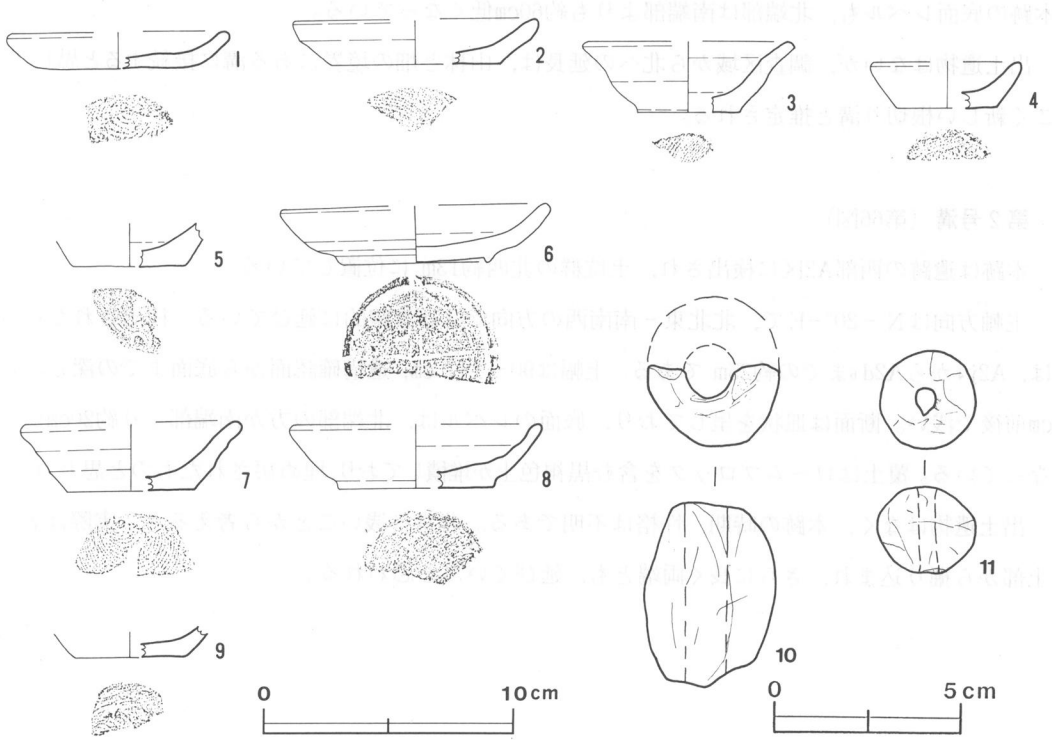


第63図　土坑実測図(2)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	壁面	底面	備考
SK12	A2j9	N－17°－E	不定形	0.89×0.51	62	外傾	凹凸	
SK13	A2j9	N－18°－E	〃	0.70×0.67	60	内傾	平坦	
SK14	A2i0	N－90°	〃	0.55×0.35	53	外傾	凹凸	
SK15	A2j0	N－22°－E	〃	0.92×0.40	49	〃	〃	灯明皿4・土錘1・土玉1
SK16	A2i9	N－69°－W	楕円形	0.57×0.51	60	〃	緩い起状	
SK17	A2i0	N－70°－W	不定形	0.74×0.55	64	〃	凹凸	灯明皿3
SK18	A2j0	N－33°－E	楕円形	1.40×0.58	5	〃	〃	
SK19	A2j9	N－64°－W	不定形	1.40×0.83	7～11	〃	〃	
SK20	A2j9	N－14°－E	〃	0.75×0.55	62	内傾	緩い起状	
SK21	A2i9	N－12°－W	楕円形	0.67×0.35	20	外傾	〃	
SK22	A2i0	――	円形	0.44×0.40	27	〃	〃	
SK23	A2j0	――	〃	0.44×0.40	60	〃	平坦	

出土土器観察表（第64図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	皿形 土器 土師質土器	A（8.6） B 1.4 C（6.0）	体部は内彎気味に短く開いている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 良好 にぶい橙色	25%
2	皿形 土器 土師質土器	A（9.7） B（1.8） C（6.8）	体部は厚く，短く外傾して立ち上がっている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 良好 灰黄色	15% SK8出土
3	皿形 土器 土師質土器	A（8.0） C（4.2）	体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直線的に開いている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 良好 にぶい橙色	15% SK15出土
4	皿形 土器 土師質土器	A（5.9） B 1.9 C（4.1）	体部は厚く，直線的に開いて立ち上がっている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 普通 灰褐色	15% SK15出土
5	皿形 土器 土師質土器	C（4.6）	体部は厚く，外傾して立ち上がっている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 普通 橙色	10% SK17出土
6	皿形 土器 陶器	A（10.5） B 2.3 C（5.9）	体部は内彎気味に大きく開いている。	底部を削り込んで高台を作り出している。	砂粒・礫 良好 灰褐色	45% SK15出土 灰白色の釉
7	皿形 土器 土師質土器	A（8.5） B 2.8 C（5.0）	体部は外傾して立ち上がり，口縁部はやや外反する。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー回転糸切り	砂粒 良好 橙色	30% SK17出土
8	皿形 土器 土師質土器	A（9.8） B 2.6 C（6.3）	体部は内彎気味に開いている。平底である。	内・外面ーナデ 底部ー糸切り後ナデている。	砂粒 良好 にぶい橙色	40% SK17出土
9	皿形 土器 土師質土器	C（4.4）	体部は厚く，内彎気味に開いている。	内・外面ーナデ 底部ー糸切り後，少しナデている。	砂粒 普通 にぶい橙色	10% SK15出土



第64図　土坑出土遺物実測図

土製品（第64図－10・11）

10・11とも第15号土坑の覆土中から出土したものである。10は管状土錘で，約半分が欠損している。指頭整形で，長さ4.9cm・径3.5cm・孔径1.1cm・現存の重量は21g である。11は土玉でほぼ球形を呈しており，長径2.55cm，短径2.3cm，孔径0.5cm，重量14g である。いずれも色調は暗褐色で，胎土には砂粒を含んでいる。焼成は普通である。

古銭（第68図－1）

第1号土坑の覆土中から出土したもので，寛永通宝である。直径2.4cm・厚さ1.4mmである。

(3) 溝

第1号溝（第65図）

本跡は遺跡の東部A3・B3区に検出され，B3b5付近で第1号住居跡を切り込んでいる。

主軸方向はN－32°－Eを指し，北北東－南南西の方向で，直線的に延びている。検出された長さはA3f9からB3f2までの約50m であるが，両端とも調査区域外へ続いている。上幅は140～220cm，下幅は30～40cmで，遺構確認面から底面までの深さは80～100cmである。断面は「凵」形を呈しており，底面，壁面とも凹凸は少ない。覆土はローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が主で一部耕作による攪乱もあるが，ほぼ自然堆積の状況を呈している。当遺跡は北に向かっており，本跡の底面レベルも，北端部は南端部よりも約60cm低くなっている。

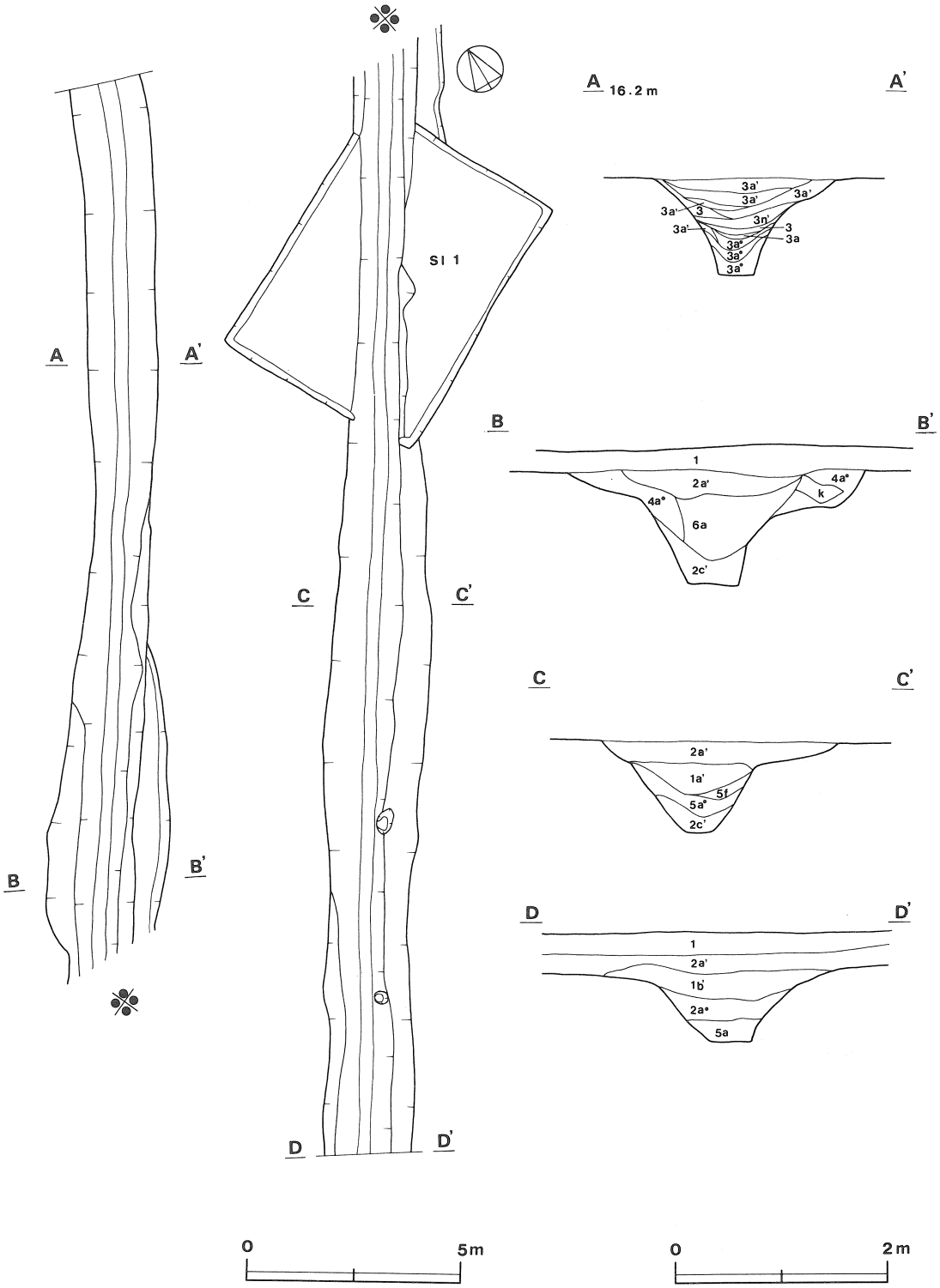
出土遺物はないが，調査区域から北への延長は，山林と畑の境界にある溝に接続すると思われ，ごく新しい根切り溝と推定される。

第2号溝（第66図）

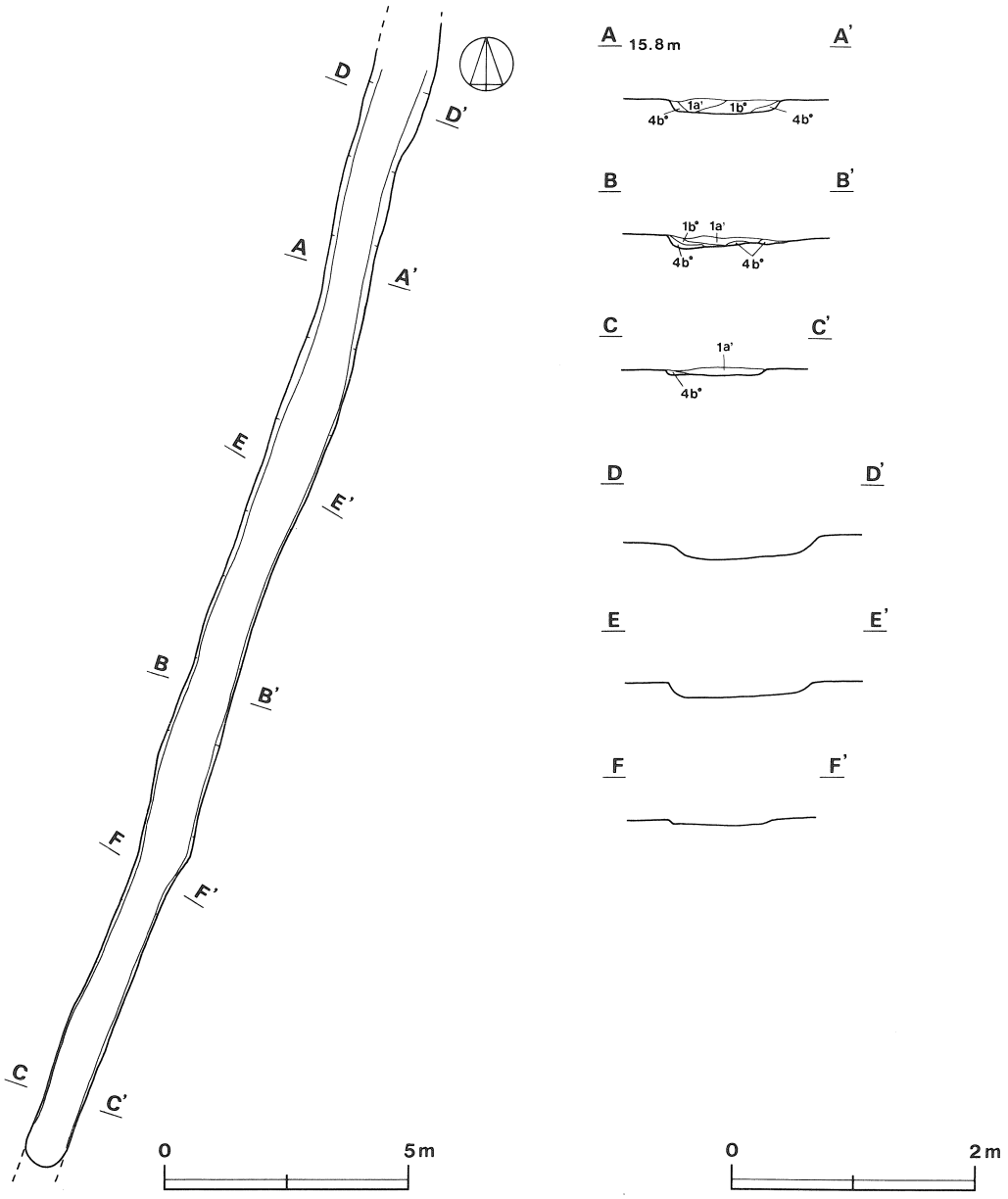
本跡は遺跡の西部A2区に検出され，土坑群の北西約13m に位置している。

主軸方向はN－20°－Eで，北北東－南南西の方向でほぼ直線的に延びている。検出された長さは，A2j4からA2d6までの約25m である。上幅は90～110cm，遺構確認面から底面までの深さは10cm前後で浅い。断面は皿状を呈しており，底面のレベルは，北端部の方が南端部より約20cm低くなっている。覆土はロームブロックを含む黒褐色土が堆積しており,埋め戻されたものと思われる。

出土遺物はなく，本跡の時期，性格は不明である。非常に浅いことから考えると，実際は表土上部から掘り込まれ，さらに長く両端とも，延びていたと思われる。



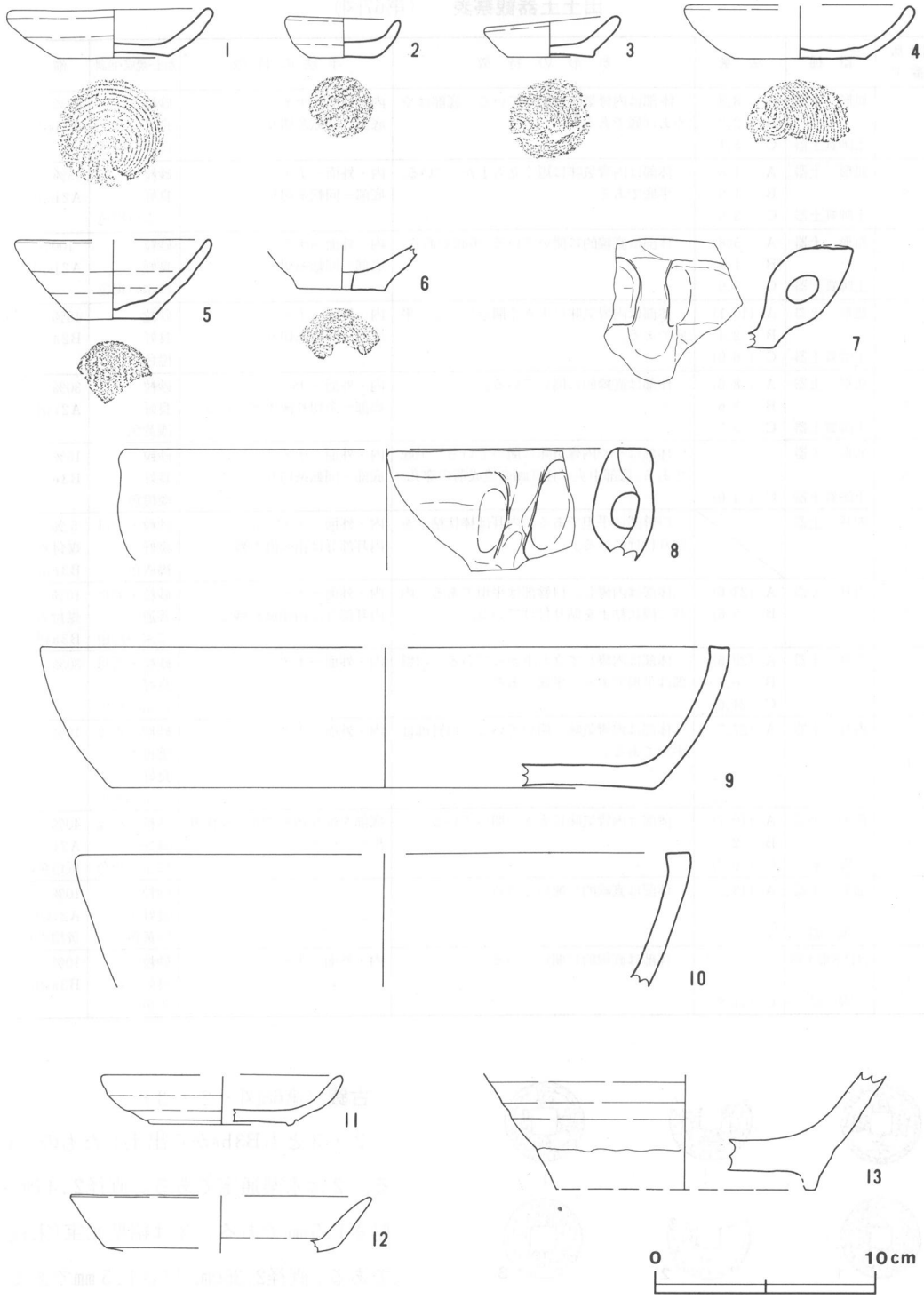
第65図　第１号溝実測図



第66図　第２号溝実測図

(4)　グリッド出土遺物

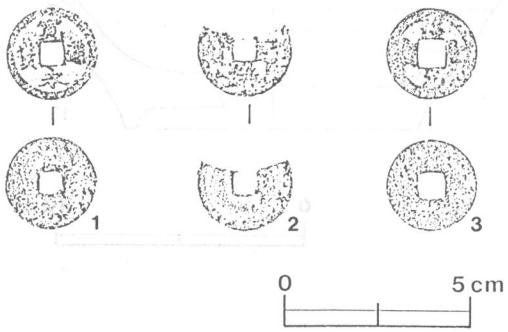
各グリッドからは，土師質土器，陶器，内耳土器などがわずかに出土している。土師質土器と陶器は，土坑群付近のグリッドから出土しており，器種，器形，その他土坑出土のものと同じものである。



第67図　グリッド出土遺物実測図

出土土器観察表　（第67図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	皿形　土器 土師質土器	A　8.8 B　2.2 C　5.1	体部は内彎気味に開いている。底部はややあげ底である。	内・外面－ナデ 底部－回転糸切り	砂粒 良好 にぶい橙色	85% A3j6出土
2	皿形　土器 土師質土器	A　4.8 B　1.9 C　3.0	体部は内彎気味に短く立ち上がっている。平底である。	内・外面－ナデ 底部－回転糸切り	砂粒 良好 にぶい橙色	95% A2i0出土
3	皿形　土器 土師質土器	A　5.8 B　1.9 C　3.9	体部は直線的に開いている。平底である。	内・外面－ナデ 底部－回転糸切り	砂粒 良好 にぶい褐色	100% A2j0出土
4	皿形　土器 土師質土器	A（10.1） B　2.4 C（6.0）	体部は内彎気味に大きく開いている。平底である。	内・外面－ナデ 底部－回転糸切り	砂粒 良好 橙色	40% B2a9出土
5	皿形　土器 土師質土器	A（8.6） B　3.6 C　3.5	体部は直線的に開いている。	内・外面－ナデ 底部－糸切り後ナデている。	砂粒 良好 浅黄色	30% A2i0出土
6	皿形　土器 土師質土器	C（4.0）	体部はやや内彎気味に開いている。平底である。底部中央に径6㎜の焼成前の穿孔。	内・外面－ナデ 底部－回転糸切り	砂粒 良好 淡橙色	15% B3e3出土
7	内耳　土器		口唇部は平坦である。内耳は棒状粘土を貼り付けている。	内・外面－ナデ 内耳部分は指頭痕が残る。	砂粒・雲母 良好 褐灰色	5% 煤付着 B3c4出土
8	内耳　土器	A（23.6） B（5.6）	体部は内彎し，口唇部は平坦である。内耳に棒状粘土を貼り付けている。	内・外面－ナデ 内耳部分は指頭痕が残る。	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	10% 煤付着 B3a6出土
9	内耳　土器	A（29.5） B　6.4 C（24.6）	体部は内彎して立ち上がっている。口唇部は平坦である。平底である。	内・外面－ナデ	砂粒・雲母 良好 にぶい橙色	30%
10	内耳　土器	A（27.7）	体部は内彎気味に開いている。口唇部は平坦である。	内・外面－ナデ	砂粒・小礫 雲母 良好 にぶい褐色	10%
11	皿形　土器 陶　器	A（10.7） B　2.2 C（6.2）	体部は内彎気味に大きく開いている。	底部を削り込んで高台を作り出している。	砂粒・小礫 良好 にぶい橙色	40% A2i0出土 灰白色の釉
12	皿形　土器 陶　器	A（13.2）	体部は直線的に開いている。		砂粒 良好 灰黄色	10% A2i0出土 黄橙の釉
13	台付壺形土器 陶　器	C（11.2）	体部は直線的に開いている。	内・外面－ナデ	砂粒 良好 灰色	10% B3a6出土



第68図　古銭拓影図

古銭（第68図－2・3）

2・3ともB3b6から出土したものである。2は永楽通宝である。直径2.4㎝，厚さ1.5㎜である。3は紹聖元宝（宋銭）である。直径2.35㎝，厚さ1.5㎜である。

4　まとめ

当遺跡からは，古墳時代の住居跡２軒，近世の土坑23基，不明の溝２条が検出されたが，注目されるのは，第１号住居跡から石製模造品の祭祀遺物が多量に出土したことである。ここでは，第１・２号住居跡とその出土遺物についてまとめ，さらに当遺跡における祭祀について考えてみる。なお，当遺跡の祭祀については，椙山林繼先生の御教示を参考とした。

(1)　遺構と遺物について

表７　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉	覆土	出土遺物	時期
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)						
1	B3b5	N－63°－E	長方形	6.6×4.8	20	平坦	3		自然	土師器,須恵器,石製模造品,土製品	古墳時代中期
2	B2a6	N－36°－W	長方形	6.2×3.7	27	平坦	0	炉	自然	土師器，石製模造品	古墳時代中期

出土遺物数

第１号住居跡 ― 高坏形土器14（うち須恵器１），甕形土器５，埦形土器８，坏形土器２，坩形土器１，子持勾玉１，勾玉10，臼玉3570，紡錘車１，土玉９

第２号住居跡 ― 甕形土器４，埦形土器１，坏形土器１，勾玉１

①　住居跡

当遺跡では，住居跡２軒とも平面形は長方形を呈しており，第２号住居跡は第１号住居跡より細長い。和泉期では，一般に方形のものが多く，特に，第１号住居跡からは祭祀遺物が出土していることから，長方形のものは祭祀に関係があるようにも考えられるが，出土土器はこの時期に通常見られるものであり，住居跡の形状は，祭祀との結びつきはないと思われる。

②　土器

大部分が土師器で，須恵器が１点だけ出土している。いずれも同一時期のものであり，量的には第１号住居跡の方が多い。高坏形土器が最も多く，次いで埦，甕形土器である。

○甕形土器

口縁部は「く」の字に開くが，直線的に外傾するものと，外反するものがある。胴部はほぼ球形のものと，やや長胴のものとがある。口縁部は横ナデであり，胴部はヘラ削りかナデ整形である。

○坏・埦形土器

坏形土器と埦形土器とを明確に区別するのは困難であり，まとめて記述する。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は短く外傾する。底部は小さく，ややあげ底である。内面の口縁部と体部の境に稜を有している。同じく体部が内彎しながら立ち上がり，そのまま口縁部へ至り，半球

形を呈するものや，口縁部が内傾するものがある。口縁部は横ナデ，体部はナデやヘラ削りがみられる。

○高坏形土器

体部は内彎気味に大きく開き，体部の中位または下位に稜を有している。稜を境に外傾して口縁部へ至る。脚部はほぼ直線的に「ハ」の字に開き，裾部は屈曲して広がっている。口縁部は横ナデ，体部・脚部ともナデかヘラミガキがなされている。これらのほかに唯一の須恵器の高坏形土器と，内外面赤彩で体部に段を有する大形の高坏形土器がある。

○坩形土器

大形のものが1点だけである。小形壺とも言えるもので，胴部が大きく張り，扁平な球形を呈するものである。

以上，器種別に器形，整形を観察したが，いずれも和泉期のうちで新しいとされるものである。また，次の鬼高期へ継続するものも見られる。第52図の1・4・5のやや長胴化した甕形土器や，第54図の26・29の丸底で浅く，稜をもち，口縁部が直立または内傾する埦・坏形土器がそうである。また須恵器の高坏形土器であるが，器形・整形から5世紀の第4四半期頃のものと思われる。第1・2号住居跡出土の少ない土器からではあるが，住居跡にカマドを持たないことと合わせて，時期を推定すれば古墳時代中期末で，5世紀末から6世紀初めにかけてのものと思われる。

③　石製模造品

第1号住居跡の北西壁中央部付近の床面から，長径約1m，短径約0.8mの範囲で子持勾玉1点，勾玉10点，臼玉3570点がまとまって出土し，約4m離れた南西壁中央部の壁下から，紡錘車が1点出土している。また，第2号住居跡からは勾玉が1点出土している。いずれも滑石製で，未成品は見られない。出土したのはこの4種類だけで，有孔円板や剣形品は全く出土していない。

○子持勾玉

子持勾玉は各地で出土しているが，大部分は年代推定の手がかりとなるような伴出遺物もなく，単独でしかも偶然に発見されていて，出土状況が明らかなものは少ないようである。[1] この意味では，当遺跡出土のものは貴重な例であると思われる。

石製模造品は一般に，精巧で，入念に作られたものが古く，粗製で扁平なものが後出のものとされており，それは子持勾玉も同様である。子持勾玉の場合は，まず，古くは身の断面が円形に近く，やがて楕円形，板状となり粗製品化する。頭や尾も，古くは両端を平坦に截断しているが，新しくなるにつれ，丸味をもち，細くなるようである。当遺跡の子持勾玉は，身の断面がほぼ円形であり，入念，精巧に製作されている。また全体に均整がとれ，美しい形を呈している。頭尾両端も平坦に截(き)り落とされている。さらに，背に4個，両側に3個，腹に1個の鰭(しろ)状突起もよく発達しており，この形状からすると，最も古く，出土例も多い部類にはいるものである。大場磐

雄博士の形式分類[2]による，いわゆるＡＩ型になるものである。この型の子持勾玉は，本県では，岩井市弓馬田（ゆまた），北相馬郡内，行方郡牛堀町などから出土しているが，牛堀町出土のものは鰭状突起はそれほど発達していない。

子持勾玉は秋田県～鹿児島県まで出土しているが，特に関東地方に多く，全国の約30％を占めている。下総から常陸南部にかけて多く出土し，本県ではすでに25か所27個[3]が出土している。

○勾玉

出土した10点は，大小の差はあるが，いずれも扁平で板状であり，粗製である。石製模造品では新しい部類に入るもので，子持勾玉とは時間的に逆になる。おそらく，石材から板状のものを作り，これから勾玉形に形り出されたものと思われる。孔は一方から穿たれており，両面，側面とも研磨されている。

○臼玉

狭い場所に3570個が密着して出土したため，1個ずつのレベルは計測できなかった。平面分布状況も可能な限り図におとしたが，2190個までであった。また1㎠に，多いところで10個も出土しているため，出土状況図は模式化せざるを得なかった。出土範囲は長径約1ｍ，短径0.8ｍの中にほぼ限られ，この場所以外からはほとんど出土していない。形状を観察すると，側面中央に稜を作り，そろばん玉に丸味をもたせたようなもの，側面に稜がなく丸味をおびたもの（太鼓状），円筒状のものとがある。そのうち円筒状のものが最も多く約57％，そろばん玉状のものが約22％，太鼓状のものが約21％を占めている。しかし，そろばん玉状のものと太鼓状のものの区別はつきにくい。臼玉全体の出土の高低差は約10cmで，黒褐色土中に1個1個バラバラの状態で出土し，また孔の向きもまちまちで，臼玉が糸状のものに通されていたかどうか判別できる出土状況ではなかった。壁を中心に半径約30cmの範囲が最も多く出土しており，その範囲は床面より約7cmほど窪んでいる。この窪みが何を意味するかが，問題であるが，遺物の出土状況からは特別な施設らしきものがあったかどうか確認できなかった。榊などの木を立てたかとも想像できる。

このように臼玉が多数出土した例は，福島県西白河郡表郷村三森遺跡（建鉾山）の約4574個，奈良県天理市布留石上神社禁足地の3502個，佐賀県三養基郡基山町小倉伊勢山遺跡の約2000個，長野県神坂峠の1319個[4]があり，当遺跡は全国的に見ても多い部類にはいるものと思われる。

○紡錘車

滑石製で截頭円錐形の紡錘車は祭祀遺跡から出土することが多い。また，実用品とすることも可能なものも多い。当遺跡の場合は，他の玉類とは離れて出土しており，祭祀に使用されたかどうかは不明である。使用される場合は，棒を通し糸などを巻いて奉献されたものと思われる。

第69図　臼玉出土状況模式図

(2) 向坪B遺跡の時期について

石製模造品を出土する祭祀遺跡は，遺跡により差もあるが，だいたい5～6世紀を中心に展開されている。しかし，祭祀遺跡から出土する石製模造品には，地域的に差がなく，特色がみられない。これは，祭祀遺物と祭祀の方法が，短期間に強い力によって広まったことが考えられる。そのため，祭祀遺跡や仮器化，儀器化した祭祀遺物の編年は困難となり，まだ確立されていないのが現状である。そこで，伴出する土器によって，年代を推定しているが，一般に和泉期と鬼高期のものが多く，特に鬼高期でも古いもの（鬼高Ⅰ式）が多いようである。

当遺跡においても，子持勾玉と勾玉では，その製法からみると時間的には逆になり，年代推定には問題がある。伴出土器によって推定するならば，当遺跡の土器は前述のとおり，和泉期末に比定されるものであり，5世紀末～6世紀初めということになる。

(3) 向坪B遺跡における祭祀について

①第1号住居跡の性格について

祭祀遺物が多量に出土した第1号住居跡の性格を把握することは，当遺跡における祭祀についても考えることになる。

第1号住居跡からは，甕・埦・坏形土器などの日用什器が出土しており，その中には二次焼成を受けた甕形土器もある。またこの時期では，一般的な住居跡からも，高坏形土器や赤彩の土器が多く出土しており，祭祀だけに使用されたものではないと考えられる。従って本跡は，祭祀に関係のある者の日常生活の場であった可能性が強く，祭祀だけを行った特別な遺構ではないと思われる。そこで問題になるのは，第1号住居跡内で祭祀が行われたかどうかということである。本跡と非常に類似している千葉県小室遺跡D203号住居跡[5]と比較してみる。D203号住居跡は，1辺10m 以上の方形の大形住居跡で，和泉式土器のほかに，西壁中央部から径3㎝，長さ約2mの炭化木材が十数本並んで出土したことから，棚が設けられていたと考えられている。この周囲から，多くの小形壺，高坏とともに，石製模造品，紡錘車，土玉等が出土している。本跡では，棚と思われるような施設があったかどうかは，出土状況からは判断できず，石製模造品が土器を伴っていないことがD203号住居跡と異なっている。

本跡の場合，石製模造品が集中出土していることは，祭祀用具を保管していた場所と考えることもできる。また，この場所では祭祀には使用されたであろう土器が出土せず，石製模造品だけが出土していることも，祭祀が行われたのではなく，祭祀用具の保管の場の可能性もありうる。

しかし，子持勾玉をはじめ勾玉や多量の臼玉が出土していることは，祭祀が行われたことも充分考えられる。以下，第1号住居跡内で祭祀が行われた場合について考えてみる。

②祭祀の対象について

関東地方は祭祀遺跡が多いことから，祭祀の対象も各種類があるといわれている。まず，山岳を対象としたものには，赤城山，二荒山（男体山），筑波山などの大岳名山を対象としたものと，いわゆる神奈備型のものがある。そのほか，石を対象としたもの，池・沼・海などの水霊を祭った遺跡，古社に関する遺跡，集落内の祭祀などがある。

当遺跡の場合，祭祀の対象として考えられるのは，山と沼であろう。当遺跡から望むことができる山は，南西に富士山，北に男体山，東に筑波山がある。いずれも名山であるが，当遺跡からは遠距離すぎて，見えても小さく印象的ではない。また，富士山，男体山は季節によっては見ることはできず，最も近い筑波山も当遺跡からは約30kmもあり，従って，祭祀の対象とするには，無理なように思える。むしろ，当遺跡の約60m 東にある長井戸沼（現在は干拓されて水田となっている）をその対象と考えた方が，自然である。しかし，沼（水）の神を対象として祭祀が行われた場合，住居跡内での石製模造品の出土位置が，沼のある方向（東側）でないのが，不自然で問題が残る。

③祭祀の状況について

第１号住居跡で祭祀が行われた場合に，どのような状況が想定されるか，遺物の出土状況から推定できることをあげてみる。

○石製模造品の周囲からは，炭化したヒシの実が出土しているが，このヒシの実は，おそらく長井戸沼から採取されたものと思われる。ヒシの実は食用にもなるが，祭祀が行われる時に沼の神に供献されたものとも考えられる。

○臼玉が多量に出土していることから，祭祀を行う上で，多くの臼玉を必要としたことが考えられる。また，集落内の臼玉を持ち寄ったことも考えられる。

○子持勾玉であるが，特別な出土状況は認められず，他の石製模造品と同じ状況で出土しており，出土状況からは，子持勾玉が特別に扱われていた可能性は少ない。

○石製模造品をどのように使用したかであるが，出土状況からは，他に遺物を伴っておらず状況を復元するのは困難である。想像の域を出ないが，狭い範囲に集中して出土したことと，すべて有孔の玉類ということから，北西壁際に榊が立てられ，糸状のものを通した玉類がクリスマスツリー状に垂げられたものと思われる。

○本跡からの出土土器中唯一の須恵器（高坏）であるが，祭祀遺跡では，祭祀関係の遺物のほかに，量的には少ないが須恵器が出土する例が見られる。須恵器は日用什器として使用されたほかに，祭器として使用されたのではないかとも言われている。そのほか，古墳や祭祀遺跡で多く見られる例として，破砕された須恵器がある。当遺跡の須恵器は接合して完形となったが，破砕された状態で出土しており，祭祀に関係あると考えられなくもない。しかし，他の土師器

も破砕された状態で出土していること，また，石製模造品が出土した位置からは離れて出土していることなどから，須恵器が祭祀に使用されたかどうかは不明である。

以上，向坪B遺跡における祭祀について，考えられることを述べてきたが，多くの問題を残している。祭祀遺跡の調査例は増えているが，まだ不明な点が多く，子持勾玉ひとつをとっても，その用途，性質についてはまだ解明されていない。当遺跡の場合も，当時の人々がどの様な祭りを行ない，何を神に祈ったかなど，祭祀の形態を明らかにするには，まだまだ不十分であり，研究の余地を残しているので，今後検討を加えたい。

注

(1) 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第3巻　昭和58年

(2) 大場磐雄ほか『武蔵伊興』国学院大学考古学研究報告第2冊　昭和37年

(3) 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第1巻　昭和58年

(4) 小野真一『祭祀遺跡』考古学ライブラリー10　昭和57年

(5) 椙山林繼ほか『小室』千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　昭和49年

参考文献

○ 大場磐雄ほか『神道考古学講座』第2巻　昭和57年

○ 茨城県『茨城県史料』考古資料編・古墳時代　昭和49年

○ 倉田芳郎ほか『千葉・上ノ台遺跡』千葉市教育委員会　昭和57年

○ 阪田正一ほか『八千代市権現後遺跡』千葉県文化財センター　昭和59年

○ 小野真一『祭祀遺跡地名総覧』考古学ライブラリー11　昭和57年

○ 佐藤政則「家屋内出土の祭祀遺物」日立市郷土博物館『紀要』第2号　昭和57年

○ 定岡明義ほか『聖山公園遺跡』宇都宮市教育委員会　昭和59年

○ 寺村光晴『房総出土の古代の玉』千葉県立房総風土記の丘　昭和56年

北新田A遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，茨城県猿島郡総和町柳橋字香取前237ほかに所在し，面積は16600㎡で，幅約40ｍ，長さ約400ｍの南北に細長い調査区域となっている。当遺跡は，柳橋地区の北西約１㎞に位置し，長井戸沼の東枝と西枝に挟まれた北から南に延びる平坦な台地の南～西縁辺部に立地しており，標高は18～19ｍで，現況は平坦な畑である。西方約200ｍには長井戸沼西枝が南北に延びて水田となっており，水田面との比高は６～７ｍである。南方約100ｍには長井戸沼西枝から東に向かって小さな谷津が入り込んでいる。当遺跡は香取前遺跡の一部としてとらえられており，東方約800ｍには柳橋城跡が所在し，その南には弁才天Ｂ遺跡が接しており，鉄滓やフイゴ片が出土している。北方約250ｍの新４号国道路線上には，北新田Ｂ遺跡が所在する。

検出された遺構は，古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居跡62軒のほか，溝10条，土坑７基，井戸２基，掘立柱建物跡１棟である。遺物は土師器，須恵器のほか鉄製品，土製品，石製品などが出土している。

当遺跡は，昭和58年度に16,100㎡を調査し，残り500㎡は用地問題の解決が遅れたため，昭和60年度に調査した。なお，Ｊ区からＫ区にかけて南北に，幅約７ｍ，長さ約65ｍにわたり，深さ２～３ｍほど土取りされていた。

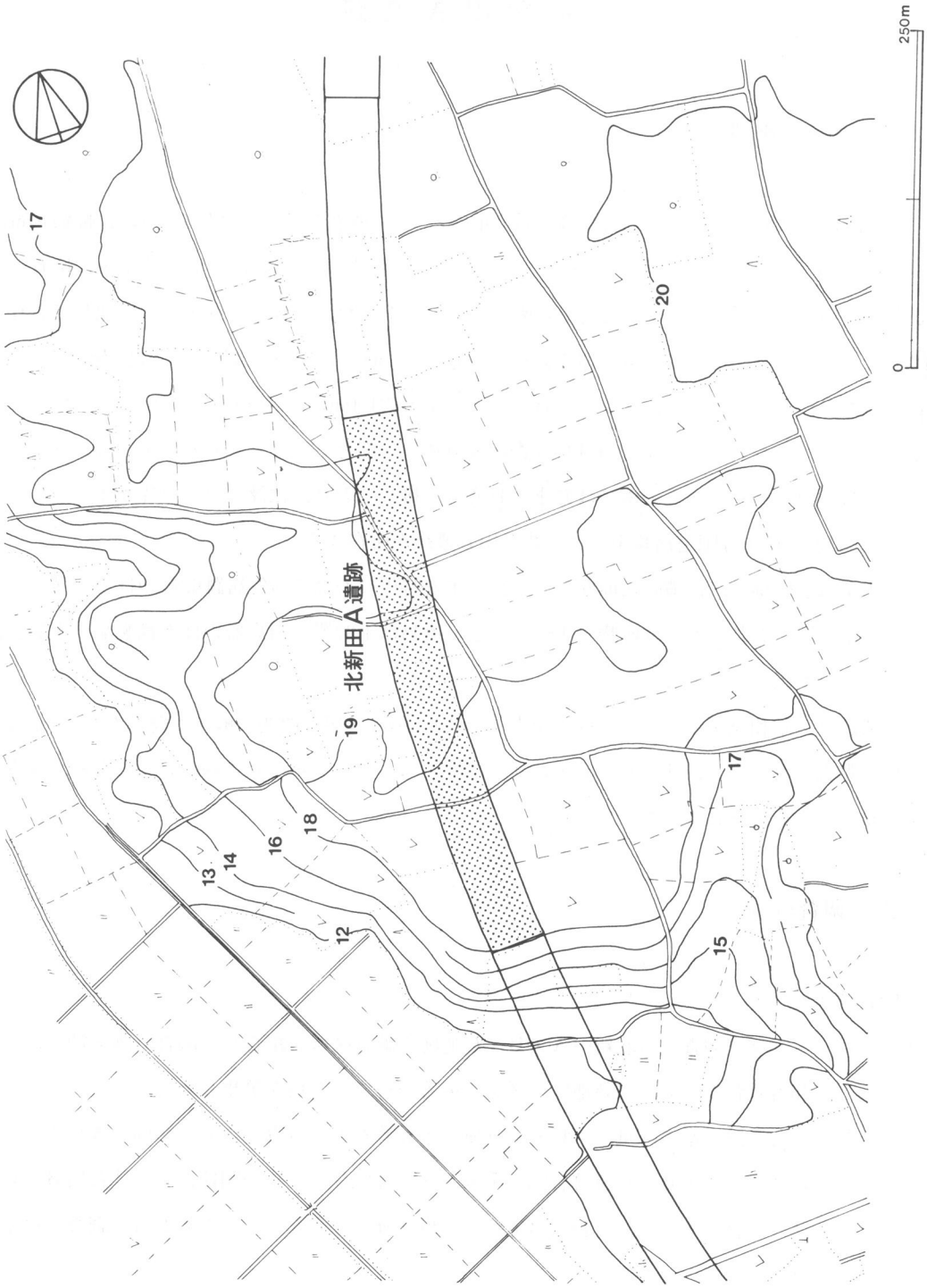
2　調査経過

＜昭和58年度＞

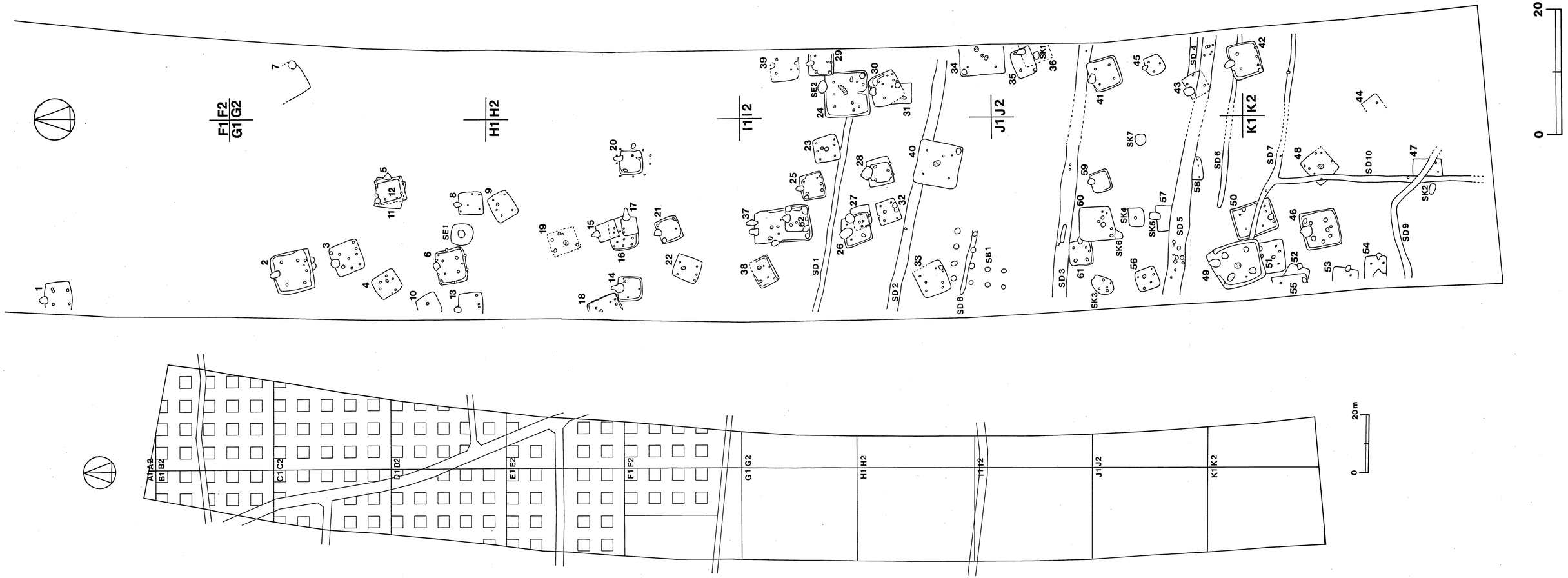
4　月　本年度調査する北新田Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡の調査区域を踏査し，調査計画を練った。総和町教育委員会，当該地区の区長の協力を得て作業員を募集した。

5　月　各遺跡の基本測量，事務所・倉庫等の設置など，調査のための準備を進めた。９日に北新田Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡合同の鍬入れ式を実施し，上物の関係から，北新田Ｂ・Ｃ遺跡の調査を先行し，北新田Ｂ遺跡は遺構が確認されなかったため31日で調査を終了した。

6　月　北新田Ｃ遺跡の調査と並行して，９日より北新田Ａ遺跡の調査を開始した。上物除去を行い，遺跡の調査前の全景写真を撮影後，Ｘ軸＋19200ｍ，Ｙ軸－4700ｍの交点を基準として調査区を設定し，方眼杭打ちを行った。14日より，A1～A2区から順に



第70図　北新田A遺跡地形図



第71図　北新田A遺跡全体図

南へ８分の１のグリッド発掘を開始した。遺跡の北半分のＡ～Ｆ区からは遺構は確認されず，遺物の出土もほとんどなかったが，南半分のＧ～Ｋ区からは，遺構と思われる落ち込みが約20か所確認され，また各グリッドからは土師器や須恵器が出土し，集落跡の存在が判明した。

7　月　残り８分の１グリッド発掘を行った。Ａ～Ｆ区にかけては，F1区から住居跡１軒が確認されただけであった。Ｇ～Ｋ区は全域にわたって遺構の存在が予想されたため，土層観察を行い，全面を重機によって表土除去することにした。F1区で確認された住居跡の周囲のグリッドを拡張し，第１号住居跡として調査を進めた。北新田Ｃ遺跡は本月末日で調査を完了した。

8　月　２日から重機によりＧ～Ｋ区の表土除去を行った。表土除去後，順次遺構確認作業を行い，住居跡約50軒，溝10条，そのほか掘立柱建物跡や土坑を検出した。住居跡の何軒かは，重複しており，またカマドを有するものも半数以上認められた。連日猛暑が続き，確認作業が難航したが，当遺跡は古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡であることが判明した。

9　月　Ｇ区から南へ順に遺構調査を開始した。G1・G2区の第２～13号住居跡と第１号井戸の調査を行った。第６号住居跡からは，土師器・須恵器や鉄製品など多くの遺物が出土した。また，第１号井戸は，最初住居跡として掘り込んだところ，２段掘り込みの井戸であることが判明した。

10　月　H1・H2・I1・I2区の第14～25号住居跡と第１号溝・第２号井戸の調査を行った。第15・16・17号住居跡は３軒が重複しており，新旧関係の把握に手間取った。

11　月　引き続き遺構の多いI1・I2区の第26～31・37～40・62号住居跡と第２・３号溝の調査を行った。第26号住居跡の上に第27号住居跡が重複し，重複部分には貼り床が認められた。また第37号住居跡の北壁にはカマドが２基検出された。

12　月　I1・I2　J1・J2区の第32～36号住居跡，第８号溝・第１号土坑・第１号掘立柱建物跡の調査を行った。第36号住居跡は削平されて遺存状態が悪く，床面とカマドの一部しか残っていなかった。

1　月　J2・K2区の第41～45号住居跡，第４・５・６号溝の調査を行ったが，例年になく雪が多く，調査に支障をきたした。第44号住居跡は土取りのため，遺構の大部分が切り取られており，一部の調査にとどまった。

2　月　除雪作業をしながらJ1・K1区の第46～51号住居跡，第７・９・10号溝の調査を進めた。第46・49号住居跡からは甕形土器・坏形土器などの多くの遺物が出土し，出土状況の記録に時間を費やした。

3　月　K1区の第52～55号住居跡，第２号土坑の調査を行った。３日に現地説明会を開き，多くの見学者が訪れた。その後補足調査を行い，８日に昭和58年度分の調査を完了した。

＜昭和60年度＞

4　月　北新田Ａ遺跡の未調査分500㎡の現地踏査を行い，調査区域を確認した。現場事務所・倉庫の設置，器材の搬入等調査の準備を進め，併せて作業員の募集をした。25日より作業員を投入し，伐開，上物の焼却作業を行った後，重機によって全面を表土除去した。続いて遺構の確認作業を行い，住居跡６軒，土坑５基，溝２条を検出したが，溝２条は，58年度に調査した第３・５号溝の延長であることが判明した。

5　月　調査区を設定し，方眼杭打ちを実施した。J1区の第56・57・60号住居跡，第３～５号土坑・第５号溝の調査を実施した。全体に出土遺物は少ないが，第３号土坑からは，多くの土器が投棄されたような状態で出土した。

6　月　引き続きJ1区の第58・59・61号住居跡，第６・７号土坑，第３号溝の調査を実施した。第61号住居跡は，第３号溝によって切られ，大木の根株の下に位置していた割には遺存状態が良く，遺物も比較的多く，カマドも大部分が残っていた。全景写真撮影後，補足調査を行い，19日に調査を完了した。

3　遺構と遺物

当遺跡で検出された遺構は，竪穴住居跡62軒，土坑７基，溝10条，井戸２基，掘立柱建物跡１棟である。これらの遺構はいずれも，台地の南端に近い遺跡の南半分から検出されており，台地のやや奥にある北半分からは，遺構は検出されていない。調査区域が南北に細長いため，遺構の分布（集落の範囲）はさらに東西へ広がるものと思われる。住居跡は，出土遺物は古墳時代から平安時代にかけてのもので，約３分の１は重複している。土坑・溝・井戸・掘立柱建物跡については，その時期・性格については不明なものが多い。

遺物はほとんどが住居跡出土のもので，土師器，須恵器，鉄製品，石製品，土製品などである。土師器では甕形土器・坏形土器のほか，高台付坏形土器・埦形土器・高坏形土器・甑形土器などが出土している。須恵器では坏形土器・甕形土器が多く，そのほか蓋・台付長頸壺・盤などが出土している。鉄製品では鎌・鏃，石製品では紡錘車等が顕著なものである。

なお，遺構解説文中の規模の記述について，(　) mは計測不可能のため空欄とした。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第72図）

本跡は$F1d_4$を中心に確認され，当遺跡の遺構の中で最も北方で，第2号住居跡の北側約35mに位置している。本跡の西側部分は調査区域外へと延びている。

平面形は4.20m×(　)mの方形を呈していると推定され，主軸方向はN－2.5°－Wを指している。壁は西壁を除いてやや外傾して立ち上がり，壁高は10～15cmである。床面はほぼ平坦で全体に堅い。南壁中央部から北に向かって幅約1m，長さ約2mの範囲は，周囲より2～3cm床面が高く，しかもよく踏み固められている。また南壁下から幅1mの範囲には2～3本のピットが並んでおり，出入口部かと思われる。ピットはP_1～P_7の17か所が検出されたが，P_1～P_4は主軸に対称に配置され，いずれも径40～50cm・深さ70～90cmとしっかりしたもので主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，耕作による攪乱のため原形をとどめていない。規模は不明であるが，北壁を70cmほど切り込み，火床は床を15cm掘り凹めている。覆土はカマド付近の攪乱を除いて，ほぼ自然堆積の状態を示している。褐色土が主で，上層にはローム粒子，下層には焼土粒子が含まれている。

遺物は土師器や須恵器が少量出土している。南壁際や中央部の床面からは土師器・須恵器の坏形土器（第73図－2・3），覆土からは古銭3枚（第73図－4～6）が出土し，カマド内からは鉄鏃（第73図－7）が出土している。

出土土器観察表（第73図）

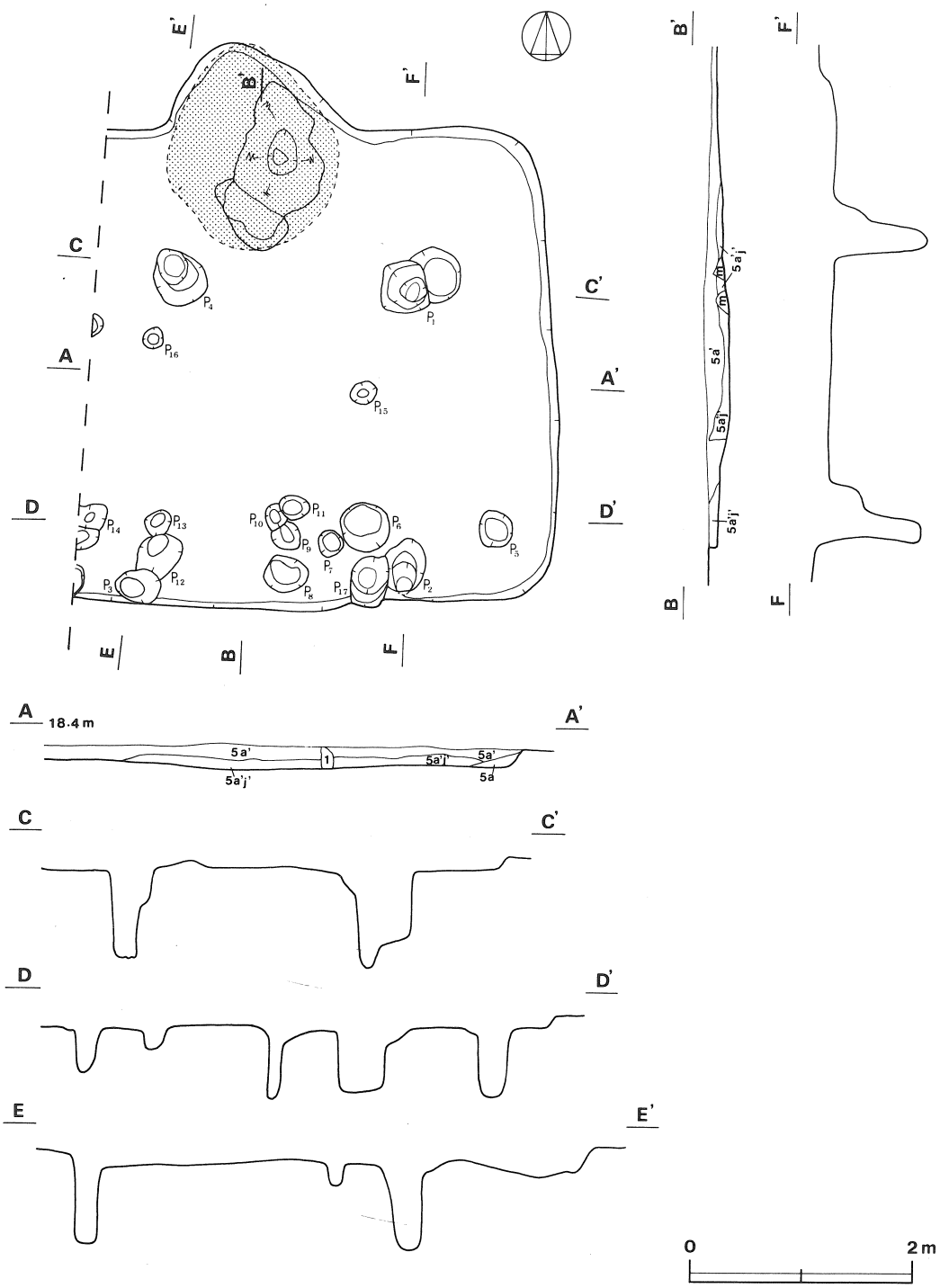
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A　23.4	口縁部は外反しながら開く。器肉は薄い。	口縁部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	10%
2	坏形　土器 土師器	C　8.0	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで切り離しは不明。 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 にぶい橙色	60%
3	坏形　土器 須恵器	A (12.4) B　3.85 C (6.9)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－右回転利用の回転糸切り後無調整　口縁部から内面は横ナデで丁寧な作り	砂粒 良好 青灰色	40%

古銭（第73図－4～6）

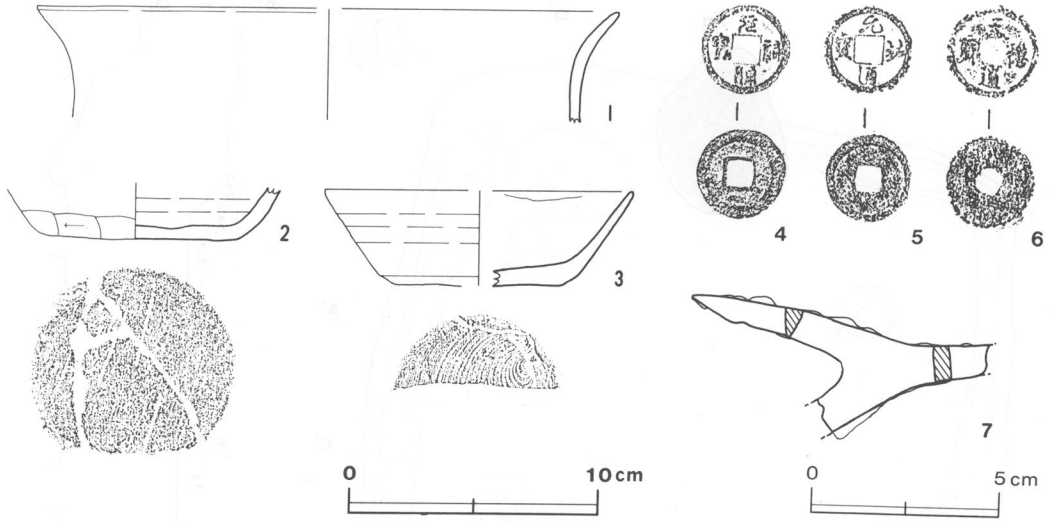
4は元祐通宝（北宋1086）で完存品である。径2.4cm・内孔7mm四方・輪1.5mmである。

5も元祐通宝であるが，4とは字体が異なり完存品である。径2.3cm・内孔7mm四方・輪2mmである。

6は天禧通宝（北宋1017～1021）で完存品であるが，やや摩滅している。径2.4cm・内孔7mm・輪1.5mmである。



第72図　第１号住居跡実測図



第73図　第１号住居跡出土遺物実測図

鉄製品（第73図－７）

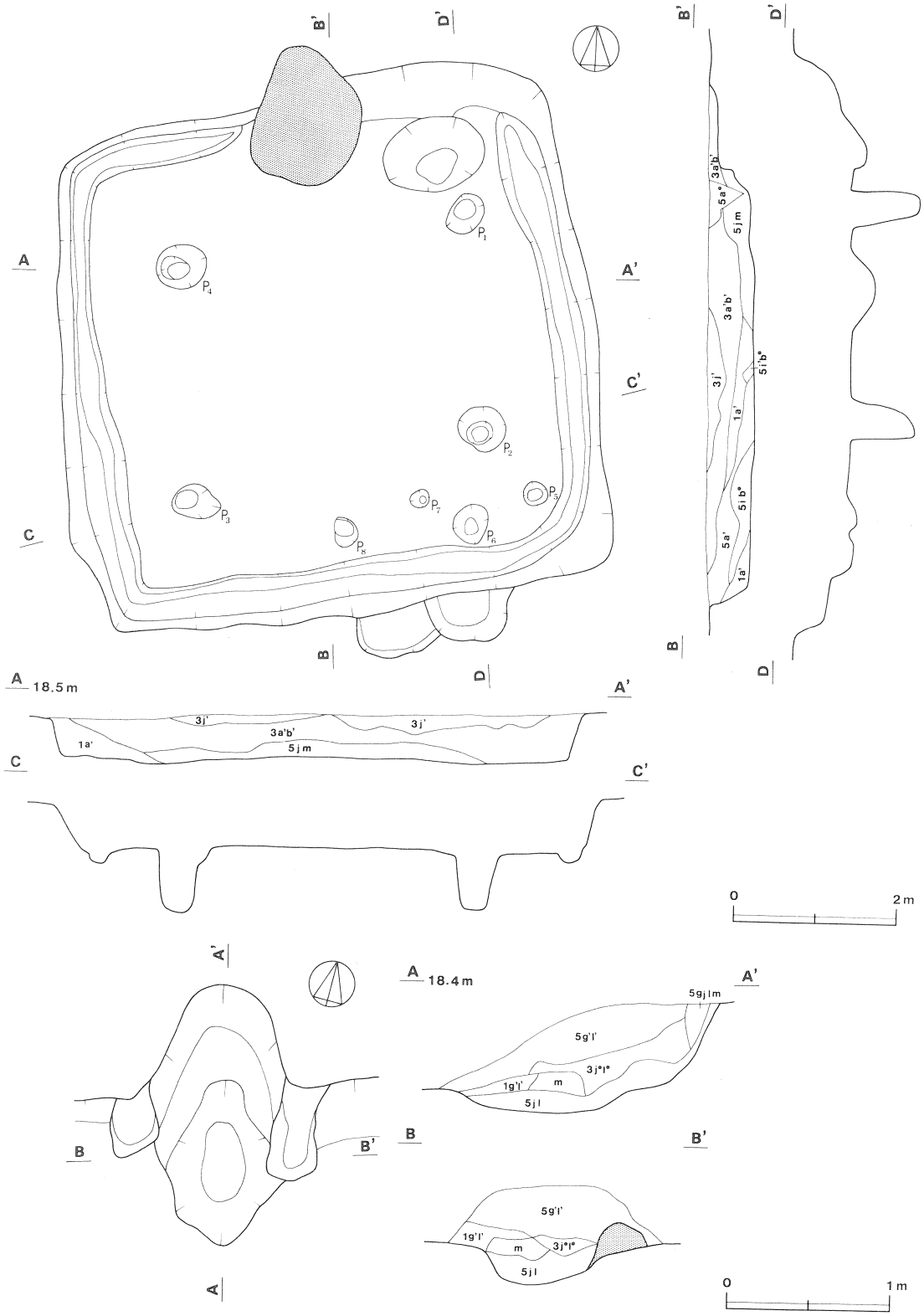
７は雁股の鏃である。片方の先端部と茎部を欠損している。現存長は7.9cmである。

第２号住居跡（第74・75図）

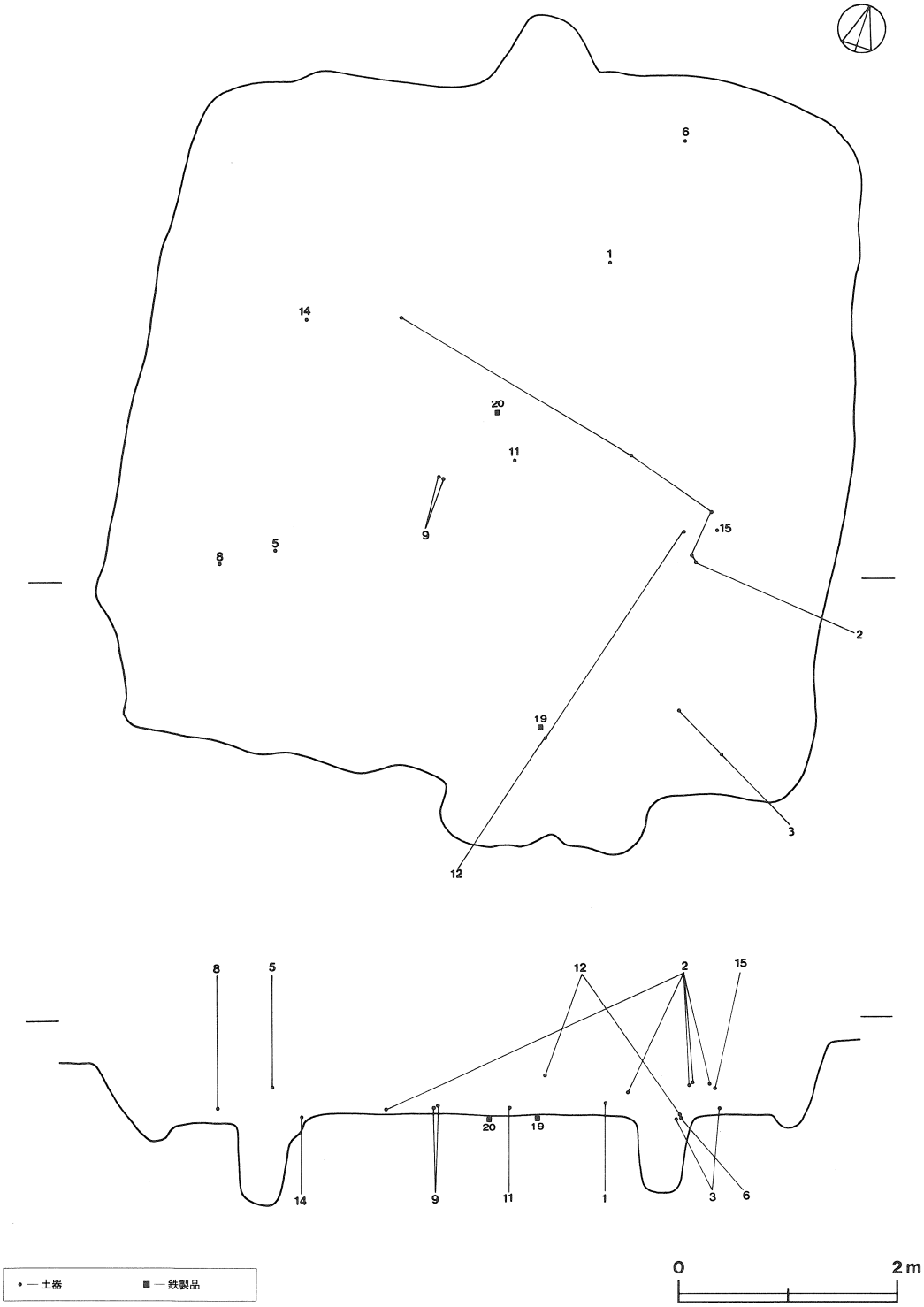
本跡は$G1c_5$を中心に確認され，第３号住居跡の北側約５ｍに位置している。

平面形は長軸6.60ｍ・短軸6.50ｍの方形を呈し，主軸方向はN－10°－Wを指している。壁はいずれも遺存状態がよくほぼ垂直に立ち上がり，壁高は50～70cmである。壁下には壁溝が周回しており，上幅18～24cm・下幅９～16cm・深さ８～12cmである。床は平坦で全体に堅く，特に４本の主柱穴の内側はよく踏み固められている。ピットはP_1～P_8の８か所検出されており，ほぼ対角線上に位置するP_1～P_4が主柱穴と思われる。いずれも径50～60cm・深さ61～73cmでしっかりしたものである。カマドは北壁中央部に付設されているが，天井部は崩落し袖部の一部が残っているだけである。長さ160cm・幅125cmで北壁を約65cm切り込んでいる。火床は床を25cm掘り凹められており，焼けて硬化し，ゴツゴツしている。カマドの東側には貯蔵穴が検出され，平面形は長径120cm・短径90cmの楕円形を呈し，深さ約30cmである。覆土は南壁から中央部に向かってロームブロックを多量に含む褐色土が崩れ込むように堆積しているほかは，ほぼ自然堆積の状態を示しており，ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は多量に出土し，須恵器の坏形土器・甕形土器・長頸壺，土師器の甕形土器・鉢形土器・坏形土器などが出土し，甕形土器片は約1400点も出土している。中央部の床面から鉄斧（第77図－20），南壁際の床面からは鎌（第77図－19）が出土し，カマド内からは墨書土器（第76図－５）が出土している。



第74図　第２号住居跡・カマド実測図



第75図　第２号住居跡遺物出土状態図

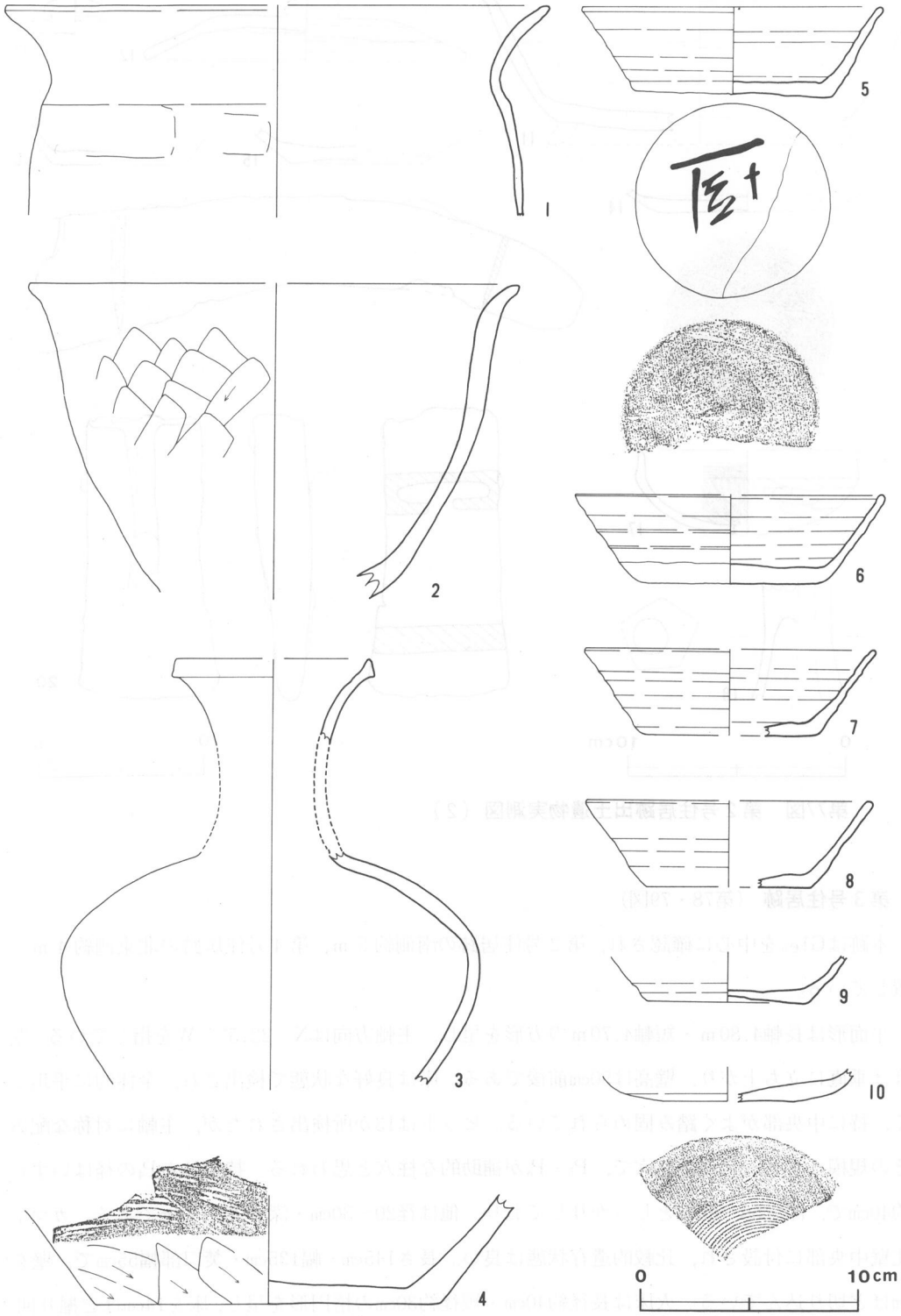
出土土器観察表（第76・77図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼土・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A (25.0)	胴部はあまりはらず，頸部で少しくびれ，口縁部で大きく外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	20%
2	鉢形 土器 土師器	A (22.5)	体部は内彎気味に開いて立ち上がり，口縁部は外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－斜位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	50%
3	長頸壺形 土器 須恵器	A (9.0)	胴部は大きく張り，頸部は上位ほど外反度が大きい。口縁端部は下方向に広がって面をなす。	胴部に緑色の自然釉	砂粒・細砂 普通 灰色	25%
4	甕形 土器 須恵器	C 15.8	底部は平底で，胴部は外上方へ立ち上がる。	胴部外面－斜位の平行叩き 下端－斜位の静止ヘラ削り 内面－ナデ	細砂・雲母末 やや不良 灰白色	15%
5	坏形 土器 須恵器	A 13.9 B 4.1 C 9.0	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反し，端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明	砂粒・石英 普通 青灰色	60% 底部外面に墨書
6	坏形 土器 須恵器	A (14.1) B 4.1 C 8.5	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 ロクロ回転方向は右	細砂・雲母末 やや不良 灰黄色	60%
7	坏形 土器 須恵器	A (13.2) B 4.0 C (8.0)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸い。	底部－不定方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
8	坏形 土器 須恵器	A 13.0 B 4.0 C (7.6)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰色	50%
9	坏形 土器 須恵器	C 7.4	やや盛り上がった底部から，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り 体部下端－手持ちヘラ削り	細砂・雲母 やや不良 灰色	25%
10	坏形 土器 須恵器	C (9.4)	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り痕を中央部に残し，外周部－手持ちヘラ削り後ナデ	砂粒・細砂 不良 灰白色	15%
11	高台付 坏形土器 須恵器	A 19.7 B (7)	底部と体部の境は不明瞭で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く，口縁直下に凹線をめぐらしている。	底部－左回転利用のヘラ削りの後，高台を貼り付けているが欠損	砂粒・細砂 やや不良 灰白色	50%
12	蓋形 土器 須恵器	C 16.6	天井部は平坦で，口縁部に向かってなだらかに下降する。口縁部は下方向に短く屈曲し，端部はやや尖る。	天井部－回転ヘラ削り つまみはラセン状の凹みをつけて貼り付け	砂粒・細砂 良好 灰色	55% 内面に重ね焼き痕
13	蓋形 土器 須恵器	つまみ径2.8 高 1.1	天井部は平坦で，宝珠形のつまみが付く。	天井部－右回転利用の横ナデ	砂粒・細砂 やや不良 灰白色	20%
14	坏形 土器 土師器	C 8.1	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り痕を中央部に残し，手持ちヘラ削り	細砂・雲母 良好 明黄褐色	50% 内面黒色処理
15	坏形 土器 須恵器	C 6.1	やや盛り上がった底部から体部は外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下半－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 不良 にぶい黄色	55%
16	坏形 土器 須恵器	C 6.0	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細粒 普通 灰色	55%
17	坏形 土器 土師器	A (10.2)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開く。口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	15%
18	高坏形土器 土師器		脚部片。脚部は五角柱状を呈し，裾部に向かってゆるやかに開く。	脚部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデで上部に絞り痕を残す	細砂 良好 赤褐色	10% 外面に赤彩

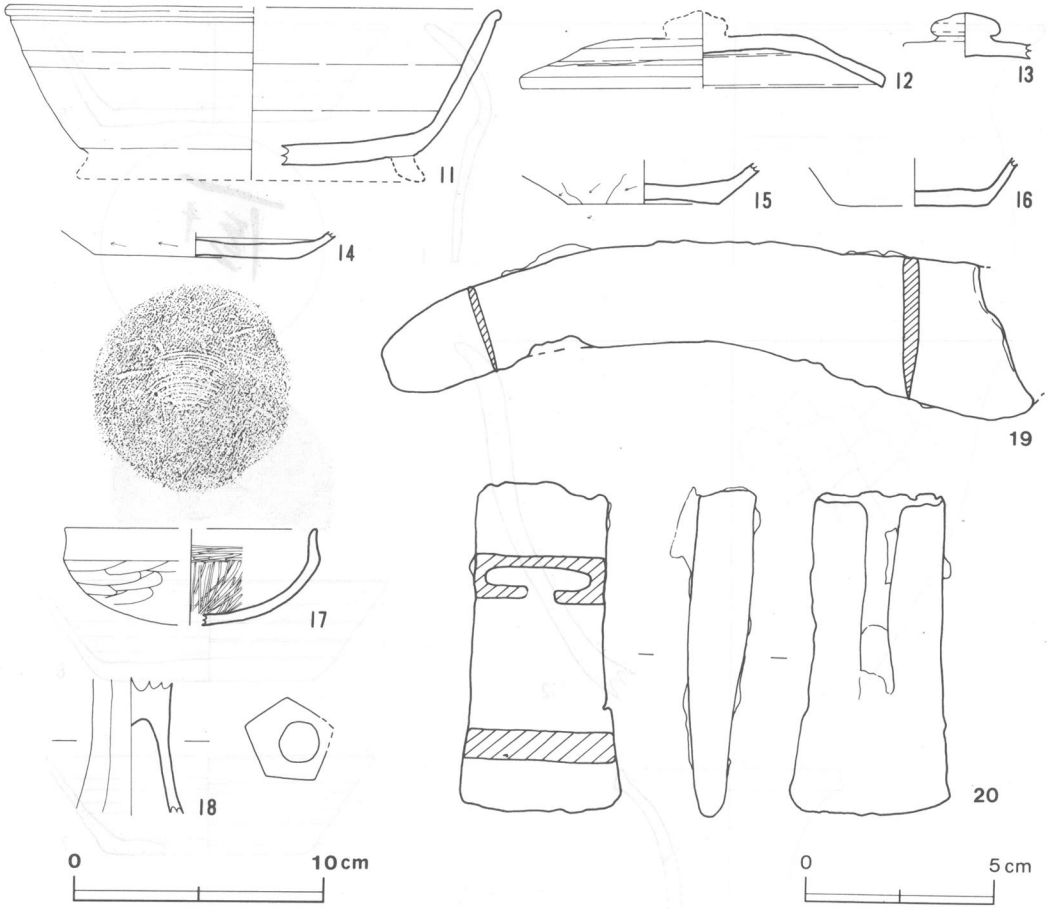
鉄製品（第77図－19・20）

19は鎌で基部が欠損する。先細りとなり，断面は三角形を呈し，現存長は17.4cmである。

20は袋式鉄斧で完存品である。撥形を呈し，長さ8.9cm・刃幅4.3cmである。



第76図　第２号住居跡出土遺物実測図(1)

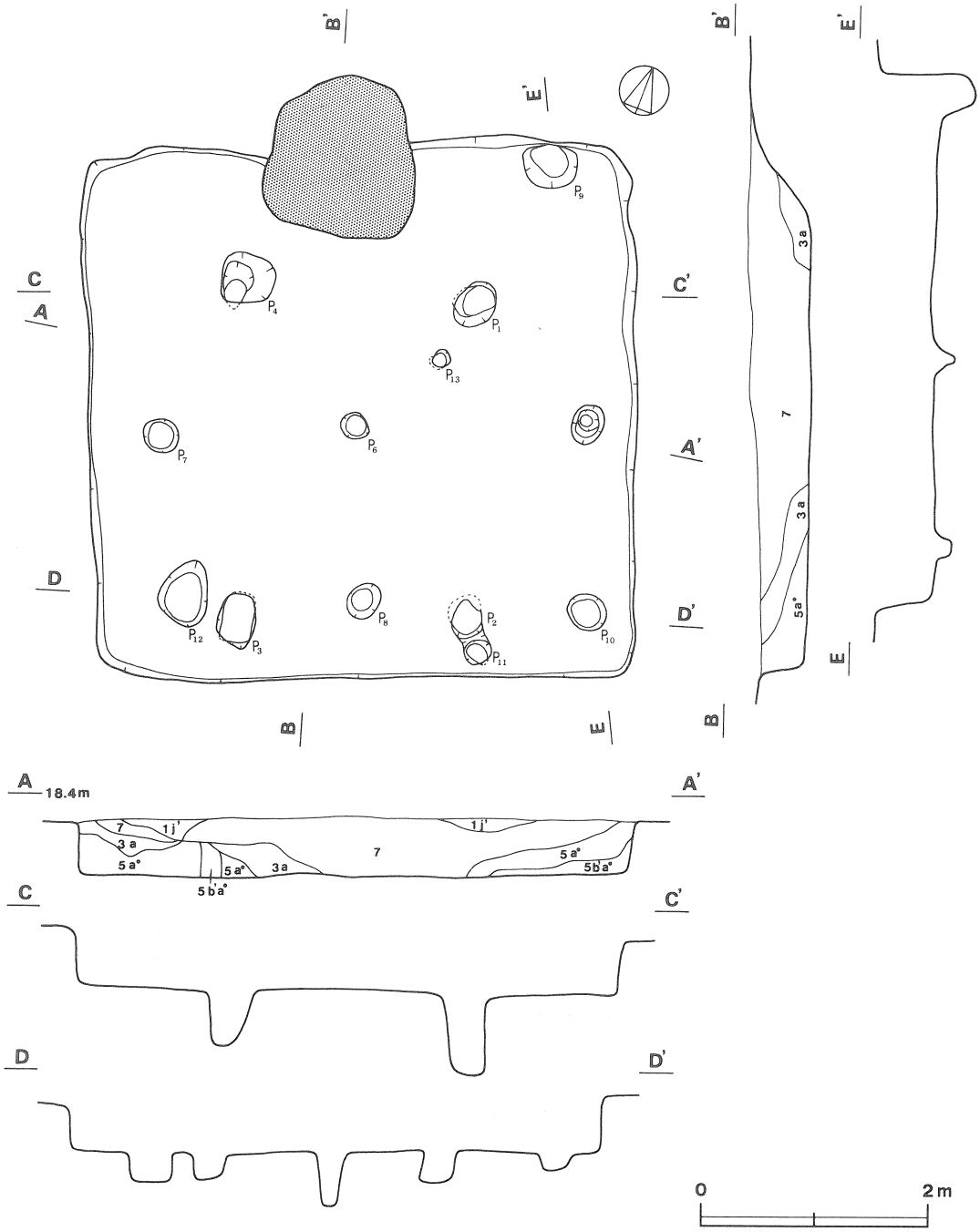


第77図　第２号住居跡出土遺物実測図（２）

第３号住居跡（第78・79図）

本跡はG1e5を中心に確認され，第２号住居跡の南側約５ｍ，第４号住居跡の北東側約４ｍに位置している。

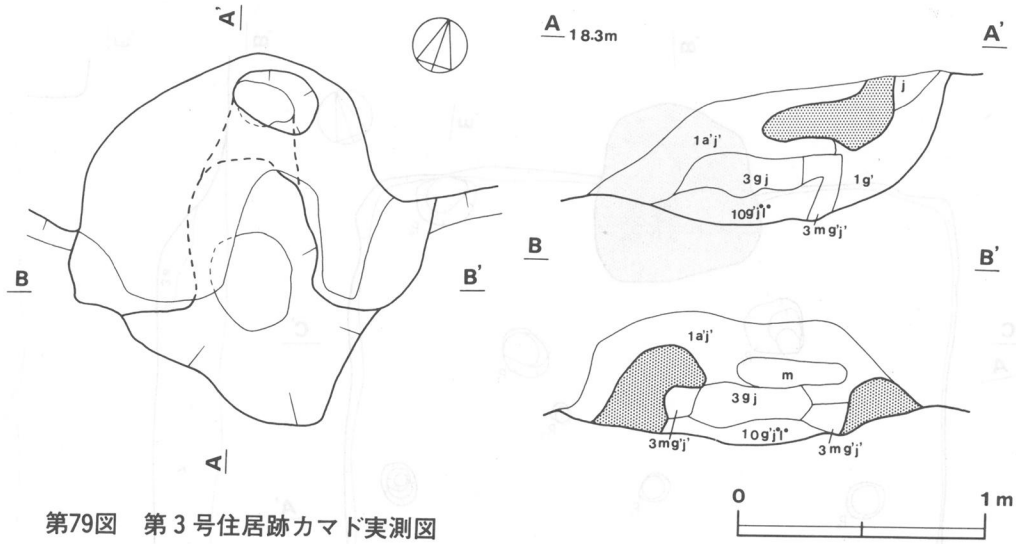
平面形は長軸4.80ｍ・短軸4.70ｍの方形を呈し，主軸方向はN－22.5°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は50cm前後である。床は良好な状態で検出され，全体的に平坦で堅く，特に中央部がよく踏み固められている。ピットは13か所検出されたが，主軸に対称な配置とその規模からP_1～P_4が主柱穴で，P_5～P_8が補助的な柱穴と思われる。特にP_1とP_4の径はいずれも約40cmで，深さ56～69cmとしっかりしており，他は径20～30cm・深さ20～30cmである。カマドは北壁中央部に付設され，比較的遺存状態は良い。長さ145cm・幅135cm・焚口部幅55cmで，壁を60cmほど切り込んでいる。火床は長径約40cm・短径約30cmの楕円形を呈し，床を14cmほど掘り凹め，奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は一部攪乱も見られるが，ほぼ自然堆積の状態を示している。住居中央部では確認面から床面まで黒色土が堆積し，周辺部はローム粒子を含む暗褐色



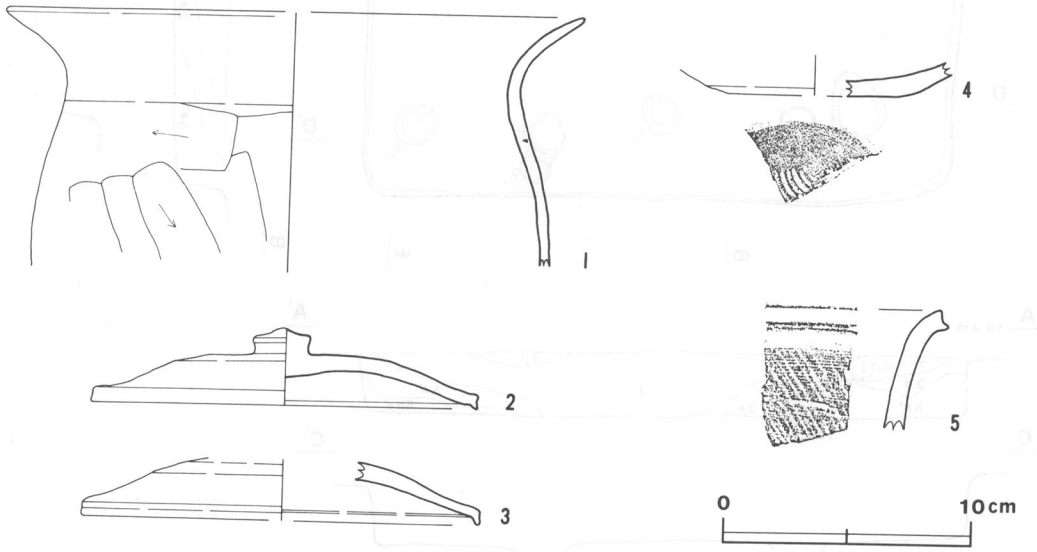
第78図　第３号住居跡実測図

土が中央部に向かって流れ込むように堆積している。

遺物は覆土から土師器の甕形土器片，須恵器の坏形土器片が出土しており，また住居中央部のやや南寄りの床面と東壁下の床面から蓋形土器（第80図－２・３）が出土している。



第79図　第３号住居跡カマド実測図



第80図　第３号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第80図）

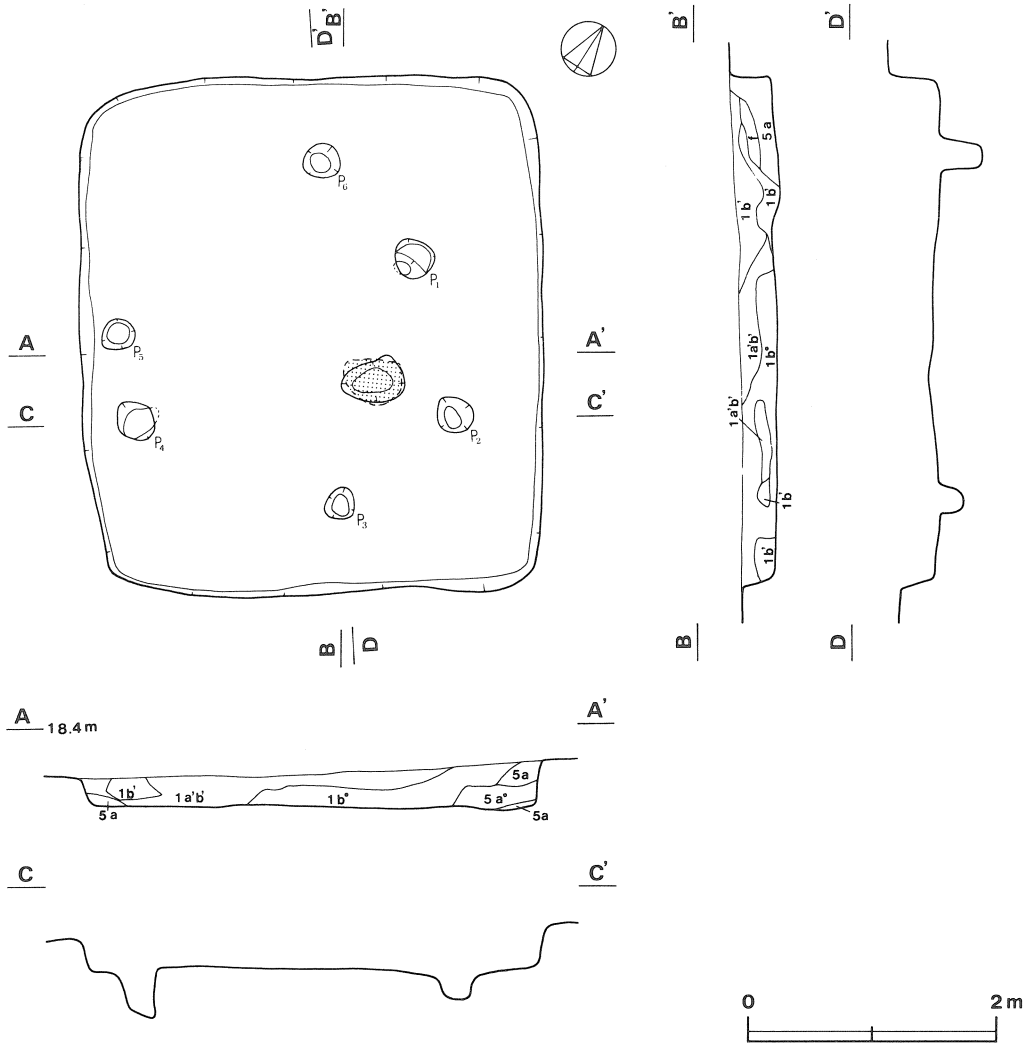
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A（23.2）	胴部の張りは弱く口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10%
2	蓋形　土器 須恵器	A　15.6 B　3.15 つまみ径2.35	天井部中央に擬宝珠形のつまみをつけている。天井部は扁平であるが，口縁に向かってなだらかに下降する。口縁部は下方向に屈曲する。	天井部－右回転利用の回転ヘラ削り　内・外面の水挽き痕は弱く丁寧な作り	砂粒・細砂 雲母末 やや不良 にぶい黄色	80% 天井部内部に煤・焼土付着
3	蓋形　土器 須恵器	C（16.1）	天井部はなだらかに下降し，口縁部は下方向に屈曲する。	天井部－右回転利用の回転ヘラ削り	細砂・雲母 やや不良 灰色	30%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
4	坏形 土器 土師器	C（6.8）	底部は平底で，体部と底部の境は不明瞭	底部－回転糸切り後，中央部に糸切り痕を残す 外周－右回転利用の回転ヘラ削り	砂粒・細砂 良 褐灰色	10%
5	鉢形 土器 須恵器		口縁部片で短かく外反する。	口縁部内外面－横ナデ 頸部外面－斜位の平行叩きの後横ナデ 内面－ナデ	細砂・雲母 普通 灰オリーブ色	5%

第4号住居跡（第81図）

本跡はG1g$_4$を中心に確認され，第3号住居跡の南西側約4m，第10号住居跡の北東側約4mに位置している。

平面形は長軸4.15m・短軸3.75mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－35°－Wを指している。



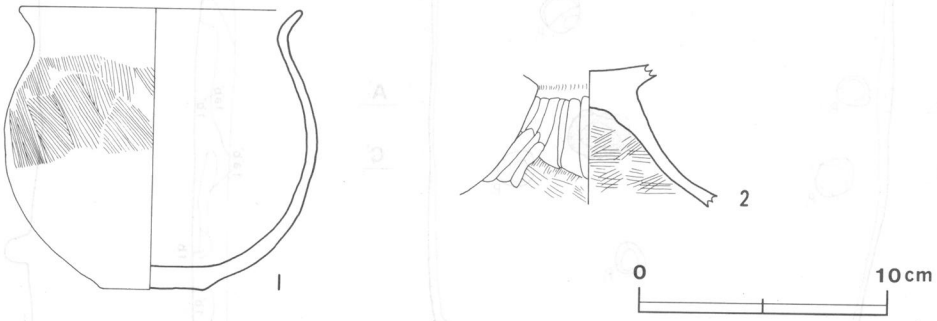
第81図 第4号住居跡実測図

壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり，壁高は25～38cmである。床面はほぼ平坦で，やわらかい。ピットは6か所検出され，いずれも径25～35cm・深さ30～40cmであるが，配置が不規則であり主柱穴は不明である。炉跡が住居中央部からやや東寄りに検出され，長径53cm・短径34cmの楕円形を呈し，床を約10cm掘り凹めている。焼土量は少なく，炉床も堅く焼けておらずあまり使用した痕跡は認められない。覆土は全体に攪乱を受けており，ロームブロックを含む黒褐色土が主である。

遺物は少なく，南コーナー部から土師器の甕形土器（第82図－1），炉跡内から高坏形土器の脚部（第82図－2）が出土している。

出土土器観察表（第82図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 11.4 B 11.4 C 4.1	底部は平底で，胴部はほぼ球形を呈する。口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－斜位のハケ目 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	80%
2	高坏形土器 土師器		脚部はラッパ状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ削り 内面－ハケ目 裾部外面－粗いハケ目	砂粒 普通 にぶい橙色	100%

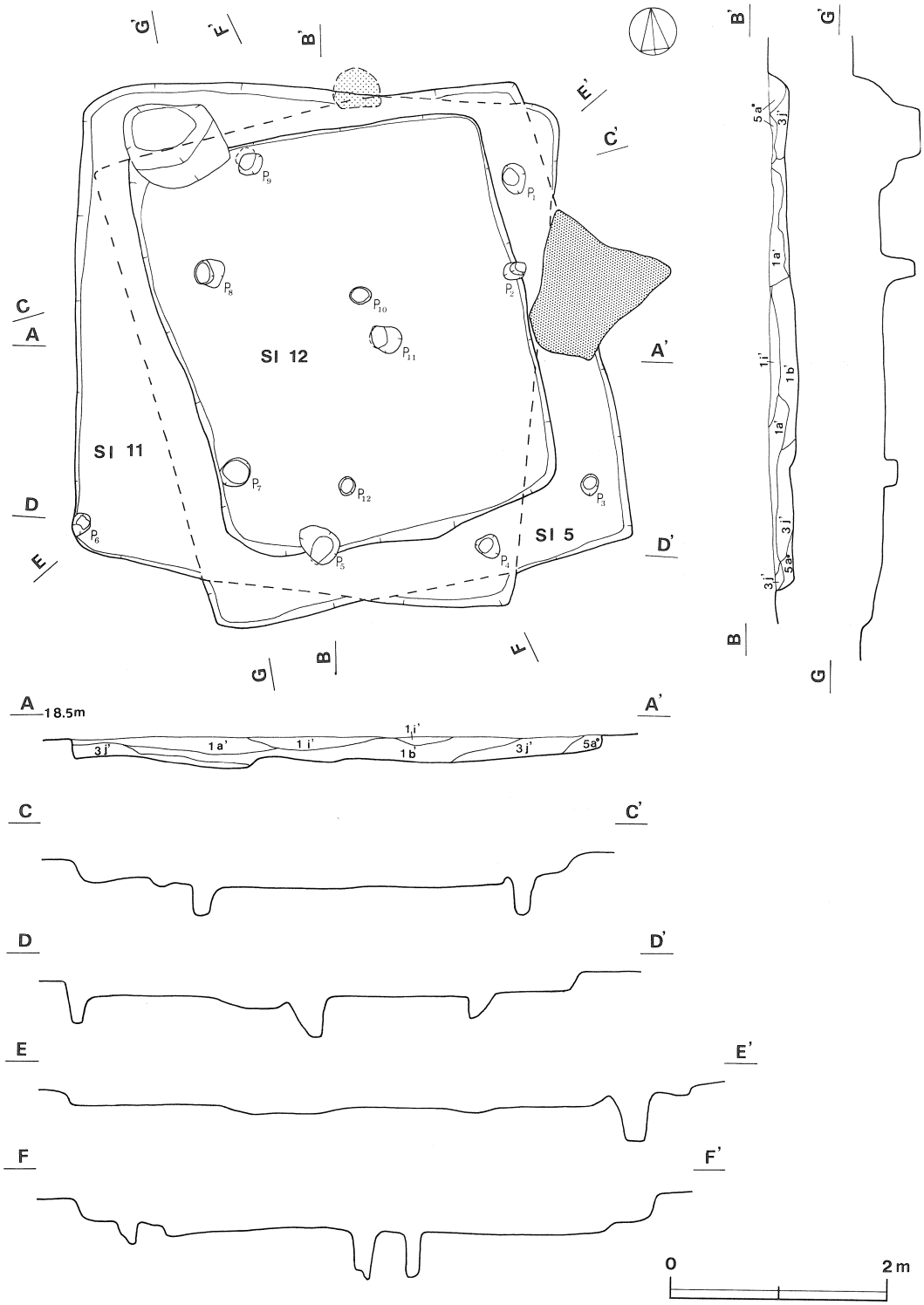


第82図　第4号住居跡出土遺物実測図

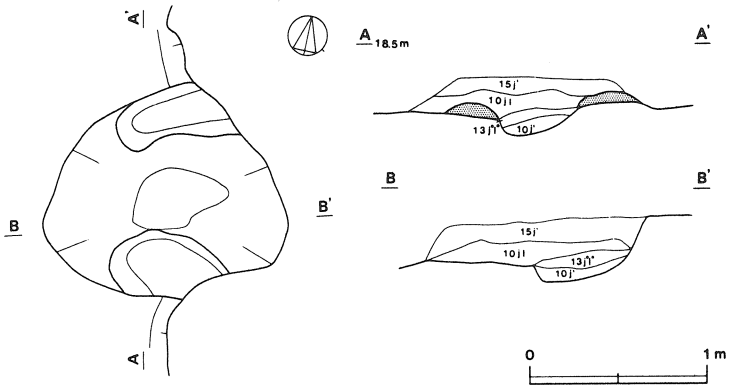
第5号住居跡（第83・84図）

本跡はG1g8を中心に確認され，第4号住居跡の東側約10m，第8号住居跡の北側約9mに位置している。第11・12号住居跡と重複しているが，本跡は第11号住居跡を切って，第12号住居跡の上に構築されており，本跡が最も新しいものと思われる。

平面形は長軸4.55m・短軸4.05mの方形を呈し，主軸方向はN－80°－Eを指している。壁は攪乱を受けているが，外傾して立ち上がり，壁高は15～20cmである。床は第11号住居跡と同じレベルでほぼ平坦であり，よく踏み固められている。ピットはP_1～P_5・P_7～P_{12}の11か所検出されている。いずれも径15～40cm・深さ11～40cmで不揃いであり，配置にも規則性がなく，いずれの住居跡に



第83図　第５・11・12号住居跡実測図



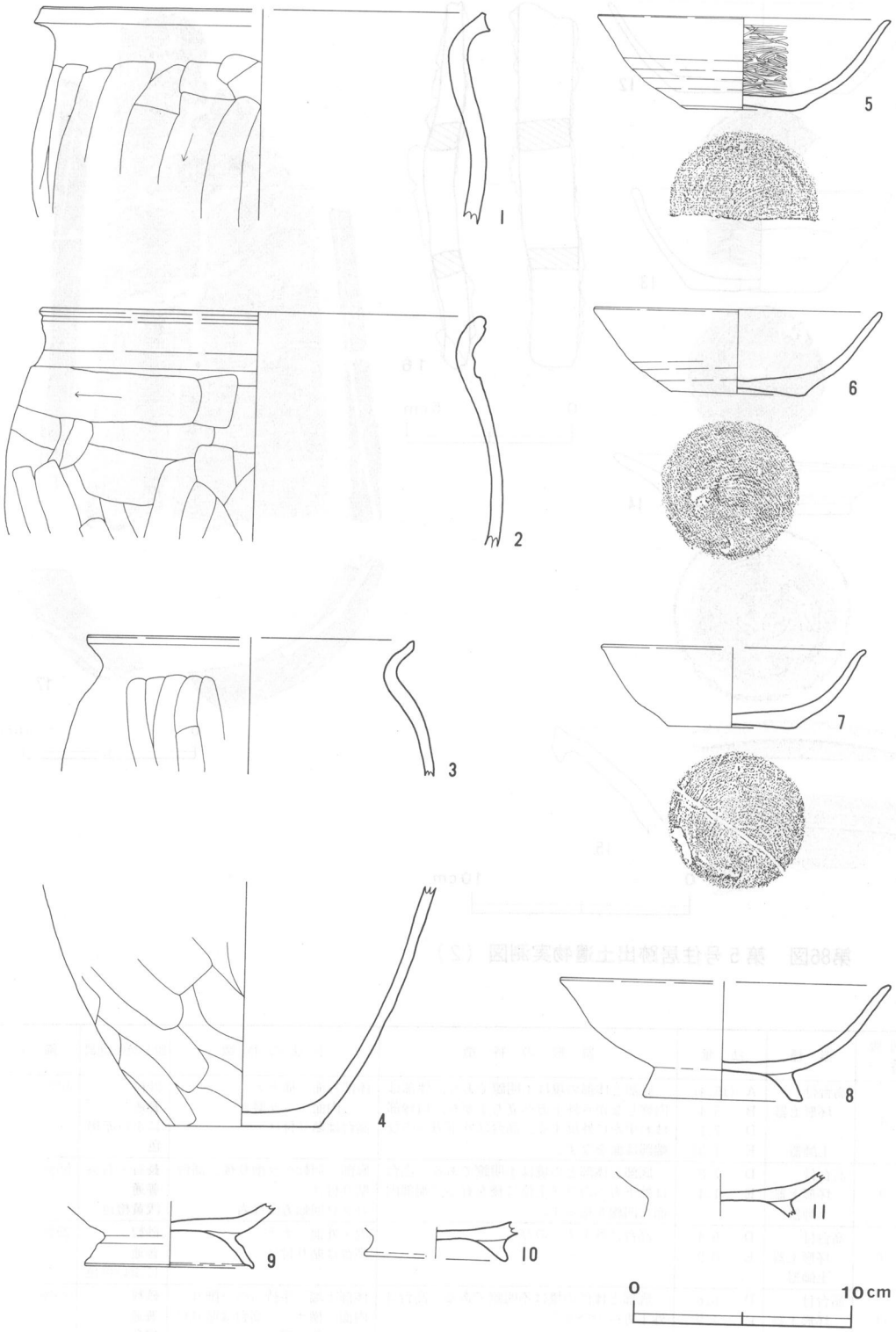
第84図　第５号住居跡カマド実測図

伴うものか不明である。カマドが東壁中央部に付設されているが，耕作によって削平されており，袖部の一部が残っているだけである。推定で長さ130cm・幅112cm・焚口幅45cmで，東壁を約70cm切り込んでいる。覆土はロームブロックを含む黒褐色土や，ローム粒子を多量に含む褐色土が主で，耕作による攪乱を受けていると思われる。

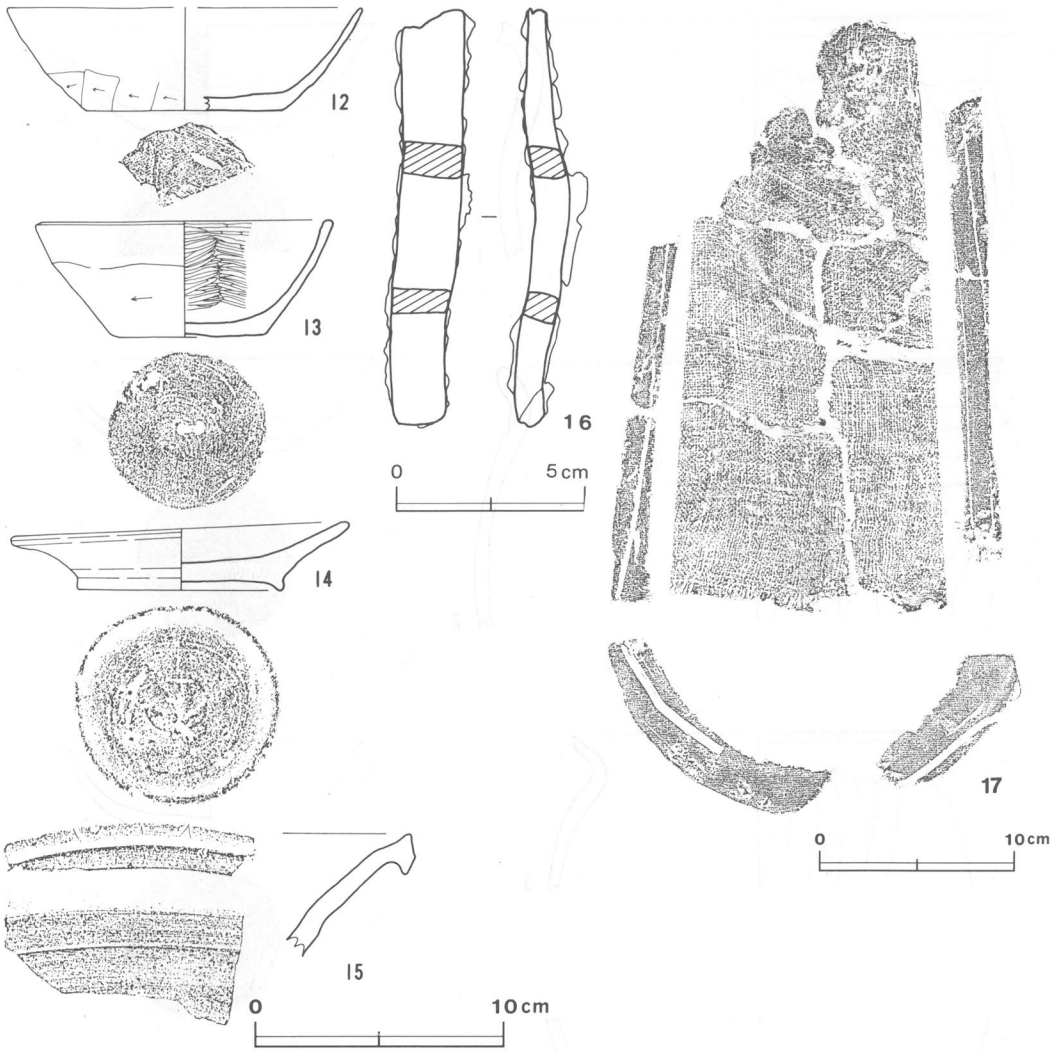
遺物は比較的多く，土師器の甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器や，須恵器の坏形土器，甕形土器が出土している。カマドの南側の東壁際床面から，ほぼ完形の丸瓦（第86図－17）が出土している。

出土土器観察表（第85・86図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A（20.8）	胴部はやや張る。口縁部は短く外反し，外端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	5％
2	甕形　土器 土師器	A　20.4 B　11.0	胴部はやや張り，長胴を呈するものと思われる。頸部と胴部の境には明瞭な稜を有し，口縁部は外反し肥厚である。口縁直下に沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	30％
3	甕形　土器 土師器	A（15.0） B（6.3）	胴部は丸く張り，口縁部は大きく外反し外端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 赤褐色	10％
4	甕形　土器 土師器	C　7.1	底部は平底で，胴部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	胴部外面－斜位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通	30％
5	坏形　土器 土師器	A（13.4） B　4.25 C（5.6）	底部はやや盛り上がり，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部－回転糸切り後，中央部のみ糸切り痕を残し，外周は回転ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒・細砂 良好 にぶい橙色	35％ 内面黒色処理
6	坏形　土器 土師器	A　13.3 B　3.9 C　6.3	底部はあげ底を呈し，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後，外周部回転ヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱く，丁寧な作り	細砂（精良） 普通 にぶい黄橙色	70％
7	坏形　土器 土師器	A　12.0 B　3.65 C　6.0	底部はややあげ底を呈し，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁端部は外反する。	底部－回転糸切り ロクロ回転方向は右	長石・石英 不良 にぶい橙色	90％



第85図　第５号住居跡出土遺物実測図(1)



第86図　第５号住居跡出土遺物実測図（２）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8	高台付坏形土器 土師器	A (15.4) B 5.4 D 7.1 E 1.35	底部と体部の境は不明瞭であり，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。高台は外下方へのび端部は面をなす。	体部外面－横ナデ 内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け	砂粒 普通 にぶい赤褐色	40%
9	高台付坏形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	底部と体部との境は不明瞭である。高台は外下方へのびて上位に稜を有し，端部内面に凹線を巡らす。	底部－回転ヘラ削り後，高台貼り付け ロクロ回転方向は右	長石・石英 普通 浅黄橙色	55%
10	高台付坏形土器 土師器	D 6.4 E 0.9	高台は外下方へのびる。	内・外面－ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 にぶい橙色	25%
11	高台付坏形土器 土師器	D 6.8 E 1.9	底部と体部の境は不明瞭である。高台は外下方へのびる。	体部下端－手持ちヘラ削り 内面－横ナデ　高台は貼り付け　全体に摩滅	砂粒 普通 橙色	25%
12	坏形土器 須恵器	A (14.2) C (7.8)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 良好 灰色	25%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
13	坏形 土器 土師器	A 11.7 B 4.7 C 6.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－中央部に回転糸切り痕 体部上半－横ナデ 下半－回転ヘラ削り 内面－ヘラ磨き ロクロ回転方向は右	礫・長石 石英 良 にぶい黄橙色	100% 内面黒色処理
14	皿形 土器 須恵器	A 13.7 B 2.5 D 8.3 E 3.05	体部は外反気味に大きく開き，口縁端部は丸い。	底部－回転ヘラ削り後，高台貼り付け 径8mmもある礫の存在により焼成時にヒビ割れが生じている。	礫・長石 不良 灰白色	85%
15	甕形 土器 須恵器		口縁部破片。口縁部は外反しながら大きく開く。端部は面をなして下方へ屈曲する。	水挽き成形	砂粒・細砂 普通 灰色	口縁部5%

鉄製品（第86図－16）

16は用途不明の鉄製品である。細長く，断面は長方形を呈する。厚さ6～9mm・幅15～17mm・長さ11cmである。

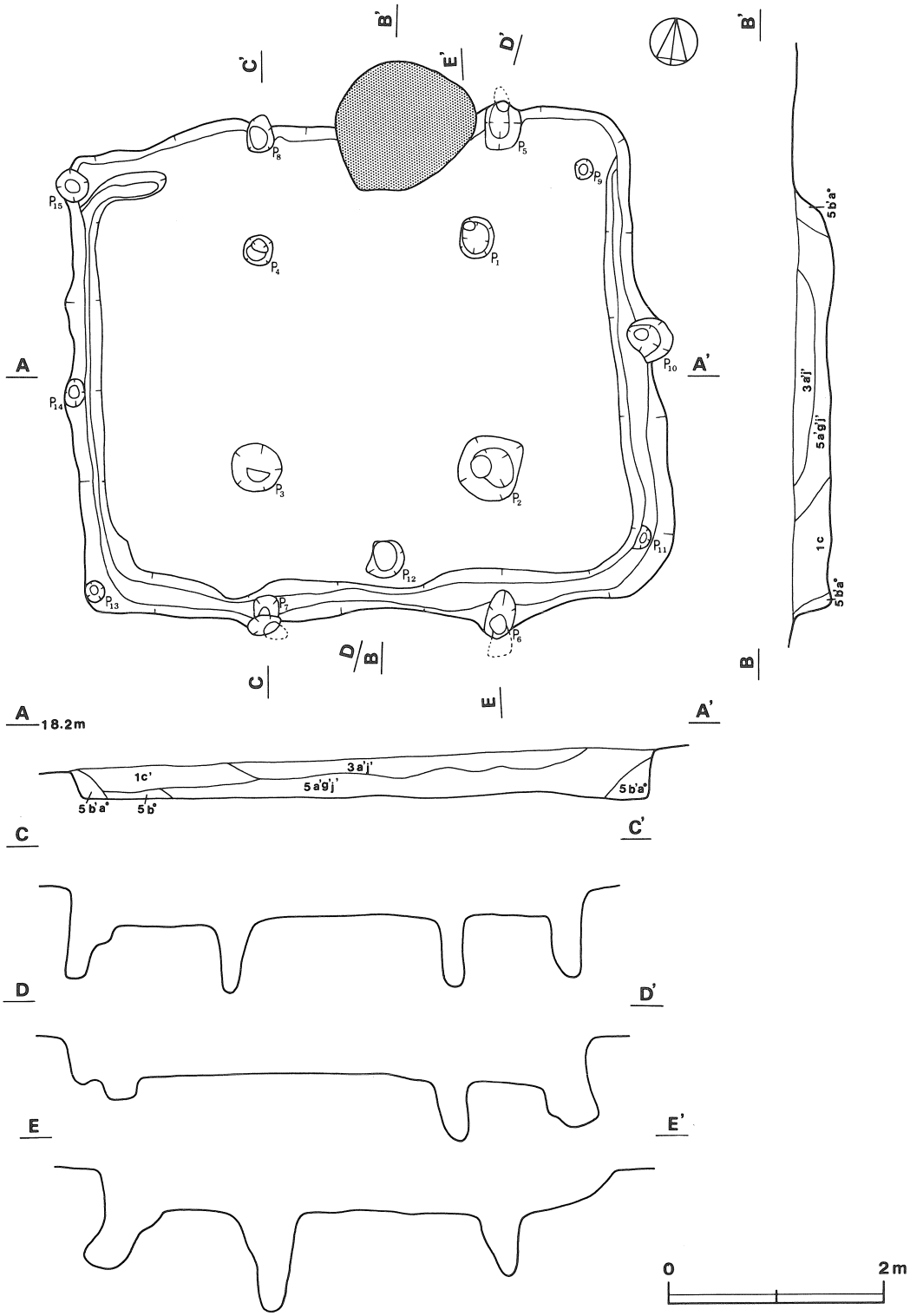
瓦（第86図－17）

17は丸瓦で上端が欠損する。凸面はナデで，凹面は布目を残す。側面と端面はヘラ削りである。胎土はスコリア・細砂を含み，焼成は普通で，色調はにぶい橙色である。現存長は31cm・広端20.6cm・厚さ2.6cmである。

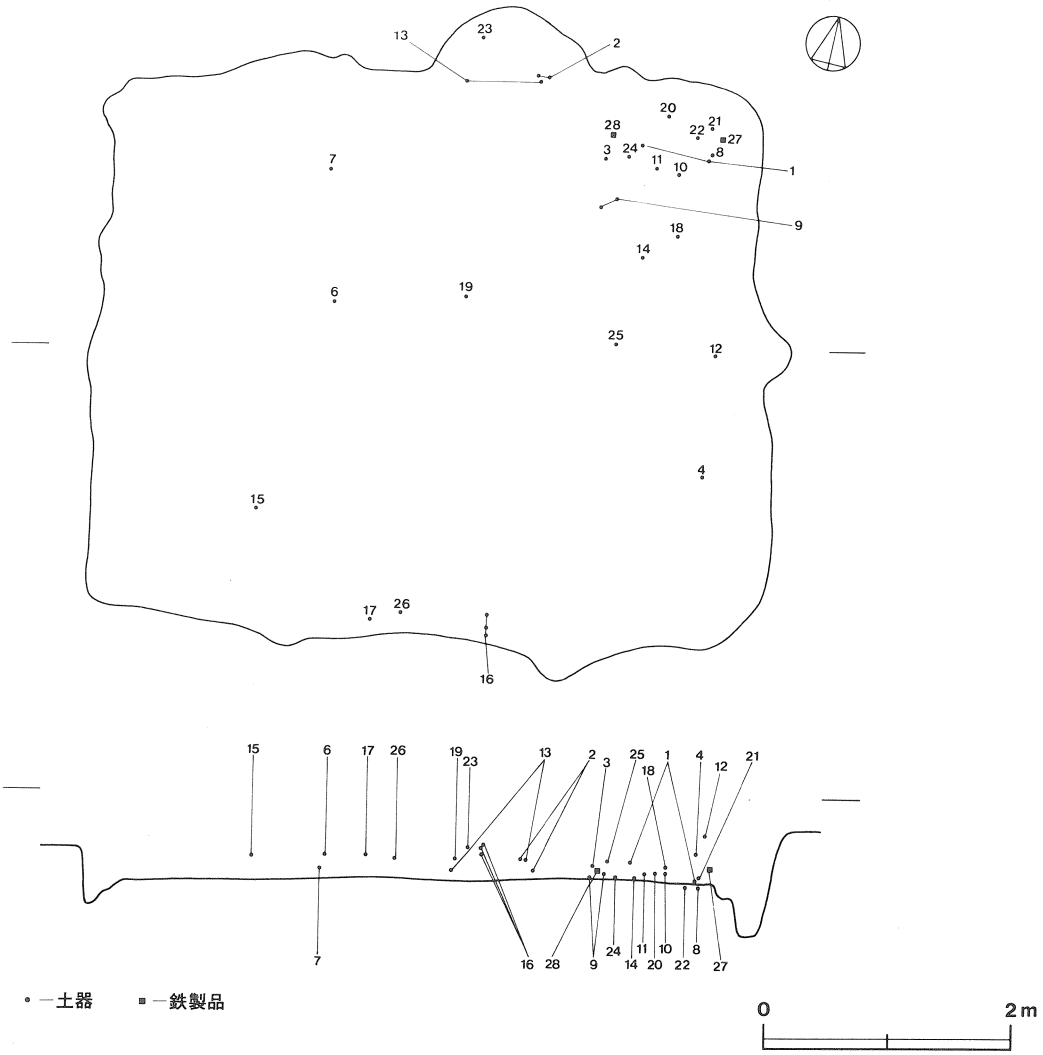
第6号住居跡（第87～89図）

本跡はG1i5を中心に確認され，第13号住居跡の東側約2mに位置し，東側は第1号井戸とほぼ接している。

平面形は長軸5.40m・短軸4.50mの長方形を呈し，主軸方向はN－14°－Wを指している。壁高は北西壁で25cm前後・東南壁で40cm前後で，やや外傾して立ち上がっている。壁面はやわらかく，ロームブロックが混入しくずれやすい。北壁下を除いて各壁下には，上幅23cm・下幅8cm・深さ6cmほどの壁溝が周回している。床面は平坦で全体に堅い。ピットはP_1～P_{15}の15か所検出され，その内P_1～P_4は等間隔で正方形に配置されており，主柱穴と思われる。それぞれ径30～60cm・深さ55～80cmとしっかりしている。P_5～P_8は，P_1・P_2とP_3・P_4を結んだ線のほぼ延長上に位置し，幾分壁を切り込み，住居跡内に10～20°傾くように掘り込まれている。いずれも径30～40cm・深さ40～60cmと，規模的に大きく主柱穴同様の機能を有していると思われる。その他各コーナー部，東・西・南壁の中央部のものは補助的なものと思われる。カマドは北壁中央部よりやや東側に付設され，長さ114cm・袖幅80cm・焚口部幅35cmである。北壁を75cmほど切り込んでおり，火床は床を5cm掘り凹めている。天井部は崩落しているが，焚口部の南側壁には甕形土器の大きい破片を袖部の補強のために埋めこんでいる。覆土は大きく2層に分かれ，自然堆積の状態を呈している。上層は焼土粒子・ローム粒子を含む暗褐色土，下層は炭化粒子・焼土粒子を含む褐色土である。



第87図　第６号住居跡実測図

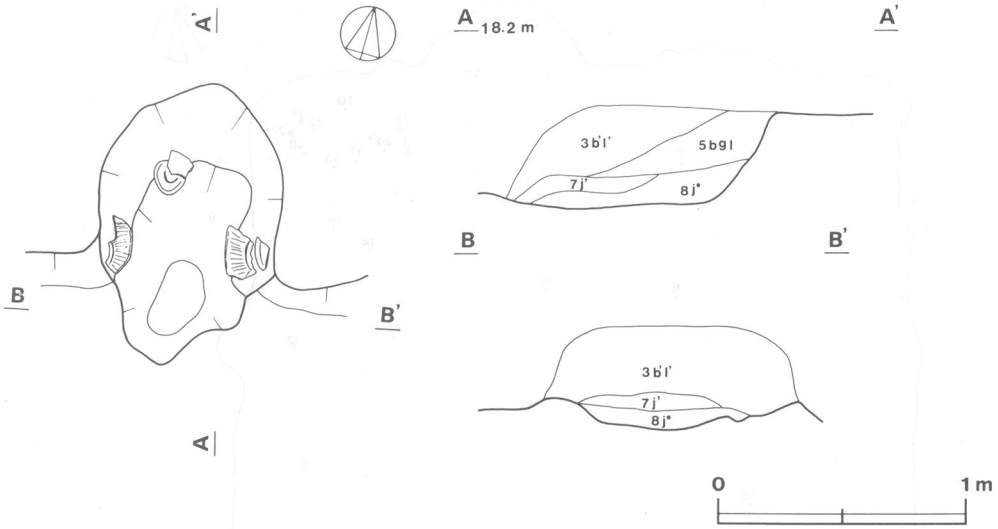


第88図　第6号住居跡遺物出土状態図

遺物は比較的多く，土器の器種も豊富である。土師器では甕形土器・坏形土器が出土し，須恵器では甕形土器・坏形土器・甑形土器のほか，南壁中央部付近の覆土から盤形土器(第92図—26)，北東コーナー部付近の床面から長頸壺形土器（第91図—14），P_4の北側の覆土から台付長頸壺形土器（第90図—7）が出土している。また，北東コーナー部覆土から鎌（第92図—27)，カマドの東側覆土から刀子（第92図—28）が出土している。

出土土器観察表（第90～92図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 須恵器	A (29.8)	やや張った胴部から口縁部に大きく外反し，端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面—横ナデ 胴部外面—平行叩き目 内面—ナデ	砂粒 普通	5％



第89図　第6号住居跡カマド実測図

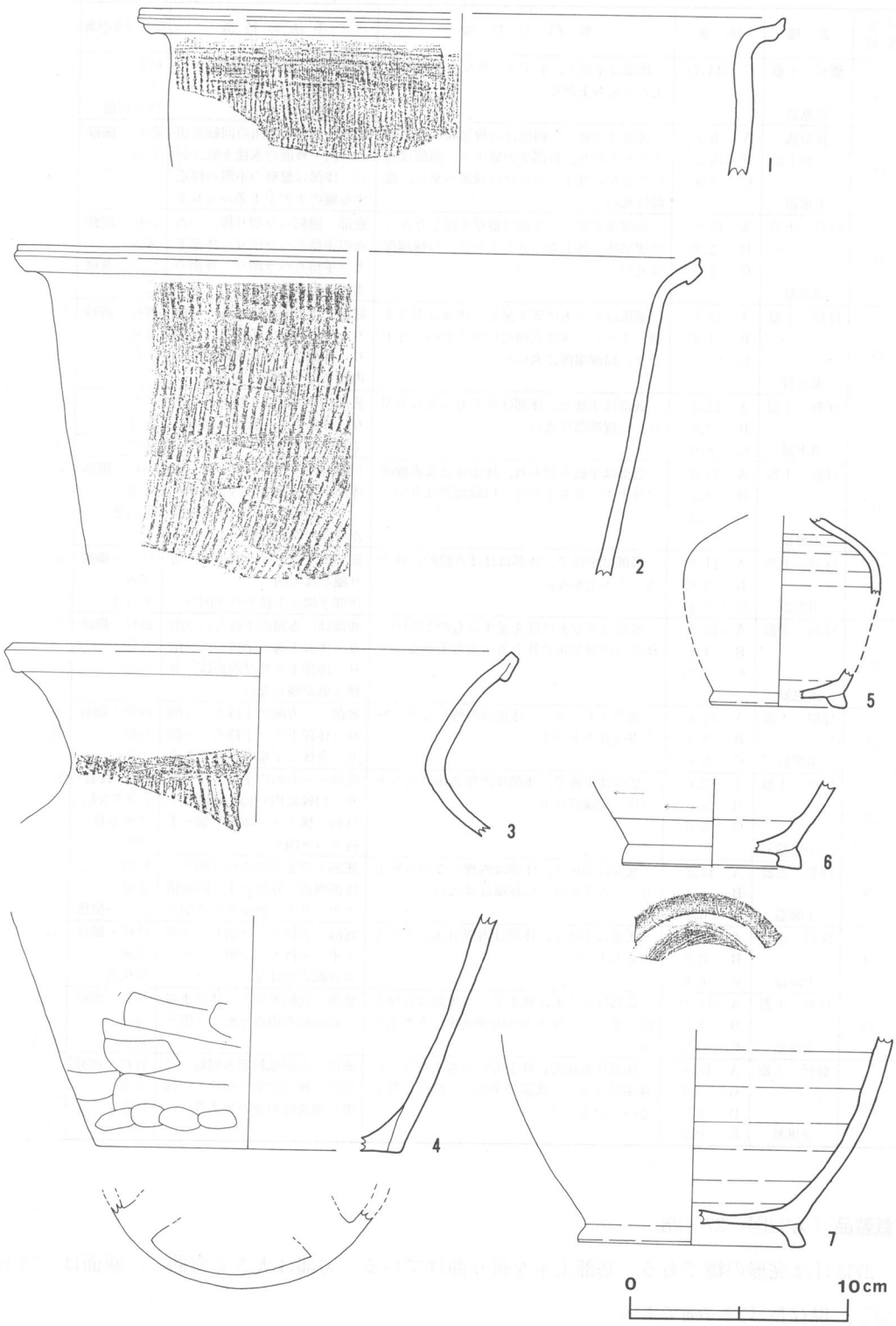
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	甕形　土器 須恵器	A (31.4)	胴部はほとんど張りがなく，口縁部は短かく外反し，端部を折り返し，さらに上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位の平行叩き目 内面－ヘラナデ	砂粒 普通	10%
3	甕形　土器 須恵器	A (23.0)	口頸部は外反気味に開き，口縁端部を折り返している。	口頸部内・外面－横ナデ 胴部外面－平行叩き目 内面－ナデ	細砂 普通 にぶい黄橙色	10%
4	甕形　土器 須恵器	C (14.0)	底部は五孔式と思われる。胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ナデ 内面－ナデ	砂粒 普通 灰褐色	20%
5	台付長頸 壺形土器 灰釉陶器	D (6.3) E　0.6	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，肩部で内傾する。 高台は短く外下方へのびる。	底部－高台貼り付け後横ナデ 体部内・外面－横ナデ 下端－回転ヘラ削り	細砂 良好	5 %
6	台付長頸 壺形土器 須恵器	D (8.2) E　0.85	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。 高台は下方に短くのび，端部に面をなす。	底部－回転糸切り後，高台貼り付け　体部下半－回転ヘラ削り　台部内・外面と胴部下端－横ナデ	細砂 良好 暗灰黄色	10% 内部底部に自然釉
7	台付長頸 壺形土器 須恵器	D (10.4) E　0.85	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。 高台は外下方へ短くのび，端部に面をなす。	底部－回転ヘラ削りの後高台貼り付け	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
8	甕形　土器 土師器	A　18.7	胴部上位はやや張り，口頸部は「コ」の字を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位－横位　中・下位－縦位のヘラ削り 胴部内面－ヘラナデ	砂粒・黒雲母末 普通 明赤褐色	15%
9	甕形　土器 土師器	A　18.6	口頸部の破片。 器厚は薄く，口頸部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	20%
10	甕形　土器 土師器	A (16.0)	口頸部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位－横位のヘラ削り　内面上位－ヘラナデ	砂粒 普通 赤橙色	10%
11	甕形　土器 土師器	A (17.8)	口頸部破片。 丸く張った胴部から口縁部は大きく外反し，端部を上方につまみ出し丸くおさめている。	口縁部内外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－横位のヘラナデ ロクロ回転方向は右	砂粒 良好 にぶい橙色	5 %
12	甕形　土器 土師器	A (18.0)	口頸部破片。 丸く張った胴部から口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－指によるナデ付け	砂粒 良好 にぶい橙色	5 %

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
13	甕形土器 須恵器	C (14.7)	底部は平底で，わずかに外反しながら外上方へ立ち上がる。	体部外面－縦位の平行叩き 下端－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 灰黄褐色	40%
14	長頸瓶形土器 須恵器	A 6.3 B 19.2 C 5.8	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，肩部で内傾する。頸部は外反しながら外上方へのび口縁部へ至り，端部は丸い。	底部－右回転利用の回転糸切り　内・外面の水挽き痕は弱い　体部に整形の不備の修正する縦のナデが1条みられる	砂粒・細砂 普通 灰色	95%
15	坏形土器 須恵器	A (13.0) B 3.85 C 7.0	底部は平底で，体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り　体部下半－手持ちヘラ削り　外面の水挽き痕は強目	砂粒・細砂 普通 にぶい黄橙色	50%
16	坏形土器 須恵器	A 12.5 B 4.3 C 7.0	底部はややあげ底を呈し，体部は器厚を減じながら，ほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削り　体部下端－手持ちヘラ削り　外面は水挽き痕は弱く，内面ではやや強目である。	砂粒・細砂 普通 灰色	70% 外面粘土紐巻き上げ痕が見られる
17	坏形土器 須恵器	A 13.2 B 3.9 C 6.0	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削り　体部下半－底部に向かって斜位の手持ちヘラ削り	砂粒 不良 褐色	100% 底部内面に漆付着
18	坏形土器 須恵器	A (13.6) B 4.2 C (7.2)	底部は平底と思われ，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	口縁部内・外面－横ナデ 体部下半－手持ちヘラ削り 外面中位には，水挽き痕が残るが内面は弱い	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
19	坏形土器 須恵器	A (11.8) B 3.95 C (5.4)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
20	坏形土器 須恵器	A (12.4) B 4.1 C (5.3)	底部はややあげ底を呈するものと思われ，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部は一方向の手持ちヘラ削り　体部下端－手持ちヘラ削り　体部上半及び内面は，水挽き痕が残らない。	砂粒・細砂 良好 灰色	30%
21	坏形土器 須恵器	A (12.8) B 3.9 C 5.8	底部はあげ底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削り　体部下半－手持ちヘラ削り，全体に丁寧な作りである	砂粒・細砂 良好 灰色	50% 胎土内に気泡
22	坏形土器 須恵器	A 12.6 B 4.3 C 6.0	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削り　口縁部内・外面と体部内・外面－横ナデ　体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒(長石・石英を含む) やや不良 黒色	90%
23	坏形土器 土師器	A 13.8 B 4.4 C 6.9	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－不定方向のヘラ削り 体部内面・外面上半－回転横ナデ　下半－斜位のヘラ削り	砂粒 普通 にぶい橙色	100%
24	坏形土器 土師器	A 13.0 B 3.9 C 6.6	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削り　体部下半－手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は左。	砂粒・細砂 普通 黒褐色	55%
25	坏形土器 土師器	A (13.4) B 4.7 C (7.2)	底部はややあげ底を呈し，体部は器厚を減じながら，外上方へ内彎気味に立ち上がる。	底部－回転糸切り　体部下端－右回転利用の回転ヘラ削り	砂粒・細砂 普通 褐色	40%二次焼成による煤付着
26	盤形土器 須恵器	A 15.8 B 3.6 D 9.0 E 0.9	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁端部は丸い。底部は平底で，高台は外下方へのびる。	底部－右回転利用の回転ヘラ削りの後高台貼り付け　口縁部に焼成時のゆがみあり	砂粒・細砂 普通 灰色	95%

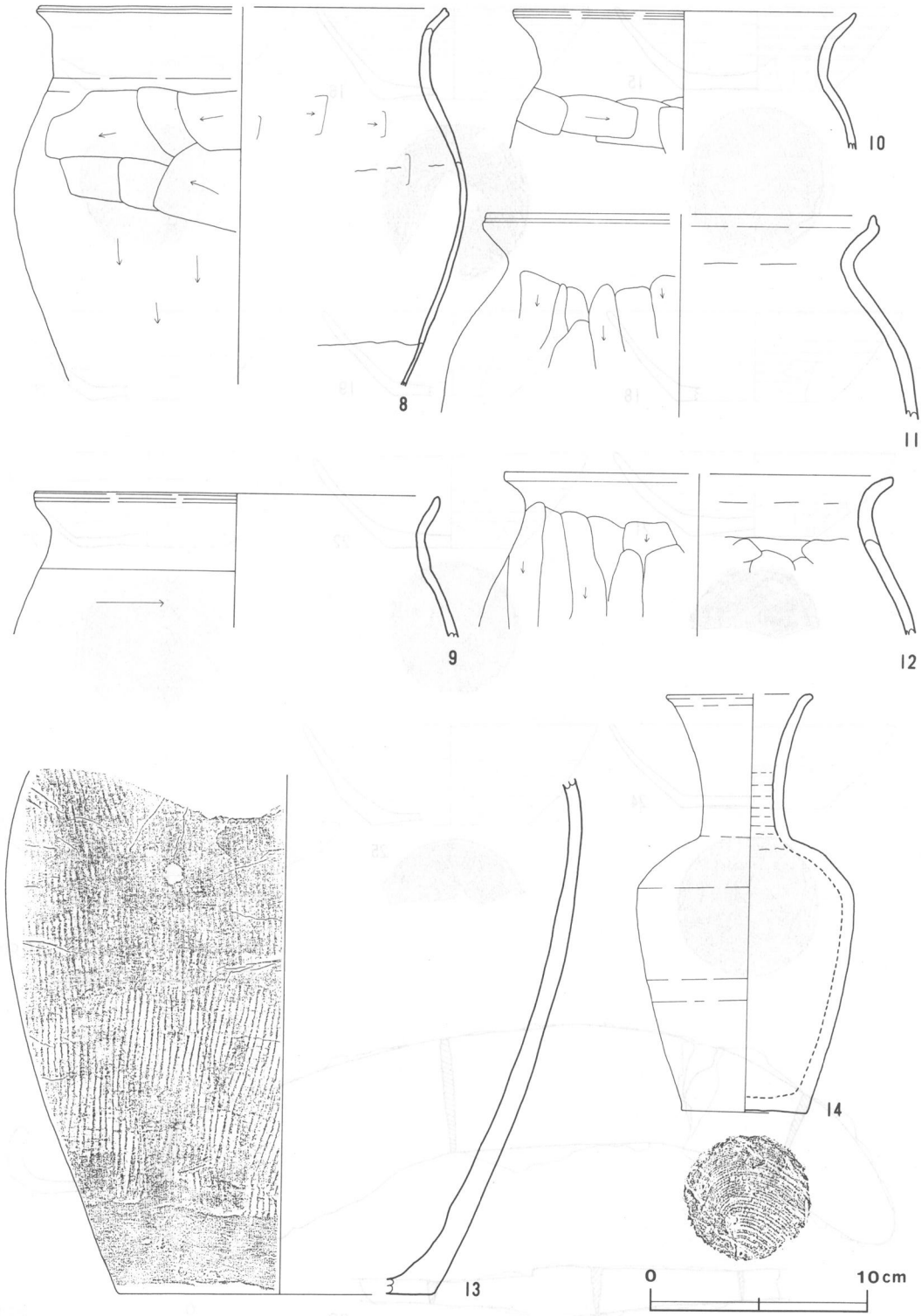
鉄製品（第92図－27・28）

27はほぼ完形の鎌である。基部上半を折り曲げている。刃部は大きく彎曲し，断面は三角形を呈し，現存長は22.7cmである。

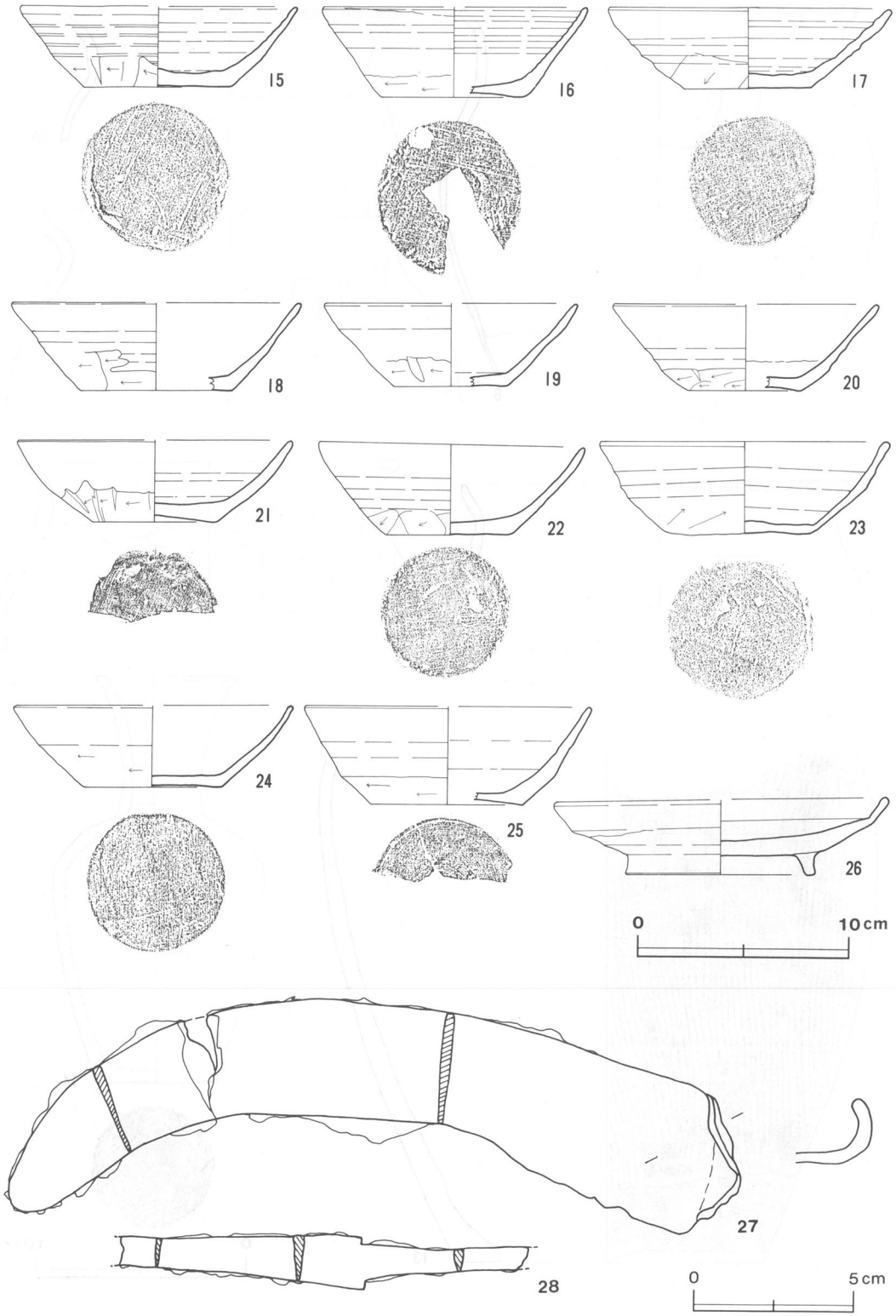
28は刀子で両端部が欠損する。刃と棟（むね）の両側に区（まち）を有する。現存長は7.7cm・刃幅1.3cmである。



第90図　第６号住居跡出土遺物実測図(1)



第91図　第６号住居跡出土遺物実測図(2)

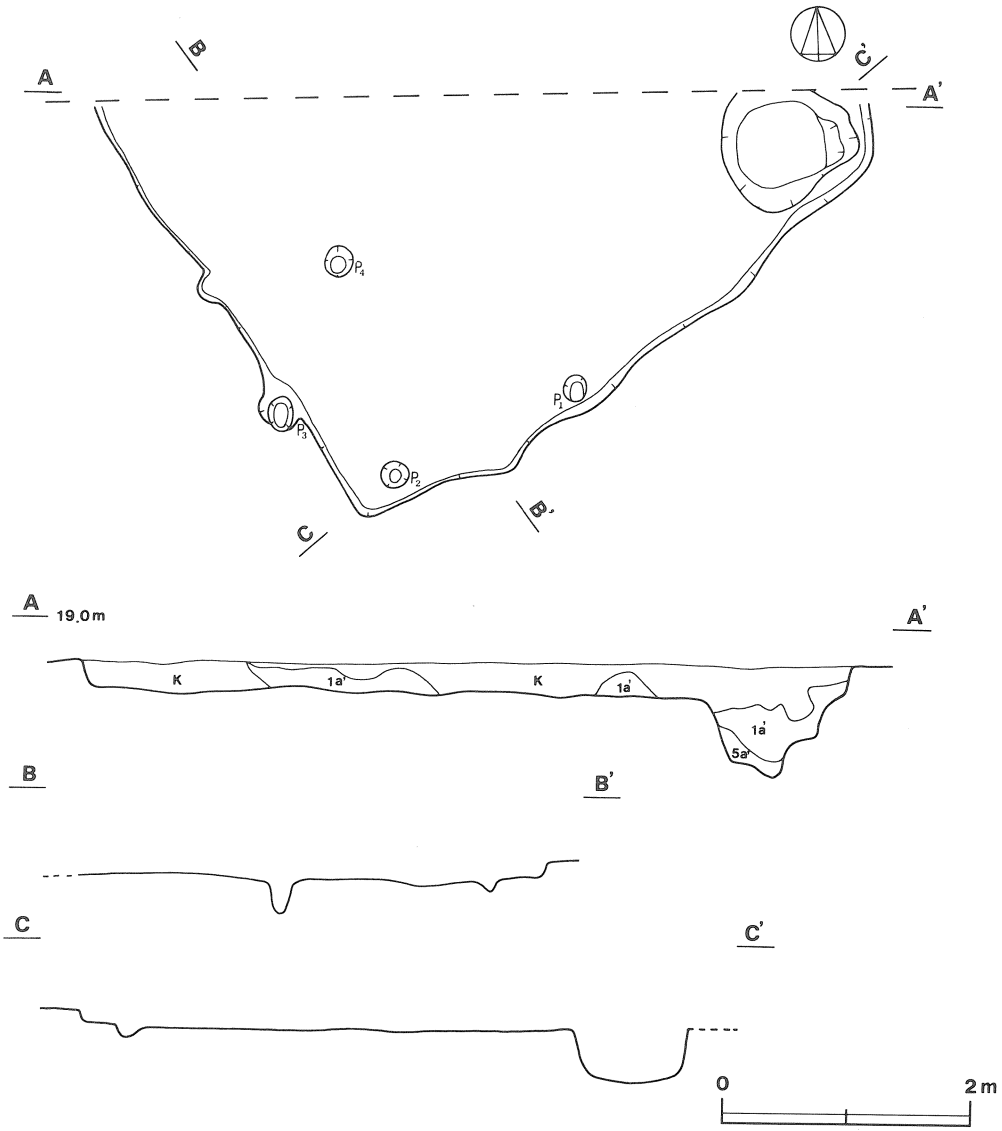


第92図　第６号住居跡出土遺物実測図(3)

第７号住居跡（第93図）

本跡はG2d2を中心に確認され，第２号住居跡の東側約25m に位置している。全体に攪乱を受け遺存状態は悪く，北半分は土取りによって消滅している。

平面形は１辺5.20m の方形を呈するものと思われる。現存壁も攪乱を受けているが，外傾して立ち上がり，壁高は10cm前後である。床面は全体に平坦でやわらかい。ピットはP_1～P_4の４か所検出され，径20cm前後・深さ10～30cmである。配置には規則性がなく主柱穴は不明である。貯蔵穴は，東コーナー部に検出され，平面形は長径110cm・短径95cmの楕円形を呈し，深さ46cmで埦状に掘り込まれている。覆土は全体に攪乱を受けており，ロームブロックを多量に含む褐色土がほと



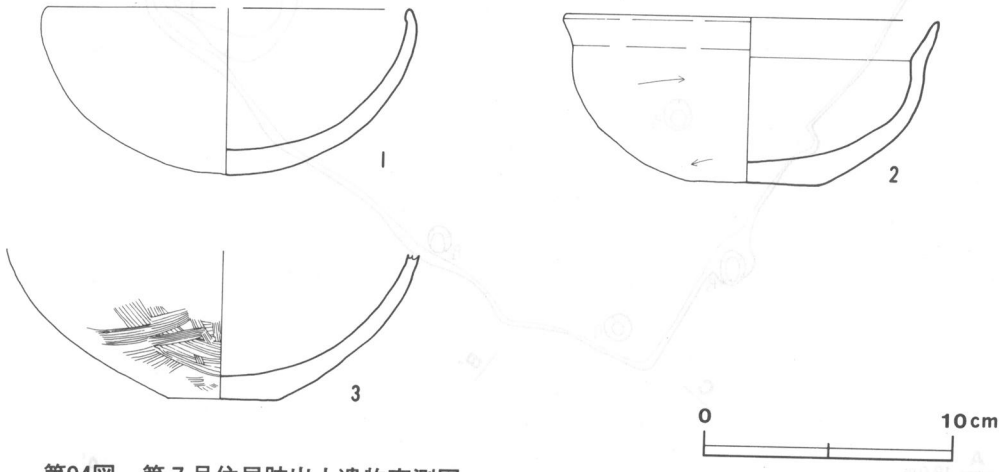
第93図　第７号住居跡実測図

んどである。

遺物は少なく，南東壁中央部付近の床面から甕形土器(第94図－３)と埦形土器(第94図－１)，貯蔵穴内から埦形土器(第94図－２)が出土している。

出土土器観察表（第94図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	埦形 土器 土師器	A (14.6) B 7.6	半球形を呈し，口縁部はやや内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	60% 内・外面全体に赤彩
2	埦形 土器 土師器	A 15.2 B 6.2 C 5.5	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は短く外傾する。内面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤色	85%
3	甕形 土器 土師器	C 4.3	底部は平底で，胴部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	胴部外面－ハケ目 内面－ナデ	砂粒 普通 淡橙色	20%

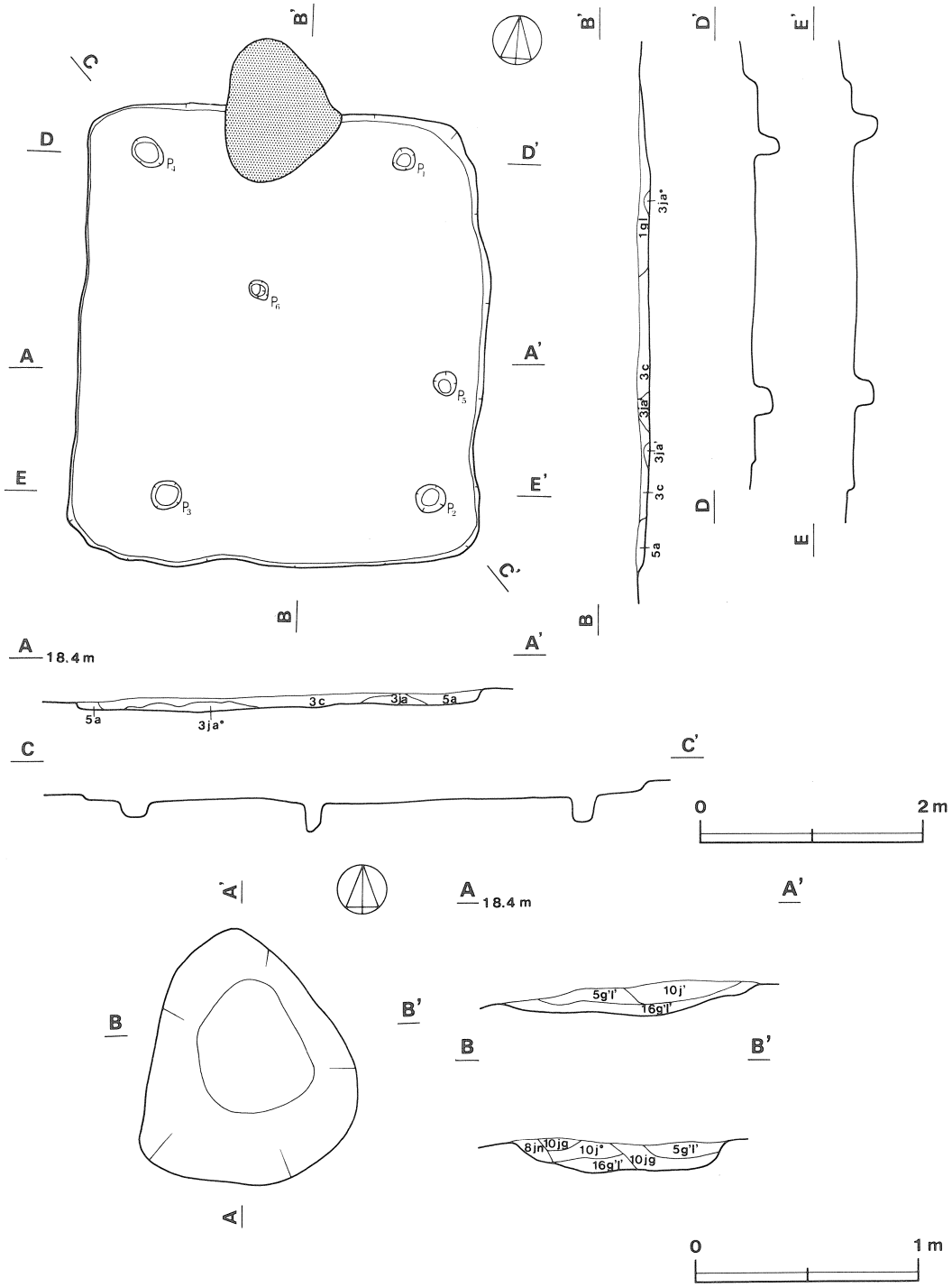


第94図　第７号住居跡出土遺物実測図

第８号住居跡（第95図）

本跡はG1j7を中心に確認され，第１号井戸の東側約２ｍ，第９号住居跡の北側約１ｍに位置している。

平面形は長軸4.05m・短軸3.60mの隅丸長方形を呈し，主軸方向はN－0°を指している。壁は外傾しており，立ち上がりは悪く，壁高は５cm前後である。床面は全体に平坦でよく踏み固められている。特にカマド周辺から住居跡中央部にかけては堅い。ピットはP_1～P_6の6か所検出され，いずれも径20～30cm・深さ20～30cmである。P_3はやや東に寄っているが，ほぼ対角線上に位置する。P_1～P_4が主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，天井部・袖部とも崩壊しており，推定で長さ約100cm・幅約95cmである。北壁を45cmほど切り込み，火床は床を15cm



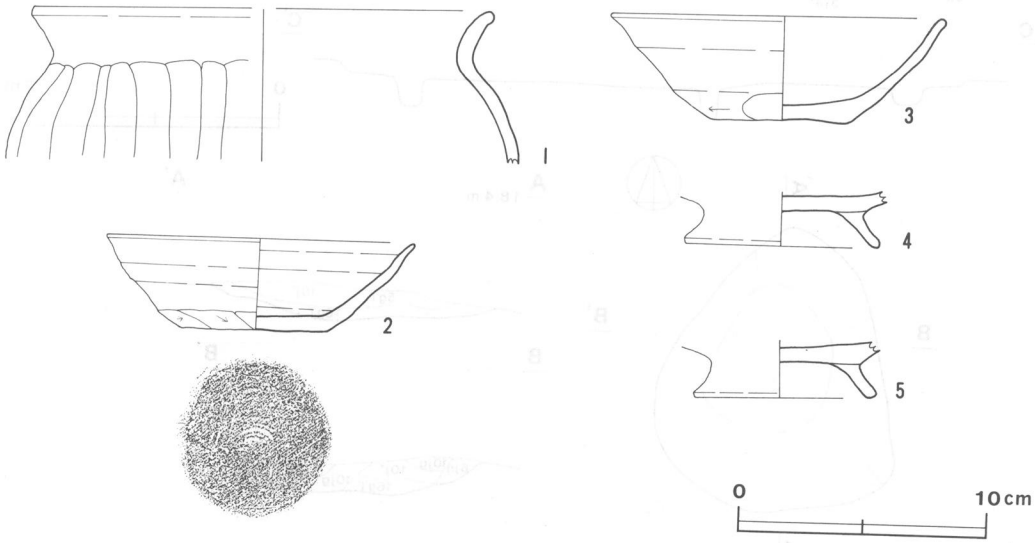
第95図　第８号住居跡・カマド実測図

ほど掘り込んでいる。覆土は西壁から南壁に沿って，幅1mほど攪乱を受けているほかは自然堆積の状態を示し，ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は少なく，土師器の甕形土器や高台付坏形土器などが出土し，カマド内からは須恵器の坏形土器（第96図―3）が出土している。

出土土器観察表（第96図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A (18.4) B (6.2)	丸く張った胴部から口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面―横ナデ 胴部外面―縦位のヘラ削り 内面―ナデ	砂粒 普通 橙色	5％
2	坏形 土器 須恵器	A 12.4 B 3.7 C 5.8	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反する。端部は丸い。	底部―不定方向の手持ちヘラ削り 体部下端―手持ちヘラ削り 内・外面水挽き痕は弱い。	砂粒 不良 橙褐色	100％
3	坏形 土器 須恵器	A 13.5 B 4.3 C 5.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸い。	底部調整不明 体部下端―手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・小礫 普通 にぶい褐色	100％
4	高台付 坏形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	高台は外下方へのび端部は丸い。	底部外面―横ナデ 内面―ヘラ磨き 台部内・外面―横ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 黒色	20％ 内面黒色処理
5	高台付 坏形土器 土師器	D 7.0 E 1.45	高台は外下方へのび端部は丸い。	底部・台部内・外面―横ナデ 高台は貼り付け	砂粒 普通 褐灰色	30％

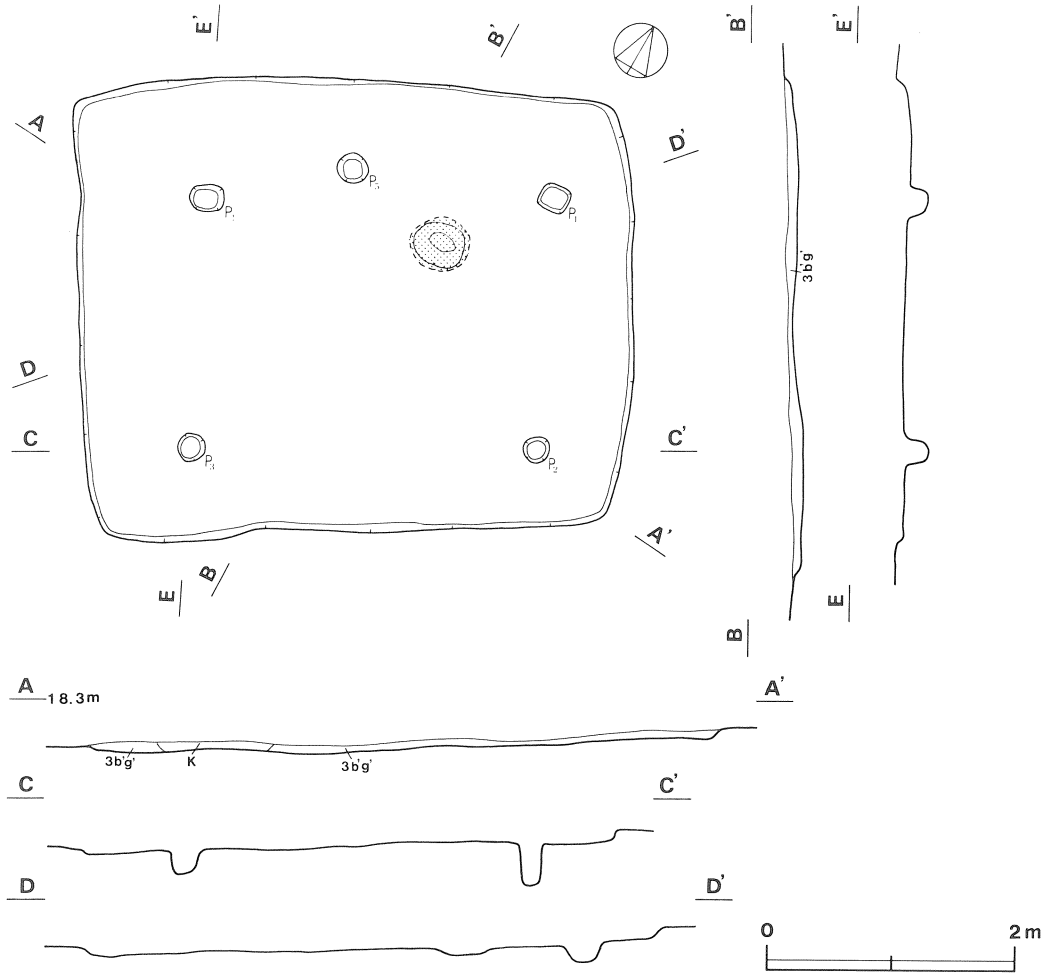


第96図　第8号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡（第97図）

本跡はH1a7を中心に確認され，第8号住居跡の南側約1mに位置している。

平面形は長軸4.40m・短軸3.65mの長方形を呈し，長軸方向はN―60°―Eを指している。壁は



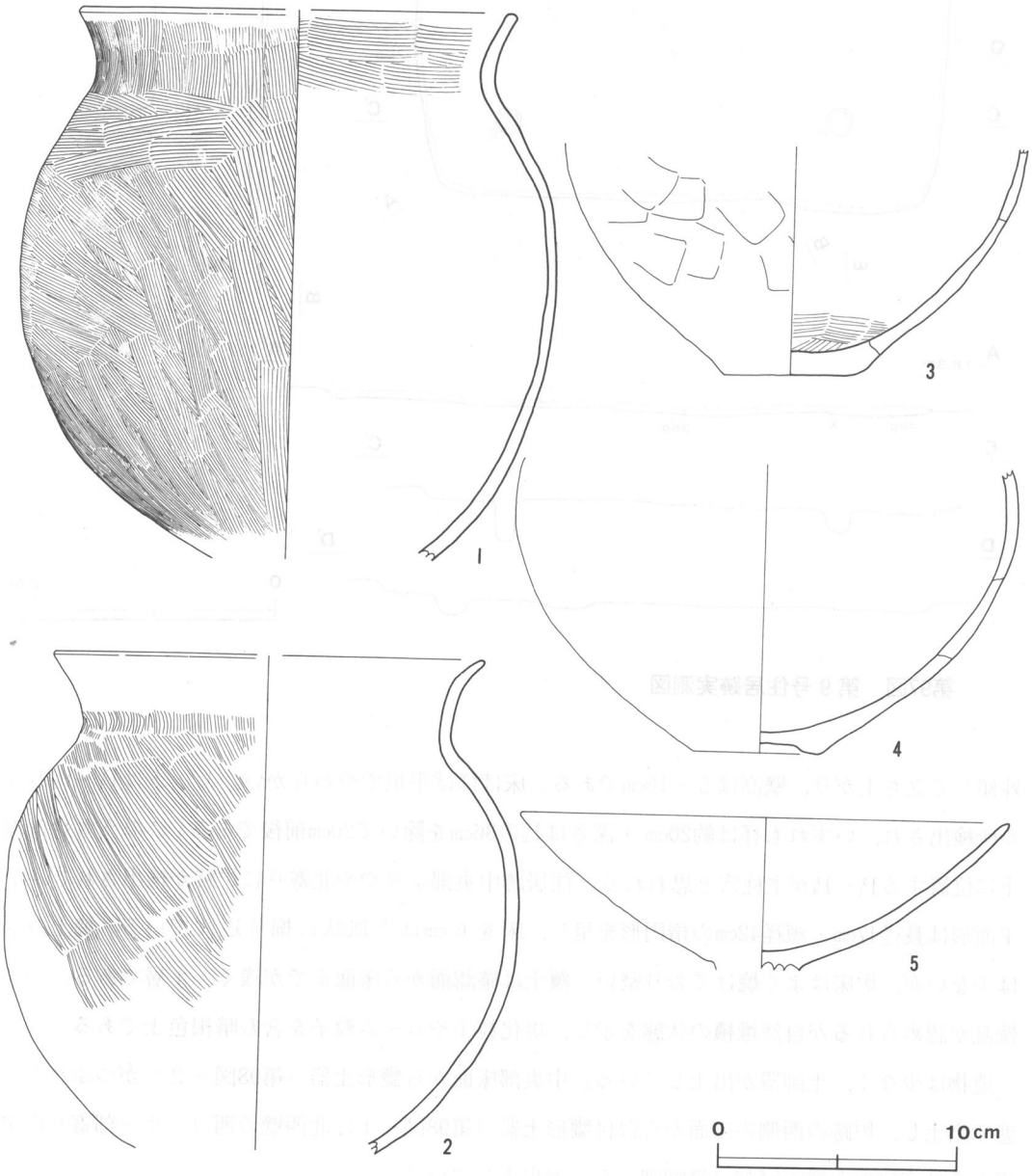
第97図　第９号住居跡実測図

外傾して立ち上がり，壁高は５～10cmである。床はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP_1～P_5の５か所検出され，いずれも径は約20cm・深さはP_2の36cmを除いて20cm前後である。このうち対角線上に位置するP_1～P_4が主柱穴と思われる。住居跡中央部よりやや北寄りに炉跡が検出されている。平面形は長径47cm・短径42cmの楕円形を呈し，床を６cmほど皿状に掘り込んでいる。焼土の量は少ないが，炉床はよく焼けており堅い。覆土は確認面から床面までが浅く，１層である。一部攪乱が認められるが自然堆積の状態を示し，炭化粒子やローム粒子を含む暗褐色土である。

遺物は少なく，土師器が出土している。中央部床面から甕形土器（第98図－２）がつぶれた状態で出土し，炉跡の西側の床面から台付甕形土器（第98図－１），北西壁の西コーナー部寄りの床面からは高坏形土器の坏部（第98図－５）が出土している。

出土土器観察表（第98図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	台付甕形土器 土師器		台部欠損，胴部はやや長胴を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－ハケ目 胴部外面－ハケ目 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 灰褐色	50% 外面に煤付着
2	甕形土器 土師器	A（17.8）	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながら外上方へ立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－斜位のハケ目 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	30%



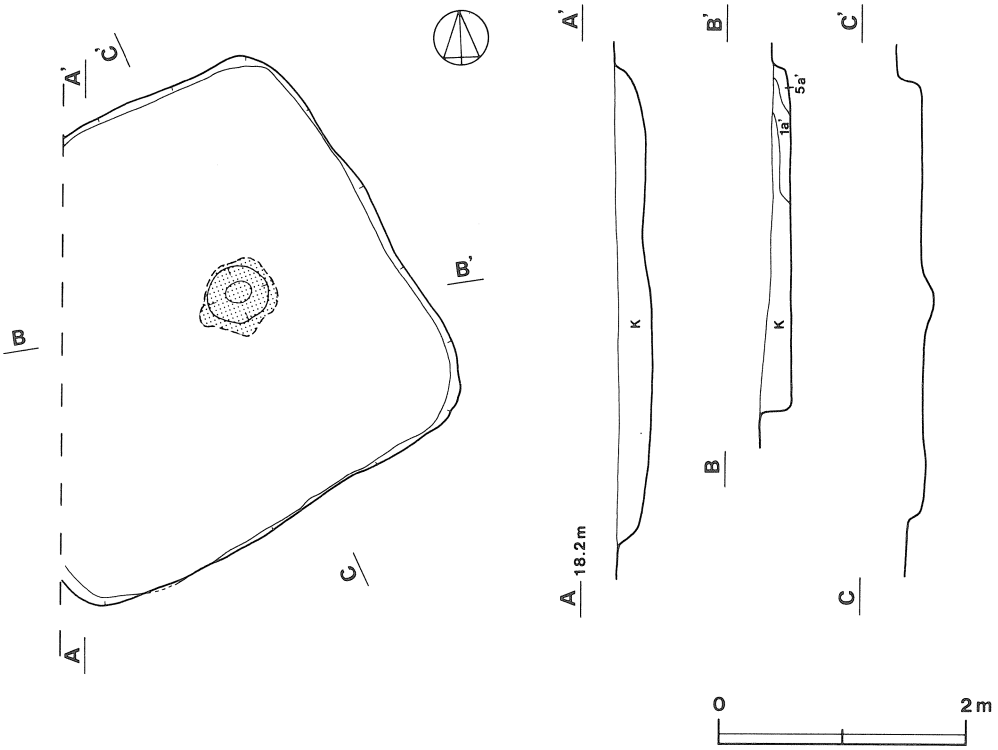
第98図　第９号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	甕形土器 土師器	C 5.5	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部内面ーハケ目 胴部外面ーハケ目	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30%
4	甕形土器 土師器	C 5.5	底部はあげ底を呈し，胴部はほぼ球形をなす。	胴部外面ーナデ 内面ーヘラナデ	砂粒 普通 赤褐色	35%
5	高坏形土器 土師器	A 20.6	体部はやや内彎気味に大きく開いて立上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面ー横ナデ 体部内・外面ーナデ	砂粒 不良 にぶい橙色	35% 内・外面赤彩

第10号住居跡（第99図）

本跡はG1h3を中心に確認され，第4号住居跡の南西側約4m，第6号住居跡の北西側約3mに位置している。西側部は調査区域外へ延びている。

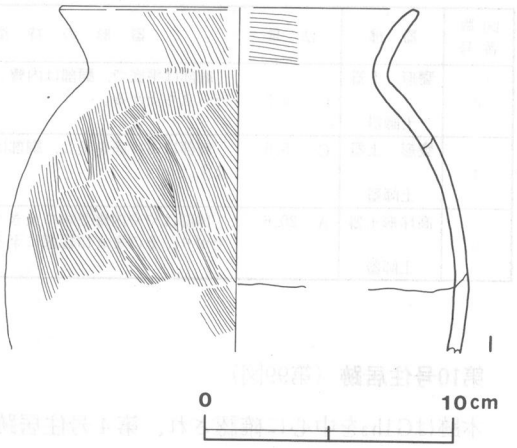
平面形は3.60m×( )mの隅丸方形を呈するものと考えられ，主軸方向はN－26°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は南壁で13cm，北壁で21cmである。東コーナー部付近は攪乱を受け立ち上がりは不明瞭である。床面は攪乱のため東コーナー部付近にやや凹凸が見られるが，ほぼ平坦でやわらかである。南東壁の中央部から北に向かって幅約50cm・長さ約1m範囲は堅く踏み固められており，出入口部と思われる。ピットは検出出来なかった。住居跡中央部か



第99図　第10号住居跡実測図

ら約50cm東寄りに炉跡が検出され，平面形は長径53cm・短径47cmの楕円形を呈し，床を12cmほど皿状に掘り込んでいる。焼土量は少なく炉床もあまり焼けていない。覆土は，ロームブロックを多量に含む暗褐色土が主であり，人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は少なく，東コーナー部付近の床面から土師器の甕形土器（第100図—1）が出土している。



第100図　第10号住居跡出土遺物実測図

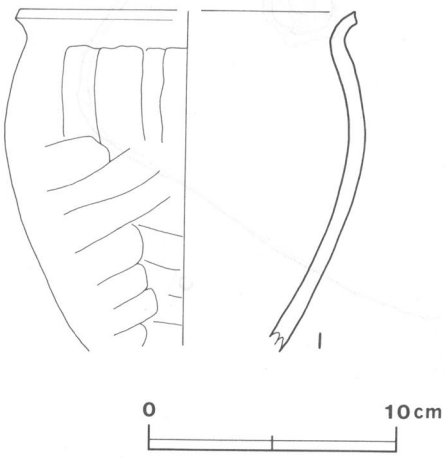
出土土器観察表（第100図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A (14.2)	丸く張った胴部から口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面—ハケ目 胴部外面—ハケ目 内面—ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	20%

第11号住居跡（第83図）

本跡はG1g8を中心に確認され，第4号住居跡の東側約10m，第8号住居跡の北側約9mに位置している。第5・12号住居跡と重複しているが，本跡は第12号住居跡の上に構築され，第5号住居跡に切られていることから，第12号住居跡より新しく第5号住居跡より古いものと思われる。

平面形は長軸4.65m・短軸4.25mの方形を呈し，長軸方向はN—7.5°—Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は約15cmである。床は第5号住居跡とほぼ同じレベルで堅く，平坦である。ピットはP_1・P_2・P_4～P_{12}の11か所検出されているが，第5・12号住居跡と重複のため，本跡に伴うものかどうか不明である。北西コーナー部に位置するピットは，長径105cm・短径80cm・深さ43cmの規模から，本跡の貯蔵穴かと思われる。北壁中央部には少量の焼土が認められ，カマドを有していたと思われる。覆土は，耕作による攪乱を受けて



第101図　第11号住居跡出土遺物実測図

おり，ロームブロックを含む黒褐色土やローム粒子を多量に含む褐色土が混じり合っている。

遺物は少なく，土師器の甕形土器（第101図－１）や坏形土器片が貯蔵穴の東側から出土している。

出土土器観察表（第101図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A（13.6）	胴部上位が張り，口縁部は短く外反し，端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位は縦位，中・下位は斜位のヘラ削り 胴部内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	20%

第12号住居跡（第83図）

本跡はG1g8を中心に確認され，第４号住居跡の東側約10m，第８号住居跡の北側約９ｍに位置している。第５・11号住居跡と重複しており，本跡の上に第５・11号住居跡が構築されていることから，本跡の方が最も古いと思われる。

平面形は長軸3.90m・短軸3.25mの長方形を呈し，長軸方向はN－12°－Wを指している。壁は外傾しているが，立ち上がりは悪く，壁高は約10cmである。床はやや凹凸があるが，全体によく踏み固められている。ピットはP_7～P_{12}の６か所検出されているが，規則性がなく，第5・11号住居跡と重複しているため，本跡に伴うものかどうか不明である。炉跡もカマドも検出されていない。覆土は，全体に貼り床にされたローム土が堅く締まって堆積しており，板状にはがれる。

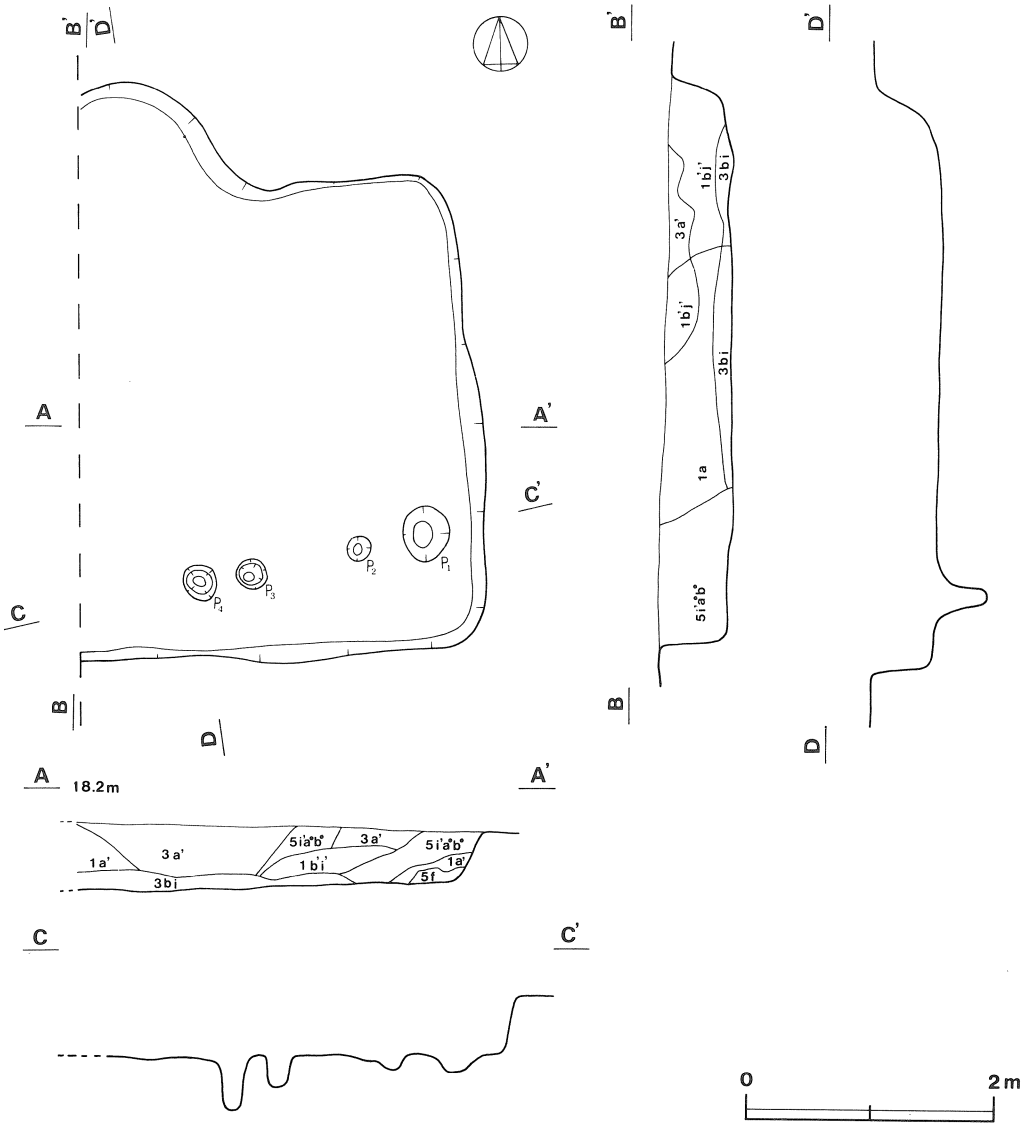
遺物は出土していない。

第13号住居跡（第102図）

本跡はG1j3を中心に確認され，第６号住居跡の西側約２ｍに位置している。西側部分は調査区域外へ延びている。

平面形は3.85m×( )mの隅丸方形を呈するものと思われ，主軸方向はN－0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は35～45cmである。床は平坦で堅く，カマドの前から南壁中央にかけての幅２ｍほどの範囲はよく踏み固められている。特に南壁中央のP_3・P_4の周囲は２～３cm床面が盛り上がっていて堅く，出入口部かと思われる。ピットはP_1～P_4の４か所検出されたが，いずれも南に片寄っており主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，攪乱を受けて全く原形を残さず，床面に少量の焼土が堆積しているだけである。長さと幅は不明であるが，北壁を約100cm切り込んでいる。覆土は，ロームブロックや黒色土ブロックを多量に含む暗褐色土が複雑な層をなしており，埋めもどされたものと思われる。

遺物は土師器の甕形土器，坏形土器が出土している。須恵器は坏形土器のほかに，南壁中央部付近の覆土からほぼ完形の盤形土器（第103図－７），カマドの東側の覆土から高盤形土器（第103図

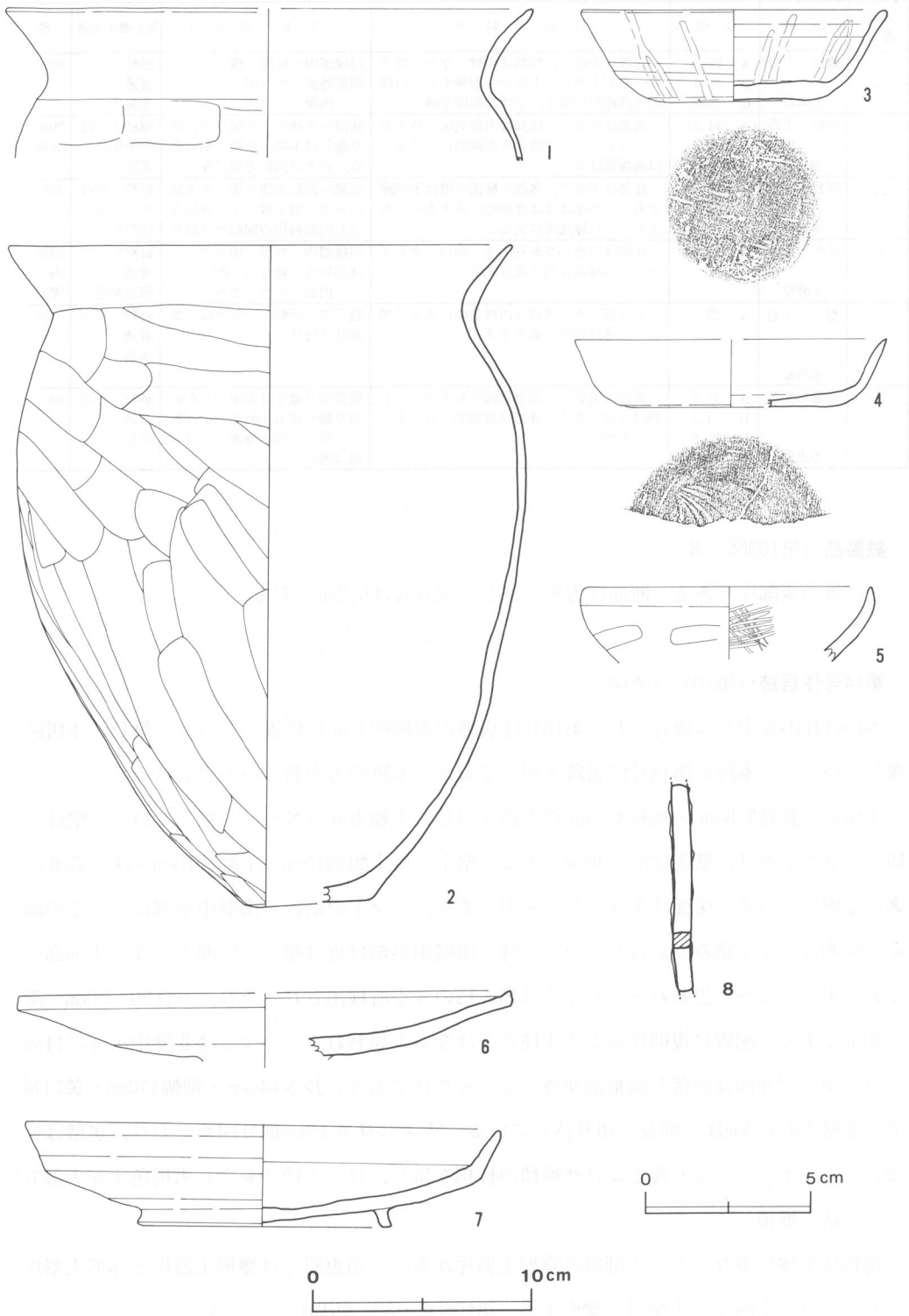


第102図　第13号住居跡実測図

－6）が出土している。

出土土器観察表（第103図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A（24.0）	胴部は丸く張り，頸部はややくびれる。 口縁部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	口頸部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10%



第103図　第13号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	甕形 土器 土師器	A 22.6 B 30.4 C 6.2	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位から内傾する。口縁部は直線的に開き，全体に器厚が薄い。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 赤褐色	85%
3	坏形 土器 須恵器	A (14.3) B 4.2 C 8.4	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，中位から直線的にのびる。口縁端部は丸い。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明，水挽き痕は弱め，ロクロ回転方向は左	細砂・雲母 やや不良 黄灰色	70% 火襷あり
4	坏形 土器 須恵器	A (14.3) B 3.1	底部は平底で，体部と底部の境は不明瞭である。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は尖る。	底部－回転糸切り後，中央部に糸切り痕を残して，外周部は右回転利用の回転ヘラ削り	砂粒・細砂 やや不良 灰白色	30%
5	坏形 土器 土師器	A 13.4	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－雑なヘラ削り 内面－ヘラミガキ	砂粒 普通 明赤褐色	40% 内・外面に赤彩
6	盤形 土器 須恵器	A (22.5)	受け部のみ。体部は内彎気味に大きく開き，口縁外端部に面をなす。	盤下部－回転ヘラ削り後，脚部貼り付け。	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
7	高盤形土器 須恵器	A 21.7 B 4.7 D 11.6 E 0.8	底部は丸底で，高台は短く外下方へのび，端部は面をなす。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部切り離しは不明であるが，切り離し後右回転利用の回転ヘラ削り，内・外面の水挽き痕は弱い。	砂粒・細砂 普通 灰色	95%

鉄製品（第103図－８）

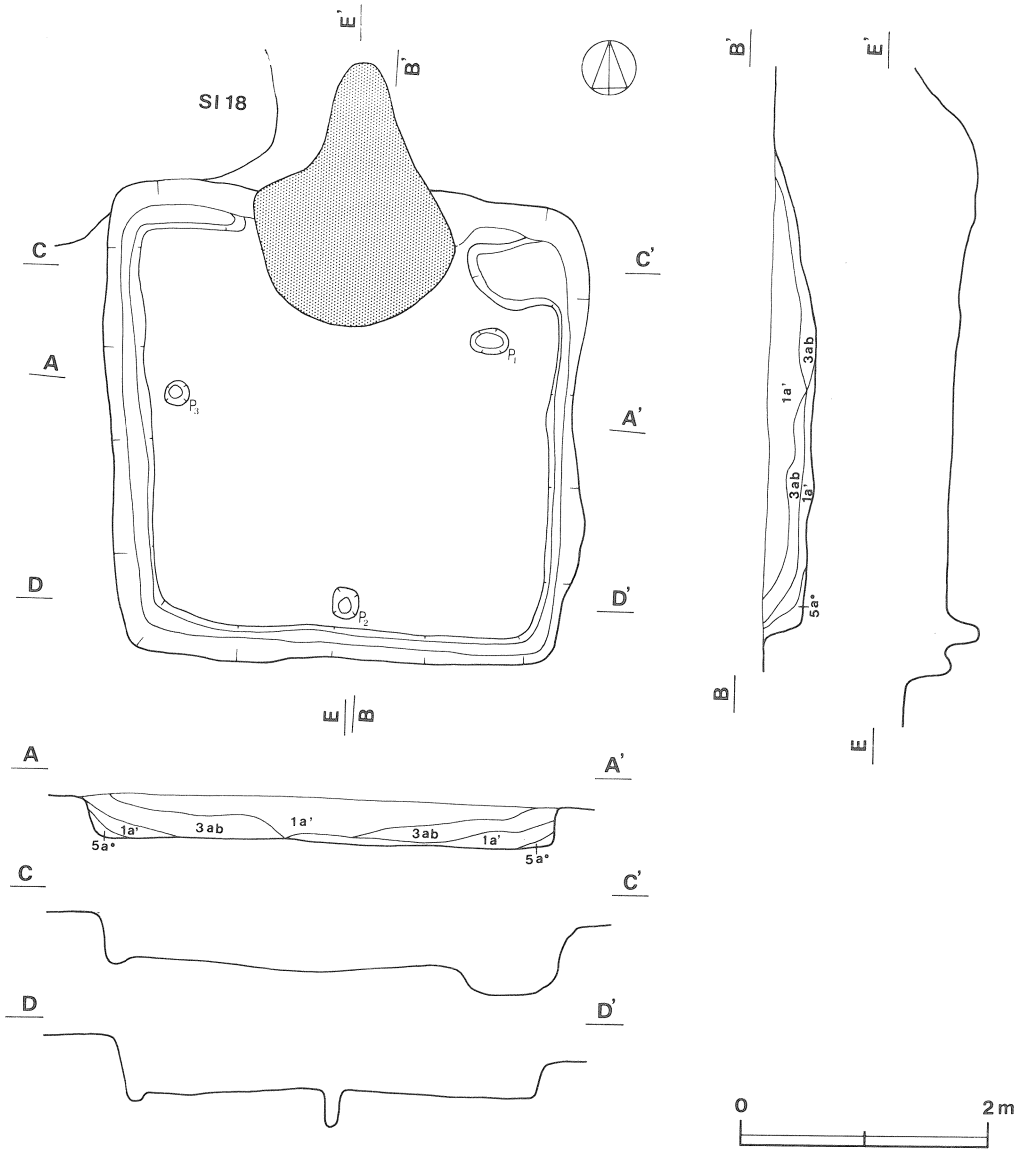
８は鏃の茎部片である。断面は方形を呈し，現存長は6.2cmである。

第14号住居跡（第104・105図）

本跡は$H1f_4$を中心に確認され，第16号住居跡の西側約５ｍに位置している。第18号住居跡と重複しているが，本跡が第18号住居跡を切っており，本跡の方が新しいと思われる。

平面形は長軸3.80m・短軸3.75mの方形を呈し，主軸方向はＮ－0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は30～40cmである。壁下には上幅約15cm・下幅約10cm・深さ約６cmの壁溝が全周している。床面は全体として平坦であり，カマドの前から南壁中央部にかけての幅約１ｍの範囲は，よく踏み固められている。特に南壁中央部付近は堅く，周囲より３～４cm高くなっており出入口部かと思われる。ピットはP_1～P_3の３か所検出され，それぞれ径20～30cm・深さ20～30cmである。配置に規則性がなく主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，天井部は崩落し両袖部が残っているだけである。長さ140cm・袖幅110cm・焚口幅53cmで，北壁を約100cmほど細長く切り込んでいる。火床は床を15cm掘り凹めており，奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の様相を呈し，ローム粒子を含む黒褐色土が大部分で，レンズ状に堆積している。

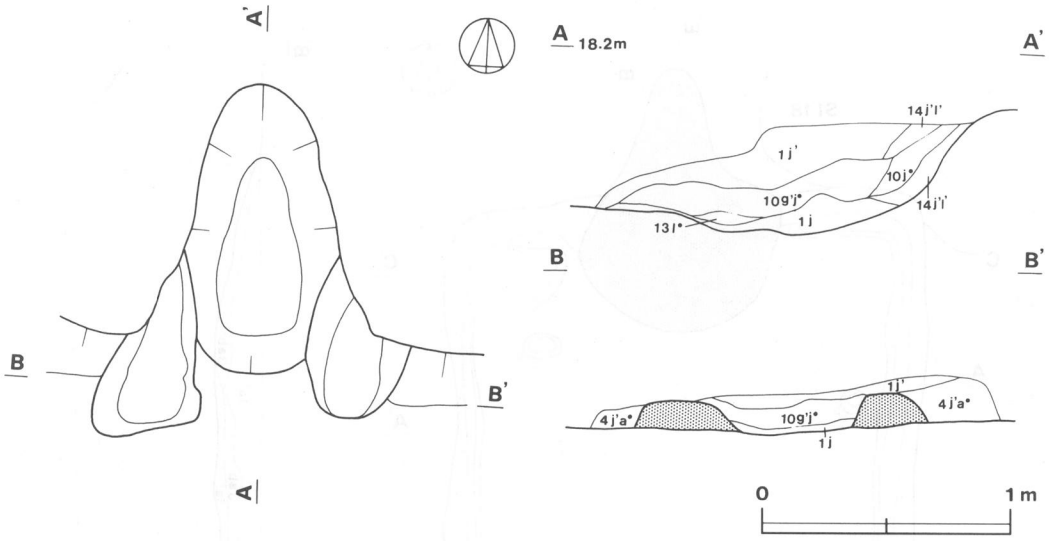
遺物は全体に少ないが，土師器の甕形土器片が多い。須恵器では甕形土器片と坏形土器片がみられる。カマド内から土師器の甕形土器（第106図－３）が出土している。



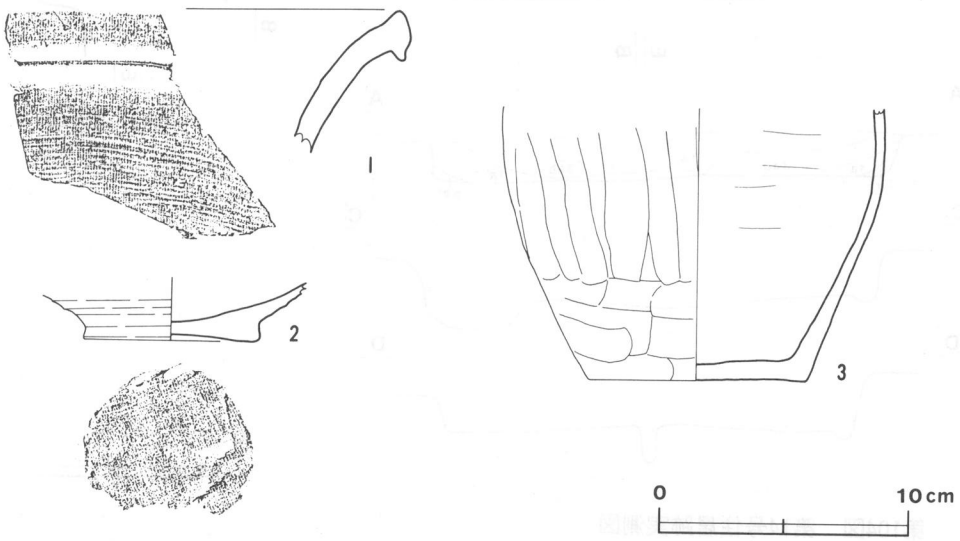
第104図　第14号住居跡実測図

出土土器観察表（第106図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 須恵器		口縁部は外反しながら外上方へのび，口縁端部は外下方に突出する。	口縁部外面－横位のカキ目 内面－横ナデ	砂粒・細砂 良好 灰色	内面オリーブ灰色の自然釉
2	坏形土器 須恵器	D 7.0 E 0.5	底部は突出する平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明，体部外面の水挽き痕はやや強い	砂粒・細砂 不良 浅黄色	40% 酸化焔焼成
3	甕形土器 土師器	C 8.8	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	胴部外面中位－縦位ヘラ削り 下位－横位ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%



第105図　第14号住居跡カマド実測図



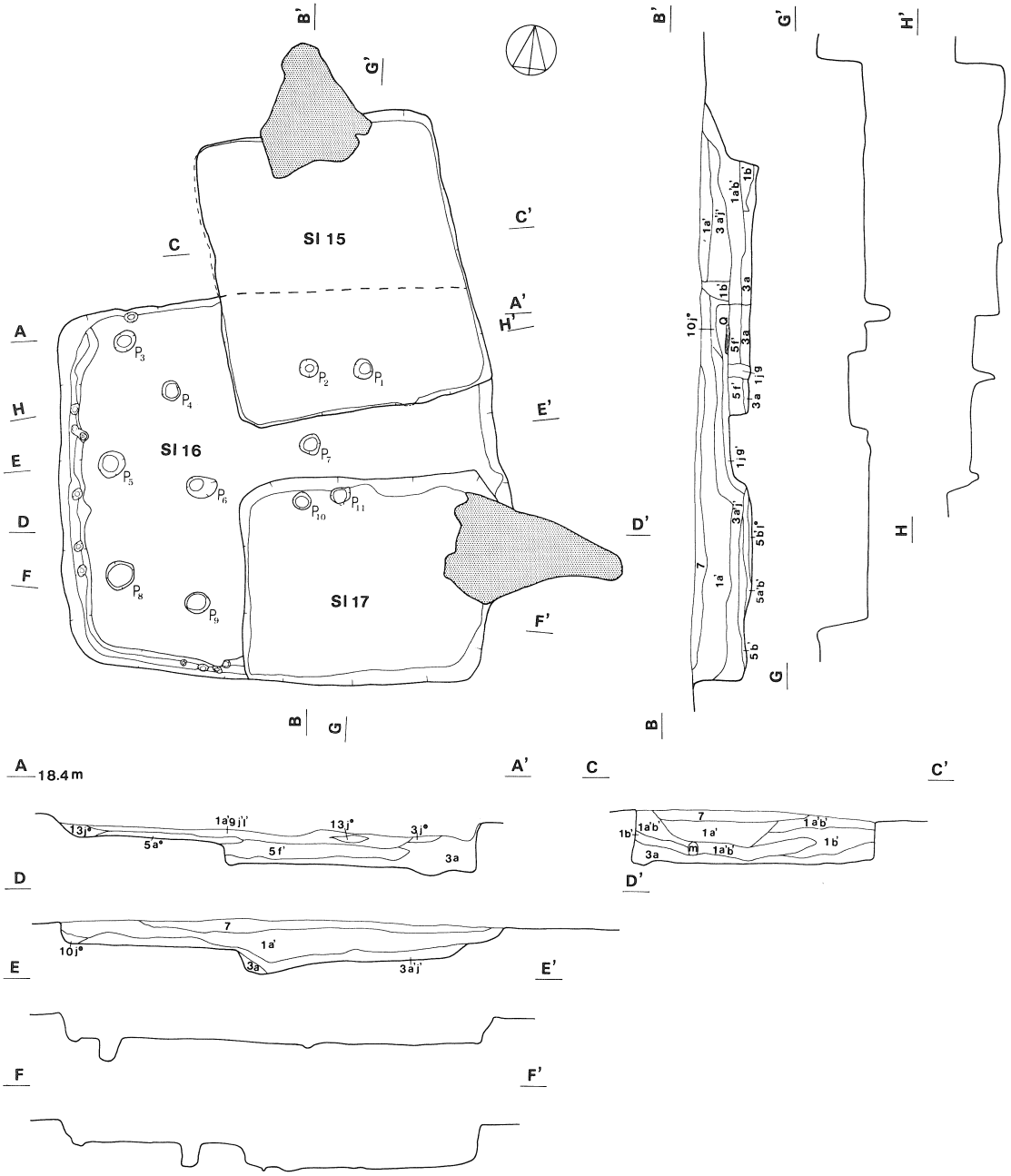
第106図　第14号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡（第107・108図）

本跡はH1e$_6$を中心に確認され，第19号住居跡の南側約３ｍに位置している。第16号住居跡と重複しており，本跡の床面の方が第16号住居跡より約20cm低く，重複する部分は厚さ10～15cmのロームを貼って第16号住居跡の床としていることから，第16号住居跡より本跡の方が古い。

平面形は長軸3.30m・短軸2.80mの長方形を呈し，主軸方向はN－21°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がって，壁高は50～55cmである。床は平坦でよく踏み固められており，特にカマド

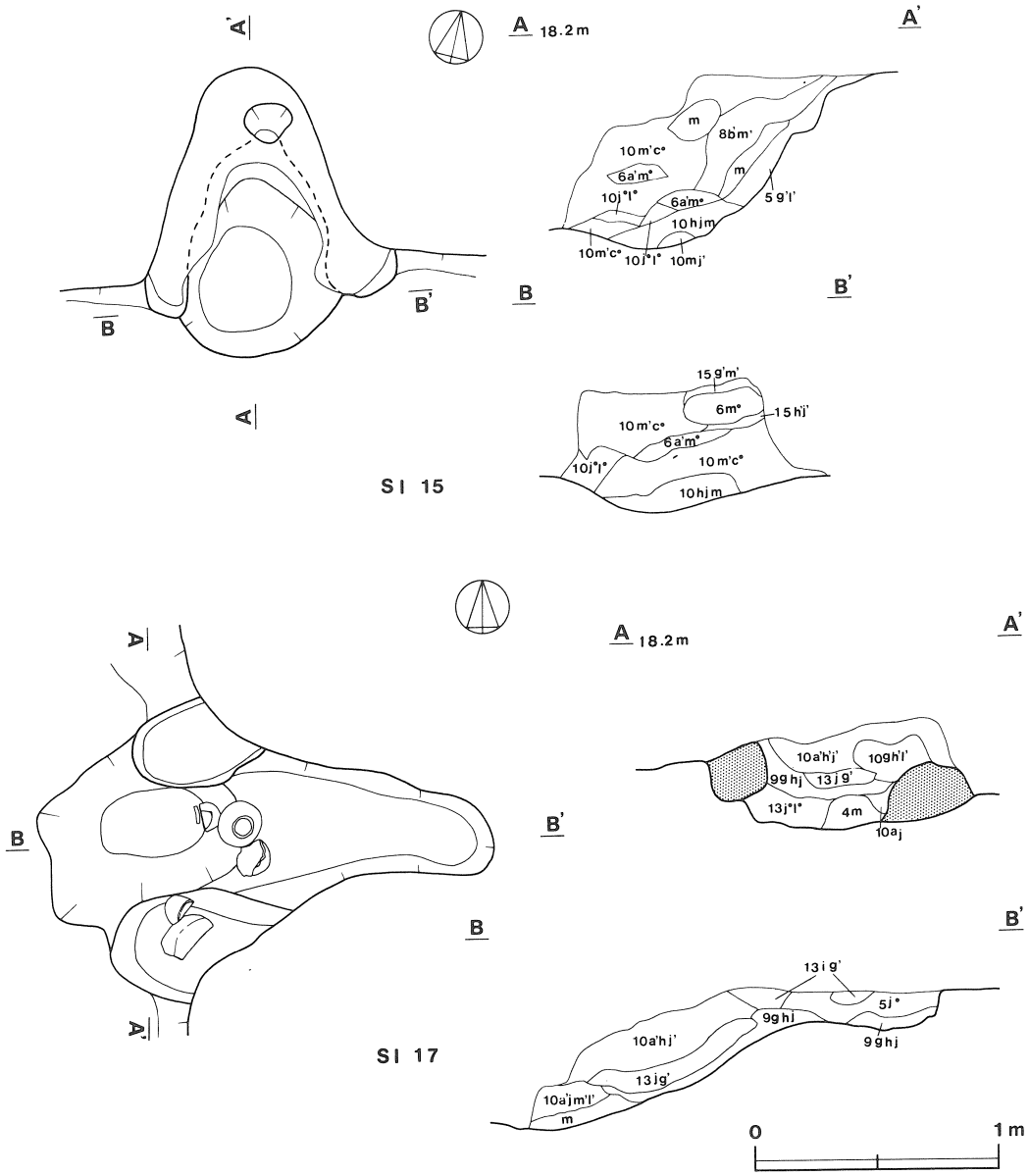
から南壁にかけて約1.5m の幅は堅く，ゴツゴツしている。ピットはP_1とP_2の 2 か所検出されているが，P_2は第16号住居跡に伴うもので，本跡に伴うものはP_1だけである。P_1は径23cm・深さ30cmで，周囲は床面が 2 ～ 3 cm高くよく踏み固められている。カマドは北壁中央部に付設されているが，ほとんど崩壊している。長さ117cm・幅94cmで，北壁を約80cm切り込み，火床は床を 9 cm掘り凹めている。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈し，黒褐色土が大部分で，最下層が暗褐色土であ



第107図　第15・16・17号住居跡実測図

る。

遺物は少なく，カマド内から須恵器の坏形土器（第109図－１）が出土している。



第108図　第15・17号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第109図）

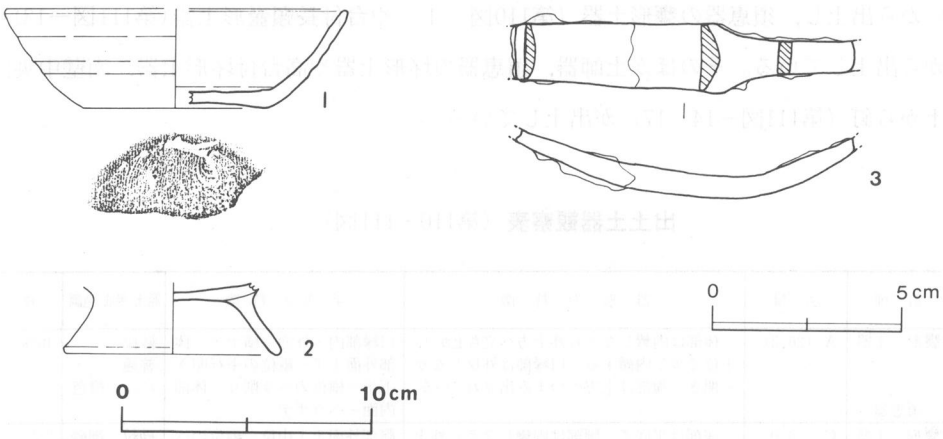
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形土器 須恵器	A (13.6) B 4.0 C (7.4)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り　水挽き痕はやや弱い。	砂粒 不良 褐色	25%

第16号住居跡（第107図）

本跡はH1f6を中心に確認され，第14号住居跡の東側約5m，第21号住居跡の北側約4mに位置している。第15・17号住居跡と重複しており，本跡は第15号住居跡の上に構成され，第17号住居跡によって南東部が切られていることから，第15号住居跡より新しく第17号住居跡より古いと思われる。

平面形は長軸4.90m・短軸4.40mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN—82°—Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は30～35cmである。床は全体に平坦でそれほど堅くない。第15号住居跡の床面が本跡より約20cm低いため，第15号住居跡と重複する部分は，厚さ10～15cmのロームで貼り床をしている。西壁下と南壁下には上幅約22cm・下幅約13cm・深さ約6cmの壁溝が周回し，北壁下には検出されなかった。溝内には径約10cm・深さ10～14cmのピットが15～30cmの間隔で多数認められ，壁柱穴と思われる。ピットはP_2～P_9の8か所検出され，いずれも径20～30cmで，深さはP_7の8cmを除いて22～28cmである。配置に規則性がなく主柱穴は不明である。P_2は第15号住居跡の床面まで達している。第17号住居跡と重複している部分には本跡のピットと思われるものは検出できなかった。北中央付近に焼土が認められたが，カマドの掘り込みは確認できなかった。覆土は自然堆積の状態を示しており，ローム粒子を含む黒褐色土，暗褐色土が主である。また，ほぼ床全体に炭化物と焼土が広がり，火災を受けていると推定される。

遺物は比較的少ないが，土師器の甕形土器片が多い。東壁付近の覆土から高台付坏形土器（第109図—2），南西コーナー部付近の覆土から槍鉋（第109図—3）が出土している。



第109図　第15・16号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第109図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	高台付坏形土器 土師器	D 8.9	高台は外下方へのび，端部は丸い。	底部内面—ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面—横ナデ	砂粒 普通 橙色	35%

鉄製品（第109図－３）

３は槍鉋で，両端部が欠損する。弓状に反り，断面は三角形を呈する。現存長は9.1cm・刀幅1.8cmである。

第17号住居跡（第107・108図）

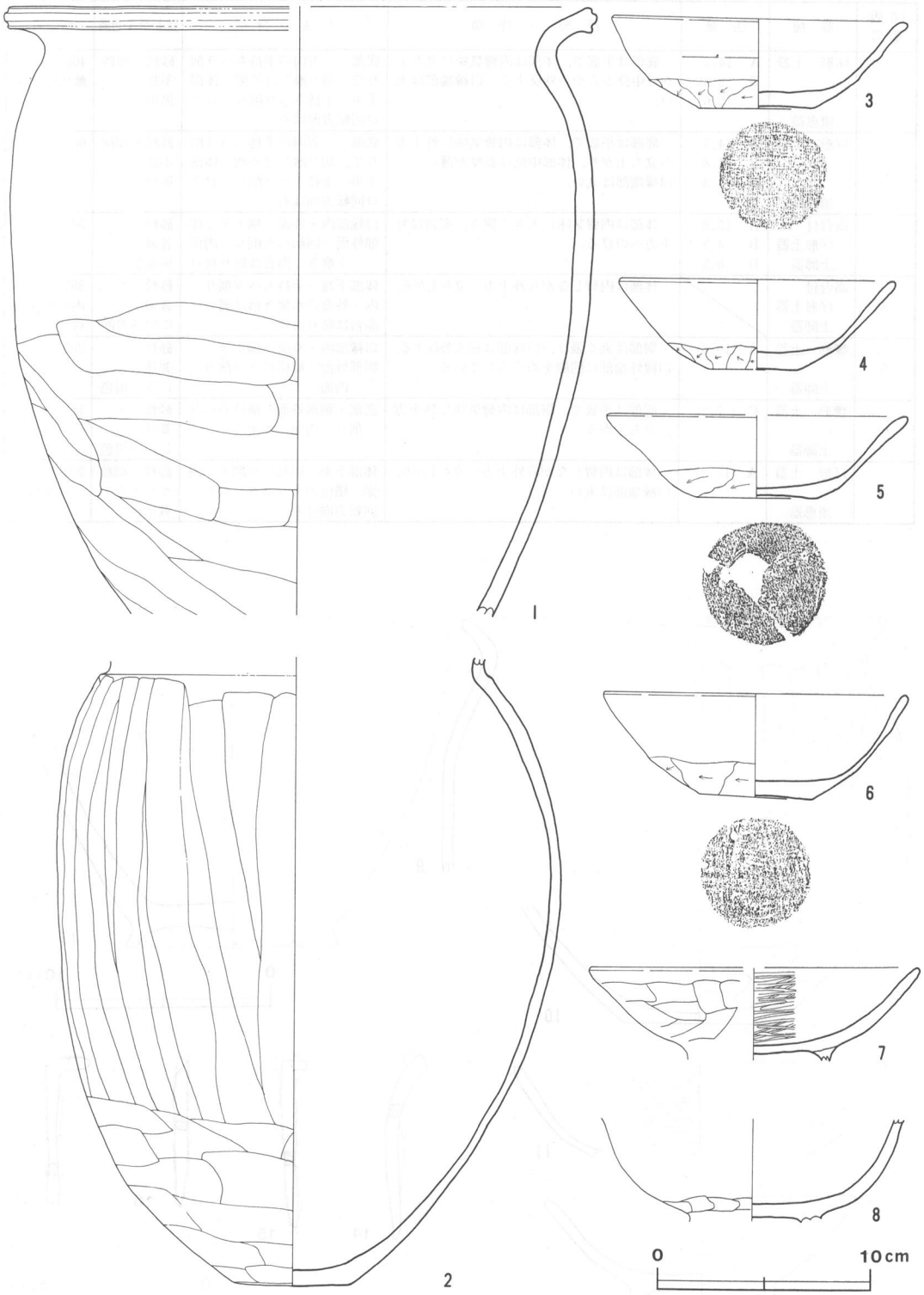
本跡はH1f6を中心に確認され。第21号住居跡の北側約３m，第20号住居跡の西側約７mに位置している。第16号住居跡と重複しているが，本跡が第16号住居跡を切り込んでいることから，本跡の方が新しいと考えられる。

平面形は長軸2.70m・短軸2.30mの長方形を呈し，主軸方向はN－81°－Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がる。壁高は西・北壁は重複のため不明であるが，東・南壁は50～55cmである。壁際を除いて床面の大部分が非常に堅くゴツゴツしている。ピットはP_{10}・P_{11}の２か所が検出され，いずれも径20cm・深さ約30cmであるが，北壁下に位置しており主柱穴とは考えられない。カマドは東壁中央部からやや北寄りに付設され，長さ183cm・幅114cm・焚口幅50cmで，東壁を約125cm細長く切り込んでいる。奥壁はゆるやかな傾斜で立ち上がり，火床は床を３cmほど掘り凹めている。覆土は自然堆積の状態を呈しており，大きく３層に分かれ，下から暗褐色土・黒褐色土・黒色土が堆積しており，中・下層はローム粒子や炭化粒子を含んでいる。床面には全体に焼土が広がり，柱状の炭化物が見られ，火災を受けていると推定される。

遺物の出土は多く，土師器の甕形土器が南壁中央部付近床面（第111図－９）やカマド（第110図－２）から出土し，須恵器の甕形土器（第110図－１）や台付長頸壺形土器（第111図－13）もカマド内から出土している。そのほか土師器，須恵器の坏形土器や高台付坏形土器，南壁中央部付近の覆土から釘（第111図－14～17）が出土している。

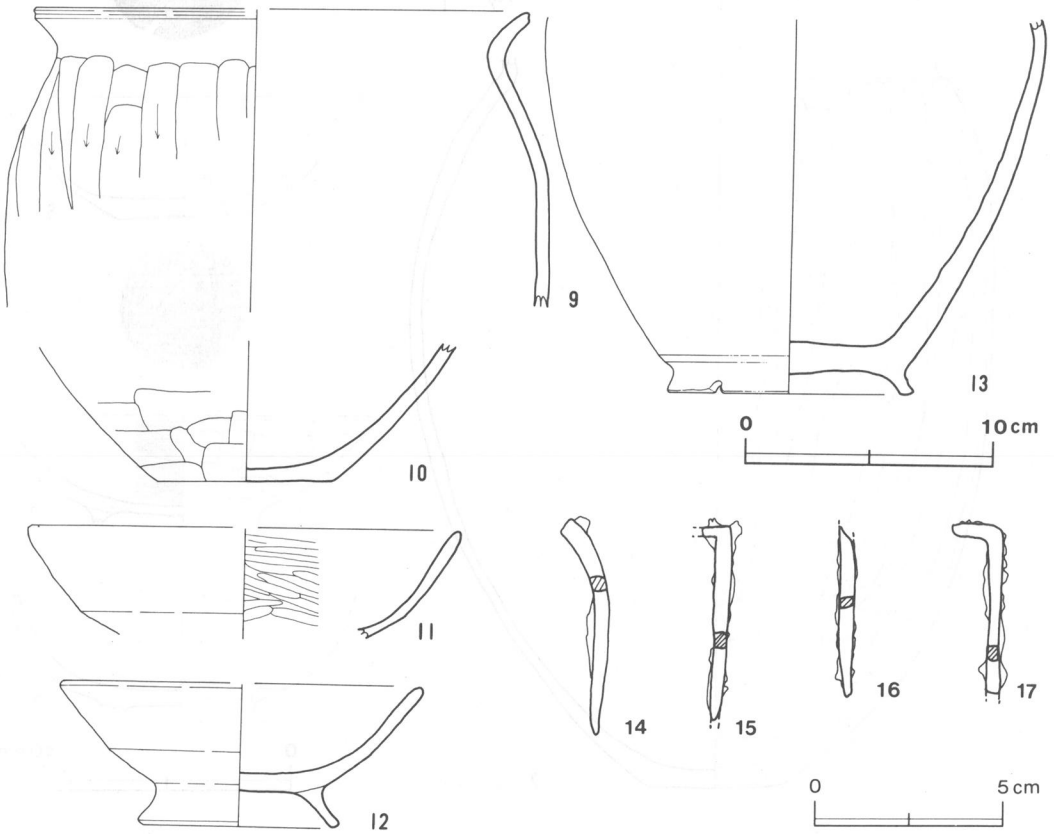
出土土器観察表（第110・111図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 須恵器	A (26.2)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位で少し内傾する。口縁部は外反しながら開き，端部は上方へつまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ　体部外面上半－縦位の平行叩き　下半－横位のヘラ削り　体部内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%
2	甕形土器 土師器	C 6.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位から内傾する。	胴部外面上・中位－縦位のヘラ削り　下位－横位のヘラ削り　胴部内面－ヘラナデ	砂粒・細砂 普通 明褐色	35%
3	坏形土器 須恵器	A 13.8 B 4.2 C 5.4	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部下半－手持ちヘラ削り　ロクロ　回転方向は右	砂粒・細粒 不良 にぶい黄橙色	80% 酸化焔焼成
4	坏形土器 須恵器	A 12.8 B 4.2 C 4.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，体部中位は器厚が薄い。口縁端部は丸い。	底部－不定方向のナデで，切り離しは不明　体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 不良 浅黄色	95% 酸化焔焼成 二次焼成



第110図　第17号住居跡出土遺物実測図（1）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	坏形 土器 須恵器	A 14.2 B 3.85 C 5.6	底部は平底で，体部は内彎気味に立ち上がり中位からやや外反する。口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下半－手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 不良 黒褐色	40% 酸化焔焼成
6	坏形 土器 須恵器	A 14.3 B 4.8 C 5.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，体部中位は器厚が薄い。口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下半－手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 不良 灰色	60%
7	高台付 坏形土器 土師器	A 15.8 B 4.3 D 6.5	体部は内彎気味に大きく開き，高台は外下方へのびる。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－回転ヘラ削り 内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け	砂粒 普通 灰赤色	50%
8	高台付 坏形土器 土師器		体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	体部下端－手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い 高台は貼り付け	砂粒 普通 にぶい黄橙色	35% 内面黒色処理
9	甕形 土器 土師器	A (19.8)	胴部は丸く張り，口縁部は短く外反する。口縁外端部に凹線をめぐらしている。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	20%
10	甕形 土器 土師器	C (7.2)	底部は平底で，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部・胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	10%
11	坏形 土器 須恵器	A (17.2)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	体部下半－回転ヘラ削り。内面－横位のヘラ磨き。ロクロ回転方向は右。	砂粒・細粒 やや不良 黄灰色	20% 二次焼成



第111図　第17号住居跡出土遺物実測図 (2)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
12	高台付坏形土器 須恵器	A 14.5 B 15.8 D 7.7	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。高台は外下方へのび，端部に面をなす。	底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り後高台貼り付け 底部切り離しは不明　ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 不良 にぶい黄色	50% 酸化焔焼成 二次焼成
13	台付長頸壺形土器 須恵器	D 9.5 E 0.9	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	体部外面・下端一回転ヘラ削り。高台は貼り付け　内・外面の水挽き痕は弱い	細砂・細礫 普通 にぶい橙色	45% 二次焼成

鉄製品（第111図－14～17）

14～17はいずれも釘で，断面形は方形を呈する。

14はゆるく曲がっており，頭部を欠損する。現存長は5.6cmである。

16は上部を欠損し，現存長は4.5cmである。

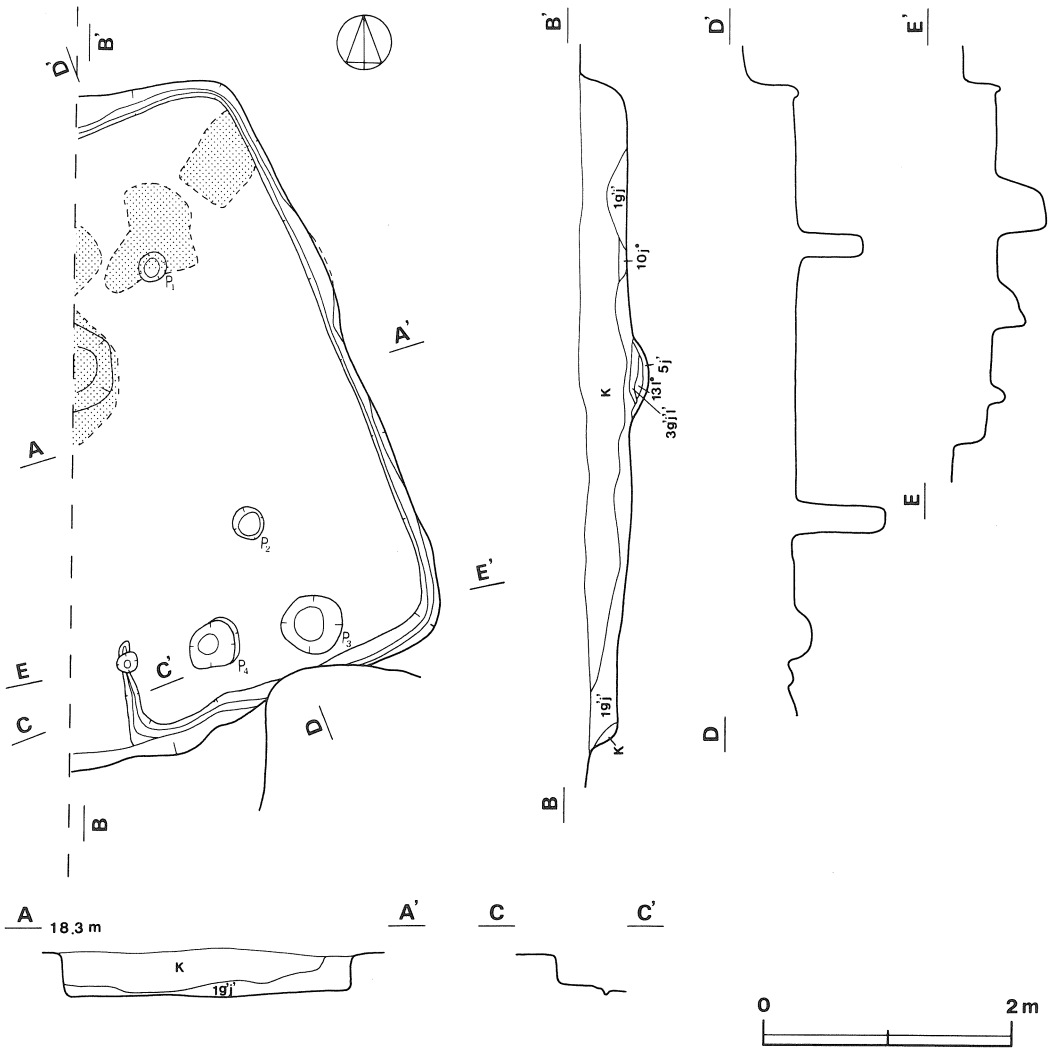
15・17は先端部を欠損し，頭部が屈曲する。現存長は15が4.5cm，17が5.2cmである。

第18号住居跡（第112図）

本跡はH1e3を中心に確認され，第19号住居跡の南西側約9mに位置している。第14号住居跡と重複しており，第14号住居跡が本跡の南壁を切っていることから，本跡は第14号住居跡より古いと考えられる。本跡の西側部分は調査区域外へ延びている。

平面形は方形を呈するものと思われ，東壁の長さは4.95mであり，長軸方向はN－23°－Wを指している。南・北・東壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は東で約26cm・北で36cm・南で30cmである。壁下には壁溝が検出され，おそらく全周していると思われる。上幅13cm・下幅6cm・深さ約5cmであるが，東壁中央部約1mは上幅・下幅とも5cmほど広くなっている。床は全体に平坦で凹凸は少なく堅い。南壁の中央部から住居跡内に向かって，壁溝と同規模の溝が約80cm延びており，その先端に径15cm・深さ14cmのP_5があり，間仕切りの溝かと思われる。この溝の西側の幅約50cm，長さ約70cmの範囲の床は周囲より約4cm前後高くよく踏み固められており，出入口部かと思われる。ピットはP_1～P_5の5か所検出され，P_1・P_2はいずれも径25cm・深さ50～76cmでしっかりしており，配置から主柱穴と思われる。P_3は平面形が径約50cmの円形を呈し，深さが46cmで椀状に掘り込まれており，貯蔵穴かと思われる。住居跡中央部のやや北寄りに炉跡が検出されたが，西側半分は調査区域外にかかっている。平面形は径約60cmの円形で，床面を15cmほど掘り込んでいる。焼土量が多くよく使用したと思われ，炉床は焼けてブロック状を呈している。覆土は大きく2層に分かれ，上層はロームブロックを多量に含む攪乱で，下層は焼土粒子・炭化物を含む黒褐色土で自然堆積の状態を呈している。床面には焼土の広がりや柱状の炭化材も見られ，火災を受けていると思われる。

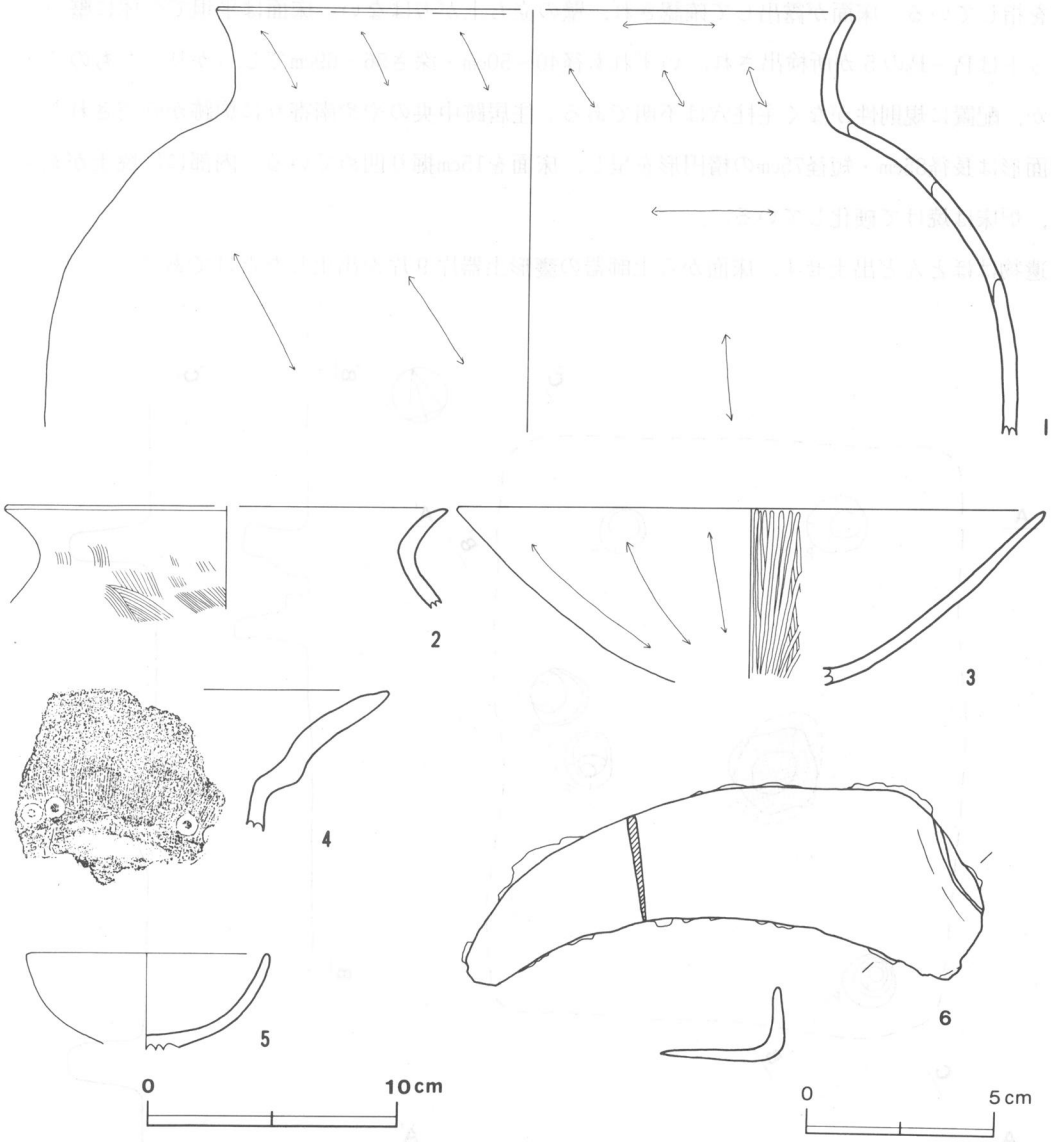
遺物は，土師器の甕形土器や坏形土器が出土し，東コーナー付近の床面から鎌（第113図－6）が出土している。



第112図　第18号住居跡実測図

出土土器観察表（第113）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A (25.6)	口縁部は外反しながら立ち上がり，胴部は球形を呈するものと思われる。全体に器厚は薄い。	口縁部内・外面と胴部外面－丁寧な斜位のナデ 胴部内面－ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	20%
2	甕形　土器 土師器	A (17.8)	口縁部「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ハケ目 内面－ナデ	砂粒 普通 淡黄色	10%
3	高坏形土器 土師器	A 23.7	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。	坏部内・外面－丁寧な縦位のヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	40%
4	壺形　土器 土師器		口縁部片。有段口縁をなす。	外面－横ナデ後口唇直下にハケ目　段直下に2個1単位の円形刺突文　内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	5%
5	高坏形土器 土師器	A 9.7	坏部は半球状を呈する。脚部を欠損する。	坏部内・外面－丁寧なナデ	砂粒・普通 明褐灰色	40%



第113図　第18号住居跡出土遺物実測図

鉄製品（第113図－６）

６は鎌で完存品である。基部上半を折り曲げている。長さは13.7cmである。

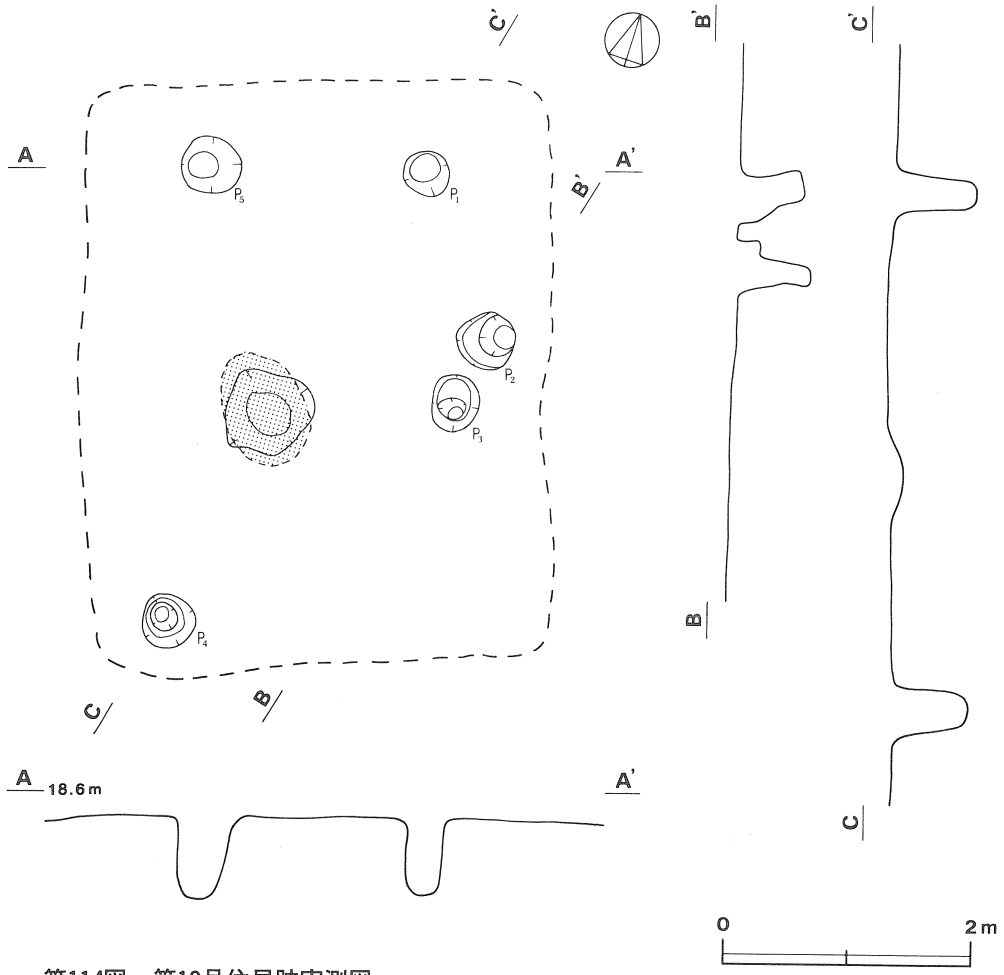
第19号住居跡（第114図）

本跡はH1d$_6$を中心に確認され，第９号住居跡の南西側約７ｍ，第15号住居跡の北側約４ｍに位置している。

平面形は長軸約4.60m・短軸約3.60mの長方形を呈するものと思われる。長軸方向はN－20°－

Wを指している。床面が露出して確認され，壁の立ち上がりはない。床面は平坦で全体に堅い。ピットはP_1～P_5の５か所検出され，いずれも径40～50cm・深さ56～69cmでしっかりしたものであるが，配置に規則性がなく主柱穴は不明である。住居跡中央のやや南寄りに炉跡が確認された。平面形は長径85cm・短径75cmの楕円形を呈し，床面を15cm掘り凹めている。内部には焼土が充満し，炉床は焼けて硬化している。

遺物はほとんど出土せず，床面から土師器の甕形土器片９片が出土しただけである。

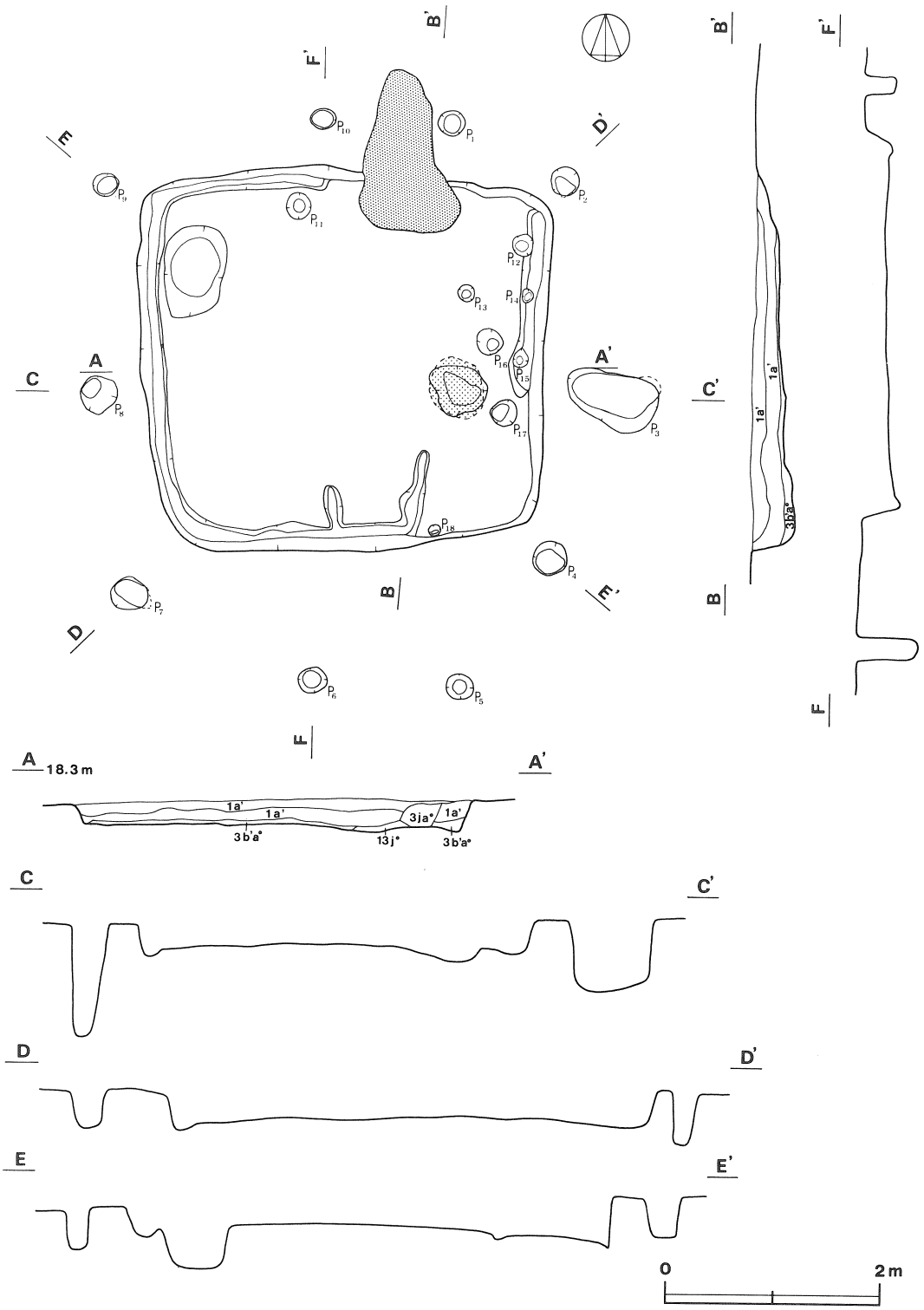


第114図　第19号住居跡実測図

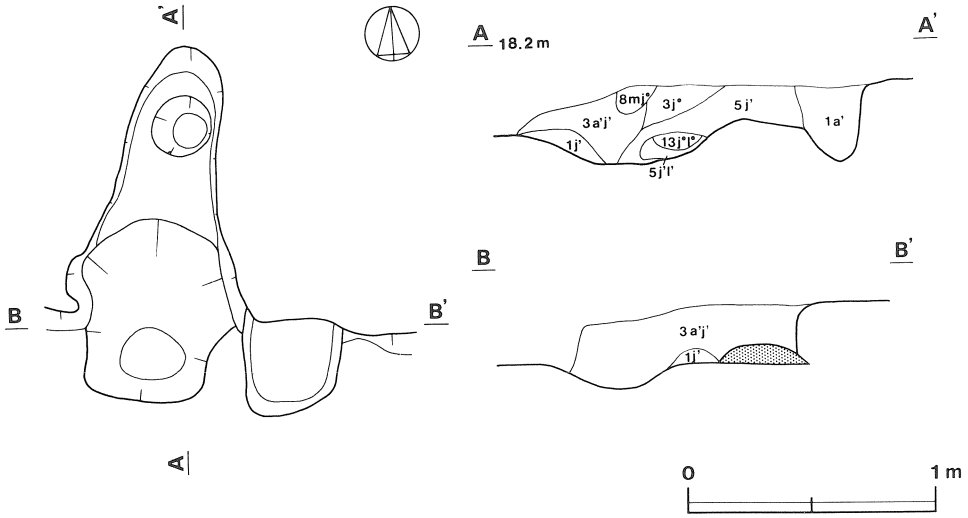
第20号住居跡（第115・116図）

本跡はH1f9を中心に確認され，第17号住居跡の東側約７ｍに位置している。

平面形は長軸3.75m・短軸3.60mのほぼ方形を呈し，主軸方向はN－0°を指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は25～35cmである。南東コーナー部付近と，北壁のカマドから北東



第115図　第20号住居跡実測図



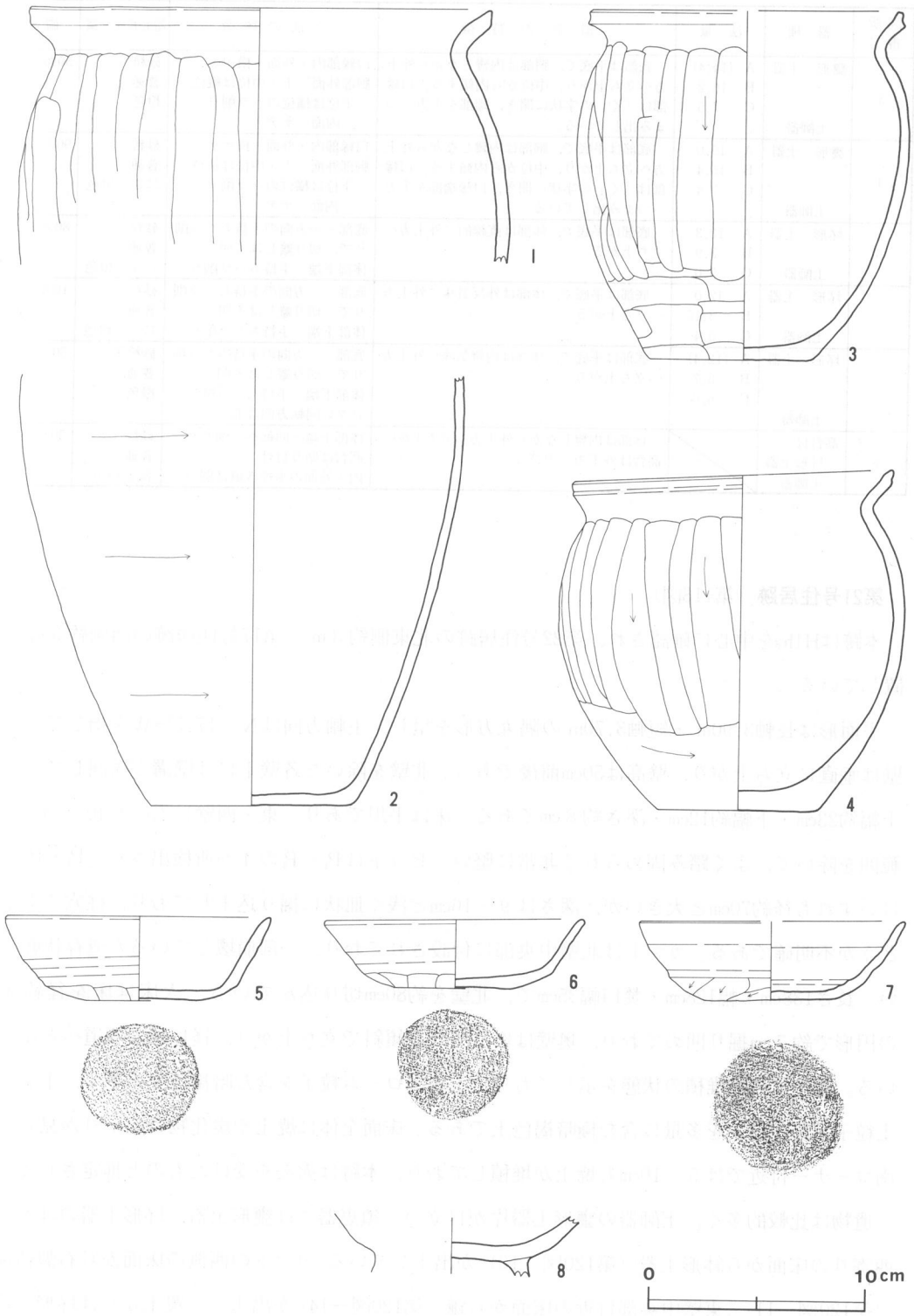
第116図　第20号住居跡カマド実測図

コーナーにかけての壁下を除いて壁溝が周回しており，上幅約20cm・下幅約13cm・深さ約5cmである。床は全体によく踏み固められて堅く，住居跡中央部は周辺より床面が約5cm高くなっている。ピットは住居外にP_1～P_{10}の10か所，住居内にP_{11}～P_{18}の8か所検出された。P_1～P_{10}は主軸に対称に配置されており，P_3を除いて径30cm前後である。深さは33～107cmと差があるが，左右対応するピットの深さはほぼ同じであることから，上屋を支えるものと思われる。壁下のP_{14}・P_{15}・P_{18}は壁柱穴かと考えられる。本跡はカマドと炉を有している。カマドは北壁中央部約0.5m東寄りに付設されており，天井部はなく，袖部もわずかに残っているだけである。推定で長さ145cm，幅140cmで，北壁を細長く110cm切り込み，火床は床を13cmほど掘り凹めている。炉跡は東壁寄りに位置し，平面形は長径57cm・短径47cmの楕円形を呈している。炉床は床を8cmほど掘り凹め，堅く焼き締まっており，内部にはブロック状の焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を呈しており，ローム粒子を含む黒褐色土が主である。

遺物は土師器の甕形土器が，カマド内（第117図－1）や炉跡南側の床面（第117図－4）から出土し，完形の坏形土器（第117図－6）が南壁中央部付近の床面から出土している。

出土土器観察表（第117図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A (21.2)	胴部は丸く張る。口縁部は「く」の字状に開き，外端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	20%
2	甕形土器 土師器	C 9.1	底部は平底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，長胴を呈する。	胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒・小礫 普通 橙色	40%



第117図　第20号住居跡出土遺物実測図

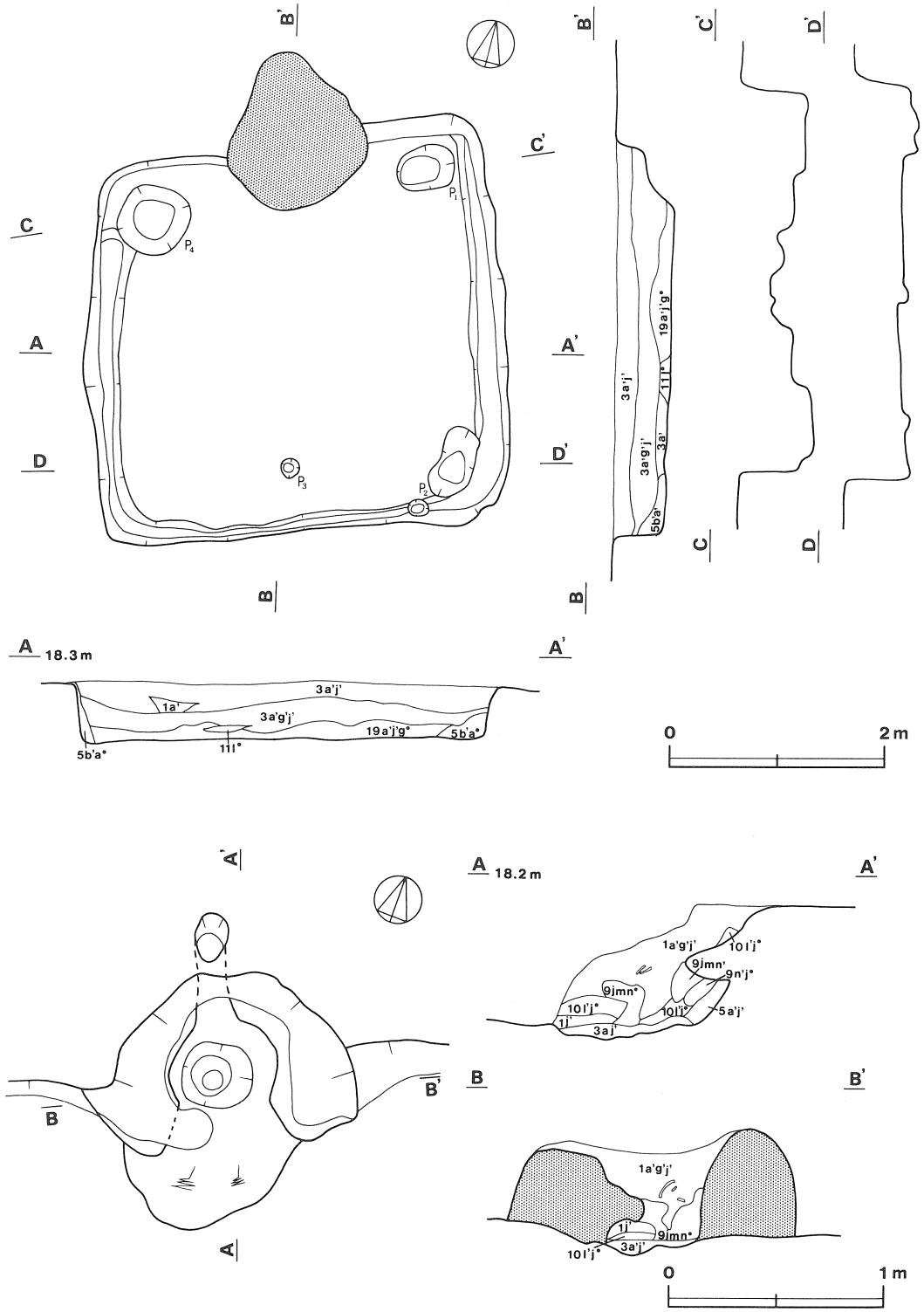
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	甕形土器 土師器	A (14.4) B 16.2 C 7.5	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－上・中位は縦位 下位は横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	50%
4	甕形土器 土師器	A 15.0 B 15.4 C 7.4	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，中位から内傾する。口縁部は「く」の字状に開き，口縁端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－上・中位は縦位・ 下位は横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	90%
5	坏形土器 土師器	A 12.3 B 3.9 C 5.0	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 にぶい橙色	80%
6	坏形土器 土師器	A 12.0 B 3.15 C 5.4	底部は平底で，体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 にぶい橙色	100%
7	坏形土器 土師器	A (12.4) B 3.7 C 6.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	砂粒多 普通 橙色	50%
8	高台付 坏形土器 土師器		体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部下端－回転ヘラ削り 高台は貼り付け 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 普通 淡赤橙色	30%

第21号住居跡（第118図）

本跡は$H1h_6$を中心に確認され，第22号住居跡の北東側約３ｍ，第17号住居跡の南側約３ｍに位置している。

平面形は長軸3.90m・短軸3.70mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－17.5°－Wを指している。壁は垂直に立ち上がり，壁高は50cm前後である。北壁を除いた各壁下には壁溝が周回しており，上幅約23cm・下幅約12cm・深さ約８cmである。床は平坦であり，東・西壁に沿った40～50cm幅の範囲を除いて，よく踏み固められて非常に堅い。ピットはP_1～P_4の４か所検出され，P_1・P_2・P_4はいずれも径約70cmと大きいが，深さは９～16cmと浅く皿状に掘り込まれており，柱穴であるかどうか不明確である。カマドは北壁中央部に付設されており，一部崩壊しているが遺存状態がよい。長さ138cm・幅128cm・焚口幅35cmで，北壁を約80cm切り込んでいる。火床は床を径約30cmの円形で約７cm掘り凹めており，奥壁はゆるやかな傾斜で立ち上がり，径15cmの煙道へと続いている。覆土は自然堆積の状態を示しており，上層はローム粒子を含む暗褐色土が主で，下層は焼土粒子・炭化粒子を多量に含む極暗褐色土である。床面全体に焼土や炭化物の広がりが見られ，南コーナー付近では５～10cmも焼土が堆積しており，本跡は火災を受けたものと推定される。

遺物は比較的多く，土師器の甕形土器片が目立つ。須恵器では甕形土器，坏形土器のほか，北西寄りの床面から鉢形土器（第120図－10）が出土している。カマドの西側の床面から石製紡錘車（第120図－11），東壁中央部付近の床面から鎌（第120図－14）が出土し，覆土からは坏形土器の底部片を利用した紡錘車（第120図－12・13）が出土している。



第118図　第21号住居跡・カマド実測図

出土土器観察表（第119・120図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	鉢形 土器 須恵器	A (22.7) B 19.0 C 13.6	底部はやや盛り上がった平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。頸部でややくびれ，口縁部は短く外反する。端部は外下方へ突出する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面上・中位－横位の平行叩き 下位－静止ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒・細砂 普通 灰色	40%
2	甕形 土器 須恵器	A 22.0	体部は丸く張り，口頸部は外反しながら開く。口縁端部は上下に広がり，断面三角形を呈する。	口頸部内・外面－横ナデ 体部外面－横位の平行叩き 内面－ナデ	砂粒・細砂 良好 灰色	50%
3	甕形 土器 土師器	A (21.4)	胴部は丸く張り，口頸部は「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	10%
4	甕形 土器 土師器	A (13.2)	口頸部「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	10%
5	甕形 土器 土師器	A (19.2)	口頸部「コ」の字状を呈す。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10%
6	甕形 土器 土師器	A 11.2	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上半－横位，下半－斜位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
7	坏形 土器 須恵器	A 12.5 B 4.6 C 7.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下半－手持ちヘラ削り 口縁部から内面にかけて横ナデ	細砂 普通 浅黄色	55%
8	坏形 土器 須恵器	A (12.0) B 4.2 C (6.4)	底部はやや盛り上がった平底で，体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下半－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 良好 灰色	45%
9	甕形 土器 須恵器	C 20.4	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	体部外面－斜位の平行叩き 下端－静止ヘラ削り 体部内面－摩滅で調整不明	砂粒・雲母 普通 褐灰色	20%
10	鉢形 土器 須恵器	A 26.6	体部はほとんど張らず，口縁部は短く外反する。口縁外端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－横位の平行叩き 内面－ナデ	砂粒・細砂 普通 灰色	30%

石製品（第120図－11）

11は紡錘車で完存品である。片面は平滑に，もう片面は丸味をもって研磨されている。長径5.1cm・短径4.9cm・厚さ1.5cm・孔径9mm・重さ52g で，石質は流紋岩である。

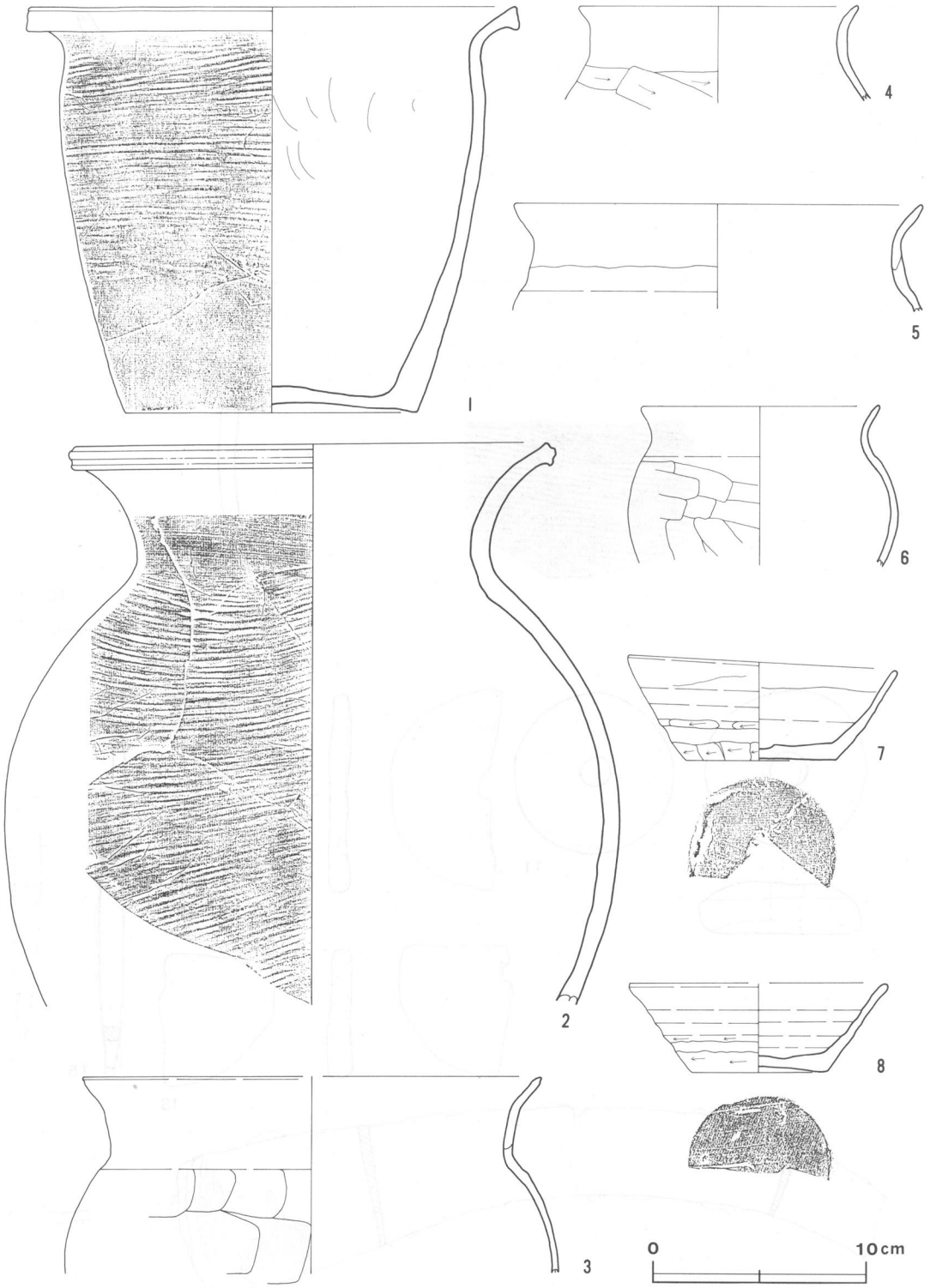
土製品（第120図－12・13）

12・13は紡錘車で，須恵器の坏形土器の底部を利用したもので，側面を研磨している。
12は推定で直径7cm・厚さ9mmで，13は推定で直径6.2cm・厚さ7mmである。

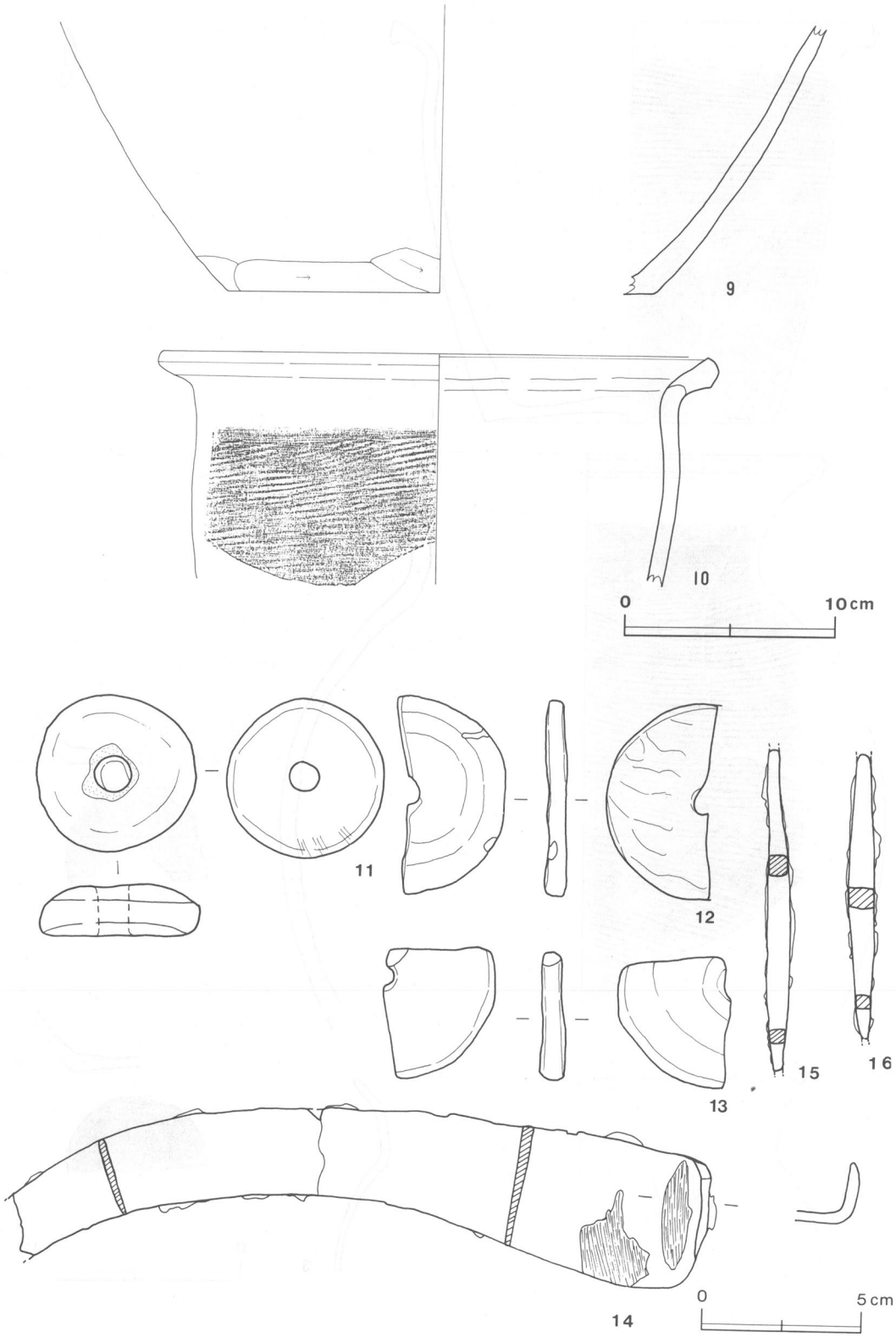
鉄製品（第120図－14～16）

14は鎌で先端部を欠損する。基部上半を折り曲げており，基部には木質部が付着している。現存長は21.6cmである。

15・16は棒状の鉄製品で，両端を欠損しており用途は不明である。断面は方形を呈し，中央部が太く，現存長は15が10.1cm，16が8.9cmである。



第119図　第21号住居跡出土遺物実測図（1）



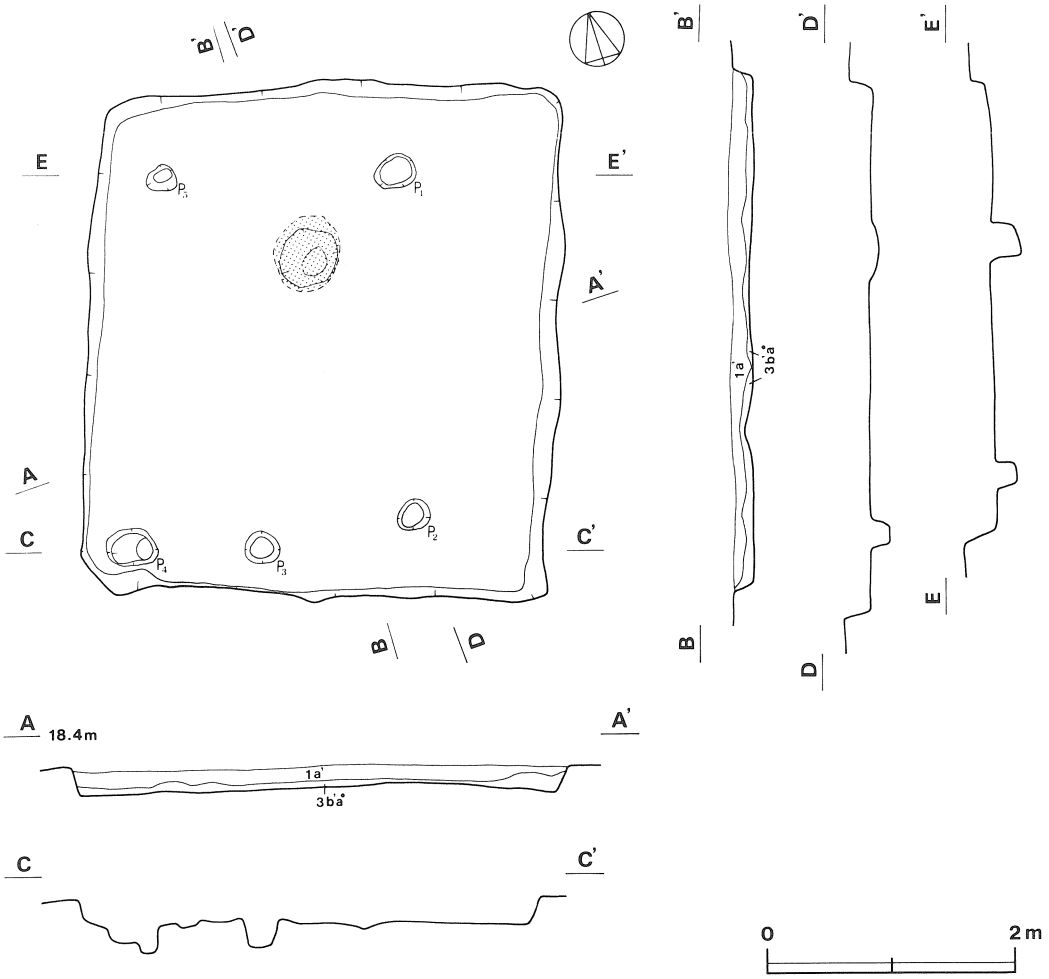
第120図　第21号住居跡出土遺物実測図（2）

第22号住居跡（第121図）

本跡は$H1h_5$を中心に確認され，第21号住居跡の南西側約３ｍ，第14号住居跡の南側約５ｍに位置している。

平面形は長軸4.20m・短軸3.85mの長方形を呈し，長軸方向はN―20°―Eを指していずれの壁も外傾して立ち上がり，壁高は20～35cmである。床は南西壁近くにやや凹凸が見られるが，ほぼ平坦で軟弱である。ピットはP_1～P_5の５か所検出され，いずれも径25cm前後で深さは21～28cmである。P_1・P_2・P_4・P_5は方形に配され主柱穴と思われる。炉跡が住居跡中央部から約50cm北に検出され，平面形は長径50cm・短径43cmの楕円形を呈している。炉床は床を８cmほど皿状に掘り凹めており，焼土の量は少なく，それほど焼けていない。覆土は自然堆積の状態を呈しており，２層に分かれる。上層は黒褐色土，下層は暗褐色土で，どちらも少量のローム粒子が含まれている。

遺物はほとんど出土せず，土師器の甕形土器片が27点出土しただけである。

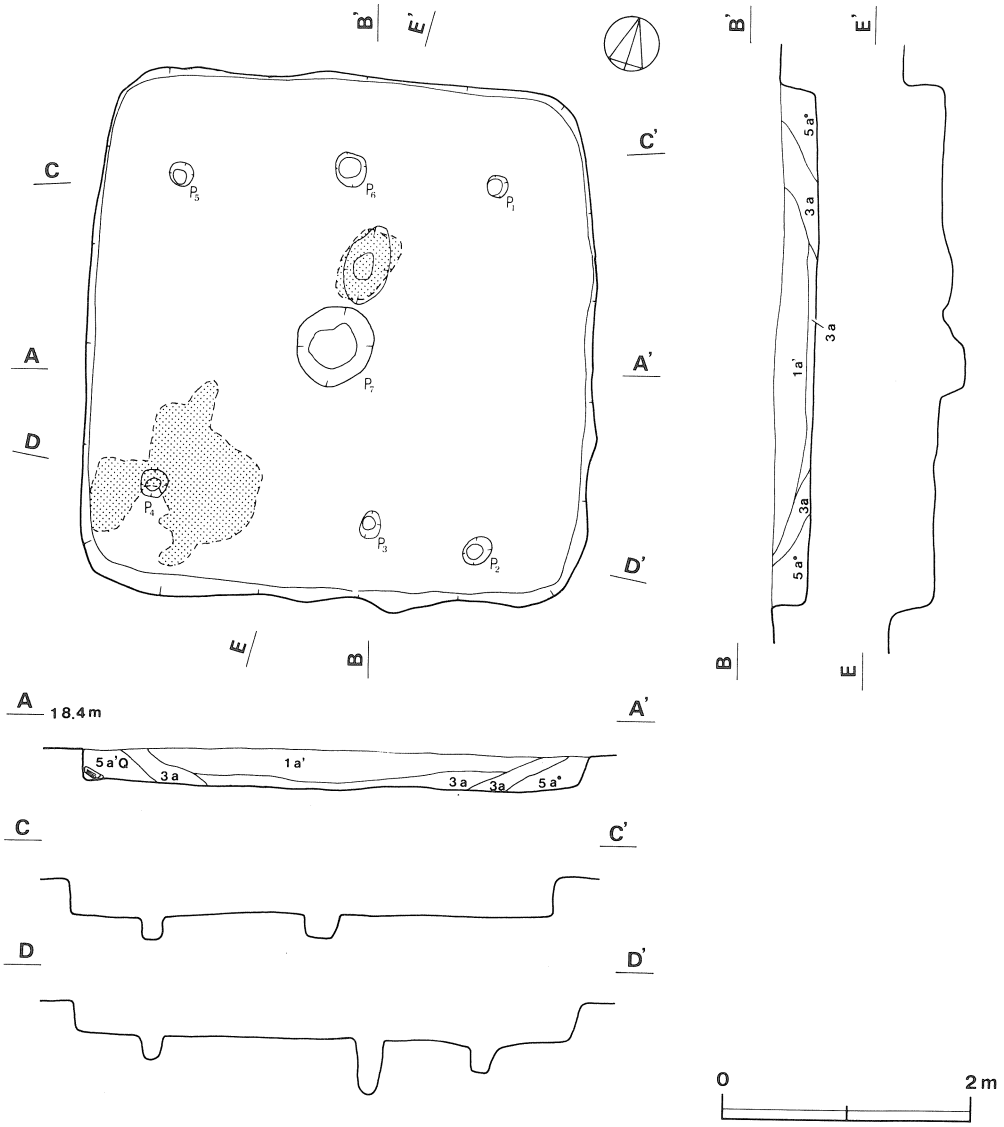


第121図　第22号住居跡実測図

第23号住居跡（第122図）

本跡はI1d9を中心に確認され，第25号住居跡の東側約２ｍ，第24号住居跡の西側約３ｍに位置している。

平面形は長軸4.25m・短軸4.10mの隅丸方形を呈しているが，南壁は北壁より約30cm長く，長軸方向はN－14°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は30cm前後である。床は全体に平坦で締まりがある。ピットはP_1～P_7の７か所検出されている。P_1・P_2・P_4・P_5はいずれも径20～25cm・深さ21～29cmと同規模であり，ほぼ方形に配置されており，主柱穴と思われる。住居跡中央部にあるP_7は径60cmの円形を呈し，深さ24cmで埦状に掘り込まれているが性格は不明で



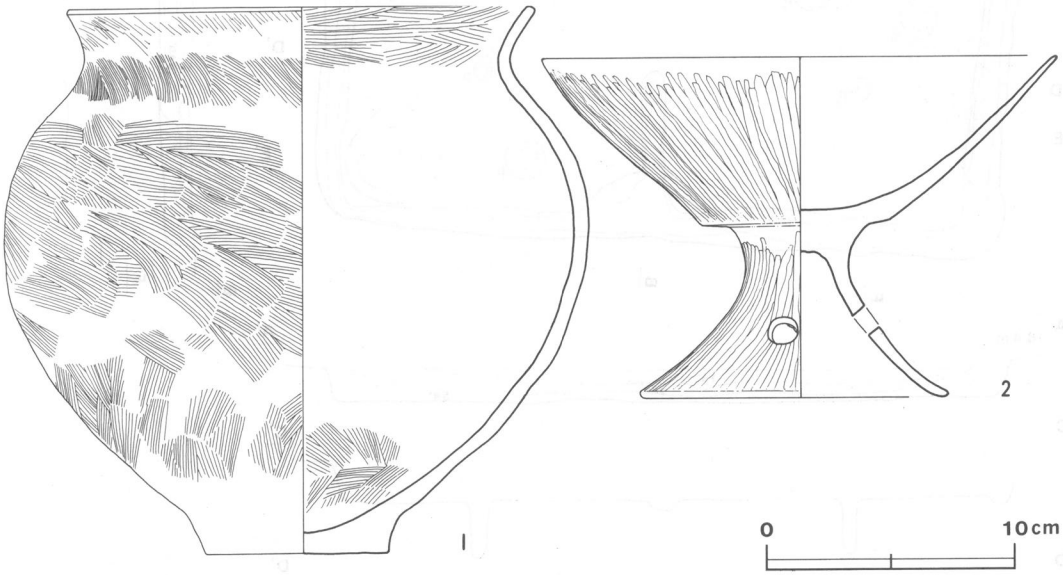
第122図　第23号住居跡実測図

ある。P_7のすぐ北側に炉跡が検出され，平面形は長径65cm・短径35cmの楕円形を呈している。炉床は床を10cmほど皿状に掘り凹めており，内部には焼土が堆積し，焼土ブロック粒子・炭化粒子が多量に含まれている。覆土は自然堆積の状態を示し，上層は黒褐色土，下層は暗褐色土，壁下にはローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。南西コーナー部付近の床面には柱状の炭化材や焼土の広がりが見られ，火災を受けていると思われる。

遺物は少ないが，土師器の甕形土器（第123図－1）と高坏形土器（第123図－2）が，南東コーナー部付近から完形で出土している。

出土土器観察表（第123図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 18.9 B 22.0 C 7.3	底部は突出した平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位に最大径を有す。口縁部は外反気味に開く。	口縁部外面－ハケ目整形後横ナデ　内面－横位のハケ目 胴部外面－ハケ目　内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	98% 外面全体に煤が付着
2	高坏形土器 土師器	A 20.0 B 13.6 D 12.0 E 6.9	坏部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，このまま口縁部へ至る。脚部はラッパ状に開き，中位に4孔を穿っている。	坏部内・外面－縦位のヘラ磨き 脚部外面－縦位のヘラ磨き 内面－横ナデ	砂粒 普通 赤褐色	95%



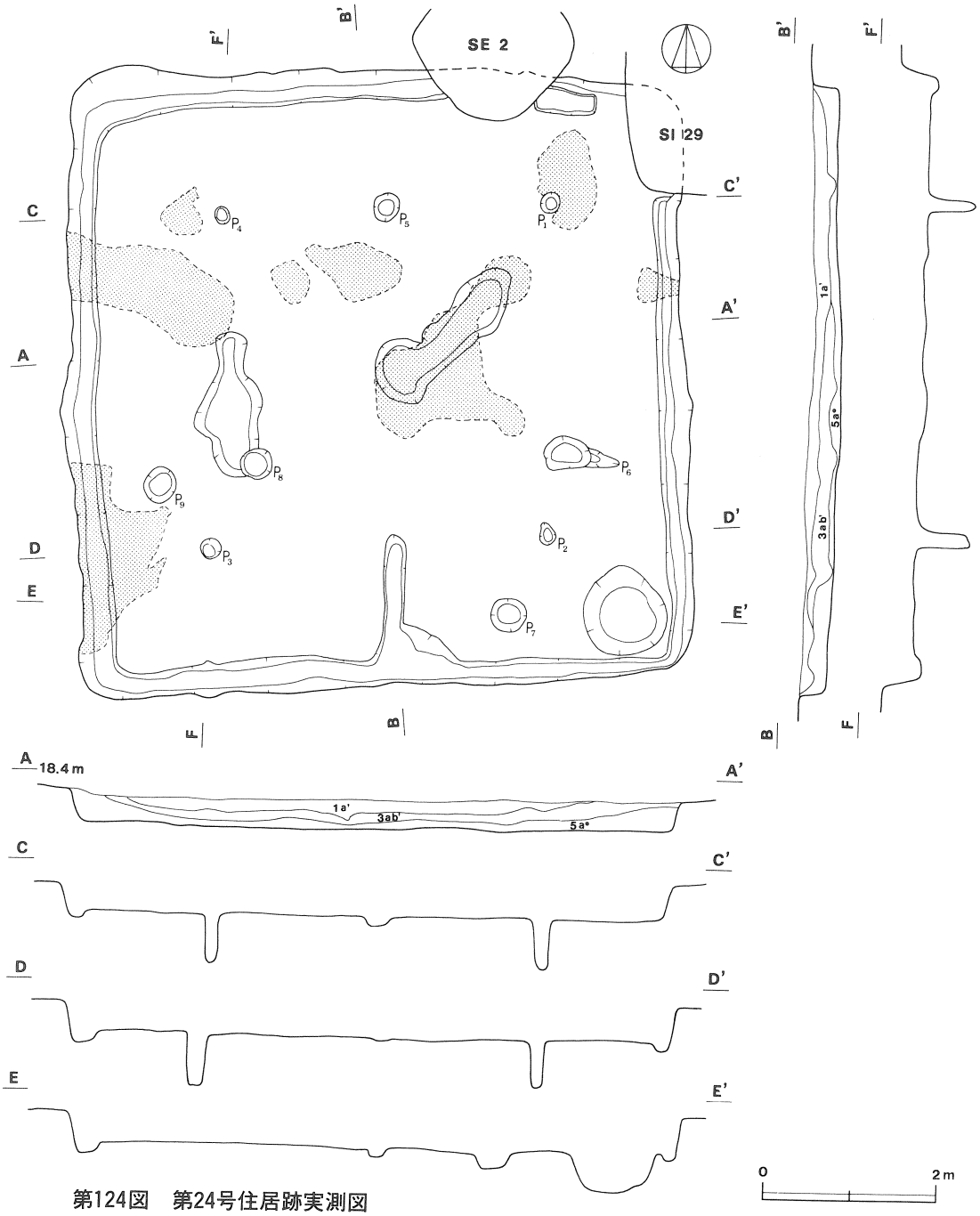
第123図　第23号住居跡出土遺物実測図

第24号住居跡（第124図）

本跡は$I2e_1$を中心に確認され，第23号住居跡の東側約3mに位置している。第1号溝・第2号井戸・第29号住居跡と重複しているが，いずれの遺構も本跡を切っていることから，本跡が最

も古い遺構である。

平面形は長軸7.08m・短軸7.00mの方形を呈し，長軸方向はN－5°－Wを指している。いずれの壁もやや外傾して立ち上がり，壁高は35～40cmである。壁下には壁溝が全周しており，上幅25～30cm・下幅15～20cm・深さ9cmである。床は全体に平坦で堅く締まっている。特に4本の主柱穴に囲まれた範囲がよく踏み固められている。ピットはP_1～P_9の9か所検出されているが，P_1



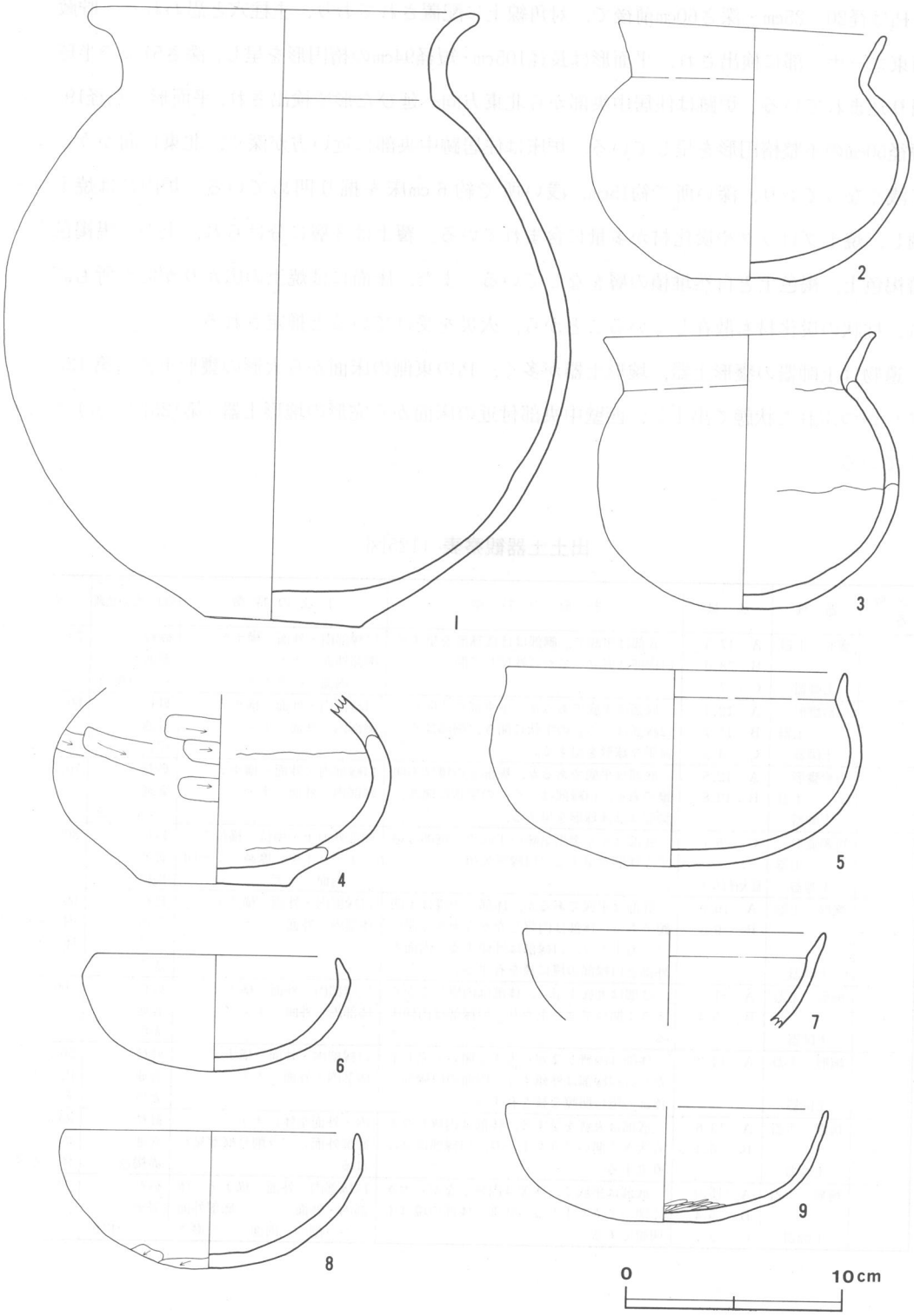
第124図　第24号住居跡実測図

～P_4は径20～25cm・深さ60cm前後で，対角線上に配置されており，主柱穴と思われる。貯蔵穴は南東コーナー部に検出され，平面形は長径105cm・短径94cmの楕円形を呈し，深さ51cmで半球状に掘り込まれている。炉跡は住居中央部から北東方向へ延びた形で検出され，平面形は長径195cm・短径50cmの不整楕円形を呈している。炉床は住居跡中央部に近い方が深く，北東に向かうにつれて浅くなっており，深い所で約15cm，浅い所で約6cm床を掘り凹めている。炉内には焼土が充満し，焼土ブロックや炭化材が多量に含まれている。覆土は3層に分けられ，上から黒褐色土，暗褐色土，褐色土と自然堆積の層をなしている。また，床面には焼土の広がりが何か所も認められ，柱状の炭化材も散在していることから，火災を受けていると推定される。

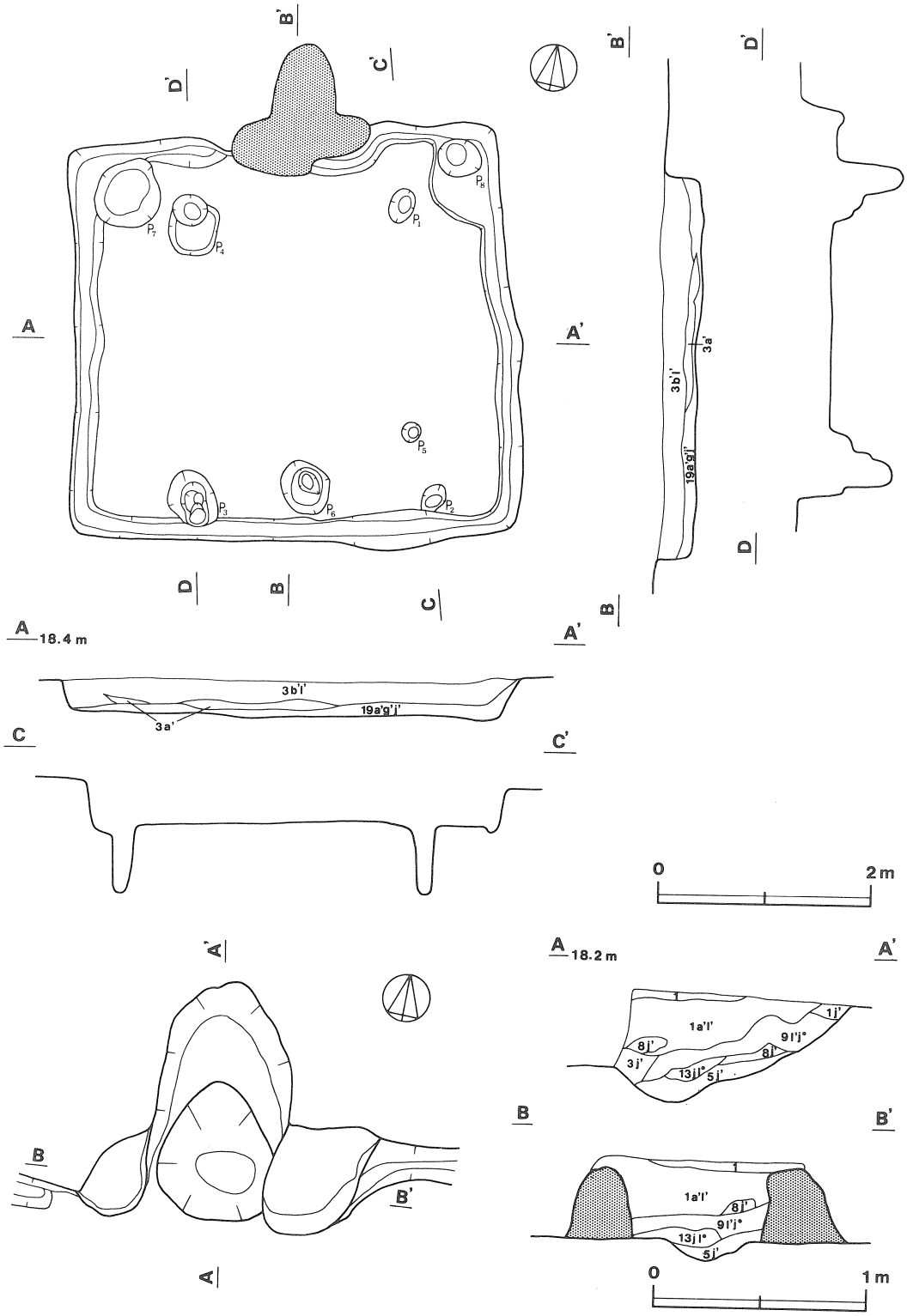
遺物は土師器の甕形土器，埦形土器が多く，P_4の東側の床面から大形の甕形土器（第125図－1）がつぶれた状態で出土し，西壁中央部付近の床面から完形の埦形土器（第125図－6）が出土している。

出土土器観察表（125図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 17.5 B 28.0 C 7.5	底部は平底で，胴部はほぼ球形を呈する。口縁部は直立してから外反して開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	70%
2	小形甕形土器 土師器	A 12.4 B 11.7 C 4.5	底部は平底であるが，中央部やや凹む。口縁部は「く」の字状に開き，胴部はやや扁平な球形を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 橙色	60%
3	小形甕形土器 土師器	A 12.5 B 12.8	底部は平底であるが，胴部との境は不明瞭である。口縁部は「く」の字状に開き，胴部はほぼ球形を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	70%
4	短頸壺形土器 土師器	C 6.7 最大径15.6	底部はやや突出気味の平底で，胴部は扁平な球形を呈する。口縁部欠損。	胴部外面上・中位－横位のヘラナデ　下位－摩滅して不明 内面－ナデ	砂粒 普通 褐色	80%
5	埦形土器 土師器	A 16.0 B 9.3	底部は平底であるが，体部との境は不明瞭である。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。内面の外部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	60% 内・外面全体に赤彩
6	埦形土器 土師器	A 11.3 B 5.4	底部は丸底を呈し，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	100%
7	埦形土器 土師器	A 14.2	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	50% 内・外面赤彩
8	埦形土器 土師器	A 13.6 B 6.4	底部は丸底を呈する。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	内・外面全体にナデ 底部外面にヘラ削り痕が見られる	砂粒 普通 赤褐色	80% 内・外面全体に赤彩
9	埦形土器 土師器	A (15.0) B 5.4 C 3.7	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。底部と体部の境は不明瞭である。	口縁部内・外面－横ナデ　体部内・外面－ナデ　底部外面－ヘラ削り　内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	50%



第125図　第24号住居跡出土遺物実測図



第126図　第25号住居跡・カマド実測図

第25号住居跡（第126図）

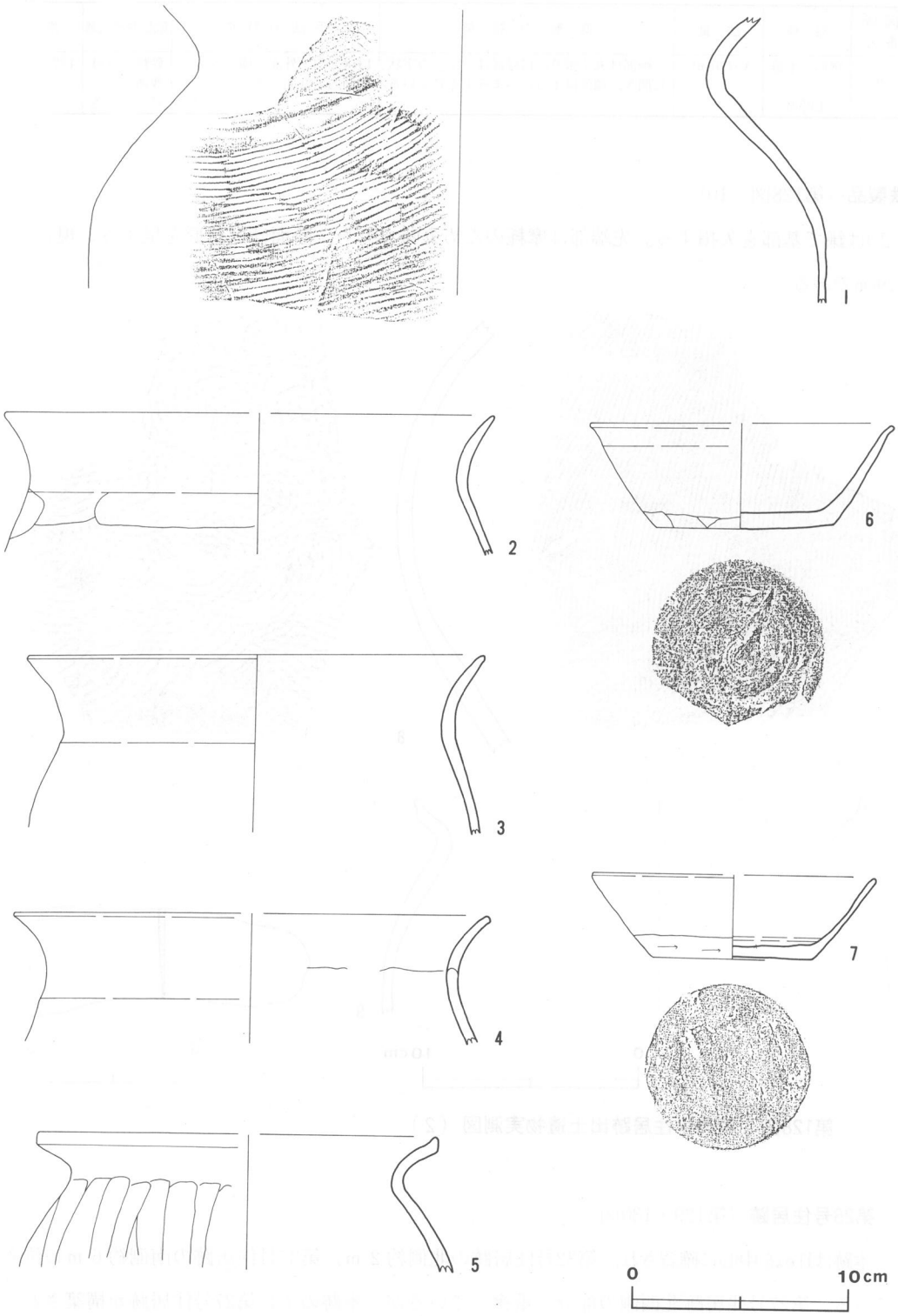
本跡は$I1d_8$を中心に確認され，第23号住居跡の西側約２ｍ，第37号住居跡の南東側約１ｍに位置している。

平面形は長軸4.10ｍ・短軸3.85ｍの方形を呈し，主軸方向はN－14°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は約35cmである。壁下には壁溝が全周し，上幅は約23cm・下幅約15cm・深さ約８cmである。床は平坦でよく締まっており，特に４本の主柱穴に囲まれた部分が堅くゴツゴツしている。ピットはP_1～P_8の８か所検出されているが，これらのうちP_1～P_4はいずれも径25～35cm・深さ60～68cmとしっかりしたものであり，P_1・P_2とP_3・P_4は主軸に対称に配置されていることから主柱穴と推定される。カマドは北壁中央部に付設されており，天井部は崩落しているが，そのほかの遺存状態は良好である。規模は長さ118cm・幅120cm・焚口幅55cmで，北壁を90cm切り込んでいる。火床は床を17cm掘り凹め，奥壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積の状態を示し，上層はローム粒子を含む暗褐色土・下層は焼土粒子を含む極暗褐色土である。

遺物は土師器の甕形土器が多い。須恵器ではカマド前の床面から，甕形土器（第128図－８）が，北西コーナー部付近の床面から，坏形土器（第127図－７）が出土している。南西コーナー部寄りの覆土からは鎌（第128図－10）が出土している。

出土土器観察表（第127・128図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 須恵器		口縁・体部片。体部は丸く張り，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－横位平行叩き 内面－ナデ	砂粒 普通 灰黄色	15%
2	甕形 土器 土師器	A（23.6）	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	15%
3	甕形 土器 土師器	A 21.1	口頸部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 赤橙色	20%
4	甕形 土器 土師器	A（22.0）	口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	15%
5	甕形 土器 土師器	A（19.4）	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開き，外端部に面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 淡橙色	10%
6	坏形 土器 土師器	A（14.0） B 4.8 C 8.2	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部－回転ヘラ削り後無調整 体部下端－手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 普通 橙色	65%
7	坏形 土器 須恵器	A 13.0 B 3.9 C 7.4	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く，体部中位は器厚が薄い。	底部－不定方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り ロクロ回転方向は右	雲母・細砂 普通 褐灰色	60%
8	甕形 土器 須恵器		体部片。中位が丸く張る。	体部外面－平行叩き 内面－同心円文叩き	砂粒 普通 暗灰色	10%

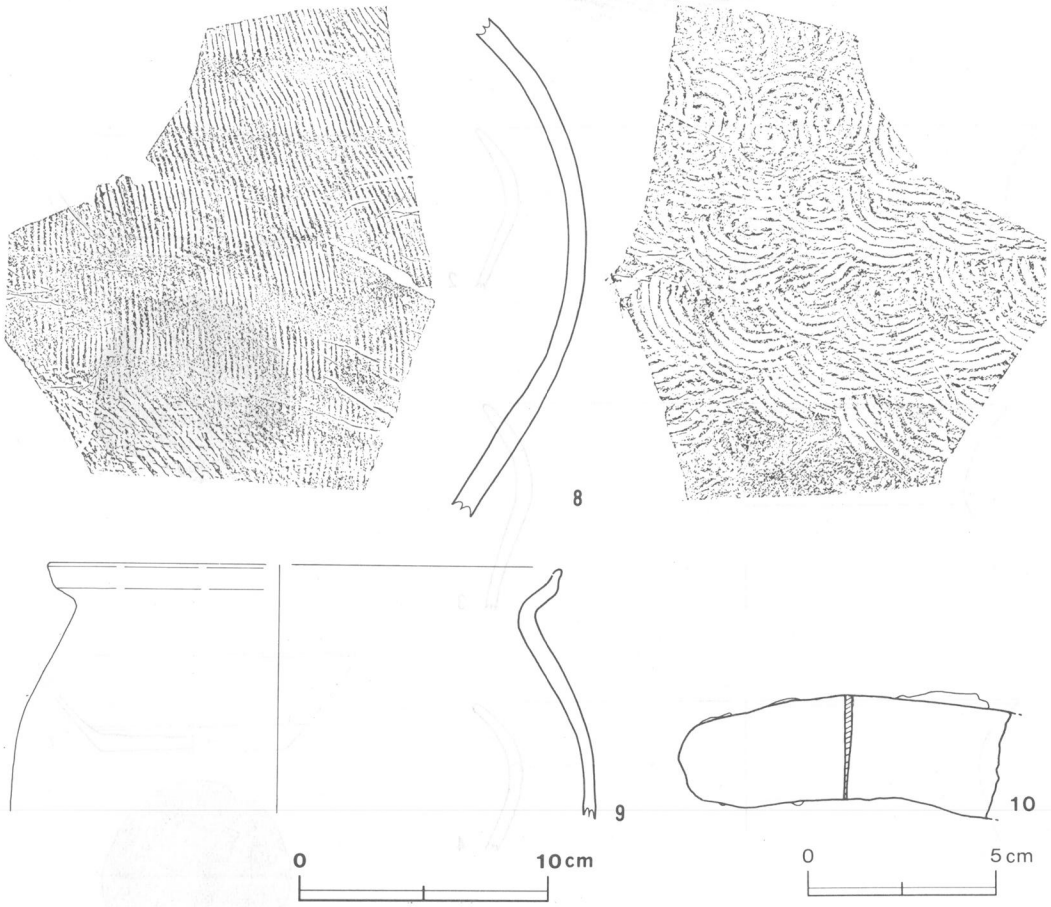


第127図　第25号住居跡出土遺物実測図　(1)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	甕形 土器 土師器	A (20.6)	胴部は丸く張り，口縁部は「く」の字状に開き，端部は上方につまみ出されている。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	15%

鉄製品（第128図－10）

10は鎌で基部を欠損する。先端部は摩耗のため丸味をもち，断面は三角形を呈する。現存長は8.9cmである。

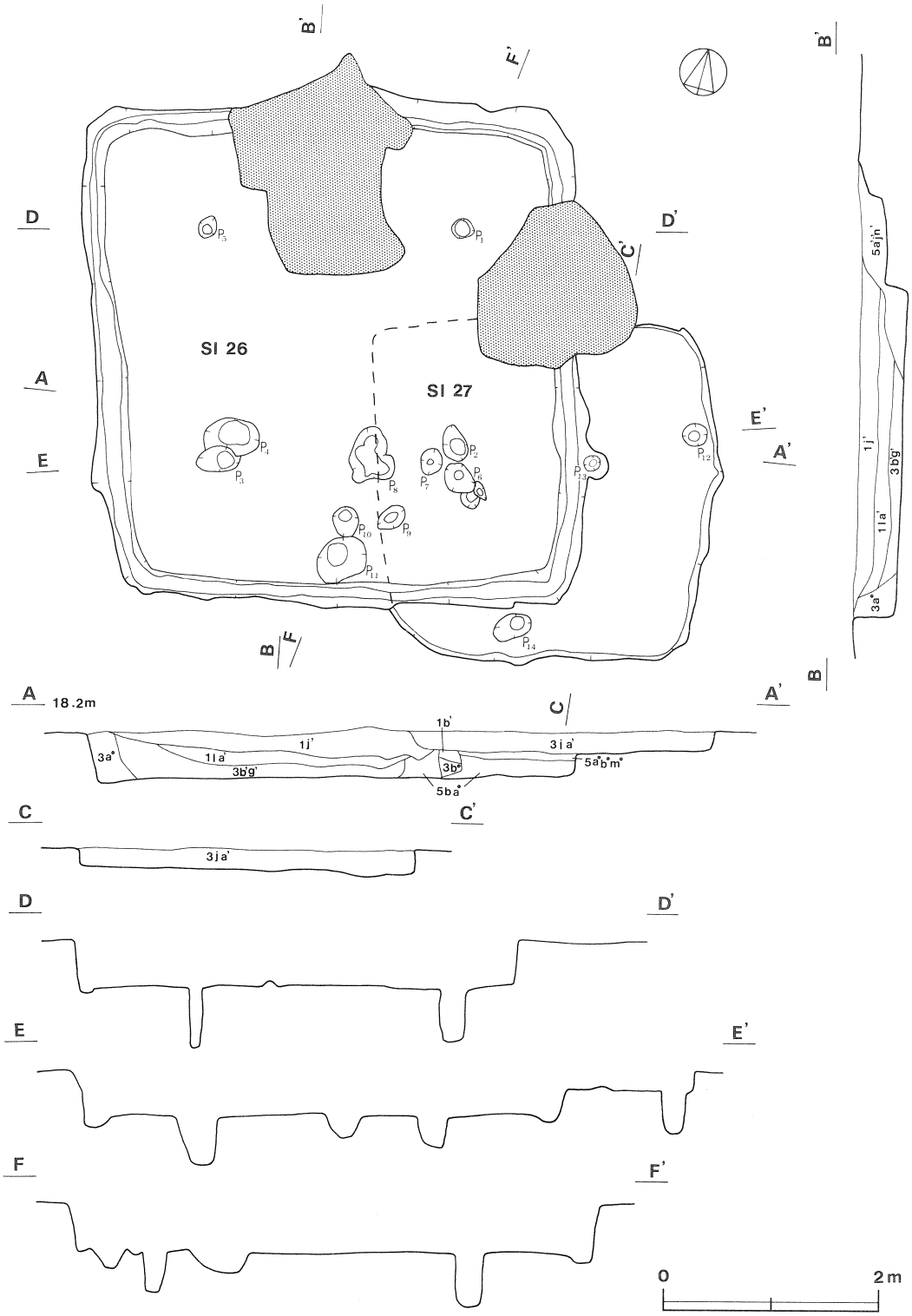


第128図　第25号住居跡出土遺物実測図（2）

第26号住居跡（第129・130図）

本跡はI1e$_6$を中心に確認され，第32号住居跡の北側約2 m，第37号住居跡の南側約6 mに位置している。第27号住居跡北西側の部分と重複しているが，本跡の上に第27号住居跡が構築されていることから，本跡の方が古い。

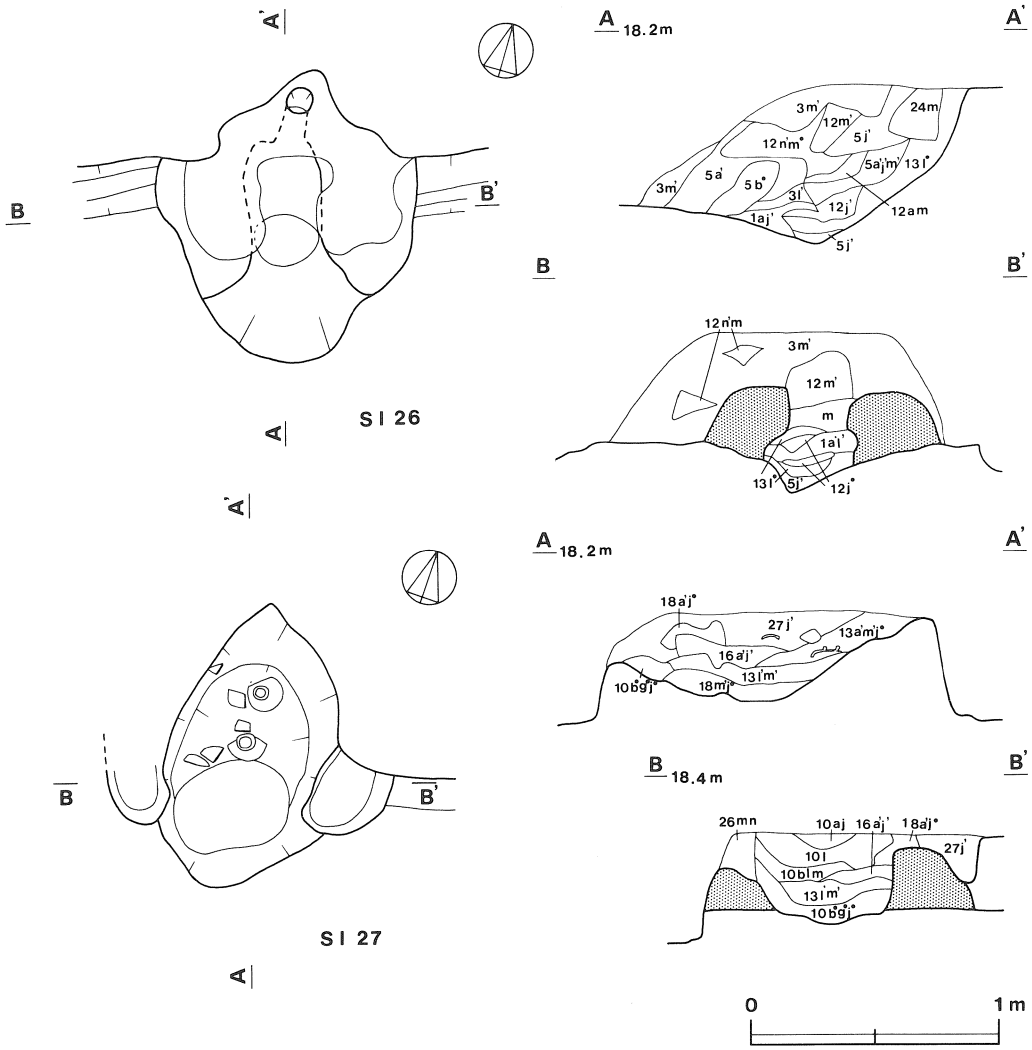
平面形は長軸4.70m・短軸4.45mの方形を呈し，主軸方向はN－17°－Wを指している。壁はや



第129図　第26・27号住居跡実測図

や外傾して立ち上がり，壁高は約45cmである。壁下には壁溝が全周し，上幅20cm・下幅15cm・深さ9cmである。床面は全体的に平坦でよく踏み固められている。ピットはP_1～P_{11}の11か所検出されている。このうちP_1・P_2・P_3・P_5は径20～30cm・深さ40～57cmで，ほぼ対角線上に配置されており，主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されており，比較的遺存状態は良好である。長さ118cm・幅88cm・焚口幅37cmで北壁を35cmほど切り込み，火床は床を約15cm掘り凹めている。奥壁はゆるやかに立ち上がり，径10cmほどの煙道へと続いている。覆土は自然堆積で3層に分かれている。上層は黒褐色土，中層はローム粒子を含む黒褐色土，下層は炭化粒子を含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

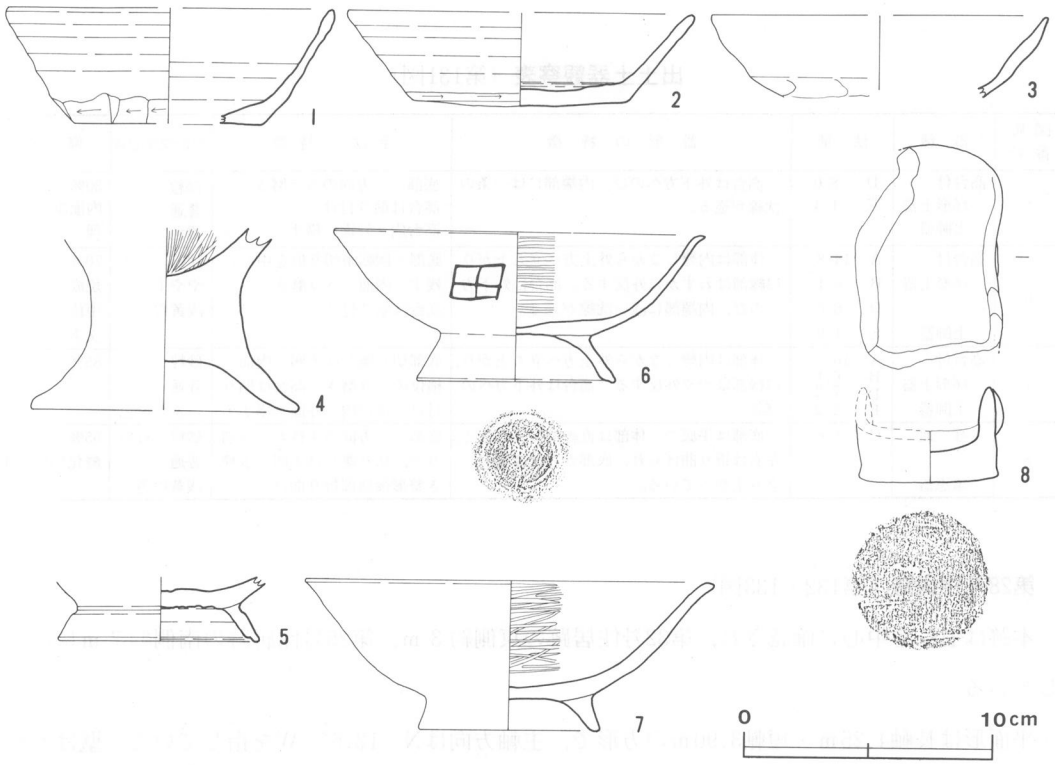
遺物は少なく，覆土から土師器の高台付坏形土器(第131図－5)や須恵器の坏形土器（第131図－1）が出土している。



第130図　第26・27号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第131図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形 土器 須恵器	A (13.0) B 4.7 C (7.6)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 やや不良 灰白色	40%
2	坏形 土器 須恵器	A (14.0) B 3.8 C (8.5)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－不定方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰色	25%
3	坏形 土器 土師器	A 13.6	体部は外上方へ立ち上がり，口縁端部は尖る。	体部下端－手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 普通 灰白色	35%
4	台付 甕形土器 土師器	C (10.8)	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，台部は外反しながら短く開く。	体部外面－ナデ 内面－ヘラ磨き 台部内・外面－ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	10% 二次焼成



第131図　第26・27号住居跡出土遺物実測図

第27号住居跡（第129・130図）

本跡はI1e7を中心に確認され，第32号住居跡の北側約1 m，第25号住居跡の南西側約5 mに位置している。本跡は第26号住居跡と重複しており，重複部分に貼り床をしているので，本跡の方が新しい。

平面形は長軸・短軸とも3.20mの方形を呈し，主軸方向はN－17°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は15～20cmであるが，重複部分の壁の立ち上がりは不明瞭である。床は

ほぼ平坦で堅い。貼り床の部分は，ロームブロックを多量に含む褐色土を，約5cmの厚さに貼って踏み固めているが，西壁付近はほとんど残っていない。ピットはP_2～P_4の3か所検出され，径はいずれも25～30cmであるが，深さは25～48cmと差があり，配置的にもバラバラで主柱穴ではないと思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが崩壊しており，袖部の一部が残っているだけである。規模は長さ116cm・幅90cm・焚口幅50cmで，北壁を70cmほど切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を16cm掘り凹め，多量の焼土が堆積している。覆土は焼土粒子，ローム粒子を含む暗褐色土の1層で自然堆積と思われる。

遺物は住居跡中央部の床面から須恵器の耳皿（第131図－8），カマド内から土師器の高台付坏形土器（第131図－6・7）が出土している。

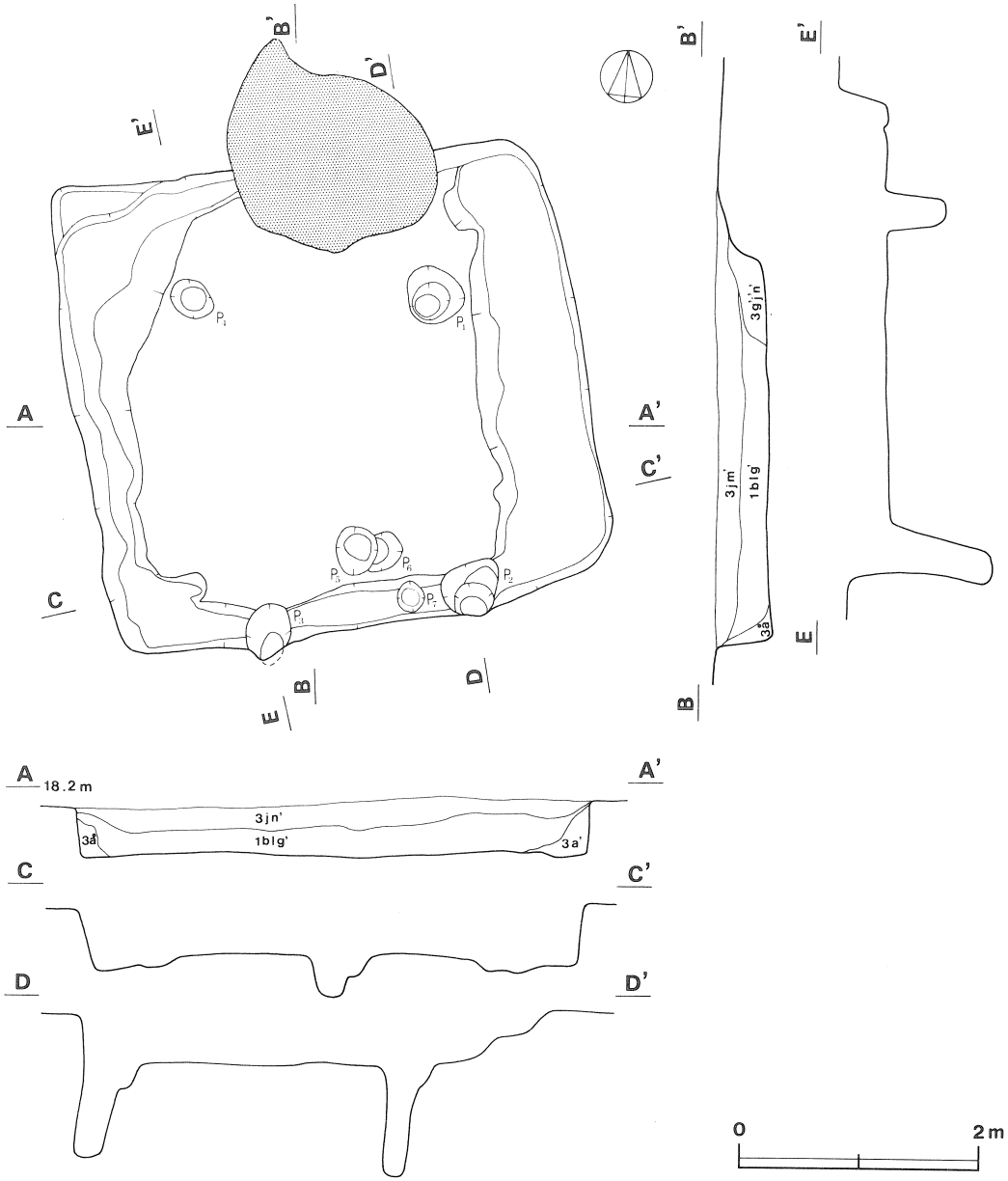
出土土器観察表（第131図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	高台付坏形土器 土師器	D 8.0 E 1.4	高台は外下方へのび，内端部には一条の沈線が巡る。	底部――方向のヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	30% 内面黒色処理
6	高台付坏形土器 土師器	A 14.8 B 6.1 D 8.0 E 1.9	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。高台は外下方へのび，内端部に浅い沈線が巡る。	底部－回転糸切り痕を中心に残す 内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け	砂粒 やや不良 浅黄橙色	70% 二次焼成 体部中位にヘラ文字「田」
7	高台付坏形土器 土師器	A 16.4 B 6.1 D 7.2 E 1.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外反する。高台は外下方へのびる。	底部切り離しは不明 内面－横位のヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	85%
8	耳皿 須恵器	C 5.6	底部は平底で，体部は直線的に短く開く。左右は折り曲げられ，底部からほぼ垂直に立ち上がっている。	底部――方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 水挽き整形後皿部折り曲げ	砂粒・細砂 普通 浅黄橙色	65% 酸化焰焼成

第28号住居跡（第132・133図）

本跡は$I1f_8$を中心に確認され，第32号住居跡の東側約3m，第25号住居跡の南側約7mに位置している。

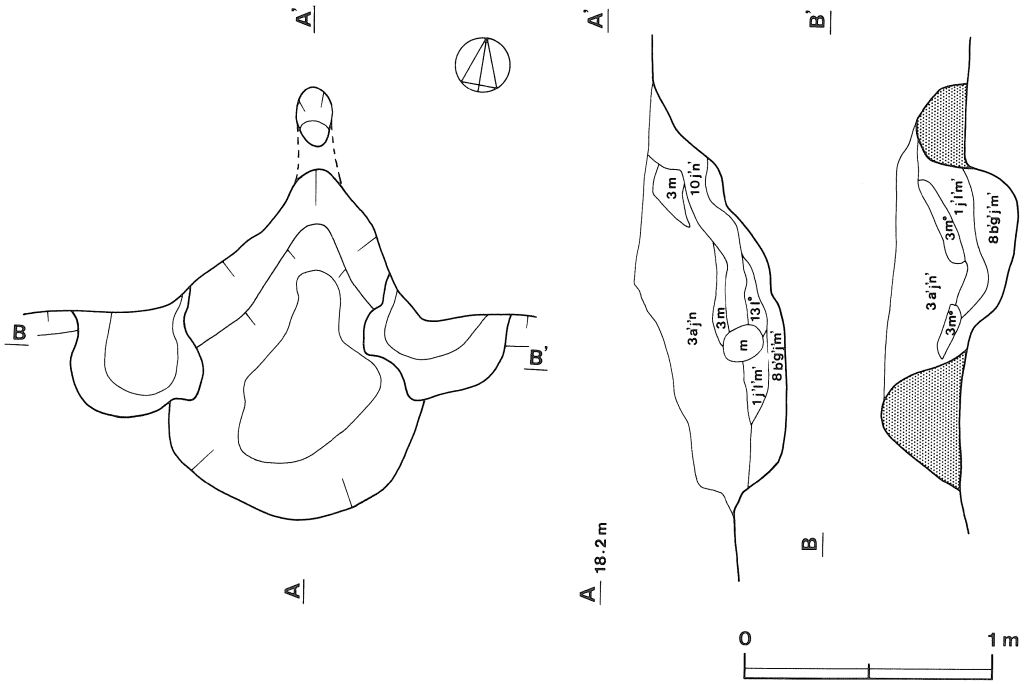
平面形は長軸4.25m・短軸3.90mの方形で，主軸方向はN－12.5°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は約40cmである。壁下には壁溝が全周しており，上幅30cm・下幅20cm・深さ14cmであるが，東・西壁の下は床面がやわらかく，溝との境は不明瞭である。床は東・西壁下を除いて平坦で堅く，4本の主柱穴を結ぶ範囲内が特に踏み固められている。ピットはP_1～P_7の7か所検出された。P_1・P_2とP_3・P_4は主軸に対称に配置され，径40～50cm・深さ55～95cmといずれもしっかりしており，主柱穴と思われる。特にP_2・P_3は壁を5～10cm切り込んでやや内傾して掘り込まれている。カマドは北壁中央部に付設されており，天井部が一部崩壊している。長さ165cm・幅203cm・焚口幅70cmで，北壁を90cmほど切り込み，火床は床を15cm掘り凹めている。奥壁はゆるやかに立ち上がり，先端に長径25cm・短径15cmの煙道が確認されている。覆土は自然



第132図　第28号住居跡実測図

堆積の様相を呈しており，大きく２層に分かれる。上層は暗褐色土，下層は黒褐色土で，いずれもわずかにローム粒子，焼土粒子が含まれている。

遺物は土師器の甕形土器片が多く427点出土している。須恵器では坏形土器が多く南西コーナー部付近の床面からほぼ完形の坏形土器（第134図－１）が出土している。そのほか覆土から盤形土器，蓋形土器などが出土している。



第133図　第28号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第134図）

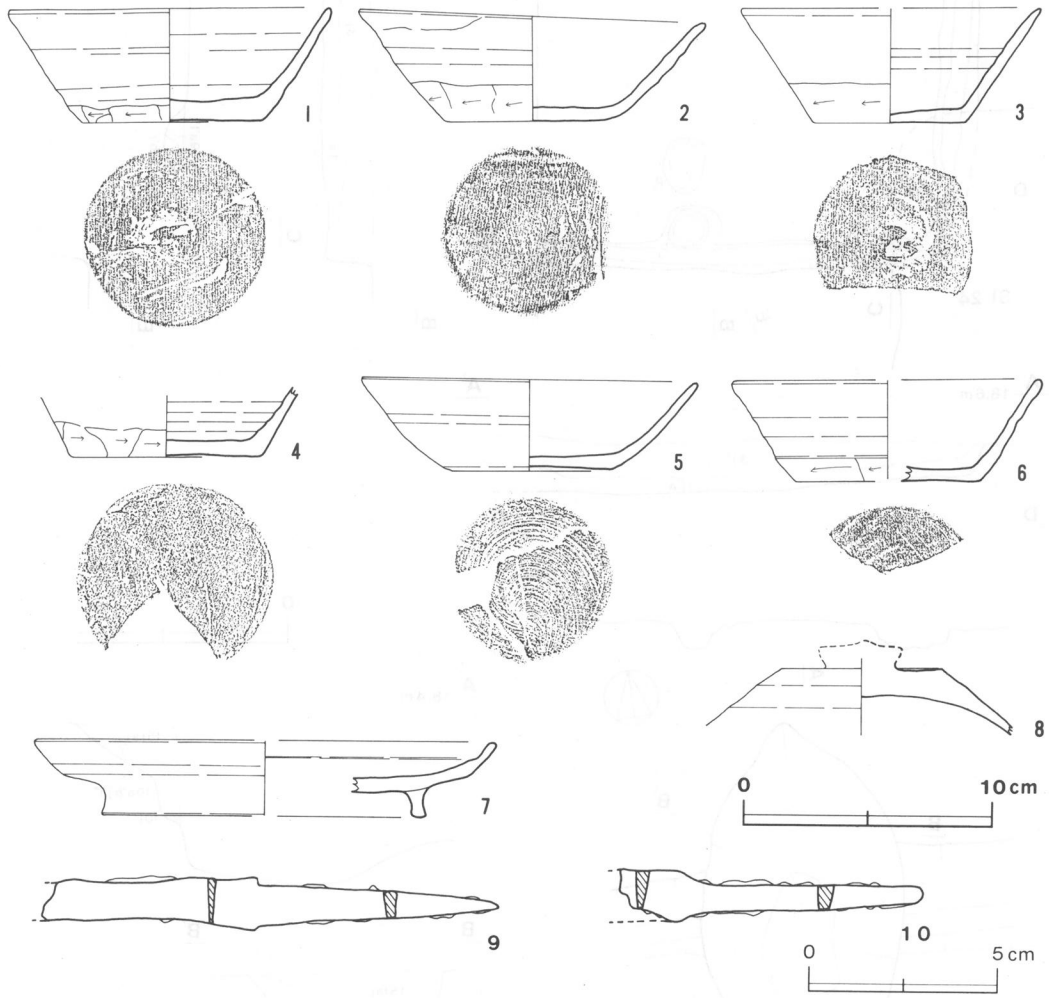
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形　土器 須恵器	A　12.7 B　4.5 C　7.4	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り　体部下端－手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 やや不良 灰黄色(口縁部付近灰色)	90%
2	坏形　土器 須恵器	A　13.8 B　4.2 C　6.6	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後，一方向の手持ちヘラ削り　体部下半－手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 やや不良 灰色	45%
3	坏形　土器 須恵器	A（12.1） B　4.6 C（6.2）	底部は平底で，体部は外反気味に外上方へ立ち上がり，端部は尖る。	底部－回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り　体部下端－手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	白色砂粒多 細砂 普通 灰色	20%
4	坏形　土器 須恵器	C　7.8	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　底部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
5	坏形　土器 須恵器	A（13.4） B　3.7 C　6.3	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－右回転利用の回転糸切り後無調整　内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 不良 灰褐・灰白色	50%
6	坏形　土器 須恵器	A（12.3） B　4.1 C（7.4）	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，端部は丸い。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部下端－手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 普通 灰色	20%
7	盤形　土器 須恵器	A（18.3） B　3.05 D（13.0） E　1.0	底部は平底で，高台は下方へのびる。体部はわずかに内彎して立ち上がり，口縁端部は丸い。	内・外面の水挽き痕は弱いが器面は平滑でない　高台は貼り付け	雲母末・砂粒・細砂 不良 黄灰色	15% くすべ焼きの状態を呈している

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8	蓋形 土器 須恵器		頂部が扁平で，外周部に向かってなだらかに下降する。	天井部ー頂部は回転ヘラ削り ロクロ回転方向は右	白色砂粒多 普通 灰色	20%

鉄製品（第134図ー9・10）

9は刀子で切先部を欠損する。刃と棟の両側に区を有する。現存長12.1cm・刃幅1.2cmである。

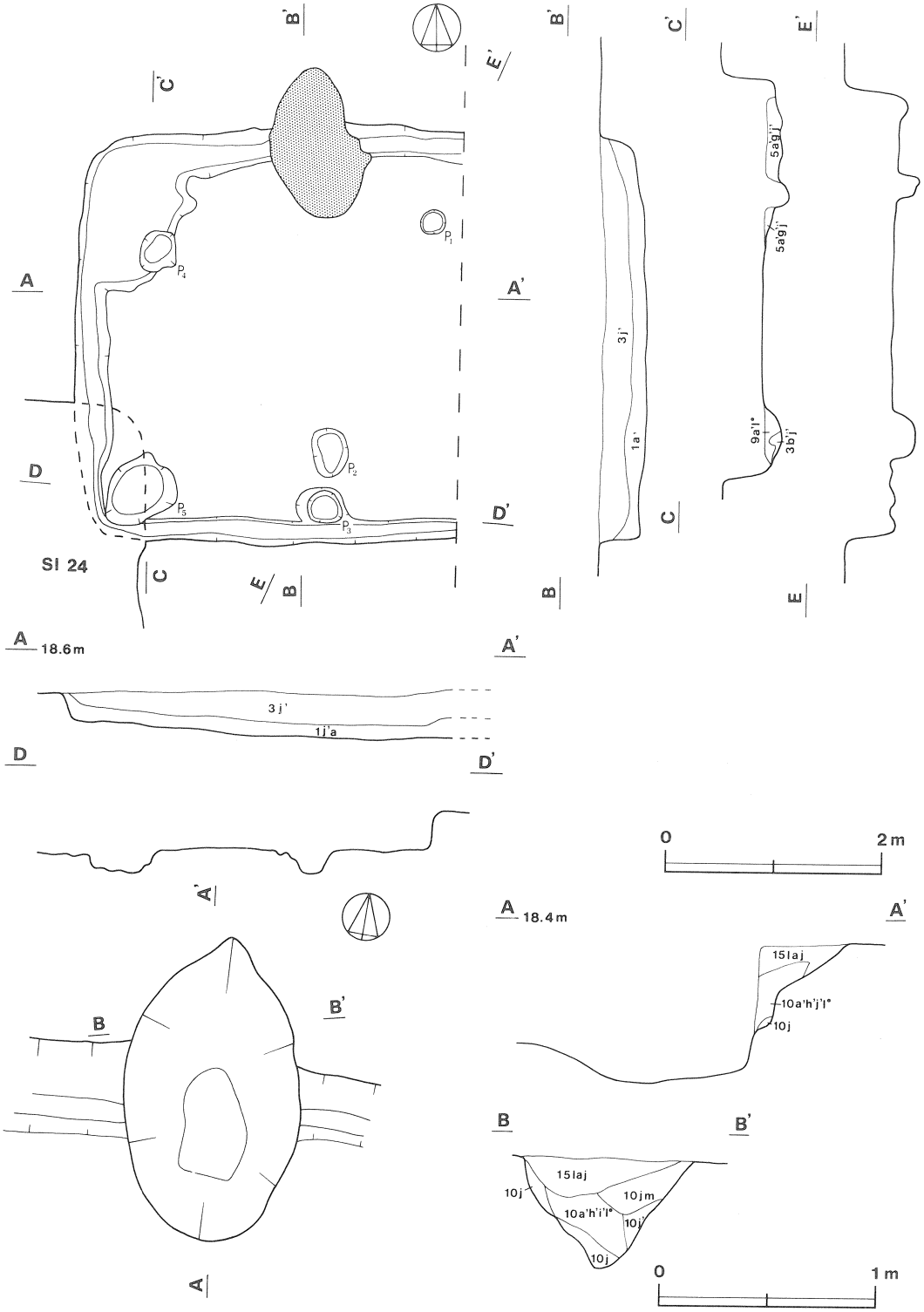
10は刀子の茎部である。刃・棟の両側に区を有するものと思われる。現存長は8.1cmである。



第134図　第28号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡（第135図）

本跡は$I2d_3$を中心に確認され，第39号住居跡の南側約2mに位置している。第24号住居跡と重複しており，本跡が第24号住居跡を切っていることから，本跡の方が新しい。東側部分は調査区



第135図　第29号住居跡・カマド実測図

域外へと延びている。

平面形は3.80m×(　)mの方形を呈するものと思われ，主軸方向はN－2°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約45cmである。壁下には壁溝が全周しており，上幅約21cm・下幅は約15cm・深さ約7cmである。床面は全体に平坦であり，堅く締まっているが，北東コーナー部は床面がやわらかい。ピットはP_1～P_5の5か所検出されたが，P_1～P_5は深さが18～25cmと浅く，径も20～45cmとやや差があり，配置的にも主柱穴であるかどうか不明である。P_5は南西コーナー部に位置し，長径75cm・短径55cm・深さ23cmで埦状に掘り込まれており，貯蔵穴と思われる。カマドは北壁中央に付設されているが，ほとんど崩壊しており，わずかに焼土が残っているだけである。規模は長さ143cm・幅67cmで北壁を約50cm切り込み，火床は床を15cmほど掘り凹めている。覆土は自然堆積の様相を呈し，2層に分かれる。上層が暗褐色土，下層が黒褐色土で，いずれもローム粒子，焼土粒子をわずかに含んでいる。

遺物は少ないが，土師器の甕形土器片が約200点と多く，須恵器では北東コーナー部付近の覆土から蓋形土器（第136図－5）や，南東コーナー部付近の覆土から坏形土器（第136図－1）が出土している。

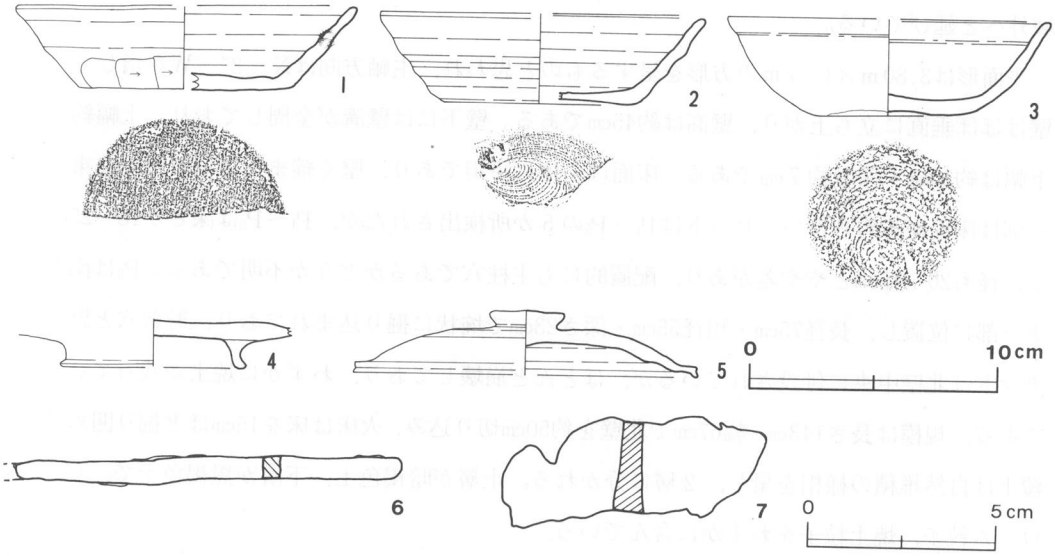
出土土器観察表（第136図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形　土器 須恵器	A　13.6 B　3.4 C　8.8	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へのび，口縁端部は丸い。	底部－不定方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒・雲母 良好 灰色	50%
2	坏形　土器 須恵器	A（13.0） B　3.6 C（7.4）	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へのびる。	底部－回転糸切り後無調整 内・外面の水挽き痕は強い ロクロ回転方向は右	砂粒が少量 良好 緑灰色	25%
3	坏形　土器 土師器	A（13.0） B　3.9 C　6.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部－回転糸切り後無調整 内・外面の水挽き痕は弱い	礫・砂粒 普通 褐色	35%
4	高台付 坏形土器 須恵器	D　7.5 E　1.3	高台は下方へのび，端部は外反する。	底部－回転ヘラ削り 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒・細砂 普通 灰色	25%
5	蓋形　土器 須恵器	A（14.0） B　2.6 つまみ径-3.0 つまみ高-0.7	天井部は弧状を呈し，天井部と口縁部の境に明瞭な稜を有す。口縁部は外下方に屈曲し端部は尖る。天井中央に扁平なボタン状のつまみがつく。	天井部－頂部は回転ヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い ロクロ回転方向は右	砂粒・雲母 不良 灰白色	25%

鉄製品（第136図－6・7）

6は鏃の茎部である。断面は方形を呈し，現存長は10.2cmである。

7は用途不明の鉄製品で，板状で不定形である。現存長は7.1cm・幅2.4cm・厚さ5～7mmである。



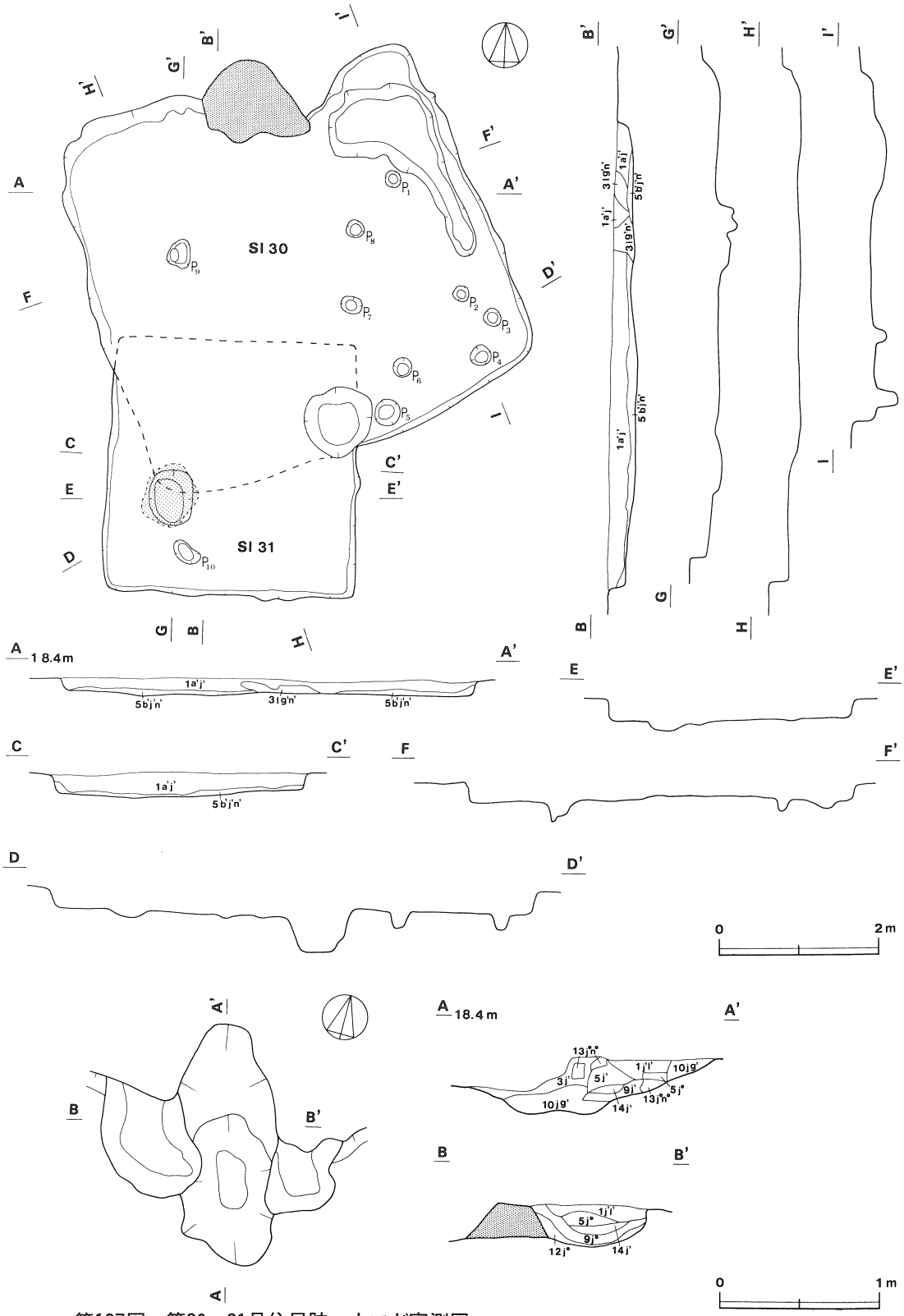
第136図　第29号住居跡出土遺物実測図

第30号住居跡（第137図）

本跡は$I2f_2$を中心に確認され，第28号住居跡の東側約８ｍ，第24号住居跡の南側約0.5ｍに位置している。第31号住居跡と重複しており，本跡が第31号住居跡を切っていることから，本跡の方が新しい。

平面形は長軸5.00ｍ・短軸4.90ｍの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－21°－Wを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は25～28cmである。床面はほぼ平坦で堅く，中央部からカマドにかけてはよく踏み固められているが，北東コーナー部付近はやわらかい。ピットはP_1～P_9の９か所検出され，径20～30cm・深さ18～29cmのほぼ同規模のものが多いが，配置に規則性が見られず，南東に偏しており，主柱穴は不明である。南壁中央部の壁下には貯蔵穴が検出され，径83cmほどの円形を呈し，深さは47cmで埛状に掘り込まれている。カマドは北壁中央部に付設されているが，袖部が残っているだけである。規模は長さ153cm・幅147cmで，北壁を約60cm切り込んでいる。火床は床を15cmほど楕円形に掘り凹め，奥壁はゆるやかに立ち上がっている。他のカマドに比べ構築材は粘土分が少なくて砂粒が多い。また，残存した袖部全体が赤褐色を呈しており，よく使用されている。覆土は自然堆積で，大きく２層に分かれている。上層はローム粒子を含む黒褐色土，下層は焼土粒子を含む褐色土である。

遺物は比較的多く，土師器の坏形土器や高台付坏形土器の出土が目立つ。須恵器では，北西コーナー部付近の床面から甑形土器（第138図－１）が出土し，カマド周辺の覆土からは鉄鏃（第139図－12・13）や鏨（第139図－14）が出土している



第137図　第30・31号住居跡・カマド実測図

出土土器観察表（第138・139図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 須恵器	C 15.8	底部は五孔式で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	体部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	30%
2	甕形土器 土師器	A 22.0	胴部は丸く張る。口縁部は「く」の字状に開き，端部を内屈させてから外上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	10%
3	高台付 坏形土器 土師器	D 8.7 E 1.2	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのび，端部は丸い。	体部内面－ヘラ磨き　外面－水挽き痕は弱い　高台は貼り付け　高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30% 内面黒色処理
4	高台付 坏形土器 土師器	D 7.8 E 1.9	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのび，端部は尖る。	体部内面－ヘラ磨き　外面－水挽き痕弱い　高台は貼り付け　高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	15% 内面黒色処理
5	高台付 坏形土器 土師器	A 15.2 B 5.9 D 6.6 E 1.5	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部外面－横ナデ　内面－ヘラ磨き　下端－回転ヘラ削り 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	70% 内面黒色処理
6	高台付 坏形土器 土師器	A (14.0) B 6.9 D (7.7) E 1.4	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのび，端部は尖る。	内・外面－水挽き痕は弱い 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 赤灰色	30%
7	高台付 坏形土器 土師器	A (13.6) B 5.7 D (7.0) E 1.6	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのびる。	底部切り離しは不明　外面－水挽き痕は弱い　内面－ヘラ磨き　高台は貼り付け　高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	25%
8	高台付 坏形土器 土師器	A (14.2) B 5.3 D (6.2) E 2.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	底部切り離しは不明　外面－水挽き痕はやや強い　内面－ヘラ磨き　高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	30%
9	坏形土器 土師器	A (13.2) B 3.6 C 5.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部切り離しは不明で，回転ヘラ削り　体部下端－回転ヘラ削り　内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	40% 内面黒色処理
10	坏形土器 土師器	A (12.8) B 3.6 C 6.8	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－静止糸切り後無調整 体部外面－水挽き後横ナデ 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	50% 内面黒色処理
11	坏形土器 土師器	A (14.7) C (6.0)	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外反する。	底部は回転糸切り後，粘土を貼り付けて削っている　体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 橙色	40%

鉄製品（第139図－12～17）

12は凹基の鏃で，片方の脚が欠損する。穂（ほ）の断面はレンズ状，茎部の断面は長方形を呈する。現存長は8.6cmである。

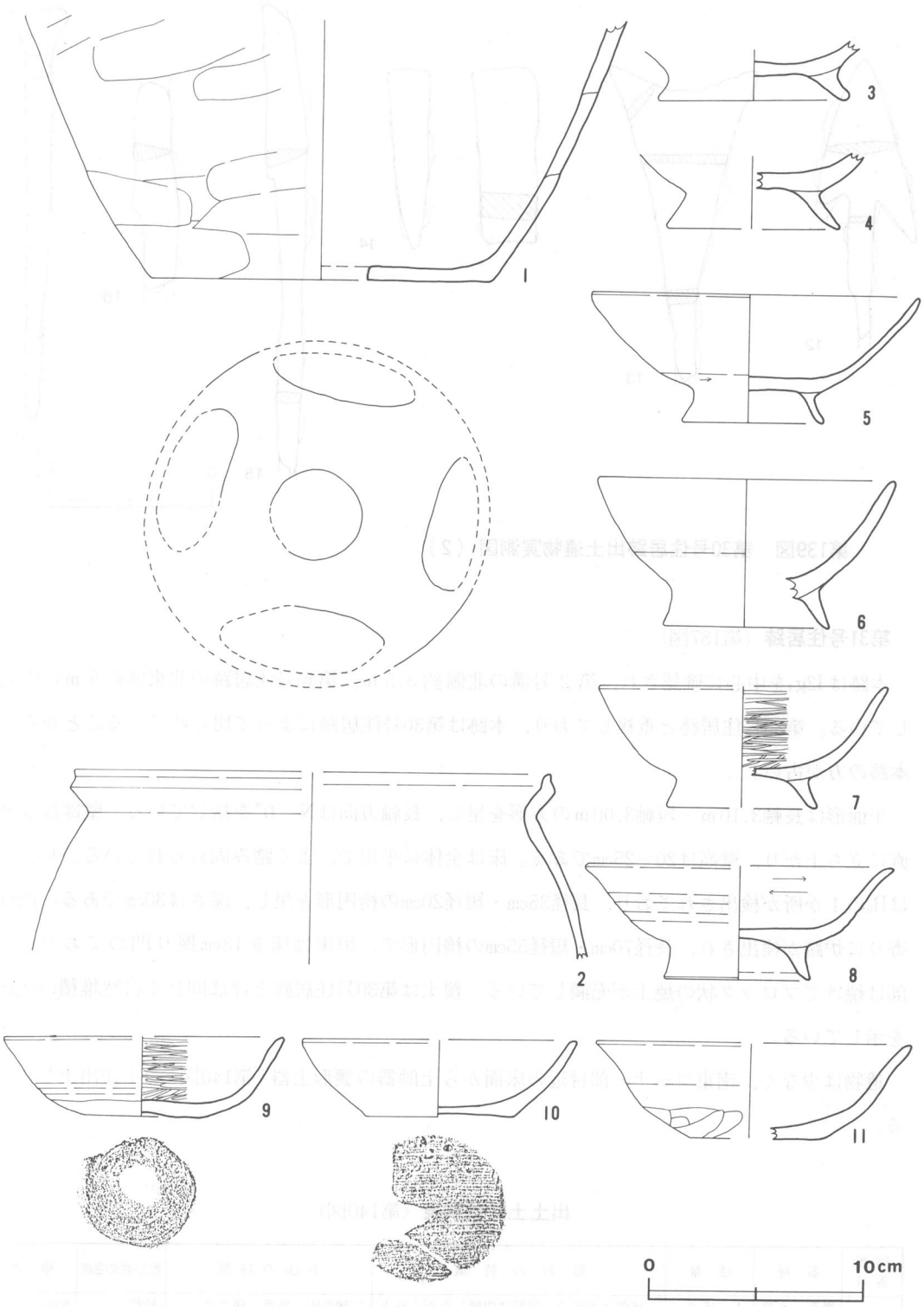
13は雁股の鏃で，茎部が欠損する。現存長は9.6cmである。

14は鑿（たがね）で完存品である。頭部は長方形で，側面はV字形を呈する。現存長は5.4cm・刃幅1.7cmである。

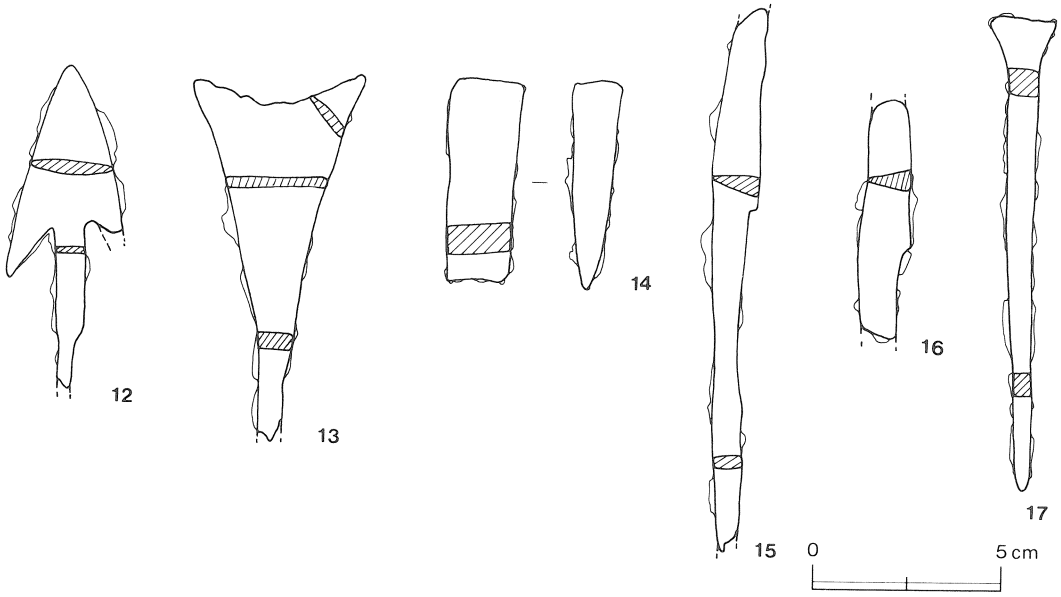
15は刀子で両端部が欠損する。棟側に区を有し，現存長は14.4cm・刃幅は1.4cmである。

16は刀子で両端部が欠損する。棟側に区を有する現存長は6.5cm・刃幅は1.2cmである。

17は釘で完存品である。断面は方形を呈する。現存長は12.6cmである。



第138図　第30号住居跡出土遺物実測図（1）



第139図　第30号住居跡出土遺物実測図（2）

第31号住居跡（第137図）

本跡は$I2g_1$を中心に確認され，第２号溝の北側約3.5ｍ，第40号住居跡の北東側約６ｍに位置している。第30号住居跡と重複しており，本跡は第30号住居跡によって切られていることから，本跡の方が古い。

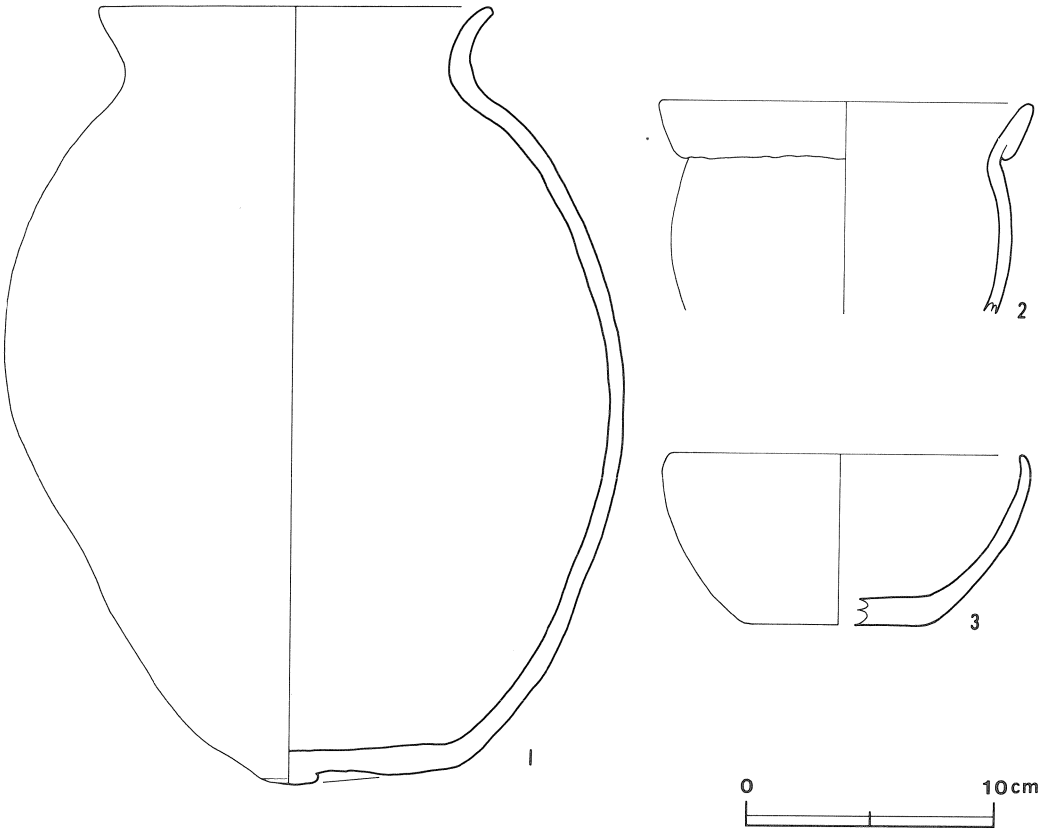
平面形は長軸3.10ｍ・短軸3.00ｍの方形を呈し，長軸方向はN－0°を指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～25cmである。床は全体に平坦で，よく踏み固められている。ピットはP_0の１か所が検出されており，長径35cm・短径20cmの楕円形を呈し，深さは30cmである。西壁寄りに炉跡が検出され，長径70cm・短径55cmの楕円形で，炉床は床を13cm掘り凹めており，内部は焼けてブロック状の焼土が充満している。覆土は第30号住居跡とほぼ同じく自然堆積の状態を示している。

遺物は少なく，南東コーナー部付近の床面から土師器の甕形土器（第140図－１）が出土している。

出土土器観察表（第140図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 15.2 B 30.9 C（7.0）	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位から内傾する。口縁部は外反しながら開く。全体にゆがみがある。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ　下半－斜位の雑なヘラ磨き 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	85%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	甕形 土器 土師器	A 15.1	胴部は丸く張り，口縁部は折り返し口縁で「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－器面剝落して整形不明 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
3	埦形 土器 土師器	A 14.1 B 6.9 C 7.4	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 褐灰色	45%



第140図　第31号住居跡出土遺物実測図

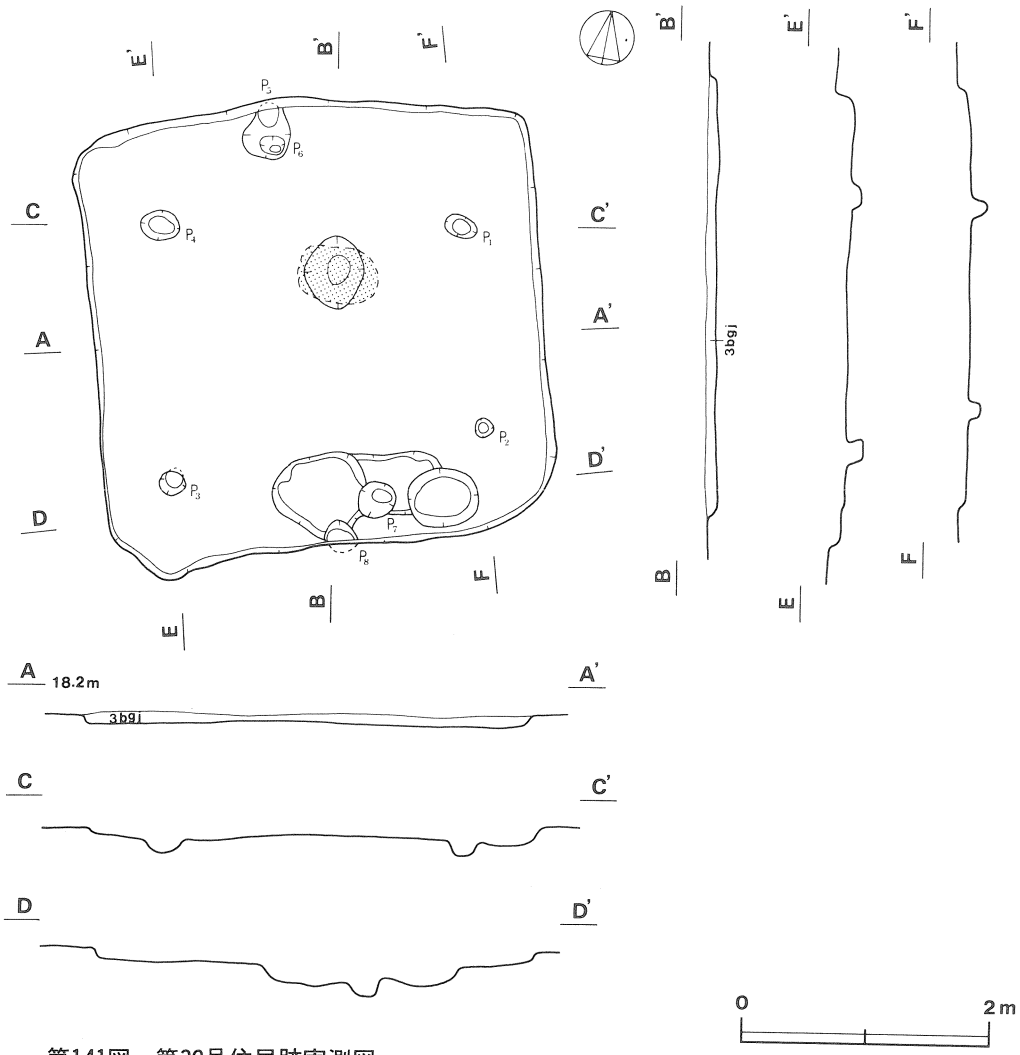
第32号住居跡（第141図）

本跡は$I1g_7$を中心に確認され，第27号住居跡の南側約1 m，第28号住居跡の西側約3 mに位置している。

平面形は長軸3.60 m・短軸3.60 mの隅丸方形を呈し，長軸方向はN－18°－Wを指している。壁高は5～10cmである。壁の立ち上がりは不明瞭で，床はほぼ平坦であり中央部から南壁にかけてはよく踏み固められている。ピットはP_1～P_8の8か所検出され，P_1～P_4の径は15～33cmとやや差がある。深さは12～17cmと浅いがほぼ方形に配置されており，主柱穴と思われる。P_7・P_8の周囲は攪乱を受けており床面が凹凸である。炉が住居跡中央部のやや北壁寄りに確認され，平面形は

長径58cm・短径48cmの楕円形を呈し，炉床は床を８cm皿状に掘り凹めている。内部にはブロック状の焼土が堆積して，炉床は焼けて硬化している。覆土は自然堆積の状態を示し，確認面から床面まで浅いため，ローム粒子を含む暗褐色土が１層だけである。

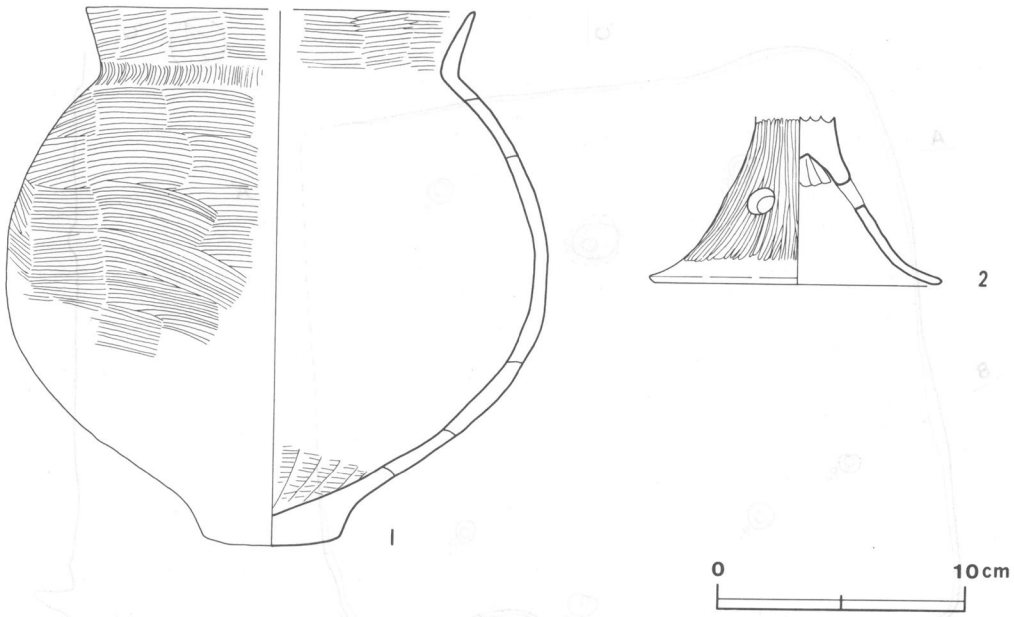
遺物は少なく，北東コーナー部付近の床面から土師器の甕形土器（第142図－１）が出土しただけである。



第141図　第32号住居跡実測図

出土土器観察表（142図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A (15.6) B 21.7 C 5.5	底部は突出した平底で，胴部はやや扁平な球形を呈している。口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横位のハケ目　頸部外面－縦位のハケ目　胴部外面－横位のハケ目　内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	50%



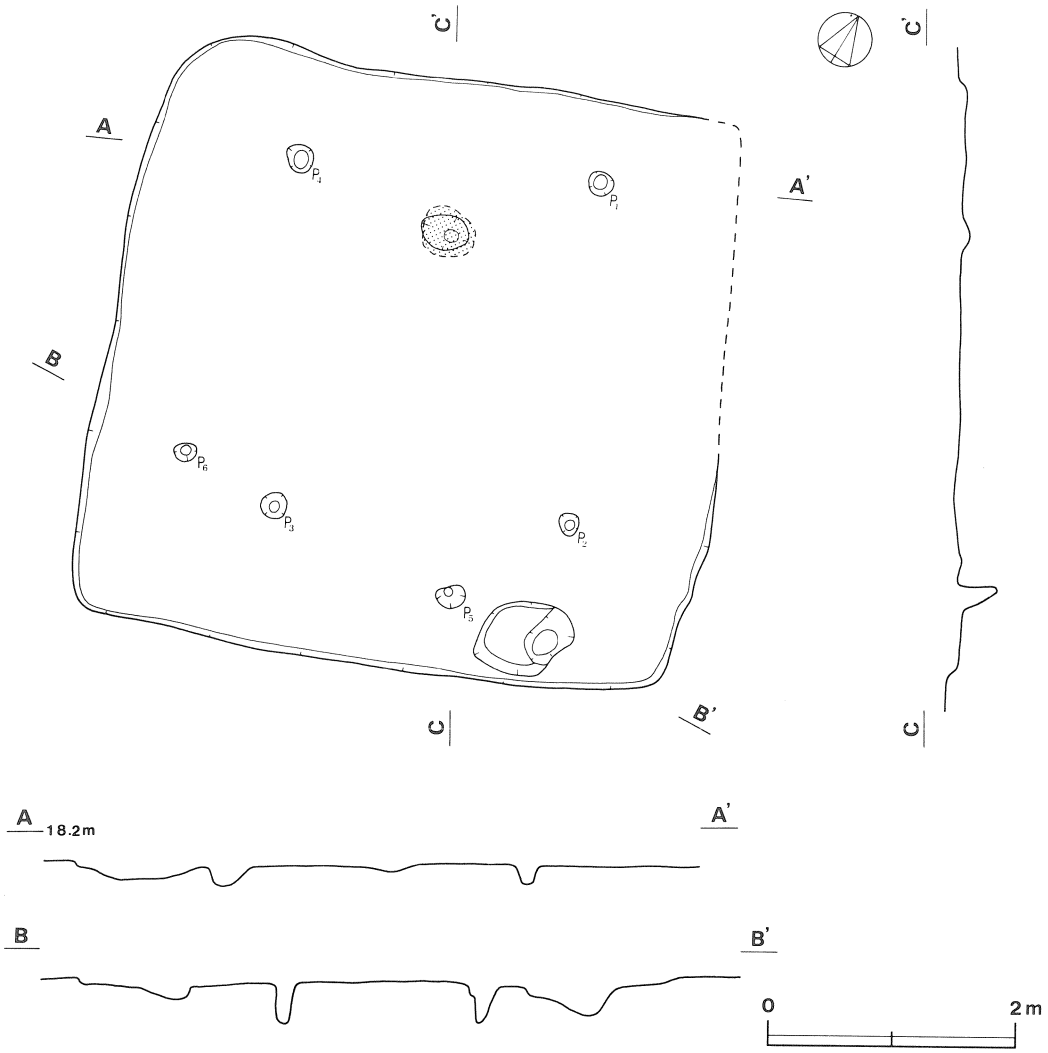
第142図　第32・33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡（第143図）

本跡は$I1h_4$を中心に確認され，第40号住居跡の西側約12m，第2号溝の南側約2mに位置している。

平面形は長軸4.90m・短軸4.75mの方形を呈し，主軸方向はN－23°－Wを指している。確認面から床面までが浅く，また，北東壁は耕作の攪乱を受けているため，壁の立ち上がりは不明瞭であり，壁高は0～5cmである。床はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP_1～P_6の6か所検出された。P_1～P_4はいずれも径が約25cm，深さはP_3の34cmを除いて15～18cmであり，ほぼ方形に配置されていることから主柱穴と思われる。住居跡中央部から北西壁寄りに炉跡が検出され，平面形は長径38cm・短径27cmの楕円形を呈し，床を7cmほど皿状に掘り込めている。耕作の攪乱のため焼土がわずかに残っているだけで，炉床もあまり焼けていない。東コーナー部のやや西寄りに貯蔵穴が検出され，平面形は長径85cm・短径60cmの楕円形を呈し，深さは27cmである。覆土は自然堆積と思われ，ローム粒子を含む黒褐色土が主であるが，堆積していても厚さ2～3cmで床面が露出している部分もある。

遺物は土師器の甕形土器片が13点と，貯蔵穴内から高坏形土器の脚部（第142図－2）が出土している。



第143図　第33号住居跡実測図

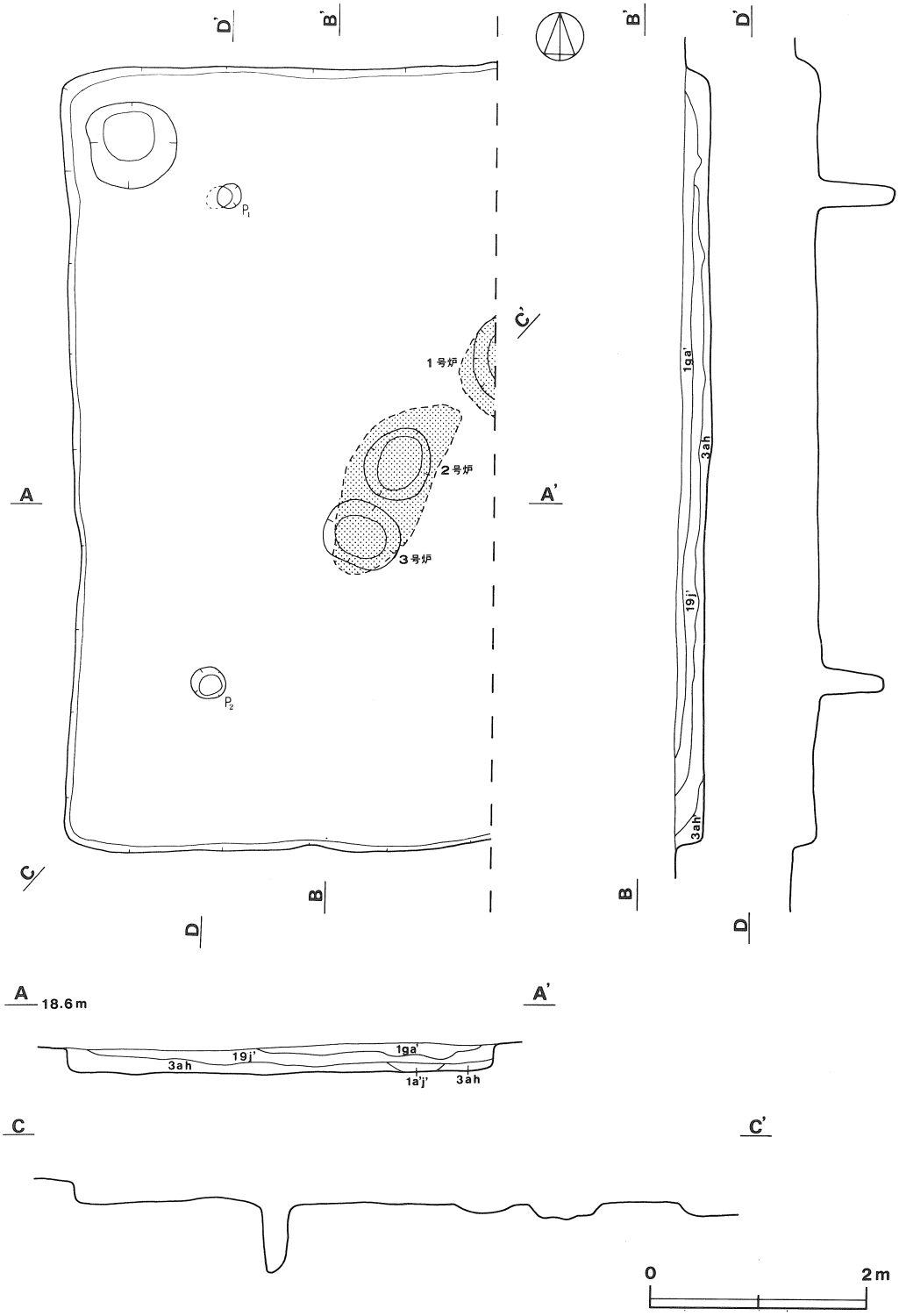
出土土器観察表（第142図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	高坏形土器 土師器	C 11.6	坏部欠損。 脚部はラッパ状に開き，中位に3か所の穿孔が見られる。	脚部外面－縦位のヘラ磨き 内面－ナデ 裾部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	50%

第34号住居跡（第144図）

本跡は$I2j_3$を中心に確認され，第2号溝の南側約2m，第35号住居跡の北側約1mに位置している。東側部分は，調査区域外へと延びる。

平面形は7.10m×(　)mの方形を呈すると思われ，主軸方向はN－4°－Wを指している。壁は



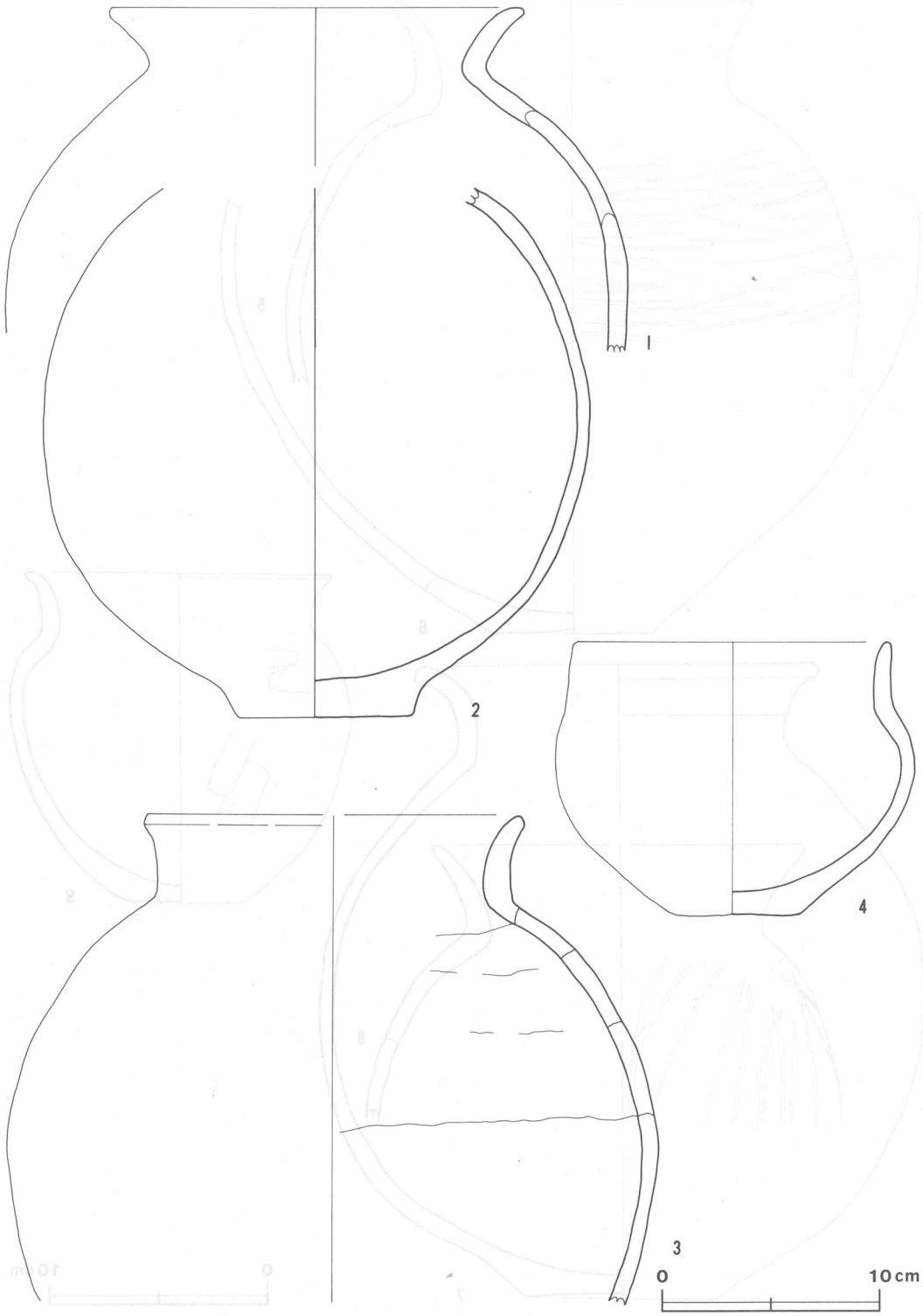
第144図　第34号住居跡実測図

やや外傾して立ち上がり，壁高は25～28cmである。床面はほぼ平坦で堅く，特に炉跡の周辺がよく踏み固められている。ピットはP_1・P_2の２本が検出されたが，P_1・P_2とも径25～30cm，深さはP_1が74cm，P_2が60cmと深く配置的に主柱穴と思われる。炉跡は住居跡中央部に２基，北東寄りに１基の合わせて３基が確認され，北から第１・第２・第３号炉跡とした。いずれも長径約70cm，第１号炉を除いて短径約55cm・深さ約15cm掘り凹めている。いずれも内部には焼土や焼土ブロックが多量に充満している。北西コーナー部には貯蔵穴が検出され，平面形は径約90cmの円形を呈し，約60cm掘り込んでおり床面は平坦である。覆土は大きく３層に分かれ，自然堆積の様相を呈しており，下から暗褐色土・極暗褐色土・黒褐色土と堆積し，各層ともローム粒子や炭化粒子を含みやわらかである。

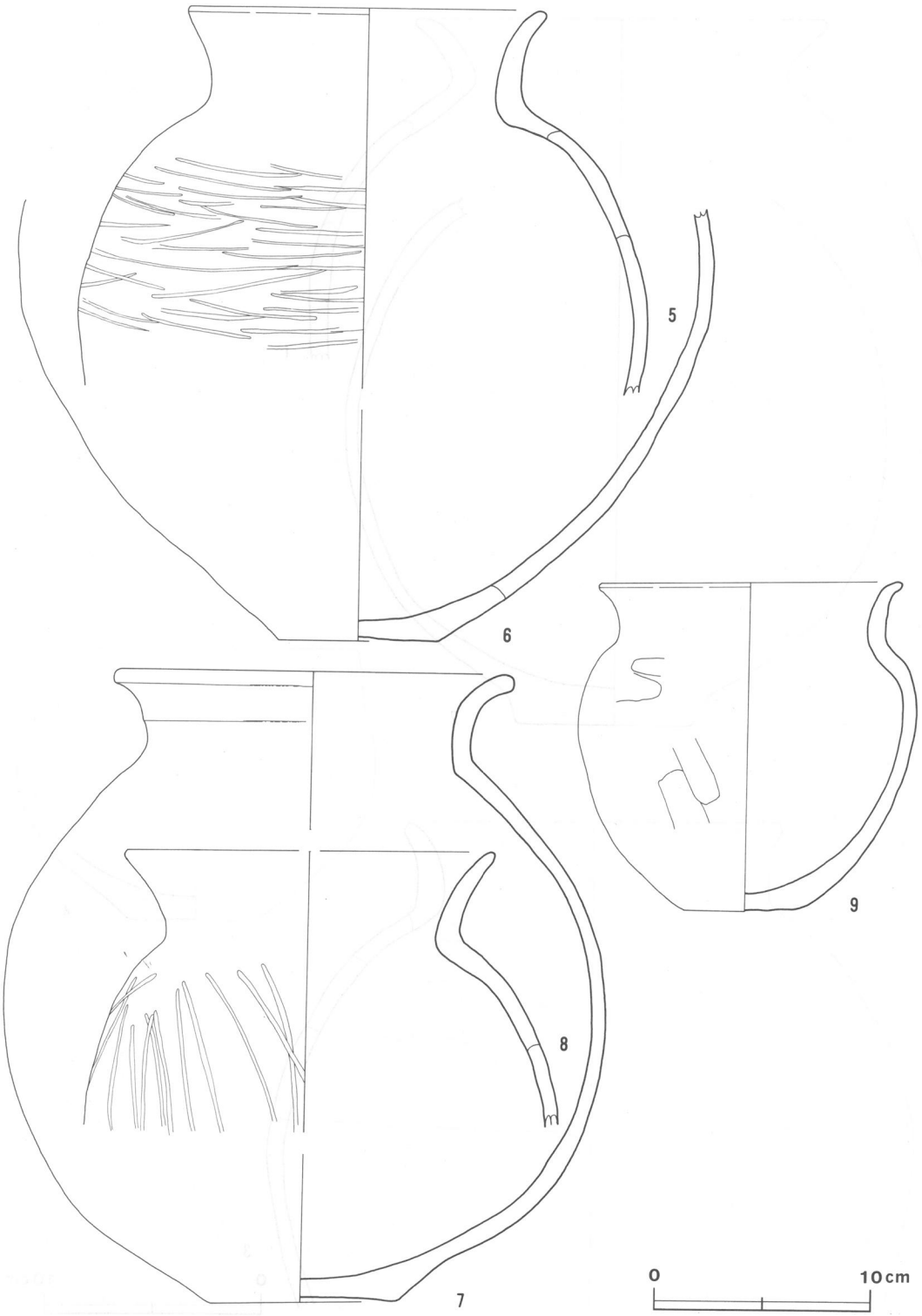
遺物は，ほとんどが北西コーナー部付近の床面から集中して多量に出土している。土師器の甕形土器が多く，破片が620点，接合して実測できたものが13点，そのうち大形のものが８点ある。このほか埦形土器，甑形土器が出土している。

出土土器観察表（第145・146・147図）

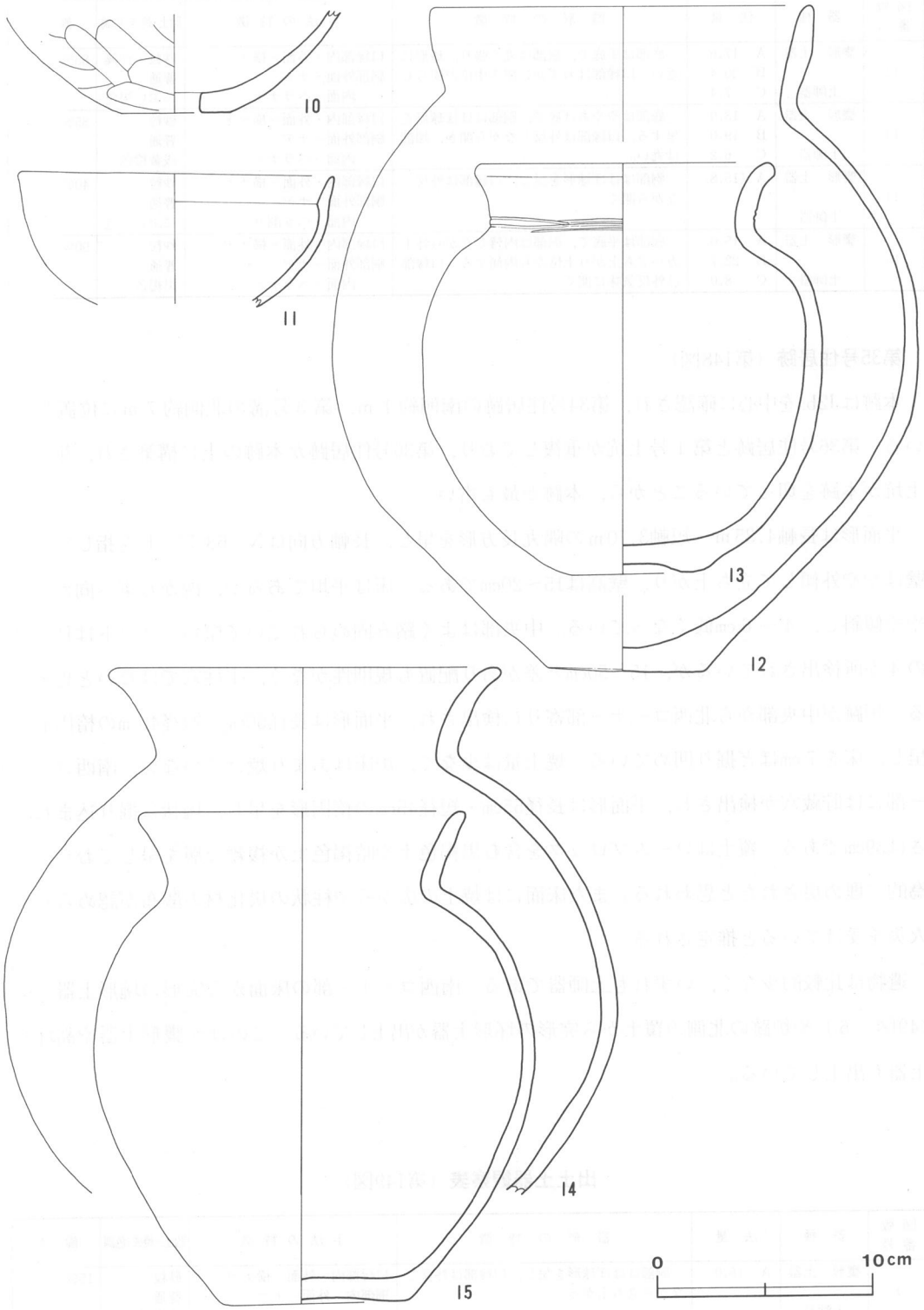
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A 19.2	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%
2	甕形 土器 土師器	C 8.2	底部は平底で突出し，胴部はほぼ球形を呈する。	胴部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	70%
3	甕形 土器 土師器	A 17.2	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながらわずかに開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	40% 胴部外面煤付着
4	甕形 土器 土師器	A 14.6 B 12.6 C 5.8	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴部上位で内傾する。口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	90%
5	甕形 土器 土師器	A 15.8	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ後雑なヘラ磨き 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	35%
6	甕形 土器 土師器	C 7.3	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ナデ 内面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	20%
7	甕形 土器 土師器	A 18.2 B 29.4 C 8.2	底部は平底で，胴部はほぼ球形を呈する。口縁部は直立してから外反して開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	65%
8	甕形 土器 土師器	A 17.0	胴部はやや長胴を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ後雑なヘラ磨き 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
9	甕形 土器 土師器	A 13.9 B 15.2 C 5.7	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴部上位で内傾する。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ 内面－ナデ	砂粒 普通 黒色	90%
10	甑形 土器 土師器	C 5.2	底部は平底で，胴部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。底部中央に穿孔している。	胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 淡赤橙色	20%
11	埦形 土器 土師器	A 14.7	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外傾する。内面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤橙色	80%



第145図　第34号住居跡出土遺物実測図（1）



第146図　第34号住居跡出土遺物実測図（2）



第147図　第34号住居跡出土遺物実測図（3）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
12	甕形 土器 土師器	A 17.6 B 30.4 C 7.4	底部は平底で，胴部は丸く張り，球形に近い。口縁部はわずかに開き中位が膨らむ。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	85%
13	甕形 土器 土師器	A 13.0 B 19.0 C 6.2	底部はややあげ底で，胴部はほぼ球形を呈する。口縁部は外反しながら開き，端部は丸い。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	85%
14	甕形 土器 土師器	A (15.8)	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラ削り	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
15	甕形 土器 土師器	A 15.0 B 22.7 C 8.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり上位から内傾する。口縁部は外反気味に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 黒褐色	90%

第35号住居跡（第148図）

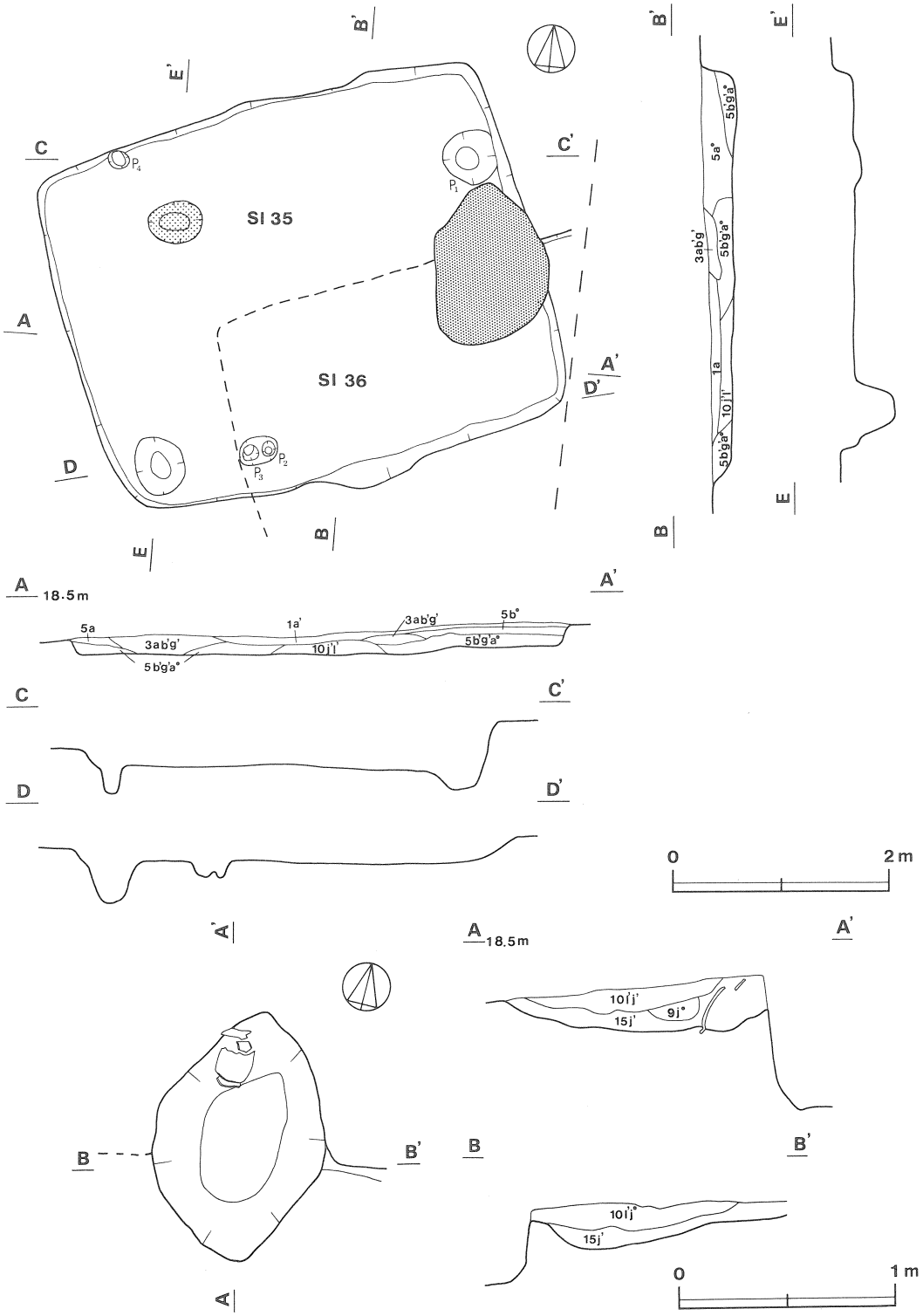
本跡は$J2b_3$を中心に確認され，第34号住居跡の南側約１m，第３号溝の北側約７mに位置している。第36号住居跡と第１号土坑が重複しており，第36号住居跡が本跡の上に構築され，第１号土坑が本跡を切っていることから，本跡が最も古い。

平面形は長軸4.35m・短軸3.70mの隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－68.5°－Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は15～20cmである。床は平坦であるが，西から東へ向かってやや傾斜し，４～６cm低くなっている。中央部はよく踏み固められていて堅い。ピットはP_1～P_4の４か所検出されているが，15～50cmと差があり配置も規則性がなく，主柱穴ではないと思われる。炉跡が中央部から北西コーナー部寄りに検出され，平面形は長径50cm・短径40cmの楕円形を呈し，床を７cmほど掘り凹めている。焼土量は少なく，炉床はあまり焼けていない。南西コーナー部には貯蔵穴が検出され，平面形は長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し，埦状に掘り込まれ深さは39cmである。覆土はロームブロックを含む黒褐色土や暗褐色土が複雑な層を呈しており，人為的に埋め戻されたと思われる。また床面には焼土の広がりや柱状の炭化材の散布が認められ，火災を受けていると推定される。

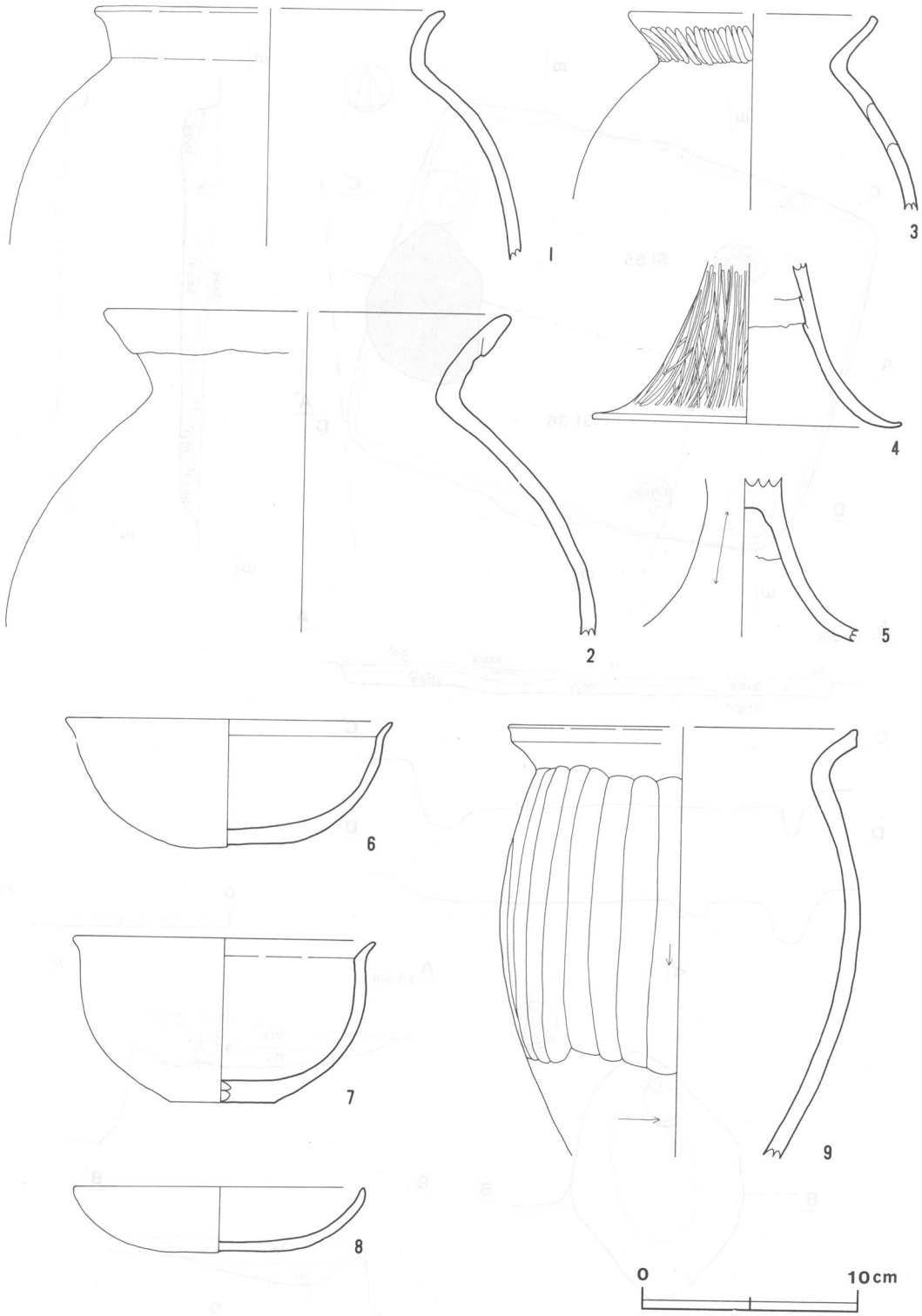
遺物は比較的少なく，いずれも土師器である。南西コーナー部の床面から完形の埦形土器（第149図－６）や炉跡の北側の覆土から完形の坏形土器が出土している。このほか甕形土器や高坏形土器も出土している。

出土土器観察表（第149図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A 16.0	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながら立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	15%
2	壺形 土器 土師器	A 18.4	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	15%



第148図　第35・36号住居跡・カマド実測図



第149図　第35・36号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	甕形 土器 土師器	A 11.5	胴部は球形を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 頸部外面－ヘラオサエ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	30%
4	高坏形土器 土師器	D 14.3	坏部欠損。脚部は「ラッパ」状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き 内面－ナデ 上位に輪積痕 裾部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 淡橙色	40%
5	高坏形土器 土師器		脚部は「ラッパ」状に開く。	脚部外面－縦位のヘラ磨き 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	40%
6	埦形 土器 土師器	A 15.6 B 6.0	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く外傾する。内面の口縁部と体部との境に稜を有する。	底部－不定方向のヘラ削り 口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤褐色	100% 体部外面に赤彩
7	埦形 土器 土師器	A (13.4) B 7.7 C (4.8)	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	40%
8	坏形 土器 土師器	A 23.5 B 3.3	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 赤色	100%

第36号住居跡（第148図）

本跡は$J2b_3$を中心に確認され，第34号住居跡の南側約3mに位置している。第35号住居跡と第1号土坑と重複しているが，本跡は第35号住居跡の上に貼り床としており，第1号土坑によって切られていることから，第35号住居跡より新しく第1号土坑より古いと考えられる。耕作による削平のため，本跡はカマドと北壁の一部しか残っておらず，東側半分は調査区域外へ延びている。

平面形は長軸・短軸とも不明である。主軸方向も推定でN－20°－Wぐらいと思われる。壁はカマドの東側だけしか残っておらず，立ち上がりも不明瞭で壁高は約5cmである。床面はカマドの周辺だけが残っており，よく踏み固められているが他は削平されている。第35号住居跡と重複する部分は貼り床をしており，ほとんどが削平されているが，カマドの南側では約5cmの厚さでロームブロックが固められている。ピットは検出されなかった。カマドは北壁中央に付設されていたものと思われ，耕作のためほとんど破壊され焼土が残っていただけである。推定で長さ114cm，幅80cmで床を11cm掘り凹めている。覆土はなく床面が露出している。

遺物はカマド内から，土師器の甕形土器（第149図－9）が出土しただけである。

出土土器観察表（第149図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	甕形 土器 土師器	A 16.0	胴部は中位でやや張り，長胴を呈する。口縁部は外反しながら開き，端部を上方へつまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上・中位－縦位 下位－横位のヘラ削り 胴部内面－ナデ	砂粒 普通 灰褐色	40%

第37号住居跡（第150・151図）

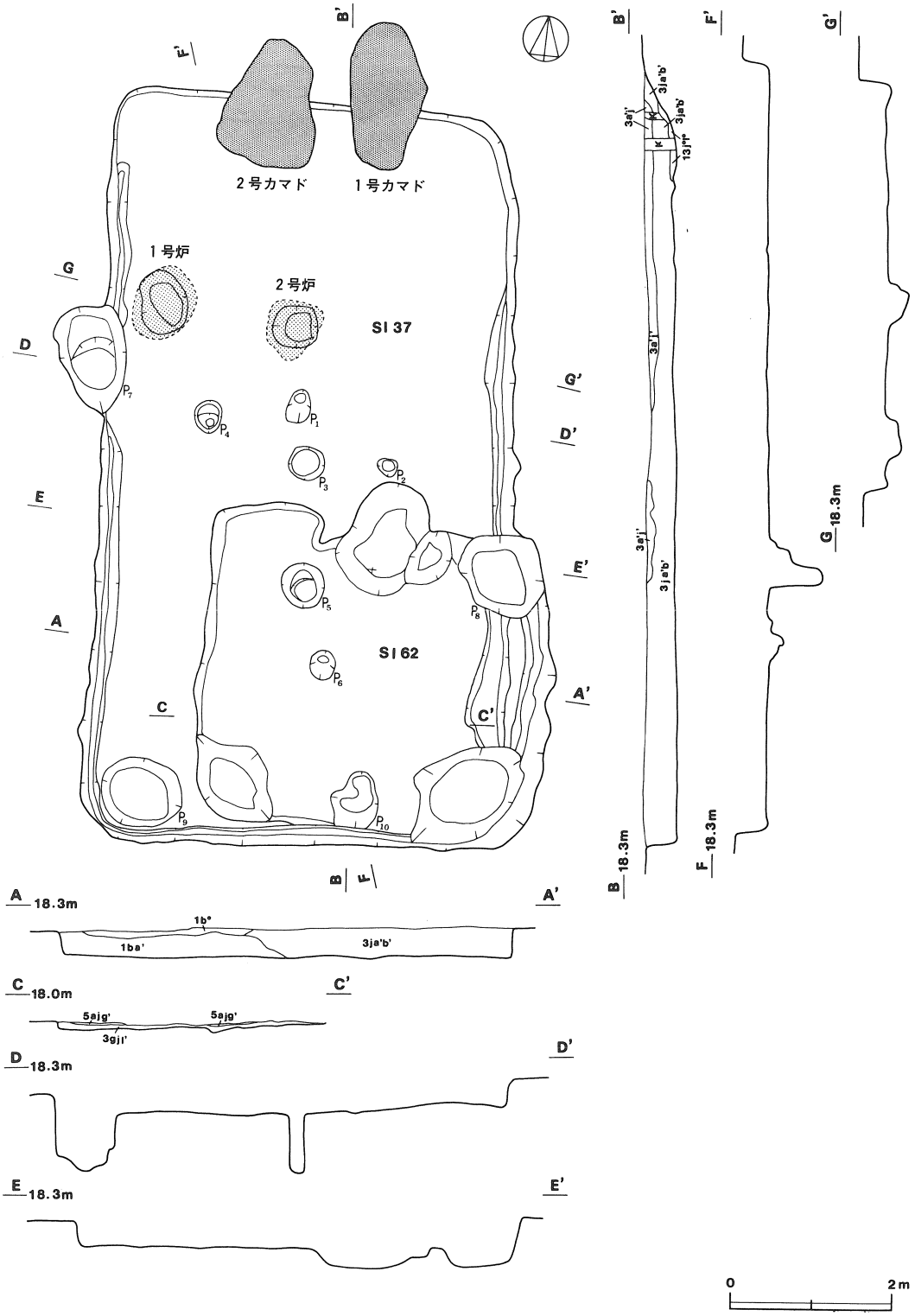
本跡はI1b$_6$を中心に確認され，第38号住居跡の東側約２ｍ，第25号住居跡の北西側約１ｍに位置している。第62号住居跡と重複しており，本跡は第62号住居跡の上に構築されていることから，本跡の方が新しい。

平面形は長軸9.05ｍ・短軸5.05ｍの長方形を呈し，主軸方向はN－7°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約35cmである。床は全体に平坦で堅く，よく締まっている。第62号住居跡との重複部分は貼り床となっており，踏み固められたロームが３cm前後の厚さで残っている。ピットはP_1～P_{10}の10か所検出され，いずれも径23～60cm・深さ14～74cmと不揃いで，配置的にも規則性がなく主柱穴ではないと思われる。また，P_5・P_6は本跡に伴うものかどうか不明である。P_9は長径100cm・短径85cmの楕円形を呈し，25cmほど掘り込まれ，南西コーナー部に位置しており，貯蔵穴かと思われる。炉跡が住居跡中央部のやや北寄りの位置と，西壁寄りの位置に２基検出された。第１号炉は長径80cm・短径55cmの楕円形を呈し，床面を21cm掘り凹めている。第２号炉は径約50cmのほぼ円形を呈し，床を32cm掘り凹めている。いずれも焼土量は少なく，炉床もあまり焼けていない。カマドは，北壁中央部に約50cm離れて２基付設されている。いずれもほとんど崩壊しており，天井・袖部は残っていない。第１号カマドは長さ155cm・幅90cmで，北壁を80cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を17cm掘り凹めている。どちらもほぼ同じ規模で，火床は焼けてブロック状を呈し焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を示しており，ローム粒子とロームブロックをわずかに含む暗褐色土と黒褐色土が主である。北壁下を除いて壁溝が周回しており，上幅約18cm・下幅約17cm・深さ約５cmである。

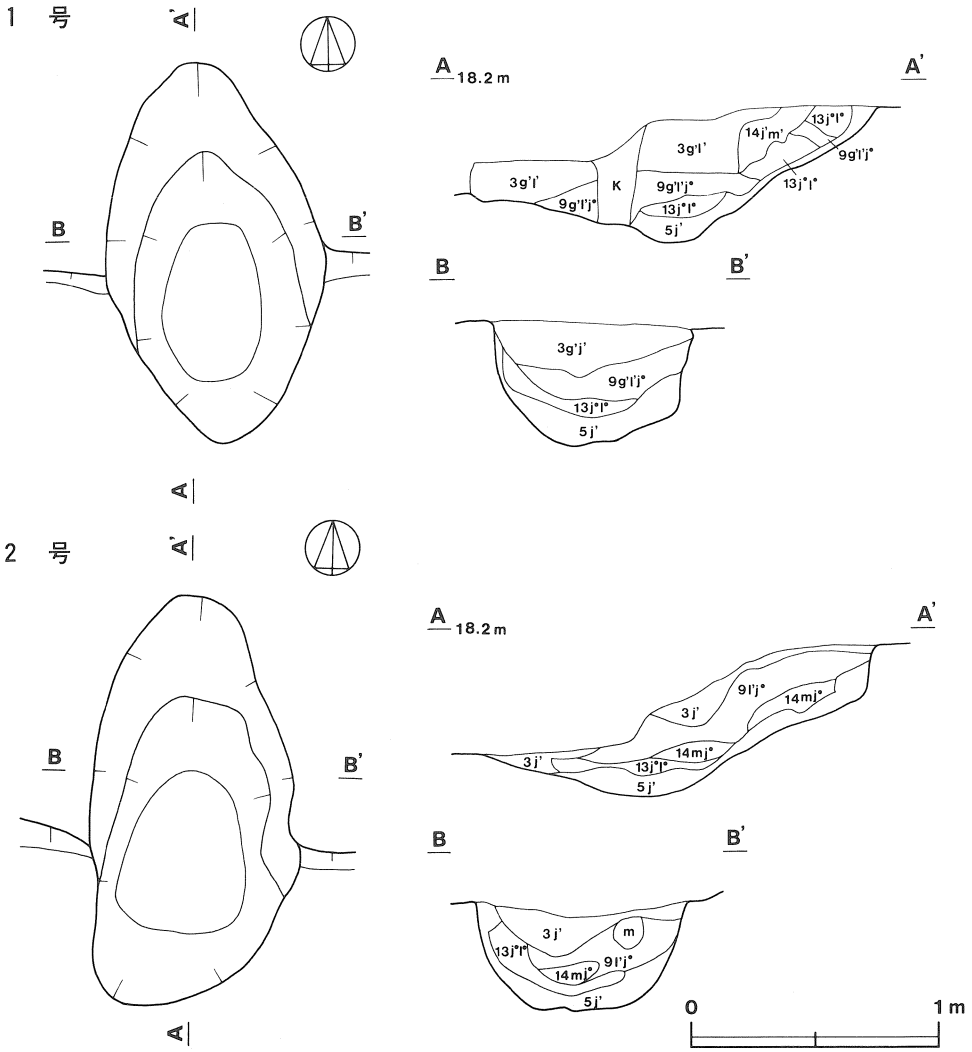
遺物の出土量は多く，土師器の甕形土器片は1,155点も出土し，坏形土器や高台付坏形土器も多い。須恵器では坏形土器片が170点出土している。土器のほかには覆土から刀子，鉄鏃，釘などが出土している。

出土土器観察表（第152・153図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A（19.0）	胴部はやや長胴を呈する。口縁部は外反気味に開き，端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	20%
2	甕形土器 土師器	A（21.6）	口頸部は「コ」の字状を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 赤色	10%
3	甕形土器 土師器	A 14.9	口頸部「コ」の字状を呈し，外端部に沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	15%
4	坏形土器 土師器	A（13.0） B 4.2 C 6.6	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後無調整 体部外面－水挽き痕は弱い 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	50%

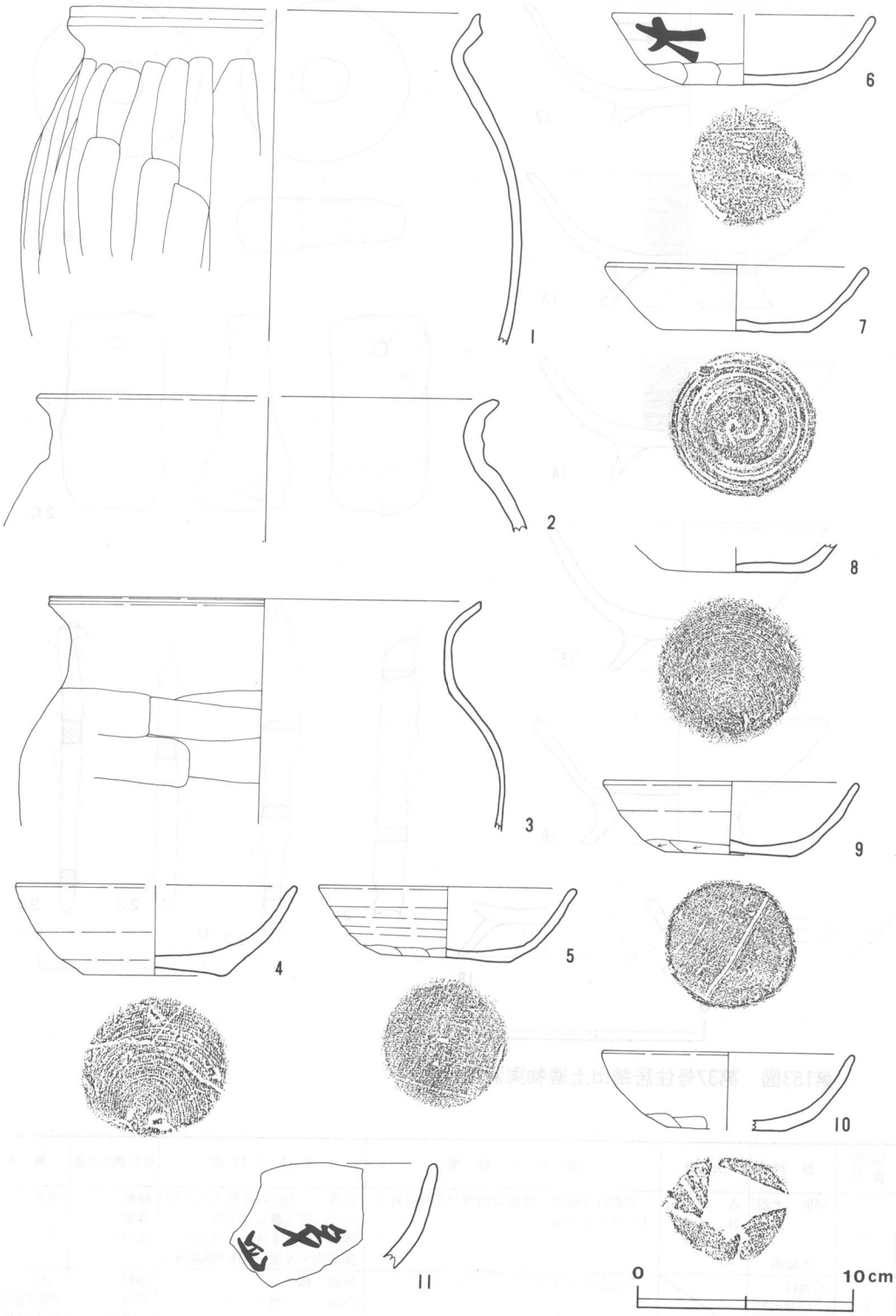


第150図　第37・62号住居跡実測図

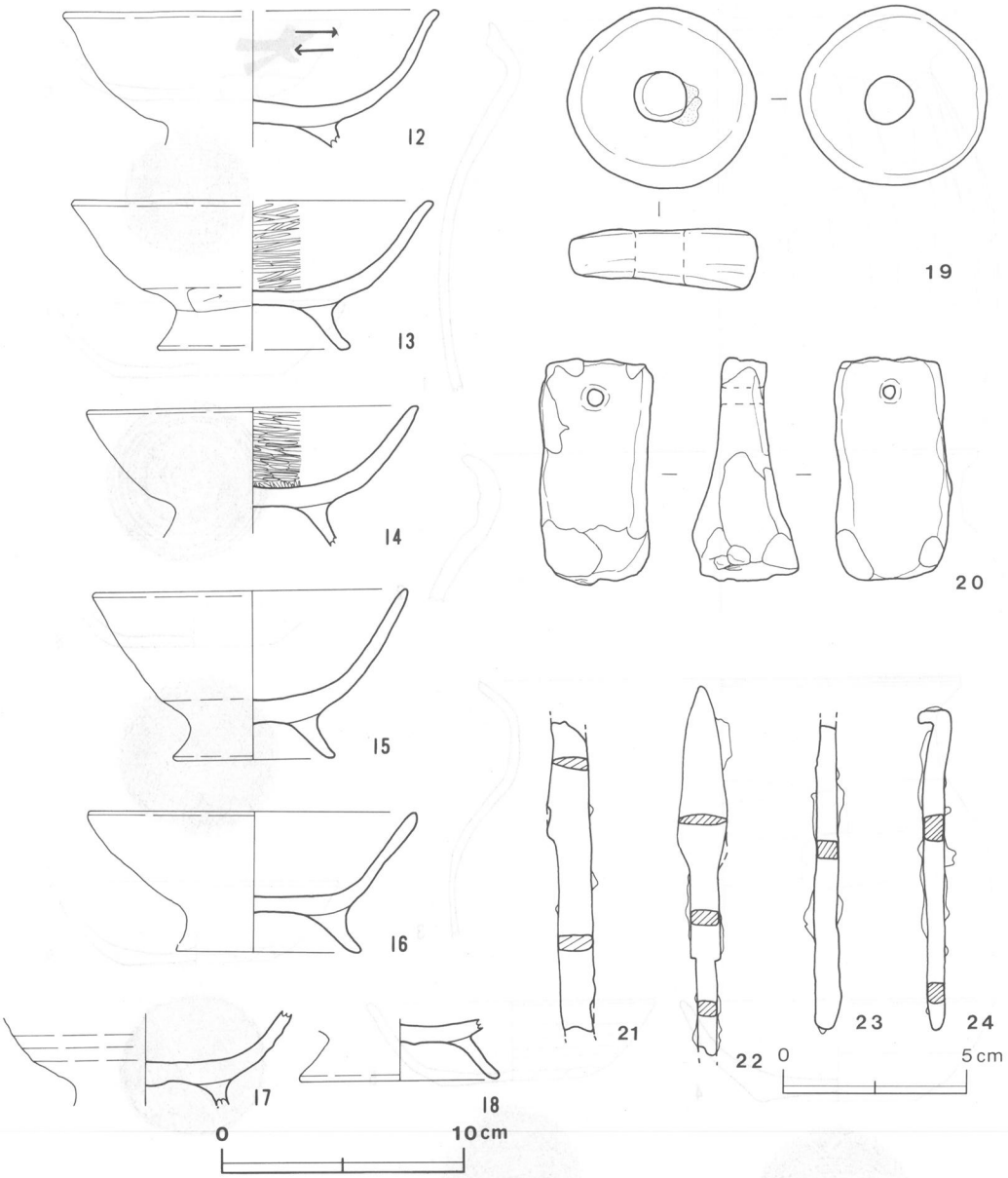


第151図　第37号住居跡カマド実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5	坏形　土器 土師器	A　12.0 B　4.3 C　6.1	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－切り離し不明で，手持ちヘラ削り 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 にぶい橙色	60%
6	坏形　土器 土師器	A（12.4） B　3.3 C　5.4	底部は平底で，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－切り離し不明で，手持ちヘラ削り 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 淡橙色	60% 墨書「大」
7	坏形　土器 土師器	A　12.0 B　3.1 C　6.8	底部は平底で，体部はやや内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ削り後軽くヘラ削り 体部内・外面－水挽き痕は弱い	砂粒 普通 にぶい橙色	100%
8	坏形　土器 土師器	C　6.6	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後無調整 体部外面－横ナデ 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	20% 内面黒色処理
9	坏形　土器 土師器	A　12.0 B　3.6 C　6.0	底部は平底で，体部はやや内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部内・外面－水挽き痕は弱い	砂粒 普通 橙色	100%



第152図　第37号住居跡出土遺物実測図（1）



第153図　第37号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	坏形土器 土師器	A 11.8 B 5.2 C 3.6	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－一方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り 体部内・外面－水挽き痕は弱い	砂粒 普通 灰白色	90%
11	高台付 坏形土器 土師器		口縁部片である。	外面－横ナデ 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 淡黄色	5% 内面黒色処理 外面に墨書
12	高台付 坏形土器 土師器	A (15.6) B 5.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	体部内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	60% 内面黒色処理

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
13	高台付坏形土器 土師器	A (15.0) B 6.2 D (8.2) E 1.9	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。高台は外下方へのびる。	体部内・外面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	70% 内面黒色処理
14	高台付坏形土器 土師器	A 13.8	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	85%
15	高台付坏形土器 土師器	A (13.2) B 7.0 D 7.8 E 1.5	体部は外反気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部内面－雑なヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	70%
16	高台付坏形土器 土師器	A 13.7 B 5.8 D 8.8	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。高台は外下方へのびる。	内・外面－水挽き痕は弱い 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 淡黄色	80%
17	高台付坏形土器 土師器		体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	内・外部－水挽き痕はやや弱い 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	50%
18	高台付坏形土器 土師器	D 8.1 E 1.6	高台は外下方へのびて端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%

石製品（第153図－19・20）

19は紡錘車で完形品である。全体に摩滅している。長径5.2cm・短径4.9cm・厚さ1.3～1.7cm・孔径13mmで，石質は軽石である。

20は砥石（提砥）である。長方形を呈し一端に径４mmの孔を要する。両端を除く４面が使用されている。長さ６cm・幅3.1cm・厚さ1.2～2.9cmで，石質は安山岩である。

鉄製品（第153図－21～24）

21は刀子で両端部が欠損する。刃側に区（まち）を有する。現存長は8.5cm・刃幅1.1cmである。

22は鏃で茎部が欠損する。穂は細長く，断面はレンズ状を呈す。現存長は10.1cmである。

23は鏃の茎部で，断面は方形を呈する。現存長は8.4cmである。

24は釘で完存品である。頭部は屈曲し，断面は方形を呈する。長さは8.8cmである。

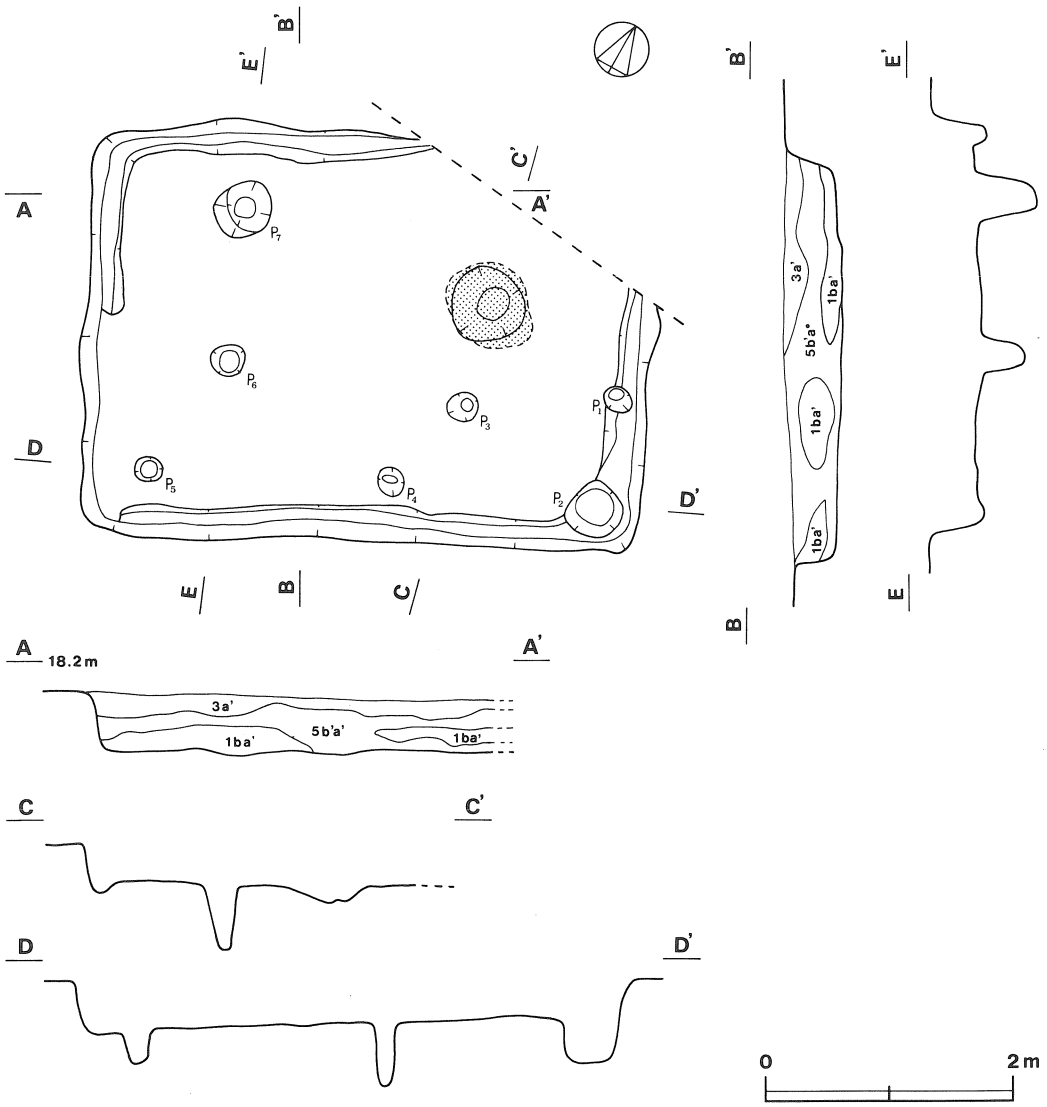
第38号住居跡（第154図）

本跡は$I1b_4$を中心に確認され,第37号住居跡の西側約２m，第22号住居跡の南側約8.8mに位置している。北コーナー部は道路にかかっている。

平面形は長軸4.60m・短軸3.30mの長方形を呈し，長軸方向はN－62°－Eを指している。壁はやや外傾して立ち上がり，壁高は約35cmである。南西壁の南半分を除いて各壁下には壁溝が周回しており，上幅約19cm・下幅約10cm・深さ約７cmである。床は平坦で堅く締まっている。ピットはP_1～P_7の７か所検出され，径は約25cmである。配置的に南に偏しており，主柱穴の可能性は薄い。東コーナー部に位置するP_2は，径約45cmの円形を呈し，深さ38cmで貯蔵穴とも考えられる。中央部から北東壁寄りに炉跡が検出され，平面形は径約60cmの円形を呈し，炉床は床を13cm掘り

凹めている。焼土の量は少なく炉床もあまり焼けていない。本跡の周囲は，耕作により攪乱を受けており，本跡の覆土も全体に攪乱され，ロームブロックを含む褐色土や黒褐色土が混じり合っている。

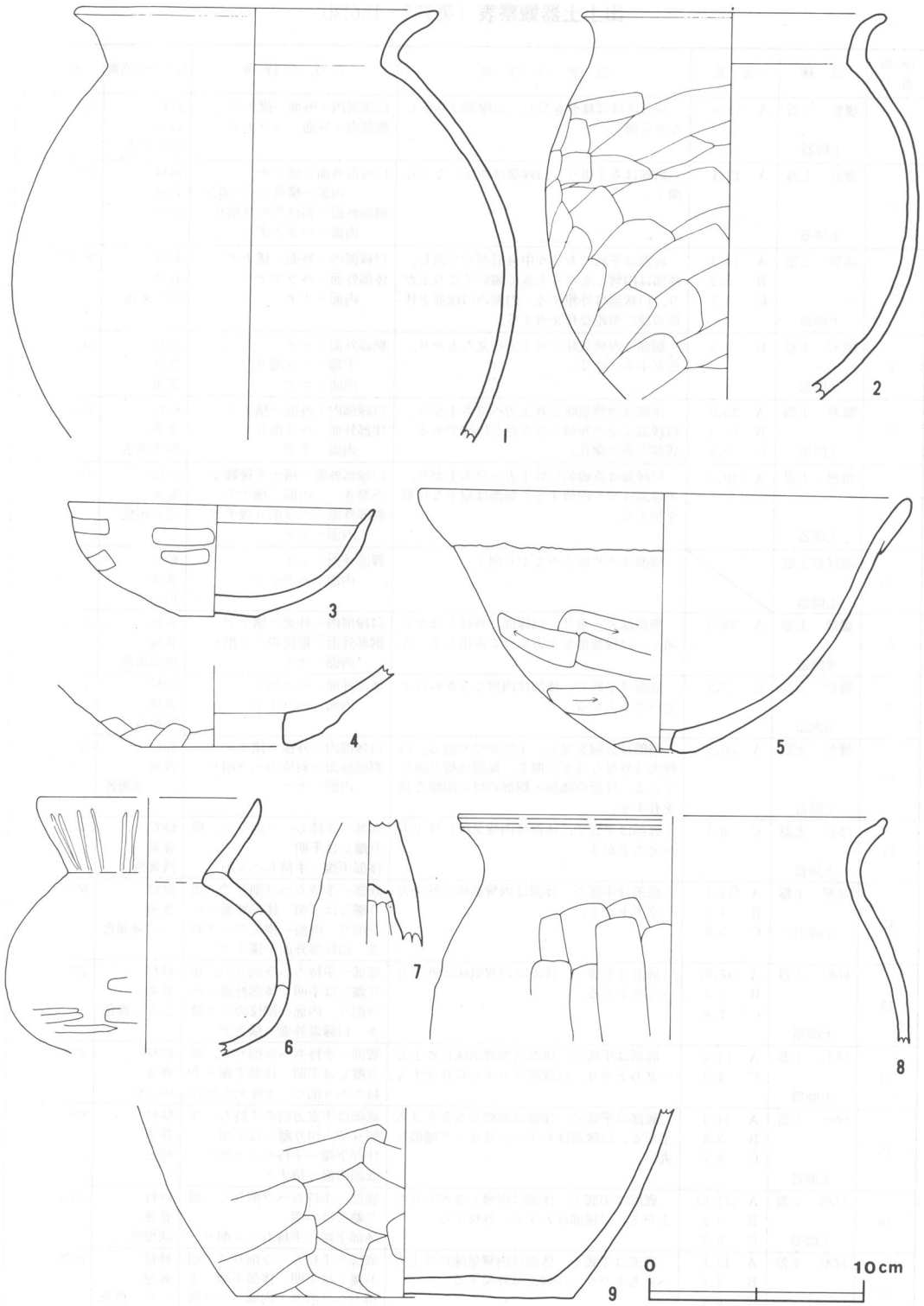
遺物は東コーナー部付近の床面から，土師器の埦形土器（第155図－３)や甑形土器(第155図－５）が出土し，そのほか甕形土器，坩形土器が出土している。このほかに本跡に伴う遺物ではないが，南西壁付近の攪乱された覆土上層から集中して，土師器の甕形土器，坏形土器，高台付坏形土器や須恵器片が出土している。これらの遺物は，本跡の遺物よりも新しい時期のものであり，本跡の上にあった別な遺構が，耕作による攪乱を受け遺物だけが残ったものと思われる。



第154図　第38号住居跡実測図

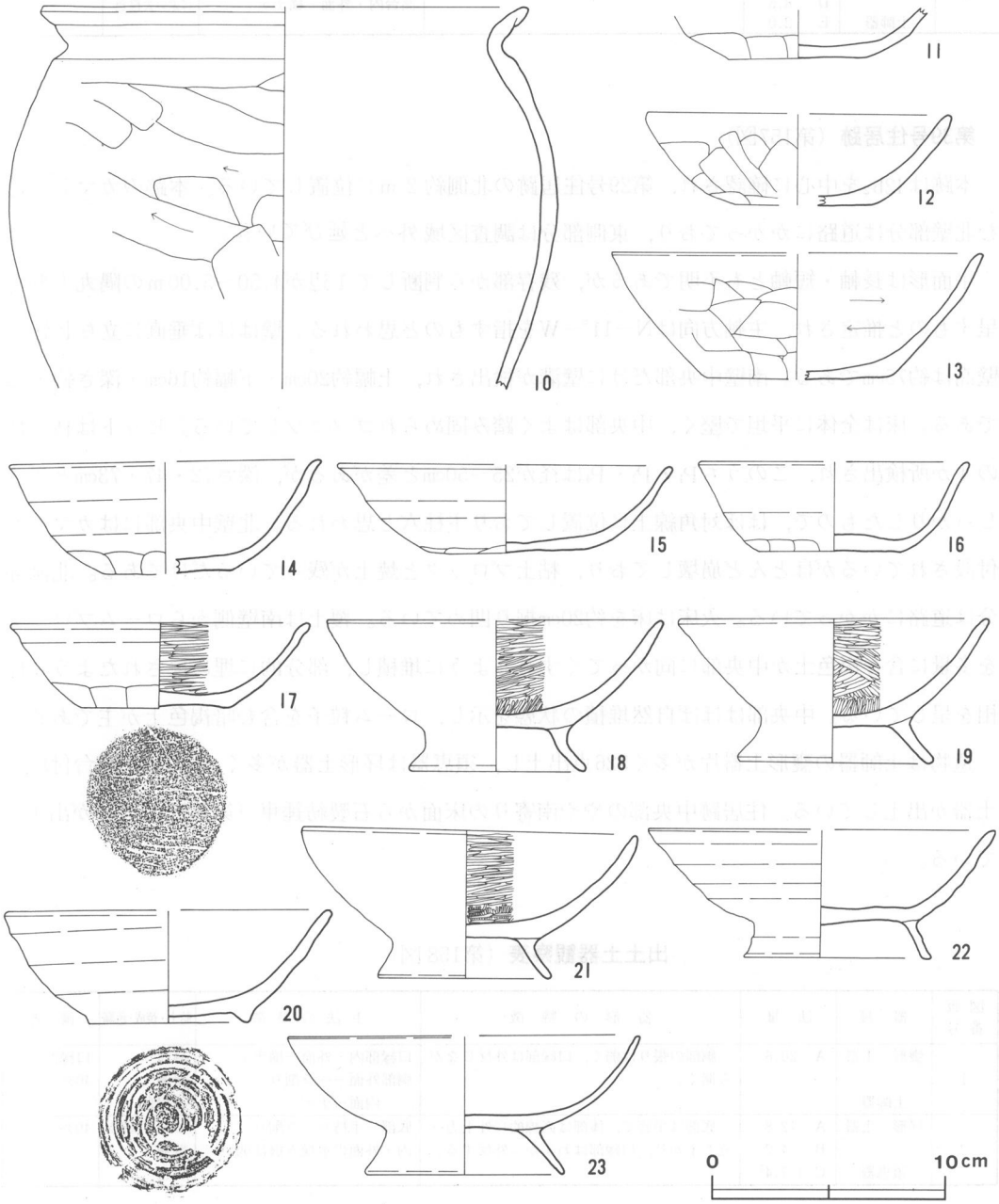
出土土器観察表（第155・156図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A 16.8	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	50%
2	甕形 土器 土師器	A 13.4	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら開く。	口縁部外面－横ナデ 内面－横位のヘラ削り 胴部外面－斜位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 赤褐色	80%
3	埦形 土器 土師器	A 14.3 B 5.2 C 3.7	底部は平底であるが中央部がやや凹む。体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラナデ 内面－ナデ	砂粒 普通 暗赤褐色	95%
4	甑形 土器 土師器	D 5.3	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，底部中央に穿孔。	胴部外面－ナデ 下端－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 黒色	10%
5	甑形 土器 土師器	A 23.0 B 12.0 C 2.8	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はやや外傾し折り返し口縁である。底部中央に穿孔。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	80%
6	坩形 土器 土師器	A (10.3)	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり，先端部はやや内彎する。胴部は扁平な球形を呈する。	口縁部外面－横ナデ後雑なヘラ磨き　内面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り後ナデ 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	15%
7	高坏形土器 土師器		脚部はやや膨らみながら開く。	脚部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	15%
8	甕形 土器 土師器	A 24.0	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら開く。口縁端部を上方につまみ出している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	20%
9	甕形 土器 須恵器	C 7.8	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 灰褐色	15%
10	甕形 土器 土師器	A 20.8	胴部は長胴を呈し，上位がやや張る。口縁部は外反しながら開き，端部は折り返している。外面の頸部と胴部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－斜位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい黄褐色	20%
11	坏形 土器 土師器	C 6.1	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 浅黄色	40%
12	坏形 土器 土師器	A (13.1) B 4.0 C 5.6	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部外面－ヘラ削り　内面－横位のヘラ磨き　口縁部外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	50%
13	坏形 土器 土師器	A (16.0) B 5.4 C 7.8	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部外面－ヘラ削り　内面－横位のヘラ磨き　口縁部外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	20%
14	坏形 土器 土師器	A 13.4 C 4.9	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部下端－手持ちヘラ削り　水挽き痕は弱い	砂粒 普通 灰白色	40%
15	坏形 土器 土師器	A 14.5 B 3.8 C 7.7	底部は平底で，体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反して端部は丸い。	底部は不定方向の手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り 底部内面－指ナデ	砂粒 普通 橙色	80%
16	坏形 土器 土師器	A (11.6) B 3.9 C 6.2	底部は平底で，体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明 体部下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 淡橙色	40%
17	坏形 土器 土師器	A 12.8 B 3.6 C 6.4	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部下端－手持ちヘラ削り　内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	80%
18	高台付 坏形土器 土師器	A 14.4 B 6.5 D 7.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのび端部は丸い。	体部内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	70%



第155図　第38号住居跡出土遺物実測図（1）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
19	高台付坏形土器 土師器	A 13.5 B 6.1 D (8.1) E 1.5	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのび端部は丸い。	体部外面ーヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面ー横ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
20	高台付坏形土器 土師器	A (14.0) B 4.8 D 6.9 E 0.5	体部はわずかに内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は短く三角形状を呈する。	底部ー回転ヘラ切り 高台は貼り付け　高台内・外面ー横ナデ 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 普通 浅黄橙色	70%



第156図　第38号住居跡出土遺物実測図（2）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
21	高台付坏形土器 土師器	A 14.5 B 6.3 D 7.4 E 1.8	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのび，端部は丸い。	体部内面ーヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面ー横ナデ	砂粒 普通 赤黒色	70%
22	高台付坏形土器 土師器	A (15.0) B 5.5 D 8.0 E 1.4	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのび，端部に面をなす。	高台は貼り付け 高台内・外面ー横ナデ 内・外面の水挽き痕はやや強い。	砂粒 普通 橙色	60%
23	高台付坏形土器 土師器	A (15.3) B 6.0 D 8.5 E 2.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	体部内面ーヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面ー横ナデ	砂粒 普通 にぶい黄橙色	40%

第39号住居跡（第157図）

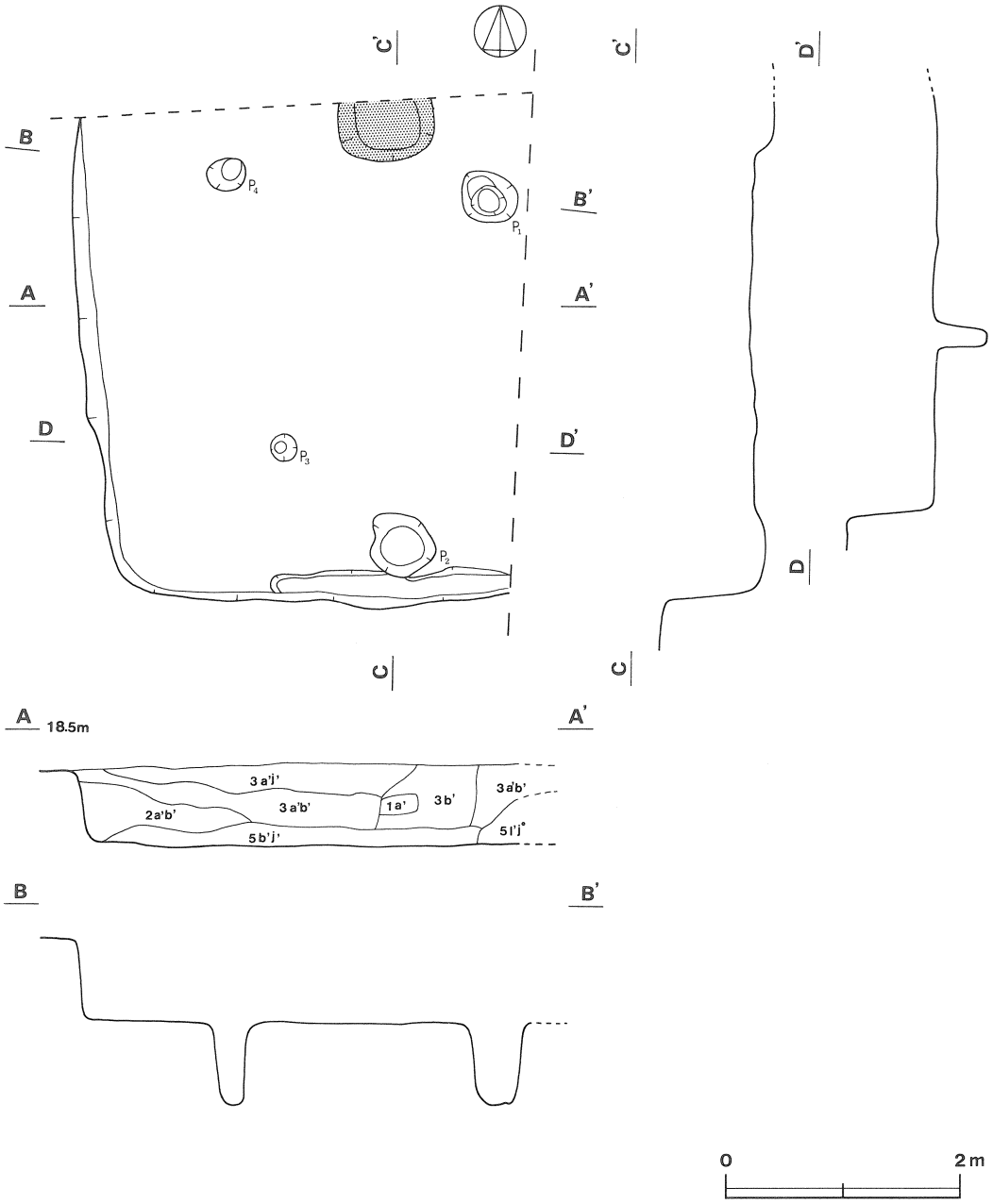
本跡はI2b$_2$を中心に確認され，第29号住居跡の北側約2mに位置している。本跡のカマドを含む北壁部分は道路にかかっており，東側部分は調査区域外へと延びている。

平面形は長軸・短軸とも不明であるが，残存部から判断して1辺が4.50～5.00mの隅丸方形を呈すものと推定され，主軸方向はN－11°－Wを指すものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約75cmである。南壁中央部だけに壁溝が検出され，上幅約20cm・下幅約16cm・深さ約8cmである。床は全体に平坦で堅く，中央部はよく踏み固められゴツゴツしている。ピットはP$_1$～P$_4$の4か所検出され，このうちP$_1$・P$_3$・P$_4$は径が25～50cmと差があるが，深さ72・47・73cmと深くしっかりしたもので，ほぼ対角線上に位置しており主柱穴と思われる。北壁中央部にはカマドが付設されているがほとんど崩壊しており，粘土ブロックと焼土が残っているだけである。北側部分は道路にかかっている。火床は床を約20cm掘り凹めている。覆土は南壁側からロームブロックを多量に含む褐色土が中央部に向かってくずれるように堆積し，部分的に埋め戻されたような様相を呈している。中央部はほぼ自然堆積の状態を示し，ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は土師器の甕形土器片が多く526点出土し，須恵器は坏形土器が多く，そのほか高台付坏形土器が出土している。住居跡中央部のやや南寄りの床面から石製紡錘車（第159図－15）が出土している。

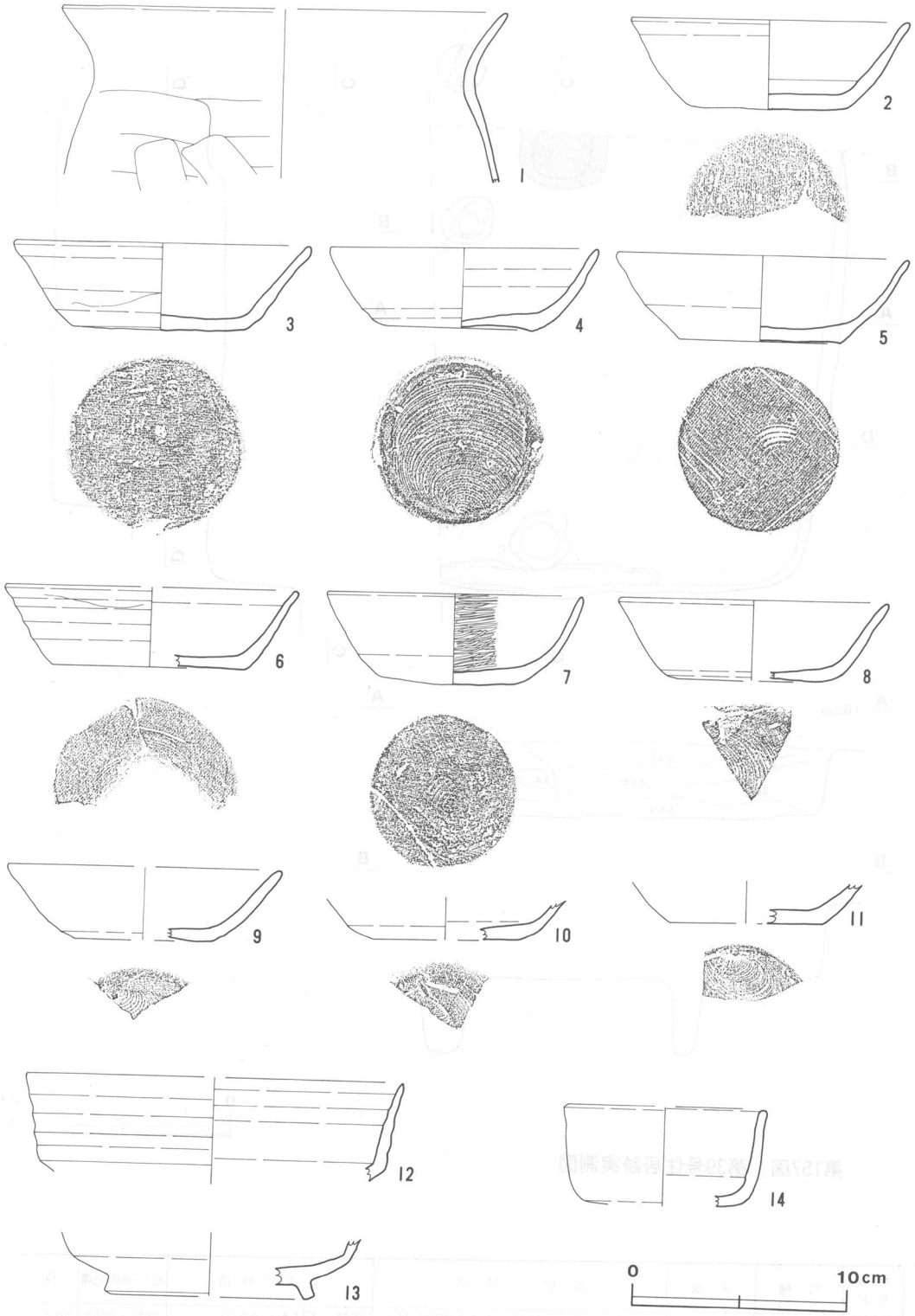
出土土器観察表（第158図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 20.6	胴部の張りは弱く，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面ー横ナデ 胴部外面ーヘラ削り 内面ーナデ	砂粒 普通 赤橙色	口縁部のみ 40%
2	坏形土器 須恵器	A 12.8 B 4.2 C (7.4)	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部ー手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 普通 灰色	40%



第157図　第39号住居跡実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	坏形土器 須恵器	A 13.6 B 4.1 C 8.0	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，端部は丸い。	底部－手持ちヘラ削り 体部下端－面取り状の手持ちヘラ削り　内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 雲母末 普通 灰色	80%



第158図　第39号住居跡出土遺物実測図（1）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
4	坏形 土器 須恵器	A 12.3 B 3.8 C 7.3	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後，外周部のみ手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 普通 灰色	85%
5	坏形 土器 須恵器	A (13.6) B 4.0 C 7.6	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部－回転糸切り後，中央部に糸切り痕を残し，手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	細砂 やや不良 黄灰色	45%
6	坏形 土器 須恵器	A (13.4) B 3.7 C (9.0)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	底部－回転糸切り後，手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 やや不良 黄灰色	30%
7	坏形 土器 土師器	A 11.8 B 4.25 C 7.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－切り離し不明で，手持ちヘラ削り 体部内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	95% 内面黒色処理
8	坏形 土器 須恵器	A (12.5) B 3.75 C (7.0)	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後，外周部のみ手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 やや不良 黄灰色	10%
9	坏形 土器 須恵器	A 12.4 B 3.4 C (6.4)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後，外周部は手持ちヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
10	坏形 土器 須恵器	C (7.0)	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後無調整 ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 普通 灰色	10%
11	坏形 土器 須恵器	C (7.1)	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－回転糸切り後無調整 ロクロ回転方向は右 内・外面－水挽き痕は弱い	砂粒・細砂 良好 灰色	10%
12	高台付 坏形土器 須恵器	A (17.5)	体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	底部外周部－回転ヘラ削り ロクロ回転方向は右 外面の水挽き痕はやや強い	砂粒・細砂 普通 灰白色	10%
13	高台付 坏形土器 須恵器	D (9.8)	底部は丸底気味で，高台は外下方へのびる。	器面は摩滅が激しく，調整痕不明 高台は貼り付け	砂粒・細砂 不良 灰色	10%
14	高台付 坏形土器 須恵器	A (9.3)	体部は内彎気味に上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外傾し，端部は丸い。	底部外周部－ヘラ削り 内・外面の水挽き痕は弱い	細砂 良好 褐灰色	15%

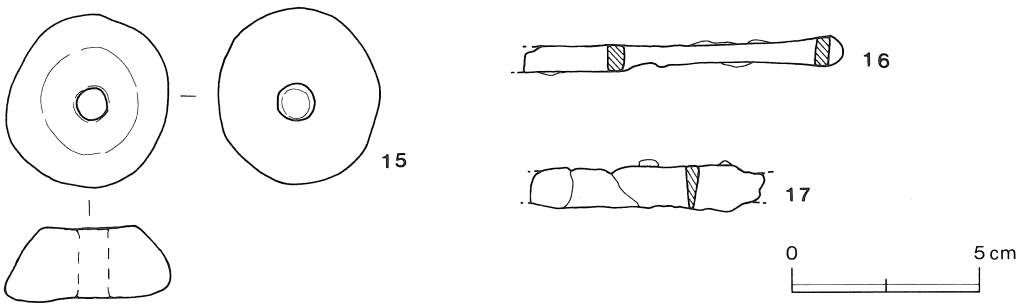
石製品（第159図－15）

15は紡錘車で完存品である。截頭円錐形を呈し，全面ともよく研磨されている。長径4.7cm・短径4.3cm・厚さ2.0cm・孔径8mm・重さ52.9gで，石質は流紋岩である。

鉄製品（第159図－16・17）

16は鏃の茎部である。断面は方形を呈し，現存長は8.5cmである。

17は刀子で両端部が欠損し，刃，棟の両側に区を有する。現存長は6.2cm・刃幅1.1cmである。



第159図　第39号住居跡出土遺物実測図（2）

第40号住居跡（第160図）

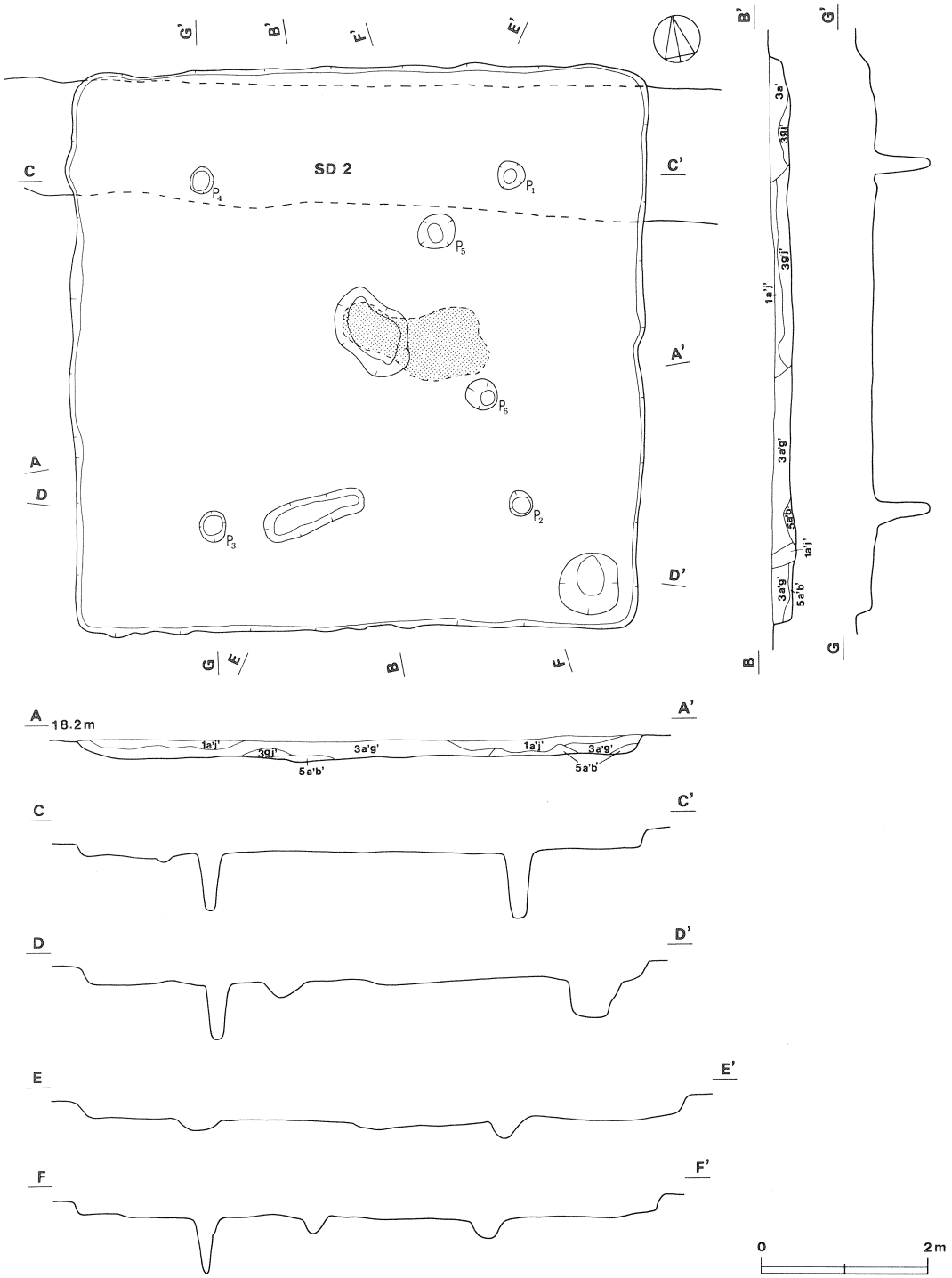
本跡は$I1h_9$を中心に確認され，第33号住居跡の東側約12m，第28号住居跡の南側4mに位置している。第2号溝と重複しており，本跡の北側部分が第2号溝によって切られていることから，本跡の方が古い。

平面形は長軸6.80m・短軸6.75mの方形を呈し，長軸方向N－12.5°－Eを指している。壁は良好でやや外傾して立ち上がり，壁高は15～20cmである。床は部分的に凹凸があるが，全体にほぼ平坦でよく締まって堅い。4本の主柱穴に囲まれた部分は特によく固められている。ピットはP_1～P_6の6か所検出されており，P_1～P_4はいずれも径35cm前後で深さ65～79cmと深く，ほぼ方形に配置されており主柱穴と思われる。炉跡は住居跡中央部に検出され，長径110cm・短径71cmの不整楕円形を呈している。炉床は床を8cmほど掘り凹め，焼けてブロック状を呈している。南東コーナーに貯蔵穴が検出され，平面形は径約75cmのほぼ円形を呈し，深さは46cmである。覆土は東側に一部攪乱が見られるが，ほぼ自然堆積の状態を示し，ローム粒子と焼土粒子をわずかに含む暗褐色土が大部分である。また，床面には焼土の広がりが多く見られ，炭化材が散布していることから火災を受けていると思われる。

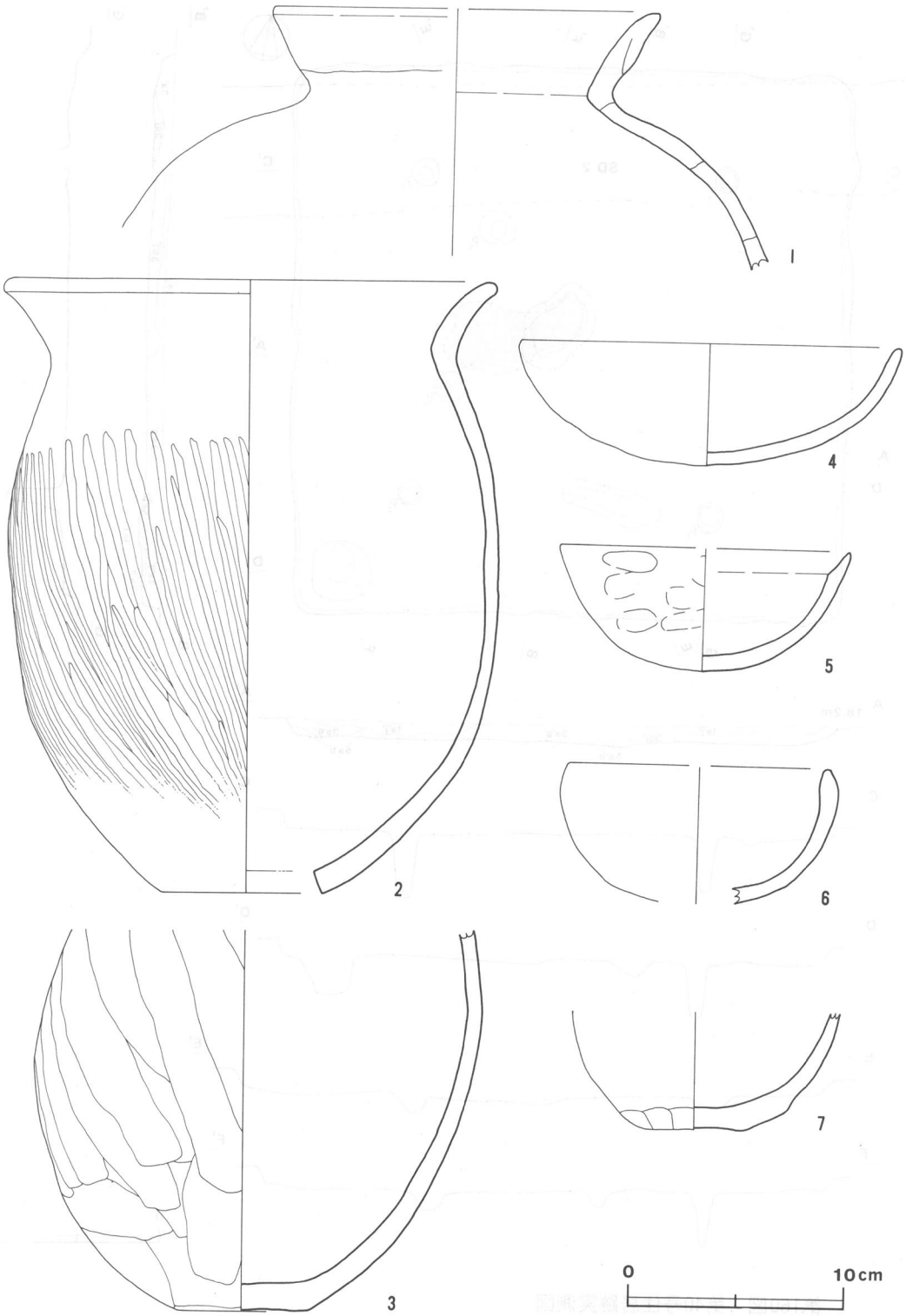
遺物はいずれも土師器で，貯蔵穴内から壺形土器（第161図－1），P_4の東側床面から坏形土器（第161図－4）が出土しているほか，埦形土器や甑形土器も出土している。

出土土器観察表（第161図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺形 土器 土師器	A (17.9)	口縁部は「く」の字状に開き，胴部は球形を呈する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
2	甑形 土器 土師器	A 22.3 B 28.3	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，中位から内傾し，楕円形を呈する。口縁部は外反しながら開く。底部は正円状に抜ける。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ後雑な斜位のヘラ磨き　内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	50%
3	甕形 土器 土師器	C 7.4	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 褐色	35%
4	坏形 土器 土師器	A 17.8 B 5.7	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，弧状を呈しそのまま口縁部へ至る。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
5	埦形 土器 土師器	A (13.6) B 5.2	体部は半球状を呈し，内面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラナデ 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	30%
6	埦形 土器 土師器	A (12.2)	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 灰褐色	30%
7	甕形 土器 土師器	C 4.5	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ナデ 下端－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%



第160図　第40号住居跡実測図

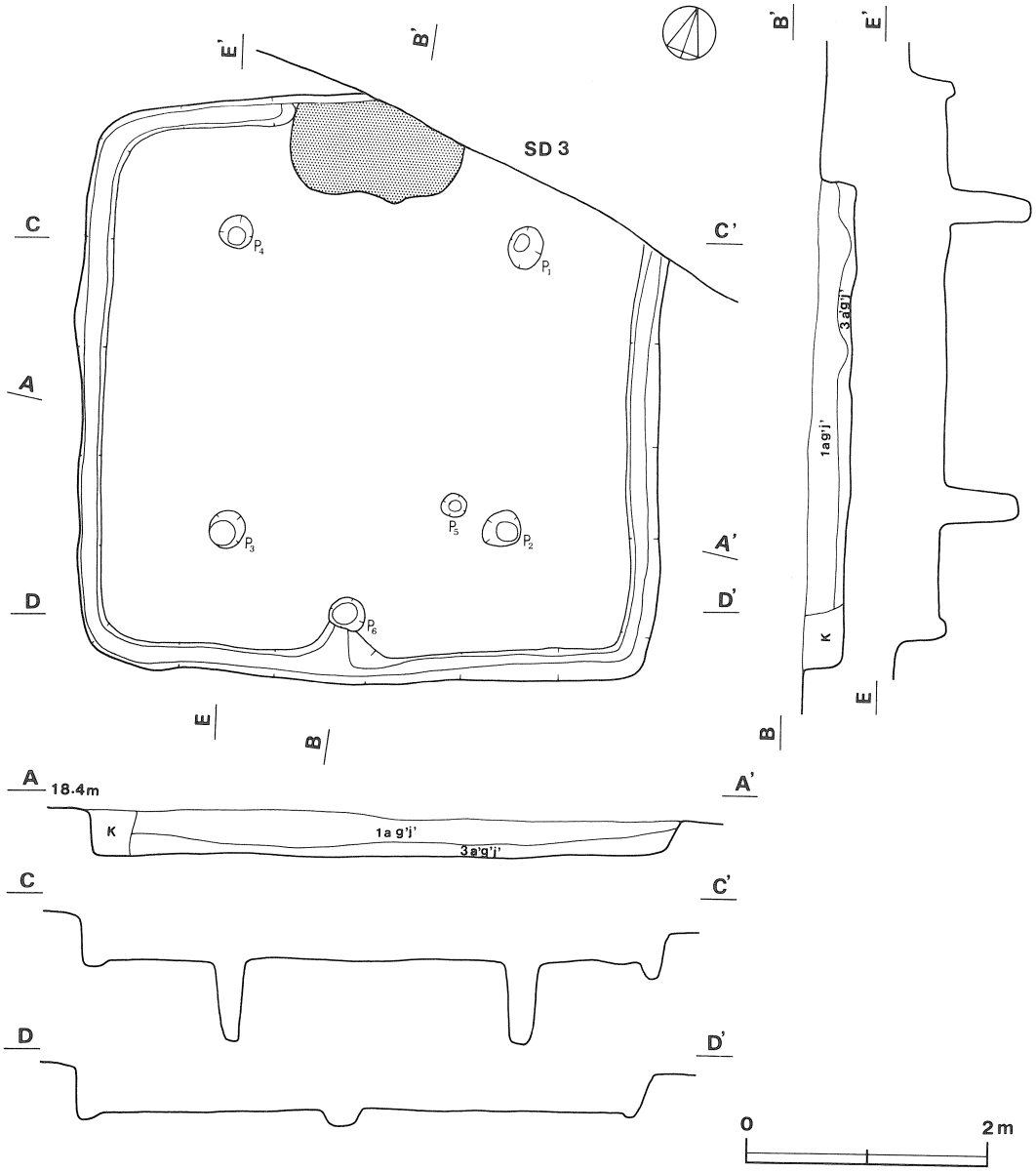


第161図　第40号住居跡出土遺物実測図

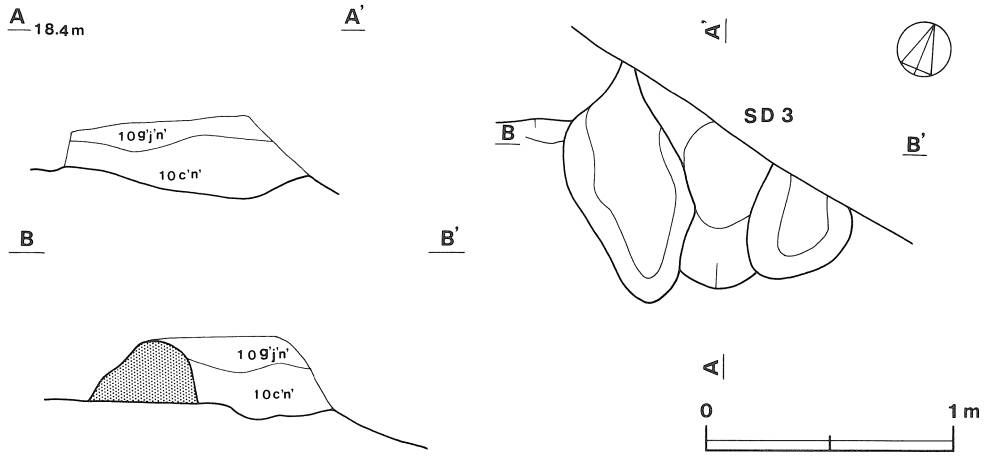
第41号住居跡（第162・163図）

本跡はJ2e₂を中心に確認され，第45号住居跡の北側約４ｍ，第35号住居跡の南側８ｍに位置している。本跡は第３号溝と重複しており，第３号溝によって切られていることから，本跡の方が古い。

平面形は長軸4.85ｍ・短軸4.75ｍの方形を呈し，主軸方向はN－19°－Wを指している。壁は遺存状態が良好でほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約35cmである。各壁下には壁溝が全周しており，上幅約18cm・下幅約12cm・深さ約６cmである。床面は平坦で壁際を除いてよく踏み固められ硬化



第162図　第41号住居跡実測図



第163図　第41号住居跡カマド実測図

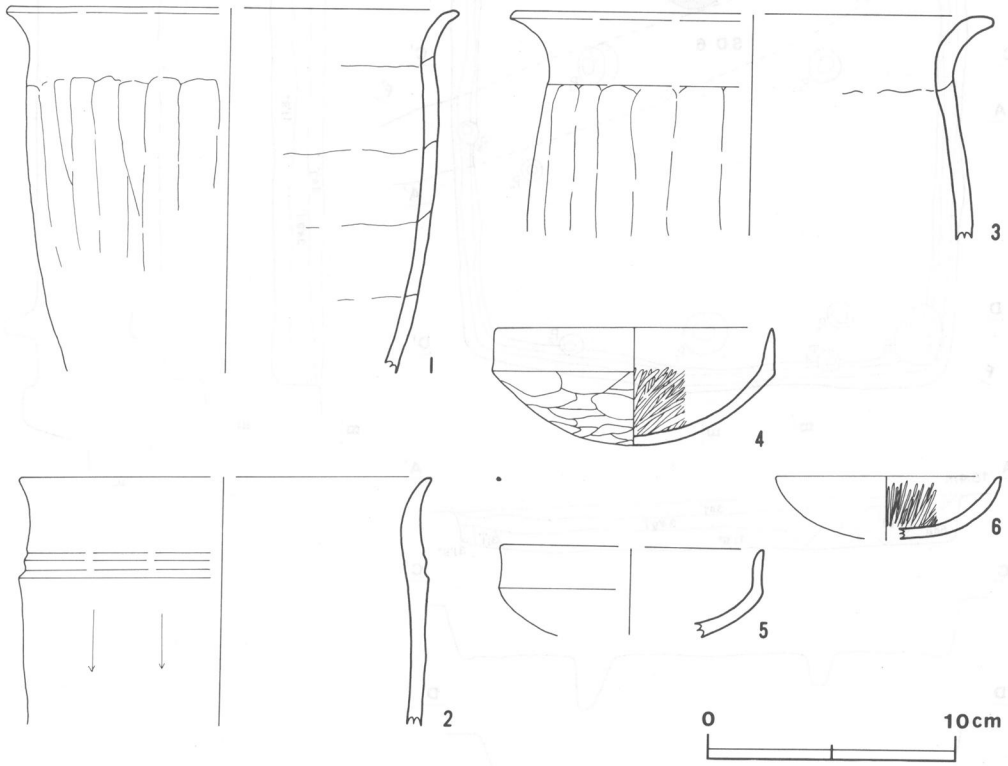
している。ピットはP_1～P_6の6か所検出されており，P_1～P_4は対角線上に配置され，いずれも径25～30cm・深さ56～71cmとしっかりしたものであり主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，第3号溝によって右袖から奥壁にかけて切られており，遺存状態はよくない。幅105cmで，火床は床を10cm掘り凹めている。覆土は西壁と南壁際に攪乱が見られるが，自然堆積の様相を呈し2層に分かれている。下層は焼土粒子・炭化物を含む暗褐色土，上層はローム粒子を含む黒褐色土が堆積している。また，床面には中央部から南西コーナー部にかけて，焼土の広がりが数か所認められ，炭化材が散乱していることから火災を受けていると推定される。

遺物は少なく，ほとんど土師器である。甕形土器がカマド内（第164図－1）や南西コーナー部付近（第164図－2）の覆土から出土し，坏形土器（第164図－6）が南壁中央部壁下の覆土から出土している。

出土土器観察表（第164図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A (18.0)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	20%
2	甕形土器 土師器	A (16.6)	胴部はほぼ円筒形を呈し，口縁部は外反しながらわずかに開く。頸部に2本の沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒・小礫 普通 にぶい橙色	20%
3	甕形土器 土師器	A (19.2)	胴部はわずかに張り，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	10%
4	坏形土器 土師器	A 11.2 B 4.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 良好 にぶい赤褐色	60%
5	坏形土器 土師器	A 10.6	体部は内彎しながら大きく開き，口縁部は外反気味に直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	30%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
6	坏形 土器 土師器	A 9.1	体部は内彎しながら大きく開く。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	80%

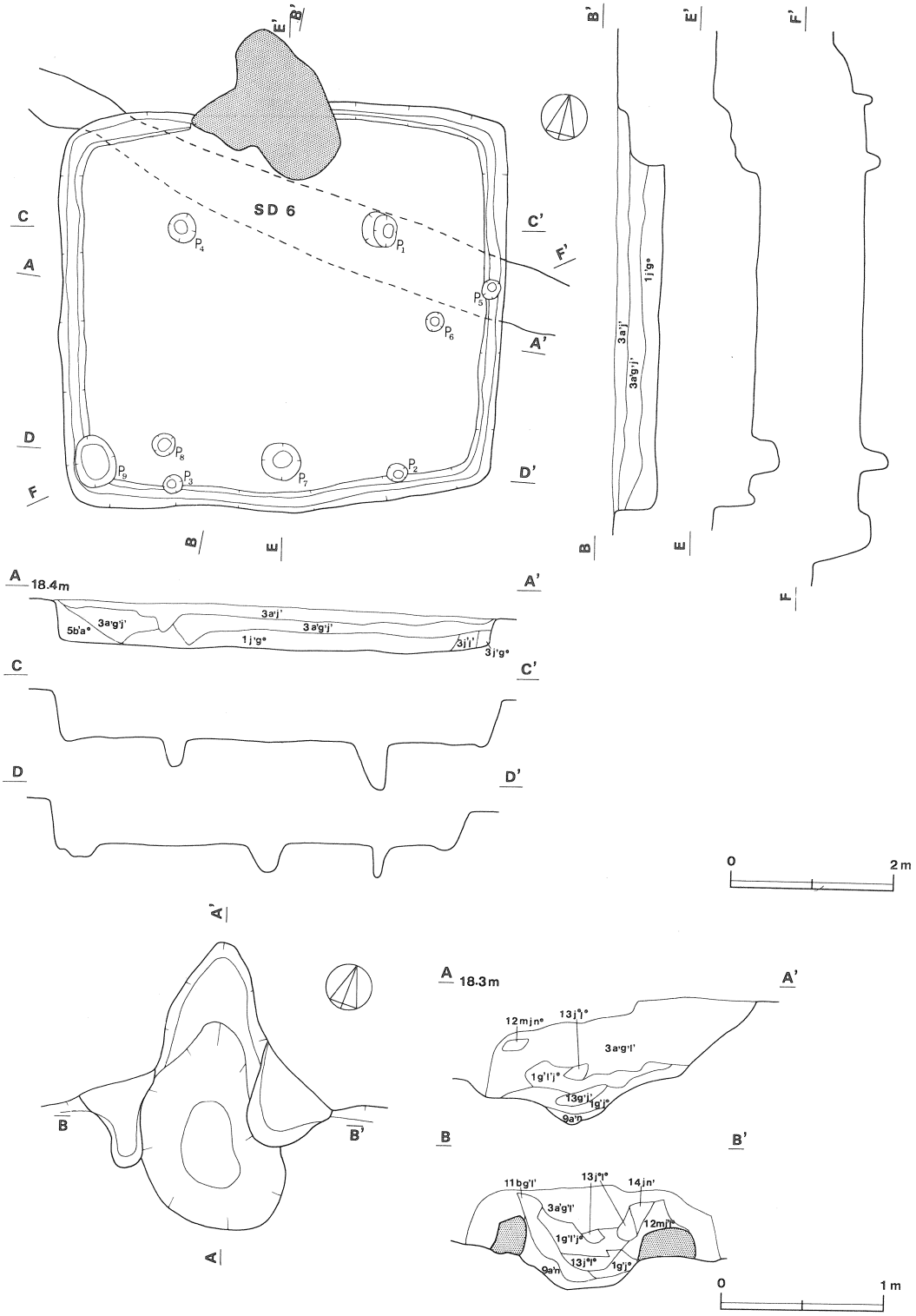


第164図　第41号住居跡出土遺物実測図

第42号住居跡（第165図）

本跡はK2a3を中心に確認され，第43号住居跡の南側約５ｍに位置している。第６号溝と重複しており，第６号溝が本跡の東壁中央部から北西コーナー部にかけて切り込んでいることから，本跡の方が古い。

平面形は長軸5.40ｍ・短軸4.95ｍの方形を呈し，主軸方向はN－14.5°－Wを指している。壁は遺存状態が良好で，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は45～50cmである。床は平坦で全体によく締まっており，カマド前から南壁中央部にかけてはよく踏み固められている。P_7の周囲は３～４cm床面が高くなっている。ピットはP_1～P_9の９か所検出されている。P_1・P_2とP_3・P_4は主軸とほぼ対称に配置され，径25～45cm・深さ37～58cmとしっかりしたものであり主柱穴と思われる。カマドは北壁中央部に付設されているが，袖部がわずかに残るだけで大部分崩壊している。長さ175cm・幅145cmで北壁を約90cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を23cm楕円形に



第165図　第42号住居跡・カマド実測図

掘り凹め，内部には多量の焼土が堆積している。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し，３層に分かれる。上層はローム粒子を含む暗褐色土，中層はローム粒子や焼土粒子をわずかに含む暗褐色土，下層は焼土粒子や炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積している。床面には柱状の炭化材と焼土が散乱しており，本跡は火災を受けたものと推定される。

遺物は土師器の甕形土器片が多く，約400点出土している。南東コーナー部寄りの床面から須恵器の甕形土器（第166図－１），P_3の東側の覆土から鉄鏃（第167図－11），中央部床面から刀子（第167図－12）が出土している。

出土土器観察表（第166・167図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 須恵器	A（26.1）	体部は大きく張り，口縁部は内彎しながら開き，口縁外端部に面をなす。	口頸部内・外面－横ナデ 体部外面－同心円文の叩き 内面－ナデ	砂粒・細砂 普通 灰色	30%
2	甕形土器 須恵器	A 19.5 B 33.0 C 16.0	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位から内傾する。頸部は外反気味に開きそのまま口縁部へ至る。口縁端部は丸い。	口頸部内・外面－横ナデ 体部外面－横位の平行叩き 下端－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	25%
3	坏形土器 須恵器	A 12.3 B 3.9 C 7.5	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－丁寧なナデで，切り離しは不明　ロクロ回転方向は右　内・外面の水挽き痕は強い	砂粒・細砂 良好 灰色	90%
4	坏形土器 須恵器	A 13.1 B 4.8 C 7.8	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ切り後ナデ調整 内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 良好 灰色	100%
5	坏形土器 須恵器	C（8.5）	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がる。	底部－回転ヘラ削りで，切り離しは不明	細砂・雲母 やや不良 灰色	15%　底部にヘラ記号「#」
6	坏形土器 須恵器	A 11.8 B 3.5 C 7.0	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	底部－回転ヘラ切り後中央部は一方向，外周部－不定方向の手持ちヘラ削り	砂粒・細粒 やや不良 灰白色	60%
7	坏形土器 土師器	A 12.8 B 3.8	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　内・外面の水挽き痕は弱い	砂粒 普通 灰白色	40%
8	坏形土器 土師器	A 16.2 C 11.0	底部は平底で，体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。	底部－手持ちヘラ削りで，切り離しは不明　体部内・外面－雑なヘラ磨き　下端－手持ちヘラ削り	砂粒 普通 明赤褐色	25%

石製品（第167図－９・10）

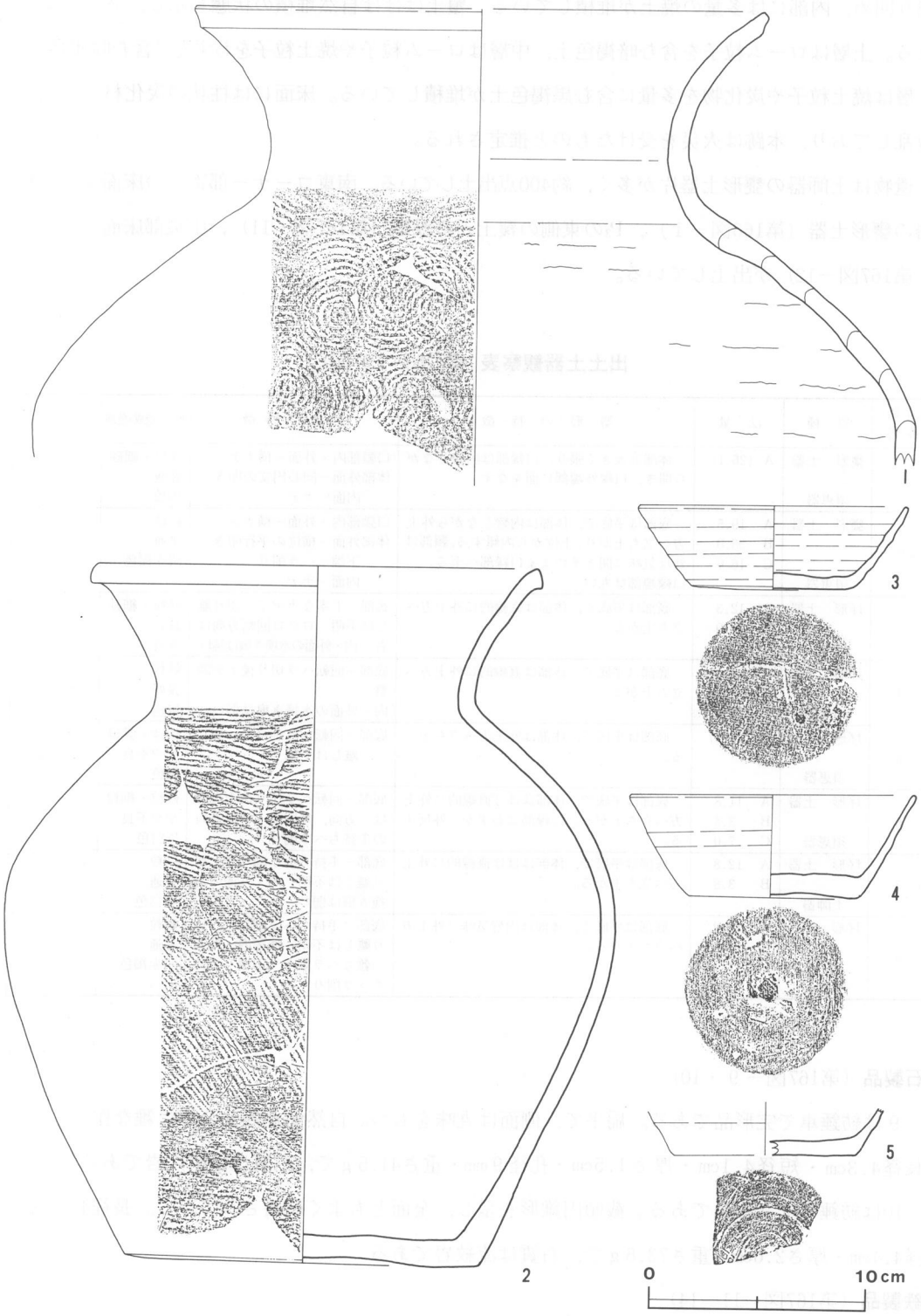
９は紡錘車で完形品である。扁平で，側面は丸味をもつ。自然面が残り全体に雑な作りである。長径4.3cm・短径4.1cm・厚さ1.5cm・孔径９mm・重さ41.5ｇで，石質は滑石片岩である。

10は紡錘車で完形品である。截頭円錐形を呈し，全面ともよく研磨されている。長径4.5cm，短径4.4cm・厚さ2.6cm・重さ73.6ｇで，石質は流紋岩である。

鉄製品（第167図－11～14）

11は鏃で茎部が欠損する。穂は三角形で，断面はレンズ状を呈する。現存長は7.3cmである。

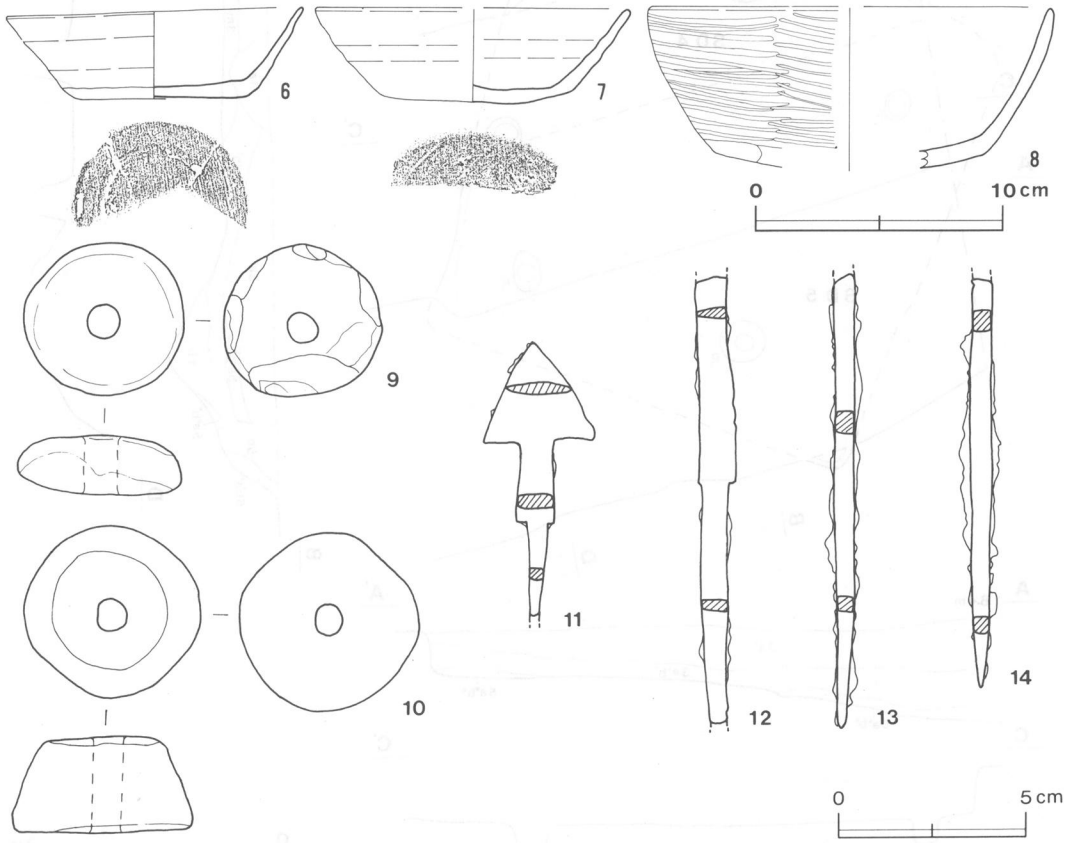
12は刀子で両端部が欠損する。刃・棟の両側に区を有する。現存長は11.9cm・刃幅は0.9cmで



第166図　第42号住居跡出土遺物実測図（1）

ある。

13・14は棒状の鉄製品で，用途は不明である。いずれも先端部が尖(とが)り，断面は方形を呈する。現存長は13が12cm，14が10.8cmである。

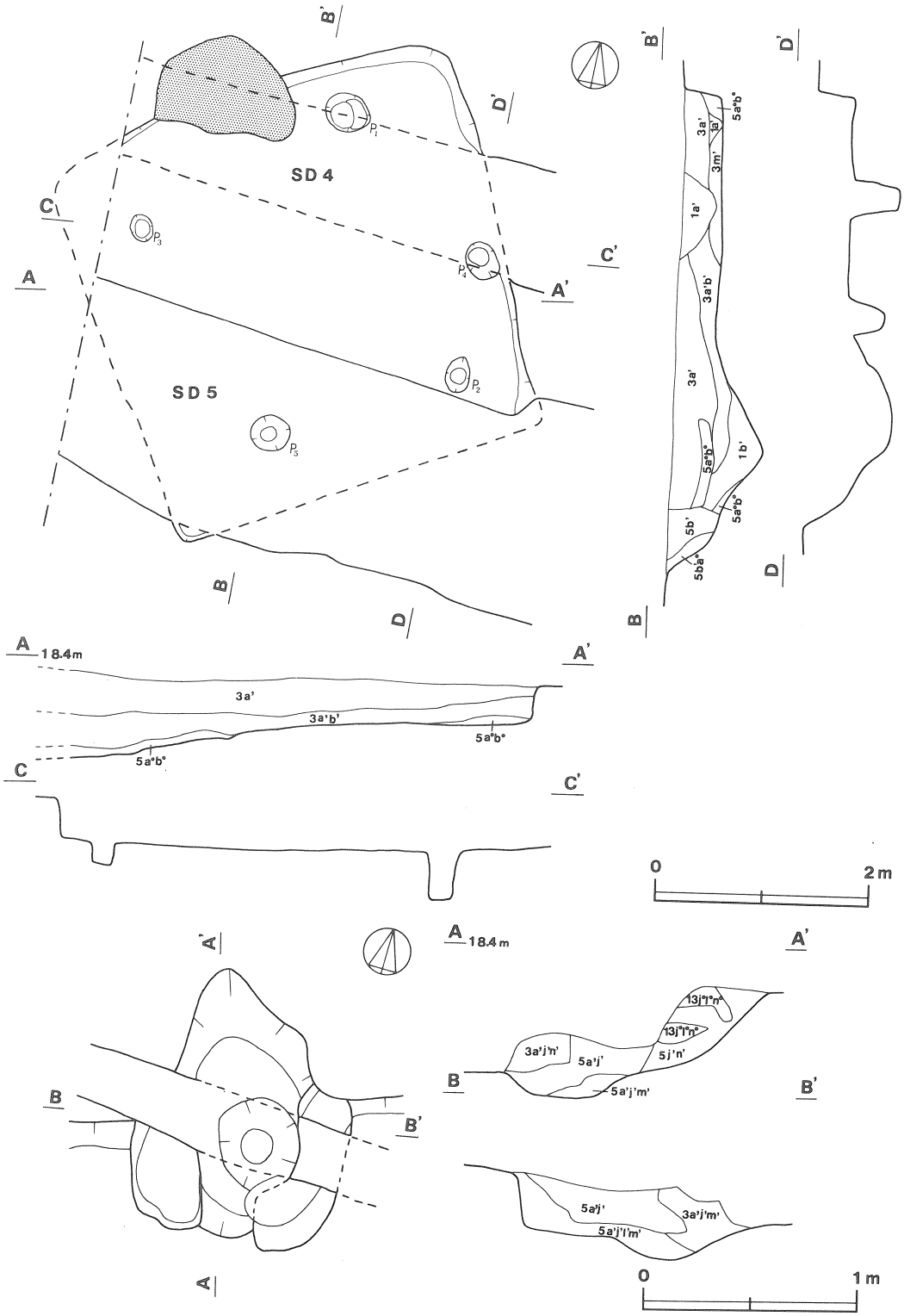


第167図　第42号住居跡出土遺物実測図（2）

第43号住居跡（第168図）

本跡は$J2i_2$を中心に確認され，第45号住居跡の南西側約3.5mに位置している。第4・5号溝と重複している。第4号溝によって北東壁からカマドにかけて切られ，第5号溝によって南側部分を切られていることから，本跡の方が古い。西コーナー部は土取りによって消滅している。

平面形は推定で，1辺が3.50m～4.00mの方形を呈するものと思われ，主軸方向は約N－30°－Wを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約35cmである。床面は平坦でよく踏み固められ硬化している。ピットはP_1～P_5の5か所検出されている。P_1はやや北寄りであるがP_1～P_3は方形に配されたうちの3か所で主柱穴かと思われる。南側に位置するもう1か所は，第5号溝によって消滅していると考えられる。P_5は第5号溝の底面を掘り込んでおり，本跡に伴うものではないと思われる。カマドは北西壁中央部に付設されていたが，第4号溝によって中央部を幅30cm



第168図　第43号住居跡・カマド実測図

ほど東西に切られており，焼土もわずかに残っているだけである。長さ130cm・幅105cmで北西壁を約60cm切り込んでいる。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を13cm掘り凹めている。覆土は第４・５号溝による攪乱も見られるが，ほぼ自然堆積の状態を示しておりローム粒子を含む暗褐色土が主である。

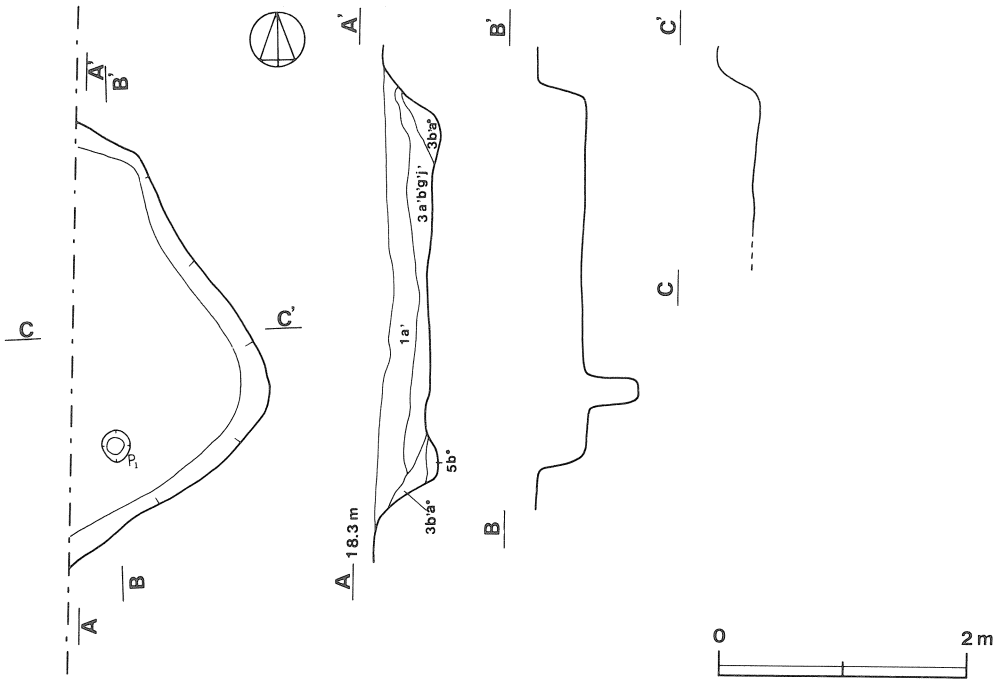
遺物は少なく，土師器や須恵器の甕形土器片，坏形土器片が出土している。

第44号住居跡（第169図）

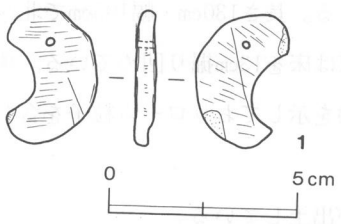
本跡は$K2f_1$を中心に確認され，第７号溝の南側約11.5m に位置している。東コーナー部周辺以外は土取りによって消滅しているため，平面形と規模は不明である。

壁は外傾して立ち上がり，壁高は35～40cmである。床はほぼ平坦であるが，それほど堅くない。ピットは南東壁寄りに１か所検出され，径24cm・深さ42cmである。遺構の大部分が消滅しているため，カマドも炉跡も検出されていない。覆土は自然堆積の状態を示し，２層に分かれている。上層はローム粒子を含む黒褐色土，下層は炭化物や焼土粒子をわずかに含む暗褐色土となっている。

遺物は土師器と須恵器の坏形土器片が，ごく少量出土しているほか，東コーナー部付近の床面から，石製模造品（勾玉）（第170図－１）が出土している。



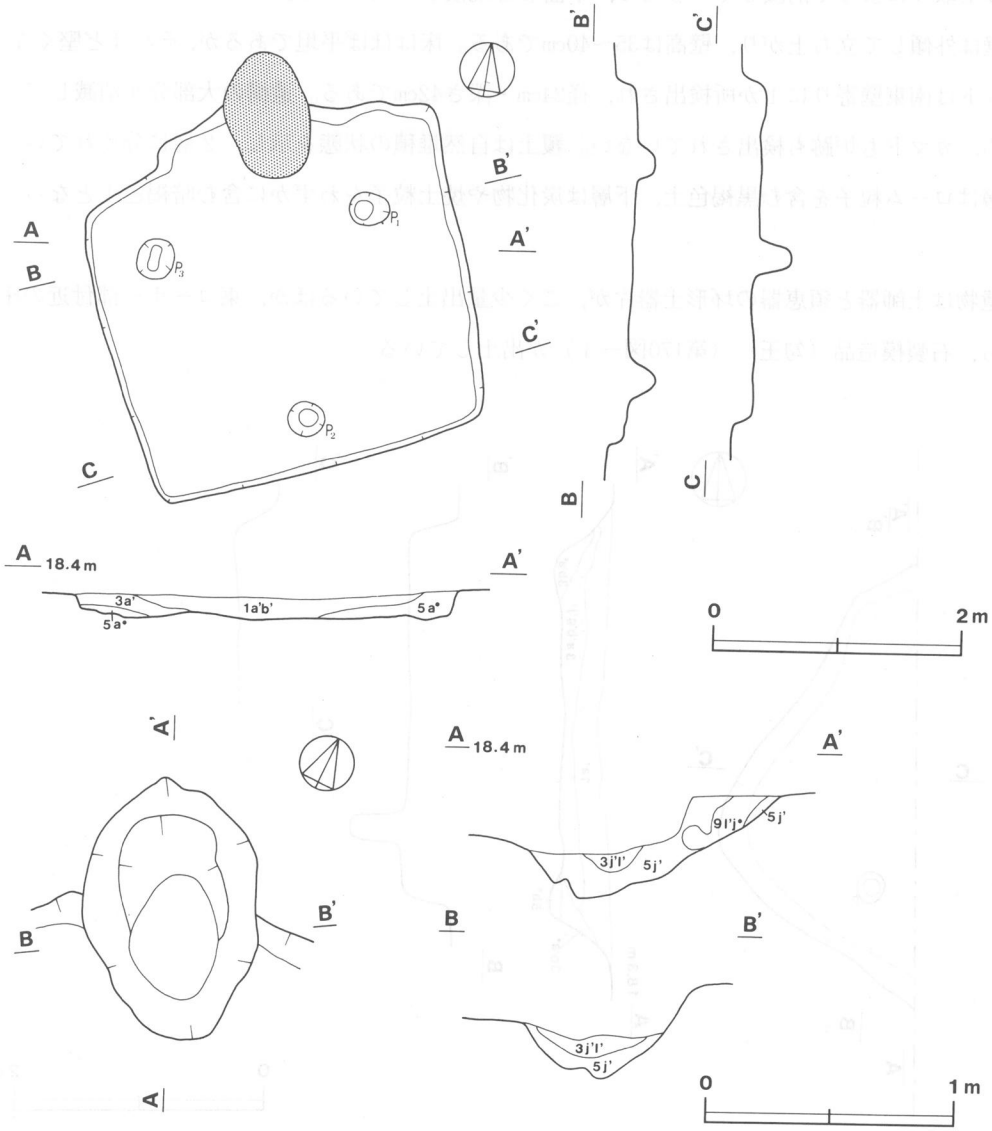
第169図　第44号住居跡実測図



石製品（第170図－1）

1は勾玉の模造品である。板状を呈し，全面研磨されているが粗製である。長さ3.6cm・幅2.4cm・腹部幅1.7cm・厚さ0.5cm・孔径2mmで，石質は滑石である。

第170図　第44号住居跡出土遺物実測図



第171図　第45号住居跡・カマド実測図

第45号住居跡（第171図）

本跡は$J2g_2$を中心に確認され，第41号住居跡の南側約４ｍ，第４号溝の北側約４ｍに位置している。

平面形は長軸2.95ｍ・短軸2.75ｍの方形を呈し，主軸方向はN－22.5°－Wを指している。壁は外傾して立ち上がるが，西壁とカマドの西側は攪乱を受けており，立ち上がりはよくない。壁高は15～20cmである。床はやや凹凸があるがよく踏み固められて硬化している。ピットはP_1～P_3の３か所検出され，いずれも径約30cm・深さ18～30cmである。P_1とP_3は主軸から左右ほぼ等間隔に位置し，また，P_2は南壁中央部でほぼ主軸上に配置されており，主柱穴の可能性もある。カマドは北壁中央部に付設されているが攪乱を受けており，焼土が残っているだけで規模は不明である。火床は床を24cm掘り凹めている。覆土は，西壁からカマドにかけて攪乱を受けているほかは自然堆積の状態を示し，ローム粒子を含む黒褐色土が主でよく締まっている。

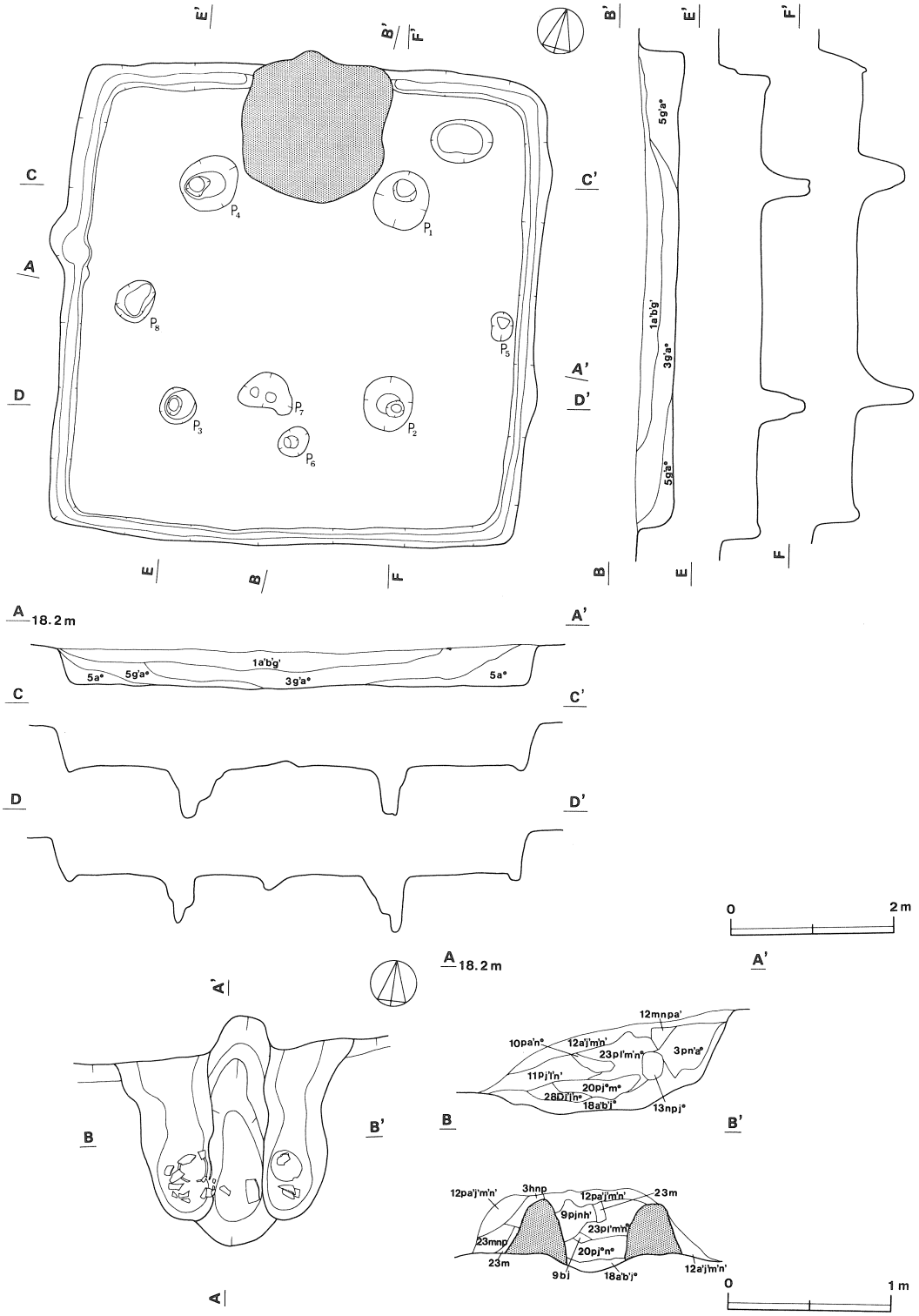
遺物は土師器の甕形土器片と，須恵器の坏・甕形土器片がごく少量出土している。

第46号住居跡（第172・173図）

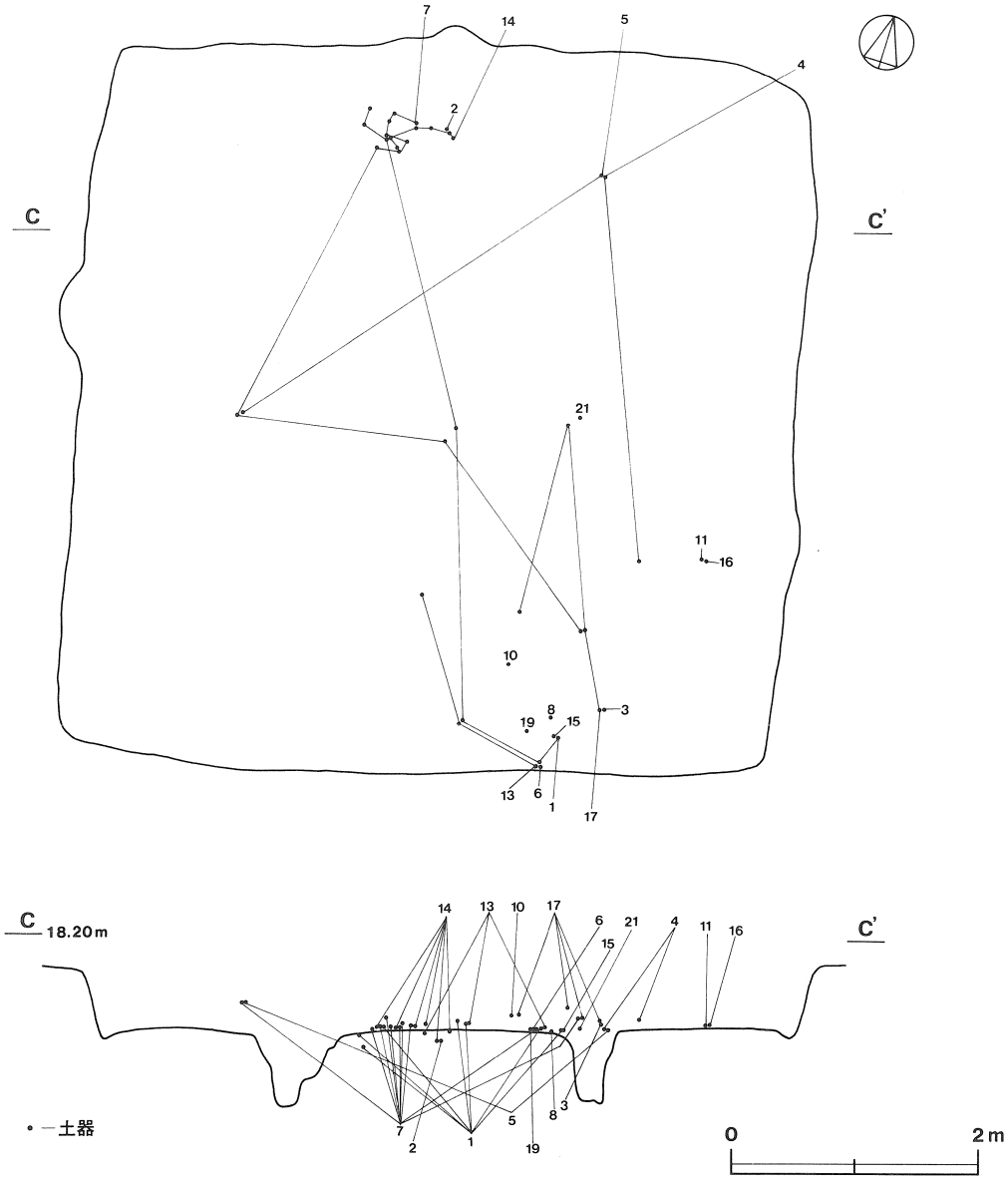
本跡は$K1d_6$を中心に確認され，第48号住居跡の西側約４ｍに位置している。

平面形は長軸5.85ｍ・短軸5.80ｍの方形を呈し，主軸方向はN－12°－Wを指している。壁は明瞭に検出され，遺存状態もよくほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は約50cmである。各壁下には壁溝が全周し，上幅約20cm・下幅約11cm・深さ約６cmである。床はほぼ平坦でやや締まっている。ピットはP_1～P_8の８か所検出され，P_1～P_4は径45～70cm・深さ57～60cmと深くしっかりしており，対角線上に配置されていることから主柱穴と思われる。貯蔵穴は北東コーナー部に検出され，平面形は長径77cm・短径50cmの楕円形で，断面はU字形を呈し深さは48cmである。北壁中央部にはカマドが付設されており，遺存状態は比較的良好である。長さ140cm・幅110cm・焚口幅32cmで，北壁を20cmほど切り込んでいる。天井部は崩落しているが，両袖はほぼ残っている。砂を多量に含む粘土で構築しており，両袖の先端に近い部分に長胴甕を倒立させて埋め込み，焚口部の補強として使用している。天井部の補強には，左右両袖に倒立させた長胴甕の底部と底部を２個の長胴甕で横位につなぎ，それを埋め込んでいる。奥壁は約60cmで急に立ち上がり，火床は床を10cmほど掘り凹め内部には焼土や灰が充満している。覆土は自然堆積の状態を呈しており，壁際にはローム粒子を含む褐色土の三角堆積が見られ，中央部では上層に黒褐色土，下層に暗褐色土が堆積している。

遺物の量は多く，大部分が土師器である。特に坏形土器が多く，そのほか甕形土器，鉢形土器，甑形土器が出土している。カマド左袖内部には第174図－１，右袖内部には第174図－2が倒立して出土し，第175図－14と第175図－７は天井部に使用されたもので，崩落してつぶれた状態で出土している。



第172図　第46号住居跡・カマド実測図

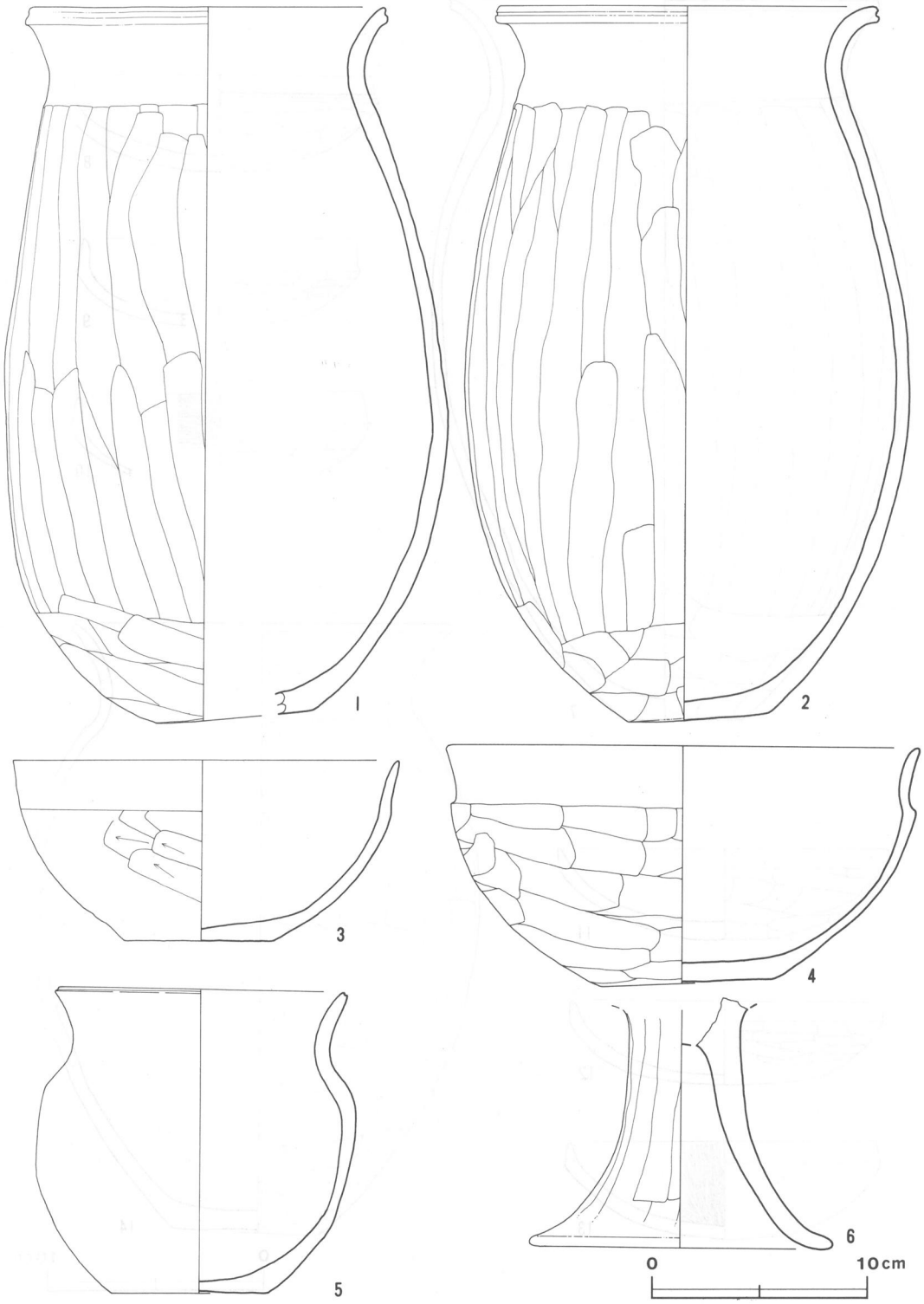


第173図　第46号住居跡遺物出土状態図

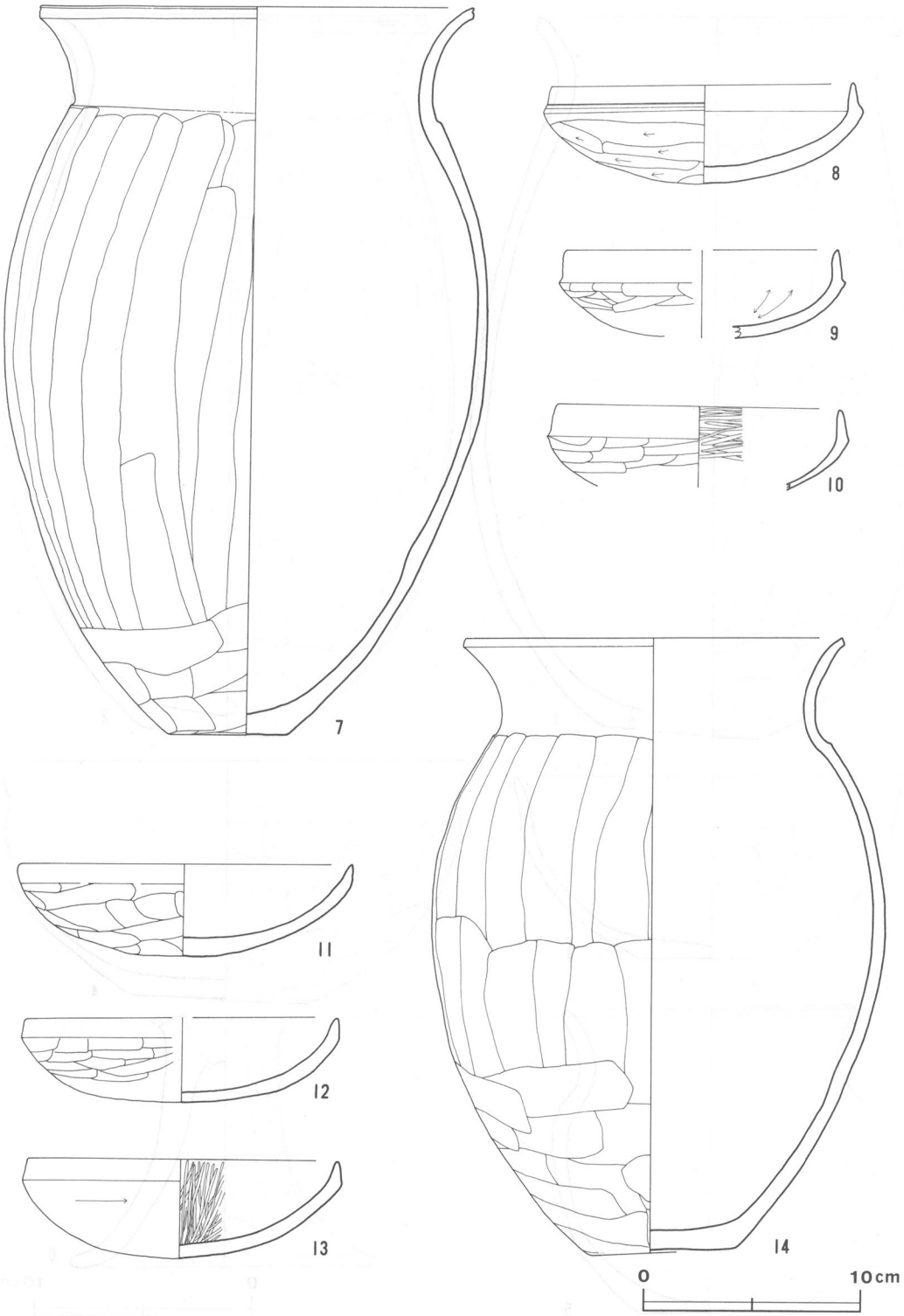
出土土器観察表（第174～176図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器	A　16.4 B　33.0 C　8.1	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，下ぶくれである。口縁部は外反しながら開き，端部は浅い沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 橙色	95%
2	甕形　土器 土師器	A　17.6 B　33.0 C　7.0	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，下ぶくれ気味である。口縁部は外反しながら開き，端部に浅い沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	90%

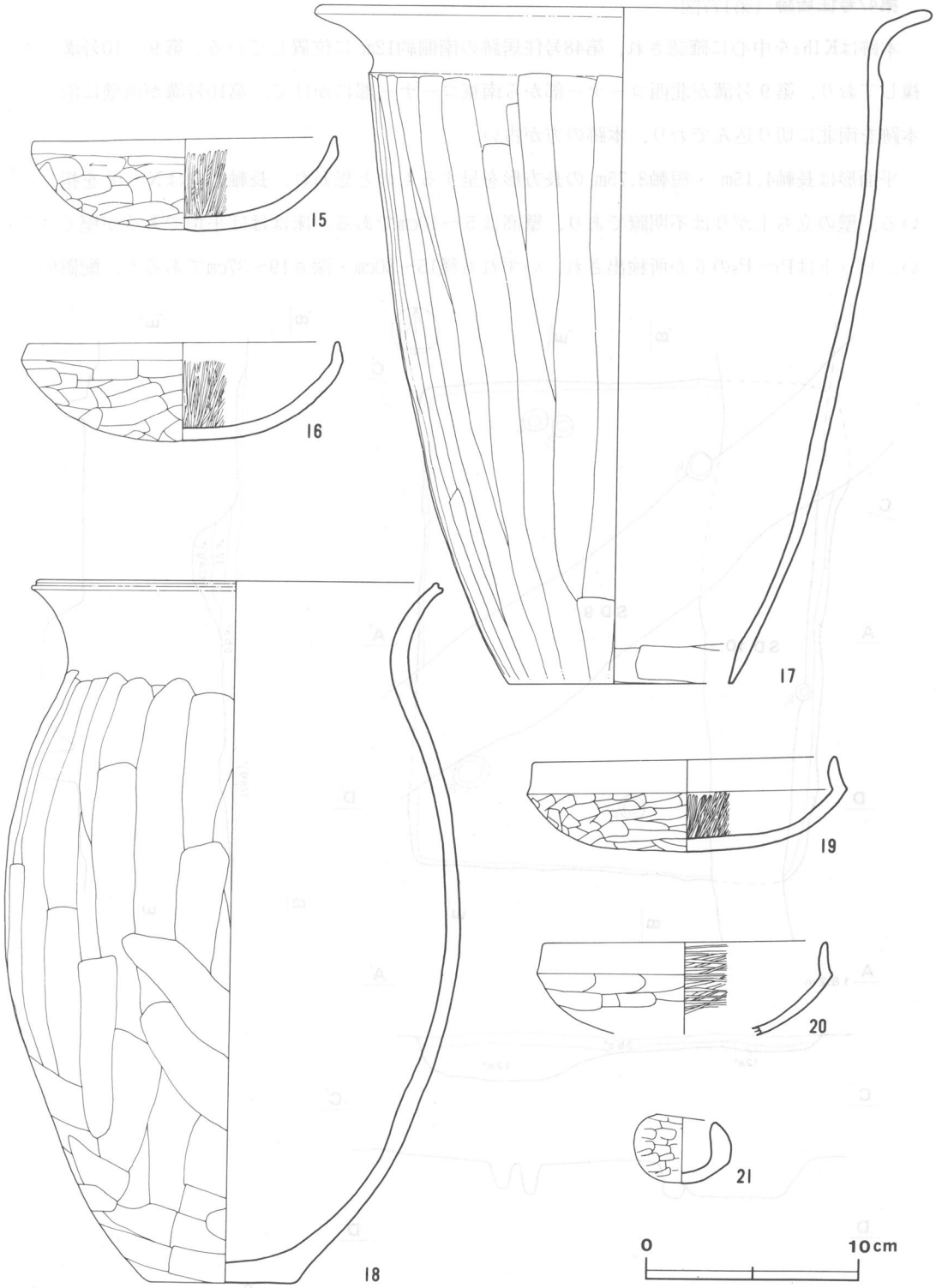
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	鉢形 土器 土師器	A 17.9 B 8.5 C 6.9	底部は平底で，内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい黄橙色	100%
4	鉢形 土器 土師器	A 22.3 B 11.0 C 8.1	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながらわずかに開く。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ調整後雑なヘラ磨き	砂粒・細礫 普通 にぶい橙色	50%
5	甕形 土器 土師器	A 13.2 B 14.2 C 7.3	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，胴部上位でやや張る。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	90%
6	高坏形土器 土師器	D 14.1	坏部欠損。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面－縦位ヘラ削り 内面－ヘラナデ 裾部内・外面－横ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	40%
7	甕形 土器 土師器	A 19.9 B 33.5 C 6.0	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，中位がやや張っている。口縁部は外反しながら開く。外面の胴部と頸部の境に稜を有している。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 下端－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	90%
8	坏形 土器 土師器	A 14.0 B 4.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい黄橙色	98%
9	坏形 土器 土師器	A 12.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	40%
10	坏形 土器 土師器	A 13.1	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 口縁部・体部内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	50%
11	坏形 土器 土師器	A 15.2 B 4.2	底部は丸底で，体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	90%
12	坏形 土器 土師器	A (14.5) B 4.9 C 2.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	30%
13	坏形 土器 土師器	A 14.2 B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	60%
14	甕形 土器 土師器	A 17.4 B 28.0 C 6.7	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，中位が張っている。口縁部は外反しながら開き，外端部は面をなす。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上・中位－縦位ヘラ削り　下位－横位のヘラ削り　胴部内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい橙色	90%
15	坏形 土器 土師器	A 14.4 B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 良好 赤褐色	100%
16	坏形 土器 土師器	A 14.6 B 4.7	底部は丸底で，体部は内彎気味に大きく開いて立ち上がる。口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 良好 赤色	100%
17	甑形 土器 土師器	A 28.7	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反しながら開く。底部は正円状に抜ける。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－縦位のヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	60%
18	甕形 土器 土師器	A 18.7 B 32.7 C 6.6	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，中位がやや張っている。口縁部は外反しながら開く。外面の胴部と頸部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 下端－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい橙色	95%
19	坏形 土器 土師器	A 14.3 B 4.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に内傾する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	100%
20	坏形 土器 土師器	A 13.5	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 口縁部・体部内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 赤色	50%
21	ミニチュア 土器 土師器	A 2.7 B 3.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら立ち上がる。	外面－ヘラ削り 内面－指によるナデ	砂粒 普通 橙色	100%



第174図　第46号住居跡出土遺物実測図（1）



第175図　第46号住居跡出土遺物実測図（2）

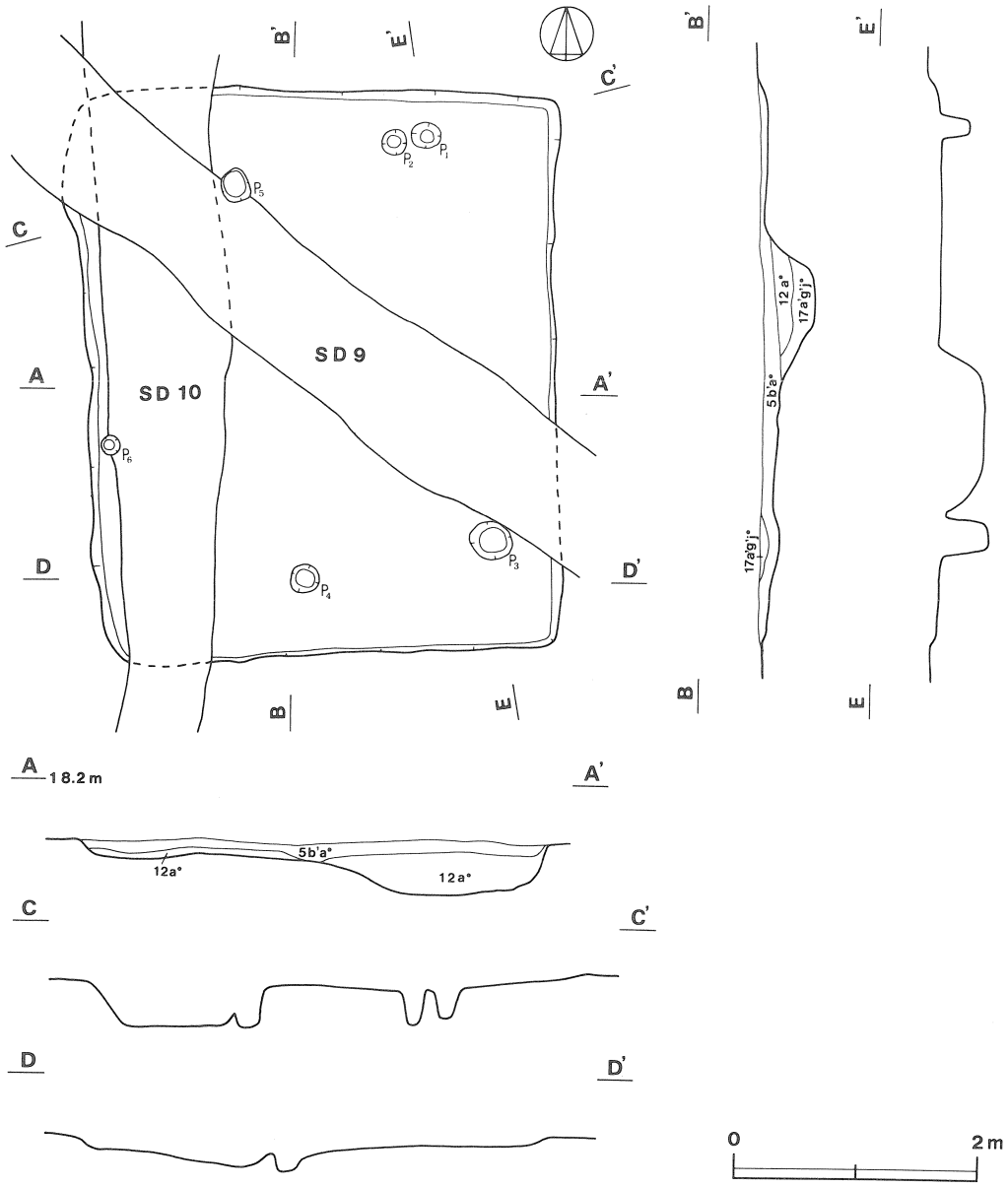


第176図　第46号住居跡出土遺物実測図(3)

第47号住居跡（第177図）

本跡はK1h8を中心に確認され，第48号住居跡の南側約12m に位置している。第９・10号溝と重複しており，第９号溝が北西コーナー部から南東コーナー部にかけて，第10号溝が西壁に沿って本跡を南北に切り込んでおり，本跡の方が古い。

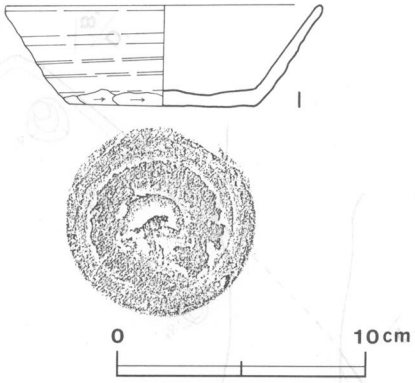
平面形は長軸4.15m ・短軸3.75m の長方形を呈するものと思われ，長軸方向はN－0°を指している。壁の立ち上がりは不明瞭であり，壁高は５～10cmである。床はほぼ平坦であるが堅くはない。ピットはP_1～P_6の６か所検出され，いずれも径15～30cm・深さ19～37cmであるが，配置的に



第177図　第47号住居跡実測図

規則性がなく主柱穴とは考えられない。炉跡もカマドも検出されていない。覆土はほぼ1層で，厚さは5～6cmである。ローム粒子を多量に含む褐色土が主で自然堆積と思われる。

遺物は土師器の甕形土器片のほか，住居跡中央部の覆土から須恵器の坏形土器（第178図－1）が出土している。



第178図　第47号住居跡出土遺物実測図

出土土器観察表（第178図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形　土器 須恵器	A　12.8 B　4.1 C　7.7	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸い。	底部一回転ヘラ切り後軽い手持ヘラ削り，水挽き痕は強い ロクロ回転方向は右	砂粒・細砂 普通 灰色	90%

第48号住居跡（第179図）

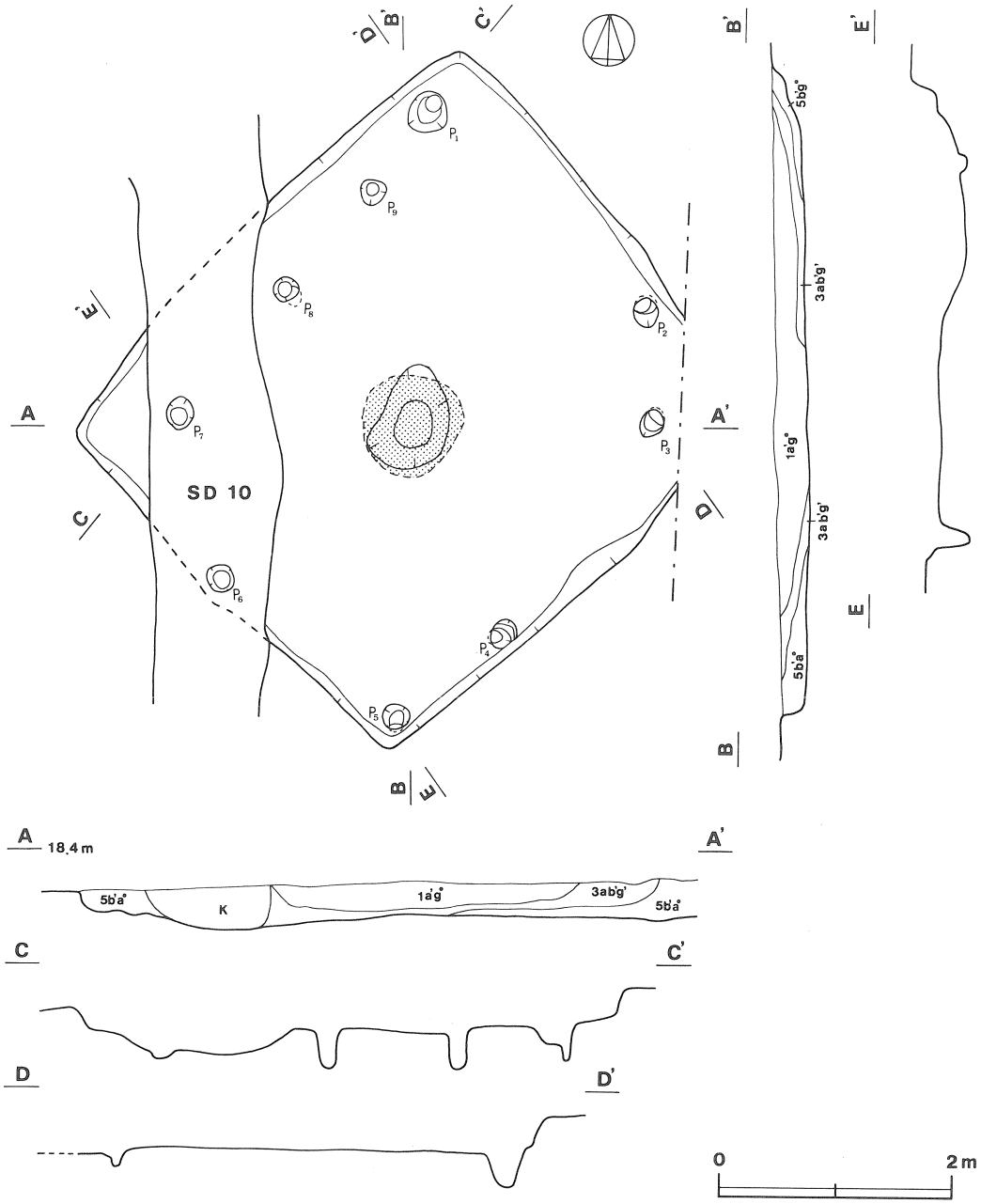
本跡はK1d9を中心に確認され，第47号住居跡の北側約12mに位置している。第10号溝と重複しており，第10号溝が西コーナー部付近を南北に切っていることから，本跡の方が古い。東コーナー部は土取りによって消滅している。

平面形は長軸4.75m・短軸4.25mの長方形を呈し，長軸方向はN－53°－Eを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は20cm前後である。床面はほぼ平坦でやわらかい。ピットはP1～P9の9か所検出され，いずれも壁際に掘られている。径は25～30cm・深さ20～43cmであるが間隔は一定せず，主柱穴は不明である。住居跡中央部に炉跡が検出され，平面形は長径90cm・短径55cmの楕円形を呈し，床面を13cmほど皿状に掘り凹めており，内部は焼土が充満している。覆土は自然堆積の状態を示しており，大部分が黒褐色土で，壁際にはローム粒子を含む暗褐色土や褐色土が堆積している。

遺物は少なく，土師器の甕形土器や埦形土器が出土している。

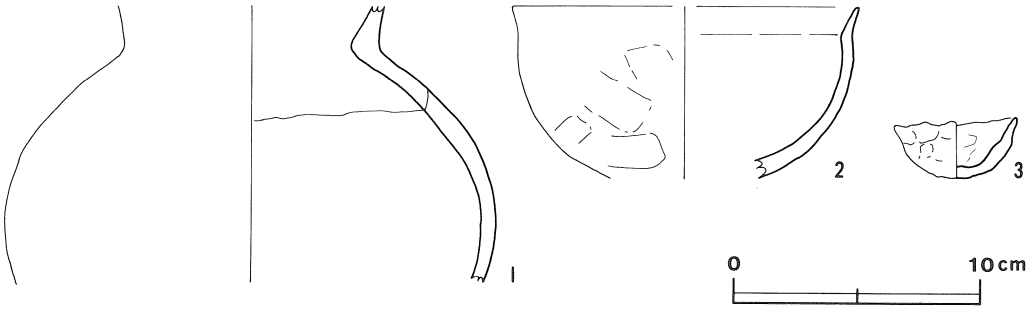
出土土器観察表（第180図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 土師器		胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面一横ナデ 胴部内・外面－ナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	30%
2	坏形　土器 土師器	A　14.2	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外傾する。内面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－雑なヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 浅黄橙色	30%



第179図　第48号住居跡実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
3	手捏ね土器 土師器	A　5.0 B　2.2	埦形を呈する。	内・外面に指頭痕が残る。	砂粒 普通 にぶい橙色	100%



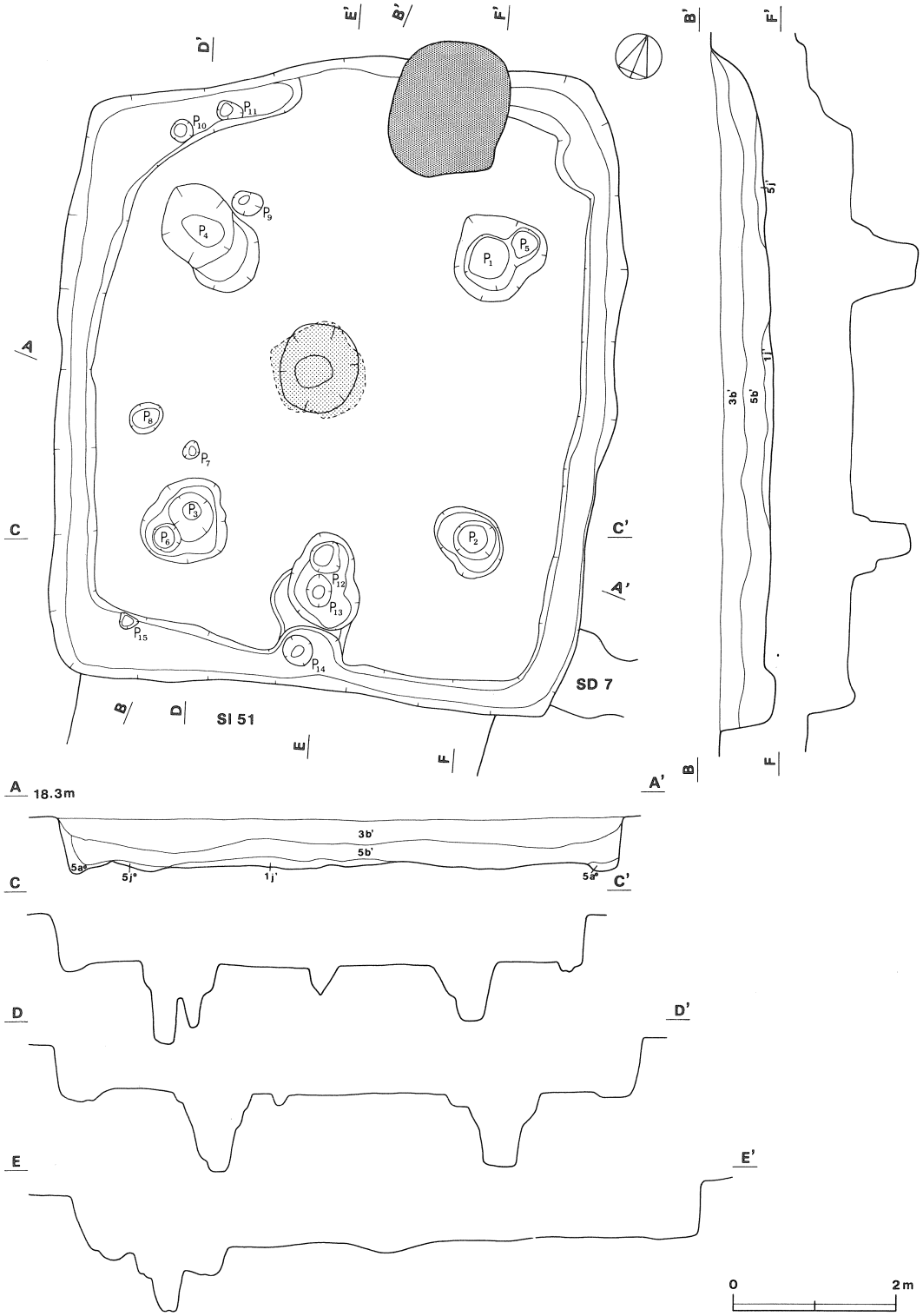
第180図　第48号住居跡出土遺物実測図

第49号住居跡（第181～183図）

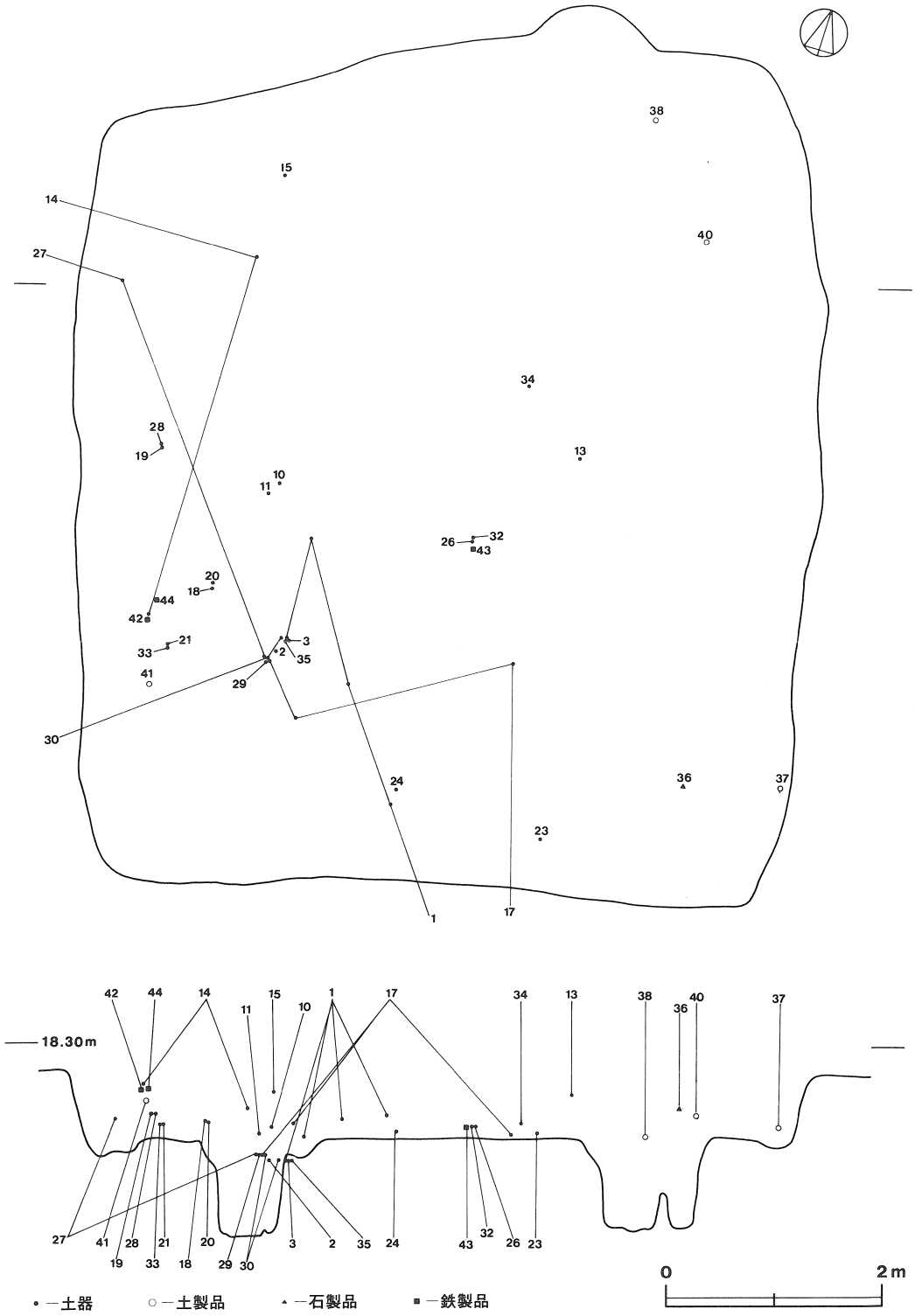
本跡は$J1j_5$を中心に確認され，第50号住居跡の西側約0.5m に位置している。本跡は第51号住居跡，第７号溝と重複しており，第51号住居跡を切っていることと，東壁を第７号溝に切られていることから，第51号住居跡より新しく，第７号溝より古いと思われる。

平面形は長軸7.70m・短軸6.90m の方形を呈しており，主軸方向はN－ 22°－Wを指している。壁は遺存状態が良くやや外傾して立ち上がり，壁高は56～70cmである。床は平坦で全体に堅く，特に中央部は踏み固められ，かなり硬化している。壁下には壁溝が全周しているが，他の住居跡に比べて幅が広く，上幅30～70cm・下幅20～60cm・深さ約11cmである。ピットはP_1～P_5の15か所検出されている。P_1～P_4はP_3の長径100cm・短径80cmを除いて径55～60cmであり，深さはいずれも73～98cmと深い。また掘り込みもしっかりしており，対角線上に配置されていることから主柱穴と思われる。P_5とP_6はP_1・P_3に接して掘り込まれており，径はどちらも約35cm・深さは85cm・101cmで補助柱穴と思われる。カマドは北壁の東コーナー部寄りに付設されており，比較的遺存状態は良好で天井部・袖部とも残っている。長さ143cm・幅114cm・焚口幅42cmで，北壁を約65cm切り込んでいる。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり煙道へと続いている。火床は床を18cm掘り凹め，内部には焼土や灰が堆積している。住居跡中央部には炉跡が検出され，平面形は長径110cm・短径 94cmの楕円形を呈し炉床は床を15cm掘り凹めており，焼けて硬化している。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈しており，ほぼ２層に分かれている。上層は暗褐色土，下層は褐色土でどちらもわずかにロームブロックを含んでいる。床面には焼土の広がりが何か所も見られ，火災を受けていると思われる。

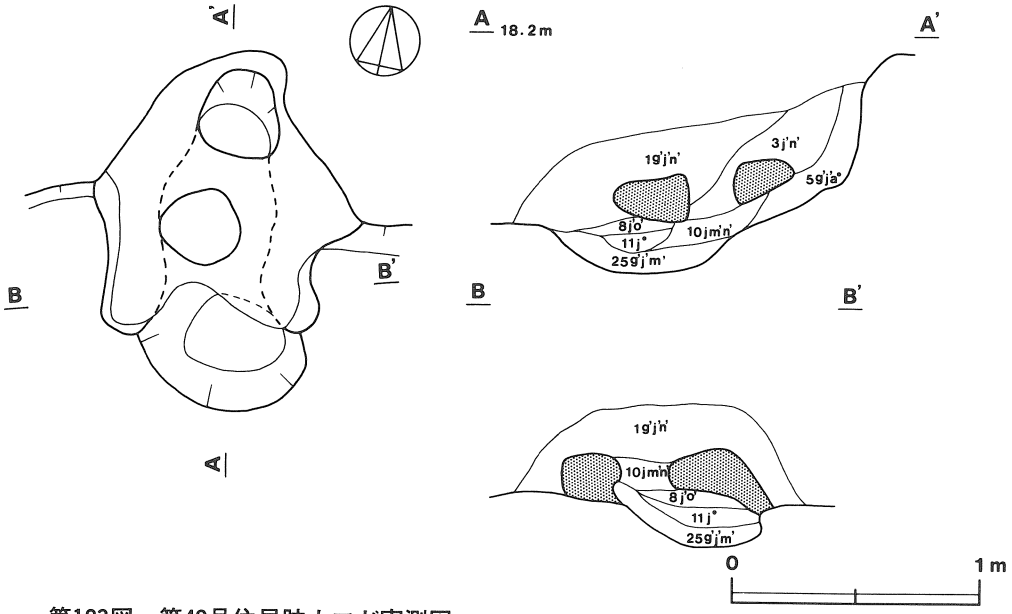
遺物は非常に多く出土し，土師器が大部分である。坏形土器片が1045点，甕形土器片が1758点と多く，そのほかに鉢形土器，高坏形土器片などが出土している。坏形土器はほとんどが同じ器形・整形であり，比較的小形のものが目立つ。須恵器は少なく坏形土器，台付長頸壺形土器などが出土している。また，刀子，鏃の茎部，勾玉，土玉なども出土している。



第181図　第49号住居跡実測図



第182図　第49号住居跡遺物出土状態図



第183図　第49号住居跡カマド実測図

出土土器観察表（第184・185図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺形土器 土師器	A (17.3)	胴部は丸く張り，口縁部は直立してから外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
2	甕形土器 土師器	A 14.1 B 16.8	底部は平底で，胴部は丸く張り，口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
3	小形甕形土器 土師器	A 12.4 B 12.7 C 6.9	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反して，外反気味に内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	85%
4	甕形土器 須恵器		口縁部片	内・外面共に水挽き	砂粒・細砂 良好 灰色	5%
5	甕形土器 須恵器		頸部片	水挽き整形後，8本1条の波状文と平行線文を交互に施している	雲母 不良 赤褐色	5% 酸化焔焼成
6	坏形土器 須恵器		底部は平底である。	外面－剥離が激しく調整痕不明	細砂 普通 灰色	20%
7	坏形土器 灰釉陶器	C 6.7	底部は平底である。	底部－回転糸切り 体部下端－回転ヘラ削り	砂粒・細砂 良好 灰白色	10% 内外面に淡緑色の釉付着
8	台付長頸壺形土器 須恵器	D 11.0 E 0.5	高台は短く下方へのびる。	底部－回転ヘラ削り 高台は貼り付け	細砂 普通 灰色	10%
9	蓋形土器 須恵器	C 10.6	口縁部片	天井部－回転ヘラ削り	細砂 普通 灰色	10%
10	高坏形土器 土師器	A 8.2 B 4.0 D 7.0 E 1.7	坏体部は大きく開き，口縁部は直立する。脚部は大きく「く」の字状に開く。外面の口縁部と体部との境に稜を有する。	口縁部外面－横ナデ 体部・脚部外面－ヘラ削り 体部内面－ナデ 脚部内面－指によるナデ	砂粒 普通 にぶい黄橙色	95%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
11	坏形 土器 土師器	A (11.8)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
12	坏形 土器 土師器	A (12.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。口縁部と体部の境に段を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい褐色	20%
13	坏形 土器 土師器	A (12.7)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
14	坏形 土器 土師器	A (12.0)	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	20%
15	坏形 土器 土師器	A 10.6 B 3.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい褐色	100%
16	坏形 土器 土師器	A 9.5	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや内傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 暗赤灰色	60%
17	坏形 土器 土師器	A 12.2 B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立し，先端部はやや外反する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	80%
18	坏形 土器 土師器	A 10.6 B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立し，先端部はやや外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
19	坏形 土器 土師器	A (11.0) B 3.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	45%
20	坏形 土器 土師器	A 8.8 B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 黒褐色	100%
21	坏形 土器 土師器	A 10.6 B 4.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	70%
22	坏形 土器 土師器	A 11.4 B 3.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	90%
23	坏形 土器 土師器	A (8.7) B 4.1	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 口縁部・体部内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	50%
24	坏形 土器 土師器	A (11.2) B 3.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	35%
25	坏形 土器 土師器	A 10.6 B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。外面の体部と口縁部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	75%
26	坏形 土器 土師器	A 10.7 B 4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい黄橙色	70%
27	坏形 土器 土師器	A (10.4) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	70%
28	坏形 土器 土師器	A (13.3) B 3.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい褐色	20%
29	坏形 土器 土師器	A 9.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はわずかに外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい褐色	30%

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
30	坏形 土器 土師器	A 9.7 B 2.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	90%
31	坏形 土器 土師器	A (10.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 明赤褐色	45%
32	坏形 土器 土師器	A 7.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
33	坏形 土器 土師器	A 9.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	95%
34	坏形 土器 土師器	A (9.4) B 2.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	50%
35	坏形 土器 土師器	A (10.0)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部はやや外傾する。外面の口縁部と体部に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 明赤褐色	50%

石製品（第185図－36）

36は勾玉である。両側とも孔の周囲が円形に摩耗している。長さ2.3cm・幅1.4cm・腹部幅0.8cm・孔径2mmである。

土製品（第185図－37～41）

37は丸玉の模造品と思われる。焼成は良好で，色調はにぶい褐色である。径1cm・孔径1.5mmである。

38は臼状の玉で，表面はなめらかでつやがある。焼成は良好で，色調はにぶい橙色である。長さ1cm・径1cm・孔径1mmである。

39は切子玉の模造品である。表面はなめらかでつやがあり，中央部が太い。焼成は良好で，色調はにぶい橙色である。長さ2.4cm・径1.2cm・孔径2mmである。

40は管玉の模造品と思われる。表面はなめらかでつやがあり，両端は丸味をもっている。焼成は良好で，色調はにぶい橙色である。長さ1.8cm・径1.2cm・孔径は1mmである。

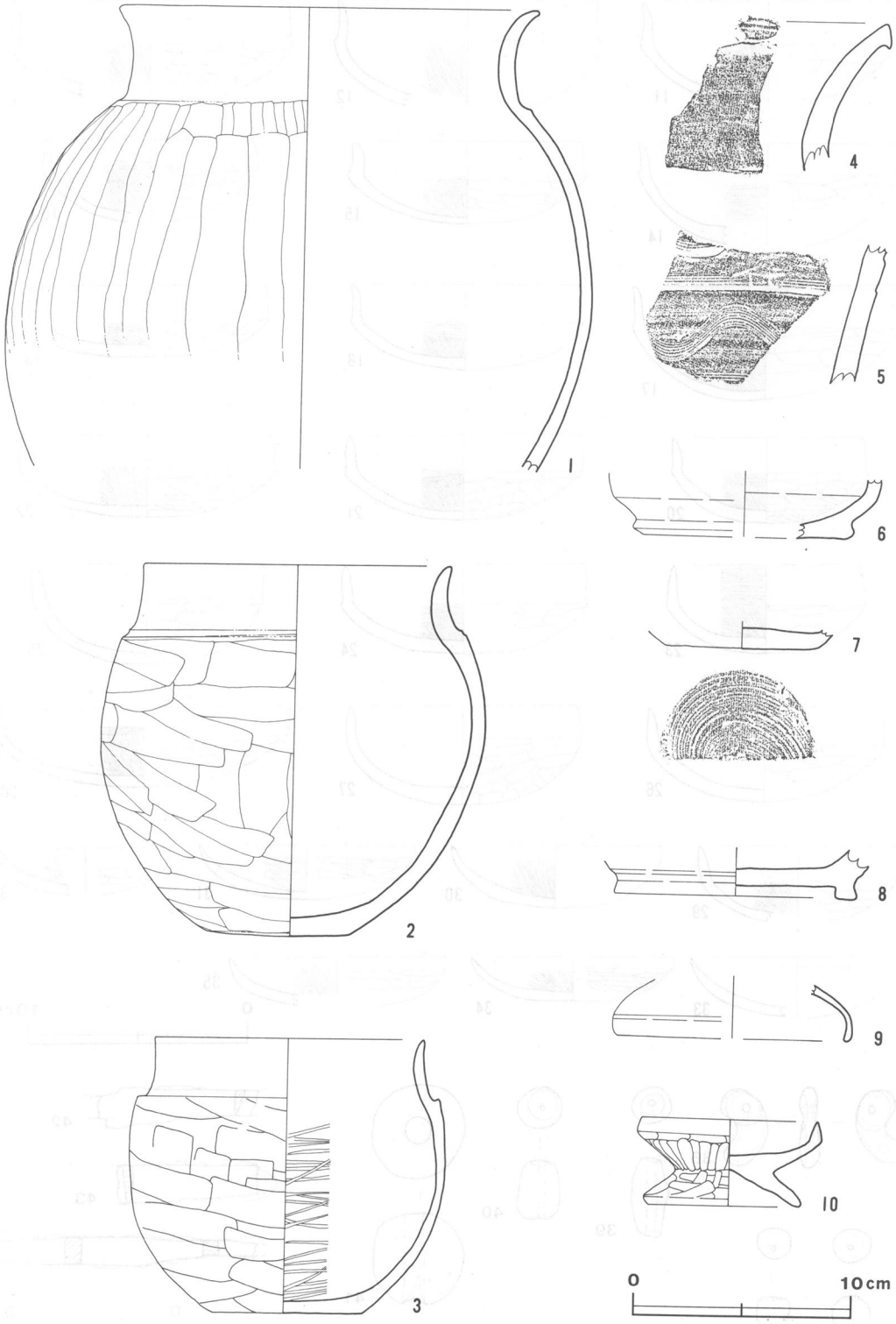
41は土玉で，指ナデにより整形されている。焼成は普通で,色調はにぶい橙色である。径2.9cm・高さ2.8cm・孔径8mmである。

鉄製品（第185図－42～44）

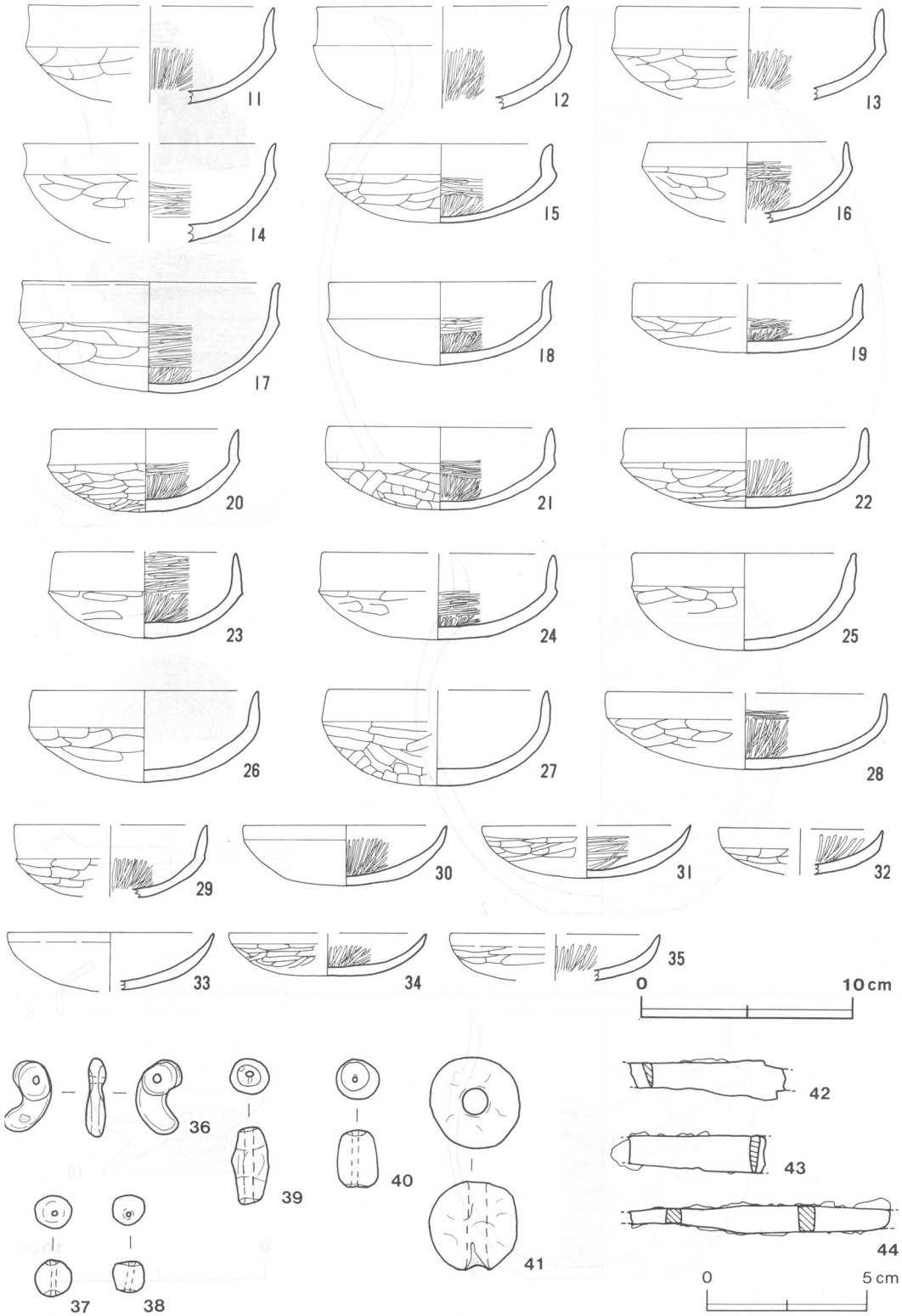
42は刀子で両端部が欠損する。刃・棟の両側に区を有する。現存長4.9cm・刃幅1.2cmである。

43は刀子の刀身部片で，現存長4.2cmである。

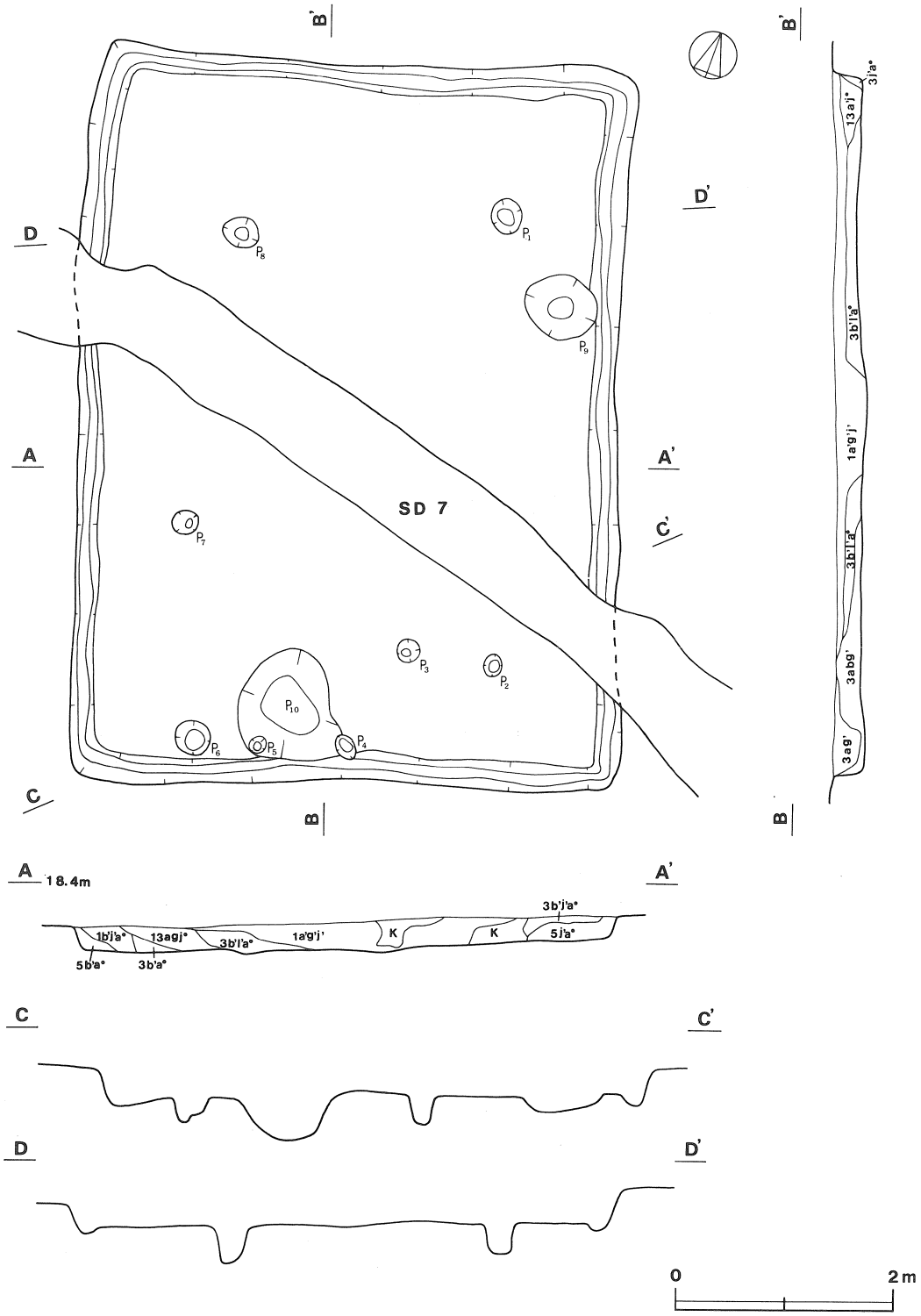
44は鏃の茎部である。断面は方形を呈し，現存長は8.2cmである。



第184図　第49号住居跡出土遺物実測図(1)



第185図　第49号住居跡出土遺物実測図(2)



第186図　第50号住居跡実測図

第50号住居跡（第186図 ）

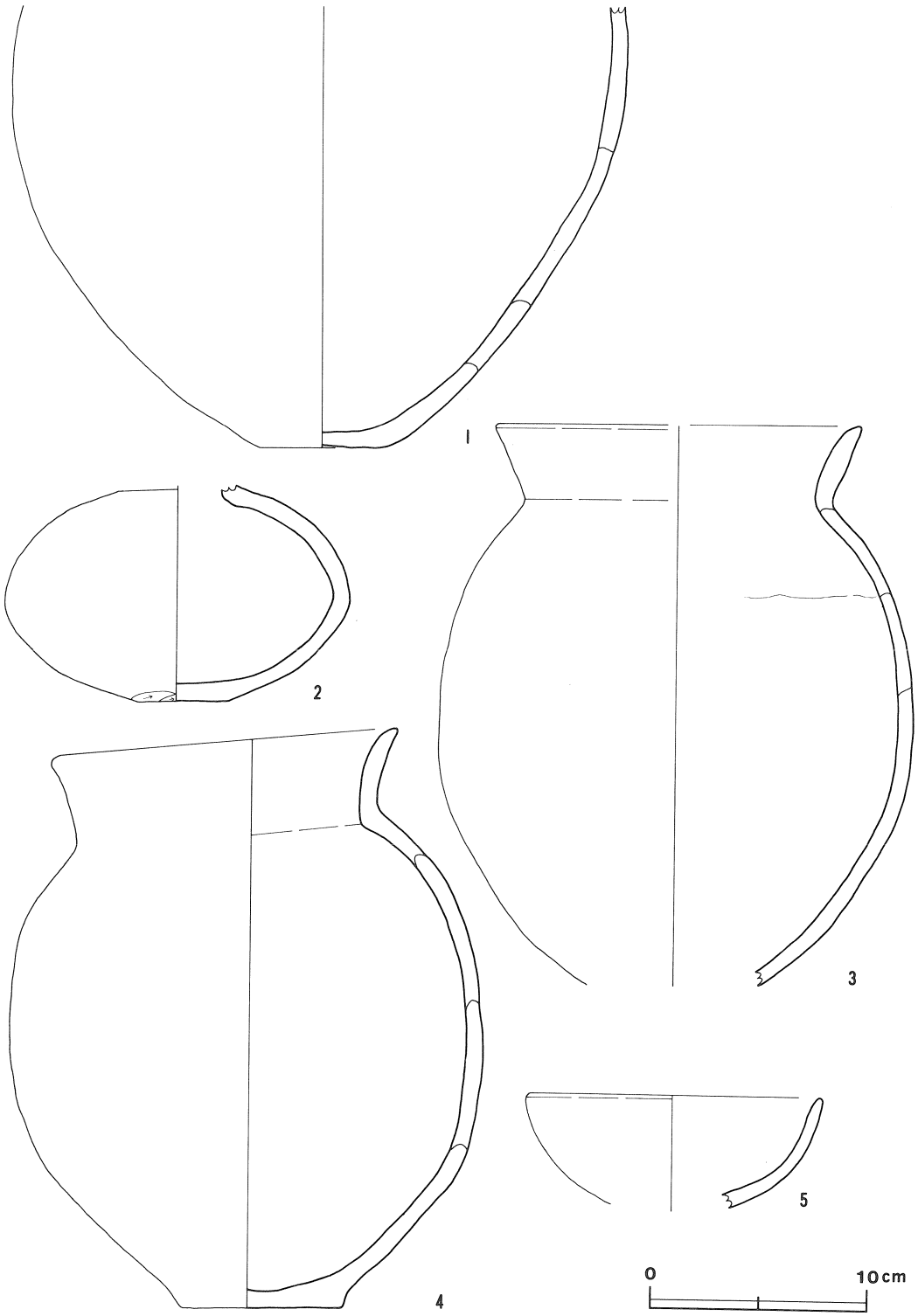
本跡はK1a$_6$を中心に確認され，第49号住居跡の東側約0.5m ,第46号住居跡の北側約４m に位置している。第７号溝と重複しているが，本跡の中央部を第７号溝が東西に横切っており，本跡の方が古い。

平面形は長軸6.50m ・短軸4.90m の長方形を呈しており，長軸方向はN－17.5°-Wを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は30～40cmである。各壁下には壁溝が全周しており，上幅約20cm・下幅約11cm・深さ約６cmである。床は平坦でやわらかい。ピットはP_1～P_{10} の10か所確認されている。このうちP_1～P_8はいずれも径20～35cm・深さ23～37cmであるが，規則性がなく主柱穴は不明である。P_9は長径68cm・短径57cmの楕円形を呈し，深さ65cmでほぼ円筒状に掘られ，P_{10}は長径103cm・短径70cmの不整楕円形を呈し，深さ43cmで椀状に掘られている。 それぞれ東・南壁際に位置し貯蔵穴とも考えられる。炉と思われる痕跡は検出されなかったが，第７号溝によって切られて消滅した可能性もある。覆土は一部攪乱が見られるが，ローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が主で自然堆積の様相を呈している。

遺物は少なく，いずれも土師器である中央部付近の覆土から坩形土器（第187図－２），北寄りの西壁際の床面から完形の甕形土器（第187図－４）が倒立で出土している。

出土土器観察表（第187図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	C 5.8	底部は平面で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。	胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 暗褐色	30%
2	坩形土器 土師器	C 4.1	底部は平底で，胴部は大きく張り扁平な球形をなす。	胴部内・外面－横ナデ 底部及び胴部下端－ヘラ削り	砂粒 良好 赤色	85% 外面全体に赤彩
3	甕形 土器 土師器	A 17.0	胴部は丸く張り，やや長胴を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明褐色	40%
4	甕形 土器 土師器	A 16.0 B 26.2 C 7.4	底部は突出気味の平底で，胴部は丸く張り，やや長胴を呈す。口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ 内面－横位ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	100% 外面全体に煤付着
5	椀形 土器 土師器	A 13.9	体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。半球状を呈す。	口縁部内・外面－横ナデ 体部内・外面－ナデ	砂粒 普通 赤色	70% 内外面赤彩

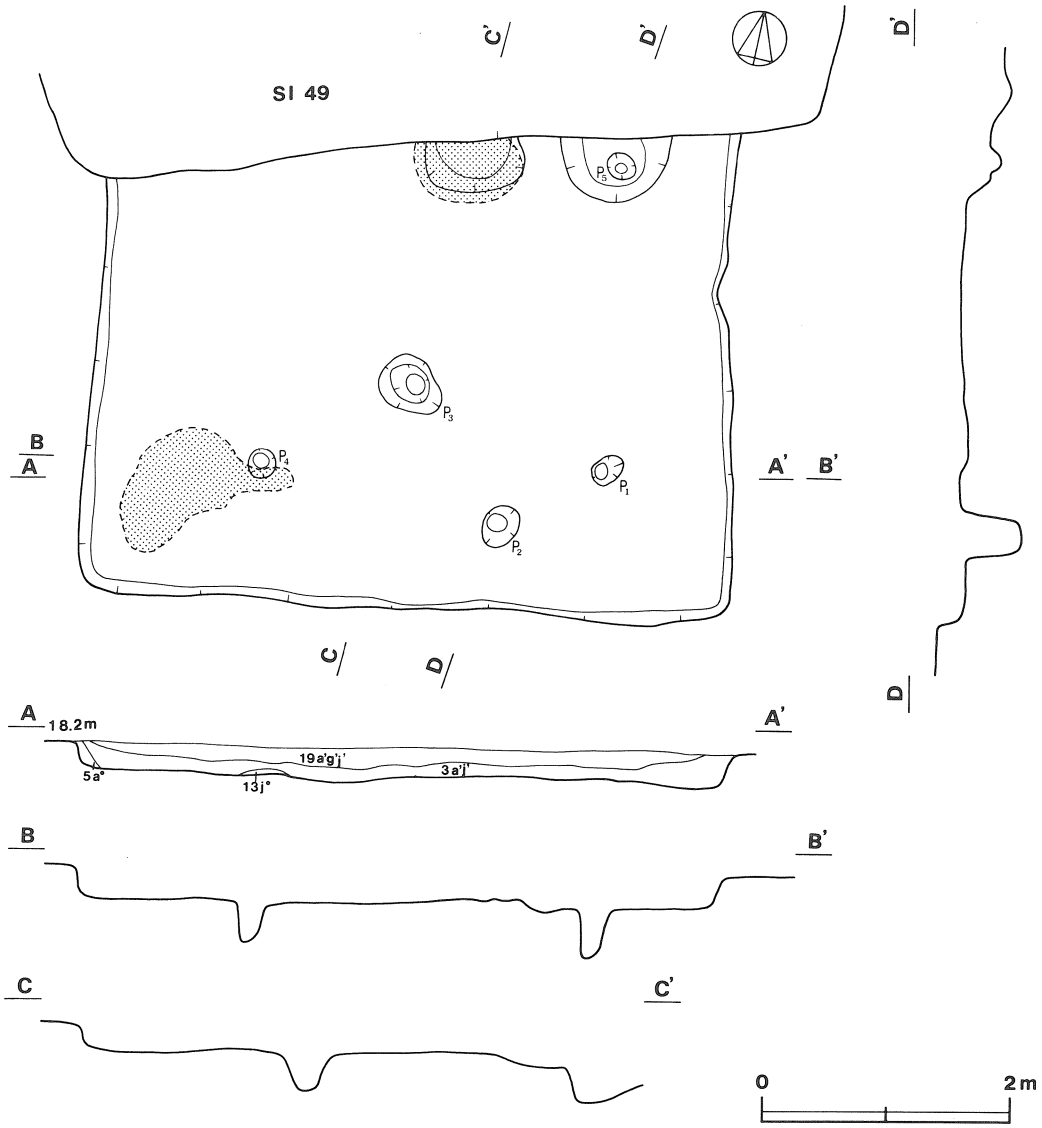


第187図　第50号住居跡出土遺物実測図

第51号住居跡（第188図）

本跡はK1b5を中心に確認され，第50号住居跡の西側約２ｍ，第46号住居跡の北側約４ｍに位置している。第49号住居跡と重複しているが，本跡の北側部分は第49号住居跡によって切られており，本跡の方が古い。

平面形は( )m ×5.00m の方形を呈するものと思われ，主軸方向はN－13°-Wを指している。壁は遺存状態がよくやや外傾して立ち上がり，壁高は20～25cmである。床はほぼ平坦で全体によく締まっており，炉跡の周囲は特に堅い。ピットはP_1～P_4の４か所確認され，本跡の北側部分のピットの位置は不明であるが，P_1とP_4は径25cmと23cm・深さ42cmと32cmで，位置的に方形に配され



第188図　第51号住居跡実測図

た4本の主柱穴のうちの2本の可能性がある。P_5は第49号住居跡によって北側半分を切られているが，径90cmの円形を呈するものと思われ，深さは35cmで椀状に掘られており貯蔵穴とも考えられる。炉跡も第49号住居跡に北側半分を切られて検出されている。平面形は径約80cmの円形を呈するものと思われ，床面を13cm掘り凹めている。覆土は自然堆積の状態を示しており2層に分かれている。上層は極暗褐色土，下層は暗褐色土となっており，いずれもローム粒子や焼土粒子を含んでいる。床面には焼土の広がりが見られ，炭化材が散乱していることから火災を受けたと思われる。

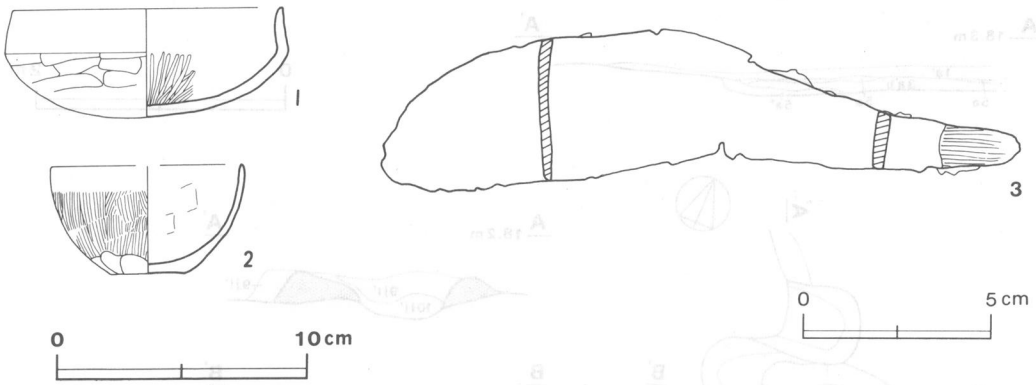
遺物は少なく，土師器の甕形土器片が65点，坏形土器などが出土している。

出土土器観察表（第189図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形 土器 土師器	A 1.9 B 4.4	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味にやや内傾する。	口縁部内・外面ー横ナデ 体部外面ーヘラ削り 内面ーヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	80%
2	椀形 土器 土師器	A (7.7) B 4.4 C 3.0	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。	口縁部内・外面ー横ナデ 体部外面ーハケ目 下端ーヘラ削り 内面ーナデ	砂粒 普通 赤褐色	40%

鉄製品（第189図ー3）

3は鎌でほぼ完存品である。基部に木質部が付着する。現存長は17cmである。

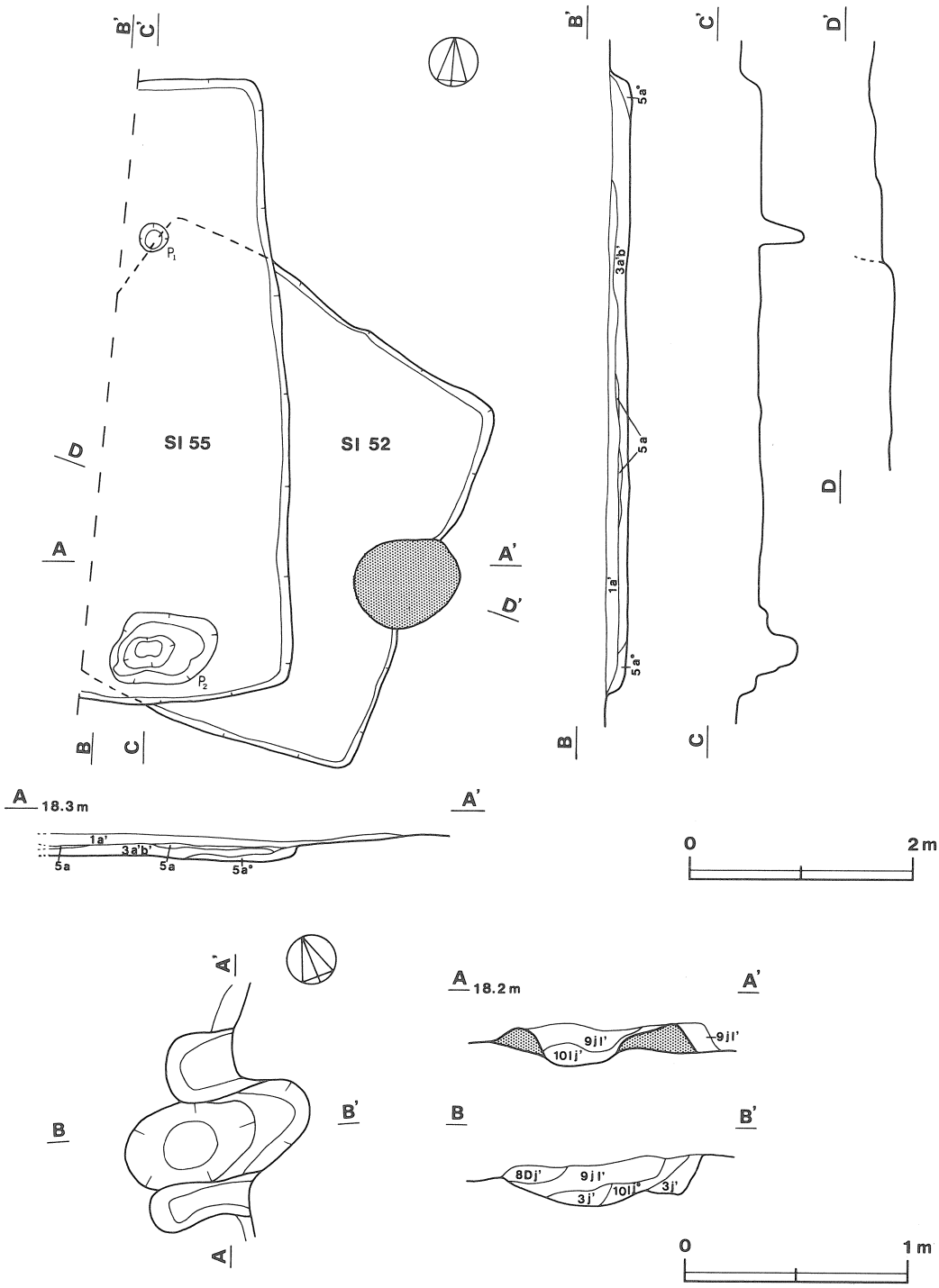


第189図　第51号住居跡出土遺物実測図

第52号住居跡（第190図）

本跡は$K1c_4$を中心に確認され，第46号住居跡の北西側約3mに位置し，第51号住居跡の南西側に接している。第55号住居跡と重複しているが，本跡は第55号住居跡の上に構築されており，本跡の方が新しい。

平面形は3.85m ×(　)m の方形を呈するものと思われ，主軸方向はN-110°-Eを指している。



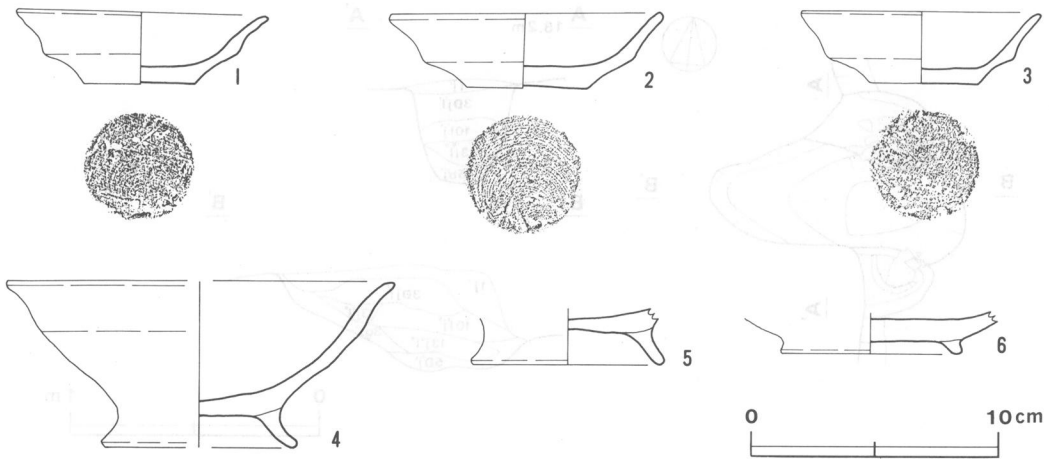
第190図　第52・55号住居跡・カマド実測図

壁は削平されているため立ち上がりは不明瞭で，壁は5cm前後である。床はほぼ平坦であり全体に硬く，カマドの周囲はよく踏み固められている。また，第55号住居跡との重複部分には，ロームブロックで踏み固めた厚さ5～6cmの貼り床が部分的に残っている。ピットはP_1の1か所検出され，径26cm・深さ40cmであるが，本跡に伴うものかどうか不明である。カマドは東壁中央に付設されているが，削平されて袖の一部が残っているだけである。長さ90cm・幅85cm・焚口幅34cmで，東壁を約30cm切り込んでいる。火床は床を9cm掘り凹めている。覆土はローム粒子をわずかに含む黒褐色土が一層だけであり，自然堆積と思われる。

遺物は少なく，カマド南側の覆土から，土師器の坏形土器や高台付坏形土器が出土している。

出土土器観察表（第191図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形土器 土師器	A 10.1 B 2.9 C 4.5	底部は平底で，体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。体部中位に段を有する。	底部－回転糸切り	砂粒 普通 橙色	90%
2	坏形土器 土師器	A 10.9 B 3.0 C 4.9	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。体部中位に段を有する。	底部－回転糸切り	砂粒 普通 橙色	75%
3	坏形土器 土師器	A 9.8 B 2.9 C 4.5	底部は平底で，体部は外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反する。体部中位に段を有する。	底部－回転糸切り	砂粒 普通 にぶい橙色	50%
4	高台付坏形土器 土師器	A (15.6) B 6.7 D (7.7) E 1.3	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。 高台は外下方へ外反し，端部は丸い。	内・外面－水挽き痕は弱い 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	55%
5	高台付坏形土器 土師器	D 7.8 E 1.4	高台は外下方へのび，端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	20%
6	高台付坏形土器 土師器	D 6.7 E 0.5	体部は外上方へ立ち上がる。高台は短く外下方へのび，端部に面をなす。	高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	40%

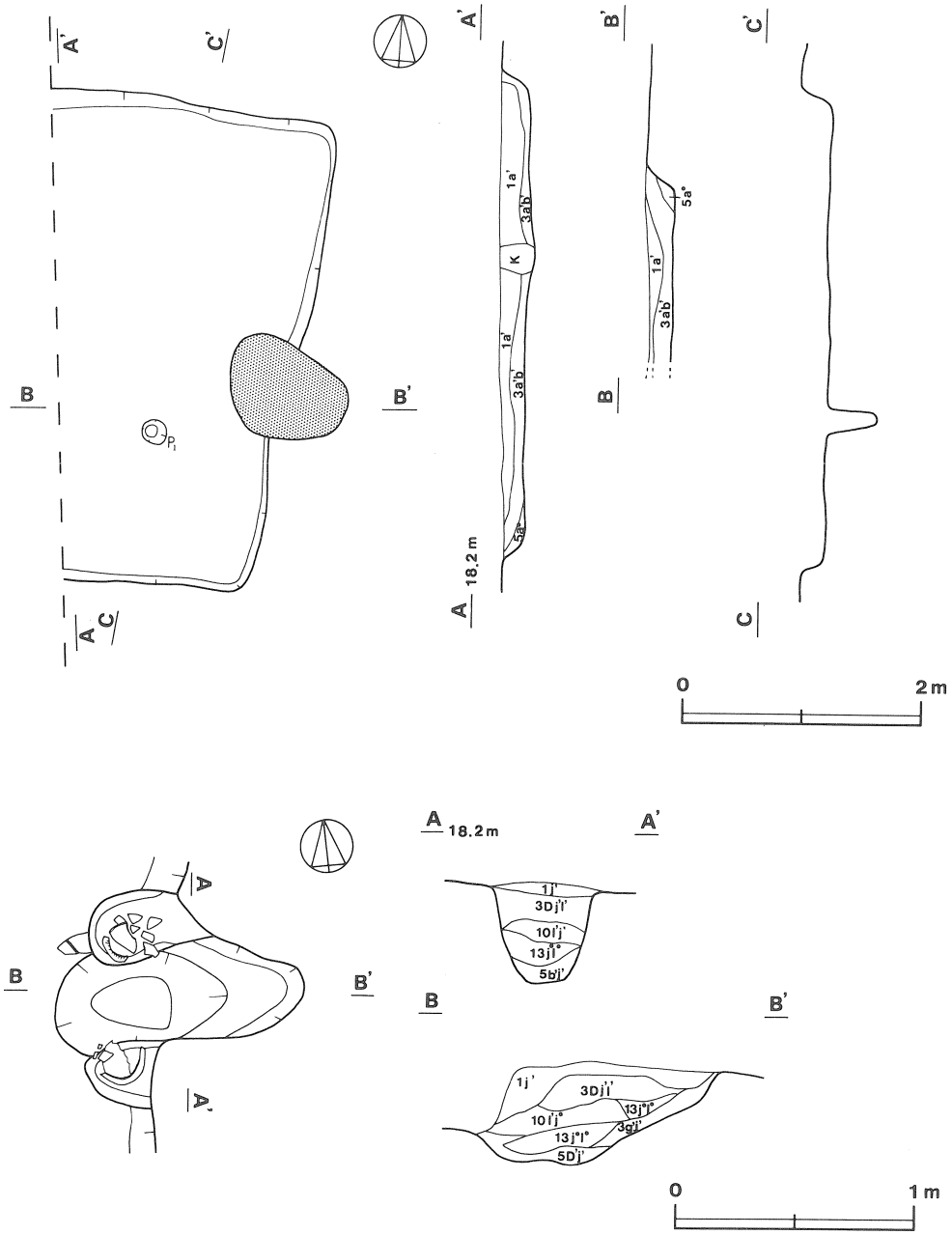


第191図　第52号住居跡出土遺物実測図

第53号住居跡（第192図）

本跡はK1e4を中心に確認され，第52号住居跡の南側約４ｍ，第54号住居跡の北側約１ｍに位置している。西側約半分は調査区域外へと延びている。

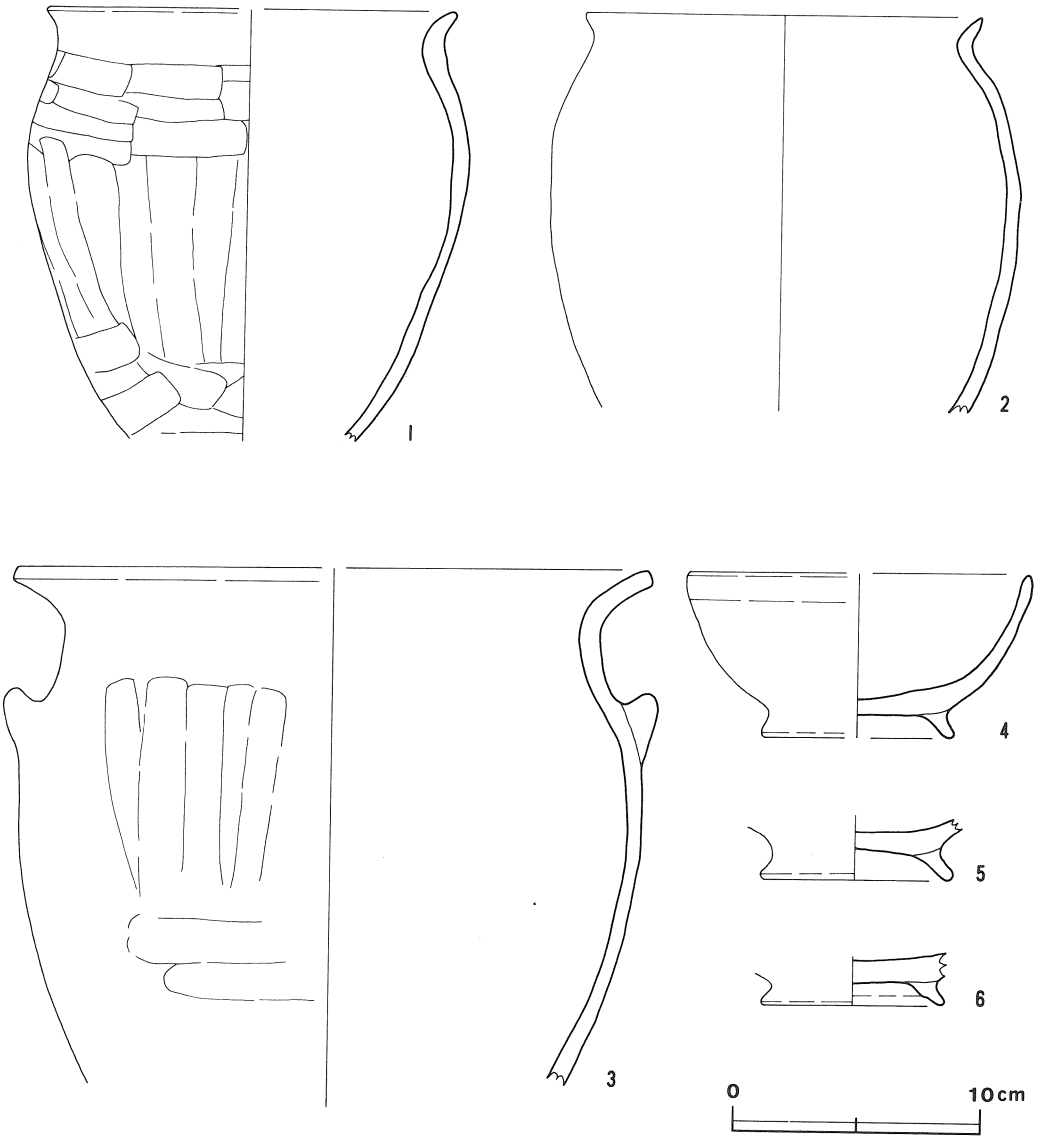
平面形は4.05m ×（ ）m の方形を呈するものと思われ，主軸方向はＮ－100°－Ｅを指していると思われる。西壁を除く壁は外傾して立ち上がり，壁高は20cm前後である。床はやや小さな凹凸



第192図　第53号住居跡・カマド実測図

が見られるが，全体によく踏み固められており，カマド周辺は特に堅くなっている。ピットはP_1の１か所検出されただけで，径20cm・深さ43cmである。カマドは東壁の中央部よりやや南寄りに付設されている。削平され天井部や袖上部は崩壊している。 規模は，長さ105cm・幅90cm・焚口幅32cmで，東壁を60cmほど切り込んでいる。両袖内部からは，補強のために使用した甕形土器が出土している。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を12cm掘り凹めている。覆土は一部攪乱も見られるが，自然堆積の状態を示しており，大きく２層に分かれている。上層は黒褐色土，下層は暗褐色土でそれぞれローム粒子を含んでいるが，下層の方が多く含んでいる。

遺物は少なく，土師器がほとんどである。甕形土器がカマドの左袖内部から第193図－１，右袖



第193図　第53号住居跡出土遺物実測図

内部から第193図－２が倒立して出土し，袖部の補強として使用されたものと思われる。カマドの前の覆土から高台付坏形土器が出土している。

出土土器観察表（第193図）

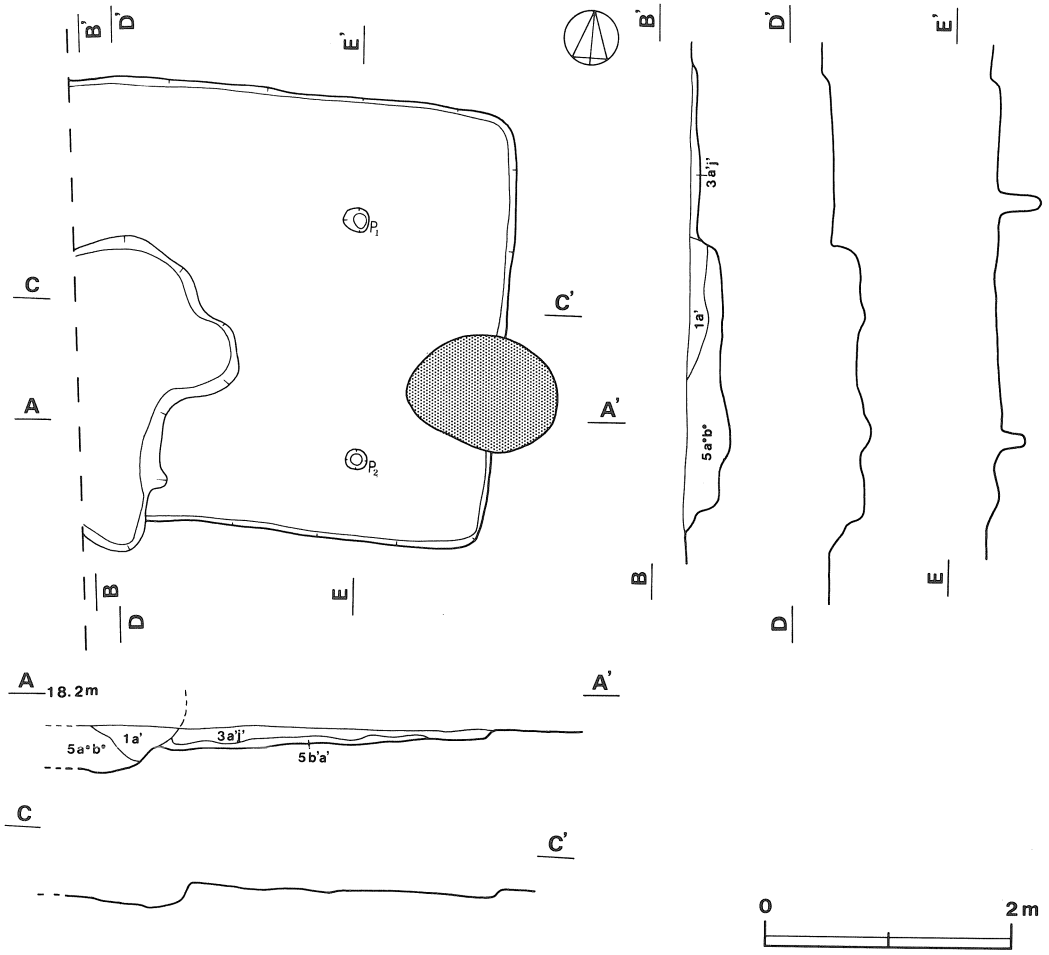
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 15.6	胴部は上位でやや張り，以下ゆるやかにすぼむ。口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位－縦位，中・下位－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	40% 底部欠損
2	甕形土器 土師器	A 16.0	胴部は卵形を呈し，口縁部は短く外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部内・外面－ヘラナデ	砂粒・小礫 普通 赤褐色	75%
3	甕形土器 土師器	A 25.2	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，上位が張る。口縁部は外反しながら開き，端部に面をなす。胴部上位にこぶ状の把手が一対付く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位－縦位，中・下位－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	30% 胴部下位以下欠損
4	高台付 坏形土器 土師器	A (13.8) B 6.7 D 7.6 E 1.0	体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。高台は外下方へのび，端部は丸い。	体部外面－水挽き痕は弱い 内面－雑なヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
5	高台付 坏形土器 土師器	D 7.5 E 1.3	高台は外上方へのび，端部は丸い。	高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	30%
6	高台付 坏形土器 土師器	D 7.9 E 0.9	高台は外下方へのびる。内面中位に段を有し，端部は丸い。	底部内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 橙色	30%

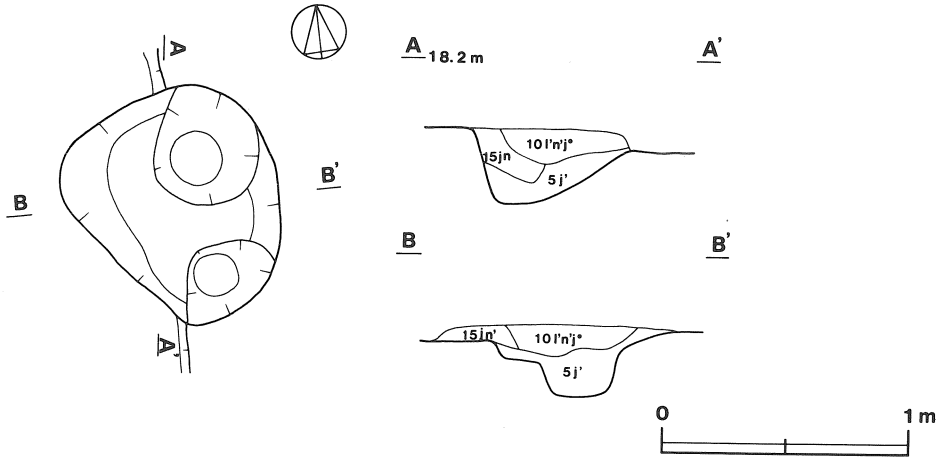
第54号住居跡（第194図）

本跡はK1f$_5$を中心に確認され，第53号住居跡の南側約１ｍ，第９号溝の北側約2.5 ｍに位置している。西側の一部は調査区域外へと延びている。

平面形は3.50m ×（ ）ｍの方形を呈するものと思われ，主軸方向はＮ－90°－Ｅを指している。壁の立ち上がりは不明瞭で，壁高は６～８cmである。床はほぼ平坦で全体によく踏み固められており，カマド周辺は特に堅くなっている。南西部は攪乱を受けており床面がえぐられている。ピットはP$_1$・P$_2$の２か所検出され，それぞれ径20cm・18cm，深さ35cm・21cmであるが主柱穴かどうかは不明である。カマドは東壁中央部のやや南寄りに付設されていたと思われるが，焼土がわずかに残っているだけである。両袖部にある部分にほぼ円形を呈する深さ20cm前後のピットが検出されたが，袖部の補強のための甕などを立てた穴と思われる。覆土は攪乱された部分を除いて自然堆積の様相を呈しており,上層にローム粒子を含む暗褐色土が，下層にローム粒子を多量に含む褐色土が堆積している。

遺物はほとんどなく，土師器の甕形土器片32点，坏形土器片10点，須恵器の甕形土器片４点が出土している。





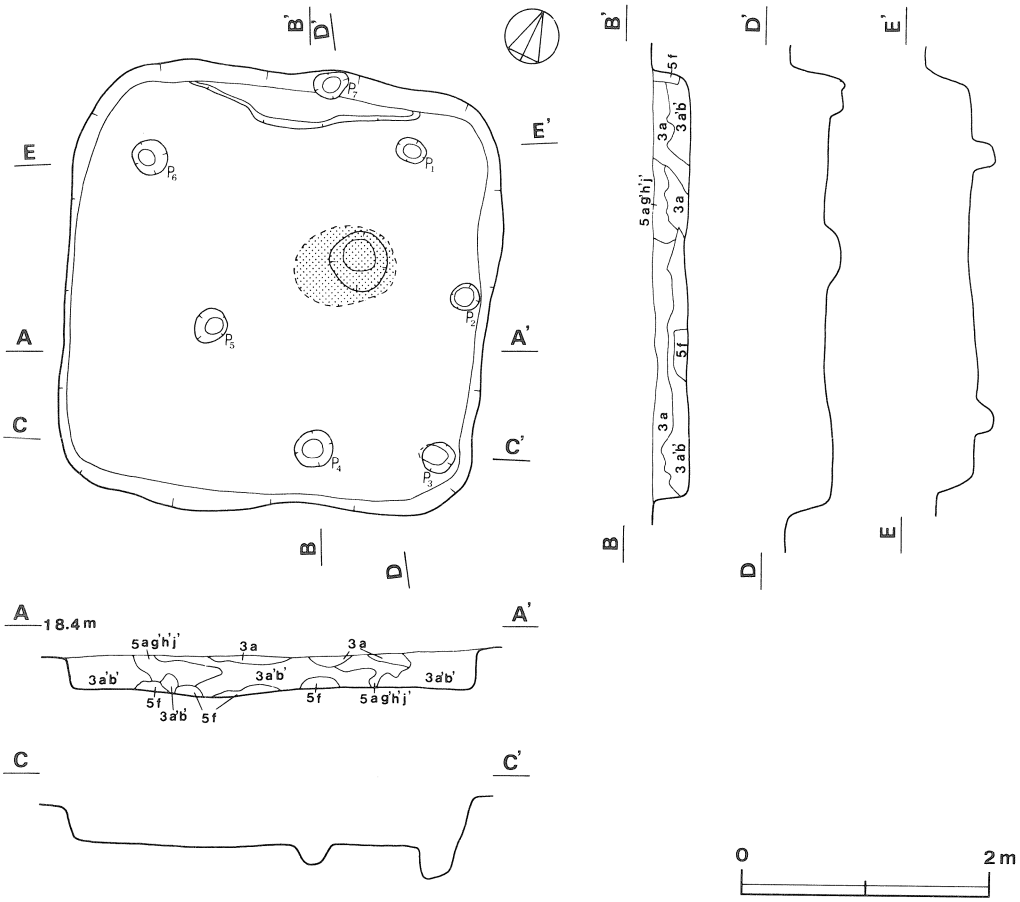
第194図　第54号住居跡・カマド実測図

第55号住居跡（第190図）

本跡はK1b4を中心に確認され，第53号住居跡の北側約４ｍ，第51号住居跡の西側約0.5ｍに位置している。西側部分は調査区域外へ延びている。第52号住居跡と重複しており，本跡の上に第52号住居跡が構築されていることから，本跡の方が古い。

平面形は検出された部分から5.45ｍ×(　)ｍの方形を呈するものと思われ，長軸方向はＮ－8.5°－Ｗを指している。壁は外傾して立ち上がっており，壁高は13～17cmである。床はほぼ平坦であるが全体にやわらかい。ピットはP_1・P_2の２か所が検出され，P_1は径26cm・深さ40cmで本跡に伴うものかどうか不明である。南東コーナー部のP_2は長径100cm・短径65cmの楕円形を呈し，深さ38cmで埦状に掘り込まれており，貯蔵穴と思われる。炉跡もカマドも検出されていない。覆土は自然堆積の状態を示し，ローム粒子を少し含む暗褐色土が大部分である。

遺物は出土していない。



第195図　第56号住居跡実測図

第56号住居跡（第195図）

本跡は$J1g_4$を中心に確認され，第３号土坑の南側約４ｍ，第５号溝の北側約0.5ｍに位置している。

平面形は長軸3.45ｍ・短軸3.40ｍの隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－22°－Ｗを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は30～35cmである。床は壁際よりも中央部が約５cm高くなっており，全体に締まりがあるがそれほど堅くない。北壁下だけに壁溝が検出され，上幅は約18cm・下幅約13cm・深さ約10cmである。ピットはP_1～P_7の７か所検出され，径25～30cm・深さ15～25cmである。P_1・P_3・P_6は径25～30cm・深さ15～25cmで，それぞれコーナー部近くに配置され主柱穴と考えられるが，南西コーナー部近くには検出されていない。炉跡は中央部からやや北寄りに検出され，径約50cmのほぼ円形を呈している。炉床は床を約10cm掘り凹めているが，焼土の量も少なくそれほど焼けていない。覆土は全体に締まりがあるが，ロームブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が複雑な層を呈しており，埋め戻されたものと思われる。

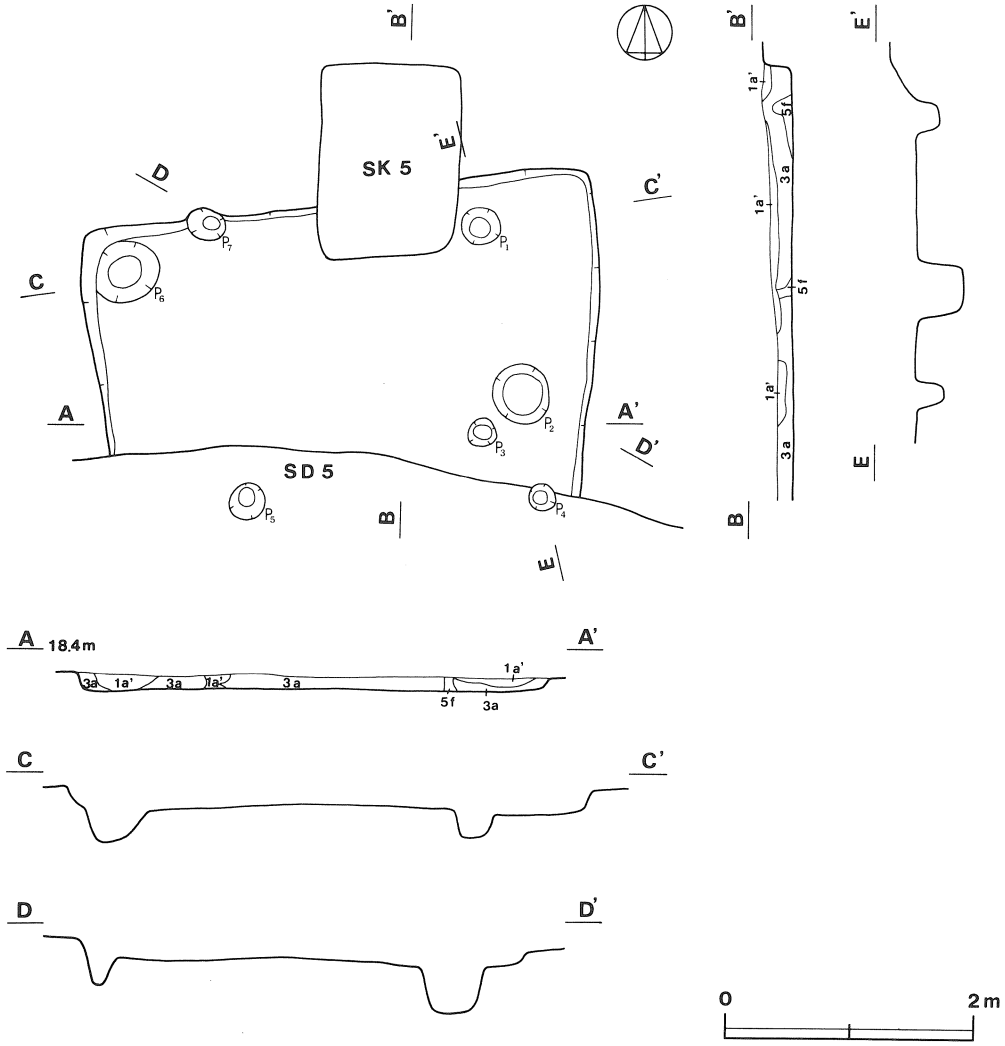
遺物はほとんどなく，土師器の甕形土器片が33点，埦形土器片１点が出土しただけである。

第57号住居跡（第196図）

本跡は$J1g_6$を中心に確認され，第４号土坑の南側約２ｍ，第56号住居跡の東側約６ｍに位置している。第５号溝・第５号土坑と重複しているが，本跡は第５号溝に南側半分を，第５号土坑に北壁を切られており，本跡の方が古い。

平面形は4.20ｍ×(　)ｍの方形を呈するものと思われ，長軸方向はＮ－１°－Ｗを指している。壁は外傾して立ち上がり，壁高は10～15cmである。床は平坦で軟弱である。ピットはP_1～P_7の７か所検出されている。P_1～P_5・P_7は径20～40cm・深さ20～25cmであるが，配置に規則性がなく主柱穴は不明である。北西コーナー部のP_6は径50cmの円形を呈し，深さ28cmで埦状に掘り込まれており貯蔵穴と思われる。炉跡もカマドも検出されていない。覆土はほぼ自然堆積の状態を示しており，上層に黒褐色土，下層に暗褐色土が堆積している。

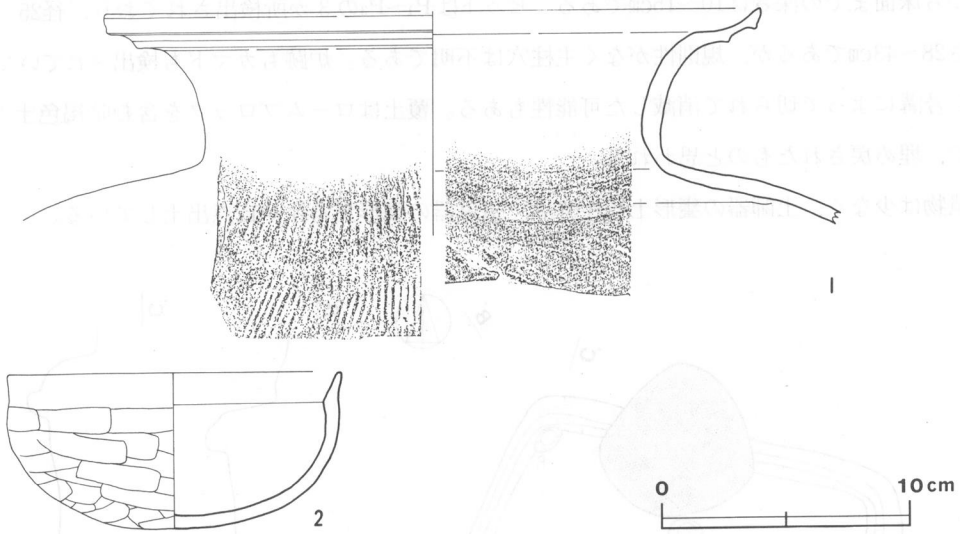
遺物は少なく，北東コーナー部付近の床面から土師器の埦形土器（第197図－２）が完形で，南東寄りの床面から須恵器の甕形土器が出土している。



第196図　第57号住居跡実測図

出土土器観察表（第197図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形　土器 須恵器	A (26.3)	体部は大きく張り，頸部は外反しながら立ち上がる。口縁部は大きく開き，端部は外上方へつまみ出され，口縁直下には段を有する。	口縁部内・外面，頸部内面－横ナデ　頸部外面－カキ目調整後横ナデ　体部外面－斜位の平行叩き　内面－ナデ	砂粒・細砂 良好 灰色	20%　口縁部内面・肩部に黄灰色のふりもの
2	埦形　土器 土師器	A　13.4 B　6.3	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く外傾する。内面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 赤色	100% 内・外面赤彩

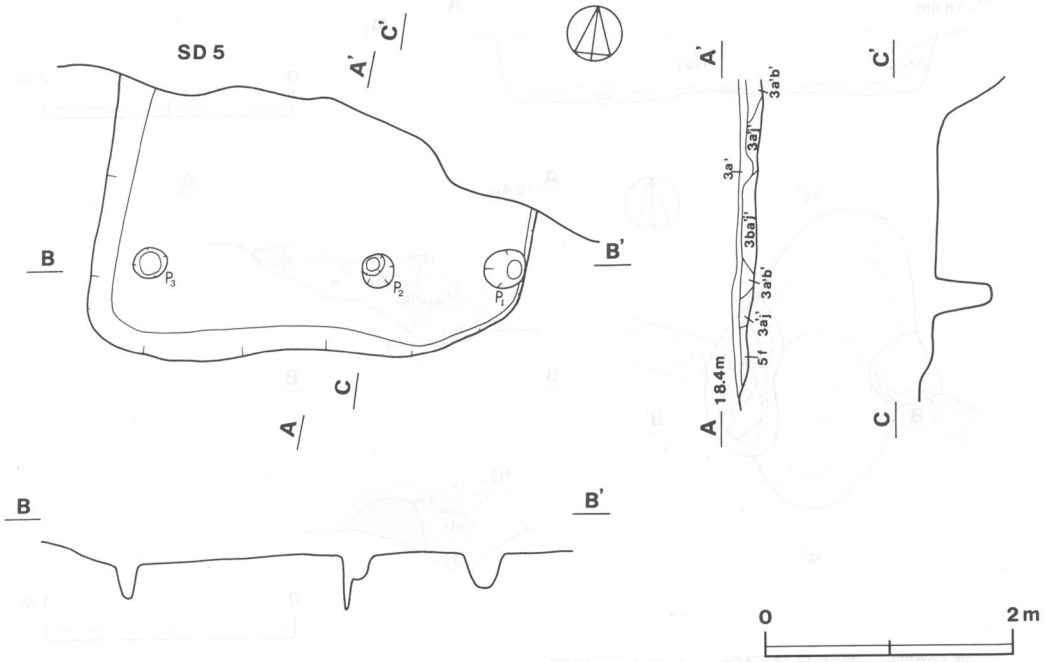


第197図　第57号住居跡出土遺物実測図

第58号住居跡（第198図）

本跡はJ1i 8を中心に確認され，第６号溝の北側約３ｍに位置している。第５号溝と重複しており，本跡の北側部分は第５号溝によって切られていることから，本跡の方が古い。

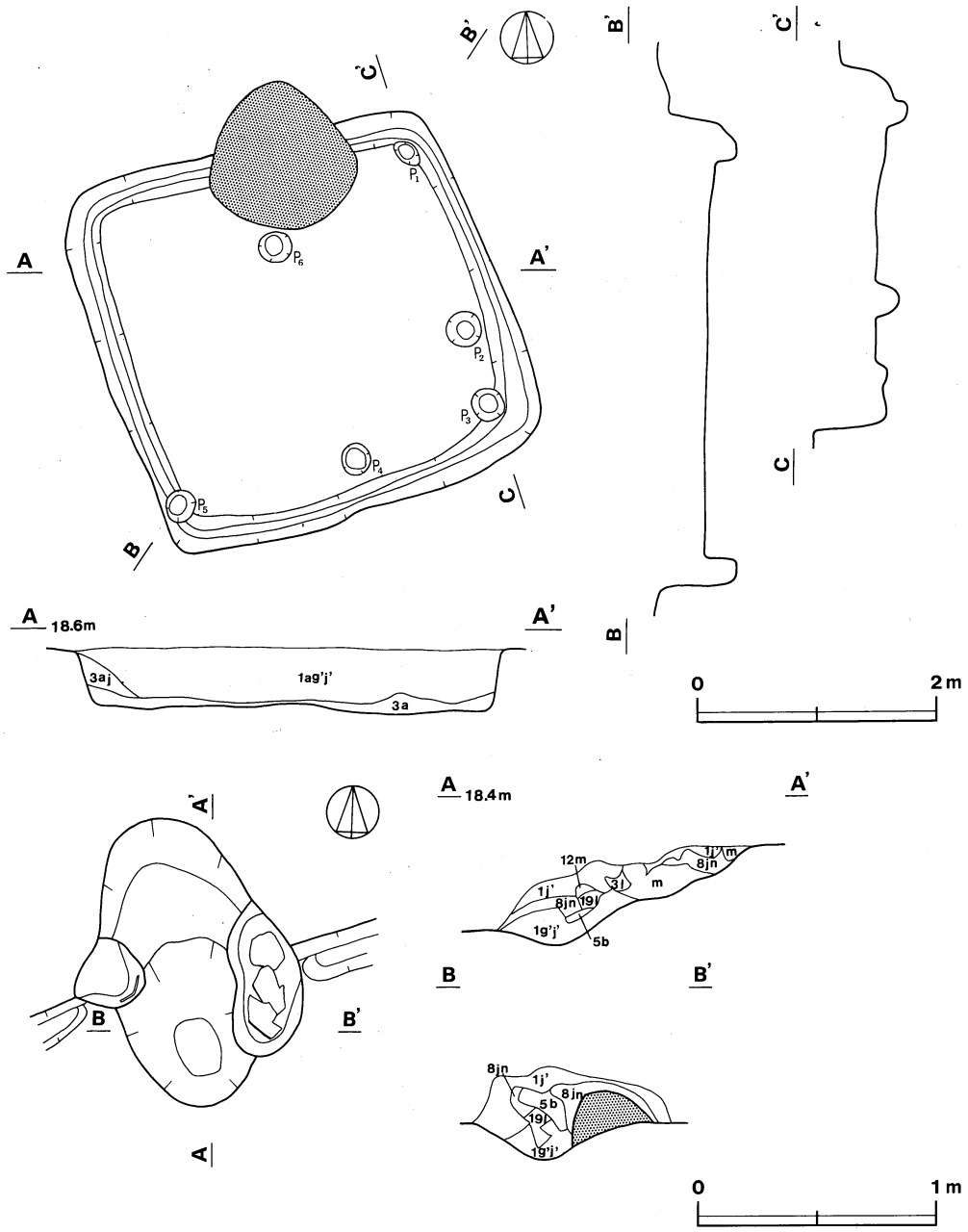
平面形は3.50ｍ×(　)ｍの方形を呈するものと思われるが，全体に遺存状態が悪い。長軸方向はＮ－０°である。壁は崩れが目立ち立ち上がりは不明瞭で，床面との境もはっきりしない。確認



第198図　第58号住居跡実測図

面から床面までの深さは10～15cmである。ピットはP_1～P_3の3か所検出されており，径25～33cm・深さ28～43cmであるが，規則性がなく主柱穴は不明である。炉跡もカマドも検出されていないが，第5号溝によって切られて消滅した可能性もある。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が大部分で，埋め戻されたものと思われる。

遺物は少なく，土師器の甕形土器片67点，須恵器の甕形土器片が12点出土している。



第199図　第59号住居跡・カマド実測図

第59号住居跡（第199図）

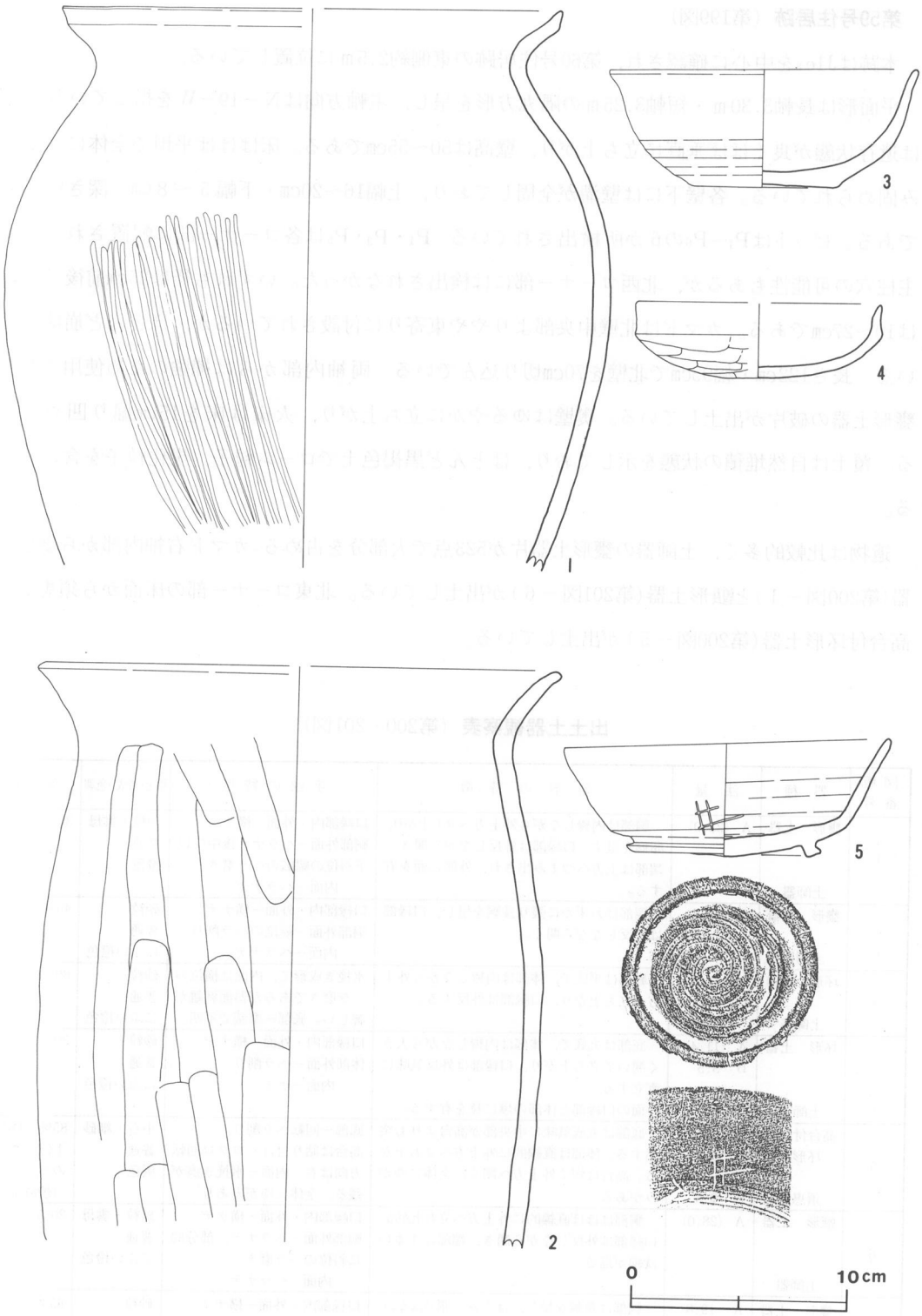
本跡はJ1e8を中心に確認され，第60号住居跡の東側約2.5mに位置している。

平面形は長軸3.30m・短軸3.25mの隅丸方形を呈し，主軸方向はN－19°－Wを指している。壁は遺存状態が良くほぼ垂直に立ち上がり，壁高は50～55cmである。床はほぼ平坦で全体によく踏み固められている。各壁下には壁溝が全周しており，上幅16～20cm・下幅5～8cm・深さ約5cmである。ピットはP_1～P_6の6か所検出されている。P_1・P_3・P_5は各コーナー部に配置されており主柱穴の可能性もあるが，北西コーナー部には検出されなかった。いずれも径は25cm前後で深さは10～27cmである。カマドは北壁中央部よりやや東寄りに付設されているが，ほとんど崩壊している。長さ122cm・幅95cmで北壁を70cm切り込んでいる。両袖内部からは補強のため使用された甕形土器の破片が出土している。奥壁はゆるやかに立ち上がり，火床は床を15cm掘り凹めている。覆土は自然堆積の状態を示しており，ほとんど黒褐色土でローム粒子，炭化粒子を含んでいる。

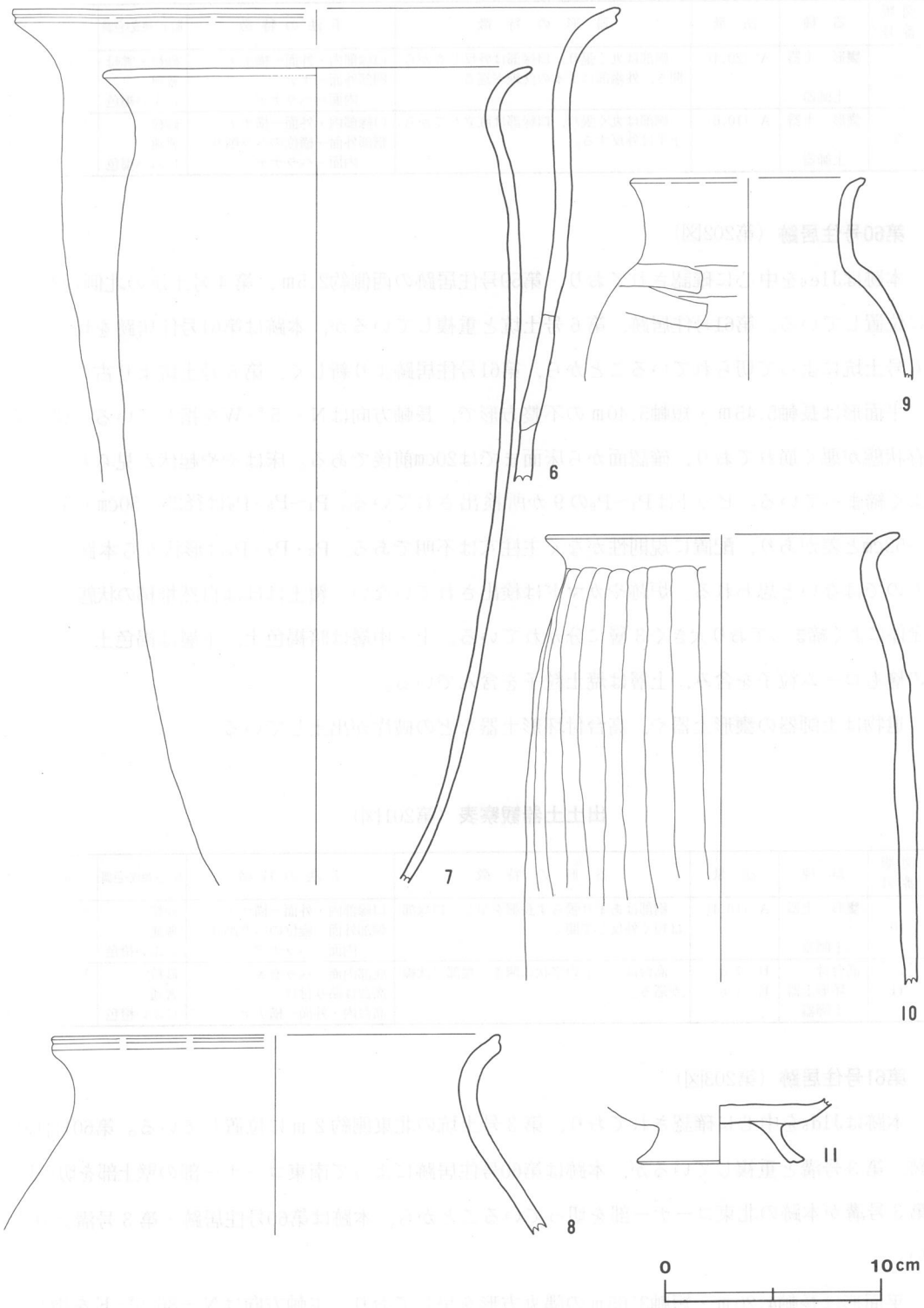
遺物は比較的多く，土師器の甕形土器片が523点で大部分を占める。カマド右袖内部から甕形土器（第200図－1）と甑形土器（第201図－6）が出土している。北東コーナー部の床面から須恵器の高台付坏形土器（第200図－5）が出土している。

出土土器観察表（第200・201図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A (23.0)	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，卵形を呈す。口縁部は外反しながら開き，端部は上方へつまみ出され，外側に面を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ後中位以下斜位の幅広のヘラ磨き 内面－ヘラナデ	砂粒・雲母 普通 橙色	30%
2	甕形土器 土師器	A (23.8)	胴部はわずかに張り長胴を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%
3	坏形土器 土師器	A 14.3 B 5.5	底部は平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反する。	水挽き成形で，内面は横位のヘラ磨きであるが器面剝離が著しい。底部－摩滅で不明。	砂粒 普通 にぶい橙色	80%
4	坏形土器 土師器	A (11.4) B 3.5	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。 外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
5	高台付坏形土器 須恵器	A 15.1 B 5.7 D 8.0 E 0.5	底部は丸底気味に中央部が高台よりも突出する。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。高台は短く外上方へ開く。全体にゆがみがある。	底部－回転ヘラ削り 高台は貼り付け　ロクロ回転方向は右　内面－水挽き痕が残る。全体にゆがみあり	小石・細砂 普通 灰色	85%　体部下位「#」のヘラ記号（焼成前）
6	甑形土器 土師器	A (28.0)	胴部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反しながら開き，端部に1本の沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラナデ，部分的に斜位のヘラ磨き 内面－ヘラナデ	砂粒・雲母 普通 にぶい橙色	20%
7	甕形土器 土師器	A 19.8	胴部は長胴を呈し，ほとんど張りはない。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	65%



第200図　第59号住居跡出土遺物実測図



第201図　第59・60号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
8	甕形土器 土師器	A (20.4)	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら開き，外端部に1本の沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ 内面－ヘラナデ	砂粒・雲母 普通 にぶい褐色	20%
9	甕形土器 土師器	A (10.6)	胴部は丸く張り，口縁部は直立してから上半は外反する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	20%

第60号住居跡（第202図）

本跡はJ1e$_6$を中心に確認されており，第59号住居跡の西側約2.5m，第4号土坑の北側約2.5mに位置している。第61号住居跡，第6号土坑と重複しているが，本跡は第61号住居跡を切り，第6号土坑によって切られていることから，第61号住居跡より新しく，第6号土坑より古い。

平面形は長軸5.45m・短軸5.40mの不整方形で，長軸方向はN－5°－Wを指している。壁は遺存状態が悪く崩れており，確認面から床面までは20cm前後である。床はやや起伏が見られ全体によく締まっている。ピットはP_1～P_9の9か所検出されている。P_1～P_5・P_9は径25～50cm・深さ16～52cmと差があり，配置に規則性がなく主柱穴は不明である。P_6・P_7・P_8は形状から本跡に伴うものではないと思われる。炉跡やカマドは検出されていない。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し，全体によく締まっており大きく3層に分かれている。上・中層は暗褐色土，下層は褐色土でいずれの層もローム粒子を含み，上層は焼土粒子を含んでいる。

遺物は土師器の甕形土器や，高台付坏形土器などの破片が出土している。

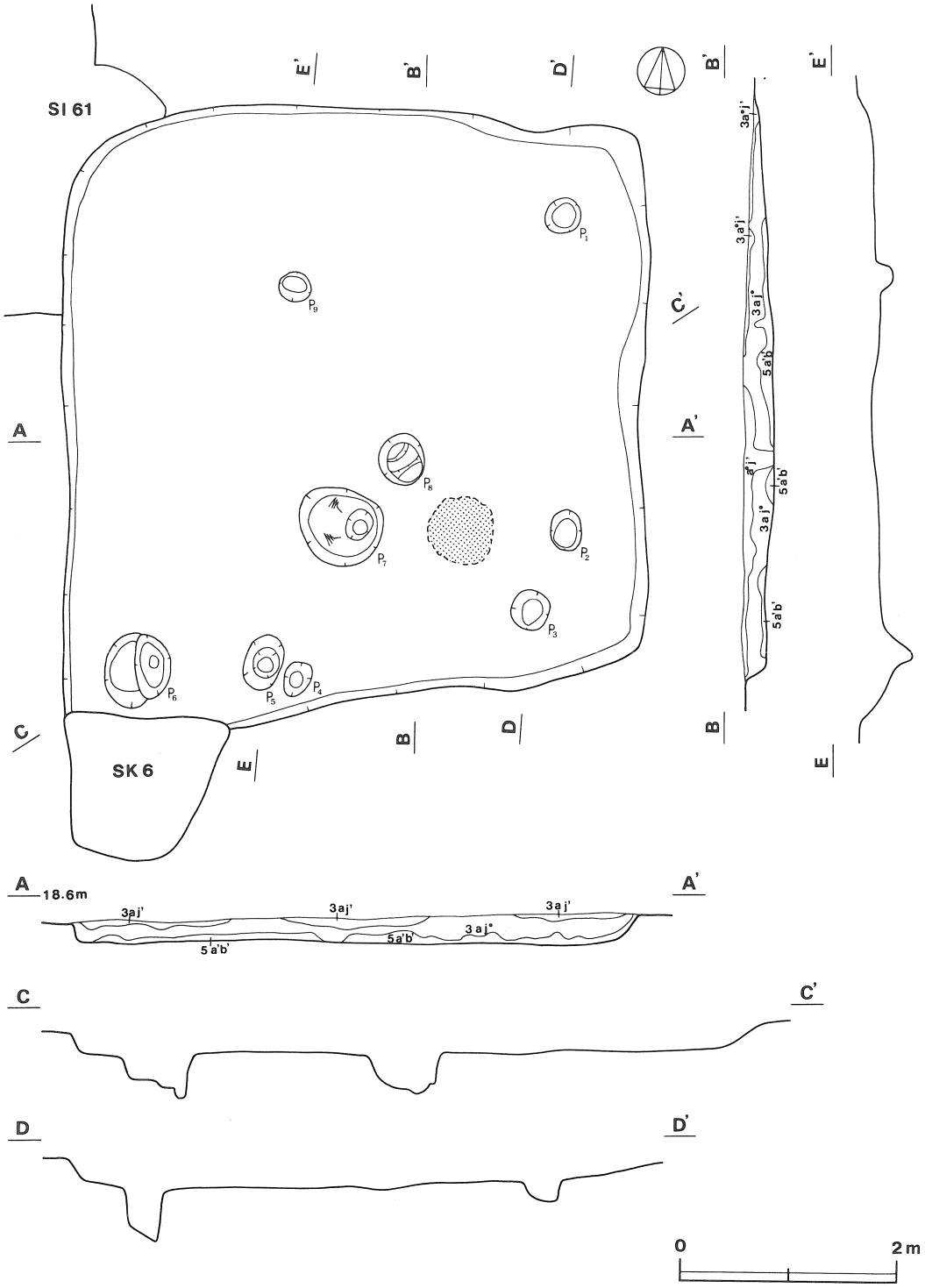
出土土器観察表（第201図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
10	甕形土器 土師器	A (16.4)	胴部はあまり張らず長胴を呈し，口縁部は短く外反して開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	20%
11	高台付坏形土器 土師器	D 7.0 E 1.8	高台は「ハ」の字状に開き，端部に沈線が巡る。	底部内面－ヘラ磨き 高台は貼り付け 高台内・外面－横ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	10%

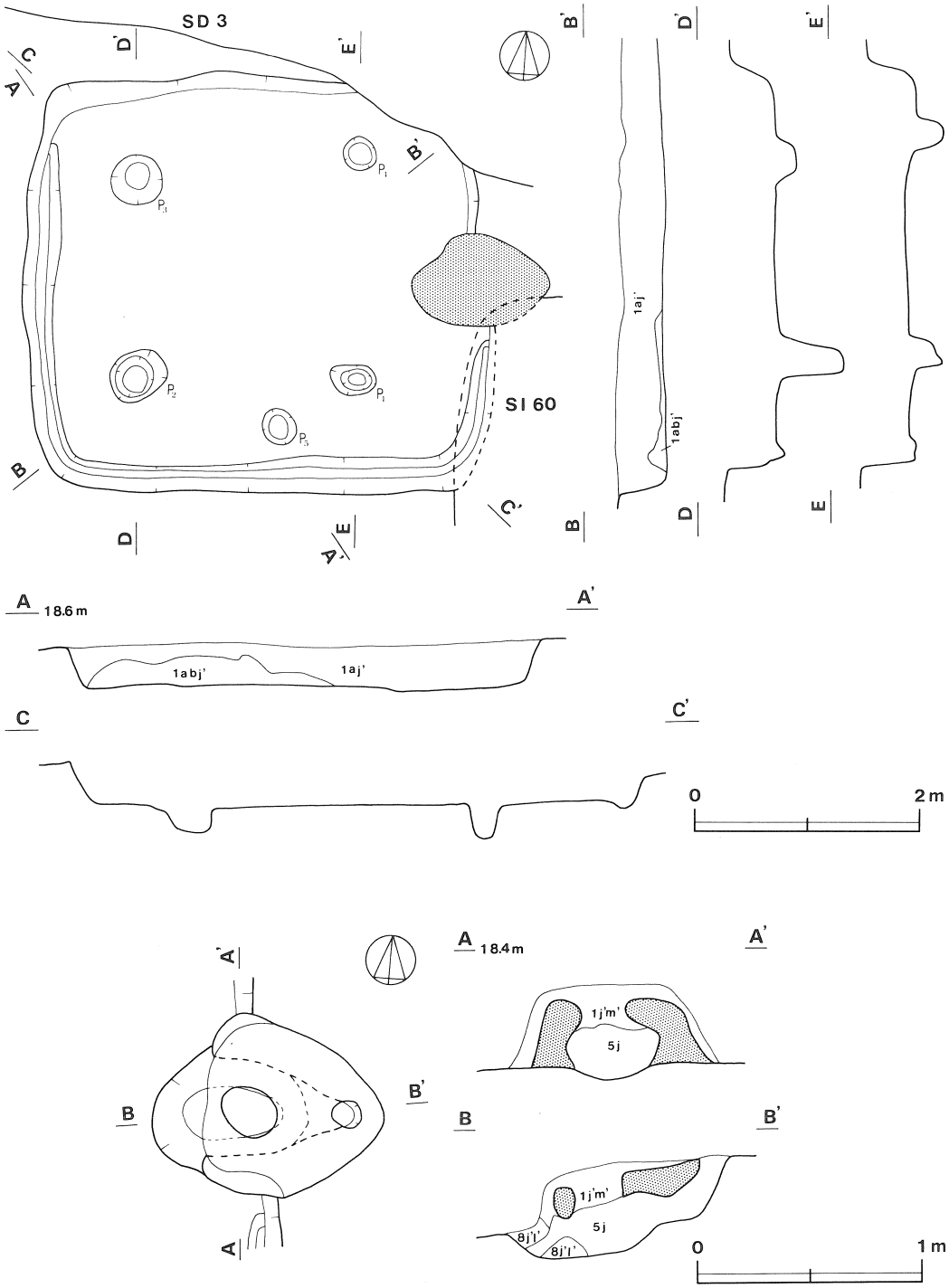
第61号住居跡（第203図）

本跡はJ1d$_5$を中心に確認されており，第3号土坑の北東側約2mに位置している。第60号住居跡，第3号溝と重複しているが，本跡は第60号住居跡によって南東コーナー部の壁上部を切られ，第3号溝が本跡の北東コーナー部を切っていることから，本跡は第60号住居跡・第3号溝より古い。

平面形は長軸4.20m・短軸3.65mの隅丸方形を呈しており，主軸方向はN－86.5°－Eを指している。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は約45cmである。カマドの南側の東壁と南・西壁下には壁溝が周回しており，上幅20～25cm・下幅8～18cm・深さ約5cmである。北壁からカマドにかけて



第202図　第60号住居跡実測図



第203図　第61号住居跡・カマド実測図

は大きく攪乱を受けているため，壁の立ち上がりは悪く壁溝は検出できなかった。床はほぼ平坦で全体に締まりがあり，カマドから中央部にかけてはよく踏み固められている。ピットはP_1～P_5の5か所検出されているが，P_1～P_4は径30～45cm・深さはP_2の60cmを除いて25～28cmで，ほぼ対角線上に配置されており主柱穴と思われる。カマドは東壁中央部に付設してあり，比較的遺存状態は良好である。長さ105cm・幅80cm・焚口幅43cmで，東壁を50cm切り込んでいる。火床は床を12cm掘り凹め，奥壁は約60°の傾斜で立ち上がり径約13cmの煙道へ続いている。覆土は北壁からカマドにかけての攪乱部を除いて，ほぼ自然堆積の様相を呈し，ローム粒子を含む黒褐色土が大部分である。

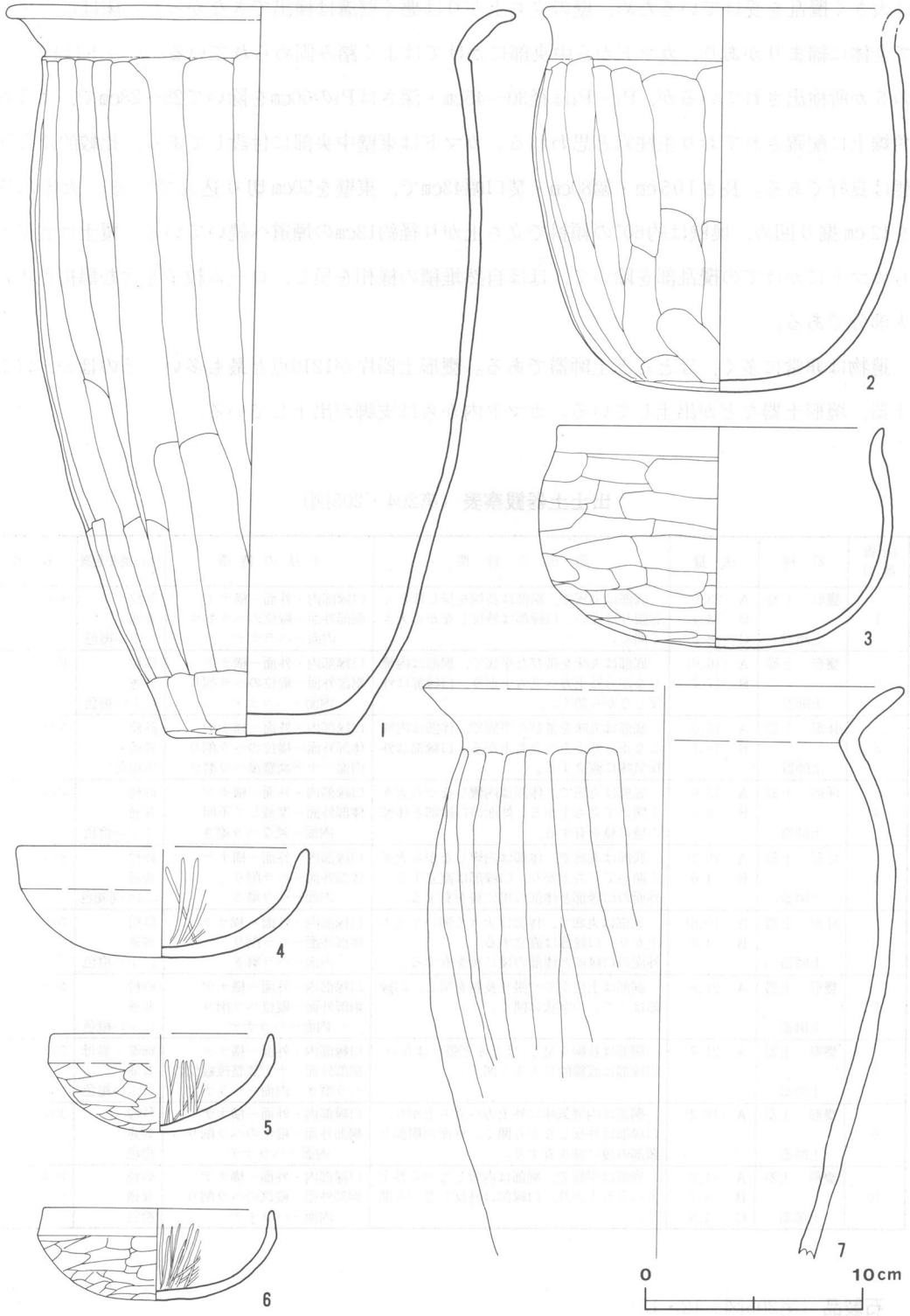
遺物は非常に多く，ほとんど土師器である。甕形土器片が1219点と最も多い。そのほか，坏形土器，椀形土器などが出土している。カマド内からは支脚が出土している。

出土土器観察表（第204・205図）

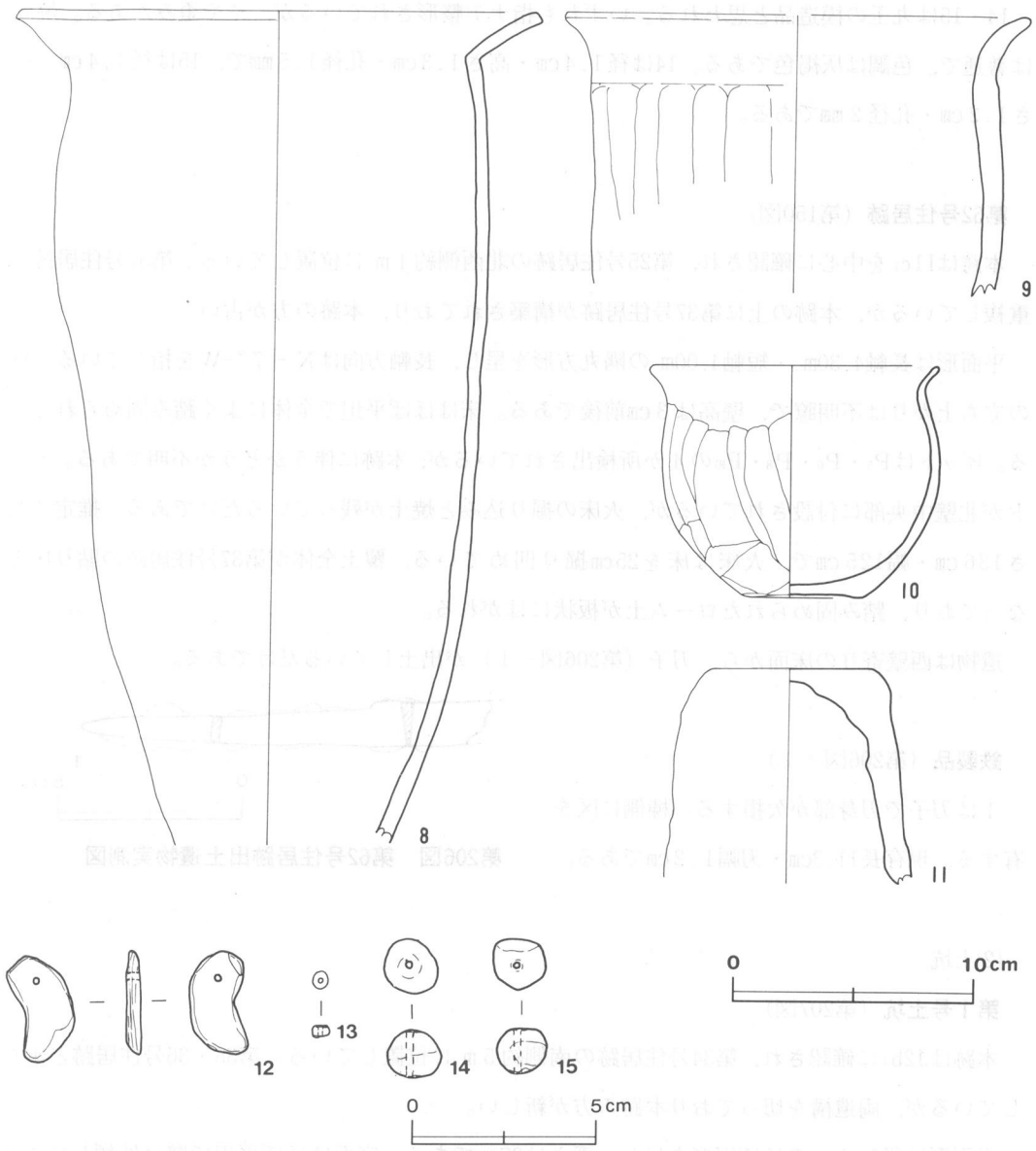
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形 土器 土師器	A 23.0 B 33.4 C (8.2)	底部は平底で，胴部は長胴を呈しほとんど張りはない。口縁部は外反しながら大きく開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	90%
2	甕形 土器 土師器	A (16.0) B 17.7	底部は丸味を帯びた平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	40%
3	鉢形 土器 土師器	A 15.0 B 10.1	底部は丸味を帯びた平底で，体部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部は外反気味に直立する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－横位のヘラ削り 内面－ナデ調整後ヘラ磨き	砂粒 普通 灰褐色	70%
4	坏形 土器 土師器	A 13.6 B 6.0	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がる。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－摩滅して不明 内面－雑なヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	45%
5	坏形 土器 土師器	A (10.2) B 4.6	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30%
6	坏形 土器 土師器	A (10.6) B 4.3	底部は丸底で，体部は大きく開いて立ち上がり，口縁部は直立する。 外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	70%
7	甕形 土器 土師器	A (21.8)	胴部は上位がやや張り長胴を呈し，口縁部は「く」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	40%
8	甕形 土器 土師器	A 21.7	胴部は長胴を呈し，ほとんど張りはない。口縁部は直線的に大きく開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ナデ調整後縦位のヘラ磨き　内面－ヘラナデ	細礫・雲母 普通 にぶい褐色	70%
9	甕形 土器 土師器	A (18.2)	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開く。外面の胴部と頸部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	30%
10	甕形 土器 土師器	A 11.9 B 9.7 C 4.8	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	70%

石製品（第205図－12・13）

12は勾玉の模造品である。板状を呈し，全面雑に研磨されている。長さ2.9cm・幅1.5cm・腹部幅1.2cm・厚さ0.5cmで，石質は滑石である。



第204図　第61号住居跡出土遺物実測図（1）



第205図　第61号住居跡出土遺物実測図（2）

13は臼玉である。側面を縦方向に研磨し，ほぼ円形に仕上げている。上下面とも平坦に研磨されている。径4.8㎜・長さ2.3㎜・孔径1.8㎜で，石質は滑石である。

土製品（第205図－11・14・15）

11は支脚である。上面は平坦で，下に向かってわずかに開く。空洞で下部が欠損しており，コップを倒立させたような形である。手捏ねにより整形され，指頭痕が残る。加熱によりもろくなっており，にぶい赤褐色を呈する。上面径7.1㎝・現存高8.8㎝である。

14・15は丸玉の模造品と思われる。いずれも指ナデ整形されているが，やや歪みがある。焼成は普通で，色調は灰褐色である。14は径1.4cm・高さ1.3cm・孔径1.5mmで，15は径1.4cm・高さ1.2cm・孔径2mmである。

第62号住居跡（第150図）

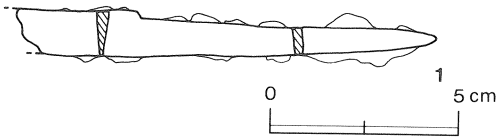
本跡は$I1c_7$を中心に確認され，第25号住居跡の北西側約1m に位置している。第37号住居跡と重複しているが，本跡の上に第37号住居跡が構築されており，本跡の方が古い。

平面形は長軸4.30m ・短軸4.00m の隅丸方形を呈し，長軸方向はN－7°-Wを指している。壁の立ち上がりは不明瞭で，壁高は3cm前後である。床はほぼ平坦で全体によく踏み固められている。ピットはP_5・P_6・P_8・P_{10}の4か所検出されているが，本跡に伴うかどうか不明である。カマドが北壁中央部に付設されているが，火床の掘り込みと焼土が残っているだけである。推定で長さ136cm・幅125cmで，火床は床を25cm掘り凹めている。覆土全体が第37号住居跡の貼り床となっており，踏み固められたローム土が板状にはがれる。

遺物は西壁寄りの床面から，刀子（第206図－1）が出土しているだけである。

鉄製品（第206図－1）

1は刀子で刀身部が欠損する。棟側に区を有する。現存長11.3cm・刃幅1.2cmである。



第206図　第62号住居跡出土遺物実測図

(2)土坑

第1号土坑（第207図）

本跡は$J2b_3$に確認され，第34号住居跡の南側約5m に位置している。第35・36号住居跡と重複しているが，両遺構を切っており本跡の方が新しい。

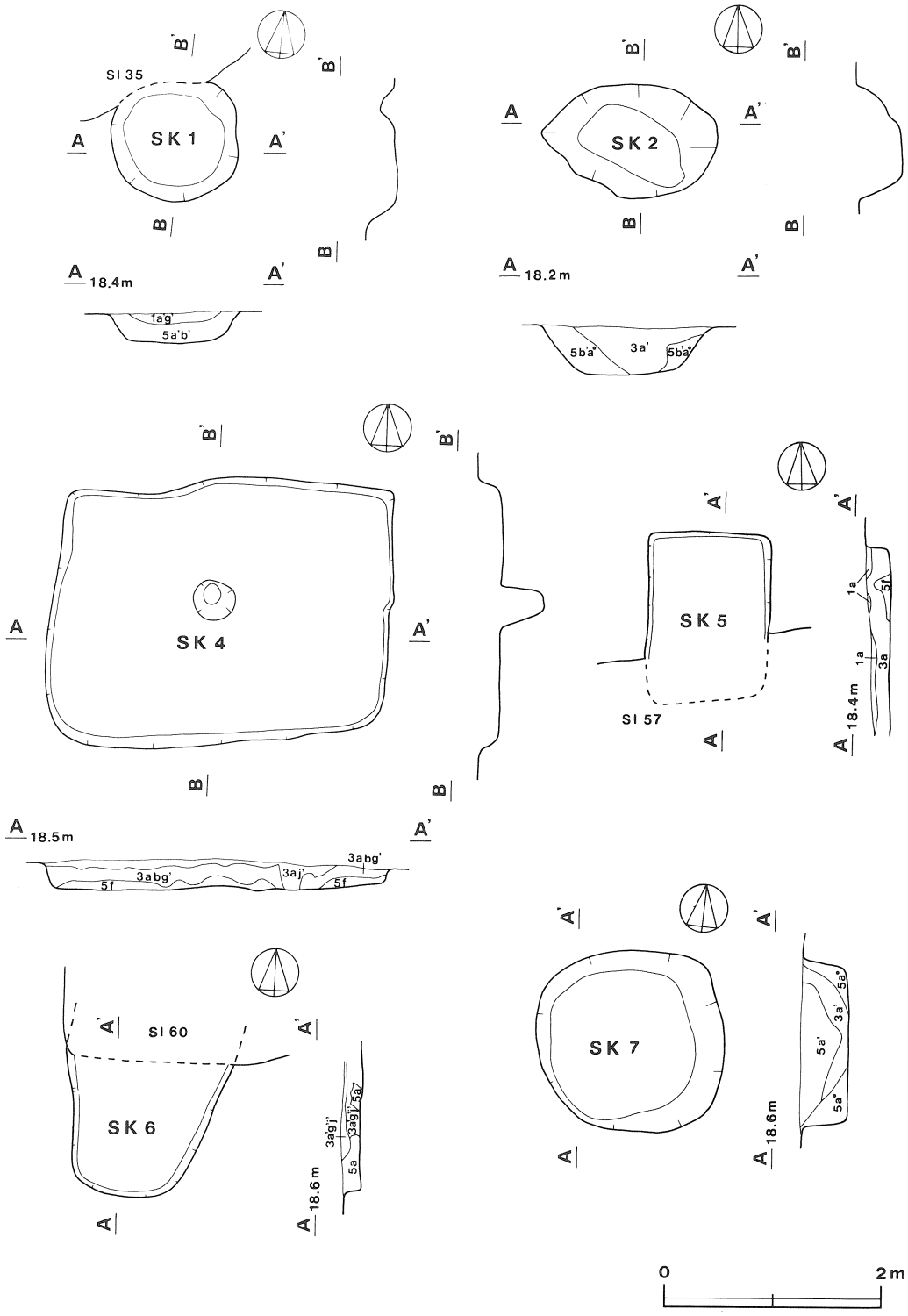
平面形は径1.1m のほぼ円形を呈し，深さは27cmである。底面はほぼ平坦で壁は外傾して立ち上がっている。覆土は自然堆積の状態を示し2層に分かれ，上層は黒褐色土，下層は褐色土で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

第2号土坑（第207図）

本跡は$K1h_8$に確認され，第47号住居跡の西側約0.5m に位置している。

平面形は長径1.65m ・短径1.05m の不整楕円形を呈し，長径方向はN－86°-Wを指している。深さは40cmで，底面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し2層に分かれ，上層は暗褐



第207図　第１・２・４～７号土坑実測図

色土，下層は褐色土である。いずれもローム粒子を含み締まりがある。

遺物は出土していない。

第4号土坑（第207図）

本跡はJ1f$_7$に確認され，第60号住居跡の南側約2.5m，第5号土坑の北約1mに位置している。

平面形は長軸3.1m・短軸2.5mの不整方形を呈し，長軸方向はN－88°－Eを指している。壁はやや外傾し，深さ20cmである。底面は平坦で，中央に径40cmの円形で深さ42cmのピットがある。覆土は自然堆積の状態を示し3層に分かれ，上・中層は暗褐色土，下層は褐色土で全体に締まりがある。

遺物は出土していない。

第5号土坑（第207図）

本跡はJ1g$_7$に確認され，第4号土坑の南側約1mに位置している。第57号住居跡と重複しており，第57号住居跡を切っており本跡の方が新しい。

平面形は長軸1.5m・短軸1.1mの方形を呈し，長軸方向はN－3°－Eを指している。深さは25cmで，壁はやや外傾して立ち上がり，底面は平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し，ローム粒子を含む暗褐色土が主である。

遺物は出土していない。

第6号土坑（第207図）

本跡はJ1f$_6$に確認され，第4号土坑の北西側約1.5mに位置している。第60号住居跡と重複しているが，第60号住居跡を切っており本跡の方が新しい。

平面形は長軸(　)m・短軸1.2mの不整方形を呈し，長軸方向はN－5°－Eを指している。深さは20cmで，壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。覆土は暗褐色土が主であるが攪乱を受けている。

遺物は出土していない。

第7号土坑（第207図）

本跡はJ1f$_0$に確認され，第59号住居跡の南東側約6.5mに位置している。

平面形は径1.7mの円形を呈している。深さは45cmで，壁は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し，褐色土が主で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

第3号土坑（第208図）

本跡はJ1e4に確認され，第56号住居跡の北側約4m，第61号住居跡の南西側約2mに位置している。

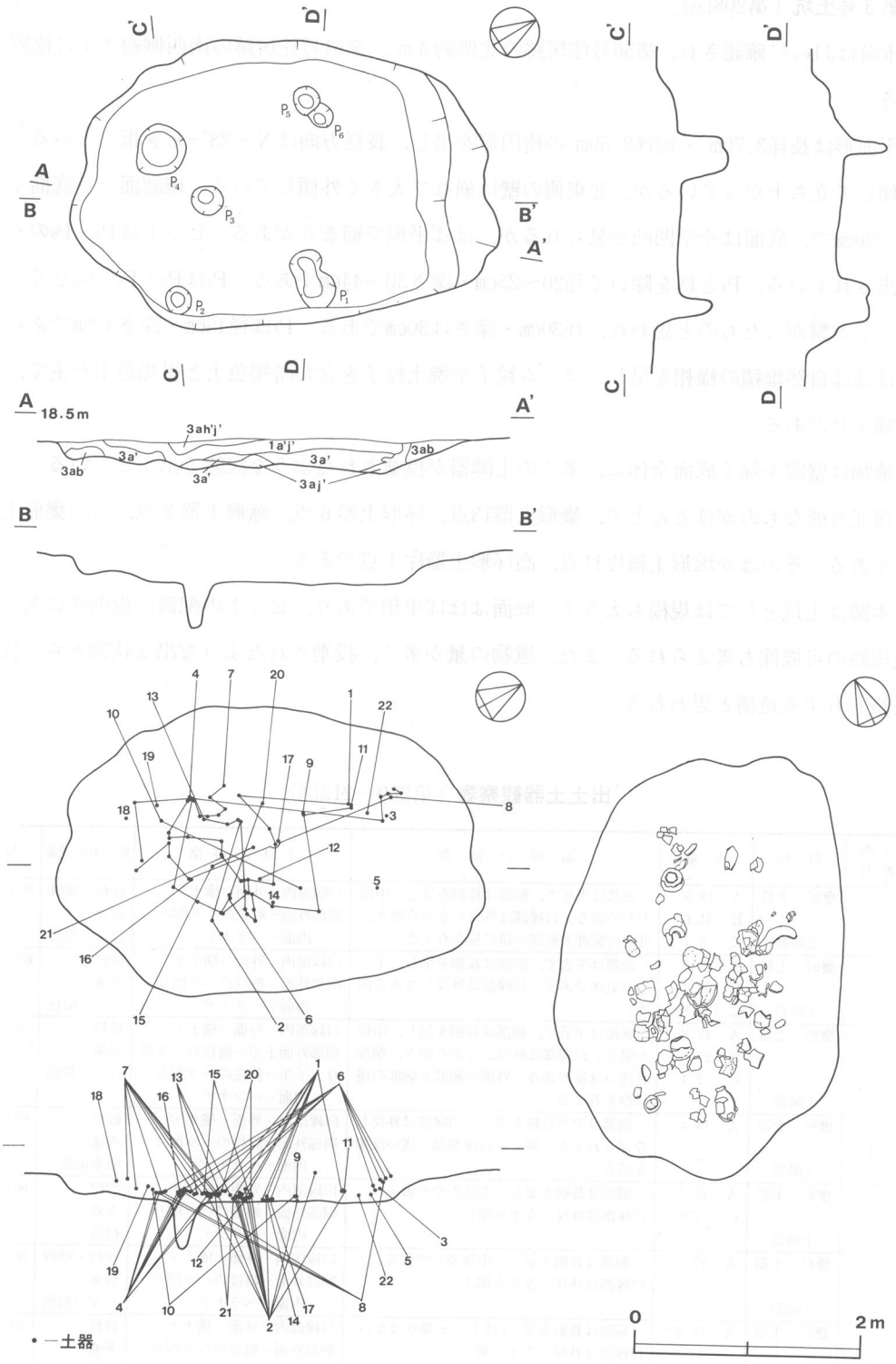
平面形は長径3.70m・短径2.50mの楕円形を呈し，長径方向はN－28°－Eを指している。壁は外傾して立ち上がっているが，北東側の壁は崩れて大きく外傾している。確認面から底面までは23～28cmで，底面はやや凹凸が見られるが，ほぼ平坦で締まりがある。ピットはP_1～P_6の6か所検出されている。P_1とP_4を除いて径20～25cm・深さ30～44cmである。P_1はP_5・P_6と同じく2つのピットが繋がったものと思われ，径30cm・深さは30cmである。P_4は径45cm・深さ42cmである。覆土はほぼ自然堆積の様相を呈し，ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土と黒褐色土が主で，全体に締まりがある。

遺物は壁際を除く底面全体に，多くの土師器が投棄されたような状態で出土している。いずれも復元可能なものがほとんどで，甕形土器13点，坏形土器6点，甑形土器2点，台付甕形土器1点である。そのほか椀形土器片11点，高坏形土器片1点である。

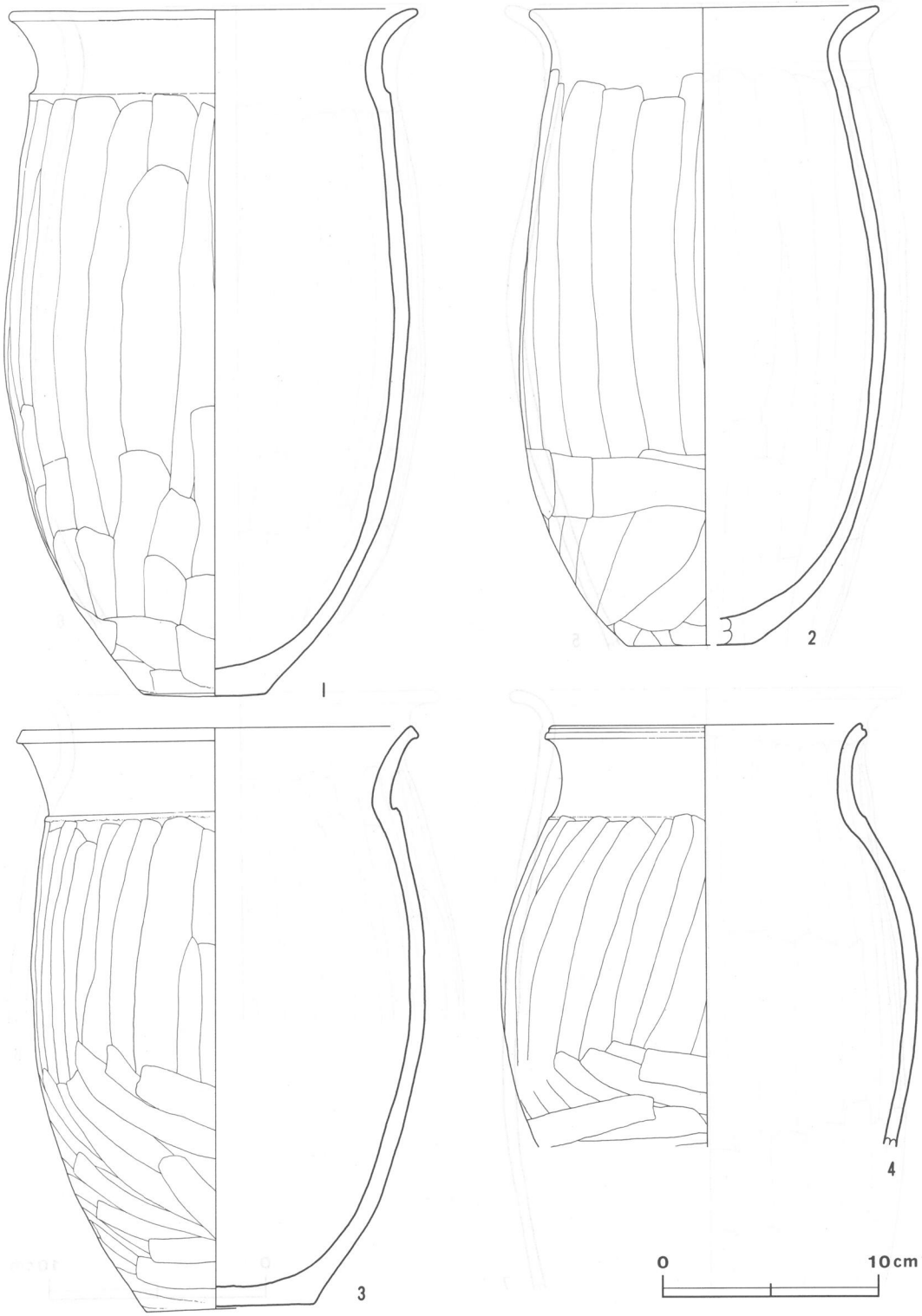
本跡は土坑としては規模も大きく，底面はほぼ平坦であり，ピットの配置は規則性に欠けるが住居跡の可能性も考えられる。また，遺物の量が多く，投棄されたような出土状態から，特別な性格を有する遺構と思われる。

出土土器観察表（第209～212図）

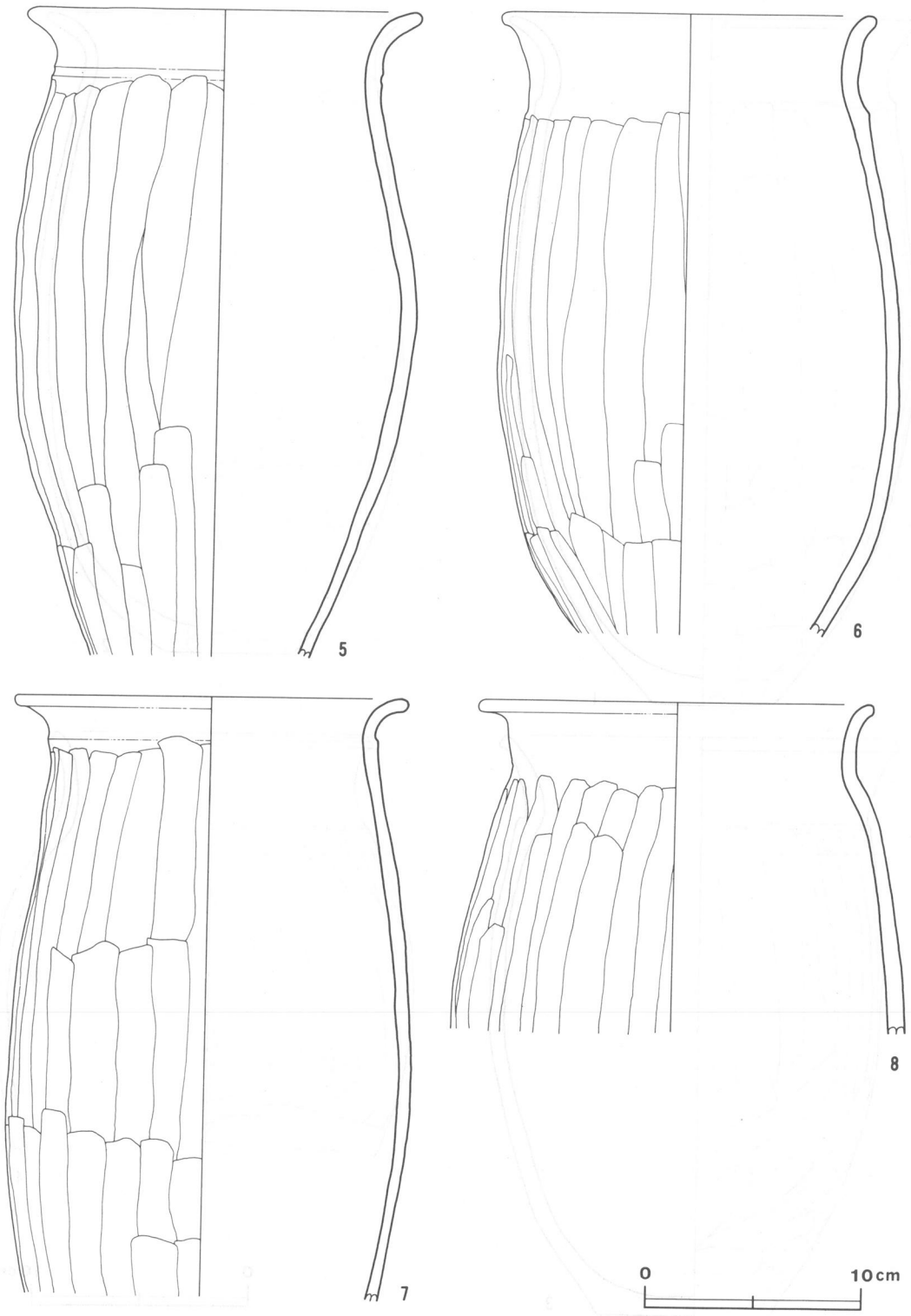
図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	甕形土器 土師器	A 18.8 B 31.6 C 5.7	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，中位がやや張る。口縁部は外反しながら開き，外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	85%
2	甕形土器 土師器	A 15.6 B 29.4 C（5.8）	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，下ぶくれ気味である。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい褐色	60%
3	甕形土器 土師器	A 17.8 B 27.0 C 7.4	底部は平底で，胴部は長胴を呈し，中位が張る。口縁部は外反しながら開き，端部に浅い沈線が巡る。外面の頸部と胴部の境に段を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上半－縦位のヘラ削り。下半－斜位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	70%
4	甕形土器 土師器	A 14.4	胴部はやや長胴を呈し，口縁部は外反しながらわずかに開く。口縁端部に浅い沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－斜位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	60%
5	甕形土器 土師器	A 17.7 C 7.9	胴部は長胴を呈し，中位がやや張る。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	60%
6	甕形土器 土師器	A 17.0	胴部は長胴を呈し，中位がやや張る。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	65%
7	甕形土器 土師器	A 18.2	胴部は長胴を呈し，ほとんど張りはない。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	40%
8	甕形土器 土師器	A 17.7	胴部は長胴を呈し，中位が張る。口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 明赤褐色	30%



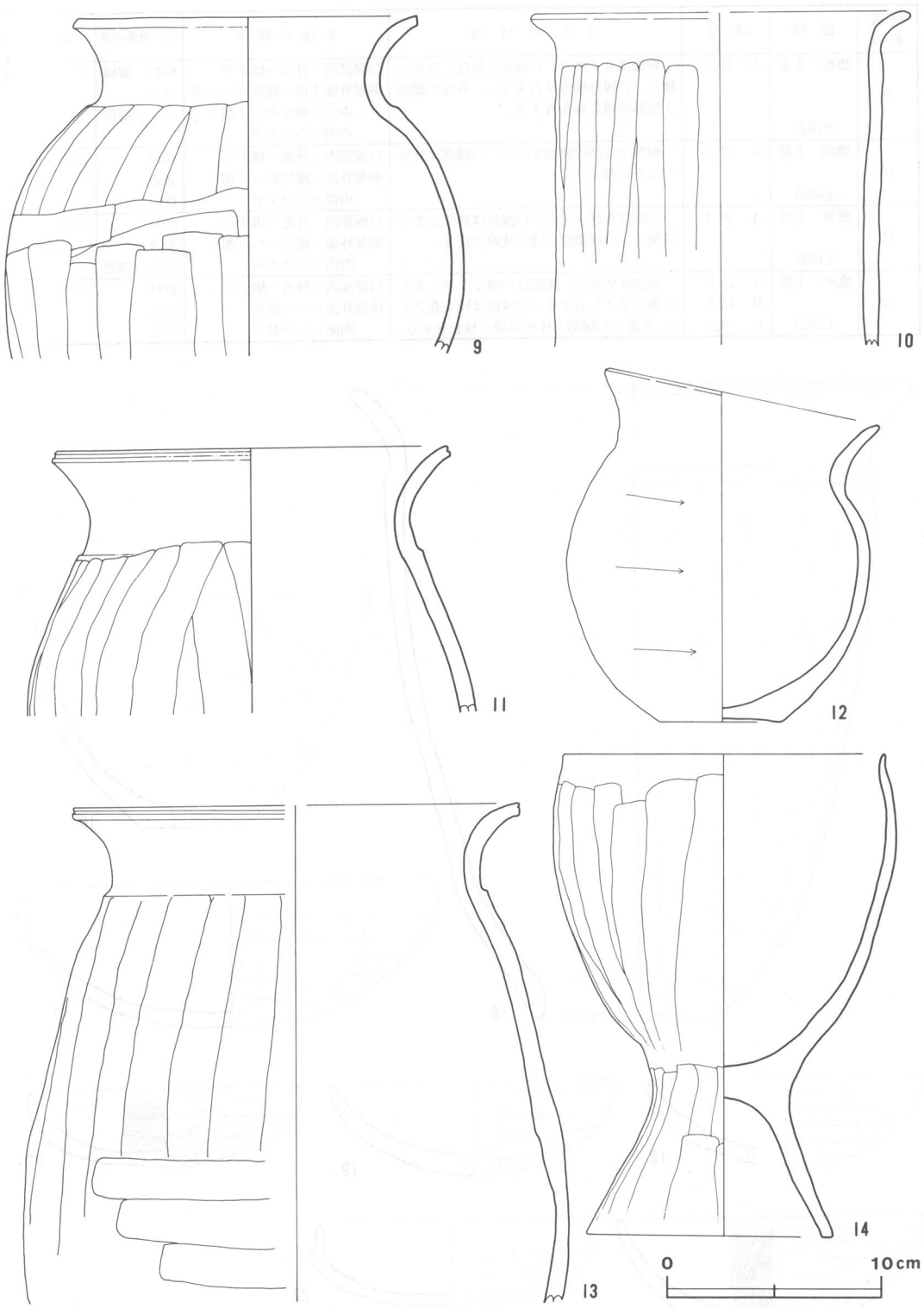
第208図　第３号土坑実測図・遺物出土状態図



第209図　第３号土坑出土遺物実測図(1)

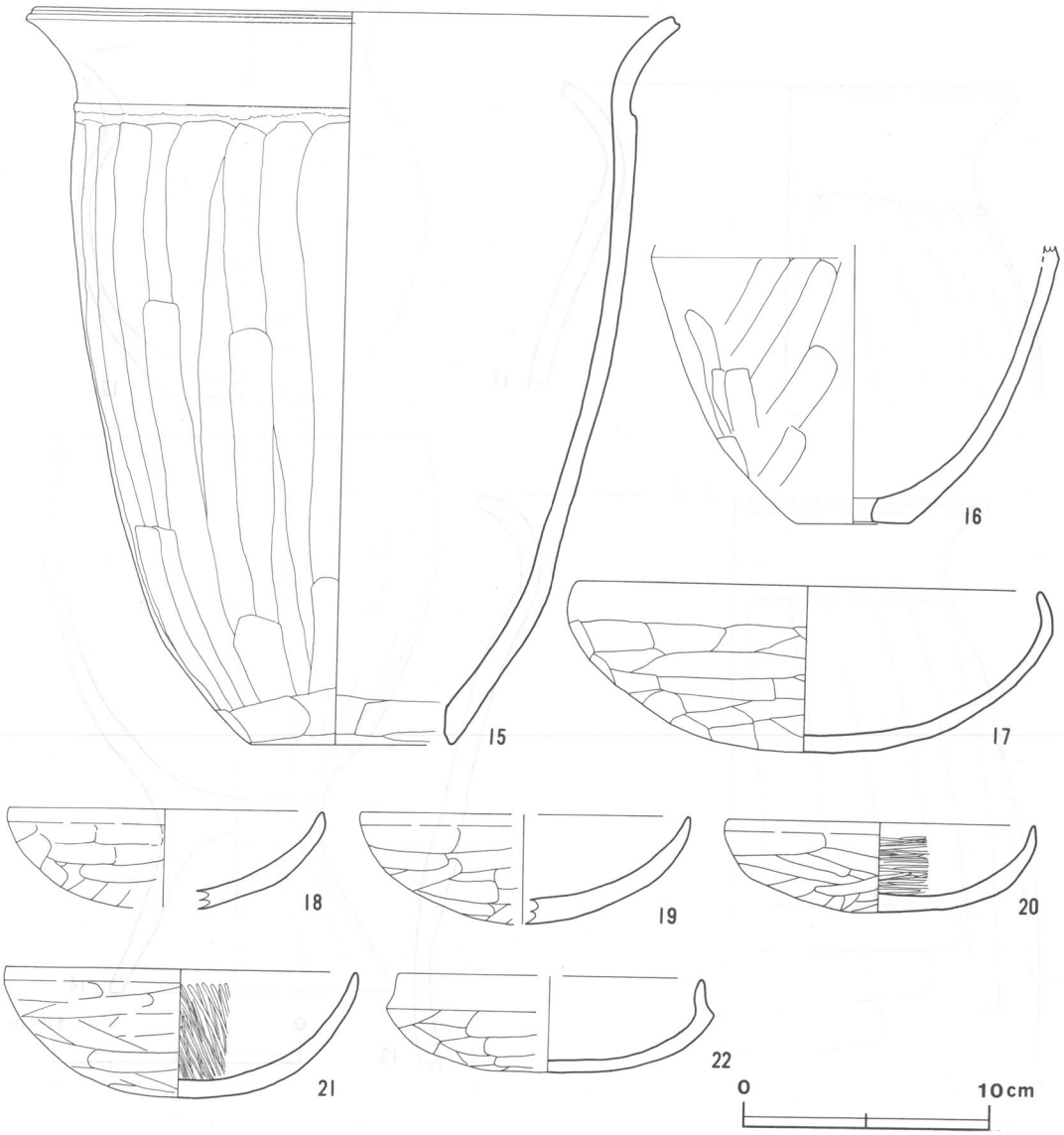


第210図　第３号土坑出土遺物実測図(2)



第211図　第３号土坑出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
9	甕形 土器 土師器	A 15.8	胴部は丸く張り，口縁部は外反しながら開く。口縁外端部は面をなし，外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面上位－縦位のヘラ削り。中位－横位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	30%
10	甕形 土器 土師器	A (17.8)	胴部はほぼ円筒形を呈し，口縁部は外反しながら開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	20%
11	甕形 土器 土師器	A 18.4	胴部は長胴を呈し，口縁部は外反しながら開く。口縁端部に浅い沈線が巡る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい赤褐色	30% 二次焼成
12	甕形 土器 土師器	A 13.0 B 15.5 C 5.7	底部は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	55%



第212図　第３号土坑出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
13	甕形 土器 土師器	A (20.8)	胴部は長胴を呈し，中位がやや張る。口縁部は外反しながら開き，端部に1本の沈線が巡る。外面の頸部と胴部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 橙色	20%
14	台付甕形土器 土師器	A 15.0 B 32.4 D 11.8	胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり，そのまま口縁部へ至る。台部は「ハ」の字状に開く。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面・台部外面－縦位のヘラ削り。胴部内面－ヘラナデ。台部内面－横ナデ	砂粒・細礫 普通 赤色	85% 二次焼成
15	甑形 土器 土師器	B 29.6 C 8.2 孔径 7.4	胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開き，口縁端部に浅い沈線が巡る。底部は正円状に抜ける。胴部と頸部の境に削り残し部分が，凸帯として残る。	口縁部内・外面－横ナデ 胴部外面－縦位のヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒・細礫 普通 にぶい褐色	80%
16	甑形 土器 土師器	孔径(1.6)	底部は平底で，胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がる。口縁部と胴部の境に稜を有し，底部中央を穿孔している。	胴部外面－ヘラ削り 内面－ヘラナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	30%
17	坏形 土器 土師器	A 18.7 B 6.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒・細礫 普通 黄橙色	95%
18	坏形 土器 土師器	A 12.8	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 明赤褐色	98%
19	坏形 土器 土師器	A (13.4)	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 灰褐色	50%
20	坏形 土器 土師器	A 12.7 B 3.7	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 にぶい橙色	100%
21	坏形 土器 土師器	A 14.3 B 5.2	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は短く直立する。外面の口縁部と体部の境に稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ヘラ磨き	砂粒 普通 橙色	55%
22	坏形 土器 土師器	A (12.4) B 3.9	底部は丸底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は内傾する。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。	口縁部内・外面－横ナデ 体部外面－ヘラ削り 内面－ナデ	砂粒 普通 橙色	50%

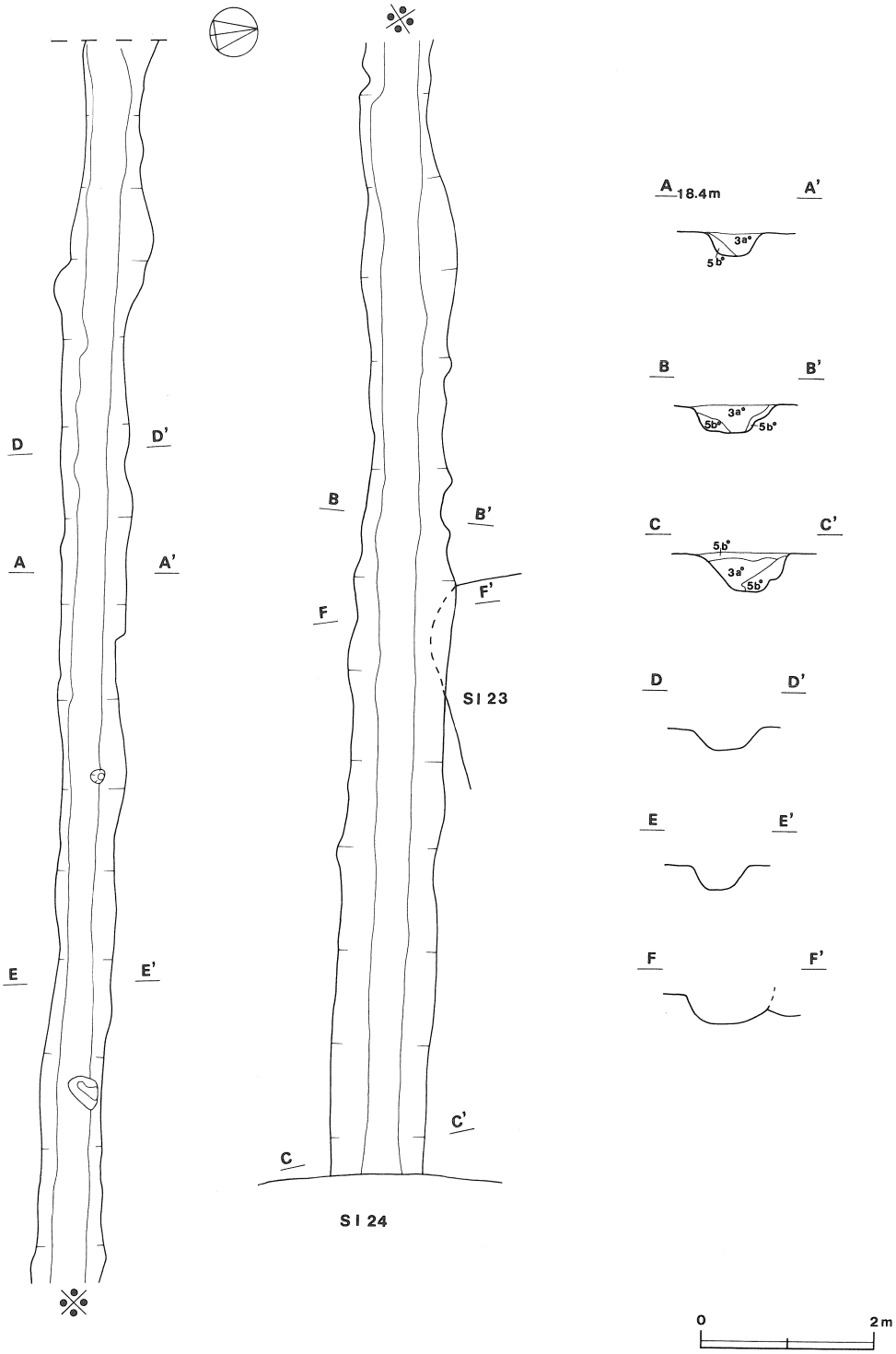
(3) 溝

第1号溝（第213図）

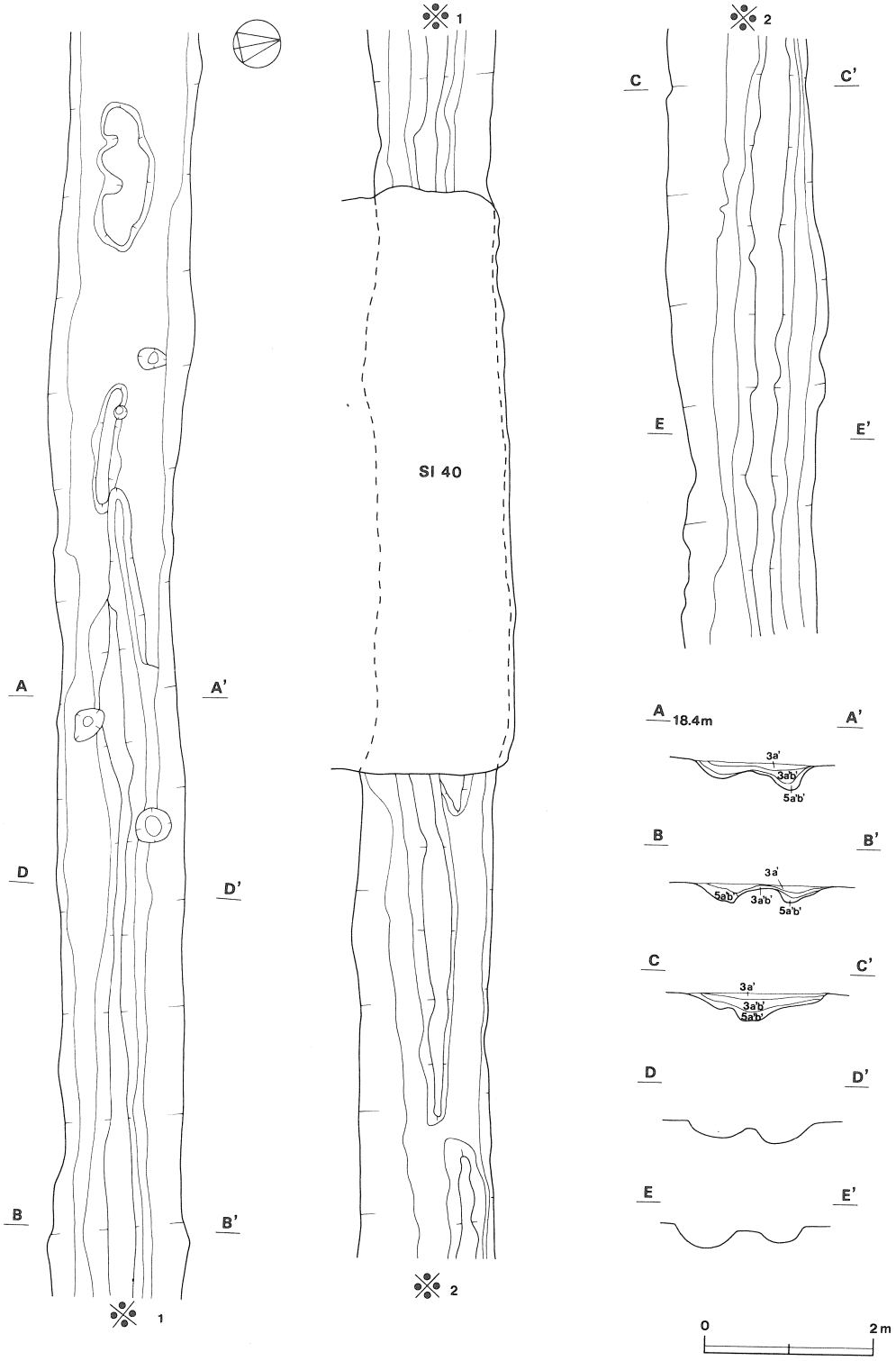
本跡はI1区に確認され，第2号溝が南側約12m に並行している。I1e9で第23号住居跡，I2e1で第24号住居跡と重複しているが，本跡が両住居跡を切り込んでいるため，本跡の方が新しい。

検出された長さはI1d3からI1e0までの約32mで，主軸方向はN－81°－Wを指し，ほぼ直線的に延びている。西端はさらに調査区域外へ延び，東端は第24号住居跡と重複して消滅している。上幅は西から東へ向かってわずかに広くなり，西端で約70cm・東端で約110cmである。下幅はほぼ一定しており40cm前後である。断面形は「⊔」形を呈し，遺構確認面から底面までの深さは30～35cmで，底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を示しており，大きく2層に分かれている。上層は暗褐色土，下層は褐色土でいずれもローム粒子を含んでいる。

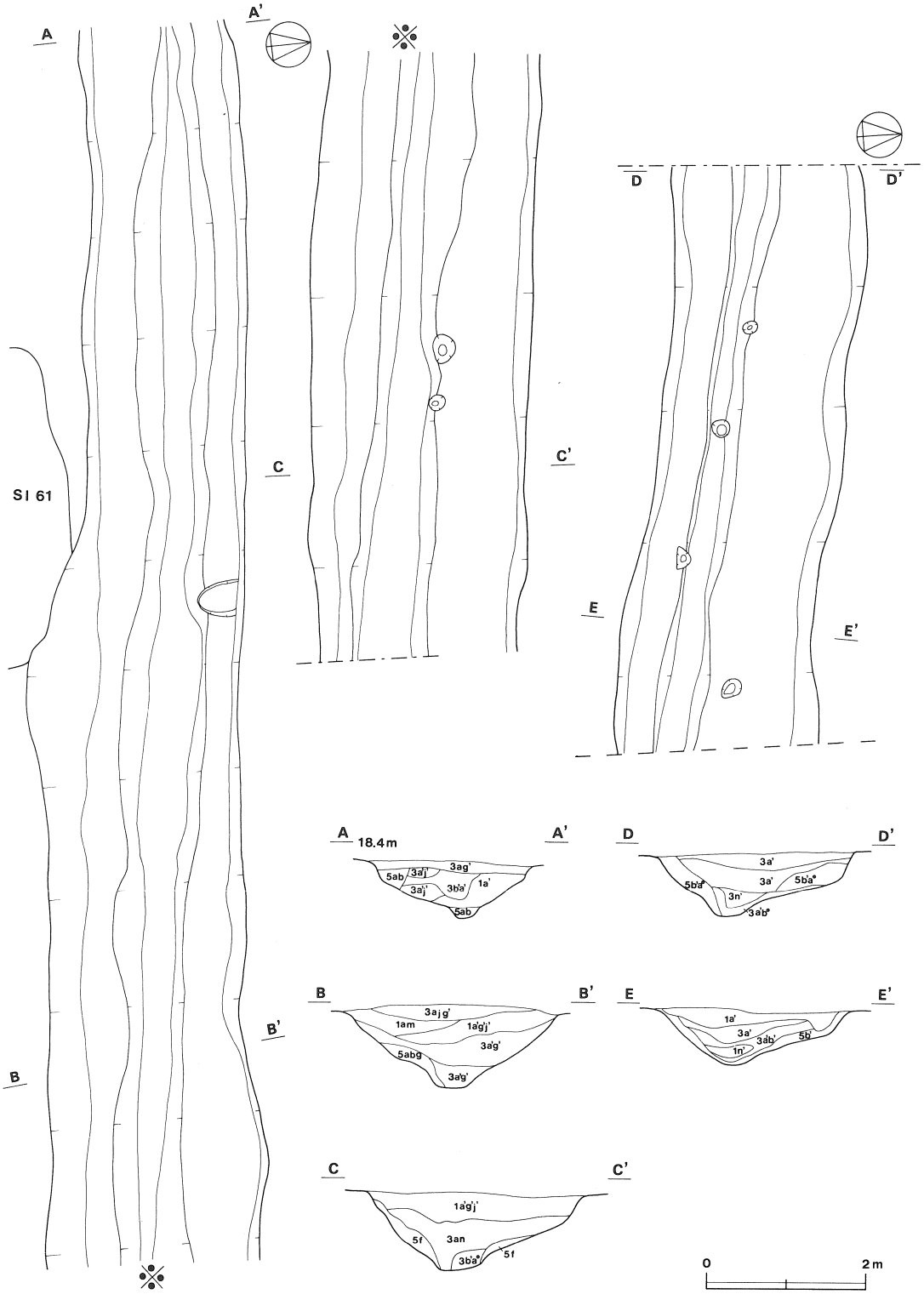
遺物は出土していない。



第213図　第１号溝実測図



第214図　第２号溝実測図



第215図　第３号溝実測図

第２号溝（214図）

本跡はＩ１・Ｉ2区に確認され，第１号溝の南側約12m に並行している。I1h8・ I1h9で第40号住居跡と重複しているが，本跡が第40号住居跡を切っており，本跡の方が新しい。

検出された長さはI1g3からＩ2i3までの約40m で，両端はそれぞれ調査区域外へ続いている。主軸方向はＮ―76°―Ｗを指しほぼ直線的に延びている。上幅は約150cmで断面は「∿」形を呈している。遺構確認面から底面までの深さは25～30cmである。壁面・底面は全体に凹凸が多くゴツゴツしている。底面のレベルは東から西へ向かってわずかに低くなっており，その差は約15cmである。覆土は自然堆積の状態を示し，ローム粒子を含む暗褐色土・褐色土が主である。

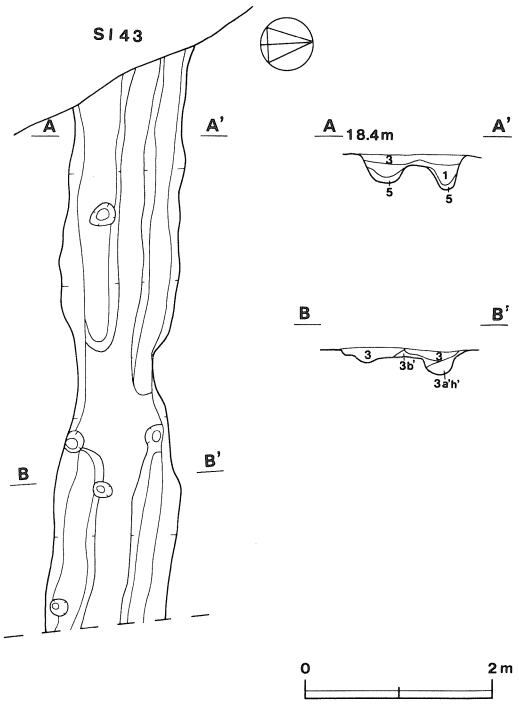
遺物は流れ込みと思われる少量の土器片が出土している。

第３号溝（第215図）

本跡はJ1区とJ2区にかけて確認され，第59号住居跡の北側約1.5m，第１号掘立柱建物跡の南側約８ｍに位置している。第41・61号住居跡と重複しているが，両住居跡を切っており本跡の方が新しい。

検出された長さはJ1c3からJ2d3にかけての約40m で，J1d0とJ2d1にかけて約８ｍは土取り工事で消滅しており，両端はさらに調査区域外へと延びている。主軸方向はＮ―81°―Ｗを指しほぼ直線的に延びている。上幅は狭い所で約200cm・広い所で約270cmあり，下幅は30～50cmで断面は「∪」形を呈している。北側の壁はなだらかな傾斜で，南側の壁は急に落ち込んでいる。遺構確認面から底面までの深さは70～100cmで，東から西に向かって深くなり，東端と西端の底面のレベル差は約25cmで西端が低い。覆土はほぼ自然堆積の状態を示している。暗褐色土が主で，底面にはロームブロックを含む褐色土が堆積している。

遺物は流れ込みの土師器片が少量出土している。



第216図　第４号溝実測図

第４号溝（第216図）

本跡はJ2区に確認され，第５号溝の北側約１ｍに位置している。第43号住居跡と重複し

ているが，第43号住居跡を切っており，本跡の方が新しい。

検出された長さはJ2h_2からJ2h_3にかけての約７ｍで，第43号住居跡と重複してさらに西へ延びるものと思われるが，土取りによって消滅しており,またJ1区へも延びていない。主軸方向はＮ－84°－Ｗでほぼ東西に直線的に延び，東端は調査区域外へ続いている。上幅は約130cmで断面は「∪∪」形を呈している。遺構確認面から底面までの深さは25～30cmで，底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を呈し，暗褐色土が大部分で全体にやわらかい。

遺物は出土していない。

第５号溝（第217図）

本跡はJ1・J2区に確認され，第４号溝の南側約１ｍ，第６号溝の北側約４ｍに位置している。第43・57・58号住居跡と重複しているが，各住居跡を切っており，本跡が最も新しい。

検出された長さはJ1h_4からJ2i_3までの約40mであるが，J1i_0・J2i_2にかかる約7ｍは土取りのため消滅している。主軸方向はＮ－82°－Ｗを指しほぼ直線的に延び，両端とも調査区域外まで続いている。上幅200～300cm・下幅50～80 cm・深さ80～90cmで底面のレベル差はほとんどなく，断面は「∪」形を呈している。壁面は凹凸が多く不規則な大小のピットがみられる。覆土は自然堆積の状態を呈し，暗褐色土が主で上層にはローム粒子・下層にはロームブックを含み，粘性がある。

遺物は，覆土から流れ込みと思われる土師器片少量と鉄滓数個が出土している。

第６号溝（第218図）

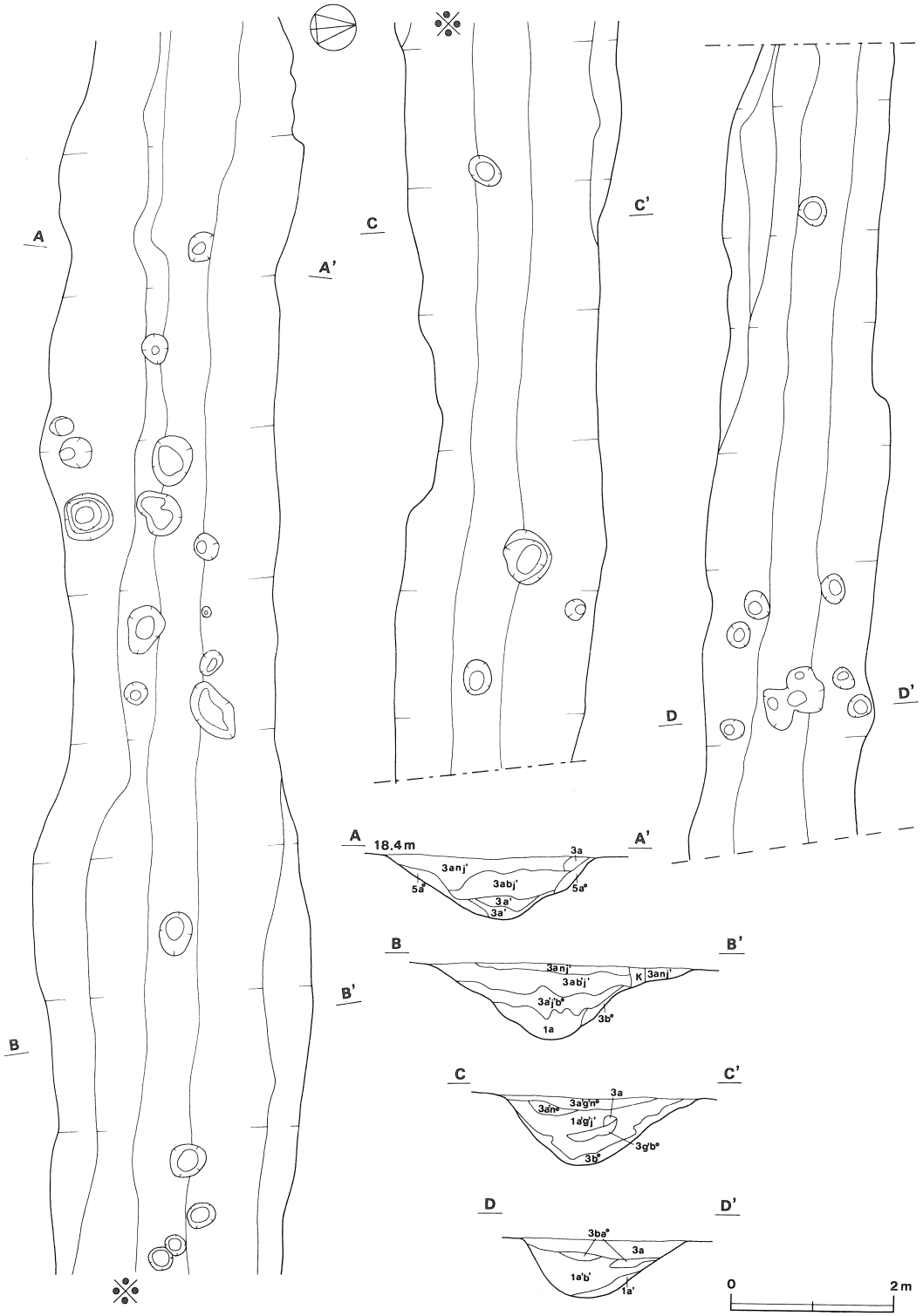
本跡はJ1・J2区に確認され，第５号溝の南側約3.5ｍ，第７号溝の北側約８ｍに位置している。第42号住居跡と重複しているが，第42号住居跡を切っており，本跡の方が新しい。

検出された長さはJ1j_7からJ2j_4の約28mで，J1j_0・J2j_1にかかる約6ｍは土取りによって消滅している。主軸方向はＮ－83°－Ｗで直線的に延びており，東端は調査区域外へ延び，西端はJ1j_7で切れている。上幅60～90cm・下幅30～50cm・深さ25～35cmで，底面のレベル差はほとんどなく，断面は「∪」形を呈している。覆土は２層に分かれ，上層が黒褐色土，下層が暗褐色土で自然堆積の状態を示している。

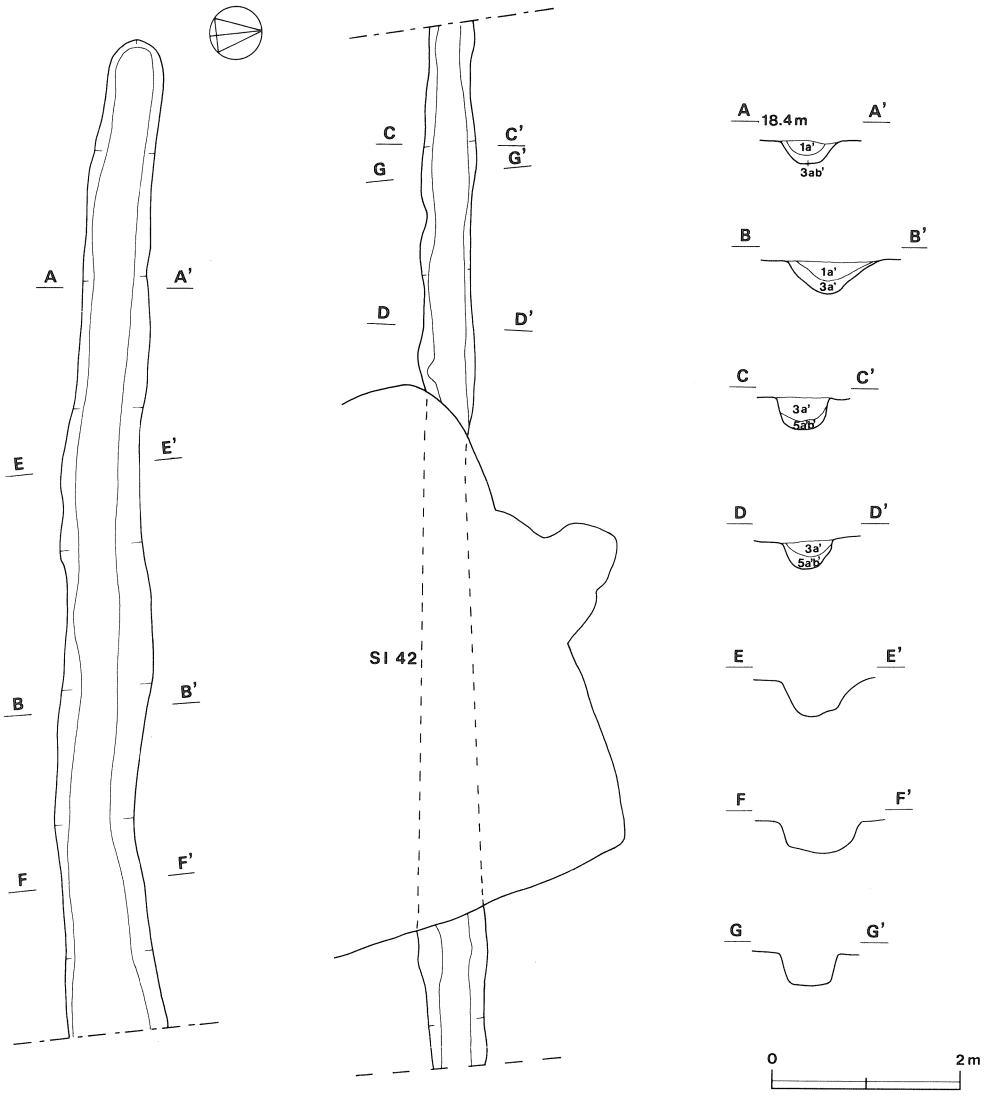
遺物は出土していない。

第７号溝（第219図）

本跡はK1・K2区に確認され，第６号溝の南側約８ｍに位置している。第49・50号住居跡と重複しているが，両住居跡を切っており，本跡の方が新しい。

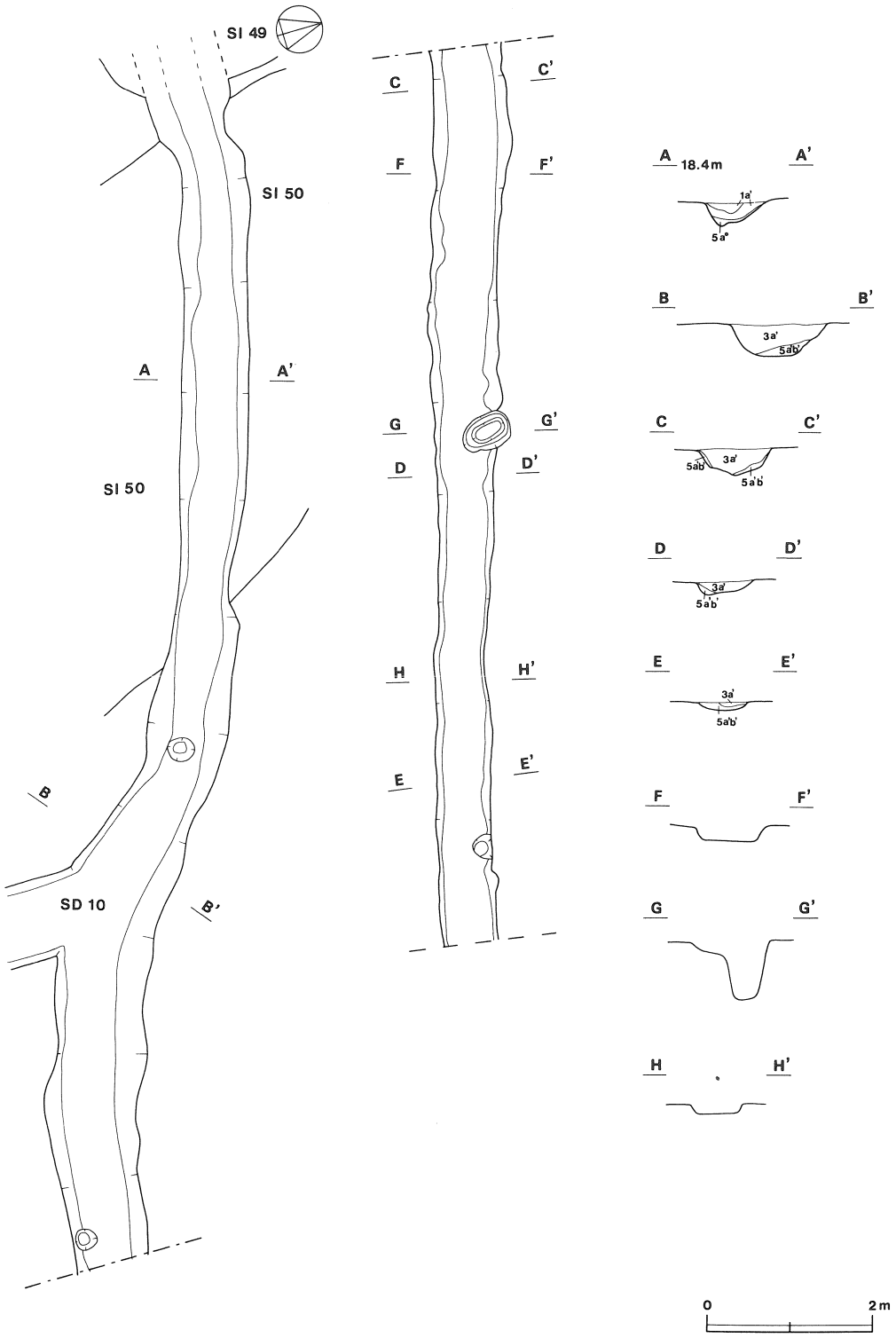


第217図　第５号溝実測図



第218図　第６号溝実測図

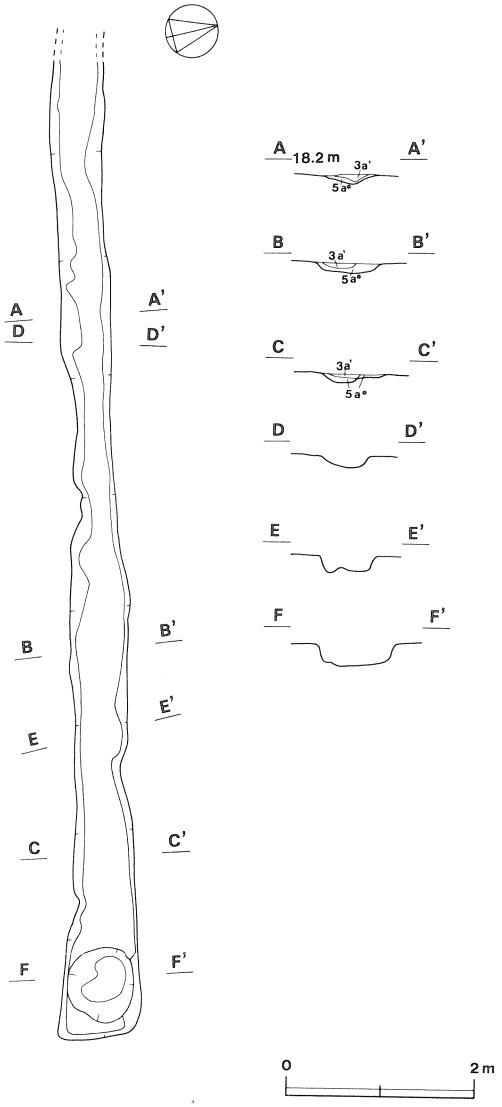
検出された長さはK1a6からK2c4までの約34mで，K1b9からK2b2にかけての約８ｍは土取りによって消滅している。東端は調査区域外へ延び，西端は第49号住居跡と重複し，その先は消滅している。また，K1b8で本跡から第10号溝が分かれ南へ走っている。K1b8以東の約23mは主軸方向N－82°－Wを指してほぼ直線的に延びている。K1b8以西の約12mは西北西へ向かった後，ゆるやかにカーブしながら西へ延びている。上幅70～100cm・下幅30～60cmで，断面は「⌐⌐」形を呈している。確認面から底面までの深さは20～30cmで，壁面・底面とも凹凸は少ない。底面のレベルは西へ向かうにつれてわずかに低くなり，西端と東端の差は約25cmである。覆土は自然堆積の



第219図　第７号溝実測図

状態を呈し，暗褐色土が大部分を占め，底面近くにはローム粒子を含む褐色土が堆積している。

遺物は出土していない。



第220図　第８号溝実測図

第８号溝（第220図）

本跡はI1区に確認され，第33号住居跡の南側約1.5mに位置している。第１号掘立柱建物跡と重複しているが，第１号掘立柱建物跡を切っており，本跡の方が新しい。

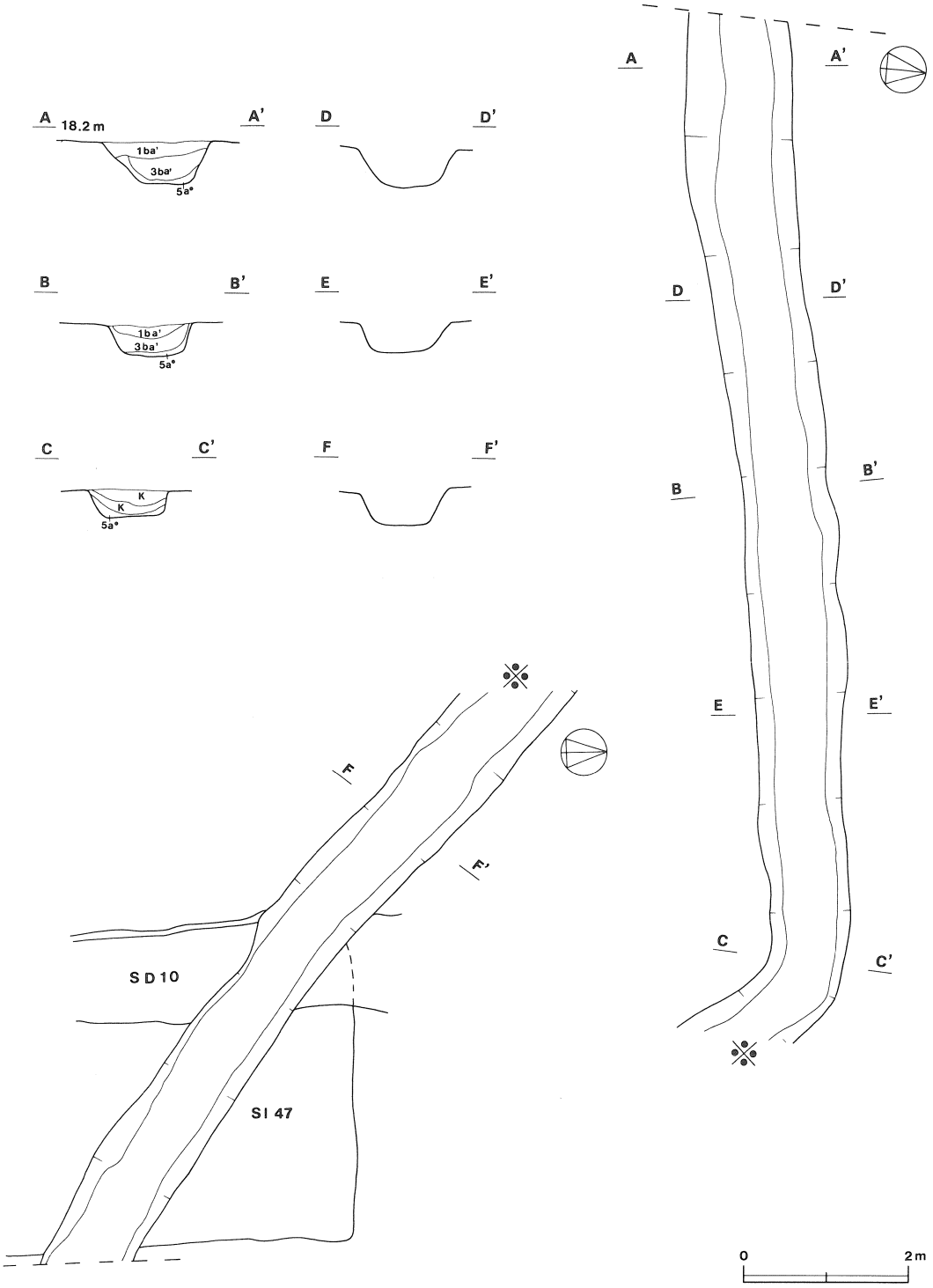
検出された長さはI1i_4からI1j_6までの約10.5mで，主軸方向はN－77°－Wを指し直線的に延びている。両端はさらに延びていたと思われるが，削平されており検出できなかった。上幅50～70cm・下幅20～30cm・深さ15～20cmで，断面は皿状を呈し，底面のレベル差はほとんどない。覆土は上層に暗褐色土，下層に褐色土が堆積し，自然堆積の様相を呈している。

遺物は出土していない。

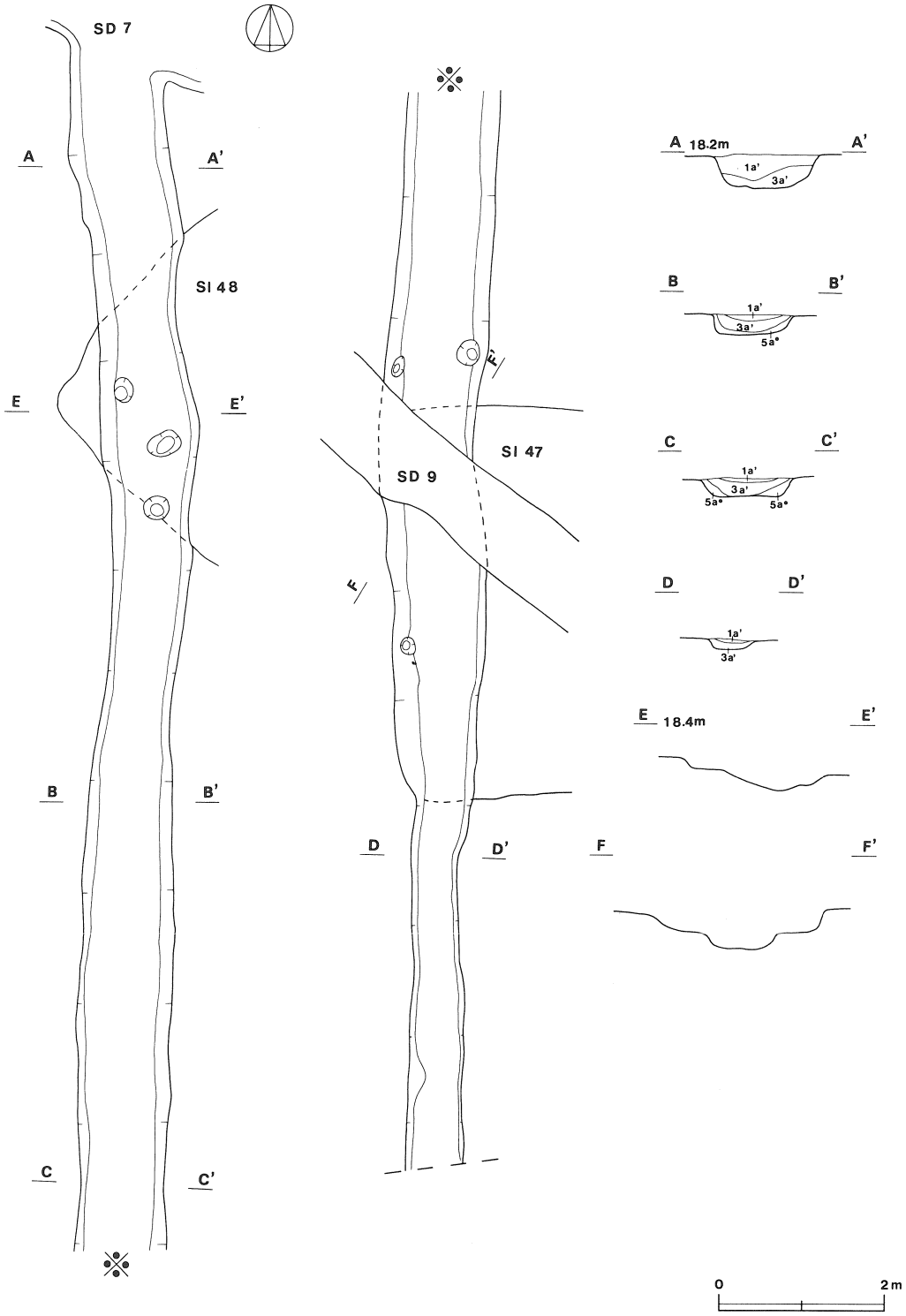
第９号溝（第221図）

本跡はK1区で確認され，第54号住居跡の南側約３mに位置している。第47号住居跡，第10号溝と重複しているが両遺構を切っており，本跡が最も新しい。

検出された長さはK1g_4からK1h_9までの約22mで，K1g_4から主軸方向N－78°－Eを指してほぼ直線的に約22m延び，K1f_7付近で屈曲してから，主軸方向はN－50°－Wで南東方向へ約10m延びている。西端は調査区域外へ延びており，東端はK1h_9で土取りのため消滅しており，その延長は確認されていない。上幅100～150cm・下幅60～80cm，遺構確認面から底面までは35～45cmで，壁面・底面とも凹凸はほとんど見られない。断面は「U」形を呈し，底面のレベル差はほとんどない。覆土は自然堆積の状態を示し３層に分かれている。上層から下層へ黒褐色土，暗褐色土，褐色土となっており全体に締まりがあ



第221図　第９号溝実測図



第222図　第10号溝実測図

る。

遺物は出土していない。

第10号溝（第222図）

本跡はK1区に確認され，第46号住居跡の東側約5mに位置している。第47・48号住居跡，第9号溝と重複しているが，本跡は第47・48号住居跡を切っており，第9号溝によって切られているため，第47・48号住居跡より新しく第9号溝より古いと考えられる。

検出された長さはK1b8からK1i8までの約30mで，K1b8で第7号溝から分かれた主軸方向はN—0°を指しほぼ直線的に南北に延び，南端は調査区域外へと続いている。上幅70～120cm・下幅50～80cmで，深さは南に向かって浅くなり，北端で35cm，南端で15cmとなる。底面のレベル差はないが南端の5～6mは台地のゆるやかな南斜面へと向かっており，わずかに低くなる。覆土は自然堆積の状態を呈し，3層に分かれている。上層は黒褐色土，暗褐色土，褐色土となっており，下層はローム粒子を多量に含んでいる。

遺物は流れ込みの土師器片がごく少量出土している。

(4) 井戸

第1号井戸（第223図）

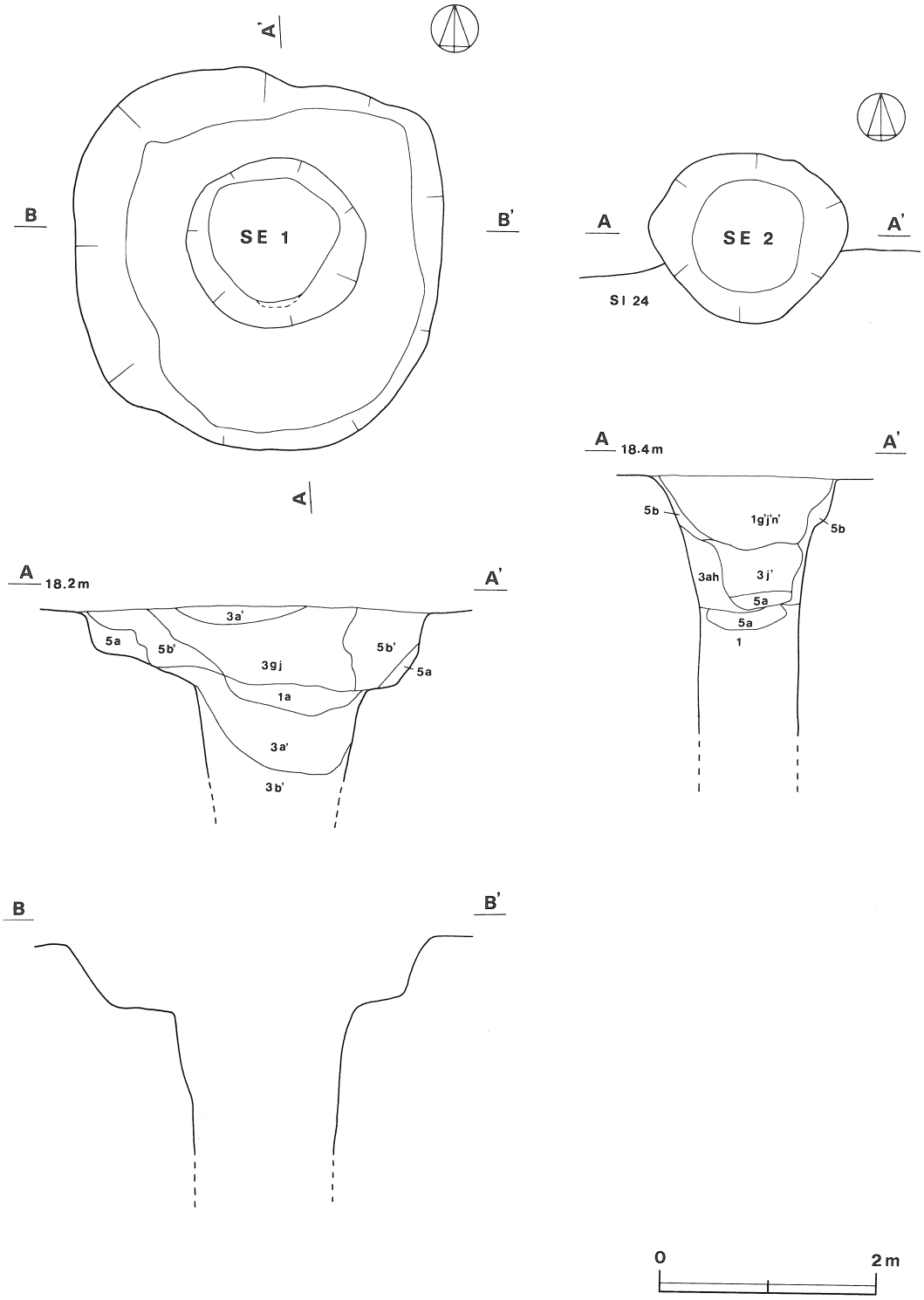
本跡はG1j6を中心に確認され，第8号住居跡の西側約2mに位置し，第6号住居跡の東側に接している。

掘り方は二段に掘り込まれている。上段は長径3.80m・短径3.30mの不整円形で，深さ60～70cm掘り込み，長径3.20m・短径2.60mの不整円形の足場と思われる平坦な面を設けている。下段は，この面の中央を径約1.6mで円筒状に約1.6m掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で，平坦面から約1.2m下付近で湧水している。上段の壁は外傾しており，下段の壁はほぼ垂直となっている。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し，上層は暗褐色土で焼土粒子・炭化粒子を含み，中層は黒褐色土，下層は暗褐色土でじめじめしている。

遺物は上部の覆土から，須恵器の坏形土器や高台付坏形土器が出土している。

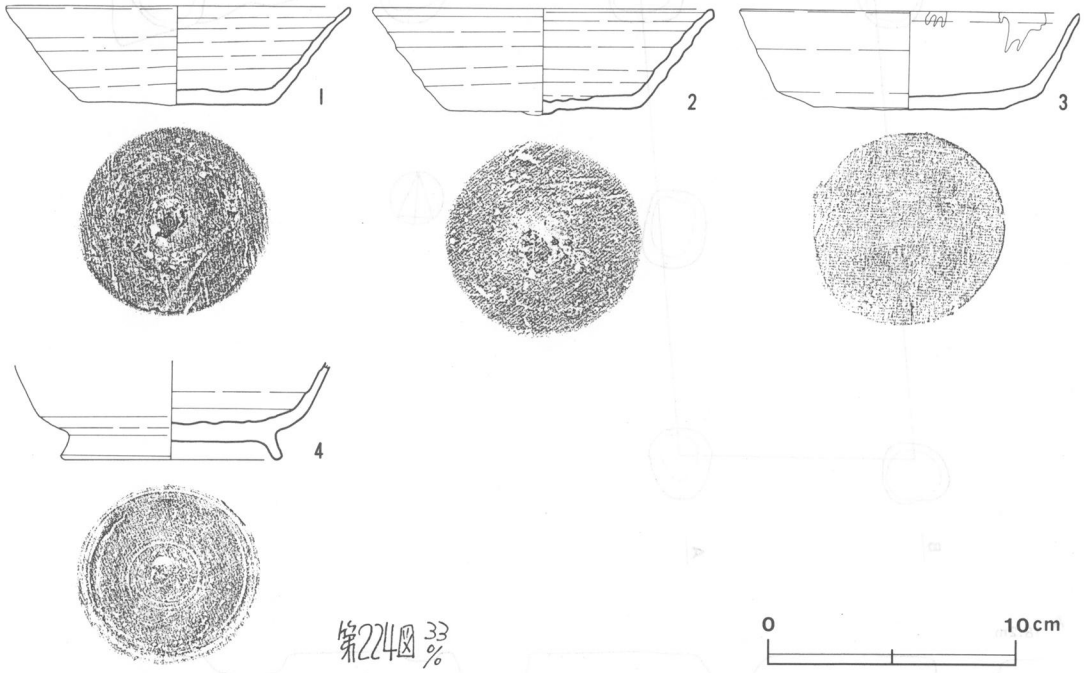
出土土器観察表（第224図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形土器 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 7.8	底部は平底で，体部は外反気味に外上方へ立ち上がる。	底部—回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右　内・外面の水換き痕はやや強い	砂粒・細砂 普通 灰白色	85%



第223図　第１・２号井戸実測図

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	坏形土器 須恵器	A 13.8 B 4.3 C 7.9	底部は平底で，体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，端部は丸い。	底部ー回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右	黒色の砂粒不良 灰白色	80%
3	坏形土器 須恵器	A 13.6 B 4.0 C 7.8	底部は平底で，体部は下端に幅狭の面を有し，上部は直線的に外上方へ立ち上がる。	底部ー不定方向の手持ちヘラ削り　ロクロ回転方向は右 水挽き痕は弱く丁寧な作り	細砂・小石 普通 赤褐色	100% 口縁部に油煙付着
4	高台付坏形土器 須恵器	D 8.6 E 1.0	底部は平底で，体部は直線的に外上方へ立ち上がり，高台は外下方へのびる。	底部ー回転ヘラ削り　高台は貼り付け　高台内・外面ー横ナデ　水挽き痕は弱い	砂粒・雲母 普通 明灰色	50%



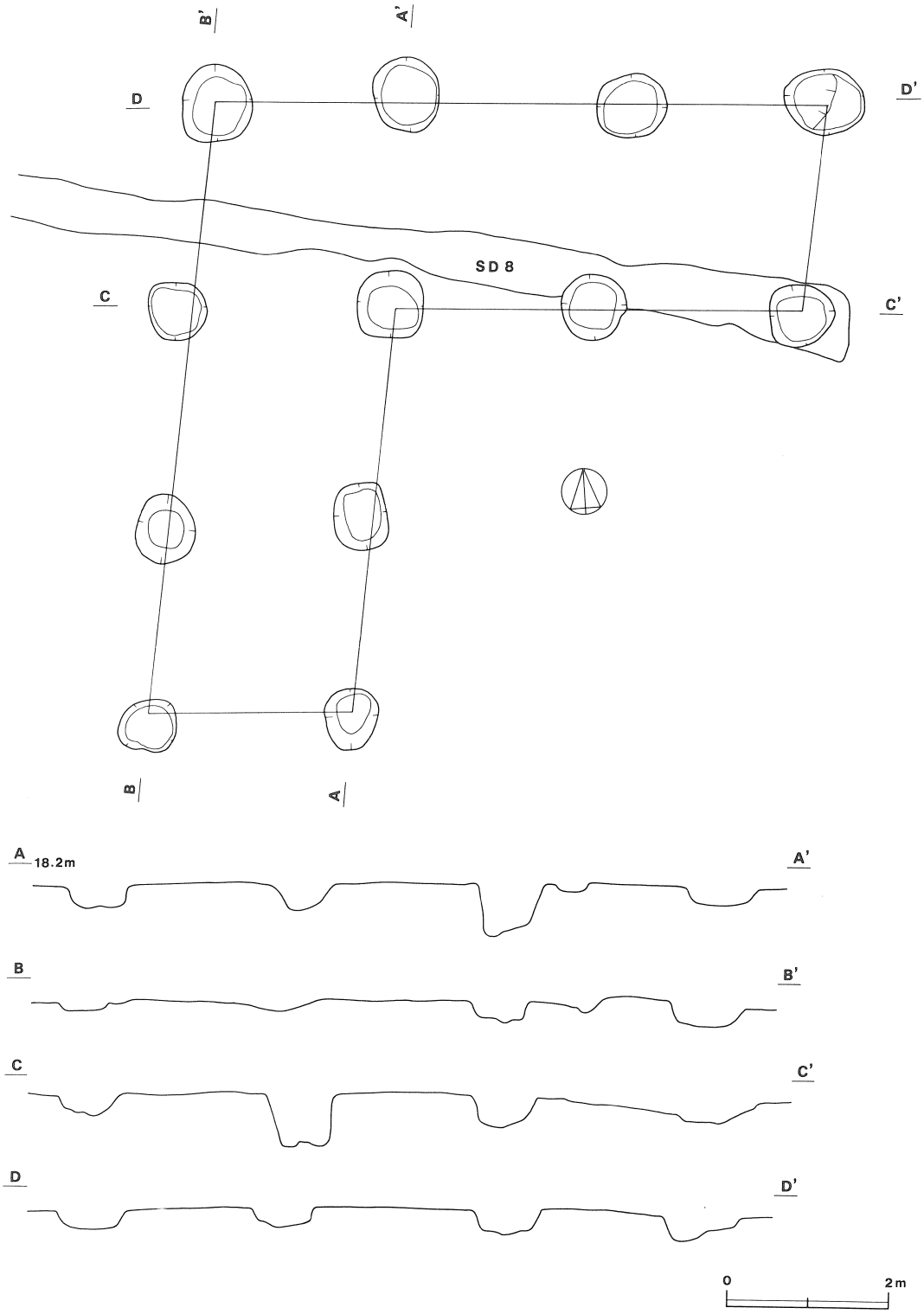
第224図　第1号井戸出土遺物実測図

第2号井戸（第223図）

本跡はI2d2に確認され，第29号住居跡の西側約0.5mに位置している。第24号住居跡と重複しているが，第24号住居跡を切っており，本跡の方が新しい。

平面形は長径1.85m・短径1.55mの不整円形を呈し，深さは3.5m以上である。確認面から約1.2mまでの壁はやや外傾しているが，それ以下はほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し，上層は黒褐色土で硬く，中・下層は暗褐色土でやわらかい。

遺物は出土していない。



第225図　第１号掘立柱建物跡実測図

(5) 掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第225図）

本跡はI1j_4を中心に確認され，第33号住居跡の南側約0.5m，第３号溝の北側約８ｍに位置している。第８号溝と重複しており，第８号溝が本跡を切っており，本跡の方が古い。

東西３間（7.5m）・南北３間（7.5m）のＬ字形の建物で，その角度は約95°である。柱間寸法は桁行・梁行とも2.5m（８尺）である。柱穴の掘り方は径70～90cmの円形を呈し，深さ８～66cmと一定せず，どのピットからも柱痕跡は確認されていない。覆土はロームブロックを含む暗褐色土が主で，埋めもどされた様相を呈している。

遺物は出土していない。

4　まとめ

北新田A遺跡からは，竪穴住居跡62軒，土坑7基，溝10条，井戸2基，掘立柱建物跡1棟が検出され，遺物は土師器・須恵器・鉄製品・石製品・土製品などが出土している。これらの遺物は五領期から国分期にかけてのものであるが，そのほとんどは住居跡から出土した土器であり，住居跡以外で遺構に伴う遺物は第3号土坑と第1号井戸から出土した土器だけである。そこで，これらの土器の古いものから順に分類し，各遺構の時期をより明確にすることによって集落の変遷をたどってみたい。

(1)　土器の分類

土器の分類にあたっては，従来の編年資料を参考にしながら，各住居跡の形態，配置，重複関係を考慮し，住居跡からの一括出土土器を中心にその形態・技法などから12期に区分した。

Ⅰ期（第226図）

本期は北新田A遺跡において最も古い時期に位置づけられ，第9・10・23号住居跡の出土土器を中心とした。器種としては土師器の甕形土器，小形甕形土器，台付甕形土器，高坏形土器がある。出土量が少なく良好な資料に乏しいが五領Ⅱ式に比定されるものと思われる。

甕形土器は口縁部が外反しながら開き，胴部上位が張るもの（1）と，口縁部が「く」の字状に開き，胴部中位が張るもの（2）がある。いずれも最大径は胴部にあり，底部は突出した平底で，口縁部内・外面，胴部外面にハケ目が施されている。

小型甕形土器は図示したもの（3）だけである。口縁部が外反しながら開き，胴部はほぼ球形を呈し，最大径は胴部中位にある。大形の甕形土器と同じく，胴部外面にはハケ目が施されているが，口縁部内・外面は横ナデである。

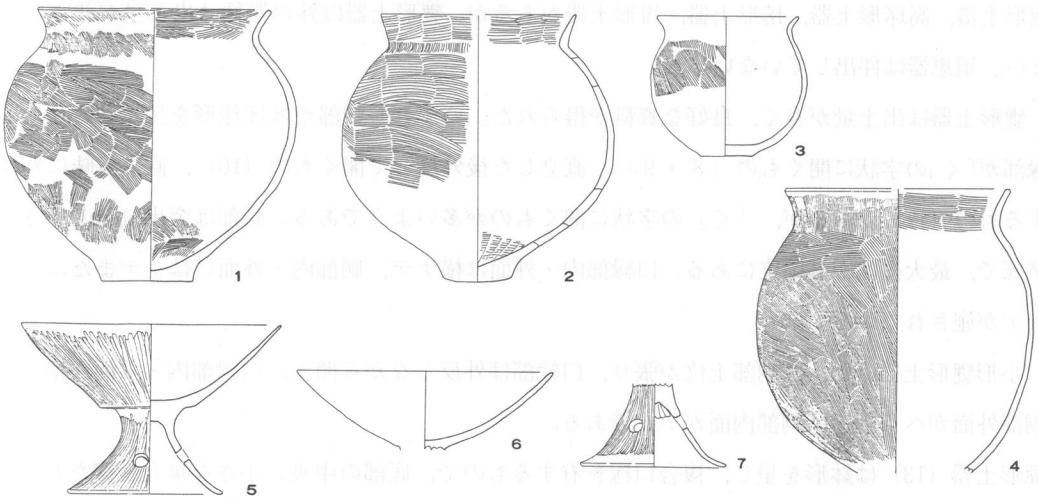
台付甕形土器も4だけで，底部以下が欠損している。甕形土器にくらべ胴部の張りは弱く，胴部下半がゆるやかにすぼまる。整形は甕形土器と同じである。

高坏形土器は，坏体部が直線的に開くもの（5）と，内彎気味に開くもの（6）がある。脚部はラッパ状に開き，3孔を有するもの（7）と4孔を有するもの（5）がある。5は外面全体が丁寧にヘラ磨きされ，6は内・外面ともナデが施されている。

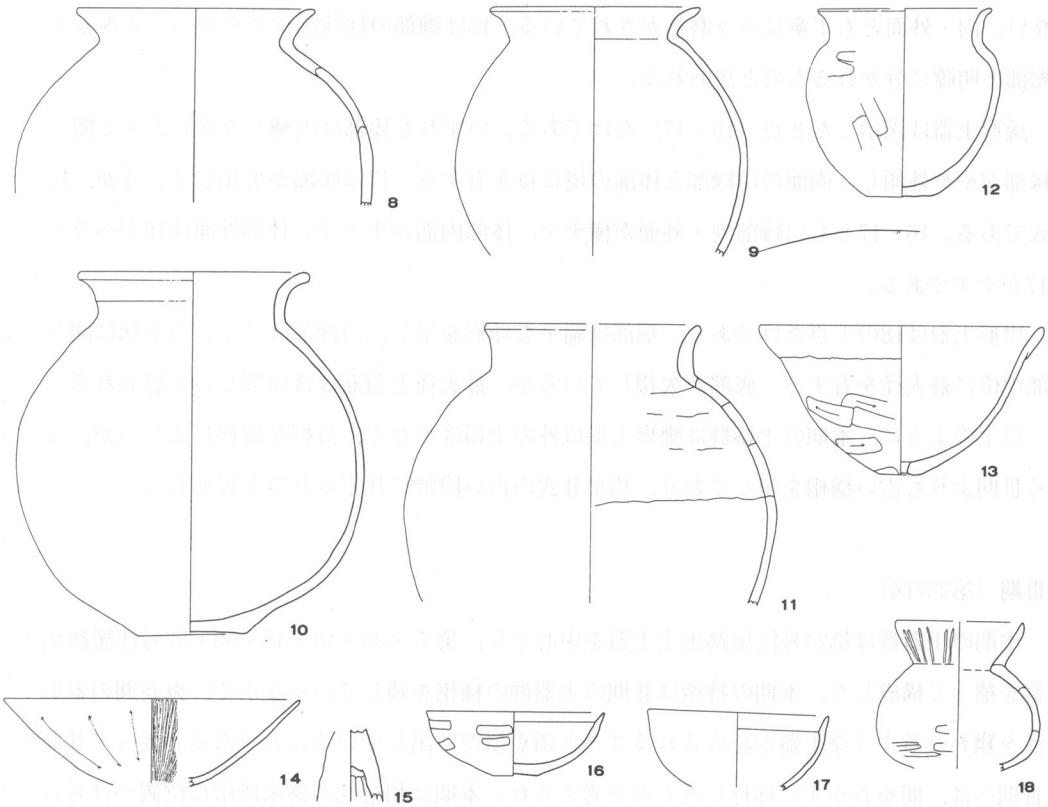
Ⅱ期（第226図）

Ⅱ期とⅢ期の土器群は時期的に非常に接近しており，同一期のものとして考えることも可能である。しかし本期はその中でも古い段階として，第34・38号住居跡出土土器を中心に，第10号住居

Ⅰ　期



Ⅱ　期



第226図　土器編年図（1）

跡出土土器を加えて構成し，Ⅲ期とは区別した。器種は豊富で土師器の甕形土器，小形甕形土器，甑形土器，高坏形土器，椀形土器，坩形土器があるが，甕形土器以外の器種は出土量が非常に少ない。須恵器は伴出していない。

甕形土器は出土量が多く，良好な資料が得られた。いずれも胴部がほぼ球形を呈しており，口縁部が「く」の字状に開くもの（8・9），直立した後外反して開くもの（10），直立気味に外反するもの（11）があるが，「く」の字状に開くものが多いようである。底部は突出気味の小さな平底で，最大径は胴部中位にある。口縁部内・外面は横ナデ，胴部内・外面にはナデまたはヘラナデが施されている。

小形甕形土器（12）は胴部上位が張り，口縁部は外反しながら開く。口縁部内・外面が横ナデ，胴部外面がヘラナデ，胴部内面がナデである。

甑形土器（13）は鉢形を呈し，複合口縁を有するもので，底部の中央に小さな単孔が穿たれている。口縁部内・外面が横ナデ，体部外面が雑なヘラ削り，体部内面がナデである。

高坏形土器はいずれも破片である。14は坏体部で，内彎気味に開き，坏体部と底部の境に稜はない。内・外面とも丁寧にヘラ磨きがされている。15は脚部の柱状部片でややふくらみがあり，裾部と明瞭に分かれるものと思われる。

椀形土器は図示した2点（16・17）だけである。いずれも体部は内彎しながら大きく開き，口縁部がやや外傾し，内面の口縁部と体部の境に稜を有する。17は底部が欠損しているが，16は平底である。16・17とも口縁部内・外面が横ナデ，体部内面がナデで，体部外面は16がヘラナデ，17がナデである。

坩形土器は18の1点だけである。胴部は扁平な球形を呈し，口縁部は「く」の字状に開き，胴部中位に最大径を有する。底部が欠損しているが，最大径と器高はほぼ等しいと思われる。

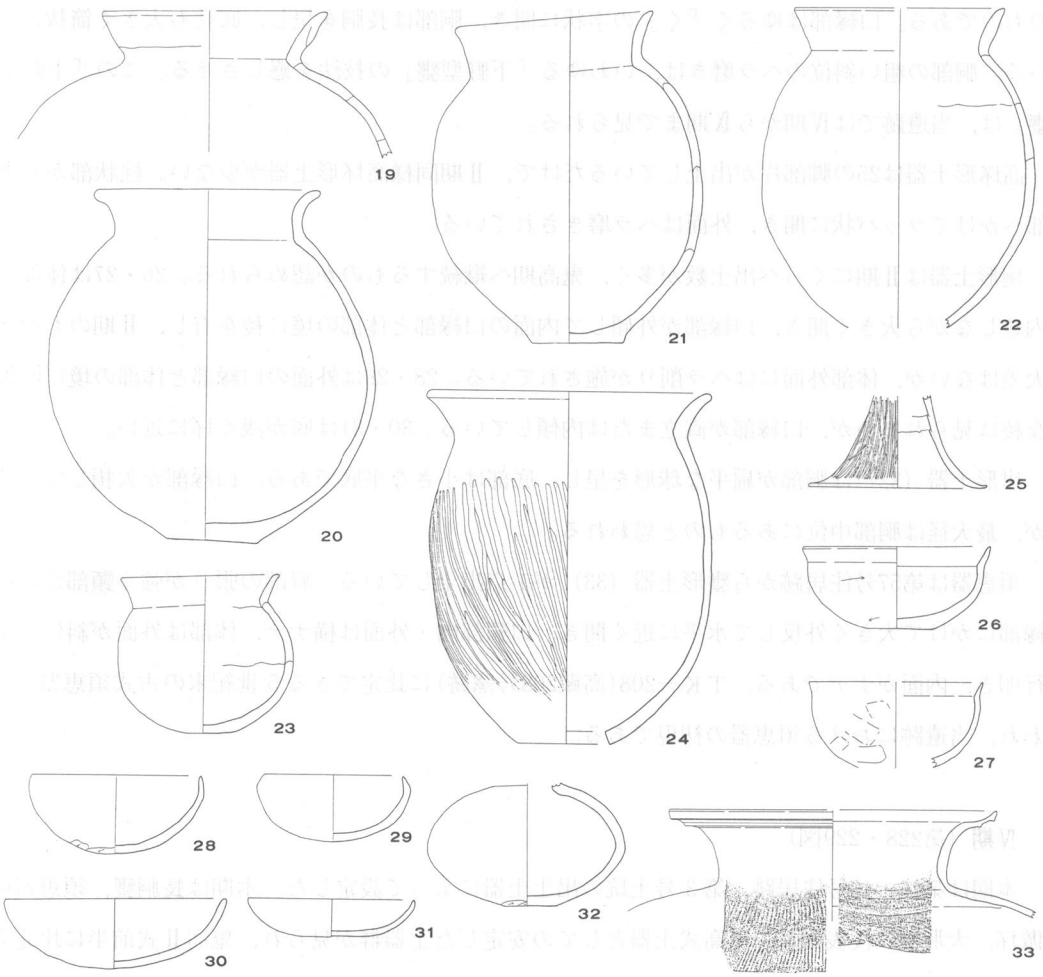
以上のように，本期の土器群は甕形土器以外の土器は少なく，良好な資料に乏しいが，後述するⅢ期よりも古い様相を呈しており，和泉Ⅱ式の古い段階に比定されると思われる。

Ⅲ期（第227図）

本期の土器群は第24号住居跡出土土器を中心とし，第7・35・40・48・50・57号住居跡出土土器を補って構成した。本期の特徴はⅡ期の土器群の様相を残しているなかで，鬼高期の器形や手法を窺わせるような土器が認められることと須恵器が伴出していることである。従ってⅡ期からⅢ期へは，間をおかずに移行したものと考えられ，本期は和泉期の終末段階に位置づけられるものと思われる。器種には土師器の壺形土器，甕形土器，小形甕形土器，甑形土器，高坏形土器，椀形土器，坩形土器と須恵器の甕形土器があり，Ⅱ期にくらべ椀形土器の出土量が多い。

壺形土器は図示したもの（19）のほかに1点出土している。いずれも口縁部が「く」の字状に

Ⅲ　期



第227図　土器編年図（2）

開き，古い段階とされている複合口縁の名残りをとどめている。胴部はほぼ球形を呈し，口縁部内・外面は横ナデ，胴部内・外面はヘラナデである。

甕形土器はⅡ期の様相を引き継いでいるものと，新しい変化が見られるものがある。20はⅡ期の10と器形・整形とも変化が見られず，口縁部は直立してから外反して開き，胴部は球形を呈している。21・22は口縁部が「く」の字状に開くが，Ⅱ期のものよりその屈曲度が多くなっており，胴部も長胴化している。いずれも胴部中位に最大径を有し，口縁部内・外面が横ナデ，胴部内・外面はナデやヘラナデが施されている。

小形甕形土器（23）は口縁部が「く」の字状に開き，胴部はほぼ球形を呈するもので，最大径は胴部中位に有り，頸部の屈曲度が弱い。

甑形土器（24）は甕形を呈する大形のもので，Ⅱ期の鉢形のものとは全く異なり，新しい段階のものである。口縁部はゆるく「く」の字状に開き，胴部は長胴を呈し，底孔も大きく筒抜けている。胴部の粗い斜位のヘラ磨きは，いわゆる「下野型甕」の技法を感じさせる。この「下野型甕」は，当遺跡ではⅣ期からⅨ期まで見られる。

高坏形土器は25の脚部片が出土しているだけで，Ⅱ期同様高坏形土器が少ない。柱状部から裾部へかけてラッパ状に開き，外面はヘラ磨きされている。

埦形土器はⅡ期にくらべ出土数が多く，鬼高期へ継続するものが認められる。26・27は体部が内彎しながら大きく開き，口縁部が外傾して内面の口縁部と体部の境に稜を有し，Ⅱ期のものと大差はないが，体部外面にはヘラ削りが施されている。28・29は外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜は見られないが，口縁部が直立または内傾している。30・31は底が浅く坏に近い。

坩形土器（32）は胴部が扁平な球形を呈し，底部は小さな平底である。口縁部が欠損しているが，最大径は胴部中位にあるものと思われる。

須恵器は第57号住居跡から甕形土器（33）が1点出土している。肩部の張りが強く頸部から口縁部にかけて大きく外反して水平に近く開き，口頸部内・外面は横ナデ，体部は外面が斜位の平行叩き，内面がナデである。ＴＫ―208(高蔵208号窯跡)に比定できる5世紀末の古式須恵器と思われ，当遺跡における須恵器の初現である。

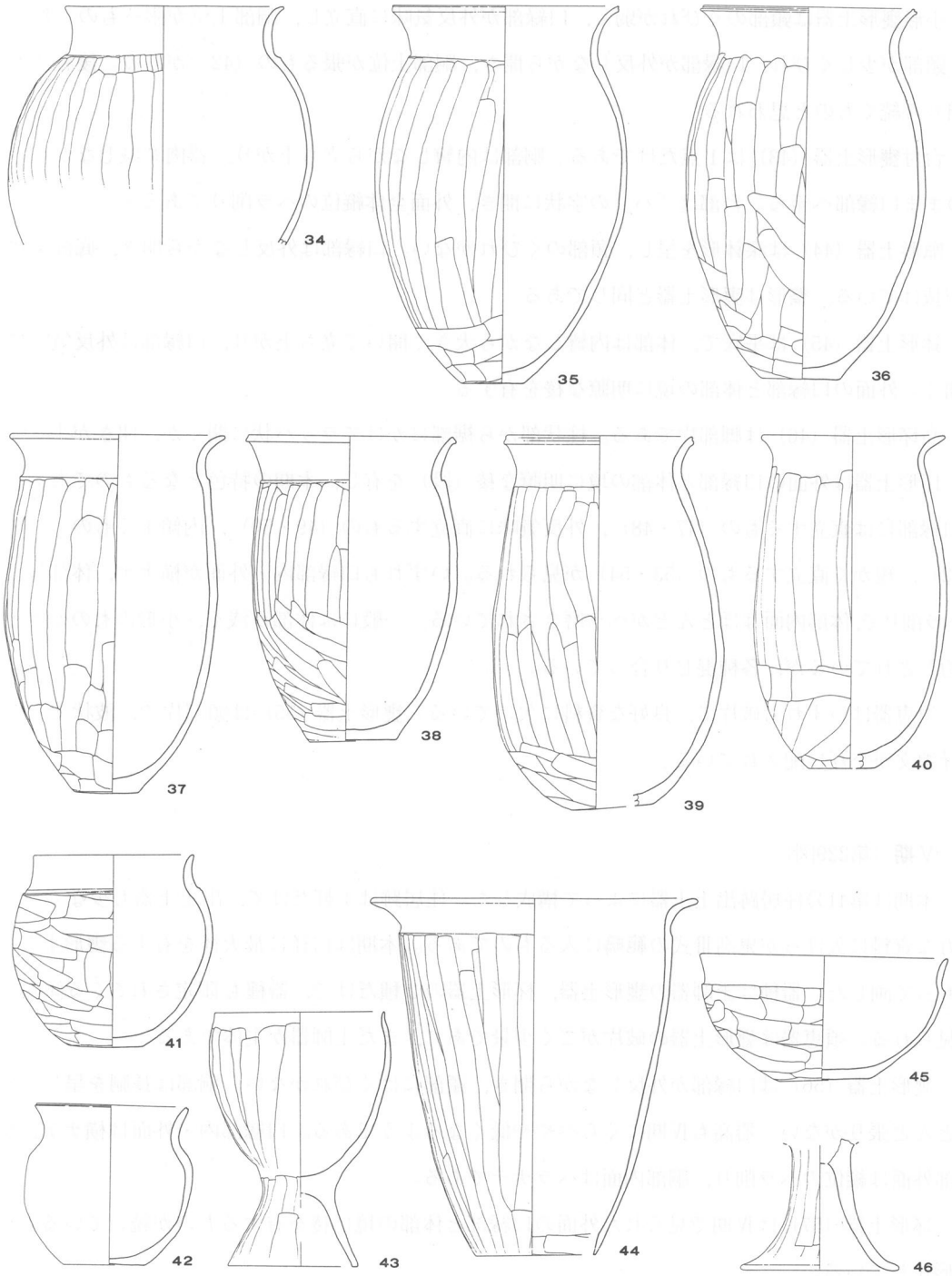
Ⅳ期（第228・229図）

本期は第46・49号住居跡，第3号土坑の出土土器によって設定した。本期は長胴甕，須恵器模倣坏，大形甑に代表され，鬼高式土器としての安定した土器群が見られ，鬼高Ⅱ式前半に比定されると思われる。わずかながら須恵器も伴出しており，器種は土師器の壺形土器，甕形土器，小形甕形土器，台付甕形土器，甑形土器，鉢形土器，高坏形土器，須恵器の甕形土器，坏形土器，蓋形土器，台付長頸壺形土器がある。

壺形土器（34）は口縁部が直立してから外反し，胴部はほぼ球形を呈している。口縁部内・外面が横ナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，胴部内面はヘラナデである。

甕形土器はほぼ長胴化が達せられるのが本期の特色である。これらは，最大径を胴部中位に有するもの（35・36），胴部最大径と口径がほぼ等しいもの（37・38），胴部中位から下位にかけて張る下ぶくれのもの（39・40）の3つに分けられる。新しくなるにつれて，最大径が胴部から口径に移るという一般的傾向からすれば，本期の甕形土器には若干の時間差もあり，本期をさらに区分することも可能であるが，3タイプが共伴していることから最大径が口径に移る前の段階として一括した。いずれも口縁部は外反しながら開き，底部は小さな平底である。また，口縁部と胴部の境には段があるものとないものがある。口縁部内・外面は横ナデ，胴部外面はヘラ削り，胴部

Ⅳ期（1）



第228図　土器編年図（3）

内面はヘラナデである。

小形甕形土器は頸部のくびれが弱く，口縁部が外反気味に直立し，胴部上位が張るもの（41）と頸部が少しくびれ，口縁部が外反しながら開き，胴部上位が張るもの（42）がある。後者はⅢ期から続くものと思われる。

台付甕形土器（43）は1点だけである。胴部は内彎しながら立ち上がり，器肉を減じながらそのまま口縁部へ至る。台部は「ハ」の字状に開き，外面全体縦位のヘラ削りである。

甑形土器（44）は深鉢形を呈し，頸部のくびれがない。口縁部は外反しながら開き，底部全体が抜けている。整形は甕形土器と同じである。

鉢形土器（45）は平底で，体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部は外反気味に開く。外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有する。

高坏形土器（46）は脚部片である。柱状部から裾部にかけてラッパ状に開くが，開きが小さい。

坏形土器は外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜（段）を有し，本期の特色となるものである。口縁部には直立するもの（47・48），外反気味に直立するもの（49・50），内傾するもの（51・52），短かく直立するもの（53・54）が見られる。いずれも口縁部内・外面が横ナデ，体部外面ヘラ削りで，体部内面はほとんどがヘラ磨きされている。一般には体部が浅く，小形のものが後出的とされているが，各種混じり合っている。

須恵器はいずれも破片で，良好な資料に欠けている。甕形土器（55）は頸部片で，波状文と平行線文が交互に配されている。

Ⅴ期（第229図）

本期は第41号住居跡出土土器によって構成した。住居跡は1軒だけで，出土土器も少なく，良好な資料に欠けるが鬼高Ⅲ式の範疇に入るものである。本期は口径に最大径を有する甕形土器をもって画した。器種は土師器の甕形土器，杯形土器の2種だけで，器種も限定されてくる傾向が見られる。須恵器は甕形土器の破片がごく少量であり，まだ土師器が主体である。

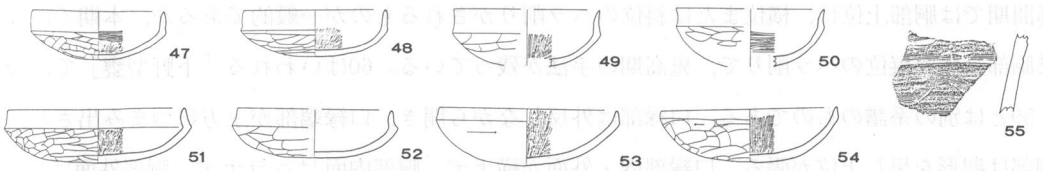
甕形土器（56）は口縁部が外反しながら開き，頸部にはくびれがない。胴部は長胴を呈し，ほとんど張りがない。器高もⅣ期にくらべやや低くなるようである。口縁部内・外面は横ナデ，胴部外面は縦位のヘラ削り，胴部内面はヘラナデである。

坏形土器（57）はⅣ期で見られた外面の口縁部と体部の境に稜を有するものが続いているが小形化している。

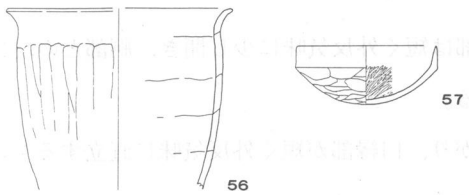
Ⅵ期（第229図）

本期は第59・60号住居跡出土土器からなる。Ⅴ期からの継続性と新しい様相を呈する土器群と

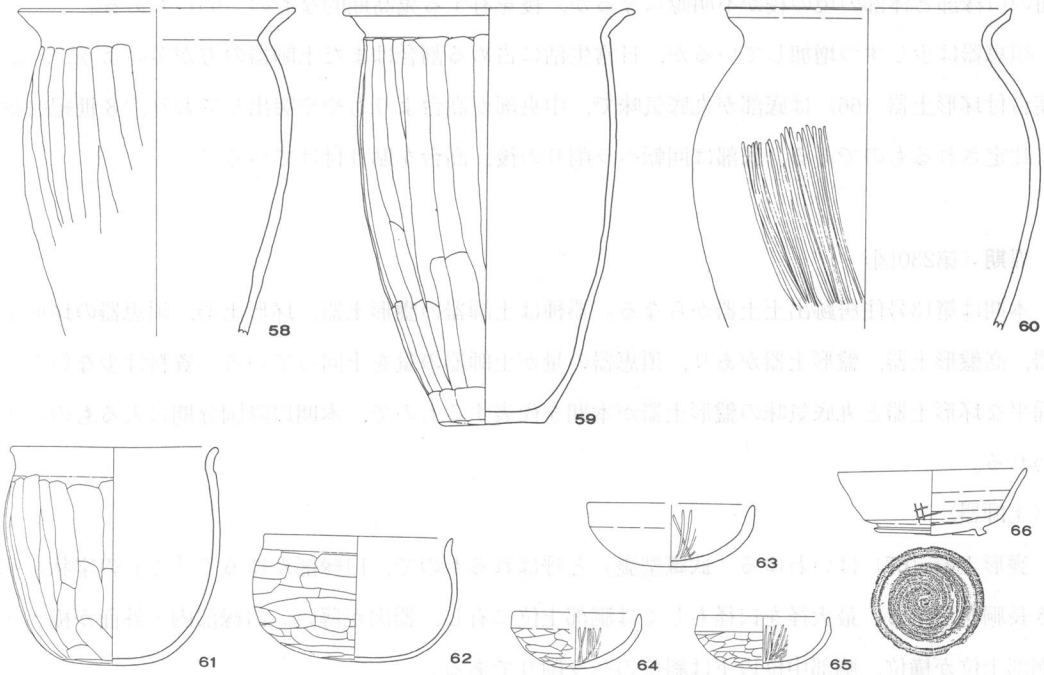
Ⅳ期（2）



Ⅴ　期



Ⅵ　期



第229図　土器編年図（4）

してとらえられるもので，真間期前半に比定されるものと思われる。器種は土師器の甕形土器，小形甕形土器，鉢形土器，坏形土器などがあるが，須恵器は甕形土器，坏形土器の破片が少量で，良好な資料に欠け，図示できたのは高台付坏形土器１点である。

甕形土器はⅤ期よりも口縁部の開きが大きくなり，頸部もくびれ，胴部上位が張るもの（58）

が主体となるが，まだ頸部のくびれも弱く，胴部もほとんど張りがないもの（59）も見られる。真間期では胴部上位に，横位または斜位のヘラ削りがされるものが一般的であるが，本期ではまだ胴部全体が縦位のヘラ削りで，鬼高期の手法が残っている。60はいわれる「下野型甕」で，58・59とは別の系譜のものである。口縁部は外反しながら開き，口縁端部が上方につまみ出され，胴部は卵形を呈し上位が張る。口縁部内・外面が横ナデ，胴部内面はヘラナデ，胴部外面はヘラナデ後中位以下に斜位のヘラ磨きが施されている。この甕形土器はいずれも破片ではあるが，当遺跡では本期からⅪ期まで見られるようである。

小形甕形土器（61）は頸部のくびれがなく，口縁部は短く外反気味に少し開き，胴部との境に稜を有するもので，Ⅳ期の41から続くものと思われる。

鉢形土器(62)は内彎しながら大きく開いて立ち上がり，口縁部が短く外反気味に直立するもので，体部は張るがⅣ期の45から変化したものと思われる。

坏形土器（63・64）は内彎しながら大きく開き，そのまま短い口縁部へ至る小形のもので，外面の口縁部と体部の境の稜が不明瞭になるが，稜を有する鬼高期的なもの（65）もある。

須恵器は少しずつ増加しているが，日常生活に占める割合はまだ土師器の方が多いようである。高台付坏形土器（66）は底部が丸底気味で，中央部が高台よりもやや突出しており，８世紀前葉に比定されるものである。底部は回転ヘラ削りの後，高台を貼り付けている。

Ⅶ期（第230図）

本期は第13号住居跡出土土器からなる。器種は土師器の甕形土器，坏形土器，須恵器の坏形土器，高盤形土器，盤形土器があり，須恵器の量が土師器の量を上回っている。資料は少ないが，扁平な坏形土器と丸底気味の盤形土器が本期を代表するもので，本期以降国分期に入るものと思われる。

〈土師器〉

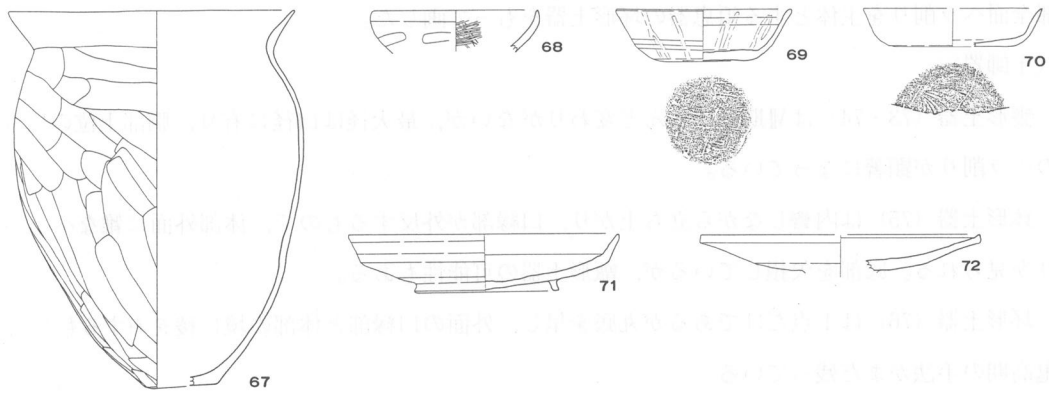
甕形土器（67）はいわゆる「武蔵型甕」と呼ばれるもので，口縁部がゆるく「く」の字状に開き長胴を呈する。最大径を口径もしくは胴部上位に有し，器肉が薄い。口縁部内・外面が横ナデ，胴部上位が横位，胴部中位以下は斜位のヘラ削りである。

坏形土器（68）は鬼高期の特徴を残しているもので，外面の口縁部と体部の境の稜は不明瞭である。

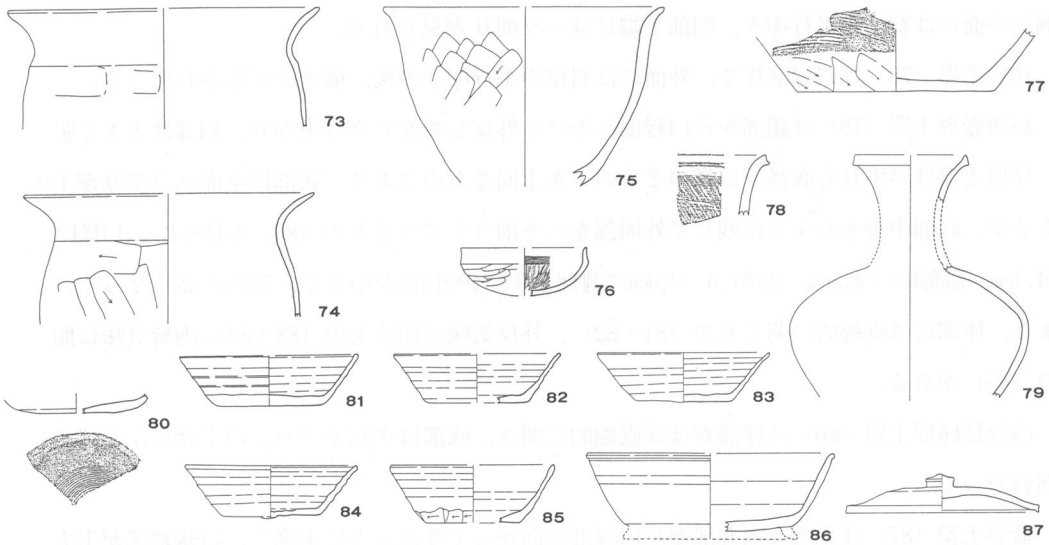
〈須恵器〉

坏形土器（69・70）は器高が低く扁平なもので，体部下半に丸味をもつ。それぞれ口径14.0cm・14.3cm，器高4.2cm・3.1cm，底径8.4cm・9.0cmである。69は底部全体に手持ちヘラ削りが施され，切り離しは不明である。70は回転糸切後，外周部に回転ヘラ削りが施されている。

Ⅶ 期



Ⅷ 期



第230図　土器編年図（5）

盤形土器（71）は，底部が丸底を呈しているが，高台の内側におさまっている。高台はやや細めである。

高盤形土器（72）は受け部片である。体部は内彎気味に大きく開き，口縁外端部は面をなす。

Ⅷ期（第230図）

本期は第２・３・26号住居跡，第１号井戸出土土器からなる。器種は土師器の甕形土器，鉢形土器，坏形土器，須恵器の甕形土器，鉢形土器，長頸壺形土器，坏形土器，高台付坏形土器，蓋

形土器があり，日用什器の主体は完全に土師器から須恵器に移っている。本期は切り離し後，底部全面ヘラ削りを主体とする須恵器の坏形土器をもって画した。

〈土師器〉

甕形土器（73・74）はⅦ期とほとんど変わりがないが，最大径は口径に有り，胴部上位の横位のヘラ削りが顕著になっている。

鉢形土器（75）は内彎しながら立ち上がり，口縁部が外反するもので，体部外面に雑なヘラ削りが見られる。底部を欠損しているが，甑形土器の可能性もある。

坏形土器（76）は1点だけであるが丸底を呈し，外面の口縁部と体部の境に稜を有するもので，鬼高期の手法がまだ残っている。

〈須恵器〉

甕形土器（77）は胴部下位から底部にかけての破片で，器形は窺えない。底部は平底を呈し，胴部外面には斜位の平行叩き，胴部下端にはヘラ削りが見られる。

鉢形土器（78）は口縁部片で，外面には斜位の平行叩きの後，横ナデがなされている。

長頸壺形土器（79）は頸部から口縁部へかけて外反しながら立ち上がり，胴部は大きく張る。

坏形土器はいずれも底径が口径の2分の1を上回るものである。底部は全面ヘラ削りが主体であるが，底部中央をわずかに残して外周部をヘラ削りしているもの（80）も見られる。口径13.0～14.1cm，器高3.8～4.3cm，底径7.6～9.0cmでⅦ期よりもやや口径が小さく，器高が高くなっている。また，体部には直線的に開くもの（81・82），外反気味に開くもの（83・84），内彎気味に開くもの（85）がある。

高台付坏形土器（86）は体部がほぼ直線的に開き，底部は平底で「ハ」の字状にふんばる短い高台がつく。

蓋形土器（87）は平坦な天井部から口縁部に向かってなだらかに下降し，口縁端部が下方につまみ出され，擬宝珠形のつまみがつく。

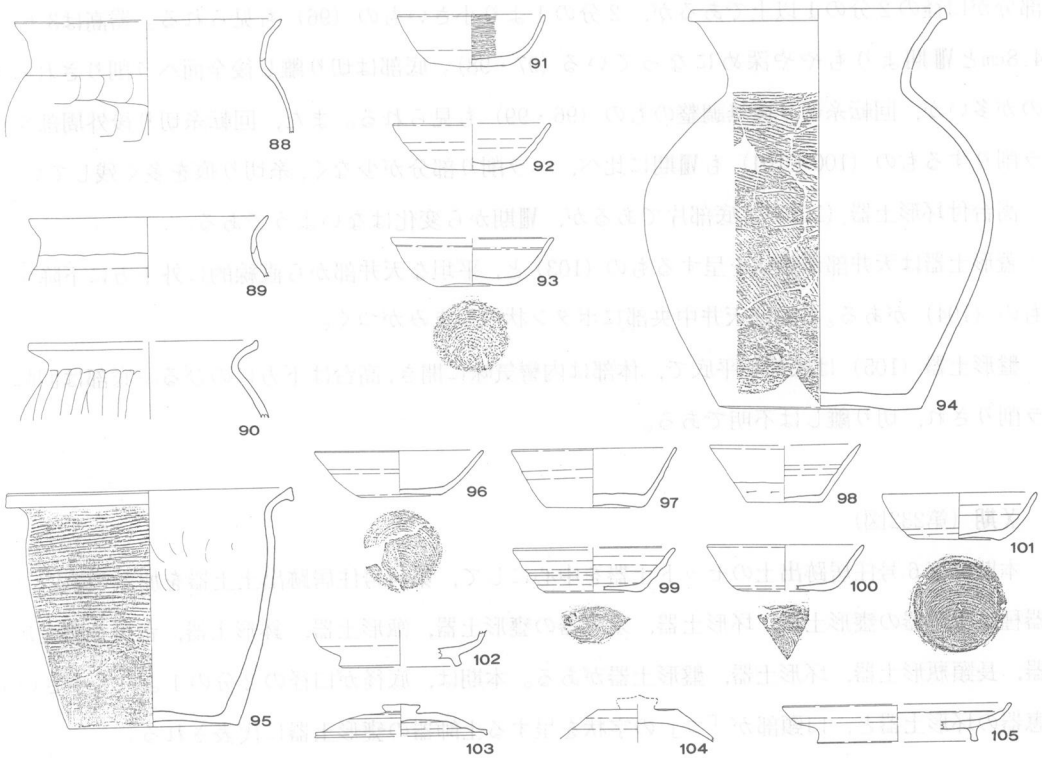
Ⅸ期（第231図）

本期は第28・29・30号住居跡出土土器を中心とし，更に第1・21・25・42号住居跡出土土器を加えて構成した。器種は土師器の甕形土器，坏形土器，須恵器の甕形土器，鉢形土器，坏形土器，高台付坏形土器，蓋形土器，盤形土器がある。本期は回転糸切り後，底部無調整のものを含む須恵器の坏形土器をもって画した。

〈土師器〉

甕形土器は口縁部がゆるやかに「く」の字状に開くものも残るが，88・89は直立気味に立ち上がってから外反し，「コ」の字状に近くなる。また，胴部上位に張りが出てきて最大径は胴部上

Ⅸ 期



第231図　土器編年図（6）

位にくる。整形はⅫ期と同じで，器肉も3～5㎜と非常に薄い。90は武蔵型甕や下野型甕とは別の系統をひくものと思われる。口縁部が短く「く」の字状に外反し，口縁端部が上方につまみ出され，胴部外面は縦位にヘラ削りされている。

坏形土器は丸底のものが消滅する。91～93はいずれもロクロにより整形されたもので，平底を呈し，体部の立ち上がり部分が丸味をもち，底部と体部の境は不明瞭である。91・92は底部切り離し後手持ちヘラ削り，93は回転糸切り後無調整である。

〈須恵器〉

甕形土器（94）は胴部が外傾して立ち上がり，中位のやや上が張る。口縁部は外反気味に開き，底部は平底である。胴部外面には平行叩き，胴部下端にはヘラ削りが施され，胴部内面はナデ，口縁部内・外面は横ナデである。

鉢形土器（95）は底部が平底で，体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。頸部がややくびれ，口縁部は短く外反する。口縁部内・外面は横ナデ，体部外面は平行叩き，体部下端はヘラ削り，体部内面はナデである。

坏形土器は口径11.8～13.6cm，底径6.4～7.8cmとⅧ期よりもさらに小形化している。底径も大部分が口径の２分の１以上であるが，２分の１より小さいもの（96）も見られる。器高は3.6～4.8cmとⅧ期よりもやや深めになっている（97・98）。底部は切り離し後全面ヘラ削りされるものが多いが，回転糸切り後無調整のもの（96・99）も見られる。また，回転糸切り後外周部をヘラ削りするもの（100・101）もⅧ期に比べ，ヘラ削り部分が少なく，糸切り痕を多く残している。

高台付坏形土器（102）は底部片であるが，Ⅷ期から変化はないようである。

蓋形土器は天井部が弧状を呈するもの（103）と，平坦な天井部から直線的に外下方に下降するもの（104）がある。103は天井中央部にボタン状のつまみがつく。

盤形土器（105）は底部が平底で，体部は内彎気味に開き，高台は下方にのびる。底部は回転ヘラ削りされ，切り離しは不明である。

Ⅹ期（第232図）

本期は第６号住居跡出土のセット土器を中心にして，第14号住居跡出土土器を加えて構成した。器種は土師器の甕形土器，坏形土器，須恵器の甕形土器，甑形土器，鉢形土器，台付長頸壺形土器，長頸瓶形土器，坏形土器，盤形土器がある。本期は，底径が口径の２分の１よりも小さい須恵器の坏形土器と，口頸部が「コ」の字状を呈する土師器の甕形土器に代表される。

〈土師器〉

甕形土器は口縁部が直立してから外反して，ほぼ「コ」の字状を呈すようになる（106）。このほかに口縁部がいく分内傾または外傾してから外反するもの（107・108）も見られる。いずれも胴部上位が張り，最大径も上位にある。109はⅨ期の90と同系統のもので，胴部上・中位には縦位，下位には横位のヘラ削りがなされている。

坏形土器（110・111）はⅨよりもやや器高を増すようである。体部の立ち上がり部分の丸味はなく，体部下端のヘラ削りが顕著で，体部と底部は明瞭に分かれる。

〈須恵器〉

甕形土器（112）は口縁部片で，外反気味に開き口縁端部を折り返している。

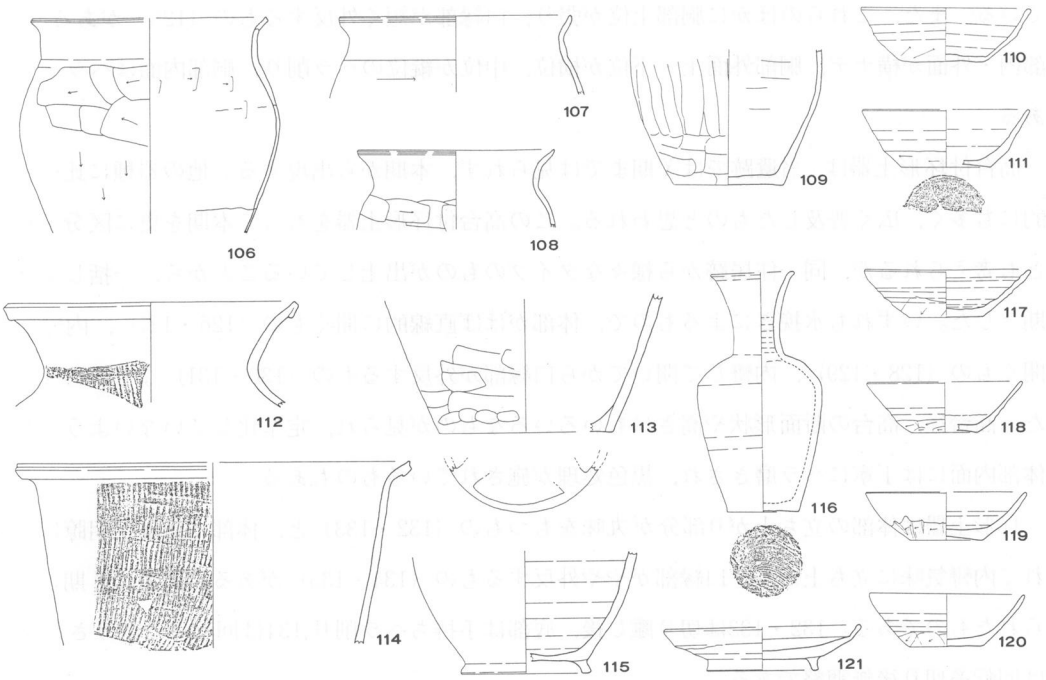
甑形土器（113）は底部片で五孔式と思われる。胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり，胴部下端がヘラ削りされている。

鉢形土器（114）は胴部がほぼ直線的に外傾して立ち上がり，口縁部が短く外反する。頸部のくびれはほとんどない。

台付長頸壺形土器（115）は胴部中位以上を欠損している。胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，底部は回転ヘラ削り後，短く開く高台を貼り付けている。

長頸瓶形土器（116）は胴部が直線的に外傾して立ち上がり，胴部上位で内彎する。頸部から口

Ⅹ 期



第232図　土器編年図（7）

縁部にかけてラッパ状に開き，底部は平底で，回転糸切り後無調整である。

坏形土器は口径11.8～13.6cm，器高3.9～4.4cm，底径5.3～7.0cmである。Ⅸ期と比べて口径・器高ともほとんど変化はないが，底径が更に小さくなっており，大半は底径が口径の2分の1以下である。いずれも体部下半は手持ちヘラ削りされ，底部は切り離し後，手持ちヘラ削りされている。体部は直線的に開くもの（117・118）と内彎気味に開くもの（119・120）がある。

盤形土器（121）はⅨ期の105よりも，体部と底部の境が明瞭に分かれる。

Ⅺ期（第233図）

本期は第5・17・20・30・37・53号住居跡出土土器で構成した。器種は土師器の甕形土器，高台付坏形土器，坏形土器，須恵器の甕形土器，甑形土器，台付長頸壺形土器，坏形土器，皿形土器があり，須恵器は減少傾向にある。本期は土師器の高台付坏形土器の出現と普遍化をもって画した。

〈土師器〉

甕形土器はⅩ期まで主体を占めていた口頸部が「コ」の字状を呈するものが退化し，122のように「コ」の字がくずれたものが出てくるようになり，器肉も厚くなる。しかし，まだ「コ」の字状を呈するもの（123）も残っている。124は胴部上・中位に縦位，下位に横位のヘラ削りがされ，

Ⅸ期の90，Ⅹ期の109から継続するものである。Ⅸ・Ⅹ期よりも口縁端部のつまみ出しが強くなっている。また，これらのほかに胴部上位が張り，口縁部が短く外反するもの（125）がある。口縁部内・外面が横ナデ，胴部外面上・下位が横位，中位が縦位のヘラ削り，胴部内面はヘラナデである。

高台付坏形土器は，当遺跡ではⅩ期までは見られず，本期から出現する。他の器種に比べ，量的にも多く，広く普及したものと思われる。この高台付坏形土器をもって本期を更に区分することも考えられるが，同一住居跡から様々なタイプのものが出土していることから，一括して同一期とした。いずれも水挽きによるもので，体部がほぼ直線的に開くもの（126・127），内彎して開くもの（128・129），内彎して開いてから口縁部が外反するもの（130・131）などがある。また，高台径，高台の断面形状や高さにもいろいろなものが見られ，定型化していないようである。体部内面には丁寧にヘラ磨きされ，黒色処理が施されているものもある。

坏形土器は体部の立ち上がり部分が丸味をもつもの（132・133）と，体部が底部と明瞭に分かれて内彎気味に立ち上がり，口縁部がやや外反するもの（134・135）がある。前者はⅨ期にも見られたものである。132・133は切り離し後，底部は手持ちヘラ削り，134は回転ヘラ削りされ，135は回転糸切り後無調整である。

〈須恵器〉

甕形土器（136）は口縁部片で，外反しながら大きく開き，端部は面をなして下方へ屈曲する。

甑形土器（137）は五孔式のもので，胴部上半を欠損する。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり，胴部外面下位には横位にヘラ削りされている。

台付長頸壺形土器（138）は胴部上半を欠損する。Ⅹ期の115とほぼ同じく，胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり，底部には回転ヘラ削り後短く開き高台を貼り付けている。

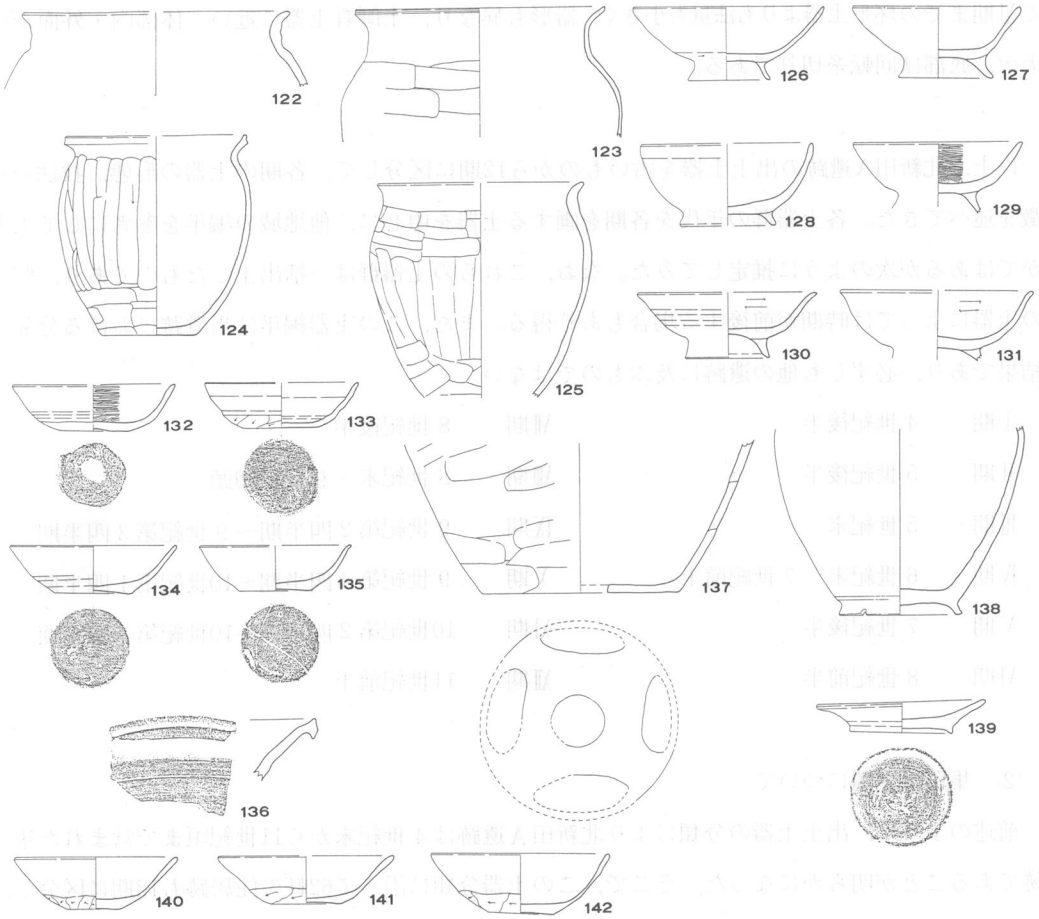
皿形土器（139）は体部が外反気味に大きく開き，口縁端部を丸くおさめている。底部には回転ヘラ削り後，低い高台を貼り付けている。

坏形土器は口径12.4～14.3cm，器高3.7～4.8cm，底径4.3～5.8cmである。Ⅹ期と比べ，器高はほぼ同じであるが，口径がやや大きくなる。底径は更に小さくなり，口径の3分の1に近いものも見られる。体部はほぼ直線的に開くもの（140），外反気味に開くもの（141），内彎気味に開くもの（142）がある。いずれも体部中位の器肉が薄く，口縁端部を丸くおさめ，体部下端は手持ちヘラ削りされている。底部は切り離し後，全面に手持ちヘラ削りされているものが多い。

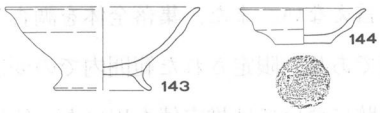
Ⅻ期　（第233図）

本期は当遺跡における最も新しい時期に位置づけられ，第52号住居跡出土土器によって構成した。器種は土師器の高台付坏形土器，坏形土器があるが，須恵器は非常に少なく，甕形土器と坏

XI 期



XII 期



第233図　土器編年図（8）

形土器の小破片がごく少量だけで，図示できるものはなかった。本期は須恵器の終末段階にあり，土師質土器を思わせる坏形土器の出現をもって画した。

高台付坏形土器（143）はXI期から見られるものである。体部は内彎気味に開き，口縁部はやや外反し，高台は「ハ」の字状に開く。

坏形土器は口径9.8～10.9cm，器高2.9～3.0cm，底径4.5～4.9cmで，図示したもの（144）のほかにも2点出土している。いずれも体部は内彎気味に開き，口縁部はやや外反するもので，体部中

位が肥厚して段をなしかすかに稜を有する。口径9.8～10.9cm，器高2.9～3.0cm,底径4.5～4.9cmでⅪ期までの坏形土器よりも法量も小さく，器形も異なり，土師質土器に近い。体部内・外面が横ナデ，底部は回転糸切りである。

以上，北新田A遺跡の出土土器を古いものから12期に区分して，各期の土器の形態，技法の特徴を述べてきた。各土器群の年代を各期を画する土器を中心に，他地域の編年を参考にして大まかではあるが次のように推定してみた。なお，これらの土器群は一括出土したものであり，個々の土器によっては時期が前後する場合もあり得る。また，この土器編年は当遺跡における分類の結果であり，必ずしも他の遺跡に及ぶものではない。

Ⅰ期	4世紀後半	Ⅶ期	8世紀後半
Ⅱ期	5世紀後半	Ⅷ期	8世紀末～9世紀初頭
Ⅲ期	5世紀末	Ⅸ期	9世紀第2四半期～9世紀第3四半期
Ⅳ期	6世紀末～7世紀前半	Ⅹ期	9世紀第4四半期～10世紀第1四半期
Ⅴ期	7世紀後半	Ⅺ期	10世紀第2四半期～10世紀第3四半期
Ⅵ期	8世紀前半	Ⅻ期	11世紀前半

(2) 集落の変遷について

前述のように，出土土器の分類により北新田A遺跡は4世紀末から11世紀頃まで営まれた集落跡であることが明らかになった。そこで，この土器分類に沿って62軒の住居跡も12期に区分し，各時期ごとに住居跡の形態・配置等を検討しながら，集落の変遷をたどってみたい。しかし，土器分類による1時期は25～50年の幅をもつため，土器の中にも新旧両相が認められることや，住居の耐久年数から，該期の住居跡がすべて同時存続したとは言えない。また，集落全体を調査していないため，本来の意味での集落をとらえることは不可能であり，限定された範囲内での変遷にならざるを得ない。なお，主軸方向・規模等の不明な住居跡については推定値を用いた。住居跡以外の遺構については，遺物により時期が判明した第3号土坑と第3号井戸を変遷の中に加えた。

当遺跡は，北から南へ延びる標高18～19mの平坦な台地の南から西にかけての縁辺部に立地しており，調査区域は幅約40m，長さ約400mで南北に細長くなっている。遺構が検出されたのはF～K区で，調査区域の南端から中央部までの約240mの間である。F区よりも北側のA～E区からは全く遺構は検出されず，遺物もごく少量出土しただけである。K区の南側は台地の南端で急斜面となっており，遺構の存在は考えられない。従って集落の範囲はF区よりも北へ，K区よりも南へは延びていないものと思われる。これに反し，調査区域の東西幅は約40mしかなく，検出さ

れた遺構のうち，住居跡９軒，溝10条は調査区域の東または西へ延びていることや，区域外にも遺物が散布していることから，集落は東西両方向へ広がることは容易に理解できる。

Ⅰ期（第234・235図）

本期に属する住居跡は，第４・９・10・19・22・23・32・33・51・56号住居跡の10軒である。（なお，第51号住居跡から鬼高期の坏形土器が１点出土しているが，他の遺物は五領期のものであり，本跡を切っている第49号住居跡のものと思われる。）

長軸方向は第９・22号住居跡を除いて，N－13°～35°－Wの範囲におさまる。規模は長・短軸とも3.4～5.0mで，一定している。平面形は長方形・隅丸長方形を呈するものが多いが，長軸短軸の差は少なく，方形に近い。また，それぞれ床面中央か北寄りに炉を有しており，本期の住居には規則性が認められる。

配置からすると，10軒は調査区域の中央部から南端近くまでにわたって点在している。いずれも調査区域の西半分に偏していることから，集落は西へ延びているものと思われる。また，互に重複関係はなく，２～３軒ずつ４群に分けることができる。北から第４・10号住居跡の２軒，第９・19・22号住居跡の３軒，第23・32・33号住居跡の3軒，第51・56号住居跡の２軒である。これらの群には，住居跡の形態がほぼ一定していることや,また,本期の土器群の中にはそれほどのの新旧差が認められないことから，大きな時間差はないと思われる。

Ⅱ期（第234・235図）

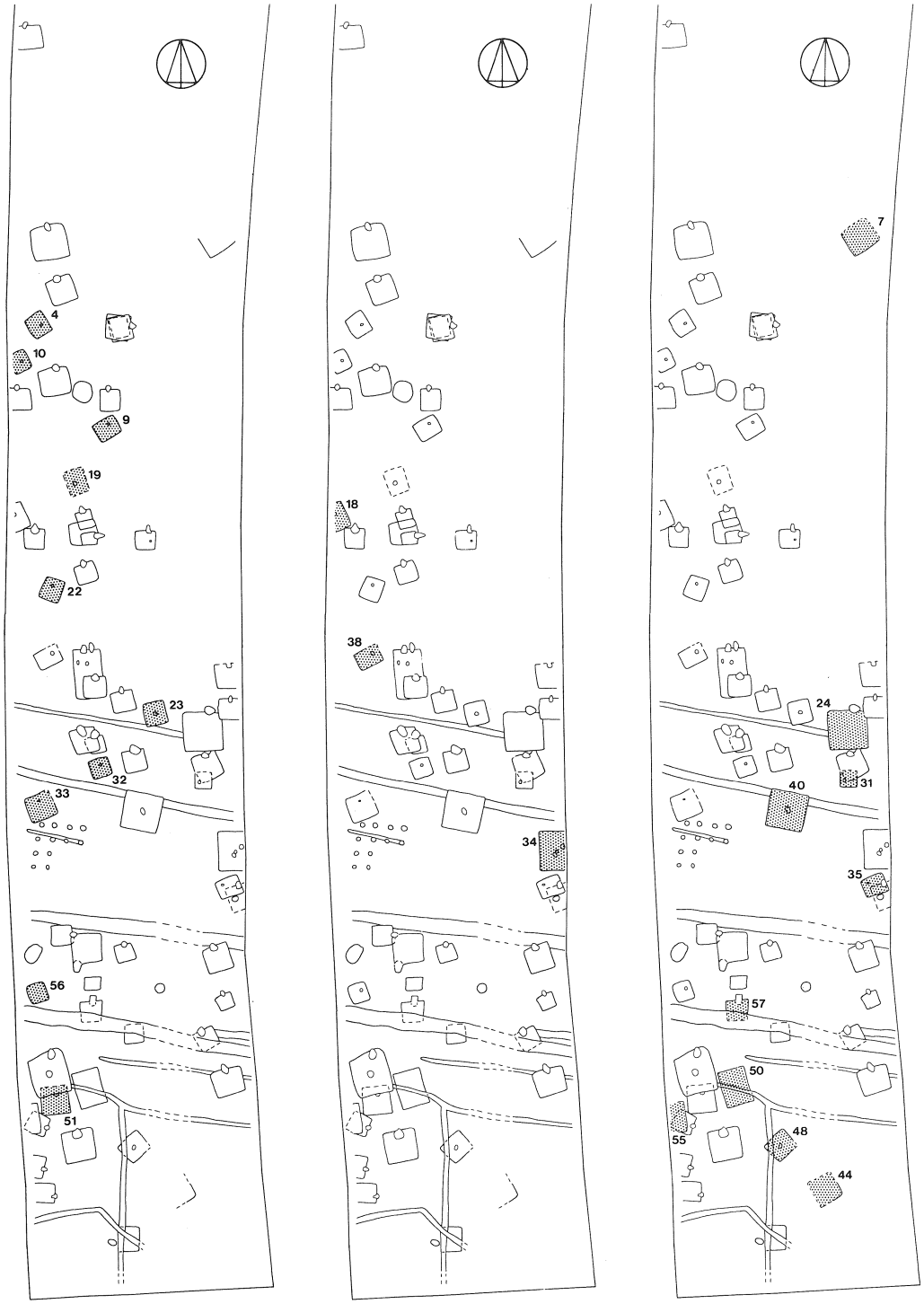
本期に属する住居跡は，第18・34・38号住居跡の３軒である。土器分類からはⅠ期と本期との間には空白期間がある。

長軸方向は第18号住居跡が23度，第34号住居跡が４度西に，第38号住居跡は62度東に振れており，２つに分かれている。第18・34号住居跡はいずれも調査区域外へ延びており，規模・平面形は推定で，それぞれ約5m，7.1mの方形を呈するものと思われる。第38号住居跡は4.6×3.3mの長方形を呈している。本期の住居跡は３軒だけであるが，長軸方向・形態とも一定していないようである。

配置からみると，北から第18号住居跡が在り，その南約20mに第38号住居跡，そこから南東約43mに第34号住居跡が在る。３軒はそれぞれ大きく離れ，集落の形態をなさないが，土器分類の上からは本期とⅢ期は非常に接近しており，Ⅲ期の集落が形成される初期の段階と思われる。

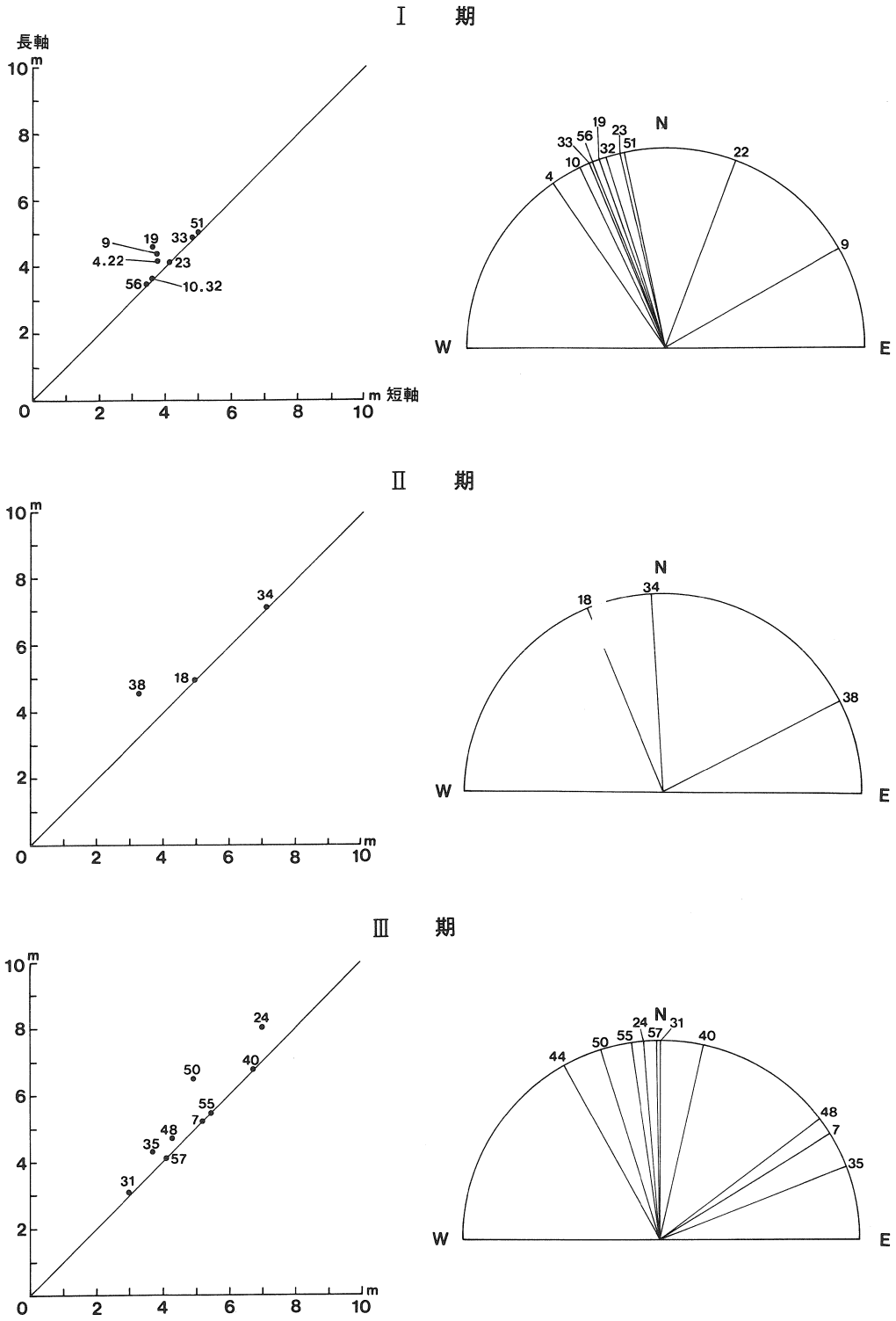
Ⅲ期（234・235図）

本期に属する住居跡は，第７・24・31・35・40・44・48・50・55・57号住居跡の10軒である。



Ⅰ　期　　Ⅱ　期　　Ⅲ　期

第234図　時期別住居跡配置図（1）



第235図　時期別住居跡規模・主軸方向（1）

長軸方向はN－12.5°－E～N－29°－Wの範囲と，N－53°～68.5°－Eの範囲の2つに分かれている。規模は長・短軸が3～7mと大小差が見られ，平面形は方形を呈するものが多いが，長方形,隅丸方形を呈するものもある。これらの傾向はⅡ期から見られるものである。

配置をみると3群に分かれる。北から第7号住居跡1軒，第24・31・35・40号住居跡の4軒，第44・48・50・55・57号住居跡の5軒である。各群とも調査区域の東か西に偏していることや，調査区域外へ延びている住居跡も見られることなどから，集落も東または西へ広がることが推察できる。Ⅱ期の34号住居跡はⅢ期の35号住居跡の北約1mに位置しており，第24・31・35・40号住居跡の群に属しているものと考えられ，集落がⅡ期からⅢ期へ間断なく移行したことが理解できる。また，Ⅱ期とⅢ期の住居跡の形態が同じ傾向を示していることも，それを裏づけていると思われる。さらに，本期は群を構成する住居数が増え，群内の住居規模にも大小が見られるようになり，集落構造が整いつつあることがうかがえる。

Ⅳ期（第236・237図）

本期に属する住居跡は，第46・49号住居跡の2軒で，これに第3号土坑が加わる。土器分類からは，Ⅲ期と本期の間には空白期間がある。

主軸方向は第46号住居跡がN－22°－W，第49号住居跡がN－12°－Wを指し，いずれも西に振れる。規模は長・短軸が5.8～7.7mと大形で，平面形はほぼ方形を呈している。また，しっかりした4本の主柱穴と北壁にカマドを有している。壁高は50～70cmで，床面も堅く締まり，壁溝が全周し，全体に整った典型的な鬼高期の住居跡である。

配置からみると，3遺構とも調査区域の南端近く，西に偏している。南へ向かうと急斜面となり，集落は南へは延びず西へ広がるものと思われる。3遺構とも遺物が多いことや，甕形土器の長胴化，大形の甑形土器の出現は生産力が増大したことを示すものであり，調査区域の西側には大規模な集落が存在し，本期の遺構はその集落の東端に位置していた可能性もある。土器分類からすると若干の時間差はあるが，同時存在に近く，一時期は同時に存在して廃絶期に差があったと思われる。

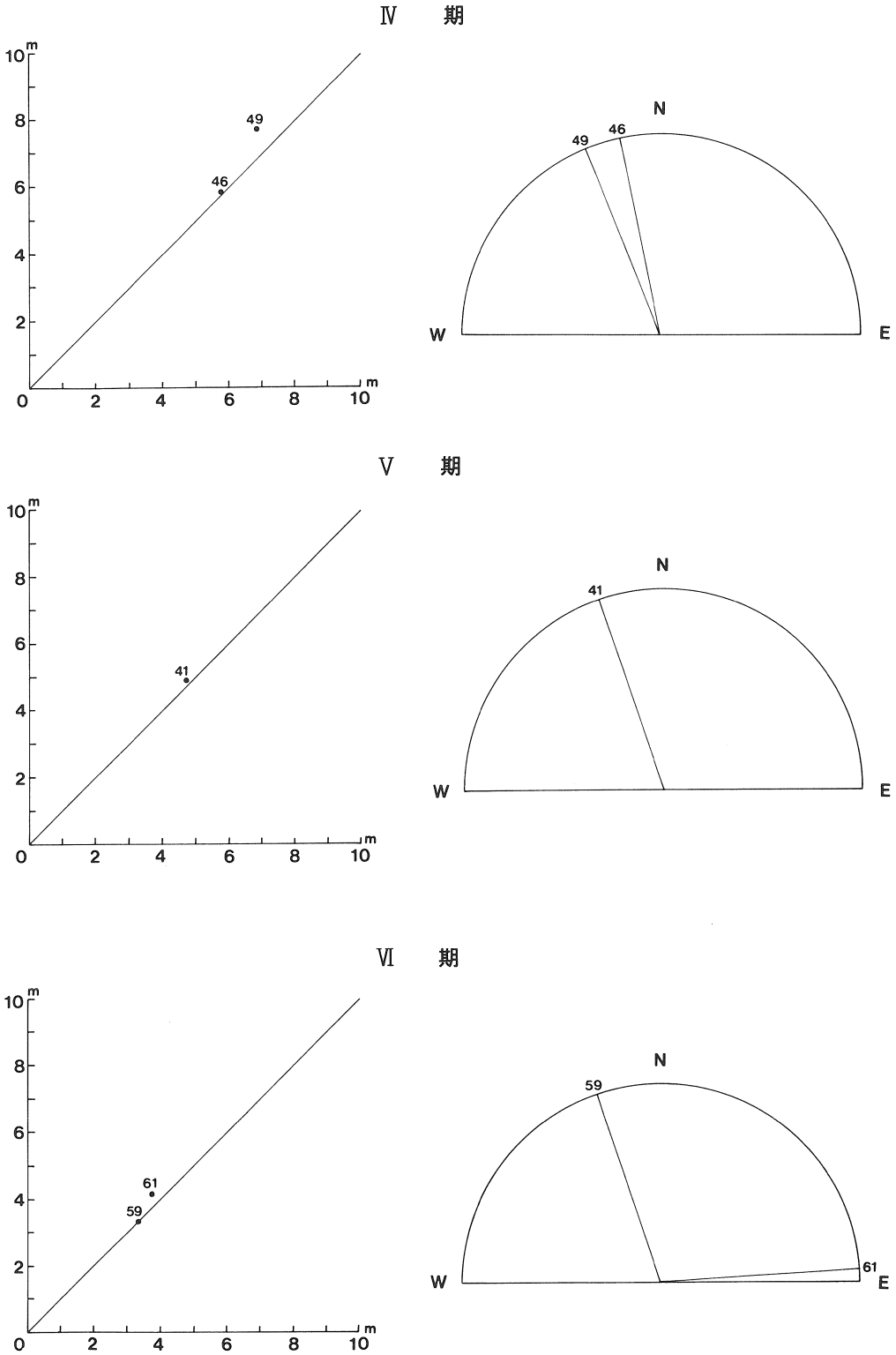
Ⅴ期（第236・237図）

本期に属する住居跡は，第41号住居跡1軒である。

主軸方向はN－19°－Wを指し，規模は長・短軸とも約4.9mで，平面形は方形を呈している。また，4本の主柱穴と北壁にカマドを有し，Ⅳ期のように整った住居跡であるが，小形化している。1軒だけで集落について考えることは困難であるが，集落規模が縮小している傾向を示しているものと思われる。

Ⅳ　期　　Ⅴ　期　　Ⅵ　期

第236図　時期別住居跡配置図（２）



第237図　時期別住居跡規模・主軸方向（2）

配置からみると，調査区域の東に偏しており，集落が東へ広がることは考えられる。

Ⅵ期（第236・237図）

本期に属する住居跡は，第59・61号住居跡の２軒である。

主軸方向は第59号住居跡がＮ－19°－Ｗ，第61号住居跡がＮ－86.5°－Ｅで，大きく分かれる。規模はⅤ期よりも更に小形化する傾向にあり，長・短軸は3.3～4.3m である。平面形はいずれも隅丸方形を呈し床面は堅い。第59号住居跡は北壁にカマドを有し，主柱穴は不明であるが，第61号住居跡は東壁にカマドを有し，規則的に４本の主柱穴を配している。当遺跡では，本期から東壁にカマドを構築した住居跡が見られるようになるが，その数は少ない。

配置をみると，２軒とも調査区域の南寄りに位置し，互に重複することなく近接しているが，カマドの位置と主柱穴配置の差は，２軒の間の時間差を示すものと見られる。しかし，土器分類の上からは大きな時間差はないと思われる。

Ⅶ期（第238・239図）

本期に属する住居跡は，第13号住居跡１軒である。

主軸方向はＮ－０°を指し，規模は１辺3.85m で，平面形は隅丸方形を呈している。Ⅴ期からの住居規模の小形化の傾向は続いているようである。

本跡は調査区域の西へ延びており，集落の中心もその方向にあたることも考えられるが，１軒だけであるため，集落の構成については不明である。しかし，Ⅴ期から本期までは，住居跡数が１～２軒と少なく，当遺跡では，集落としても小規模なものが続いたものと思われる。

Ⅷ期（第238・239図）

本期に属する住居跡は，第２・３・26号住居跡の３軒で，これに第１号井戸が加わる。

主軸方向はＮ－10°～22.5°－Ｗの範囲におさまる。規模は第２号住居跡が6.6×6.5m と大きく，第３・26号住居跡は長・短軸が4.5～4.8m と小さい。平面形はいずれも方形を呈している。

配置からみると，北から第２・３号住居跡・第１号井戸の群と，南へ約60m 離れて第26号住居跡の２群に分かれる。土器分類の上からは若干の新旧差が認められ，第26号住居跡・第１号井戸が古く，第２・３号住居跡が新しいと考えられる。

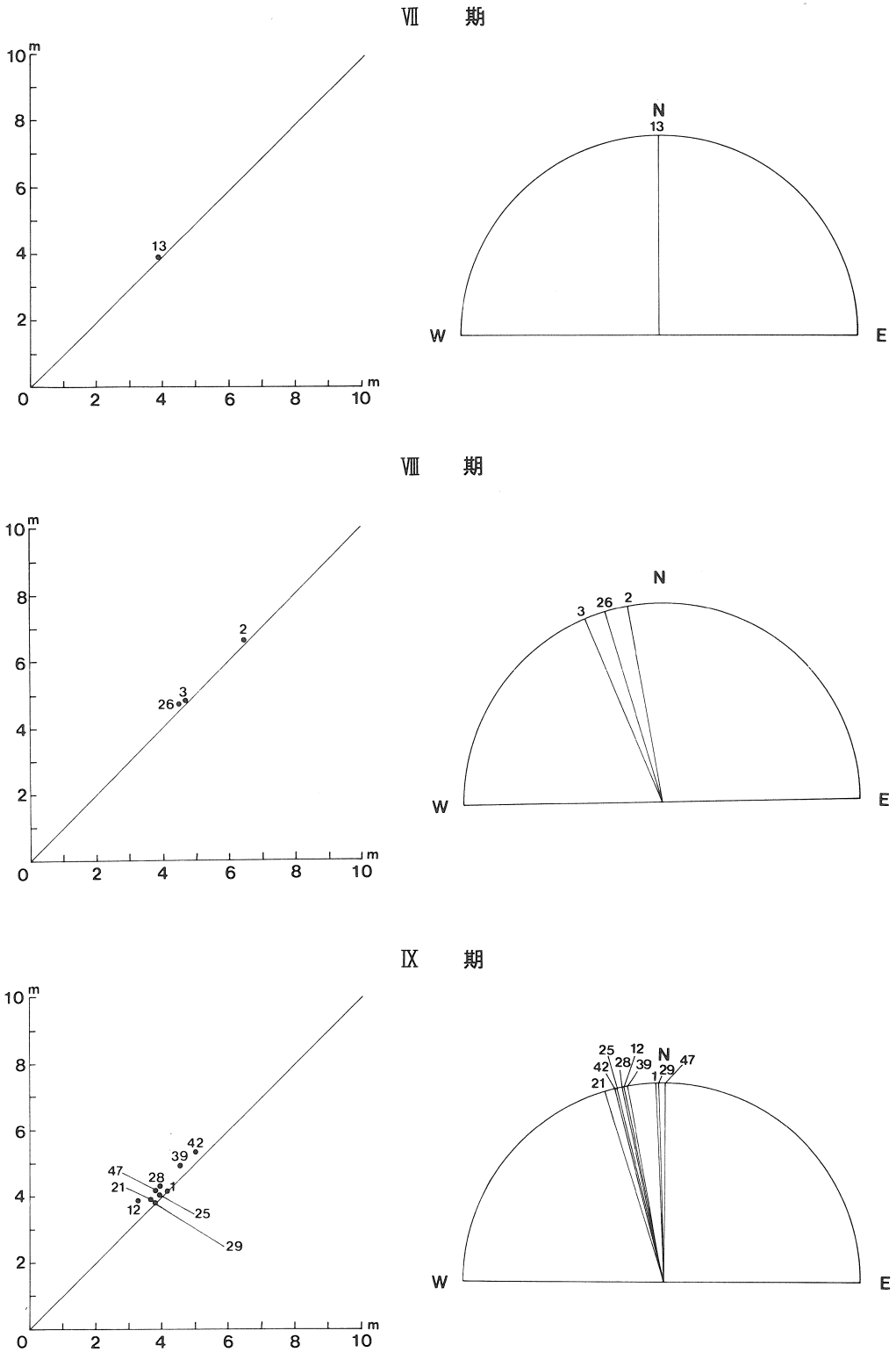
Ⅸ期（第238・239図）

本期に属する住居跡は，第１・12・21・25・28・29・39・42・47号住居跡の９軒である。

主軸方向はＮ－０°～17.5°－Ｗの範囲におさまる。規模は第42号住居跡の5.4×4.95m を除き，

Ⅶ 期　　Ⅷ 期　　Ⅸ 期

第238図　時期別住居跡配置図（3）



第239図　時期別住居跡規模・主軸方向（3）

他は長・短軸が5m以下に集約され，ほぼ小形化が定着している。平面形は方形，隅丸方形，長方形を呈し，主柱穴も不明なものが多く一定していない。

配置からみると，調査区域の中央部から南端まで200m以上にわたって分散している。これらの住居跡の時間差はすべて同時存在したとは考えられないが，土器分類の上からは区分が困難である。第29号住居跡と第39号住居跡の間隔は2mで，同時存在したとは認め難く，本期の集落も2段階以上にわたるものと推定される。

Ⅹ期（第240・241図）

本期に属する住居跡は，第6・11・14・15・62号住居跡の5軒である。

主軸方向はN－21°－W～N－7.5°－Eの範囲におさまる。規模は第6号住居跡の5.4×4.5mを除き，他は長・短軸が5m以下で，第15号住居跡は3.3×2.8mと特に小さい。平面形はⅨ期と同じく方形，隅丸方形，長方形を呈し，一定していない。

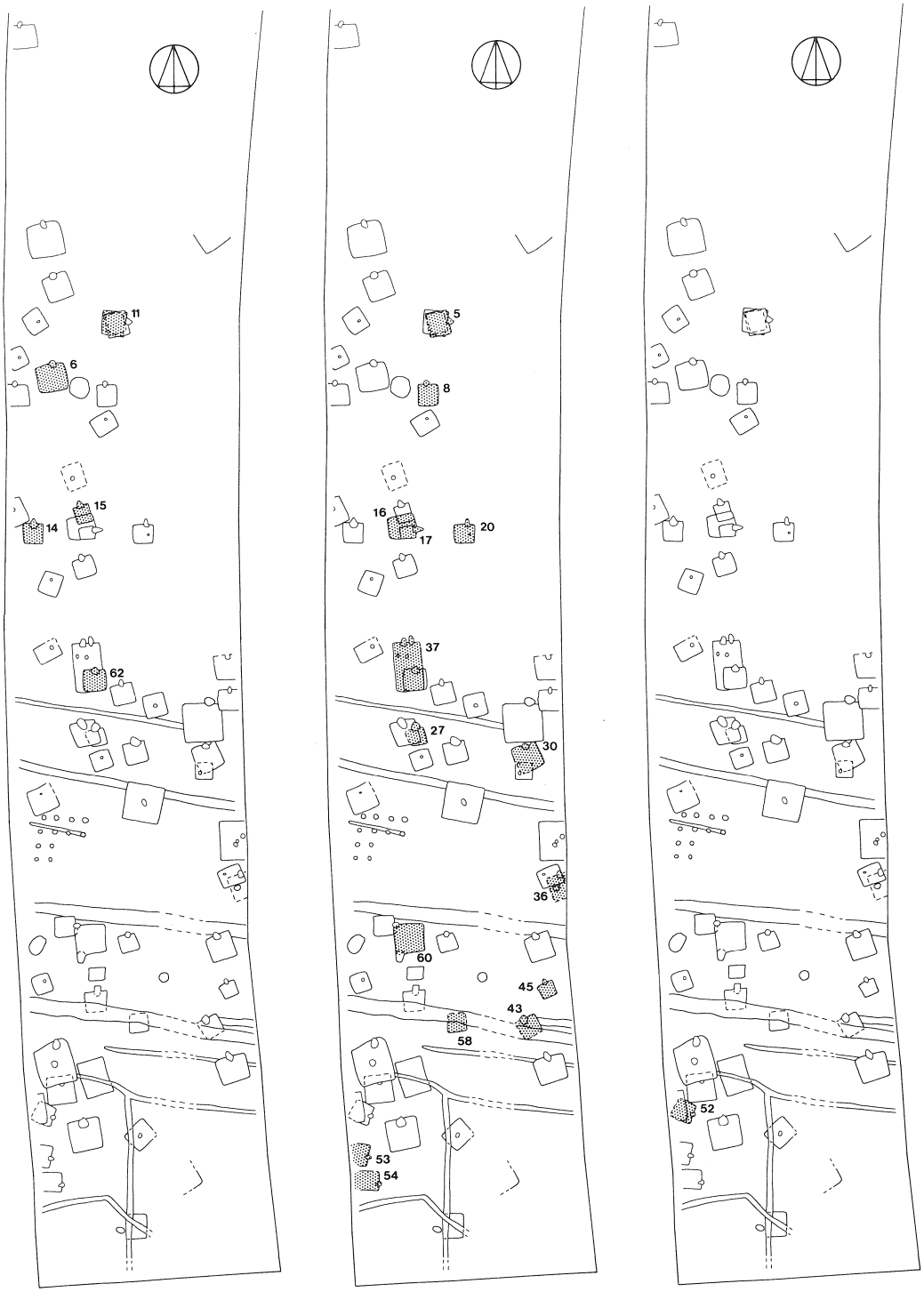
配置から見ると，北から第6・11号住居跡の2軒，第14・15号住居跡の2軒，第62号住居跡1軒の3群に分かれるが，土器分類の上からは，第6号住居跡を除いて土器が少なく時間差はとらえにくい。

Ⅺ期（第240・241図）

本期に属する住居跡は，第5・8・16・17・20・27・30・36・37・43・45・53・54・58・60号住居跡の15軒である。

主軸方向はN－0°～30°－Wの範囲と，N－80°～100°－Eの範囲の2つに分かれる。後者のうち，第5・17・53・54号住居跡は東壁にカマドを有している。規模は第37・60号住居跡を除いて，長・短軸が5m以上で，平面形は方形，隅丸方形，不整方形，長方形と一定していない。この傾向はⅨ期から続いている。また竪穴も整ったものは少なくくずれ気味である。第37号住居跡は9.05×5.05mと大形の長方形を呈し，また北壁には同時に使用したと思われるカマド2基を有し，他の住居跡とは大きく異なっている。

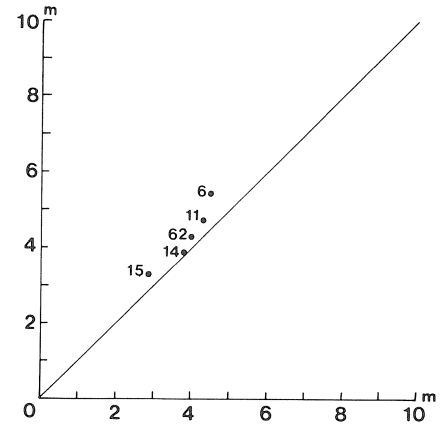
配置からみると，15軒が調査区域のほぼ中央部から南端まで分散している。土器分類の上からは，若干の新旧差が認められるが，それらが共伴しており住居跡の時間差はとらえにくい。しかし，第16・17号住居跡は重複関係にあり，また，第53号住居跡と第54号住居跡は約1mしか離れておらず，同時に存在したとは言い難い。従って，本期の集落も少なくとも2段階以上の経過があったものと思われる。本期は住居数も多く，配置からは調査区域外への広がりも考えられ，当遺跡の集落が最も安定・拡大した時期であったことがうかがえる。

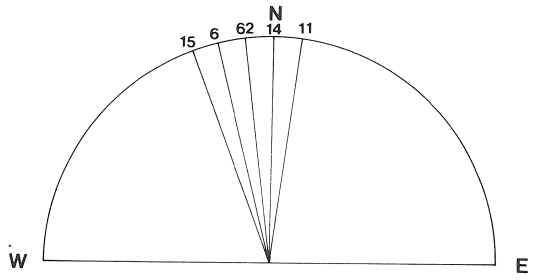


X 期　　XI 期　　XII 期

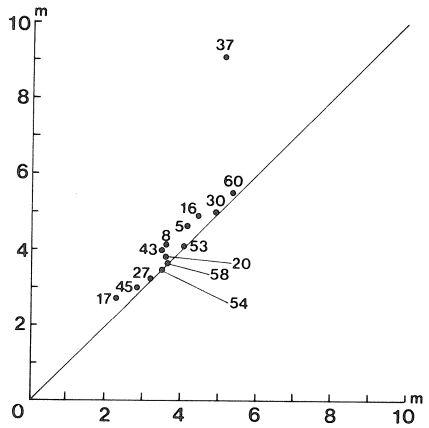
第240図　時期別住居跡配置図（4）

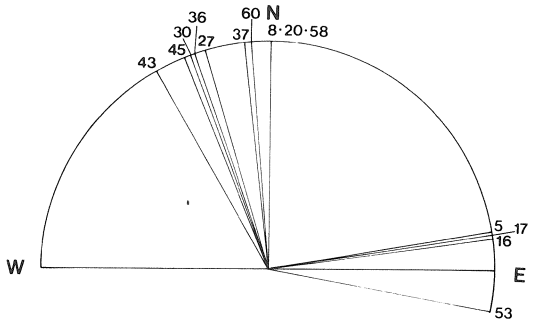
Ⅹ　期



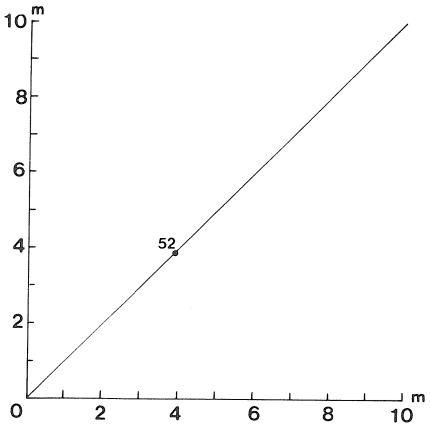


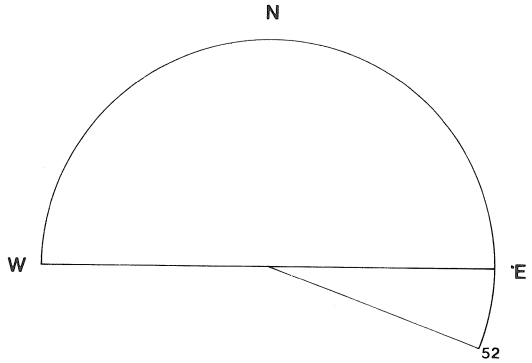
Ⅺ　期





Ⅻ　期





第241図　時期別住居跡規模・主軸方向（4）

XII期（第240・241図）

本期に属する住居跡は，第52号住居跡１軒である。土器分類の上からは，XI期と本期の間には若干の空白期間がある。

主軸方向はＮ－110°－Ｅを指し，東よりはやや南へ振れる。規模は１辺3.85m で，平面形は方形を呈するものと思われるが，XI期と同じく竪穴の状態はくずれ気味である。

配置からみると，調査区域の西に偏し区域外へ延びていることから，集落は西へ広がっている可能性がある。しかし，１軒だけであり，本期で集落が急に衰退・消滅したものと考えられる。

以上，各時期における住居跡と集落の変遷をたどってみたが，当遺跡の場合，道路という線上の調査であり，集落を面でとらえるまでには至らなかった。従って，調査区域外については推定の域を出ないものであるが，当遺跡における集落の変遷過程の概略はとらえられたものと思われる。

表８　住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
1	F1d4	N-2.5°-W	方形	4.20×(　)	10～15	平坦	17	カマド	自然	土師器・須恵器 古銭・鉄鏃	IX	
2	G1c5	N-10°-W	方形	6.60×6.50	50～70	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄斧・鎌	VIII	貯蔵穴
3	G1e5	N-22.5°W	方形	4.80×4.70	50	平坦	13	カマド	自然	土師器・須恵器	VIII	
4	G1g4	N-35°-W	隅丸長方形	4.15×3.75	25～38	平坦	6	炉	攪乱	土師器	I	
5	G1g8	N-80°-E	方形	4.55×4.05	15～20	平坦	11	カマド	攪乱	土師器・須恵器 丸瓦	VI	SI11・12と重複
6	G1j5	N-14°-W	長方形	5.40×4.50	25～40	平坦	15	カマド	自然	土師器・須恵器 鎌・刀子	X	
7	G2d2	(N-58°-E	方形	5.20×(　)	10	平坦	4		攪乱	土師器	III	貯蔵穴
8	G1j7	N-0°	隅丸長方形	4.05×3.60	5	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器	XI	
9	H1a7	N-60°-E	長方形	4.40×3.65	5～10	平坦	5	炉	自然	土師器	I	
10	G1h3	N-26°-W	隅丸方形	3.60×(　)	13～21	平坦		炉	人為	土師器	I	
11	G1g8	N-7.5°-E	方形	4.65×4.25	15	平坦	11	カマド	攪乱	土師器・須恵器	X	SI5・12と重複
12	G1g8	N-12°-W	長方形	3.90×3.25	10	凹凸	6		人為		IX	SI5・11と重複
13	G1j3	N-0°	隅丸方形	3.85×(　)	35～45	平坦	4	カマド	攪乱	土師器・須恵器	VII	
14	H1f4	N-0°	方形	3.80×3.75	30～40	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	X	SI18と重複
15	H1e6	N-21°-W	長方形	3.30×2.80	50～55	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器	X	SI16と重複
16	H1f6	N-82°-E	隅丸方形	4.90×4.40	30～35	平坦	8		自然	土師器・須恵器 槍鉋	XI	SI15・17と重複
17	H1f6	N-81°-E	長方形	2.70×2.30	50～55	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器 釘	XI	SI16と重複

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	規模 壁高(cm)	床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
18	H1e3	N-23°-W	方形	4.95×( )	26～36	平坦	5	炉	自然	土師器・鎌	Ⅱ	SI 14と重複
19	H1d6	N-20°-W	長方形	(4.60)×(3.60)		平坦	5	炉		土師器	Ⅰ	
20	H1f9	N-0°	方形	3.75×3.60	25～35	平坦	18		自然	土師器・須恵器	Ⅺ	
21	H1h6	N-17.5°-W	隅丸方形	3.90×3.70	50	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 鎌・石製紡錘車	Ⅸ	
22	H1h5	N-20°-E	長方形	4.20×3.85	20～35	平坦	5	炉	自然	土師器	Ⅰ	
23	I1d9	N-14°-W	隅丸方形	4.25×4.10	30	平坦	7	炉	自然	土師器	Ⅰ	
24	I2e1	N-5°-W	方形	7.08×7.00	35～40	平坦	9	炉	自然	土師器	Ⅲ	SI29・SD1・SE2と重複
25	I1d8	N-14°-W	方形	4.10×3.85	35	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器 鎌	Ⅸ	
26	I1e6	N-17°-W	方形	4.70×4.45	45	平坦	11	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅷ	SI27と重複
27	I1e7	N-17°-W	方形	3.20×3.20	15～20	平坦	3	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅺ	SI26と重複
28	I1f8	N-12.5°-W	方形	4.25×3.90	40	平坦	7	カマド	自然	土師器・須恵器 刀子	Ⅸ	
29	I2d3	N-2°-W	方形	3.80×( )	45	平坦	5	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄鏃	Ⅸ	SI24と重複
30	I2f2	N-21°-W	隅丸方形	5.00×4.90	25～28	平坦	9	カマド	自然	土師器・須恵器・鉄鏃 鑿・刀子・釘	Ⅺ	SI31と重複
31	I2g1	N-0°	方形	3.10×3.00	20～25	平坦	1	炉	自然	土師器	Ⅲ	SI30と重複
32	I1g7	N-18°-W	隅丸方形	3.60×3.60	5～10	平坦	8	炉	自然	土師器	Ⅰ	
33	I1h4	N-23°-W	方形	4.90×4.75	0～5	平坦	6	炉	自然	土師器	Ⅰ	
34	I2j3	N-4°-W	方形	7.10×( )	25～28	平坦	2	炉	自然	土師器	Ⅱ	貯蔵穴
35	J2b3	N-68.5°-E	隅丸長方形	4.35×3.70	15～20	平坦	4	カマド	人為	土師器	Ⅲ	SI36・SK 1と重複
36	J2b3	(N-20°-W)			5			カマド		土師器	Ⅺ	SI35・SK 1と重複
37	I1b6	N-7°-W	長方形	9.05×5.05	35	平坦	10	カマド	自然	土師器・須恵器 鉄鏃・刀子・釘	Ⅺ	SI62と重複
38	I1b4	N-62°-E	長方形	4.60×3.30	35	平坦	7	炉	攪乱	土師器	Ⅱ	
39	I2b2	N-11°-W	隅丸方形	一辺4.5～5m	75	平坦	4	カマド	自然	土師器・須恵器 石製紡錘車・鉄鏃	Ⅸ	
40	I1h9	N-12.5°-E	方形	6.80×6.75	15～20	平坦	6	炉	自然	土師器	Ⅲ	SD 2と重複
41	J2e2	N-19°-W	方形	4.85×4.75	35	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅴ	SD 3と重複
42	K2a3	N-14.5°-W	方形	5.40×4.95	45～50	平坦	9	カマド	自然	土師器・須恵器・刀子 石製紡錘車・鉄鏃	Ⅸ	SD 6と重複
43	J2i2	N-30°-W	方形	1辺3.5～4m	35	平坦	5	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅺ	SD 4・5と重複
44	K2f1	N-29°-W			35～40	平坦	1			土師器・勾玉	Ⅲ	
45	J2g2	N-22.5°-W	方形	2.95×2.75	15～20	凹凸	3	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅺ	
46	K1d6	N-12°-W	方形	5.85×5.80	50	平坦	8	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅳ	
47	K1h8	N-0°	長方形	4.15×3.75	5～10	平坦	6		自然	土師器・須恵器	Ⅸ	SD 9・10と重複
48	K1d9	N-53°-E	長方形	4.75×4.25	20	平坦	9	炉	自然	土師器	Ⅲ	SD10と重複

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	柱穴数	炉・カマド	覆土	出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	壁高(cm)							
49	Jlj5	N- 22°-W	方形	7.70×6.90	56～70	平坦	15	炉・カマド	自然	土師器・須恵器・土玉 刀子・鉄鎌・勾玉	Ⅳ	SI51・SD7と重複
50	Kla6	N-17.5°W	長方形	6.50×4.90	30～40	平坦	10		自然	土師器	Ⅲ	SD7と重複
51	Klb5	N- 13°-W	方形	( )×5.00	20～25	平坦	4	炉	自然	土師器・鎌	Ⅰ	SI49と重複
52	Klc4	N-110°-E	方形	3.85×( )	5	平坦	1	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅻ	SI55と重複
53	Kle4	N-100°-E	方形	4.05×( )	20	凹凸	1	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅺ	
54	Klf5	N- 90°-E	方形	3.50×( )	6～8	平坦	2	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅺ	
55	Klb4	N-8.5°-W	方形	5.45×( )	13～17	平坦	2		自然		Ⅲ	SI52と重複
56	Jlg4	N- 22°-W	隅丸方形	3.45×3.40	30～35	やや起伏	7	炉	人為	土師器	Ⅰ	
57	Jlg6	N- 1°-W	方形	4.20×( )	10～15	平坦	7		自然	土師器・須恵器	Ⅲ	SK5・SD5と重複
58	Jli8	N- 0°	方形	3.50×( )	10～15	平坦	3		人為	土師器・須恵器	Ⅺ	SD5と重複
59	Jle8	N- 19°-W	隅丸方形	3.30×3.25	50～55	平坦	6	カマド	自然	土師器・須恵器	Ⅵ	
60	Jle6	N- 5°-W	不整方形	5.45×5.40	20	やや起伏	9		自然	土師器・須恵器	Ⅺ	SI61・SK6と重複
61	Jld5	N-86.5°E	隅丸方形	4.20×3.65	45	平坦	5	カマド	自然	土師器・須恵器 勾玉・土玉	Ⅵ	SI60・SD3と重複
62	Ilc7	N- 7°-W	隅丸方形	4.30×4.00	3	平坦	4	カマド	人為	刀子	Ⅹ	SI37と重複

主な参考文献（順不同）

栗城譲一・鶴間正昭・比田井克仁　「多摩ニュータウン地域の古代（1）」『研究論集Ⅰ』（財）東京都埋蔵文化財センター　1982

比田井克仁　「7世紀における多摩地方の土器様相」『研究論集Ⅲ』　（財）東京都埋蔵文化財センター　1985

飯塚武司他　「No769 遺跡　奈良・平安時代編」『多摩ニュータウン遺跡』　（財）東京都埋蔵文化財センター　1985

梅沢太久夫・石岡憲雄他　『六反田』　埼玉県大里郡岡部町六反田遺跡調査会　1981

富田和夫・鈴木秀雄他　『伴六』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第11集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982

増田逸朗他　『後張』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第15集　（財）　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982

横川好富他　『若宮台』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第28集　（財）埼玉県埋蔵文化

財調査事業団　1983

酒井清治　『台耕地　Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第33集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1984

宮内勝己　「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『シンポジウム資料　房総における奈良・平安時代の土器』　史館同人・市立市川考古博物館　1983

阪田正一他　『八千代市権現後遺跡』　萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　（財）千葉県文化財センター　1984

井上唯雄　『歌舞伎遺跡』　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1982

大金宣亮・橋本澄朗他　『井頭』　栃木県教育委員会　1974

岩淵一夫他　『赤羽根』　栃木県埋蔵文化財調査報告　第57集　栃木県教育委員会　（財）栃木県文化振興事業団　1984

村山好文　「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報Ⅴ』　日本考古学研究所　1983

茨城県教育財団　「鹿の子Ｃ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第20集』1983

北新田B遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡総和町大字柳橋字西原581―2ほかに所在し，調査面積は3200㎡である。現況は畑と一部山林である。当遺跡は本町の東端部で，古河市と千代川村を結ぶ県道(宗道―古河線)に沿った柳橋集落の北約1.3kmに位置している。当遺跡の立地する台地は,旧長井戸沼に向かって舌状に延びており,西側は旧長井戸沼から枝分かれした宮戸川に沿って水田が開かれ,同じように東側も旧長井戸沼から枝分かれした大川及びその支流に沿って水田が開かれている。台地は，標高約20m でほぼ平坦である。遺跡の西方250m には長井戸沼の西枝が入り込み,台地の縁辺部は標高14～15m の沖積低地へと傾斜している。当遺跡の南方約500m に北新田A遺跡，北方約500 m に北新田C遺跡が同じ新４号バイパス計画線上に所在している。当遺跡から，縄文式土器片が極少量出土しただけである。

2　調査経過

〈昭和58年度〉

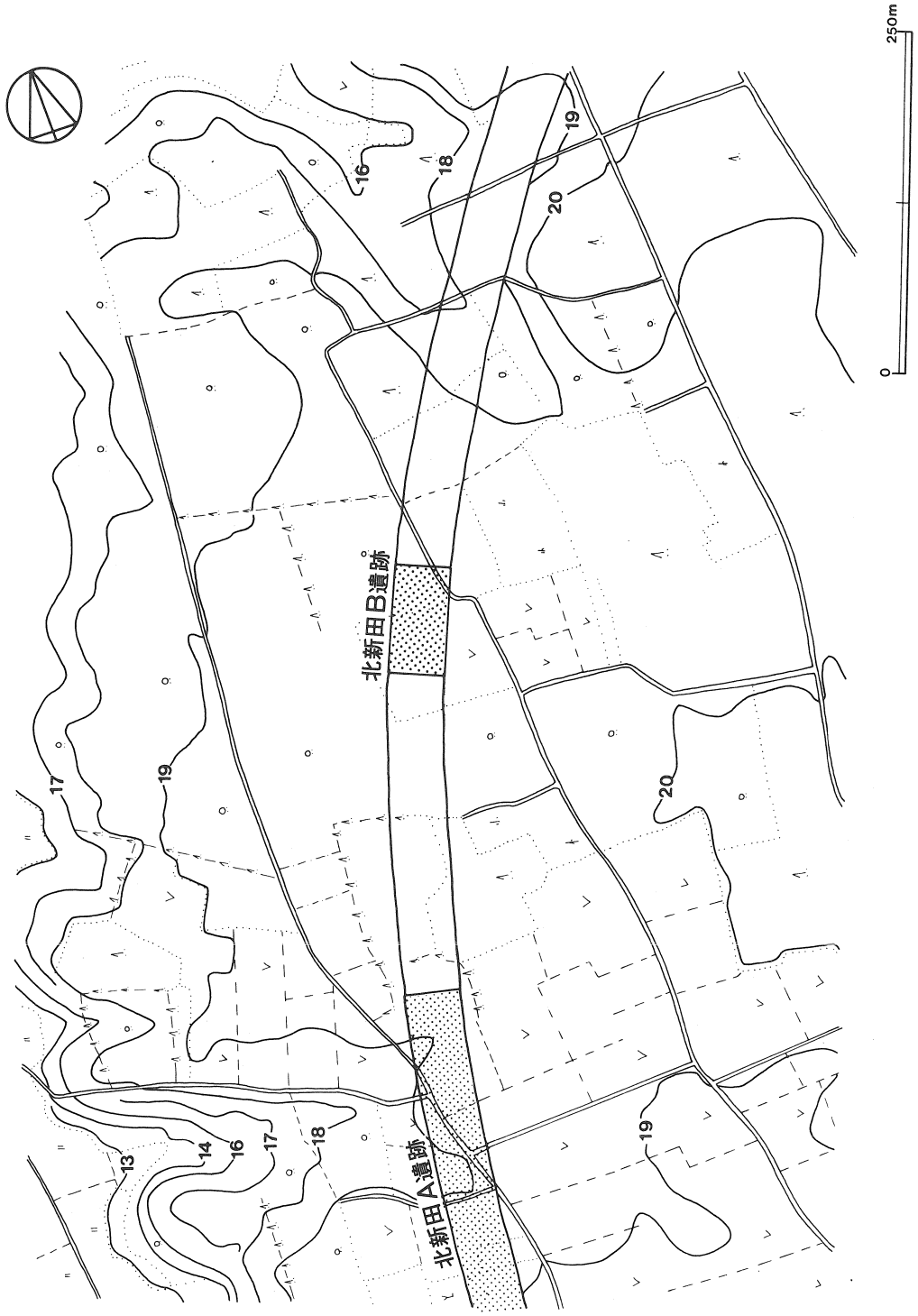
５月前半　遺跡の調査を開始し，調査予定地内の雑木の伐開及び草刈りをした。調査前全景写真を撮影した後，Ｘ軸＋19500m，Ｙ軸－4600m の交点を基準として方眼杭打ちを行い，調査区を設定した。４分の１のグリッド発掘を，Ｃ２区Ｂ２区から開始した。遺構は検出されず，遺物も出土しなかった。

５月後半　Ｂ２区・Ｂ３区・Ｃ２区のグリッド発掘を行ったが，この地区でも遺構は確認できず，ごくわずかの縄文式土器片が出土した。

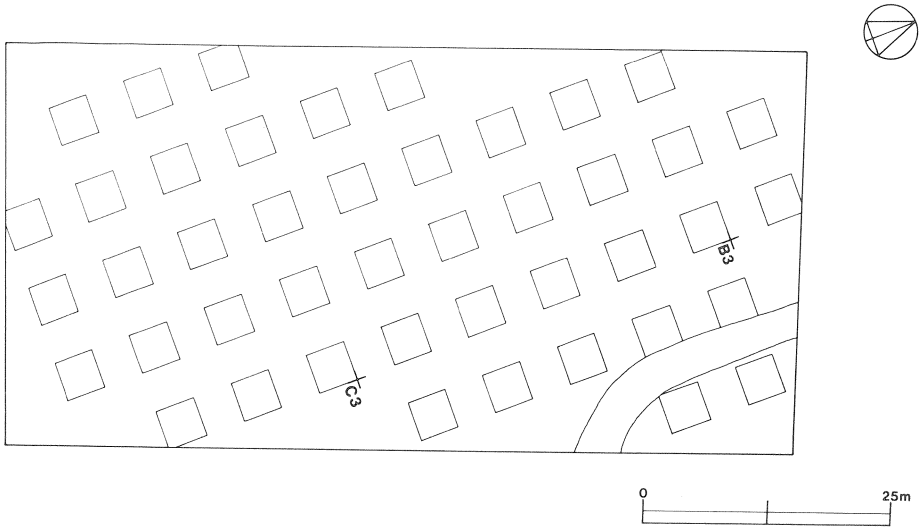
Ａ２区・Ｂ２区・Ｂ３区は，山林跡のためグリッド内に根株があり，確認作業が困難であったが，５月26日4分の1のグリッド発掘を終了した。B2j_6区に落ち込みが見られたのでグリッド拡張をしたが，遺構はなかった。調査後の遺跡全景写真の撮影を行い５月30日に調査地域内の全ての調査を完了した。

3　遺　　物

調査区域の４分の１にあたるグリッド発掘を行ったが，遺構は確認できなかった。極少量の縄



第242図　北新田B遺跡地形図



第243図　北新田B遺跡全体図

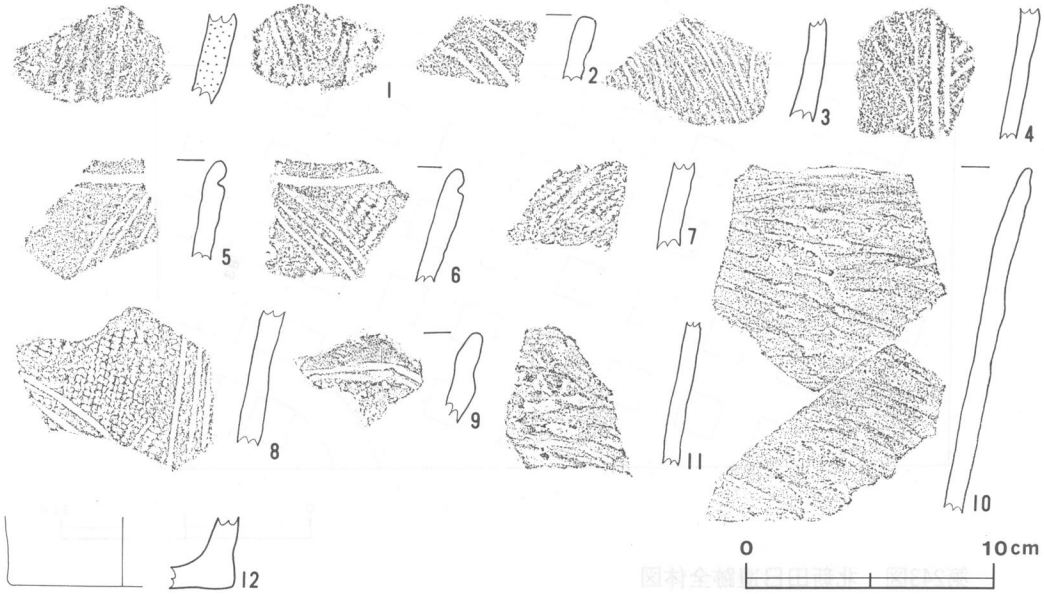
文時代の土器片が出土したのみである。

(1)　グリッド出土土器　(第244図)

1は胴部片で，表裏面に斜位の条痕文を施している。色調はにぶい橙色であり，胎土には，繊維を含んでいる。2は口縁部で，斜行の沈線を施している。色調は明褐灰色であり，胎土には，砂粒，石英を含んでいる。3・4は胴部片で，縄文を地文とし斜位・縦位に沈線文を施している。5・6は口縁部で，口唇直下に深い1条の沈線を横位に巡らし，縄文の地文上に斜位の平行沈線を施している。色調はいずれも灰褐色である。7は胴部片で，縄文を旋している。色調は赤褐色で，胎土には砂粒，石英と少量のスコリアを含んでいる。8は胴部片で，縄文の地文上に斜位・縦位に平行沈線を施している。色調は赤褐色であり，胎土にスコリアを少量含んでいる。9は波状を呈する口縁部片で，口唇直下に2条の横位の沈線を巡らし，下位に縄文を施している。色調は赤褐色で，胎土には少量のスコリアを含んでいる。焼成は良好である。10・11は同一個体の口縁部と胴部片であるが，接合はできなかった。いずれもヘラ状工具で整形している。色調は燈色であり，胎土には石英と少量のスコリアを含んでいる。12は底部片で，底部は平底を呈している。胴部は底部からほぼ垂直に立ち上がる。色調は赤褐色であり，胎土には石英・スコリアを含んでいる。

4　まとめ

調査の結果，グリッド発掘による遺構確認作業の過程で，極少量の縄文式土器片が表土から出土



第244図　グリッド出土土器拓影図

したが，縄文期の遺構は検出されず，また，その他のいずれの時代の遺構も検出されず，遺跡の性格は不明である。しかし，縄文時代の土器片が出土していることをみると，北新田B遺跡の近くに，当時の人々の集落のあとが存在するものと推察される。

北新田C遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡総和町大字稲宮字下原197—1ほかに所在し，調査対象面積は2800㎡である。現況は，畑地と一部山林である。当遺跡は，稲宮集落の南方800mの台地に位置し，上大野地区と柳橋を結ぶ町道によって2地区に分断されている。町道の西側は畑で，標高は約20mであり，町道の東側は山林である。当遺跡の西側約100mには，長井戸沼の西枝からなる小支谷が入り込み，谷津田が形成されており，水田との比高は2.5mである。当遺跡の南方約500mの同じ新4号バイパス計画線上に北新田B遺跡が所在し，北東約600mに二十五里寺A遺跡が所在している。当遺跡から，方形周溝状遺構1基が検出され，その南溝から8世紀に比定される4個の坏が出土した。

2　調査経過

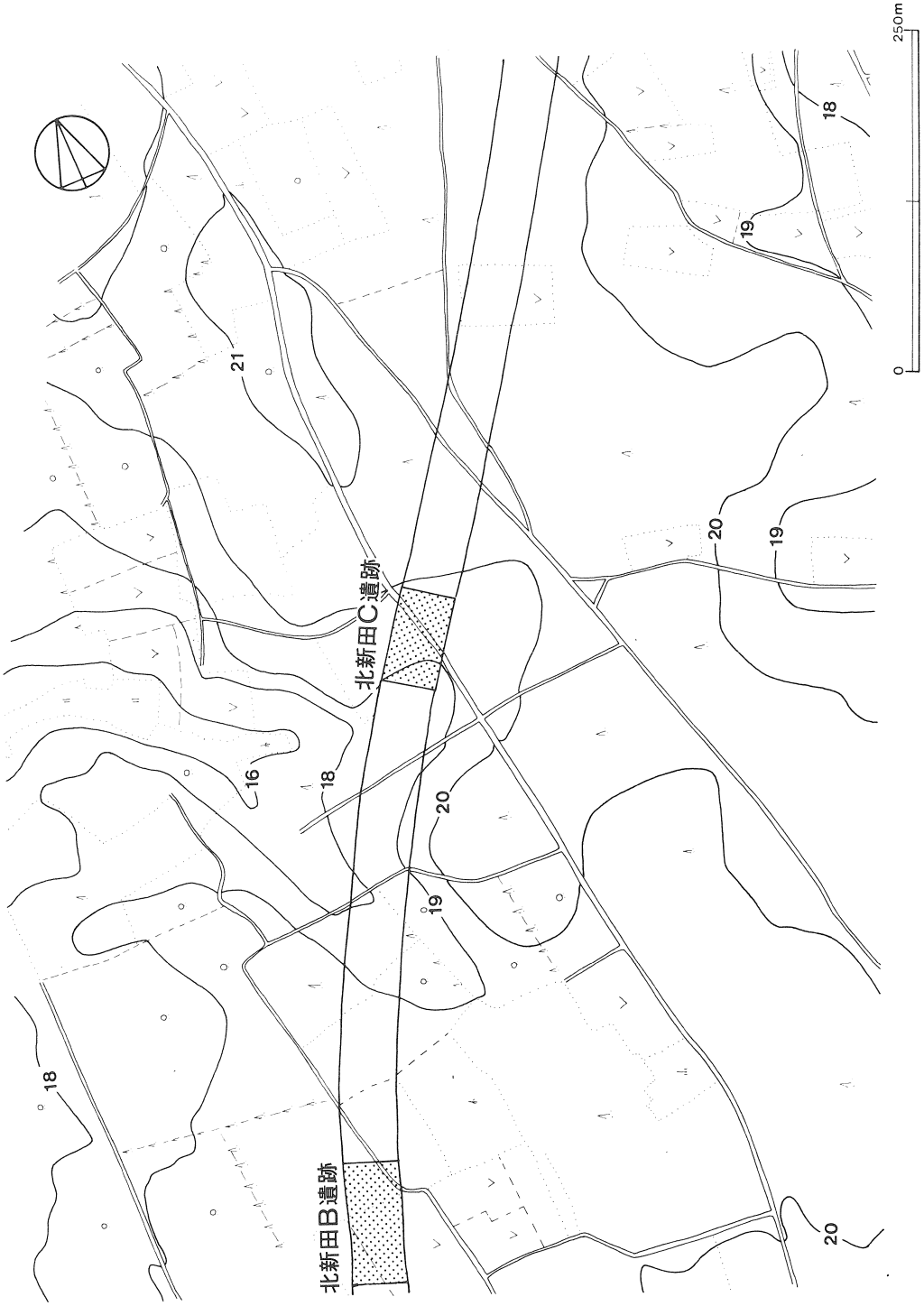
〈昭和58年度〉

6月前半　北新田B遺跡の調査が5月30日に終了し，5月31日に当遺跡の調査を開始した。上物除去及び草刈りを行い，焼却後発掘前の遺跡全景写真撮影を行なった。X軸＋19860m，Y軸—4400mの交点を基準として方眼杭打ちを行い調査区を設定し，4分の1のグリッド発掘をA2区・B1区・C1区から開始した。

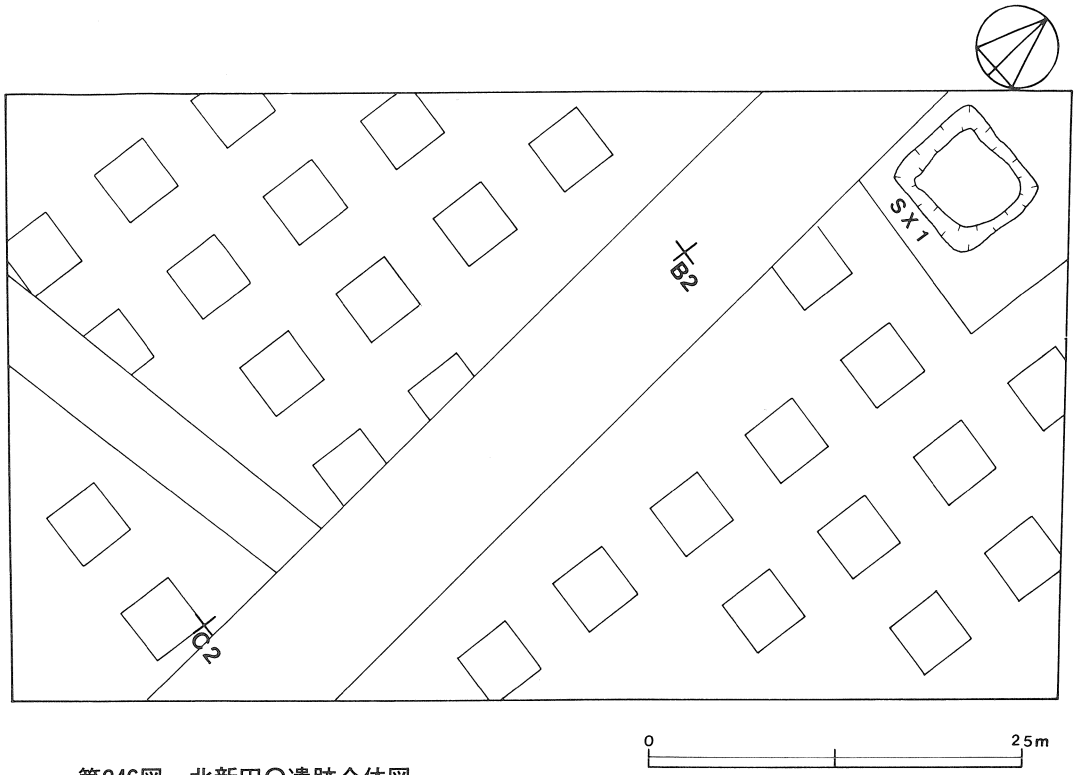
6月後半　グリッド発掘を続け，B1区から縄文式土器片が極少量出土した。A2区から周溝状遺構の落ち込みを確認した。18日に当遺跡の調査を一旦中止し，北新田A遺跡の調査に移った。

7月前半　北新田A遺跡調査のため中止していたグリット発掘をB1区から開始した。遺構プラン追求のため周溝状遺構周辺のA2区を拡張した。山林跡のため根株が多く，そのうえ，確認面まで約80cmと深かったため拡張に日数がかかった。グリッド拡張の結果，方形周溝状遺構1基を確認した。

7月後半　方形周溝状遺構調査の掘り込みを実施し南溝から土師器の坏4個体分が出土した。調査後の遺跡全景写真撮影を実施し，調査地域内の全ての調査を完了した。



第245図　北新田C遺跡地形図



第246図　北新田C遺跡全体図

3　遺構と遺物

当遺跡の北部に１基の方形周溝状遺構が検出された。

(1)　方形周溝状遺構

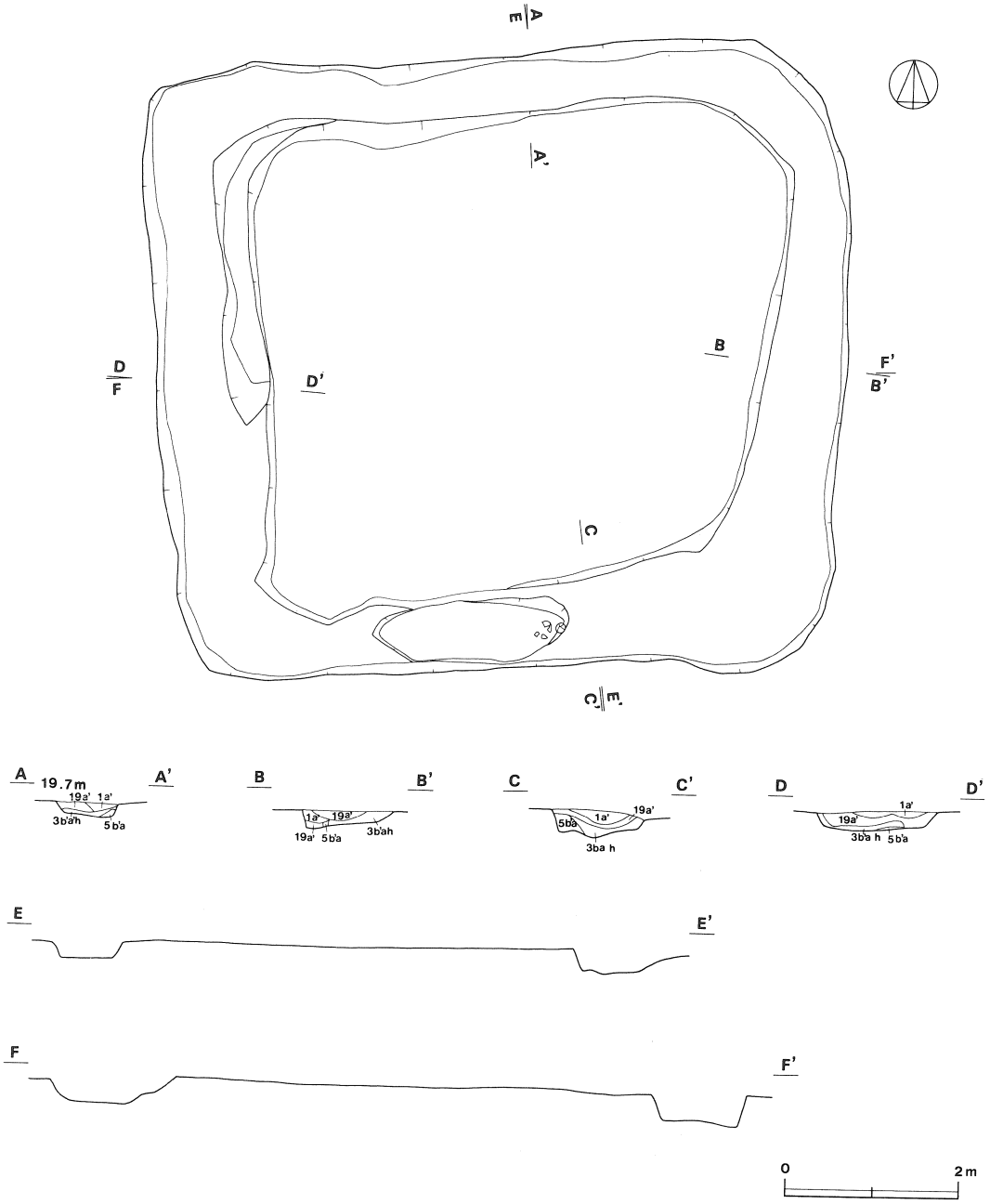
第１号方形周溝状遺構（第247図）

本跡は，当遺跡北部のA2f_2区を中心に確認された。平面形は隅丸方形で，規模は長軸で7.99m，短軸7.00mである。また方台部の規模は，長軸5.95m・短軸5.20mで，長軸方向はN－8°－Wを指している。南東コーナーはやや外側にふくらんでいる。周溝部の断面は「⌒」の形状を呈しており，周溝南側の内側の壁が外側の壁よりも急な傾斜を示している。その他は内側の壁外側の壁とも同じ角度で掘りこまれている。溝幅は上幅が1.90～2.10m，下幅が0.53～1.00mである。検出面から溝底までの深さは12～36cmであり，溝底は，周溝の南側で凸凹がみられる以外はほぼ平坦である。周溝の南側の中央部に長径2.28m，短径0.68m，深さ５～10cmの長楕円形を呈する窪みを検出したが，窪みからは遺物等が出土していない。

溝内の覆土は自然堆積を示し，暗褐色土が中心で，各層にローム粒子・ロームブロックが混入

しており，やわらかである。

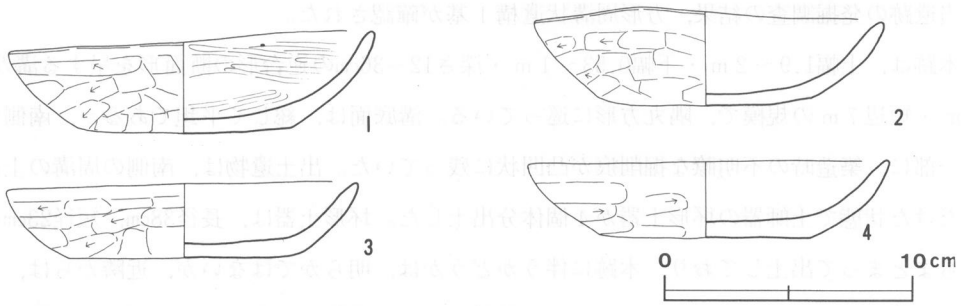
遺物は，南側の周溝の上面からくだけた状態で4個体分の土師器の坏形土器と，周溝の東側から土師器片3点が出土している。



第247図　第1号方形周溝状遺構実測図

出土土器観察表（第248図）

図版番号	器種	法量	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	坏形 土器 土師器	A 14.0 B 3.0 C 9.2	均一の厚さで，底部から体上部にかけてやや内彎気味に立ち上がる。口縁部はややゆがんでいる。底部は平底である。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一粗いヘラ磨き	砂粒 良好 明赤褐色	70%
2	坏形 土器 土師器	A 14.1 B 3.9 C 8.7	体部はやや内彎気味に立ち上がり，口縁部はややゆがんでいる。底部は平底である。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 良好 にぶい橙色	100%
3	坏形 土器 土師器	A 14.0 B 3.0 C 9.2	底部から体部にかけて均一の厚さで，外傾して立ち上がる。底部は平底である。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 にぶい橙色	65%
4	坏形 土器 土師器	A 14.5 B 3.2 C 8.5	底部から体部にかけて均一の厚さで，内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面一横ナデ 体部外面一ヘラ削り 内面一ナデ	砂粒 普通 橙色	60%



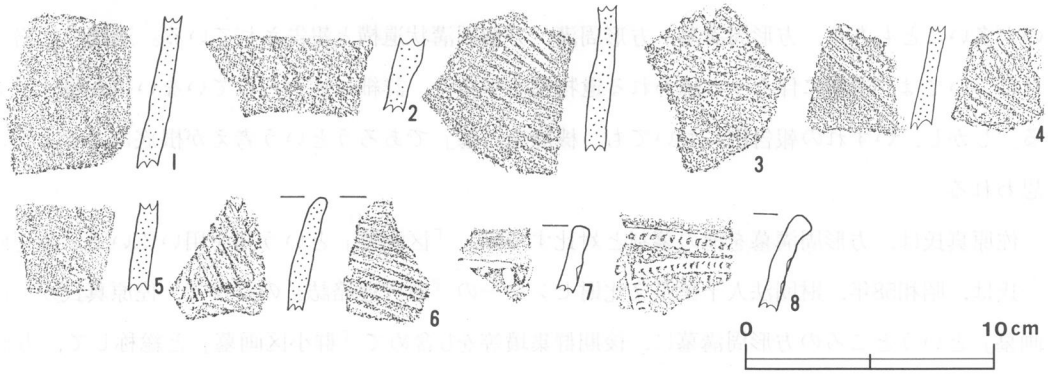
第248図　第1号方形周溝状遺構出土遺物実測図

(2)　グリッド出土土器

縄文式土器　（第249図）

表面採集やグリッド発掘中に出土した遺物は，縄文式土器の細片で，しかも極少量である。いずれも表土層から出土したものである。

1・2は同一個体の胴部片であるが，接合はできなかった。無文で，色調はにぶい橙色である。胎土には，繊維を含んでいる。3・4は胴部片で，表裏に条痕文を施している。色調は橙色で，



第249図　グリッド出土土器拓影図

胎土には繊維を含んでいる。焼成は普通である。5は胴部片で無文である。胎土には砂粒・スコリア・繊維を含んでいる。6は口縁部片で，表裏に貝殻条痕文を施し，さらに器表面になぞりを加え，微隆起線文を施している。色調は橙色で，胎土には，砂粒・礫・少量のスコリアを含んでいる。7は口縁部で，口唇直下に無文帯を有し，下位の横走する沈線の下に刺突文が施されている。色調は灰褐色である。8は，縄文地文上に半截竹管状施文具による爪形文と円形竹管文を施している。色調は赤褐色で，胎土にはスコリアを含んでいる。焼成は良好である。

4　まとめ

当遺跡の発掘調査の結果，方形周溝状遺構1基が確認された。

本跡は，上幅1.9～2m・下幅0.53～1m・深さ12～36cmの逆台形の断面形を呈する溝が，長辺8m・短辺7mの規模で，隅丸方形に巡っている。溝底面は，総じて平坦であるが，南側の周溝の一部に，築造時の不明瞭な掘削痕が凸凹状に残っていた。出土遺物は，南側の周溝の上面から，くだけた状態で土師器の坏形土器が4個体分出土した。坏形土器は，長径38cm，短径23cmの範囲からまとまって出土しており，本跡に伴うかどうかは，明らかではないが，近隣からは，住居跡や古墳等が確認されていないので，本跡に伴うものと推察される。坏形土器の時期は，8世紀前半に編年できる。

方形周溝墓（方形周溝状遺構も含む）は，関東地方では弥生後期から9世紀初頭にかけてみられるが，ここでは8世紀以降に重点をおいて述べてみたい。

近年，関東地方において，方形あるいは円形に溝が巡り，これに伴う主体部等が検出されず，しかも時期を判定するにたりる遺物が出土しない方形周溝状遺構の報告例が増加している。特に茨城県や千葉県を中心にその遺構の報告例を多く見ることができるが，県内においては，守谷町の北今城遺跡[注(1)]に方形周溝墓が1基，石岡市の兵崎遺跡に2基，大谷津A遺跡[注(2)]に3基，外山遺跡[注(2)]に4基，新池台遺跡[注(3)]に5基の方形周溝状遺構が最近報告されている。名称は，遺構の形態が方形のものが多いこともあり，方形周溝墓，方形周溝，方形周溝状遺構と報告されている。遺構の性格づけについては，遺構に伴なうと思われる遺物等が少なく，詳細に述べられていないのが現状である。しかし，いずれの報告例においても，機能上「墓」であろうという考えが根底にあるように思われる。

佐原真氏は，方形周溝墓を他の墓制と対比する際，「区画墓[注(4)]」という語を用いている。渡辺修一氏は，昭和58年，財団法人千葉県文化財センターの『研究連絡誌』のなかで，佐原真氏が「区画墓」というところの方形周溝墓に，後期群集墳等をも含めて「群小区画墓」と総称して，方形周溝遺構を述べている。これによると，千葉県内の19遺跡の調査例を挙げて「古墳群に混在して

検出した方形周溝遺構は，出土遺物や外の混在する墳墓の形態等で支群に分けられた内の小区画墓の１つである」と定義づけている。築造年代は，出土遺物等を比較検討した結果，混在する墳墓と同時期あるいはそれに近い時期の８世紀としている。また，方形周溝遺構の歴史的意義を，律令国家成立以後も一定の土地を占有する墓制である「群小区画墓」が継続していることに注目して農業共同体の構造自体が殆んど国家権力による政治的再編を受けなかったことを立証するものであるとし，さらに方形周溝遺構は基本的に同一階梯による墓制であるとしている。

同じく『研究連絡誌』において金丸誠氏は，方形周溝と円形周溝を一括して，それらを「古墳時代後期から歴史時代における明確な形状での埋葬主体及びマウンドを遺存しない方形ないし円形状の溝からなる墳墓的遺構」としている。一方，山岸良二氏は『方形周溝墓』[注(5)]において，方形周溝状遺構は，「一時的中断や確執がありながらも，形態面で方形周溝墓を受け継ぎ，性格面では墓としての機能が希薄化して葬送の一部を催行する場のために残存した遺構ではないか」と指摘している。

いずれも，方形周溝状遺構の性格づけに具体性を欠いたままであるが，共通していえることは「墓」という意識の基に述べていることである。

当遺跡においては，方形周溝状遺構１基だけで，しかも，出土遺物が遺構に伴っているものかどうか明らかでない出土状況だけに，性格や時期を正しく論じ得ないが，周溝の自然堆積の上面から検出された出土遺物が８世紀のものであることから，本跡の築造された時期は，８世紀かそれ以前のそれほど遠くない時期であろうと思われる。

また，本跡の方台部はほぼ平坦であり，しかも主体部は検出されず，周溝にも埋葬施設と考えられる遺構は確認されなかった。したがって，墓であるかどうか明確にすることはできなかった。

注

(1)茨城県教育財団　「北今城遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第８集』　1981

(2)茨城県教育財団　「兵崎・大谷津Ａ・外山」『茨城県教育財団文化財調査報告第13集』　1982

(3)茨城県教育財団　「新池台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第17集』　1983

(4)佐原　真　「弥生時代の集落」『考古学研究　25―４』　1979

(5)山岸良二　『方形周溝墓』　ニューサイエンス社　1981

溜原B遺跡

1　遺跡の概観

当遺跡は，猿島郡総和町大字上大野溜原字芳山2644ほかに所在し，総和町の北東部に位置している。現況は畑で，面積は2400㎡である。総和町の東側を南流する宮戸川と，三和町の西側を南流する大川の支流に挟まれた標高22mの沖積台地縁辺部に立地している。当遺跡の南側には国道125号線が東西に走り，北側は水田となっている。遺跡はこの水田に向かって南西から北東にかけて緩やかに傾斜している台地上にある。遺跡の近くには縄文時代の包蔵地として地蔵堂遺跡，地蔵遺跡（ともに総和町上大野），古墳時代の包蔵地の本田山A遺跡（上大野），北久保遺跡（総和町稲宮），大松山古墳群（総和町磯部），諸川八幡塚古墳（三和町諸川），歴史時代の製鉄跡である弁天遺跡，本田山B遺跡（ともに上大野），北久保遺跡（稲宮）などが存在する。

なお，当遺跡からは時代不明の溝が1条検出され，遺物はグリッドから縄文式土器片，土師器片，土製品，石器が合せて遺物収納箱に1箱出土している。

2　調査経過

6　月　18日発掘前の遺跡全景写真を撮影する。その後草刈りを行い，遺構確認のための⅛グリッド発掘を行った。20日にグリッド発掘を終了し，遺跡の北部に溝1条を確認した。24日遺構の確認されない地区の¼グリッド発掘を行い，遺構確認に努めたが，他の遺構は検出されなかった。（基準杭はX軸＋22220m，Y軸－3160mの交点）

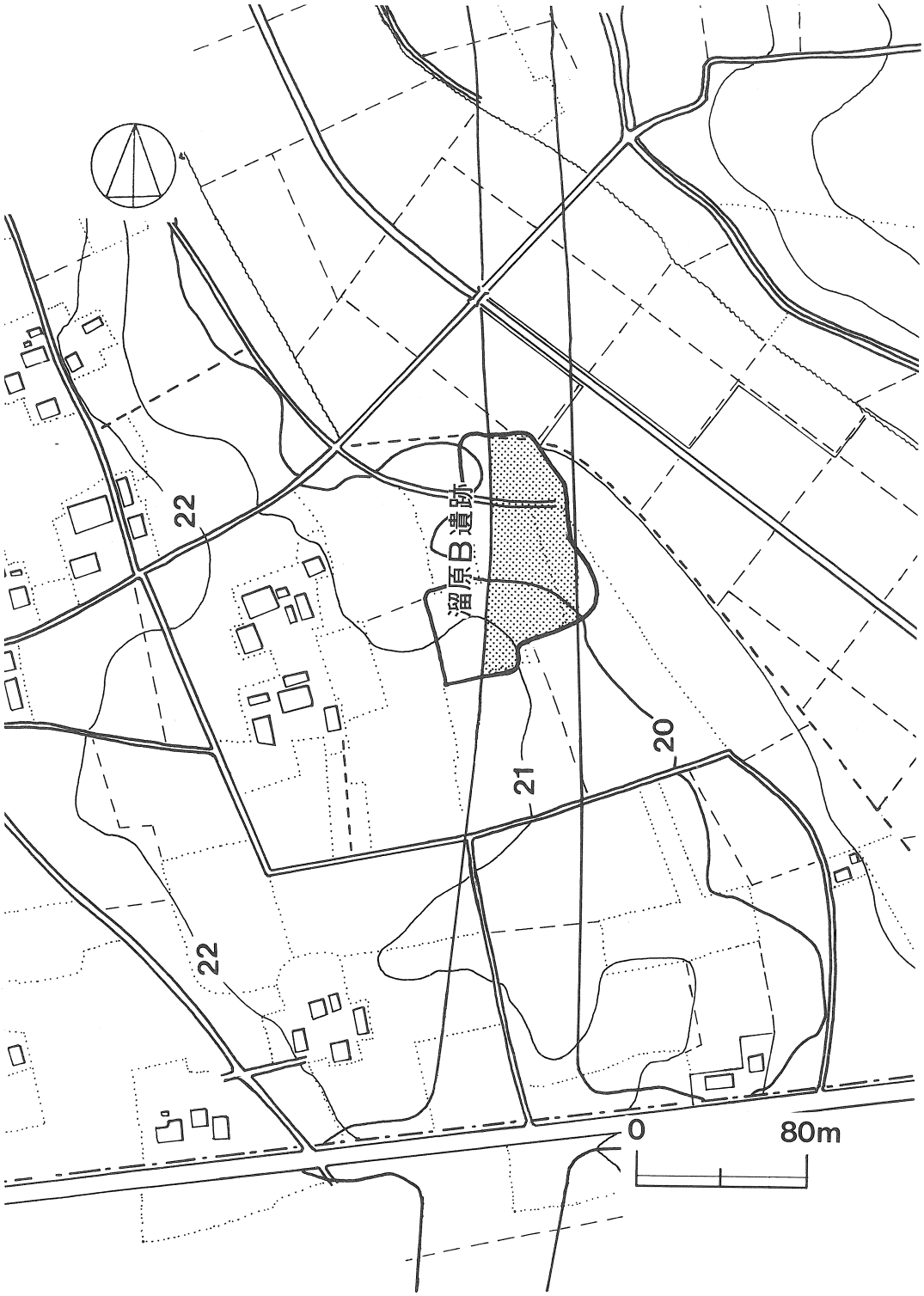
26日から土層観察用のトレンチ発掘を行い，27日にトレンチ土層の実測を終了した。また，溝が確認された遺跡の北部A2区については，グリッド拡張を行い，溝の調査に備えた。

7　月　9日に調査を再開し，グリッド拡張を終了した。同日ベルトを設定し，溝の掘り込みを開始した。10日セクションを終了し，ベルト除去にかかる。遺構が浅いことや，遺物が出土しないため，1日で調査を終了させた。

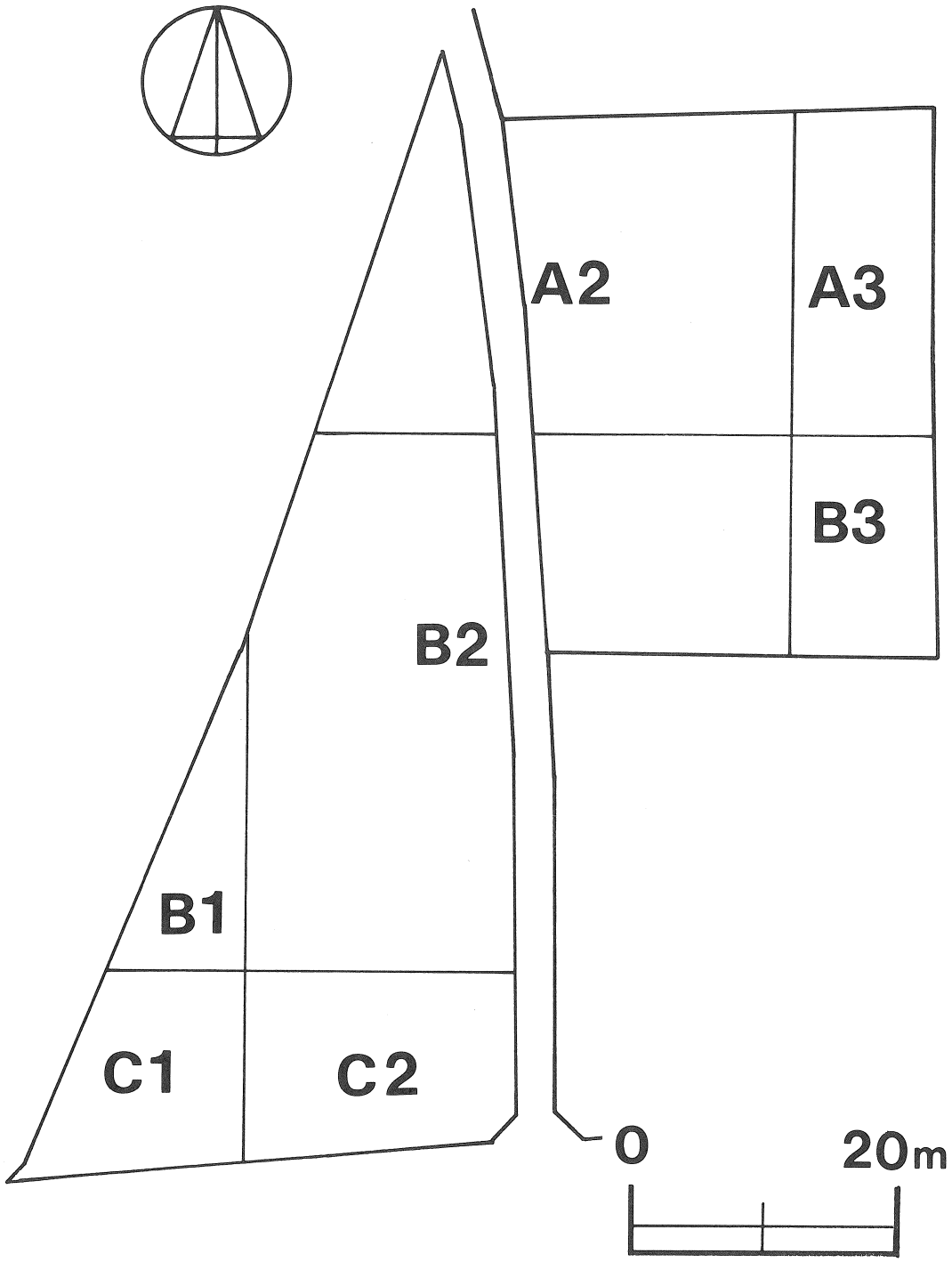
12日に平面図実測，完掘写真撮影を完了させ，埋め戻しを行った。

3　遺構と遺物

当遺跡では，溝が1条検出された。遺物はグリッドから縄文式土器片や土師器片が少量出土し



第250図　溜原Ｂ遺跡地形図



第251図　溜原Ｂ遺跡グリッド図

ている。

(1)溝

第1号溝（第253図）

本溝はA2j_4 から南北方向に延び，A2f_4区まで確認され，更に北方のエリア外まで延びている。ほぼ直線的に延び，長さは16m である。

溝の幅は上幅で40～100cm，下幅で20～40cmである。壁はソフトロームでさほど堅くはなく，外傾して立ち上がっている。底面はハードロームでやや堅く，ほぼ平坦である。南側のA2i_4区では下幅が48cmあり，水たまり場状を呈している。A2g_4区の西側には，径100 cmの半円形のテラス状の段をもっている。確認面からの深さは15～20cmである。断面は「_/」形をしている。底面のレベルはA(北)で20.09m，Bで20.0m，C(南)で20.06m である。

覆土は1～2層で，1層は黒褐色土，2層は暗褐色土である。北側の覆土は1層だけで，暗褐色土のみ堆積している。どのベルトも自然堆積である。

遺物は出土しておらず，時期や性格については不明である。

(2)グリッド出土遺物

縄文式土器（第254・255図）

いずれも破片で，器形をうかがえるものはない。拓本が可能なものだけを掲載し，4群に分類した。

第1群土器（TP 1～15）

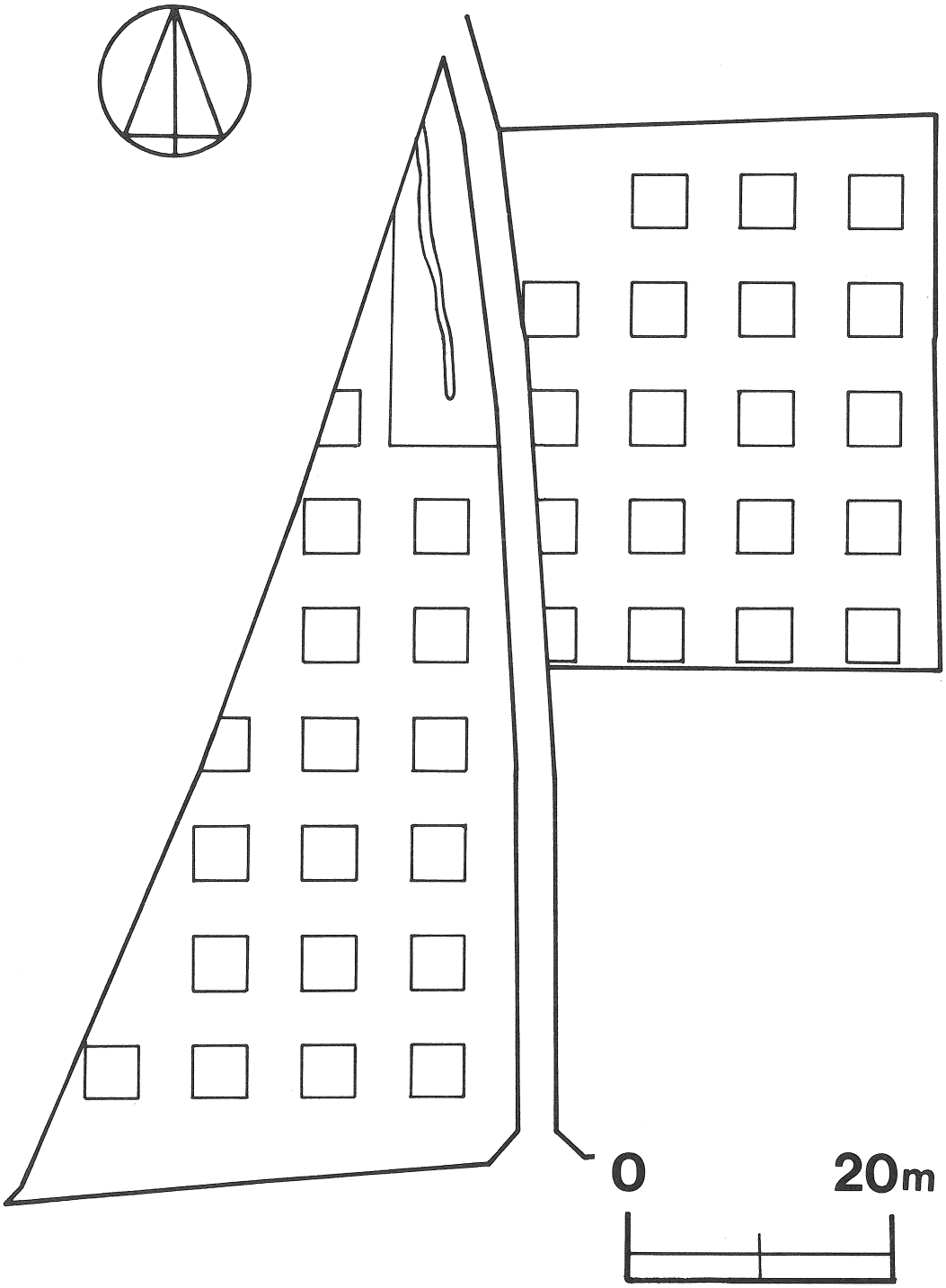
早期の土器である。1は口唇部が肥厚し，外反して開く。口唇直下に押圧の点列文が付けられ，その下には縦走する縄文が施されている。砂，パミス，スコリアを含んでいる。井草式である。2～4は摩滅しているが縦走する縄文がわずかに残っている。胎土は2だけ砂を含むが，3・4は礫も含んでいる。2～4は夏島式である。5は斜めの平行な細沈線が付されている。砂・石英・礫を胎土に含んでいる。田戸下層式である。6～15は茅山上層式の土器である。6・7は口縁部で，他は胴部である。6・7は口唇にも文様を付けている。すべて表裏に貝殻による平行条痕文を施し，胎土に繊維を含んでいる。

第2群土器（TP16）

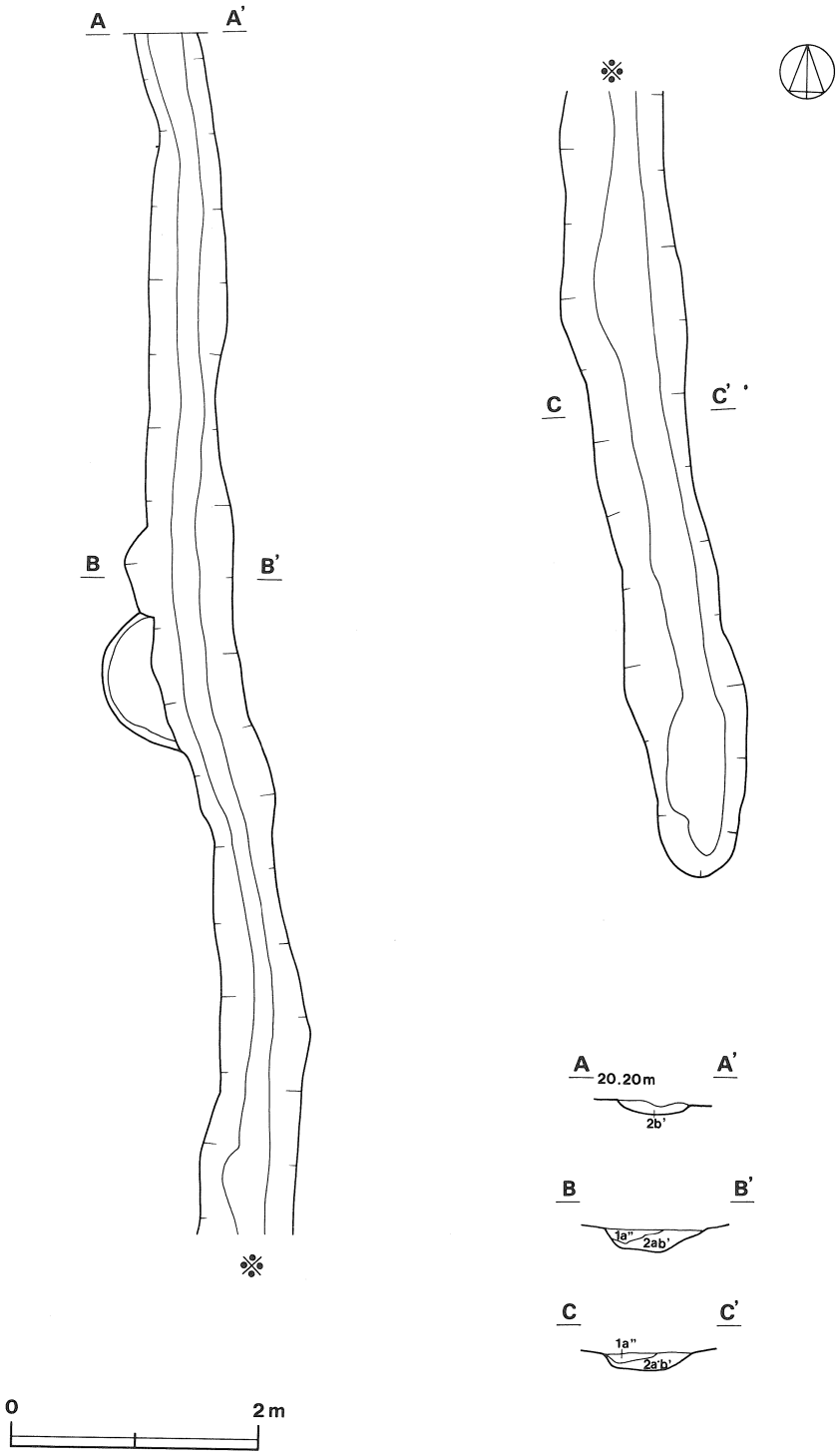
前期の土器で，黒浜式である。全面に粗い縦の縄文（LR）が施され，胎土に砂・パミス・スコリアを含んでいる。

第3群土器（TP17～19）

中期の土器である。17は口縁に近い胴部片で，わずかに横位の爪形文が残っている。18・19は



第252図　溜原Ｂ遺跡全体図



第253図　第１号溝実測図

底部で，加曽利E式である。

第4群土器（TP20～44）

後期の土器である。

第1類（TP20～29）

20～24・28は2本の沈線で区画した磨消縄文帯を施し，20・25～27は平行な細沈線を付けている。29は横位の縄文がわずかに残る。25のみ砂礫を含んでいるが，他は砂だけの胎土で，焼成は良好である。堀之内式である。

第2類（TP30～35）

30～32は口縁部，33～35は胴部片である。33だけ縄文が施され，他は無文である。31が堀之内式，32，34が安行式と思われるが他は不明である。

第3類（TR36～44）

36～42が口縁部，43・44が胴部片である。36・37は隆帯を付け，指などによる連続押圧を施し，斜行の条線文を付している。44はこの文様の胴部片である。38～40は隆帯を付けた後，縄文を施している。41～43は刺突文に以たキザミ目を入れ，連続させて列をつくっている。どの土器片も，砂やパミスを含み，裏面を丁寧になでている。安行式である。

土師器

22片出土した。いずれも胴部破片で，器形をうかがえるものはない。実測図，拓本は割愛した。

土製品（第255図DP1）

DP1はA3g_2区から出土した土偶の足である。残存高4.5cm，縦幅3.5cm，横幅2.5cm，重さ25gである。

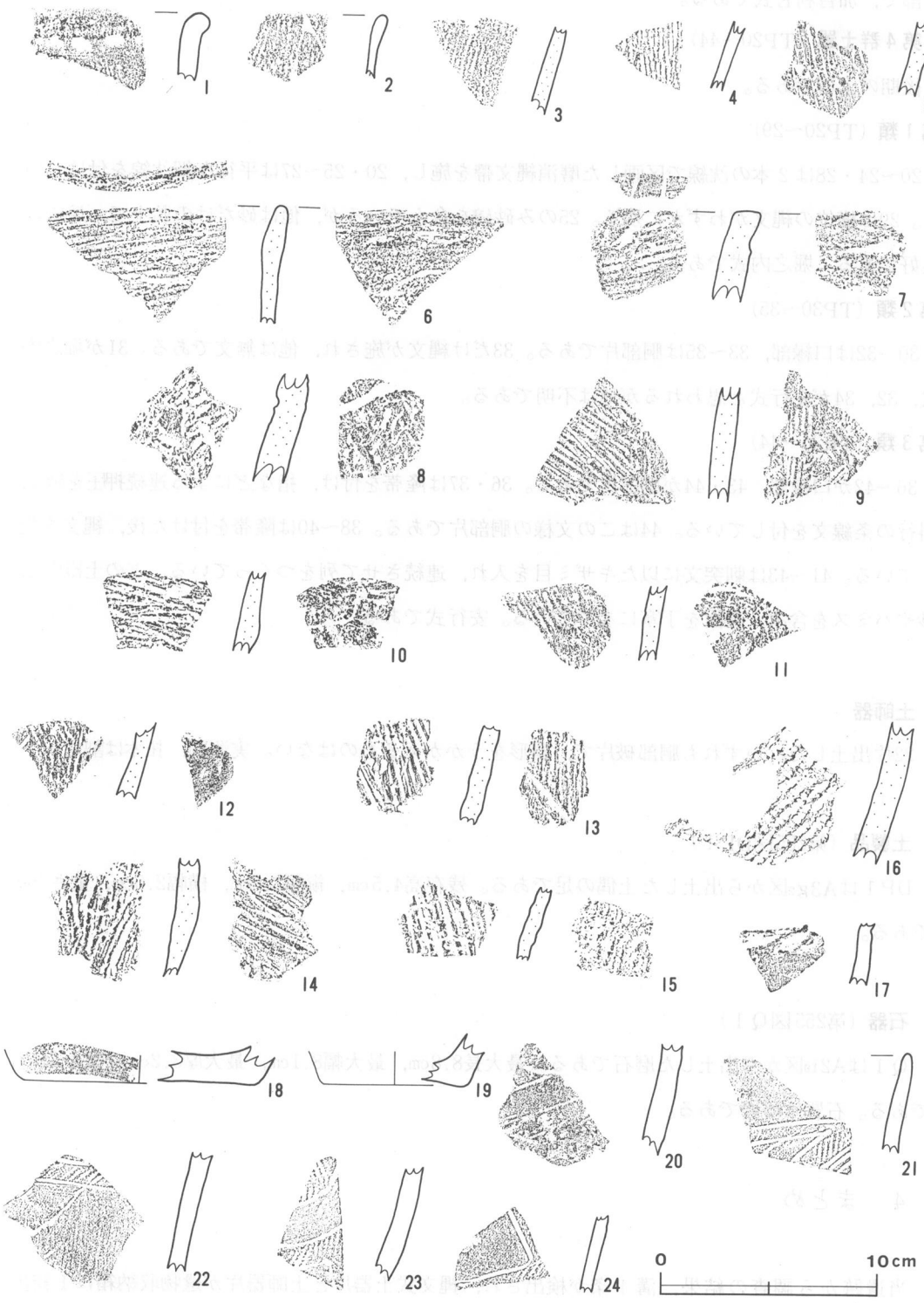
石器（第255図Q1）

Q1はA2i_0区から出土した磨石である。最大長8.8cm，最大幅8.1cm，最大厚3.2cm，重さ385gである。石質は玢岩である。

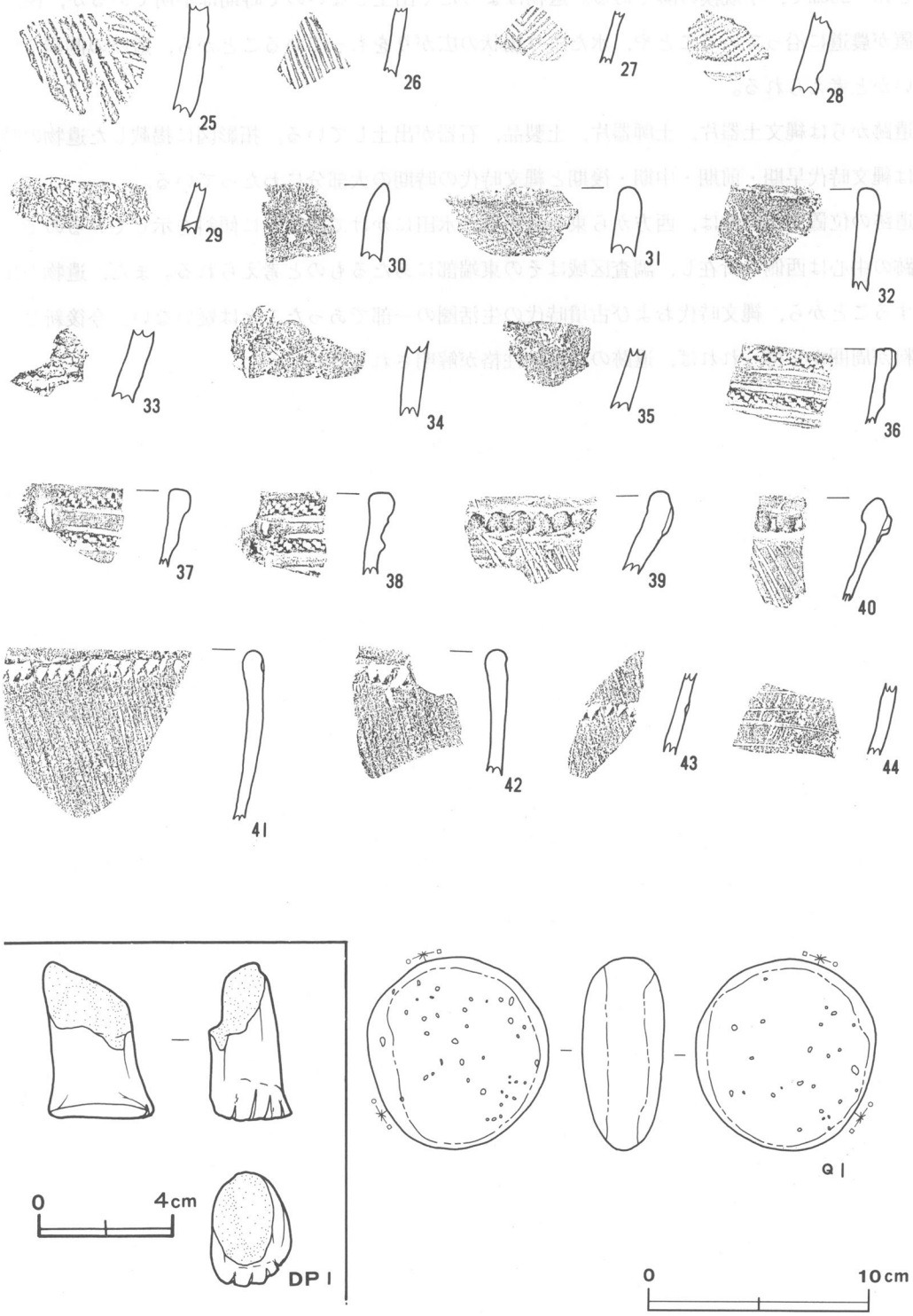
4　まとめ

当遺跡から調査の結果，溝1条が検出され，縄文式土器片と土師器片が遺物収納箱に1箱出土した。

溝は，遺跡の北部から北方の遺跡まで，南北方向に延びている。長さ16m，上幅40～100cm，



第254図　グリッド出土土器拓影図（1）



第255図　グリッド出土土器拓影図（2），土製品・石器実測図

深さ15～20cmで，小規模の溝である。遺物はまったく出土しないので時期は不明であるが，検出位置が農道に沿っていることや，水たまり場状の広がりをもっていることから，道路の側溝ではないかと考えられる。

遺跡からは縄文土器片，土師器片，土製品，石器が出土している。拓影図に掲載した遺物の時期は縄文時代早期・前期・中期・後期と縄文時代の時期の大部分にわたっている。

遺跡の位置する台地は，西方から東の大川や，水田にかけて緩やかに傾斜を示しているので，遺跡の中心は西側に所在し，調査区域はその東端部にあたるものと考えられる。また，遺物が出土することから，縄文時代および古墳時代の生活圏の一部であったことは疑いない。今後新しい資料が周囲から得られれば，遺跡の時期，性格が解明されると思う。

終　章　　む　す　び

新４号国道建設に伴う，茨城県のルート内に所在する27遺跡の発掘調査は，昭和57年度から始まり現在も続けられているが，今回，昭和57年度から昭和60年度にかけて調査を実施した総和町所在の12遺跡の報告書が刊行される運びとなった。これらの遺跡は道路という線上にあり，遺跡によってはその中心から離れ，必ずしも十分な遺構・遺物は検出できなかった。しかし，その中で向坪Ｂ遺跡，北新田Ａ遺跡の調査成果には大きなものがあった。

向坪Ｂ遺跡の第１号住居跡からは，古墳時代中期末の土器のほかに，子持勾玉１点，勾玉10点，臼玉3570余点，土玉９点が壁際にまとまって出土し，祭祀遺構として大いに注目される。古代祭祀については調査例も増えているが，まだまだ解明されていない点が多い。本例はその意味で，大変貴重なものであるが，第１号住居跡の性格，祭祀の対象やその状況などについては，推定の域を脱し得ない部分が多い。

北新田Ａ遺跡からは，住居跡・土坑・溝などの遺構と，土師器・須恵器・鉄製品などの遺物が多数検出され，古墳時代前期から平安時代にわたる集落跡であることが判明した。集落は途中若干の空白期はあるが，４世紀後半から11世紀前半まで営まれたもので，調査例の少ないこの地域の土器や集落の変遷をたどる上で，良い資料となるものと思われる。しかし，道路敷地内という限定された範囲の調査のため，集落の全容をとらえるまでには至らず，また，土器の分類も大まかであり，再検討が必要であろう。

このほかの遺跡は，遺構・遺物が少なく，十分な成果が得られなかったが，少ないながらも縄文時代から中・近世にわたるもので，当時の生活の一端をうかがえる貴重な資料である。

以上，12遺跡の調査は多くの成果をもたらした反面，研究の余地を多く残している。今後，これらを課題として，十分に検討を加えていきたい。

末筆ではあるが，本報告書をまとめるにあたって，御指導・御協力をいただいた関係各位には，心から感謝の意を表したい。